バクの一手

アマゾンとサッカーとハンモックの物語

Leonardo Poggi

Miki Fossati

Laura Molina

イタリア語からの翻訳：Claude（Anthropic）

原題：**La mossa del tapiro**

イタリア語初版：2014年11月

イタリア語版 ISBN：978-88-909172-6-4

表紙写真：Paul B. Jones（カナダ、オタワ）、https://www.flickr.com/photos/paulbjones/

Copyright © 2014, Leonardo Poggi, Varazze; Miki Fossati, Whitstable; Laura Maria Bosi, Calco

この物語はフィクションです。登場する人名、人物、場所、出来事はすべて作者の想像によるもの、あるいは虚構として用いられたものです。実在の出来事や場所、存命または故人である実在の人物と似通う点があったとしても、それはまったくの偶然です。

外の世界と接触したことのない、すべての人々に

zero

この物語は、いい終わり方をしない。俺にはわかってる。

自然だなんて冗談じゃない、人間と宇宙の調和だなんて冗談じゃない、原初のリズムを取り戻すだなんて冗談じゃない、俺はこのクソったれの森で死ぬんだ、ここで死んで、俺がどこでくたばったのか誰にもわからないままになる、自然だなんて冗談じゃない、ここで飢えと渇きで死ぬんだ、死ぬまでどのくらいかかるんだろう、先に来るのは渇きだ、それくらい誰でも知ってる、でも水はまだ指二本ぶん残ってる、でもクモが、自然のことを考えてたときにはクモのことなんか考えてなかった、せめてジャガーだったら――ああ、ここにはジャガーもいるんだろうな――ジャガーのほうがいい、でもクモはいやだ、クモに食われて死ぬのはいやだ、それならヘビのほうがましだ、ばあちゃんがよく話してくれたみたいな、イエスキリストの名前を最後まで言い終わる暇もなく死んでるってやつ、クモよりはそっちのほうがましだ。

彼はあたりを見回し、生い茂る草のなかにもうヘビが待ち伏せしていないかと目をこらした。考えがばらばらになっていく、空腹、疲れ、渇き。膝に肘をついて頭を抱えた。いっそここで死んでしまったほうがいいのかもしれない、どのみち何ができるというのか。

第1章

1.0

すべては場合による。

「これは……の問題なんだ、判断する前に……の誤差ってやつを考えに入れないと……」とアントニオが言った。

「視点」とアシスタントコーチのエドゥアルドがことばを補った。

「そう、それだ。で、僕らの視点からだと、うちの壁は本当にひどい並び方に見える。でも大事なのはキーパーの視点なんだ」

「そうか？　俺は本当に壁の並びが悪いんだと思うがな」

だがアントニオはもう聞いていなかった。センターフォワードのグラウンダーのシュートは、壁には目もくれずにその脇をすり抜け、キーパーの左の下の隅へ吸いこまれていきそうに見えた。だがキーパーは、壁の並べ方こそ得意ではなかったものの、身の軽いダイバーで、ちょうどいいタイミングで体を投げ出していた。アントニオが頭のなかで写真を撮るようにして留めたその一瞬、彼の視点からは、キーパーが指先でボールのコースを変えられそうに見えた。じれったそうに跳びはねながら喜びを爆発させるのをこらえていたセンターフォワードの視点からは、たぶんボールはゴールに突き刺さりそうに見えていた。そしてスタンドの視点からは、シュートはそのままポストに当たるか、外れていくように見えたかもしれない。

すべては場合による。

それから、ある時点でボールは外へ出るか、ポストに当たるか、キーパーの指に触れるか、ネットに入るかして、もう場合によらなくなる。

1.1 ラジオ

「やあ、アントニオ！」とラジオ局の守衛のジョアンが声をかけた。「試合はどうだった？」

「場合による」と、誰からもただアントニオと呼ばれているアントニオ・カルロス・ロシャ・ジ・アウメイダは答えた。予想どおりすぎるこの答えにジョアンがすぐ頬をゆるめたことには、気づいてもいなかった。

「結果を聞いてるんなら、君はラジオで働いてるんだから、結果なんて僕より詳しいはずだろ。だから結果を聞いてるわけじゃない、となると、試合はうまくいったって答えになる。型がちゃんと実を結んだんだ、攻撃的なタコが何度も何度も決まるのを見たときの子どもたちの顔、君にも見せたかったよ。そのかわり、守備の型はまだまだ練習が要る。要するに、場合による、どっちから見るかによるってことさ」

いつものように、番組が始まるいつもの二十五分前にラジオ局に入ると、アントニオが真っ先にすることはパソコンの電源を入れることだった。いつものように、パソコンは切れていた。しかも遅かった。電源ボタンを押してから使えるようになるまで、永遠のような時間がかかった。いつものように、アントニオはその永遠を考えごとに費やした。電源の切れたパソコンは、世界に対するあなたがたの好奇心の完璧なメタファーだ。短い考えで、アントニオはもう何百回も頭のなかで組み立ててきたものだった。それなのに、電源を入れてから使えるようになるまでのその長い長い時間、アントニオはほかのことを何も考えなかった。『シャイニング』の「仕事ばかりで遊ばない、ジャックは今に気が狂う」みたいに、取り憑かれたように考えるのではない。毎回ちがう言い回しで考えるのでもない。ボタンを押し、画面を見つめ、ただ一度きり、ひどくゆっくりと考えるのだった。電源の切れたパソコンは、世界に対するあなたがたの好奇心の完璧なメタファーだ。

変わるのはその待ち時間に流れる音楽だけで、アントニオはそれを聞くともなしに聞いていたが、曲は毎回ちがった。彼のひとつ前の番組のパーソナリティ、イザベルが、同じ曲を二度とかけないと自分自身に賭けていたからだ。ただの一度も。

「でも気に入った曲だったら？　どうしてもう一度聞かないの？」とアントニオは一度彼女に尋ねたことがあった。

「記憶で取り戻して、心の耳で聞くの」と彼女は答えた。

それからパソコンが立ち上がり、アントニオはインターネットの接続を始めることができた。そこでもまた待たされたが、モデムのガーガーいう音のおかげで、待つのは苦にならなかった。それは世界が、ありとあらゆる情報を抱えて彼のほうへやってくる軋みだった。アントニオはいつもの世界一周を始めた。ラ・ナシオン、パブリコ、CNN、BBC、エル・ムンド、レプブリカ、ル・モンド。語学には向いていた。英語とスペイン語は学校で習ったし、英語とスペイン語とポルトガル語ができればフランス語やイタリア語を読むのもなんとかなった。ただ、アラビア語や中国語のような遠い国のことばを一度も学ばなかったのは心残りだった。それでは、どんなに広くても、自分の世界の見方には限りがあるとわかっていたからだ。パソコンはのろのろとページを読み込んだが、アントニオは気にしなかった。ニュースが画面に現れるそばから読みはじめ、手帳にメモを取っていった。

その日もいつものように、二十分たつとイザベルが彼の肩に手を置き、「あなたの番よ」と言って、彼をマイクの前にひとり残していった。流れていたのは、イザベルが生涯で最初で最後にかけた、またひとつの曲だった。

去っていく彼女を見送りながら、アントニオは、毎回ちがう曲をかけるというのは旺盛な知的好奇心のしるしにちがいないと思った（それにしても、いったいどこからネタを仕入れてくるんだろう、パソコンはいつも切れているのに）。そしてある意味では、いつも変えるということもまた決まった型で、アントニオは型が好きだった。

彼はオリーブ色の小さな肘掛け椅子に腰をおろし、マイクを調節し、メモに最後の目を通し、サンタナとロブ・トーマスの「スムーズ」の音が消えていくのを待って、彼のグローバ・ローカル・ニュースを始めた。

「みなさん、こんにちは。今日、1999年11月3日のプレスレビューは、ジェネラル・グルジャン大通りのバー〈イングランド女王〉のお仲間に関わるニュースから始めましょう。オーストラリアの人たちがエリザベス二世の統治のもとにとどまるかどうかを選ぶ国民投票まで、あと数日です。ぱっと聞いたところ、私にはとんでもない話に思えますが、どうです？　蹴り出されるに決まってます、イングランドの女王がオーストラリアになんの関係があるんでしょう。でもそこで思うんです、世界には規則や確かなものが必要で、どんなにばかげた規則でも、確かなものがまったくないよりは気が休まることがある。だから、ひょっとすると、オーストラリアの人たちは女王を手もとに置いておくことを選ぶのかもしれない。みなさんはどう思いますか？」

彼の声は温かく、人を惹きつけた。少年のころからずっとそうで、思春期にひとしきり恥ずかしい思いをしたあとは、この声をいつも大いに誇りにしてきた。ラジオで働いたこの三年で、彼は声の響きと話しぶりに磨きをかけ、いまでは低い音域のこの震えが、どのリスナーにもたちまち心地よさを染みこませるのだった。

「一方、ノルウェー通りのみなさんは、ここ数日、ノルウェーの首都オスロでイスラエルとパレスチナの指導者の会談が開かれ、アメリカのクリントン大統領が取り仕切り役を務めたと聞いて喜ばれるでしょう。クリントンはそのあと、ロシアの新しい首相、ウラジーミル・プーチンなる人物とも会いました。どうです、今度こそでしょうか？　みんなに平和と愛を？　わかりません。バラクとアラファトが握手している写真を見ていると、私に思い浮かぶのは、この三人の紳士のうちふたりは何年か前にもまったく同じ写真を撮っていて、それで何も変わらなかったということだけです。でもノルウェー通りの人たちは前向きに考える人たちです、知っていますよ、だから希望を持ち続けましょう」

彼はひと呼吸おいて、ほほえんだ。自分のユーモアのセンスに心から自信を持てたことは一度もなかったが、いまのはいい冗談だと思えた、いいぞアントニオ。マウスのクリック、いつもどおりひどくゆっくり読み込まれるページ、そして……

「そして残念ながら、空港地区のみなさんと私たち全員に身近なニュースです。昨日マサチューセッツ州ナンタケット沖で惨事に見舞われたエジプト航空990便の、生存者の捜索が打ち切られました。空の悲劇はいつも私たちの想像力を強く打ちのめします。科学を通して自然を支配する者という、私たちが自分自身について抱いてきたイメージを打ちのめすのです。そして陸路ではほとんど孤立していて、国のほかの地域とつながるのにこれほど飛行機を必要としている私たちのような町には、なおさら重くのしかかります。犠牲者のご家族に思いを寄せます」

そのあとに続いた沈黙は、めずらしく、いま言い終えたことの自然な締めくくりで、ふだんのように、アントニオが頭のなかで何かの独り言を続けていることを示す奇妙な間ではなかった。

「とにかく」とアントニオは話を再開した。声の響きが一オクターブ沈み、いっそう魅力を増していた。「人生には浮き沈みがあります。ときには沈みがあまりに深いこともあって、そんなとき浮かび上がる手助けをしてくれるのが、いい音楽です。そして音楽がいい

ものなら、二回続けて聞いたっていい、ねえイザベル、そのほうが記憶にしっかり残るかもしれないでしょう。あなたに、そして隣町サンタナのみなさんに捧げます。『スムーズ』」

「スムーズ」の音が消えていき、アントニオは電話の受付を始めた。いや、電話を一本、と言うべきか。というのも、彼の人生の型のなかには、自分で選んだとは言いがたいものもあったからだ。普遍的な意味がありそうな型もあれば、「いったいなぜ？」と首をひねりたくなる型もある。そして番組の最初の電話は、いつだってテレーザからだった。

「アントニオ、なんてすてきなことば。とても悲しいけど、胸にしみたわ。それに音楽の選び方がぴったり、言わせてちょうだい」

「実はこの曲はイザ……」

「ほんとに大当たりの選曲だったわ、もう、泣きそうになったんだから。でもとにかく、悲しくて電話したんじゃないの、うれしくて電話したのよ。ねえ、私が何も知らないのはわかってるでしょ、世の中のことはあなたがそのすてきな声で教えてくれるんだもの、でもそれでも言いたかったの、ノルウェーとパレスチナがやっと仲直りするなんてほんとにすばらしいニュースで、すごく慰めになるし希望が持てるわ、話してくれてありがとう。オーストラリアの女王さまの話はね、よくわからなかったの、国民が王さまに『もうあなたはいらない』なんてどうやって言えるのかわからないけど、でもそれでもいいことだと思うわ。じゃあねアントニオ、すてきな夜を」

そうはいかないさ、とアントニオは思った。

「ありがとう、テレーザ。君もいい夜を」

1.2 学校

マカパには、何にでもそれ用のバーがある。喉が渇いたときのバーがあり、さびしいときのバーがあり、殴り合いがしたいときのバーがある。上品に見せようと背伸びしているバーもあれば、評判の悪いバーもある。そしてアントニオの家の下には、店の隅のテレビでいつも何かしらスポーツを、生中継でも録画でも流しているバーがあった。

アントニオがそこに通っていたのは、酒が好きだからではなかったし、バーテンのルイスが特に気に入っていたからでもなかった。ルイスは汗っかきの大男で、吸いかけのミントたばこを欠けたカウンターの角に置きっぱなしにして、青白い煙の渦になって燃え尽きるにまかせるという、うんざりする癖があった。ルイスのつくるカイピリーニャも、カシャーサとライムを節約するために氷と砂糖をたっぷり入れたもので、それに心が躍るわけでもなかった。彼がよくそこへ行くのは、ただ、みんなで試合を見るのが好きで、ついでに自分の理論を客たちに披露できるからだった。その晩、地元のテレビ局はバレーボールの試合を再放送していた。しかも、なんという試合！　数か月前の、イタリア対キューバのワールドリーグ決勝だった。アントニオはカウンターに腰をおろし、少なくとも水で薄められてはいないビールを頼んだ。

「ほら。いまあの選手が、もうひとりと交差しながらやった動き、見ましたか？」とアントニオは右隣の見知らぬ男に、というよりむしろ自分自身に向かって言った。「偶然だと思います？　バレーボールに偶然なんてひとつもないんです。こうお思いでしょう、どうしてあの一瞬ですべてを決められるんだって。でもね、何も決めてなんかいないんですよ。銃声が聞こえたら地面に伏せようと決めたりしないのと同じです。バン！　伏せる。本能です」

バレーボールはずっとアントニオの大きな愛で、なかでもイタリア代表がそうだった。人並みより背が高く、体にも恵まれていた彼は、若いころ、コートの真ん中のネットとゴールのネットとを行ったり来たりして過ごした。だがバレーボールは残酷なスポーツだ。本当に背が高くなければならない、アントニオよりずっと高く。それに、プレーするにはたくさんの友だちがいて、天気がよくて、空いているコートを見つけなければならない。ボールを蹴るほうがたやすい、アントニオのような男には有利だったし、友だちがひとりいれば、雨のなかでも試合が始められた。

「でも銃弾から身を守るのと、ゾーン3でミリ単位のセミクイックを打つのとは別の話だ、どうしてあれが本能でありうるのか、とお尋ねでしょう」とアントニオは右隣の男にさらに言った。さっきの男がこっそり立ちあがって帰ってしまい、自分がバレーボールを説明している見知らぬ相手が別人になっていることには気づいていなかった。

「それで私の答えはこうです、本能になるんですよ。考えられるかぎりの型を、いや考えられない型まで、試して、試して、また試して、とうとうそれが本能になるまでやる。息を吸って吐いて、また吸って吐いて、そのリズムに従うのが型だと体が知っているように、体がそれを知るまで。ところが、いきなり、思いもよらず、異物が入ってきたら、はっくしょん！　それがバレーボールです。ちょうどいい瞬間の、本能的なくしゃみ」見知らぬ男（さっきと同じ男だろうか？　また別の男だろうか？　わかるはずもない、知るためには少しは注意して彼らを見なければならなかったのだから）は怪訝そうに彼を一瞥し、首を振って、またカシャーサをすすりはじめた。

「それで、これだけは言っておく」翌日、学校で、アントニオは彼の型を当てはめようとしながらプレーしている生徒たちに話していた。前の晩の考えの流れは、まだとぎれていなかった。「意外に思うかもしれないが、ブラジルは伸びている国だ。そして、その伸びをいちばんはっきり示すのはバレーボールでの覇権だ――アルヴァロ！　ゾーン1は右足

を前にして守れって千回言っただろう！――世間はみんな、僕たちにはサンバを踊ってボールを蹴ることしかできないと思っていて、華麗なサッカーとファンタジーをほめそやす。でもいまや、僕たちは世界がどう動いているのか、その本質を支配している型が何なのかをやっと理解したんだから、いちばん型にはまったスポーツで勝利をつかむんだ――エンリケ、ブロックの腕を動かすな！――四位はもうたくさんだ。創造力は何年も僕たちを準決勝まで連れていってくれた、でも創造力だけでは足りなくなる瞬間がくる、型が要るんだ。そして僕には、僕たちがそれを理解したのが見える。君たちが理解したのが。テレビで試合を見るとき、それが見える。体育館へマカパの試合を見に行くとき。君たちを見ているとき――いいぞジョージ、そう、完璧だ――まだわかっていないのは連盟の連中だけだ、ああ、ベベートを逃がしてしまった、なんて不幸だ！　でも連中がわかったら、型を呼吸しているような監督を、たとえばベルナルジーニョみたいな監督を選んだら、そうなったら世界のほかの国にとっては、二位をめぐる厳しい戦いになるだろうな」

「じゃあサッカーは？　と君たちは聞くだろう」アントニオは、生徒たちがまだバレーボールを続けているコートにサッカーボールを持って入りながら、さっと話を切り替えた。もう誰も彼に驚かなかった。新学期の初日の一年生でさえ、生徒にサッカーをさせながら水球の型を説明しだしたり、ラグビーボールでバレーボールの試合をさせたりする頭のおかしい体育の先生がいることを、ちゃんと知らされていた。

「サッカーも同じだ、でもそれ以上なんだ。サッカーは、いちばん正確な……」

「比喩ですか、先生？」といちばん出来のいい生徒のジョージが口をはさんだ。

「そう、そのとおり、人生がどうあるべきかのいちばん正確な比喩だ。ひとつの結果のためにいっしょに闘う、それぞれが自分の力でできるかぎりの貢献をする、ほかの者のために身を捧げる、でも個人主義を貫くこともできる、体が課しているように思える限界を超えて苦しむことができる、勝ったらいっしょに喜び、そして負けても絶望しないことを、これもいっしょに学ぶ。でも、いいか、僕は『べき』と言ったんだ。人生には、わかってる、気に入らないけどわかってる、エゴイズムの入りこむ余地がたっぷりある。でもサッカーには、ありがたいことに、もうない。そしてそれを僕たちが理解しなければ、いや、君たちが理解しなければ、ワールドカップなんて2100年まで夢のまた夢だ」

「じゃあ先生、僕たち何をやるんですか？　バレーボール、それともサッカー？」とジョージが生意気に尋ねた。

だがアントニオは物思いにふけって外を見つめていて、その質問も耳に入らなかった。バレーボールの型がサッカーのコートにぴたりとはまっていくのが見え、イタリアの最初の栄光を築いた伝説の監督、フリオ・ベラスコのことばが頭のなかで鳴り響いていた。「言い訳、うちの選手たちは言い訳をこしらえる天才だ」。彼が思い描いていたのは、ラグビーや水球の苦しみがひとりひとりの選手の原動力となり、型の鋭い正確さが彼の国の人々の創造力と混ざりあうようなチーム、そこでは……

「先生？」ジョージがどこか心配そうな顔でアントニオの目の前で手を振り、彼をいきなり地上へ引き戻した。

「なんだ？」アントニオは少し気まずそうに答えた。

「バレーボールとサッカー、どっちをやるんですか？」

「場合による」

1.3 スタジアム

学校を出て、「おやつに」と菓子の包みを持たせるのを決して忘れない母親の家で、木曜日にはいつもそうするように昼食をとってから、アントニオは自転車に乗り、ゼロン・スタジアムのふたつの駐車場を分ける並木道を走って、午後の練習へ向かった。

地面に描かれた黄色と緑の線が車道の真ん中を示し、そして何より、マカパの誰もが知っているとおり、あの力強い架空の線、赤道の存在を告げている。

何ものにも立ち止まらない赤道だ。アマゾン川の上を恐れもなく飛び越え、大陸のほうへ速やかに駆け、スタジアムの入口の前に赤道の名において建てられたおぞましい記念碑を貫き、もとの水色が雨と暑さとあらゆる落書きを残していった何十もの手とですっかりはげ落ちた古い外壁を軽々と跳び越え、1990年に建てられて以来ずっと閑散としているスタンドをふたつに分け、そしてもっとも大事なことに、ハーフウェーラインがちょうどふたつの半球のあいだを通るようにスタジアムを設計した人物に感謝し、ゼロンを世界でただひとつの場所にしているのだ。

アントニオは昔から南半球のほうが好きだった。自分は南の人間だと昔から感じていた、たぶん「南アメリカ」の「南」のせいだろう。スタジアムの南側はいつだって彼のお気に入りで、いちばん日が照りつける側でもかまわなかった。ホームチームのベンチは南に置かれていたし、自分のチームがそちら側でプレーするたびに、守っているのはひとつのエリアやひとつのゴールではなく、毎回、南半球全体が懸かっていて、それが相手のロングボールに脅かされ、北からのフリーキックに危険にさらされているのだと感じた。そしていまのように、物思いに沈みながらのんびりペダルをこいでいるときでさえ、彼は無数の穴で傷んだ道を、本能的に逆走して左の車線を、つまり南側を走っていた。

ゼロン・スタジアムへ続くこの道は、彼の人生の減圧室だった。彼はトカゲや雑草の塊をよけながら、スタジアムを取り巻く貧しい地区の色あせた黄色やオレンジの壁のあいだを抜けてこの道に入り、まだ自分の問題に浸ったまま走った。学校での問題、いつも高すぎる請求書、彼と彼の長話にいつもすぐ飽きてしまうつかみどころのない女たち、金が値打ちを持ちすぎて人と人とのつながりがもう何の値打ちもない世界。

だがやがてスタジアムの水色の壁が目に入ると、心がなごんだ。鉄の門までの数百メートルのあいだに、彼の日常はあらゆる悪い考えから清められ、サッカーの理想の価値が彼のなかに道を見つけた。汗まみれで自転車から降り、手にはもう鍵を握っているその瞬間こそ、自分の存在がいちばん満ち足りているように思える瞬間だった。ほら、アントニオだ、ほかでもないマカパ・フチボウ・クルビの監督、彼の頭のなかでは地球でいちばん重要なサッカーチームの。

錆びた古い蝶番の不吉な音さえも喜びのもとだった。それはスタジアムがしゃがれた声で彼を迎え、「やあ」と言ってくれる音だった。壁の向こうでは世界が変わった。色が変わり、においも変わった。ロッカールームと、羽を伸ばした男性ホルモンの、あのいかにもというにおいが、何十ものボールの革のにおいと混じりあい、さらにこのあたりではめったにない芝のにおいがほかのすべての上にツンと際立っていた。アントニオは練習に早く着くのが好きだった。ロッカールームをひとまわりして、ほかのチームの若者たちが忘れていった物をよく拾い集めるのが好きだった。ボールをゆっくりとピッチへ運ぶのが好きだった――もちろん南側へ――そして入口の門から、ピッチの西側に建てられたひとつの台形のかたまりであるスタンドを眺めるのが好きだった。

「空っぽのスタンドには独自のエネルギーがある」というのは、アシスタントコーチのエドゥアルドがおそらくいちばんよく耳にしたことばだった。練習の前にはいつも、まった

く同じ場面がくり返された。エドゥアルドがロッカールームに入ると、アントニオが何かの用事に忙しくしていて、エドゥアルドが尋ねる。「もう来てたのか？」

「早く着くのが好きなんだ」とアントニオは決まって答えた。「空っぽのスタンドには独自のエネルギーがある」

「で、どんなエネルギーだ？」と、議論をふっかけたい気分のときには、何年も前に中退した物理学部での勉強を盾に、エドゥアルドは言い返した。「位置エネルギーか？　運動エネルギーか？」

この問いにアントニオはたいてい肩をすくめるだけだったが、ときには、またしても「ご高説」で応じた。エドゥアルドはアントニオの長い独白をそう呼んでいた。「学校の机で教わるような、そんな狭いエネルギーの概念にしがみついてちゃだめだ。きれいな女の子に恋をしたとき、胸のなかで何を感じる？　あれはエネルギーじゃないのか？　それに、何もかもうまく回って、うちのチームがいいプレーをするとき、まあめったにないのはわかってるけど、ときにはあるだろう、そのとき彼らを突き動かしているのは何だ？　彼らの目を見たか？　あれがエネルギーじゃないって言うのか？　何もかもエネルギーなんだ！　何もかも！　そして断言するけど、世界でいちばんばかげた国のてっぺんに迷いこんだようなこのスタジアムのスタンドには、空っぽのときでも独自のエネルギーがある。あらゆる話題に科学的な態度をとるのをやめれば、きっと君にも感じとれるはずだ！」

ここまでくると、エドゥアルドが肩をすくめるのはほとんどお約束で、たいていその後に笑みと、肩をぽんと叩く手と、ひとことが続いた。「で、何を手伝えばいい、アントニオ？」

1.4 マカパ

マカパの午後には二種類ある。けだるい午後と、ひどくけだるい午後だ。

静けさはない。いつも鳥たちの叫び声がしていて、子どもたちは午後二時になっても誰にも邪魔されずに遊び、騒いでいる。そしていつも、遠くか近くで、ラジオか小さなラジオの声が音楽を流している、いつでも。バスのなかでも、食堂でも、空港でも、市場でも、通りでは開け放した窓からも、音楽はどこにでもある。いちばん金持ちでいちばん運のいい連中、そして残念ながらたいていいちばんの悪党でもある連中は、排気量の大きな車に閉じこもり、音楽とエアコンを最大にして、ゆっくりと町を流しはじめる。自分の縄張りを見回るためか、あるいはただ自分自身から逃げるために。

マカパはアマパー州にあり、アマパーとは、かつて海岸沿いに住んでいていまでは絶えてしまった先住民族、トゥピ族のことばで「雨の土地」という意味だ。八月から十二月、住民たちが埃の季節と呼ぶ時期にここへ来たら、なぜそんな名前なのかと首をかしげるかもしれない。暑い、とても暑くて、午後はけだるい。雨はあまり降らず、ひと雨ぱらつくと、暑さがしばらくその手をゆるめるのでみんな喜ぶ。だが年の終わりまでマカパにいれば、なぜその名前なのかがわかる。泥の季節には雨が降る、たくさん、ものすごくたくさん。雨が降ると、午後はひどくけだるくなる。長い午後で、コーヒーやガラナでひと息つきながら、トタン屋根を打つ雨の音と、まちがえようのない川のにおいがそれに寄り添う。エアコンのついた車は駐車場にとどまるしかない、道がしばしば通れなくなるからだ。そして目のくらむ太陽の砂漠のかわりに、泥の砂漠が現れる。もっとも不完全な砂漠だ。雨が降っていても、本物の嵐でもないかぎり、子どもたちはサッカーができるのだから。

セントラル地区の子どもたちは雨のなかでボールを蹴る。靴をはいて、それどころかときには芝の上で。ラギーニョ地区の子どもたちも雨のなかでボールを蹴る。そこではそう遠くない昔、悪名高い奴隷の息子プレチーニョが、正午から六時まで武器を持ってうろつき、通りで出くわした者を井戸に放りこんだものだった。イピランガ・クルビの本拠地があるトレン地区では、誰もが雨のなかでボールを蹴る。そして町でいちばん貧しい区域、サッカーとサンバのほかには喜びを与えてくれるものがほとんどないバイシャーダの、杭上家屋をつなぐ渡り板の上でも、水と泥をものともせず、大人も子どももボールを蹴る（ありがたいことに、サッカーはたくさんの喜びを与えてくれる）。反対に、ベイロル地区では誰も通りでボールを蹴らない。みんなまじめすぎるし、道は整っていて水につからないし、サッカーの居場所がないのだ。

正午から六時のあいだに、どんな天気でも、六十年来うろついている唯一の男がメンドンサで、パコバ地区では誰もが彼を知っていて、なんとなく一目置いている。パコバとは「バナナ」のことで、まさにバナナ一本と引き換えに、メンドンサはマカパにやってきた最初の飛行機の話をしてくれる。自分でじかに覚えていると言うが、もちろん嘘で、それは身内の誰か、たぶん父親が彼に伝えた、ポストモダンな口承にすぎない。

「1922年3月18日、聖ヨセフの被昇天の祝日の前の日のことだ」とメンドンサはよく通る声で語る。「ブエノスアイレスへ向かう水上機が不時着した。来なさい、ついてきなさい……」彼はパラー大通りに入っていく。名前とは裏腹に、ぬかるんだ小道とたいして変わらない通りだ。そしていちばん上まで登る。指で東をさすと、地平線にかろうじて川が見える。「あそこだ、ちょうどあそこ」

その目は遠くを見ている。よく練られた身ぶりで、すっかり覚えている話、きっと十万回は語ってきた話を思い出しているふりをしているのだ。

「朝の七時で、漁師たちはいつもどおり自分の桟橋へ戻ってくるところだった。いきなり朝の静けさが破られる、それも上から破られる。わしの目は空へ上がり、漁師の誰かが『飛行機だ！』と叫ぶのが聞こえる。話には聞いていたが」メンドンサは上手に嘘をつく、「一度も見たことはなかった」

老人は続ける。「年寄りのムラートの女が『世の終わりだ！　世の終わりだ！』と叫びだし、みんなひざまずいて罪の赦しを乞いはじめる」

彼はほほえむ。町じゅうが金属の大きな鳥の前にひざまずいている光景を思い浮かべると、いまでも愉快なのかもしれない。

「誰もが体が動かないと思っていたマルセロじいさんが、アヴェ・マリアを叫びながらぐるぐる走りだす。国家警備隊の隊長は泣きくずれて、女房に浮気を白状する。女房はみんなの大喝采のなか、亭主をおおっぴらに許す。サン・ジョゼの鐘が弔いの音を鳴らす。カヌーに乗った勇敢な一団を率いるのはシリロ・ジョゼ・シモンイスで、彼が真っ先に飛行機にたどりつき、押し寄せる人の群れに気をもむふたりのドイツ人パイロットを見つける。飛行機はその重さに耐えられなかっただろうからな」

話のここへくると、メンドンサはいつもひと休みし、バナナの皮をむいてゆっくり食べながら、もらいものにしきりに礼を言う。パコバ・バナナはいちばん甘いが、誰もが見分けられるわけではない。

「飛行機は要塞のそばまで運ばれ、翌日の午後には、それを見物するための本物の行列が組まれる。町の名士の家族がみんな、お偉方が、あらゆる階層の人間がいる。聖マリア学院の修道女たちは子どもたちを連れてその鋼鉄の驚異を見に来て、子どもたちは質問ばかりしている。当時の市長アレシャンドリ・ヴァス・タヴァリスは二日間の祭りを布告する。だからわしらはいまでも覚えているんだ」

そしてもし誰かが飛行機はどうなったのかと尋ねでもしたら、彼はうんざりしたように話を打ち切るだろう。「十日。十日ここにいて、燃料が届くと嵐のなかを飛び立っていった」

メンドンサからそれ以上は聞き出せない。

1.5 イザベル

雨が降っていた。十一月、埃の季節にはほとんど雨は降らないのに、雨が降っていた。

こんな日には、バーは少なくとも正午まで閉めておいてもかまわなかった。こんなふうに雨が降っているときに何か飲みたくなる者などいないからだ。だが店主のアナ・マリアはそうは考えていなかった。彼女にとってバーを持つことは一種の神聖な使命だった。「イエス・キリストはなんて言った？　渇いた者に飲ませよ！　家にこもってお日さまを待てなんて言ってないでしょ？　渇いた者に飲ませよ！」

その朝の雨は生ぬるく、灰色で、叩きつけるようで、川のにおいを運び、通りの物音を、まれに通る車の音や、天気への悪態をこらえながら駆けていくまれな通行人の足音をくぐもらせていた。「十一月にこんなに降るなんておかしいよ」

ラジオ局でのアントニオの同僚、マリア・イザベル・バルボーザは、バーのドアの内側に立って通りを眺め、ひとりごとを言っていた。その息がガラスにくもって、完璧な円を描いていた。ほとんど白に見えるほど淡い水色の彼女の目は、町の埃が泥に変わり、泥が急流になって川へ、町の誰もがもっと手短に「川」と呼んでいるアマゾン川へと流れていくのを、好奇心いっぱいに見つめていた。

じっとして、イザベル、動かないで。

服がわりの、ごく薄いターコイズのタンクトップ一枚なのに、イザベルはひどく暑かった。うなじのつけ根に汗の粒ができ、オリーブ色の背中をけだるそうに転がり落ちて、長くて黒いポニーテールの髪にからめとられた。

じっとして、息をしないで。

彼女は裸足だった。ビーチサンダルはレジの裏に脱いでおいた。もう少しひんやりしたタイルを探して素足を少し開き、深く息を吸って、目を閉じた。

動かないで。

雨粒の小さな連打は、すぐに彼女の頭のなかでサンバのリズムに変わり、そのリズムがどんどんはっきりしていって、とうとう体が勝手に、彼女の自覚もないまま動きだした。リズムが体に入ってくると、背骨の下のほうから熱が広がって、もう何ものにも動きを止められない。脚がリズムになり、腰がリズムになり、それから上半身ももう抑えきれずに動きだす。背骨はエンジンになり、エネルギーの発電所になり、熱が力強く送り出されて体じゅうに行き渡れば行き渡るほど、踊りはただ「起きる」もので、もう意識した行為ではなくなる。

カーニバルまであとどのくらい？　まだ四か月！　長すぎる！　長すぎる！

イザベルは雨のリズムに合わせて踊り、踊りながら泥を忘れ、腐った果物のにおいを忘れ、たくさんの地区の貧しさと悲しさを忘れ、あまりにしばしばあまりに人であふれた家々のあるマカパを忘れ、ブラジル全体を忘れ、何もかも忘れた。半分錆びた鉄の小さなテーブル四つのまわりを踊り、もう三週間も壊れたままで、まだ誰も直しに来ないアイスクリームの冷凍庫をかすめた。お世辞にもすらりとしているとは言えない体つきなのに、大小何十ものへこみがついたステンレスのカウンター沿いを驚くほど軽やかにくるくると回り、大きな弧を描いてドアの前へ戻ってきた。踊ることは旅をするひとつの方法だった。旅をすることはずっと彼女の夢で、勉強のために、大学を卒業するために払ってきた

犠牲は、いつもたったひとつのことばを頭に置いて払ってきたものだった。旅をする。それなのに、彼女は一度もマカパから出たことがなかった。まだね、と彼女は思った。

まだ目を閉じたまま、荒い息がガラスをくもらせる範囲はどんどん広がっていった。汗が全身を流れ、タンクトップが肌に貼りついているのがわかり、快感の波が体を走り抜けていくのを感じた。お腹のなかの火はまだ消えておらず、また踊りだしたい誘惑はひどく強かった。暑さなどどうでもよかった、マカパの誰にとっても、たぶんブラジル全体の誰にとってもそうであるように。大事なのは、生きていると感じることだった。

動かないって言ったでしょ、イザベル、動かないって。

腰がもうまた動きだしていたとき、雨のリズムを、もっと規則正しく叩く音がかき消した。まるで誰かがゴムボールをドアに投げつけているような、いや、まるで誰かがノックしているような！

イザベルが目を開けると、ドアの向こうで老人がひとり、手を目隠しのようにかざして、なかをのぞきこんでいた。

「オリヴェイラさん、なかへどうぞ！」とイザベルは叫んでいきなりドアを開けた。オリヴェイラ氏はあまりに不意をつかれて、白いタイルの上にあやうく大の字に倒れそうになった。

「すまんね、イザベル、外から見たら動いてるのが見えたもんで、床を掃除してるのかと思ったんだ」

「床を掃除？」イザベルはほほえんだ。「そういうわけでもないんです」

「濡れてるから、汚したくなくてね……」

「気になさらないで、オリヴェイラさん。何を差しあげましょう？」

「差しあげる？　いや、今日は金ならあるんだよ、たいしてないが少しは……」

オリヴェイラ氏はふいに口をつぐんだ。汗でびっしょりのタンクトップがもう隠しきれなくなった娘の体が、彼のお気に入りのココナッツのリキュールを取りにカウンターをまわっていくのを見つめていたのだ。豊かないい腰、揺れるいい尻、まったく、オリヴェイラおじさんも見とれる立派な娘っ子だ。

「気になさらないで」とイザベルは何も気づかないふりをしながら、おもしろがるような声で言った。「アナ・マリアさんがいつもなんて言ってるか、ご存じでしょう？　渇いた者に飲ませよ！　喉は渇いてらっしゃいます？」

「その……ああ」とオリヴェイラは、目をそらしていられなかったことに少しばつが悪そうに答えた。

「じゃあ、私のおごりです！」とイザベルは笑顔で締めくくった。そしてオリヴェイラ氏がショーウィンドウにいちばん近いテーブルへと足を引きずっていくあいだも、彼は自分の目が娘のほうへ戻っていくのをどうしても止められなかった。娘はもう白い液体をグラスのふちまでなみなみと注ぎ、相変わらず顔にいい笑みを浮かべたまま、それを手早くテーブルへ運んでくるところだった。

何ひとつ、と、口をぽかんと開けたままのオリヴェイラ氏は思った、あのタンクトップは何ひとつ隠しちゃいない。

1.6 ミニマッチ

アントニオは一風変わったサッカーの監督だった。

彼が二十一歳のとき、祖父がリオデジャネイロの友人を訪ねることになり、孫も連れていくことにした。アントニオがマカパを離れるのはそれが初めてで、しかも大きな機会だった。バレーボールの世界選手権が開かれていて、地元開催のブラジルは大本命、そして祖父の友人はどうやってか、イタリアとの準決勝のチケットを三枚手に入れていた。イタリアを率いるのはフリオ・ベラスコ、アントニオが名前しか聞いたことのなかった監督だったが、その日から彼のアイドルになるのだった。

1990年10月27日、アントニオはその日を生涯忘れないだろう。マラカナンジーニョの公式の収容人数は一万七千人だったが、少なくとも二万二千人は入っていることを誰も疑わなかった。試合は午後四時開始の予定だったのに、一時にはもう焼けつくスタンドは人でぎっしりで、トルシーダが音楽と踊りで会場を温めはじめていた。

ブラジルはすばらしかった。天才マウリシオ・リマがいて、タンジがいて、マルセロ・ネグロンとジオヴァニ・ガヴィオがいる、負けるはずがなかった。

ところが、どこか控えめな顔つきの、青いユニフォームの六人の若者たちは、あの小柄なアルゼンチン人に率いられて、型を文字どおりに当てはめればどこまで行けるのかを世界に示してみせたのだった。第一セットを無残に落としたときでさえ、二万二千人が相手を応援しているときでさえ、型の効き目への信頼を失わずに。

その体験全体のなかでアントニオの胸に焼きついたのは、ルッケッタの最後のスパイクのあとで体育館に降りた沈黙だった。とりわけ、彼の頭のなかの沈黙。まるでその衝撃的な敗北で脳がリセットされ、ありえないことを受け入れるために何分か止まっていなければならなかったかのようだった。

ベラスコ。ありえないことをやってのけた張本人は、ベラスコだった。

十代のころ、アントニオはもう少しでサッカーのプロになるところだった。足技がよく脚の長いインサイドハーフだった。だが一部リーグのチームでプレーしに行くということは、家族を離れ、マカパを離れ、そしてたぶん、本当には望んでいない人生に飛びこむことを意味していた。彼はそれをあきらめたが、プレーは二十五歳まで続けた。その年、アマパー州選手権の準決勝で受けたひどい打撃（実はそれほどひどくもなかったのかもしれない）のせいで、やめざるをえなくなった。その選手権で、彼のチーム、マカパ・フチボウ・クルビは結局決勝で敗れた。まさに彼がいなかったせいだと、ほのめかす者もいた。

翌年には、彼はもう指導をしていた。前々から市のもうひとつのスタジアム、グリセリオ・マルケスに足しげく通い、よく最前列に座りこんでは、試合のあいだじゅう、何についても誰についても、ずいぶん派手な言い方で論評を惜しまなかった。まもなくマカパFCのライバルチームのひとつ、レアル・アマパーの幹部の目にとまり、ユースの指導者として雇われた。

アントニオはこの仕事を、大きな責任感をもって引き受けた。選手としての経歴のあいだずっと、出会ったあらゆる監督の方法や言い分に反対してきた。テレビでのインタビューを聞くとしばしば胸やけを起こした代表監督たちも含めてだ。だから、これこそ世界のトレーニングの方法論に革命を起こし、サッカーに知の殿堂のなかでふさわしい場所を与える大きなチャンスだと感じた。

アントニオはたくさん勉強した。サッカーだけでなく、バレーボール、水球、バスケットボール、ハンドボールと、幅広いスポーツについて調べた。トレーニングの考え方はずいぶんちがうこともあり、革新がいつも結果につながるわけではないと気づいた。彼のなかで、ひとつの考えが形になりはじめていた。監督の仕事は、監督は無用なのだと選手たちに自覚させることだ、という考えだ。試合のあらゆる場面に自分たちだけで立ち向かえるように鍛えなければならない。その多くは練習では再現できないから、純粋な創造力を必要としている。

彼の手本は、当然ながら、フリオ・ベラスコになっていた。

翌1996年から、こうした考えのすべてが、彼自身はまったく新しいと信じたひとつの方法を生みだした。彼自身が「ミニマッチ」方式と名づけたものだ。

チームをいくつかのグループに分け、それぞれのグループがピッチの限られた一部で別のグループと小さな試合をする。可能性は無限にあった。ゴールからゴールまでの細長い長方形のなかで二対四、一辺五メートルの小さな正方形のコートで六対六、タッチライン沿いとひとつのゴールエリアを含むL字形のコートで二対二、ペナルティエリアのなかだけで八対七、ほかにも何十、何十という組み合わせがあった。それぞれの試合の結果から選手の順位表がつくられ、リーグ戦のメンバー選びに使われた。

レアル・アマパーの若者たちにとって、その年の出だしは散々だった。そんなふうに鍛えられた彼らは、ピッチ全体を使ってプレーする習慣をたちまち失い、わずかにあった試合の流れを読む力も急に消えてしまったようだった。あらゆる方面からアントニオに批判が降りそそいだ。

それでも、この方法には少なくともひとついい面がすぐに表れていた。若者たちが喜んで練習に来るのだ。事実上ずっと試合をしていて、誰も好きではない退屈な技術練習の時間をまるごと省けたからだ。

そのうえアントニオは、いつも好き勝手な形に切ったピッチの区画で考えているうちに、試合のさまざまな場面に名前をつけはじめた。「これは密なLだ」と彼は選手たちの親に言った。親たちは代わるがわるマッサージ係や、スポーツドクターや、用具係や、そのほかなんでもこなして彼を手伝っていた。「平たい三角形」、「大きな対角線」、「逆さのピストン」、「偽の円」、「引き裂かれた台形」、ほかにも山ほどの呼び名があり、親たちは当惑して、しばしば聞こえないふりをした。

だがアントニオはくじけず、やがてこの用語は選手たちへの指示にまで入りこみはじめた。「アンドレ、まずひっくり返ったカップから入って、大きな対角線に展開できるか見てみよう。気をつけろ、向こうはよく短い上着をやってきて、まばらなピンボールをさせてくれないからな、特に左側で」

幹部たちの好感を引き寄せるような話ではなかった。

だが苦しい数か月のあと、レアル・アマパーのユースには別の風が吹きはじめた。ミニマッチ方式のおかげで若者たちがすぐに試合に慣れ、たくさんプレーしてたくさん学び、ほかのチームの同年代よりはるかに多くを身につけたこともあった。

レアル・アマパーはその年のユースのリーグ戦では優勝できなかった。出だしがあまりに悲惨だったのだ。だがアントニオはほかのチームからも注目されるようになった。彼のサッカーはいちばん華やかでも、いちばん創造的でもなかったかもしれないが、いちばん効果的なのはまちがいなかった。

若者たちは、十五歳という若さのおかげもあって、試合のさまざまな場面を自分たちで見分けることに慣れ、くり返し練習して勝手知ったる場面へと相手を誘いこむのがすっかりうまくなった。そしてアントニオが固めていくミニマッチの幅が広がるほど、そうした罠が試合で発動する回数も増え、勝ち方も派手になっていった。

「君たちは変わってるけど、勝つね」というのが、アントニオが耳にすることのできる最高のほめことばだった。

1.7 テレーザ

テレーザは習慣どおりに暮らすには、だらしなさすぎた。たとえば買い物をするのが好きな小さな店があったが、帰り道に卵を買い忘れたとか、マンジョッカ粉を、コーヒーを買い忘れたとかに気づくと、最初に行き当たった店で買い足すのだった。仕事に行く道もしょっちゅう変わった。気まぐれからではなく、いつも何か目を引くものや挨拶すべき誰かがいて、ときにはずいぶん遠回りまでしてしまうからだった。

けれども少し前から、彼女の毎日にはひとつの決まりごとができていた。アントニオのラジオ番組だ。なぜそんなに好きなのかはわからなかったし、実のところ、自分にそう問うたこともなかった。ただ好きだった。六時になると、何をしていてもラジオをつけ、受話器を手にとって、いつでもかけられるようにした。というのも、神さまが地上に送ったひとりひとりに授かりものがあるとすれば、テレーザの授かりものは、いつだって回線をつかまえることだったからだ。意地の悪い女友だちのなかには、あのラジオに電話するのはあんたしかいないからよ、とほのめかす者もいたが、テレーザはそうではないとわかっていた。それはまさしくひとつの才能で、彼女はそれを何年も前から知っていて、うまく使ってきたのだ。一度、あの毒蛇のルイーザにいつも以上に腹を立てさせられたとき、家に帰ると、腕試しのつもりで、なんと午後の大人気番組「オラ、クリスティーナ！」にまで電話したことがあった。うれしさのあまり、テレーザはクリスティーナに挨拶するかわりに、唇をぶーっと鳴らしてしまった。あとで説明しようにも、あのぶーっはクリスティーナにではなく友だちのルイーザに向けたものだったなんて。もっとも、友だちといってもね。ふん、あんな友だちなら見つけるより失ったほうがましだ。とにかく、クリスティーナとスタッフはテレーザとルイーザの長年の確執にはたいして興味を示さず、あの盛大なぶーっはちょっとした騒ぎを巻き起こしたが、それでもテレーザはそれを、電話をかける人としての経歴の輝かしい一点だと考えていた。

家のベッドのそばには、赤いプラスチックの小さな椅子があった。ずいぶん傷だらけだったが、緑と茶の偽物の錦織のクッションで明るくなっていた。その椅子の上で、彼女の隣に眠っていたのは、表紙にブーツをはいたこっけいな子ブタの写真がついたノートと、ぬいぐるみのジョニーだった。ジョニーもやはり子ブタで、彼女の母親のもので、ひょっとするとその前は祖母のものだったかもしれない。表紙に子ブタが描かれていたことはジョニーとは何の関係もなかった。テレーザはいつもハンモックのそばにノートを置いていて、電話をかける番組の電話番号や、言いたいことを忘れないためのメモを書いていた。子ブタの表紙のノートは、彼女が二十年前から髪を洗っている美容院に誰かが置いていったもので、誰も取りに来なかった。彼女の部屋は数か月前まで自動車修理工場だった。シャッターがひとつ、鉄格子のはまった窓がひとつ、そして床には油がたっぷり。油はいまではほとんどすっかり拭きとられ、シャッターには友だちが、内側には大きな朝日を、外側には浜辺と、太りすぎてカモメというよりペンギンに見えるカモメを描いてくれた。鉄格子のほうは残してあった、用心に越したことはない。窓の下のがたつく古いテーブルと、同じくらい古いガスコンロのほかに、部屋にはたいしたものはなかった。いちばん大事なふたつのものを除けば。古いテレビ、そのアンテナはシャッターの外にさんざん苦労して取りつけなければならなかった。そしてタイマー予約のできるカセットデッキつきの大きなラジオ、テレーザはそれで、自分が電話の主として参加したラジオ番組をすべて録音していた。カセットは隅の大きな段ボール箱にためていた。ときどき聞き返したが、本当は眺めるだけで思い出にひたるのに十分だった。これはベネズエラの話をしにアントニオに電話したときのカセット、こっちはアカデミー賞についてしゃべったときの。

時計を見て、アントニオの番組がもうすぐ始まるのに気づくと、彼女はほほえんでラジオをつけに行った。今日は何の話になるんだろう。日が暮れかけていた。彼女を少しこわがらせる時刻で、だからこそアントニオの温かい声が好きなのでもあった。その声がやって

きて、一日のこの時間にはごく自然な悲しさと、ある種のこわさを追い払ってくれるのだ。

そのこわさが、シャッターのすぐ外の通りを駆けていく足音を聞いたとたん、いきなり形をとった。天井から電線だけでぶらさがっている裸電球ひとつのスイッチの、ほんの数ミリ手前で指が凍りつき、本能が、気は進まないのに、ラジオを消させた。やがて通りの両側からわめき声が彼女の家のほうへ集まりはじめ、シャッターのすぐ外で立ち止まった男は袋のネズミになった。テレーザは足音を忍ばせて部屋のいちばん奥の隅へ移り、床にしゃがみこんで小さく小さくなった。彼女の住むあたりでは喧嘩は珍しくなかったが、たいていはさんざん罵りあい、何発か殴ったり突き飛ばしたりして終わった。ナイフも珍しくはなかったが、そこは金持ちの住む地区でも、よそ者がやってくる地区でもなかったので、ふつう刃物は本物の武器というより、ある種の身分のしるしにとどまっていた。

もみあいはすぐに終わった。たくさんの叫び声と罵声、シャッターにひどく強く打ちつけられる音が二、三度、そしてたちまち夜になっていく夕闇のなかへ足音が散っていった。そして押し殺した声。「助けて！」「誰か助けてくれ！」それはやまず、「主イエス・キリストにかけて、助けてくれ！」そしてどんどん弱くなっていった。「助けて、助けて……」

テレーザは特別に勇気のある女ではなかったが、やさしく、そしてとても好奇心が強かった。見えないこと、自分から数メートルのところ、あの閉じたシャッターの向こうで何が起きているのか知ることができないのは、とにかく我慢ならなかった。果てしなく思える時間を待ち、かすかな息づかいしか聞こえないように思えるまで待った。かわいそうな母親の声が聞こえる気がした。面倒ごとには近づくんじゃないよ、テレーザ、喧嘩には近づくんじゃない。もちろん母は正しかった、でも今度はちがう、今度はまさに家の前で起きているのだ。カーディガンのボタンをきちんと留め、ありとあらゆる最悪を覚悟して、シャッターを少しだけ上げた。ひどく大柄な男が石畳にうつ伏せに倒れていて、おびただしく血を流し、息をするたびに喉を鳴らしていた。

テレーザはタオルを手にしていた――家には包帯も薬もなく、そのタオルだけがなんとなく役に立ちそうに思えた唯一のものだった――そしてそれで男の傷をそっと押さえはじめた。

「電話……」と地面の男がささやいた。

テレーザは家のなかを振り返り、電話を見つめた。近いが、傷を押さえるのをやめずに取れるほど近くはない。

「すみません、あの……旦那さん。病院に電話したほうがいいかもって思ってたんですけど、手を離したら、どう思います……」と彼女はぎこちなく怪我人に説明しはじめたが、男はかすかな息とほとんど変わらない声でそれをさえぎった。「ポケットだ！　ポケット！　俺の電話だ！」

携帯電話だった。マカパに携帯電話なんて片手で数えられるくらいしかないとテレーザは思っていた。彼女が間近で見たことがあるのは勤め先の美容院の女主人のものだけで――そんな高価な気まぐれができるのだから、美容師のほかにも何か商売をしているのではないかとテレーザは疑っていた――それはTIMブラジルとの果てしなく長くてつらい交渉の種になり、TIMブラジルは届けるのにほぼ一年かかったのだった。

「番号……イナシオを探せ」

「使い方がわかりません、わかりません……」とテレーザは男のポケットをかきまわしながら口ごもり、手とスカートを男の血で汚した。ところが、やってみるとごく簡単だった。適当にいくつかボタンを押すと、彼女のように震える手でも、キーのロックを解く方法が表示され、受話器が描かれた緑のボタンを押すとリストが出て、下向きの矢印を押すとリストが流れていき、三番目の名前がまさに「INÁCIO」、全部大文字で書いてあった。もう一度緑の受話器のボタンを押してみると、たしかに電話は息を吹き返した。

「グスタヴォ、どうした？　この時間には電話するなと言っておいただろう……」と向こうで低いしゃがれ声が答えた。

「もしもし？　もしもし？」テレーザは何を言えばいいのかよくわからなかった。「あの、グスタヴォさんが殴られたんです、刺されたかもしれません……」

「で、あなたは誰です？」

「それは……」テレーザは一瞬ためらった。「うちの前で起きたんです、ピアウイー大通りです、あの人、地面に倒れてて、具合が悪いんです、急いでください！」

ナンバープレートのない黒いピックアップトラックがやってきたのは、テレーザの人生でいちばん長い五分間のあとだった。荷台では顔を隠した四つの人影が脚のあいだに銃をはさんでいて、その細い肩から、子どもに毛が生えた程度の年ごろだとわかった。運転していた大柄で禿げた男が駆け降りてきて、ドアを叩きつけるように閉めた。慣れた目つきでグスタヴォの体をひと目見ると、たいして力もいらないというふうに抱えあげ、遠慮もなく荷台に放りこんだ。それから振り返って、そのあいだずっと立ちすくんでいたテレーザの目をまっすぐに見た。

「あなた。お名前は？」

「テレーザ……」と彼女は、ほとんど口から出てこない声で答えた。

大男は走ってピックアップに飛び乗り、タイヤをきしませて走り去った。そのときだった。血まみれのタオルをまだ手に握り、木の葉のように震えながら、テレーザは思った。すごい！　あんな電話があったら、もう誰にも止められやしない。

1.8 イナシオ

イナシオ・アルフォンソ・インペリオ・ジ・オリヴェイラ、誰からもセニョール・イナシオと呼ばれているこの男は、同じ町の多くの人々と同じように、マカパからほとんど出たことがなかった。誰もがそうであるように、彼もそれを、町が道路でほとんど完全に孤立しているせいにしていた。船は臭い、飛行機は信用できん。だが本当は、孤立が彼には好都合だったのだ。外の世界のことなど、ほとんど気にならなかったからだ。そりゃあ車でカウソエニまでは行ける、だが並んだ岩ふたつなんか、何度見りゃ気がすむ？　そりゃあジープならギアナへだって行ける、だがギアナなんか俺の知ったことか？

セニョール・イナシオは不運というものを信じていなかった。自分の人生は天上の誰かに注意深く見守られ、見張られていると信じていて、ブラジルではよくあることだが、自分の神が、日々を形づくる無数の儀式やしるしといつも混じりあっているのを見ていた。物事がうまくいっているとき、彼のいかがわしい商売がいつもより儲かり、ライバルの手下どもが彼の部下に近寄らないでいるとき、それはきっと、彼がその像を崇めてやまない聖母さまか、イエスさまか、もっとしばしばどこかの聖人のおかげだった。何かがうまくいかないとき、たとえば彼の商売に首を突っこみはじめた先住民の血の混じった新しい警官がやってきた年のように、それはいつも彼自身のせいだった。教会に十分に通わなかった、聖母さまの像を、ずっと色っぽい絵にしょっちゅう取り替えすぎた、あるいはもっと単純に、主がひっきりなしに送ってくるお告げを無視した。あの警官のときは、ひと月以上ものあいだ、一分たりともやまずに雨が降り続いた。あれはしるしだった、わかるべきだった、悔い改めに行かなければならなかったのだ。だが彼はそうしなかった、そして結局、あの警官を殺させるしかなかった。

グスタヴォのこの災難はしるしだった、彼はそう確信していた。神はこういうしるしを通していつも彼に語りかけ、正しい道にいるのかどうか、まちがっているのかどうかをわからせてくれた。だが神は、まちがっているとき、彼のおこないの何がまちがっているのかについては、あまりはっきりしなかった。彼は町の半分を（暴力で）厳しいが公正な威光でもって支配し、彼と同じように（太った）がっしりした四人の息子のいる、人に敬われる家族を持ち、地元のサッカーチームで税金のことを片づけていた。そこではさまざまな出どころからの（ひどく汚い）彼の金が流れこみ、魔法のようにきれいになるのだった。神はときにもう少しはっきり言ってくれてもよさそうなものだった。俺はどこでまちがってるんだ？

グスタヴォは、ボスとはちがって、外の世界に興味を持っていて、旅をしてみたいと思っていた。イナシオがこの若い右腕に惹かれるのは、そんな妙なところのせいでもあった。ときには自分の息子なのではないかと疑うことさえあった。何年も前にあれほど大胆に彼のもとで働きたいと言ってきたあの小僧の目には、同じ年ごろの自分を思い出させる何かがあった。愛人たちのことは、ひとたびそのベッドを離れればたいして気にかけなかったから、ありえない話ではまったくなかった。いずれにせよ、グスタヴォはその値打ちと忠誠を何度も証明してきた。セニョール・イナシオが自分の命を預けてもいいと思える、ただひとりの人間だった。彼を痛めつけた者は死んだも同然だ、そのことは誰ひとり疑ってはならない。そして彼を救った者には報いなければならない。

グスタヴォがなぜ自分の縄張りからあんなに離れたところにいたのか、正確なところはまだわかっていなかった。病院では鎮静剤で眠らされていた。だがセニョール・イナシオは、女のところへ行く途中だったのだと疑わなかった。それどころか、彼を襲った連中、ろくな死に方をしないことになる連中は、女の身内、父親や兄弟だったとしても不思議はなかった。いずれにしても、この女に会いに来たんじゃないのは確かだな、とイナシオは、目の前にいる女の逆毛を立てた髪型とあまり優美とは言えない体つきを値踏みしながら、くすくす笑って思った。

「テレーザ・アウヴィス・ミゲーニスさんですね？」

「はい、旦那さま」

イナシオはしわくちゃの手書きの紙を読んでいた。テレーザは、机の前の椅子に座ってよいという合図を待って立ったままでいたが、合図は来なかった。

「ピアウイー大通りにお住まいで、マダム・サムエラの美容院で働いていらっしゃる？」

「はい、旦那さま。すみません、でも、あなたは警察のかたか何かなんですか？」

テレーザの頭のなかでは、警官も無法者もほとんど同じものだった。ただ、ここは警察署には見えなかった。私立探偵だろうか？　映画みたいに？

「警察？　いえ、いえ。私は、勇気ある行いをなさった親切なご婦人にお礼をしたいと思っている、ただの善良な市民です。あなたはグスタヴォの命を救ってくださった、ご存じでしたか？　あなたがいなければ、あいつは死んでいました。あなたには借りができました、奥さん、なんでもお望みのものをおっしゃってください」

「お望みのものって、どういうことです？」

無法者だ、と彼女は決めた。こんなふうにふるまう人間は、無法者以外ありえない。

「グスタヴォは私にとって息子も同然で、私はとても気前のいい男です、なんでもおっしゃってください」

テレーザは呆然とした。その朝ルイーザとした会話が頭をよぎった。ルイーザは彼女を、とんでもない危険を冒したうえに見返りを何ひとつもらわなかった頭のおかしい向こう見ずだと言ったのだった。それから身震いしながら、前の晩の出来事を、あの血を流して傷ついた男を、そしてどうやって彼を助けたかを思い返した。

「電話」と彼女はほとんどひとりごとのように言った。

「電話をおかけになりたい？」とイナシオは彼女のことばを取りちがえて尋ねた。

「いえ、いえ。なんでも望みのものをくださるっておっしゃいましたよね。私、電話がほしいんです、グスタヴォさんのみたいな」

「グスタヴォさんのみたいな電話。なるほど」イナシオは引き出しを開け、こちらへ来るよう彼女に合図した。「お好きなのを選んでください。ほかに何かしてさしあげられることは？」

テレーザが引き出しをのぞくと、あらゆる形と色の携帯電話が少なくとも十台は入っていた。数か月前に見たあのすてきなSF映画で使われていたのにそっくりな、黒いバナナの形をしたのを見つけると、彼女の顔がぱっと輝いた。それを取ってもいいか目で確かめてから、彼女は答えた。「いいえ、これで十分です。ほどほどで満足することを知らなくちゃ」

1.9 口頭試問

アントニオの授業が、ふつうの体育の時間だったためしはなかった。

「今日は口頭試問をやるぞ」

アントニオはグローブをはめ、ゴールの真ん中に陣取った。最初にペナルティスポットに立ったのはジョアンだった。

「マレーフィールドはどこにある？」

「ええと……スコットランド？」

「正解」

ジョアンはいつもの力のないPKを蹴り、アントニオはなんなく止めた。たぶんそのせいもあって、彼は無意識のうちにジョアンにはいつもやさしい質問をしていた。

「ルーカス、審判なしでやるスポーツの名前を言ってみろ」

「フリスビー！」

「惜しい。でもその競技はアルティメットっていうんだ、残念、PKはなしだ」

ジョージが手を挙げた。「先生！」

「なんだ？」

「実は、アルティメット・フリスビーって呼んでる連盟もいくつかあるし、フリスビーって呼んでるところも二つくらいあるんです。どの国かは指定されなかったんだから、ルーカスの答えは正解だと思います」

アントニオは認めざるをえず、こうしてルーカスはPKを蹴ることができ、彼の逆をついて、成績簿に「プラス」の印を勝ちとった。

「手でボールに触っちゃいけないスポーツを言ってみろ、ラウル」

ラウルは、ひょろりと背の高い、枯れ枝みたいに細い色黒の少年で、やはり止めやすいシュートを蹴るひとりだった。「サッカー」

ラウルの後ろで、クラスメートの大半がくすくす笑いはじめた。ジョージは頭を抱えた。アレシャンドリが「アホか」と、みんなに聞こえるくらいの声でつぶやいた。

「サッカー、ラウル？　本気か？　ゴールキーパーはサッカーの一部じゃないのか？」

「すみません先生、そこまで考えてませんでした……」とラウルはしょげかえって答えた。彼にPKはなし。

アレシャンドリはクラスでいちばん強いシュートを打つ少年だった。試問のたびに、先生の決めた限度がどこにあるのか見るために、だんだん強く蹴るようになっていた。限度などなく、一部リーグと同じでなんでもありだとわかると、手首が震えるような砲弾を蹴り

こむようになった。だからアントニオはよく彼に、カーリングの規則やオーストラリアのスタジアムの名前のような、わけのわからない質問をした。だがその日、アントニオは調子がよかった。いいPKを止めてみるのも悪くないと思ったし、いずれにしてもアレシャンドリに一度思い知らせてやる価値はあった。

「じゃあ君が言ってみろ、アレシャンドリ、プレー中に手でボールに触っちゃいけないスポーツを」

「テニス！」とアレシャンドリは自信満々に叫び、もう助走をとりはじめていた。

「じゃあサーブのとき、どうやってボールを宙に上げるんだ？　足でか？　口でか？」

みんながくすくす笑った。

「でも先生、プレー中にって言ったじゃないですか、俺はてっきり……」

「サーブもプレーのうちだ、アレシャンドリ。残念だが、今日は君はPKなしだ」

ジョージがぼそりと言った。「アホか」

ラウルはもっと大きな声で笑ってしまった。アレシャンドリが振り向いて燃えるような目でにらみつけると、ラウルはすぐにうつむいたが、気にしなかった。先生とジョージが、あいつに身のほどを思い知らせてくれたのだ。

ジョージはアントニオの生徒のなかでいちばんよくできた。ふだん彼のシュートはこわくなかった。強烈な一発を蹴る力がないからではなく、彼のなかではいつもおふざけが勝ってしまうからだった。チップキック、ラボーナ、ヒールキック。一度は地面に寝そべって、頭でPKを蹴ったこともあった。いずれにしても、ジョージには歯ごたえのある質問がふさわしかった。だがいま、アントニオは彼のにやにや笑いに気づいて、知りたい気持ちを抑えられなかった。

「じゃあジョージ、君が教えてくれるか、誰もぜったいに手でボールに触れないスポーツはなんだ？」

「ホッケー」

そしてアントニオがうなずくのも待たずに、彼の左へミサイルのようなグラウンダーを蹴りこんだ。アントニオがボールを見たのは、もうネットに入ってからだった。

全員が機会を得ると、アントニオは「物語の教訓」のために、生徒たちを自分の前に半円に集めた。

「今日はジョージが、型にはまらずに考えることの大切さについて、いい教訓をくれた」

「でも先生」とアルヴァロが口をはさんだ。「型はものすごく大事だって、いつもおっしゃってるじゃないですか」

「もちろん。でも型は、君たちのプレーの土台なんだ。その上にほかのすべてが乗っかっている。それから、まさに、ほかのすべてがある。ピカソがずっとあんなふうに描いていたと思うか？　ピカソはまず古典的な技法を完璧に身につけて、それからやっとそれをひっくり返すことを自分に許したんだ。君たちも同じようにしなきゃならない。型をすっかり自分のものにするまで型を呼吸して、それからここぞという瞬間に――ザクッ！――

それをひっくり返して、モナ・リザを待ちかまえていたのにゲルニカのど真ん中に放りこまれた相手を呆然とさせるんだ」

ジョージは、モナ・リザはピカソが描いたものではないのに、どうして相手がモナ・リザを待ちかまえていなければならないのかと聞きたかったが、このときばかりは知ったかぶりをする場面ではないと考えて、こらえた。

「そして何よりも」とアントニオは締めくくった。「君たちに期待しているのは、型に従うべきときと、型にはまらずに考えるべきときを見きわめられるようになることだ。プレーするとき、試問を受けるとき、いつか有名なスポーツ選手になったとき。ゲルニカを忘れるな。同じ曲を二度かけるか、それとも決してくり返さないかを選ぶのは、君たち自身なんだってことを忘れるな」

で、曲がなんの関係があるのか、さっぱりわからなかったけど、とジョージは思った。

1.10 2000年問題

週に一度、アントニオは一時間の放送枠を使って、リスナーにインターネットの授業をしていた。情報科学を学んだことは一度もなく、家にパソコンもなく（でももうすぐ買うつもりだった）、ラジオで働きはじめるまではパソコンを使ったことすら一度もなかった。だが彼には好奇心が味方していて、放送前の三十分のパソコン使用も、積み重なれば「局のパソコンの専門家」（専門家というのは、電源を入れるのが彼だけという意味だった）になるのに十分すぎるほどだったし、知り合いのなかでいちばんのいじり屋になるのにも十分だった。もちろん、ヴィトルは別だ。ヴィトルは本物のいじり屋で、何か問題が起きると助けてくれたし、何よりおもしろいサイトやソフトの、何か月かあとに流行することになるものの情報を流してくれた。おかげでアントニオは啓蒙家としてだけでなく、先の見える男としても通っていた（もちろん、彼の番組を聞いている狭い輪のなかでの話だが）。

「今日は特大回ですよ、予告しておきます。メモ帳を用意しておいてください、これからお話しすることは忘れたくないはずですから。まずは驚くべき新しいものから始めましょう。好きな曲を、好きなときに、無料でダウンロードできるソフトです。名前はナップスター、仕組みはこうです。みなさんのパソコンにインストールして、音楽をどのフォルダに入れているかを教えてやる。ほかのユーザーもみんな同じことをして、ナップスターはその人たちのフォルダを、世界じゅうのパソコンのフォルダを探させてくれるんです！　聞きたい曲が見つかったら、クリックひとつで、二十分ほどでみなさんのパソコンに入っています。信じられない話に聞こえるのはわかります、でも本当だと証明するために、試してみましょう。最初に電話をくださったリスナーに好きな曲を選んでもらいます、私がそれを探して、番組の終わりまでにいっしょに聞けるかどうかやってみましょう」

「もしもし？」

「アントニオ？」

「やあ、テレーザ」

「アントニオ、すっごくすてきな新しい電話を手に入れたの、見せたいくらい。それでかけてるのよ、聞こえる？　ちがいがわかる？」

テレーザはパソコンを使ったことが一度もなく、遠くからちらっと見たことがあるくらいだと、彼にあっけらかんと話したことがあったし、使いはじめるつもりもなさそうだった。でも、何度も生放送で言ってアントニオを赤面させたように、アントニオはとてもいい声をしているので、こういう退屈きわまりない話でも聞いていて楽しいのだった。

「それで、どの曲を探してほしい？」

「ええーっ、どうしようかしら。カエターノ・ヴェローゾが大好きなんだけど、世界のほかのところじゃ知られてないかもしれないわね。本当に世界じゅうのパソコンを探せるの？」

「ああ、テレーザ、どうやらそうらしい」

「ジャマイカでも？」

「うん」

「まあ、どきどきしちゃう。じゃあ……楽しい曲がいいわね。『Could You Be Loved』なんてどうかしら？　ボブ・マーリーさんのパソコンとどうやってつなぐのかはわからないけど、だってとっくに亡くなってるでしょ。ご家族かしら？　とにかくよろしく伝えてね、あなたにもよろしく、アントニオ」

「よし。『Could You Be Loved』をダウンロードにかけて、そのあいだに二つ目のニュースへ移りましょう。残念ながらこちらはいいニュースではありません、それどころかとても心配な話です。2000年問題のことは前にも何度かお話ししましたね。パソコンのプログラムの不具合で、どうやら新しい年が始まると、2000年を1900年とまちがえてしまうらしいんです。それがどうした、とおっしゃるでしょう？　お隣のセニョール・バストスが酔っぱらって帰ってきて金曜日を土曜日とまちがえても、私には何も変わりません。でも、専門家たちが口をそろえて、情報処理に頼っている多くの仕組みがエラーを出したり、止まってしまったりするかもしれないと言っている記事をいくつも読みました。私のパソコンが止まるなら、まあしかたない。でも銀行のパソコンが止まって、みなさんの口座から私の口座にお金を移してしまったら？　あるいは飛行機に積まれたパソコンが止まったら、どうなります？　今日読んだ記事では、ある専門家が、インドやパキスタンのような核兵器を持っている国で何が起こりうるか、ひどく心配していると言っています。リオデジャネイロの新年よりパキスタンの新年をお祝いするつもりだ、なぜなら、私たちが後者を祝えるまで生きていられるかどうかは前者しだいなのだから、と。私は思うんです、パソコンのエラーひとつで核爆撃が起きるかもしれないなんておびえなきゃならないなんて、私たちはいったいどんな世界をつくってしまったんでしょう？　いずれにせよ、専門家たちは解決策を探しているそうです」

アントニオは間奏を流すためにひと息入れた。話題に合わせて、ピンク・フロイドの『Two Suns In The Sunset』とスティングの『Russians』をかけた。

「探すといえば、すてきな話に戻りましょう、人類がその気になればどれほど創意に富めるかという話に。みなさんが通りで私を呼びとめて、いったいどこでこういう情報を仕入れてくるのかと尋ねることがありますよね？」ラジオで働きはじめてから、そんなことはたった二回しかなかったが、「二回」なら複数形を使ってもいいだろう。「まあ、もちろん、いわゆる検索エンジンを使っているんです。ほんの数日前までは、みなさんと同じようにアルタビスタかヤフーを使っていました、でも新しいのを見つけたんです。ものすごく変な名前で、グーゴル、綴りはG・O・O・G・L・E、そしてこれがすごいんです、請け合います。ことばをひとつ入れると、出てくる十の結果のうち、少なくとも七つか八つはみなさんの探しているものに関係がある、まちがいありません。しかも速い。もちろん、インターネットの進化はとても速いので、たぶん来年にはもっといいのが出てくるでしょう、でもそれが出てくるまでは、この名前を書きとめて使いはじめてください、後悔はしませんよ」

パソコンを確かめると、実験がうまくいったのがわかって彼はほほえんだ。

「今日はここまで。また次回お会いしましょう。でも帰る前に、実験の途中でしたね、どんな実がなったか見てみましょう」

アントニオはマイクを切り、『Could You Be Loved』をかけ、音響係のパコに挨拶し、ジョアンに挨拶して、満足して帰っていった。

1.11 マカパ・フチボウ・クルビ

ひどい出だしのあとにレアル・アマパーのユースで続いた二年間の成功が、アントニオにマカパ・フチボウ・クルビへ、それもトップチームの監督として戻る扉を開いた。だがトップチームでは、事はすぐに難しくなった。十五歳の少年たちを相手にやっとのことで築いたカリスマは、大人たちを前にした途端、とりわけかつてのチームメイトたちを前にした途端、あっというまに蒸発してしまった。ミニマッチ方式はあらゆる階層でひどく評判が悪く、アントニオの用語は誰の心もつかまなかった。エドゥアルドの心さえも。エドゥアルドは実際的な男で、数字を愛し、アントニオには理解できず、理解する気もない傾向を統計のなかに読みとっていた。

最初のシーズンは可もなく不可もなく終わった。選手たちは試合ではアントニオの助言に耳を貸さずに自分たちで勝手にやり、ミニマッチにはしぶしぶつきあったが、本格的な反乱にまで至ることはなかった。結局のところ、楽しむためにやっているのであって、金が動くわけでもないし、あんな監督にもかかわらずいくつか試合に勝てるなら、選手たちにもいくらかは値打ちがあるということだった。

「方式はうまくいってるんだ」と自信をなくしたアントニオはエドゥアルドに言った。「君たちは、僕には明らかなことを見ようとしないだけだ。うまくいってる。統計は何て言ってる？　僕らは良くなってるって言ってるだろ？」

「統計が言ってるのは、練習方式にもかかわらず、選手たちが前よりいいプレーをしてるってことだ」

「どうしてそんなことが言える？　僕は選手たちが僕なしでやれるように鍛えなきゃならない、それが僕の目標だってずっと言ってきただろ？　それで彼らはちゃんと身につけつつある、それだけのことさ」

ふたりの監督のあいだの信頼関係はいっこうに生まれず、選手たちとアントニオのあいだのそれは存在すらしなかった。エドゥアルドはチームの重みをすべて自分の肩に感じていた。チームはシーズンの終わりに五位になった、半分失敗のようなものだ。

だがそれは一年目のことだった。摩擦やわだかまりはあったものの、幹部はアントニオをもう一年続けさせることに決め、事態はゆっくりと落ち着いていった。アントニオの方式が何かいいことをもたらしたと公に認める者は誰もいなかったが、翌年、チームは実際いつもよりよい成績をあげ、一次リーグを一位で、二次リーグを二位で終え、ノックアウト方式の対戦に勝ち続けて、とうとう準決勝に進んだ。エドゥアルドはゆっくりとアントニオの性格のいくつかの面を、そしていくらかは彼の知識も、評価するようになっていた。とりわけ、たえず興味を持ち、調べ、学ぼうとするその姿勢を。

アントニオにとって、練習のために何を準備したかをエドゥアルドに話すのは、いつだって簡単ではなかった。彼は、自分の見るところチームが相手を困らせることのできる場面や、相手がマカパを困らせようとしてくるだろう場面のリストをつくり、それをエドゥアルドに見せて下検討してもらうのだった。

「今日は裂けた線路をやらなきゃ、それからタコも少しは必ず、右で小舟をいくつか、それにもし早めにリードできたときのために要塞はぜったいに試しておかないと、ついでに狂った射手もいくつか」

「裂けた線路？」エドゥアルドはアントニオの用語にすっかりなじんでいるわけではなかった。新しい名前が毎週生まれるせいもあったし、すべての呼び名を本気で覚えようとしたことが一度もないせいもあった。

「そう、裂けた線路、キーパーのロングキックに、ミッドフィールダーとフォワードが全員前へ走りこむやつだ」

アントニオは、たぶんいろいろな小コートの区切り方を考えるのに集中していたせいで、エドゥアルドの顔に浮かんだ当惑の表情に気づかなかった。

「ロングキック？　冗談だろう？」エドゥアルドの口調はひどく真剣になっていたが、アントニオはそれに気づいていないようだった。

「うん、いや、ちがう。それに、いま思いついたけど、ピラニアも少し」

「待て、アントニオ。日曜日は準決勝だろう？　お前が準決勝にどんな問題を抱えてるのか知らないが、マカパは六年も準決勝に進んでないんだ。それなのにロングキックなんかで俺たちの時間をむだにしたいのか？」

「エドゥアルド、君がわからないのは、わかろうとしないからだ。でもそれは君だけの問題じゃない、みんなの問題だ、政治家たちだってそうだ。君たちは勇気を持つことを拒んでいる、慣れていることの先へ行ってみることを拒んでいる、みんな自分の立場に立てこもって、本気で結果を出したいと思っていない。生き延びる、君たちがしたいのはそれだけだ、ただ生き延びること。そうやって、人間の本性そのもの、進化しようとする自然な衝動を否定しているんだ。僕たちは進化するように、いつも新しいものを探すように、良くなるようにプログラムされている。君たちはこの時代に生きていない、過去に生きているんだ」

「君たちって誰だ、すまないが？　誰が過去に生きてるって？」

「ものの言いようだよ。今年イピランガはロングキックから三点取られてる、どうして練習で試しちゃいけない？　相手の明らかな弱点を突こうとして何が悪い？　もし、そうだな、第二次世界大戦のとき、アメリカ人が相手の弱点を突くのを拒んでいたらどうなってた？　ナチスの世界政府がいいっていうのか？」

「弱点ってなんだ？　ナチス？　何を言ってるんだ？」

「とにかく問題は、君たちが功績を見分けて正当に評価できないことだ、いつも、怪しげな理屈にもとづいてでも、客観的に劣った知識にもとづいてでも、批判する権利があると思ってる……」

エドゥアルドは「客観的に」ということばのところでアントニオの話を聞くのをやめ、自分のメモに目をやり、時計を見て、あちこち片づけて忙しくしていようとし、最後に、アントニオの声が鉄筋コンクリートの梁のあいだに響かなくなると、言った。「今日はお前が言うんだな。選手たちにはお前が話せ」

「十一月十二日だ。信じられるか？　もう十一月十二日なんだ。1999年のリーグ戦の開幕？　昨日のことみたいだ。君たちもそう思わないか？　ものすごく気合いの入った時期もあったし、まあまあの時期もあった、いい試合もしたし、そうでもない試合もした、でも僕たちはここにいる」

ダンテとディエゴが、それぞれロッカールームの入口のドア枠に肩をもたせかけて彼を見ていた。練習や試合の前はいつもそうなのだが、たばこを吸っていて、アントニオのいつもの演説を聞かされる退屈を伝えあうように、すばやく目くばせを交わしていた。何年もチームメイトだったから、彼の演説ならよく知っていたのだ。ダニとリカルドは黙ってうなずきながら、ゆっくりスパイクの紐を結んでいた。まちがえようのない金髪のマウリシオは、バッグのなかで何かを探すふりをし、デオドラントのスプレー缶を手にとってはポケットのひとつに戻し、新しいボディソープのふたがしっかり閉まっているか確かめ、ファスナーをひとつ残らず丹念に点検した。

「僕たちは準決勝まで来た。日曜日にシーズンを懸けて戦う、先週の日曜日にも懸けて戦ったように、二週間前の日曜日にも懸けて戦ったように。ただ、あさっての相手はイピランガだ」

「あのクソったれのイピランガ！」とキャプテンのダニロ・ジョゼが口をはさみ、どっと笑いが起きて、アントニオはいらだたしげにそれを受けとめた。

「敬意だ、みんな、敬意。イピランガみたいな強いチームとピッチに立つのに、相手に敬意を払わないわけにはいかない。スポーツは何よりもまず人生の学校なんだ、やることなすことといつも自分たちが一番だなんて思っていちゃいけない」

「でも監督」とまたダニロ・ジョゼの声がした。「俺たちが一番ですよ！」

「それはどうかな、ダニロ、それはどうかな」

話しながら、アントニオは色チョークで大きな石板の黒板に線を引いていた。黒板にはあらかじめ四つのサッカーコートが印刷されていて、ミニマッチ用のコートを区切る線も入っていた。

「裂けた線路」の型を描く番になると、選手たちのあいだにざわめきが広がった。チームの代弁役になったのは、またもダニロ・ジョゼだった。「監督！　その型は知りませんよ、なんていうんです？　ゆでた本？　切れたトイレットペーパー？」

笑い声がまたロッカールームを満たした。

「どうでもいい。いまさら名前はどうでもいい。大事なのは、君たちがこの場面を練習することだ。イピランガは今年この場面で三点取られてる、だから君たちにはこれを練習してほしい。相手に敬意を払うことと、相手の弱点を知ることは矛盾しない。ほかの者の弱点について考えることを学んでこそ、自分たちの弱点に気づいて直すことができるんだ」

「どの場面です、監督？」

「キーパーのロングキックから、攻撃ゾーンでプレスをかける」

選手たちは、半ばあきらめ、半ばおもしろがって顔を見あわせた。なかにはちゃんと聞きとれたかどうか、あまり自信のない者もいた。ロッカールームの沈黙はだんだん重くなり、とうとう誰もほとんど息もできなくなった。その張りつめた空気を破ったのはダニロ・ジョゼで、彼はいきなり立ちあがると、「エドゥアルドと話してくる」とつぶやいてロッカールームを出ていき、すぐあとに子分のエンリケとルーカスが続き、それからぽつりぽつりと残りの全員が続いた。

いちばん若いひとりのチアゴだけが、指示を待って座ったままでいた。歯に矯正器具をつけ、八十年代のテニス選手みたいに見えるヘアバンドを巻いて、満面の笑みを浮かべてい

たので、アントニオは彼が状況をよく飲みこめていないのではないかと疑った。少しすると、整備士のつなぎを着たアマウリがロッカールームに飛びこんできた。「すみません、すみません、バイクが壊れちゃって、すみません……」

ロッカールームが空っぽなのに気づき、選手たちはもうみんな外のピッチに出ているのを見かけたのだと思いあたって、そのことばは途中で宙ぶらりんになった。

「何があったんです？」と彼はおずおずと尋ねた。

「なんでもない」とアントニオは答えた。「なんでもない。早く着がえろ、やることがあるんだ」と言い残して、彼はドアから出ていった。

1.12 準決勝

1999年11月14日の朝、サン・ジョゼ教会の扉は、いつにない人の出入りを目にした。日曜日の教会がふだん閑散としていたわけではない、むしろその逆だったが、その日は、その教区に一度も足を踏み入れたことのない多くの人々が、好奇心にかられて扉の前に現れたのだ。

マカパ・フチボウ・クルビのサッカーチーム全員が祭壇の前に並んでひざまずき、司祭がひとりひとりに祝福を与えてまわるのを、会長のセニョール・イナシオ・インペリオとアシスタントコーチのエドゥアルドが注意深く見守っていた。

「あいつはどこだ？」とイナシオはひどくいらだって尋ねた。

「わかりません」とエドゥアルドは答えた。「電話したら来るとは言ってたんですが、正直、あまり乗り気じゃなさそうでした。アントニオがどういう男か、ご存じでしょう」

「いや、知らんね」

「その、説得するのが難しい男なんです」

「いずれにしても、顔を出したほうが身のためだ。災いが降りかかってくるのはごめんだろう？」

「ええ、ええ、もちろんごめんです……」とエドゥアルドはつぶやいたが、彼のほうもあまり確信はなかった。

セニョール・イナシオが恐れていた災いは、夜明けのすぐあとに、おそろしい水上竜巻という形で姿を現していた。それはマカパの小さな港から数百メートルのところに立ちのぼり、一時間近くもそこに不気味にとどまって、そのあいだに恐慌の波が町じゅうへ油のしみのように広がっていった。「縁起でもない！」というのがいちばん多い声だったが、「みんな死ぬんだ」とか、いささか大げさに「世の終わりだ」という声もあった。

マカパで水上竜巻はそれほど珍しくない、運の悪い年には二つ三つ見られることもある。この水上竜巻を特別なものにしていたのは、そのしつこさだった。ふつうは数分で竜巻は消え、海のほうへ遠ざかっていく。ところがその十一月の日の竜巻は立ち去ろうとしなかった。そこにとどまって回り続け、おそろしい渦を巻き上げ、海岸に近づいたかと思えば少し戻り、おびえる市民たちをからかっているかのようだった。

「あれが家に襲いかかってきたら大変だ！」

「家に当たらなくたって、もうそれだけで大変だ。あれは神さまの目で俺たちを見ている不運なんだ！」

などなど。

アントニオは苦しい一夜を過ごしていた。試合の型を考えては考え直すことに費やした長い晩のあと、居間の座り心地の悪いソファで、服を着たまま眠りに落ちてしまった。夜明けに目を覚ますと、不自然な姿勢で体を丸めていて、前の晩のメモをまだ手に握りしめていた。目覚めには背中の痛みと頭の不快感がつきまとい、コーヒーを飲んでもシャワーを浴びても消えなかった。前の晩の紙を片づけるあいだの話し相手がほしくてつけたラジオで水上竜巻のことは知ったが、たぶんもう準決勝のことで頭がいっぱいだったせいで、そ

のニュースは彼のなかになんの跡も残さなかった。少なくとも、エドゥアルドから電話があるまでは。

「もしもし、アントニオか？」

「エドゥアルド！　どうした？」

「ニュースを聞いてないのか？」エドゥアルドの声は妙に興奮していた。

「ニュース？　なんのニュースだ？」

「水上竜巻だよ、港のすぐ外に水上竜巻があって、もう一時間近くそこにいて、立ち去ろうとしないんだ！」

「心配することなのか？　当局は何て言ってる？　いつもみたいに、しばらくしたら北東のほうへ離れていくんじゃないのか？」

「一時間近くそこにいるんだぞ、わかるか？　ふつうの水上竜巻じゃない！」

「じゃあ、なんなんだ？」

「ここじゃみんな、世の終わりだ、不吉なしるしだって言ってる」

「で、君はそれを信じてるのか？　科学の人エドゥアルドが、急に迷信深くなったっていうのか？」

「迷信深いのは俺じゃない、立ち去ろうとしない水上竜巻のほうだ！　とにかく、セニョール・イナシオが俺たちみんなをクラブハウスに呼び出してる」

「クラブハウスに？　そっちへ行くには三十分かかるんだぞ、なんのために呼び出したんだ？」

「不運のためだ。つまり、不運と闘うために」

「で、どうやって闘うつもりなんだ、聞くけど？」

「いいか、アントニオ、セニョール・イナシオがお前に来るよう伝えろって言ったんだ、質問はあとで本人にしてくれ、いいな？」

あとになって事の次第を振り返っても、「祝福を受けに行こう」と口にしたのが誰だったのか、はっきり思い出せる者はいなかった。確かなのは、イナシオの目が輝き、二度言う必要はまったくなかったということだ。エドゥアルドは心のなかで、それが自分だったことをよくわかっていたし、ますます張りつめていく状況を切り抜けるためにそう言ったのだということもよくわかっていた。不吉な前兆に絶望する会長、それを真に受けていいのかどうか迷う選手たち、緊張がほどけないまま過ぎていく時間、そして姿を見せないアントニオ。

FAB大通りのマカパのクラブハウスからサン・ジョゼ教会までは数百メートルしかなかったが、その奇妙な一行が人目を引かずにすむはずもなかった。サンタ・リタ地区の住民にとって、十一月十四日は奇妙な日曜日だった。不吉な水上竜巻、それに続いて、緑の短パンに緑とオレンジのシャツを着た大の男たちの行列が、暗い顔をして、なかには泣いている者さえいて、町の中心の小さな教会へ向かっていくのだ。

アントニオはどうしたものか決めかねていた。会長の呼び出しをすっぽかしたくはなかったが、理由がくだらないものなのは確かだったし、それにマカパのクラブハウスは家から自転車で三十分かかるので、そこまで行けば試合の準備がまるごとふいになるのはまちがいなかった。そして最後に、彼の頭の奥のほうで警報が鳴っていた。それは「準決勝」ということばの炎の文字でできていた。

アントニオはリーグ戦向きの監督だった。相手を研究し、シーズンという長い時間を目いっぱい使って修正し、改善していくのが得意だった。だがノックアウト方式、それはだめだった。ノックアウト方式の試合のあいだは、彼のあらゆる不安が形をとって現実のものとなり、決勝が近づけば近づくほど脚が震えた。

ベスト16、最初の迷い。準々決勝、批判的な内省。準決勝、麻痺。毎回、彼の頭は、あのバレーボール世界選手権の準決勝、ブラジルが負けるはずのなかったあの試合で経験したフリーズの瞬間を味わうのだった。それなのに。

サッカー選手としての最後の年も、最後の試合は準決勝だった。自分自身から逃げだすためならなんでもしただろう、実際そうしたように、くるぶしのちょっとした違和感をもっとずっと深刻なものに見せかけることさえも。

アントニオが準決勝に何か問題を抱えているのは明らかだった。

そして1999年のリーグ戦の準々決勝が、彼の確信を揺るがすには楽すぎる対戦だったとすれば、十一月十四日の準決勝は、強くて意欲に燃えたチーム、イピランガが相手なのだった。

責めを負うべきは、司祭が聖具室の戸棚からあわてて引っぱりだしてきた、あまり新しいとは言えない聖体のパンなのか、それともすっかり酢になっていたワインなのか、それはついにわからなかった。とにかく、マカパの選手たちは祝福のあと、文字どおり別人になって出てきた。腹を押さえる者、めまいを感じる者、目がかすむ者。そこに天罰の力よりも陰謀のにおいを嗅ぎつける者もいただろう。

そしてセニョール・イナシオの鬱々とした怒りが全員にうつっていった。理性的なエドゥアルドでさえ、アントニオの不在は、ずいぶん前から何かと邪魔をしてやまない運命のまたひとつのしるしなのではないかと考えはじめていた。

「なぜ主は」とイナシオはわめいた、「わしらにばかりつらく当たるんだ？　イピランガの連中はみんな飢え死にしかけてるファヴェーラの出だからか？　それでじゅうぶん主のお気に入りになれるってのか？　サンタ・リタの若い者だって金の上を泳いでるわけじゃないぞ！　もっと公平にこの対戦を仕組むやり方はないのか？　われらが主なる神のことは、ときどきさっぱりわからん！」

運命が決めたことを、人間が変えるのは難しい。マカパの最初の選手たちがスタジアムに着いたとき、イピランガの選手たちはもう全員がウォーミングアップを半分終えていた。マカパの選手たちの目と腸には、どうにも抗えない突然の不調が宿っていた。チームメイトたちがよく冗談めかして「おそろしく正確な」シュートの持ち主と呼んでいたキャプテンのダニロ・ジョゼは、ノックアウトされていた。あとで聞いた話では、家に帰ってトイレに入るのがやっとで、試合のあいだじゅう、痛みに体をふたつに折って、そこにこもっていたそうだ。

イナシオは、ちょうどそのとき着いたアントニオを即座に解任する寸前だった。エドゥアルドが割って入ったおかげで、許しがたい無礼に対しては手ぬるいとさえ思える処分は先送りになった。試合開始のホイッスルが近づくにつれて神経がどんどんもろくなっていっ

たアントニオ自身は、試合のあいだじゅう、ただひとつのことばしか考えられなかった。準決勝、準決勝、準決勝。

試合は？　1999年のアマパー州選手権の準決勝、十一月十四日の焼けつく午後におこなわれたその試合では、とてつもなく強く、とてつもなく意欲に燃えたイピランガが、マカパFCの亡霊のようにしか見えない選手たちを蹴散らした。反論の余地もない4対0。

「世界一美しいスポーツの本質を魂ではなく型のなかに見る者たちに、ついに踊るサッカーが勝利したのだ」と、翌朝のガゼータ・エスポルチーヴァ（副題「真実の新聞」）は書くことになる。

「呪いだ」と言う者もいることになる。

1.13 放送終了

階段を上りきったとたん、アントニオは何かがおかしいと気づいた。ドアが開いていて、踊り場からもう散らかりようが見えた。散らばった紙、からまったケーブル、床にひっくり返ったイザベルのペン立て。部屋の真ん中へ引っぱりだしたミキサー用の小さな椅子に座って、パコが頭を抱えていた。アントニオが入ってきたのにも気づいていないようだった。

「パコ、いったい……いったい何があったんだ？」

「泥棒だ」と彼はアントニオのほうを見もせずに答えた。「トイレの小窓から入ったにちがいない、下のガレージの屋根に梯子でもかけたんだろう、知るもんか。どうやって入ったかなんて、どうでもいい。何もかも持っていかれた」

パコは目を上げた。怒りと茫然とで潤んでいた。「何もかもだ、少しでも値打ちのあるものは全部。ミキサー、パソコン、マイク、ヘッドホン、アンプ、全部だ。物置に何年も放ってあった古いCDの箱まで」

アントニオは立ちすくんだ。文字どおり身ぐるみはがされた部屋部屋を見まわした。残っているのは椅子と机と開けっぱなしの戸棚、壁のポスター、それに泥棒たちが床に置いていったケーブルが二本ほど。

ジョアンが目を伏せて隣の部屋から現れた。片手に電源タップ、もう一方の手に空っぽの菓子袋を持っていた。「ひどいもんだ、アントニオ、ひどいもんだよ。いつになったら立ち直れるのやら」

「立ち直れるなら、の話だ、そうと決まったわけじゃない。いや、はっきり言っちまおう、立ち直れやしない、ラジオは終わりだ、おしまいだ、クソみたいな幻想を抱くのはやめよう」

「なあ、パコ、そんなこと言うなよ……何か方法は見つかるさ、スポンサーを探そう……」

パコは返事すらせず、いらだたしげな身ぶりをちらりと見せて首を振り、また頭を抱えた。ミキサー、絶縁テープと余りもののケーブルで彼が愛情こめてつなぎとめていたあの古くて大きな箱は、彼にとって息子であり、恋人であり、犬のようなものだった。彼は才能のある音響係で、ときどきアメリカかヨーロッパへ行って一旗あげる話をしたが、結局いつもここに残って、自分のラジオを布の人形みたいにかわいがっているのだった。

アントニオがたいした望みもなく、彼をなぐさめることばを何か探していると、水曜日に彼のあとで放送に出るイザベルが入ってきた。いや、入ってはこなかった。目を見開いて、敷居のところで凍りついてしまった。

「ど……泥棒……？」と彼女はつぶやき、バッグを床に落とした。

どう身を処していいのか明らかにわからずにコンセントのプラグを手にうろうろしていたジョアンが、がっかりしたように両手を広げてそれに答えた。

「知らせてくれればよかったのに、警察に電話するとか、なんでもいいから、何かしてくれればよかったのに！」

「一時間前に来たらこうだったんだ、イザベル。何があったのか飲みこむ暇もなくパコが来て……」彼は声をひそめ、音響係のほうへ首をしゃくった。「イザベリータ、見せたかったよ、あいつ、事態がわかったとたんにすっかり取り乱しちまって、あんなのは見たことがない。窓から身を投げるんじゃないかとひやひやしたよ、電話どころじゃなかった」

ちょうどそのとき、電話が鳴った。がらんとした部屋に響きわたる呼び出し音に、みんな跳びあがった。

「もしもし？」

「テレーザ？」

「アントニオ！　どうしたの？　ラジオをつけてもう二十分になるのに、あなたたちの局が入らないのよ。最初は私のラジオが壊れたんだと思ってぞっとしたんだけど、ほかの局で確かめてみたら、まあ、ほかの局ときたらなんて番組をやってるのかしら、ほんとに比べものにならないわよ。あなたたちがマカパでいちばんのラジオよ、私、いつもルイーザにそう言ってるの、なのにあの人ったら、アメリカの俳優のふりをしてるあの男の番組ばっかり聞いてて、あんなのよく聞けるわね」

「テレーザ、悪いけど……」

「あら、話がそれちゃった。だから、どうしたのって聞いてるの。どうして放送してないの？」

「テレーザ、どうやらルイーザの番組を聞くのに慣れてもらうしかなさそうだ」

「どういうこと？　何が言いたいの？」

「つまり、ラジオはもうないってことさ。何もかも盗まれたんだ」

イザベルはたばこが一本吸いたいと言い出し、アントニオは――年に一度か二度しか吸わなかったが――すっかり動揺していたので、つきあうことにした。ふたりは歩道に腰をおろした。イザベルは首を振ってばかりいて、目に涙を浮かべ、自分でも怒っているのか打ちひしがれているのか、どちらが大きいのかわからなかった。「もったいない、もったいない……すごくうまくいってたのに……ほんとにいい感じだったわよね、アントニオ？　ちゃんとした聴取者がつきはじめてたのに、それがいまは、いまはこれ」

「そんなふうに言うなよ、パコみたいだ、なあ、君はそんな悲観的な人間じゃないだろ。なんとかするさ、スポンサーを見つけよう、いまにわかるよ」

「そうね、スポンサー。追い払わなきゃならないくらいうじゃうじゃいる蚊みたいに言うのね。でも、たとえそんなに運がよかったとしても、探して、見つけて、全部また動かすまでに何か月もかかる。そして五、六か月後に、聴取者の誰が私たちを覚えてるっていうの？」

「でも、ほら……」

「でも、じゃないの。このクソみたいな町にいいものがひとつあったとしたら、私が本当に好きだったものがひとつでもあったとしたら、それがこの、私たちのばかみたいなちっぽけなラジオだったのよ。小さいなりに誰かの話し相手になってたのかもしれない、ほん

のいっときでも誰かの悩みを軽くしてたのかもしれない、この町にとって大事な、小さな魂みたいなものを持ってたのかもしれない。それがいまは、さあ、何も残ってない」

アントニオは何を言えばいいのかわからなかった。イザベルの言うことはまちがっていなかったが、彼女がこんなに打ちのめされているのを見るのはつらかった。ふいに、自分でもまったく意識しないまま、自分がこう言っているのが聞こえた。「なあ、ここで嘆いてたって、たいして役には立たない。何か飲みに、どこかで夕飯を食べに行こう。どうせ自分たちを哀れむなら、せめてビールでも前にしてやろうよ」

自分がそんなことばを口にしたことにまだ驚いていた――ふだん女の子にこんなに率直なほうではなかった、むしろその逆だった――が、イザベルがまったく思いがけず、短パンのほこりを払いながら立ちあがってこう言ったときには、もっと驚いた。「そうね、いいわ。誘われてた場所があったんだけど、放送があると思いこんでたから断っちゃったの。そっちにはもう遅いけど、ひとりで夜を過ごしてくよくよ考えるのはいや。行きましょう。どこか心当たりはあるの？」

アントニオの頭は一瞬まっ白になった。ほとんど毎晩外で食べているのに、店のひとつも思い浮かばなかった。イザベルが問いかけるように彼を見ているあいだ、必死に記憶をひっかきまわして、やっとアルマンジーニャの食堂を引っぱりだした。上品な店とはほど遠いが、少なくとも料理はうまかったし、どのみち思いつけるのはそこしかなかった。

こうしてふたりは歩きだした。けだるいパパイヤ色の太陽が、歩道の埃の上に、イザベルの縮れた髪の上に、からっぽの部屋にひとり残されて最後に残ったケーブルをなでながら身も世もなくすすり泣く気の毒なパコの上に、そして、アントニオがもうそれほどいい考えだったのか疑いはじめていた夕食の誘いという思いつきの上に、沈んでいった。

ふたりは長いこと歩いた――もっと近かった気がしたんだがな、あの食堂は――そのあいだにアントニオはここぞとばかりに、まさにその瞬間に組み立てたばかりの理論をイザベルにこまごまと説明した。ラジオ番組にはある種のスポーツ活動、とりわけサッカーと似たところがあり、たとえば手漕ぎの小舟の型は、もちろん置きかえたうえでだが、六時のニュースの運営にも当てはめられるのだ、という理論だった。イザベルは物思いにふけって歩いていた。

アントニオは、彼女がこれほど集中して興味深そうに聞いてくれるのにすっかり満足していた。頭のいい女の子だ、わからないからといって見下したような態度をとってみせる、あの年寄りのカピバラのエドゥアルドとはちがう。

たまたま腰が触れあって、夕食のあとのことがふと頭をよぎった。ちょっと寄っていかない？　そうね、もう少しだけいっしょに飲もうかしら、ほんのちょっとだけよ。散らかっててごめん、ベッドもまだ整えてなくて……いやいや、まさか、彼女を家まで送って、いい友だちとしてラジオの話をしながら別れて、それでおしまいさ、考えるだけむだだ。

それより、型を持つことと型に縛られることのちがいを、ちゃんと説明し忘れたかもしれない。説明しておいたほうがいい――ホッケーの例でも出して――でないと、話が完結しないかもしれない。

道中ずっと口数の少なかったイザベルは、やっと着いてテーブルにつくと、それと同じくらいおしゃべりになった。食堂のせまさにも、オリシャの絵やソースの飛び散ったしみや新聞から切り抜いた俳優の写真で飾られた黄ばんだ壁にも、まったく気をとめていないようだった。アントニオのほうは――何度もそこへ来ているのに――初めてそれに気づき、なんとなく気まずくなった。女の子を夕食に連れてくるのに、なんて店だ、お前はバカか、と彼は思った。紙ナプキンでこっそりフォーマイカのテーブルをこすって正体のわか

らない脂のしみを消しながら、グラスの怪しげな透明度に彼女が気づかないよう願いながら、隣のテーブルの三人の男と三本のカシャーサが吐く下品な悪態を彼女が耳にしないよう祈りながら。

料理はいつもどおりうまかったが、イザベルは食べものにも注意を払っていないようで、放送中みたいにまくしたてた。政治のこと、ラジオのこと、女友だちのこと、毎晩つけている日記のこと――そこではちょっと気がそれたかもしれない――旅のこと、なかでも旅のこと。

「だってね、アントニオ、私は一度も旅をしたことがないけど、ずっと、ずっと前からそれが夢なの。世界を見るために、いろんな人と知り合えるように、外国語を学ぶの。それに、本でしか見たことのない自然や建築のすばらしいものを目の前にする、ねえ、そのためなら何を差し出したっていい」

彼女はカイピリーニャをもうひと口飲み、アントニオが口をはさむ前に、興奮してまた話しはじめた。

「ねえ、もしかしたら今度のことにも、結局は意味があるのかもしれない。ここへ来るまでの道でずっと考えてたの、ずっとそのことばかり考えてた。ひょっとしたら、ラジオのことは、何かの――ああ、神秘的なことを考えないで、私がそういうタイプじゃないのは知ってるでしょ――つまり、何かが、変わるとき、ちがうことをするときが来たって感じさせてくれてるのかもしれない、わからないけど」

「その、君の言ってることはすごくすてきだよ……ヨットを持ってる友だちが言ってたことを思い出す。『風が変わったら、こっちも針路を変えなきゃならない、でないと岩に乗りあげる』って。それがずっと心に残っててね、というのも……」

「そうなの！　まさにそれ、私の言いたいことを完璧に言い表してることばだわ。ねえ、私はびた一文持ってないし、もうラジオもない、でもたぶんだからこそ、ほら、私のなかで何かが花開いたの、熱い気持ちが、未来への信頼が、わからないけど。転機が来たんだと思うの、新しい人生が、わかる？」

その気持ちのほとばしりに、その生き生きした様子に、スパイスのきいた料理で上気した頬に心を打たれて、アントニオの頭に、ここまで来たら夕食のあとのことをほんのちょっぴり考えてもいいのかもしれない、という考えがひらめいた。ビールは一杯ではすまなかったし、もうカイピリーニャも二杯目だった。彼女は熱っぽく火照っていて、燃えるような目で彼を見つめていた。「わかる、アントニオ？」

「もちろん、イザベリータ、よくわかるよ、それでね、いま思ったんだけど、僕の家はこのすぐ裏なんだ。そっちへ行って、くつろいで、ビールをもう一杯やって……話しあえる新しい型もあるし……」

イザベルは彼の手に自分の手を重ねて、彼を止めた。「アントニオ。聞いて、アントニオ。やめておきましょう」

「いや、僕はただ……」

イザベルは彼の手を離した。ほほえんではいたが、その目は澄んでいて、きっぱりしていた。「やめておきましょうって言ったの。私たち、ずっと前からの知り合いだし、あなたのことは好きよ、大切にも思ってる、でもね、あなたは私の予定にはまったく入ってないの。あなたはいい人だし、いい友だちだと思ってる、でもそれだけ、そこまで。ややこしくするのはよしましょう」

アントニオは、川の水をバケツ一杯ぶちまけられたような気がした。冷たい筋が背中を伝っていくのがはっきり感じられた。彼はずっとこの娘に弱かったし、はっきり意識したことは一度もなかったが、彼女のほうも自分に気があると思いこんでいた。いつか、将来、ふたりのあいだにきっと何か、ちょっとした何かが起きるだろうと、なんとなくずっと思っていたのだ。たぶんタイミングをまちがえただけだ、と彼は少しあがきながら、道を開けておこうとした。「いや、ごめん、もちろん、今夜はふさわしい晩じゃないよね、ラジオのこととかあって、ちょっとさんざんな一日だったし。何日かしたらいっしょに出かけようか、映画に行って、何もかもゆっくり話そう、僕たちのことも……」

今度こそイザベルは本当に笑いだした。「あははは、アントニーニョ、もう、何を考えてるのよ……友情以外の『私たち』なんて、一度も頭をよぎったことはないわ。ねえ、もし何かの拍子に、わからないけど、あなたに期待させちゃったなら――でもそんなつもりはなかったと思う、本当よ――ほかのことを考えさせちゃったなら、本当にごめんなさい。心から悪いと思ってる、あなたに世界じゅうの幸運がありますように、でも私は本当にあなた向きじゃないの、私はここから出ていきたいの、ほかの計画があるの……ごめんなさい、私はふさわしい相手じゃないのよ」

もう言うことは何も残っておらず、彼女が立ちあがって、肩をそっとなでて去っていったときも、アントニオは何も言わなかった。

その晩の残りのことは、いつまでもぼんやりとしか覚えていなかった。湿って暑い夜、水色のフォーマイカの小さなテーブル、彼と、彼の三人の飲み仲間と、そのあいだに四本になっていたピンガの瓶。

1.14 勝負の終わり

埃の季節には、どんなにぼんやりした観察者でも見逃しようのない、町の子どもたちにとても人気のあるもうひとつの遊び（サッカーのほかに）がある。川沿いを散歩するだけで、下の小さな砂浜から、何十、何十という色とりどりの凧が顔を出すのが見える。そのほとんどはストローと色つきのビニール袋でつくった手製のものだ。川沿いの通り、ベイラ・リオ通りは、何か月かのあいだ叩きつける雨に打ちのめされ、川の茶色に、ときには文字どおり沈められているが、それが数時間だけ、地球でいちばん陽気で色彩豊かな場所のひとつに変わることがある。

卓越風は東風で、漁師たちの味方だが凧の敵でもある熱く突風まじりの風だ。川沿いを歩けば、電線がどれほど古い破れ凧でぎっしりなのか、いったいいつからそこに引っかかっているのか、目にとめずにはいられない。ところどころは芸術作品のインスタレーションのようで、あまりにたくさんの残骸がくしゃくしゃにからみついているので、鉄塔も電柱ももうほとんど見分けがつかず、それだけ色が、どこにでもある茶色と闘おうとしているのだった。

電線がいちばん多くの犠牲者を出した場所のひとつが、ペルペトゥオ・ソコーロ地区の北のはずれに近い、川沿いの短い一画だ。昔、女たちはそこへ川で洗濯をしに、川沿いの椰子の木の下で水浴びをしに来ていた。もし無遠慮になる目があったとしても、その目は、一行の貞節を守るために女たちのひとりが交代で構える猟銃の銃口と向きあうことになった。そこでは通り沿いの狭い砂浜が急に広がっていて、地区の女の子や少女たちが凧をあげに、ある人に言わせれば「引っかけに」、待ちあわせる場所になっている。

その砂浜の奥、通りから少し引っこんだところに、ジャカランダの茂みのなかにちぐはぐに埋もれるようにして、埃っぽい煉瓦造りの低い建物が、川に面した大きくてあまりきれいではないガラス窓をのぞかせていた。その二階、最上階に、セニョール・イナシオの事務所があった。

約束は十一月十七日の朝十一時だったが、アントニオはずいぶん早めに家を出た。いい天気で、自転車で川沿いを北へさかのぼっていけば、陰鬱な考えが日なたで溶けていくかもしれないと思ったのだ。どの地区の凧も、決まってその地区の色をしている。アントニオの住むサンタ・イネス地区は黄色と緑。トレン地区は青と黒、イピランガと同じ色で、それは創設者のヴィトリオ・ガリアーニ神父がひいきにしていたインテルの色でもある。セントラル地区は赤と黄色と緑、マカパの公式の旗の色。ペルペトゥオ・ソコーロ地区は赤と黄色。シダージ・ノヴァ地区の最初の赤と緑の凧がもう見えてくると、アントニオは自転車を止めて降り、それなりに安全に置いておける場所を探した。自分がセニョール・イナシオについて何も知らないことに気づいた。

本当の仕事が何なのかも、サッカーの外でどんな暮らしをしているのかも。彼にとって、そして誰にとっても、イナシオはいつも、ただセニョール・イナシオ、会長でしかなかった。クラブハウスではなく彼の個人事務所に呼び出されたことも、気がかりだった。幹部との話し合いがクラブハウスの外でおこなわれたことなど一度もなかったし、アントニオ自身、川沿いのあんなところにセニョール・イナシオがもうひとつ事務所を持っているとは考えたこともなかった。

一時間早く着いた。空には数えきれないほど凧が舞っていた。アントニオはうっとりとそれを見つめた。ボールを蹴ってばかりの子ども時代だったので、このすばらしいものを十分に楽しむことができなかったのだ。あらゆる年ごろの男の子や女の子がいて、なかには凧をあやつるのが本当にうまい子もいた。それにひきかえ、大人はほとんどいなかった。よく見れば、たぶん彼ひとりだけだった。川の熱いにおいのなかで低い塀に腰かけ、蝿を

追いかける大きな緑のトカゲを眺めながら、前の日のあれほど不名誉な負け方をした準決勝のことを考えずにすむよう、なんでもいいから手がかりを探していた。遠くから、ひとりの若者の影がぶらぶらと近づいてきた。ひげと髪が長く、まるで踊っているように、とてもリズミカルな歩き方をしていた。アントニオにはそれが誰だかわかった。ドウグラスだった。何か月も会っていなかった。

「ドウグラス？　君か？」

「アントニオ？　やあ！　そう、俺だよ！　会えてうれしいよ！」

ふたりは抱きあい、長いこと見つめあい、笑った。

「いったいどうしたんだ？　痩せたし、日焼けしてるし、それに……」アントニオは、気を悪くさせないかどうか一瞬考えて、ためらった。「……かっこよくなった！」

「君の知ってた、太って青白い若造に比べてってことか？」

「まあ、うん、太ってたとまでは言わないけど、でも自分を見てみろよ！　まるで別人だ！」

「なんでもないんだよ、アントニオ、なんて言えばいいかな。何週間か、川沿いを、森のなかを旅してきたんだ、友だちふたりとね……」アントニオはドウグラスがこんなにうれしそうなのを見た覚えがなかった。「すぐそこ、目と鼻の先にあるのに、その豊かさに気づいてもいないんだ。川をさかのぼってみようって、何回考えた？　それなのに、それが本当はどういうことなのか、俺たちは気づいてないんだよ」

「数えきれないくらい。川をさかのぼって、ちゃんと探検してみようと数えきれないくらい考えたよ、でもなぜか一度もやらなかった」

早めに着いたぶんの一時間は、ドウグラスの話のうちにたちまち過ぎていった。彼がいちばん多く口にしたことばは「きれい」だった。目は輝き、彼が「もっと本物の」と呼ぶ人々との出会いや、急に大きすぎて複雑すぎて、すっかり理解することなどできなくなる心奪われる自然の思い出に浸っていた。一時間、一時間五分、一時間十分……

「ごめん、ドウグラス、もう行かなきゃ。そのうち晩に会って、話の続きを聞かせてくれないか？　何もかも細かいところまで知りたいんだ、どんな道をたどったのか、誰が案内してくれたのか、何もかも知りたい」

セニョール・イナシオは大きな木の机の向こうに座って彼を待っていた。火の消えた葉巻をくわえ、ピンクの麻のシャツが、川に面して開け放した大窓から風が入ってくるのに、汗で体に貼りついていた。机の上には地元紙のスポーツ面が広げてあり、前日の試合を扱った記事が赤いマーカーの大きな丸で囲まれていた。巨大なパソコンのモニターから――アントニオはこんなに大きなモニターがあるとは思ってもいなかった――光がもれて、会長の脂ぎった白っぽい肌に反射していた。会長は前置きもなく話しはじめたが、アントニオがそれまで気づかなかった軽いどもりがあった。

アントニオは、急にこみあげてきたある種の嫌悪感のせいで、とても彼の顔を見ることができなかった。彼の目が見ていたのは、窓のすぐ外の近くで舞っている色とりどりの凧ばかりだった。

「アントニオ、お前を呼んだのは、契約を更新しないことに決まったからだ」

その知らせは、もちろんアントニオを驚かせはしなかった。彼は凧を見つめ、筋ひとつ動かさなかった。

「お前がある程度いい仕事をしたことは否定しない、だが十分じゃなかった。選手たちは満足していないし、エドゥアルドも満足していない、まだ話してはいないが、満足していないのはわかってる」

エドゥアルド？　アントニオは、エドゥアルドが乗り気でないことはわかっていた、たぶん、だがふたりのあいだには率直な関係があって、何か問題があれば彼に話してくれたはずだった。いずれにしても、話し合う余地がまったくないのは明らかで、彼は何も言わなかった。

「金の問題だと思ってほしくはない、断じてちがう、それどころか、十一月分の給料はちゃんと払うと約束しておきたかったんだ」

金の問題でないのは、セニョール・イナシオが「給料」と呼ぶものがあまりにわずかで、自転車の空気入れを買い直すにも足りないからでもあった。

「だが、まあ、うまくいってないんだ、アントニオ。お前のトレーニング方法は正統じゃないし、期待した実を結ばなかった、わしらは満足していない」

凧のひとつが、ひときわ目を引く軌道を描いていた。いつも墜ちる寸前に見えて、いつも持ちなおし、ものすごい速さで8の字を描いてはまた上がっていく。あの凧には内側の張りが、エネルギーがあった。そう思うと、アントニオはほほえんだ。その仕草を、会長はまったくまちがって受けとった。

「おもしろがってるようだな、けっこう。発表は今日の午後、練習の前にする。選手たちに別れを言いたければ来てもいい。練習はエドゥアルドが見る、後任が見つかるまで彼が監督だ。ああ、それから、用具は全部返してもらいたい。バッグとシャツとジャージだ、頼むぞ」

またあの凧の8の字の軌道、またしても最後の瞬間の立てなおし。

「どうした、アントニオ？　何も言うことはないのか？」

「いえ、セニョール・イナシオ、言いたいことならいくらでもあります。今年どれだけひどかったか、私の試合の組み立てにだけ救われたひどい選手の集まりのことを話してもいい。準決勝の前に選手を教会へ連れていって毒を盛らせることがいちばん勇敢な決断だった、近視眼的な幹部たちのことを話してもいい。うちのスタンドがいつも空っぽで、まったく同じスタンドがイピランガの試合のときはいつも満員なのを見るたびに私が感じていた悲しさのことを話してもいい。でも私はそういう人間じゃありません。私を追い出したいんですか？　わかります、準決勝に負けた、その責任は全部私が負います。でも、ひとつだけ言わせていただきたいことがあります。あなたがたは勝てません。もう二度と勝てません。あなたがフチボウ・クルビの会長であるかぎり、セニョール・イナシオ、たとえ、そうですね、パルメイラスの監督と、カトゥやロランドのような選手を連れてきたって、それでももう二度と勝てませんよ」

「アントニオ、アントニオ、ずいぶん根に持つじゃないか。成功する監督になりたいなら、個人的な問題はわきへ置くことを覚えなきゃいかん、わかるか？　それに、もうひとつ言っておきたいことがある、お前にだけ言っておく。来年、リーグ戦はおこなわれない。金が尽きたんだ、ゼロンは閉鎖、それでおしまいだ。お前がどれだけ近視眼的かわか

るか？　わしらはお前やわしよりずっと大きな危機のただなかにいるっていうのに、お前はマカパのことしか考えてない」

「でも会長、本当にそうなんですか？　ゼロンが閉鎖って、どういうことです？」

「つまり、建ててから十年もたっていないのにスタンドが崩れかけていて、直す金がないってことだ。マカパの五つのチームが練習するスタジアムがなくなるってことだ。たぶんブラジル北部のなんとかカップくらいには出られるだろうが、それ以上は何もないってことだ」

「直しますよ。ゼロンはこの町にとって大事すぎます、なんとか方法を見つけますよ」

「まだ夢の世界に住んでるのが好きらしいな、え？」

アントニオはいきなり立ちあがり、シャツにつけていたマカパ・フチボウ・クルビのバッジをはずして、机の上に音を立てて落とした。抑えた足どりで事務所を出ると、大げさなほどゆっくりと階段を一段ずつ降りて通りへ出た。

正午の太陽のまぶしさに目がくらみそうになった。空では、ついさっきまで彼が目で追っていた凧が急に高度を失い、セニョール・イナシオの窓のちょうど下の電線に引っかかって、かつて同じ運命をたどった同じ色のほかの凧たちの仲間入りをした。

1.15 川

アントニオは要塞の控え壁の上に立って、自殺のことを考えていた。ときどき、それについて思いめぐらすことがあった。現実とはまるで切り離された、理屈の上での可能性として。たとえばこんなふうに。もし医者が不死の血清を持ってきて注射しようとしたら、どうする？　鉄の棒でぶちのめしてやる、それがどうするかの答えだ。でも、もしそれがうまくいかなかったら、迷わず自殺する。不死だなんて、とんでもない。

またあるときには、自殺を自分の問題の解決策になりうるものとして考えたこともあった。電気代の支払いが遅れてる？　まあ、自殺すればもう問題じゃなくなる。どうしてもかけたくない電話をかけなきゃならない？　同じこと。けれども毎回、彼には――最初から、もう「もし」のところから――自分が本気でその可能性を考えているわけではないのがわかっていた。そして毎回、次に浮かぶ考えはこうだった。本気で考えてしまうような理由って、いったいどんなものだろう？　それから、自殺という考えをそんなつまらない考えと結びつけたことに、なんとなく恥ずかしさがこみあげてきて、たいていは彼の頭はさまよいだし、創意に富んだ自殺の方法について考えはじめ、五分後にはもうまったく別のことを考えているのだった。

そのときも、本気で自殺を考えていたわけではなかった。だが自分の孤独のことを、たぶんイザベルのことを考えていた。ラジオのことを考え、バグだらけのパソコンのことを、たぶん世界の終わりのことを考え、準決勝のことを、あのもうひとつの準決勝のことを考え、愛するスタジアムの水色の壁のことを考えていた。そしてそれから、考えがエジプト航空の便の機長に落ちていった。自殺したいと思うほどつらいって、どれほどなんだろう、本当にやってしまうほどつらいって、どれほどなんだろう、そして百人もの人を道連れにしてやってしまうほど想像を絶してつらいって、どれほどなんだろう。どうしたらそんなことができる？　いったいどうしたら、そんなところまで行きついてしまうんだ？　それにもし、その機長が前にも、自分の部屋でひとりきりで自殺を考えたことがあって、大切な誰かが思いとどまらせることができていたとしたら。救っていたとしたら。なんて呪わしい皮肉だろう。最初にそれが頭に浮かんだときに、すぐに自殺してしまったほうがいいのかもしれない。

それから、少しずつ、そのときも話がそれていった。自殺の実際的な面に戻って、いつものように、もしやらなければならないなら川を選ぶだろうと考えた。そして彼の気をそらしたのは、その川だった。あのすばらしい色、川の名に値する川にありうるただひとつの色、茶色で。

記憶のなかで彼は子どもに戻った。学校で初めて地図を見せられたときだ。「先生！　この水色の線はなんですか？」

「それは川よ。ここに描いてあるのがアマゾン川」

「川？　これを描いた人は川を一度も見たことがないんだ！」

みんなの大笑い。そして先生は辛抱強く、川の色は特別な色で、世界でもほとんど例のない性質のせいなのだけれど、ふつうはほかの川は本当に水色か青で、だいたい海と同じなのだと説明した。「ヨーロッパのきれいな川のことを歌った曲もあるのよ。『美しく青きドナウ』、いつか聞かせてあげるわね」

それから時間を飛び越えて、若い大人のアントニオが、初めてインターネットにつながったパソコンの前にいる。友だちはみんなパメラ・アンダーソンを検索していて、彼は「ドナウ　写真」。そして最初は信じられなくて、それから笑いだした。美しく青きドナウま

で茶色だったのだ。テムズ　写真、クリック、茶色。ナイル、茶色。ミシシッピ、茶色。ははは、くそったれの地図屋どもめ、ずっと信じてたのに、お前らのことも先生のことも。ところがほかのクリックでは青い川の写真も出てきた。写真によっては、ドナウやナイルやほかの川も青く見えた。撮り方によるのだろうか、川の場所によるのだろうか？そして目を見開き、ひらめき、すばやく検索して、確信した。アマゾン川が青く、深い深い青に写っている写真があったのだ（しかもたくさん！）。考えてみれば当たり前のことだったが、いつも目の前にあったので、二十五年以上のあいだ一度も立ち止まって考えたことがなかった。川は彼が思っていたよりずっと変化に富んでいて、たくさんの驚きを隠し持っていたのだ。

そのずっと昔のとき、彼はしぶしぶパソコンを切り、近いうちにその驚きを探しに行こうと心に誓った。だが何か月も過ぎ、それから何年も過ぎ、学校、暑さ、ラジオ、雨、サッカー……そして川は、ただの一度もお返しをされることなく、彼のほうへ流れ続けていた。

1.16 旅立ち

イザベルは比較的裕福な家の出で、両親は喜んで大学の学費を出してくれただろうが、彼女は自分の誇りから、アナ・マリアのバーで働いて自分で学費を払うことを選んでいた。一方ラジオには、純粋に好きだからという理由で時間を注いでいた。だがいまや大学は終わり、ラジオという言い訳ももうなかった。ラジオはたぶん永遠に死んでしまったのだ。「大人になったら」何をするのか、決めなければならなかった。そしてたぶん、大人になることの一部は、自分の誇りをわきへ置くことを学ぶことなのだった。

「お父さん、よく考えました。ニューヨークの国際通訳学校の学費を出してくださるという、ありがたいお申し出をお受けすることにします」

「それはよかった、イザベリータ。で、いつ発つつもりだい？」

「あさって、お父さんさえよければ。次の学期から始めたいんです」

「誇りのほうはだいぶ修行したようだね。うれしいよ。今度は衝動のほうも少し修行しようか、ね？　でも、お前のためにとても喜んでいるよ」

イザベルがブルックリンの六十丁目1630番地の扉の前に着いたのは、日がすっかり暮れてからだった。七段の階段の先に、街灯の黄色い光にひたった明るい煉瓦の小さな家があった。キャスターつきの巨大なスーツケースは、誰かの手を借りなければとても入りそうになかった。呼び鈴は引っかかっていて、すりガラスをノックする元気さえ残っていなかった。二十四時間ぶっとおしの旅だった。マカパからニューヨークへ行くには、ブラジルの奥深い南へ、まずブラジリアへ、それからサンパウロへ下らなければならず、そこでやっとUSエアウェイズの大きな飛行機が彼女を目的地へ運んでくれたのだった。

その二十四時間のことは、ぼんやりとしか覚えていなかった。何よりもまず、ばかばかしいほど長い列での待ち時間、ニューヨークの空港の「Aliens」という表示、機内で食べたひどいもの、航空券に印刷された「8.000　$」という文字、聞こえるのに理解できない英語（語学の学位を持ってるのよ、もう！）、人、息が詰まりそうなほどいっぺんに集まった大勢の人、最初の離陸の恐怖とそれをすぐに押しのけた好奇心、飛ぶこと、昇っていって雲を切り裂くことの新しい喜び、ニューヨークに着いたときの隣の席の人たちの笑顔、まず飛行機の窓から、それからタクシーの窓から見た息をのむような町の眺め、とりわけ、本当に町のどこからでも見える巨大なツインタワー。それが彼女の最初の、本当の旅だった。

サンパウロからビッグアップルまでの十時間半の飛行のあいだに、ようやく本物の旅日記を書く機会ができ、ペンからはあふれる川のようにことばが流れだした。ブラジリアの空港でそのために買ったノート一冊が、びっしりと書きこまれた文字と、おぼつかない絵で埋まった。あまりにあわただしく決め、パパもあまりにあわただしく承知したので（私を厄介払いしたかったのかしら、と彼女は笑いながら思った）、感慨にひたる暇などなかった。バーの女主人アナ・マリアに知らせ、誰かに伝えるためにラジオ局に電話を一本かけ、荷造りをするので精いっぱいだった。学校は、十一月十九日の「ミッドターム」明けから始めるという条件で入学を受け入れてくれた。事務局にかけたほとんど喜劇のような電話のことを、彼女は恥ずかしく思い出した。相手の言うことはわからず、自分の言うこともわかってもらえず、通訳だの翻訳者だのどころではなかった。

薄すぎるダスターコートしか着ていなかったので、寒さが、扉を叩く勇気を、あるいは力を与えてくれた。その家は父親のまたいとこの家だった。何十年も前に家族と移り住み、何人ともわからない子どもをもうけ、夫に先立たれ、いまでは、たいして少なくもない年

金に加えて、この大都会の南のはずれにぽつんとある小さな家の二階を貸して暮らしを楽しんでいた。そこでは韓国人、中国人、イタリア人、ブラジル人、ポーランド人、正統派ユダヤ人が、建てられて住める一平方センチメートルをけっこう平和に分けあっていた。

扉を開けた黒い服の女は、鉤形の巨大な鼻で顔を飾っていて、鷲、いやむしろ烏のように見えた。女は、本人に言わせればポルトガル語のつもりのことば、少なくとも三十年は使っていないことばで話しかけてきて、イザベルは察しよく、わかるふりをした。老婦人は上の部屋へ続く急な階段を案内してくれた。上からは音楽と、イザベルには何なのかわからない、何かのいいにおいがただよってきた。

宝の持ち腐れね、とテレーザは新しい携帯電話を手に思った。この数日の半分を説明書の熱心な勉強に、残りの半分をルイーザへの自慢に費やした。けれどもいつもアントニオに電話していた時間になると、さびしさに襲われた。本当に、あの毛の抜けたオウムの番組に電話するのに慣れなきゃならないのかしら？

彼女はもう一度電話の重みを手で確かめ、ぱちんと閉まるふたを開けたり閉めたりして、あの映画の脇役になったような気分になり、大きく息をついて番号を押した。

「もしもし？」

「あの、セニョール・イナシオでいらっしゃいますか？　テレーザです、覚えていらっしゃいます？　電話の件の女です」

「電話の件の女って……」

「グスタヴォさんを助けた者です。ところで、お加減はいかがです？」

「よくなってきてる、ありがとう。順調に回復していて、もうリハビリを始め……」

「それはよかったです」とテレーザはさえぎった。あまり長く黙っていると、奇跡のようにかき集めた決意がひと吹きで消えてしまいそうだったからだ。「お邪魔してすみません、でも、お会いしたときにおっしゃってくださったことを考えなおしていたんです。覚えていらっしゃいます？」

「んんん、ああ……」

「あの、このすてきな電話をくださって、一生感謝します、でもあれっぽっちじゃなんだから、なんでも望みのものを言っていいっておっしゃいましたよね。それで、ほかにほしいものを思いついたんです」

「聞きましょう、聞きましょう」とイナシオは、その厚かましさをおもしろがり、ほとんど感心さえして、うながした。

「あの、ラジオ・ノヴァ・アミザージをご存じですか？　何日か前に泥棒に入られて、何もかも盗まれて、いまラジオは閉まってるんです。それで、あの、また開いてほしいんです」

「はは、ずいぶん高望みをなさる、テレーザさん」とイナシオは笑った。そのあいだに、彼女と会ったときのことが頭に戻ってきていた。「人生ほどほどで満足することを知らなきゃいけない、とおっしゃっていたのを覚えていますよ」

「いまでもそう思っています、セニョール・イナシオ」とテレーザは、勇気と図太さの蓄えの最後のひとしずくまでかき集めて言った。「でも、ときには思いきることも知らなきゃいけないんです。虎穴に入らずんば虎子を得ず、です」

町のほとんど反対側で、アントニオは寝床に寝そべって天井を見つめていた。胸のなかに、ひとつの揺るぎない確信ができあがっていた。旅に出る。旅に出なくちゃ。アマゾンの森を放浪した話をするドウグラスの声が頭のなかで鳴り響き、サッカーのシーズンの終わり方とラジオの盗難とで味わった苦い思いが、その話をいっそう大きく、身近に、ほとんど手の届くところにあるように感じさせた。だが、それだけではなかった。前の日、事態を確かめてこれからどうするかを決めるためにラジオ局へ行くと、イザベルがいなかったのだ。

「出ていったよ」とひどくしょげたジョアンが言った。

「出ていった？　どこへ？　どうして？」アントニオはまるで予想していなかった。

「ニューヨークへ行ったんだ、それ以上はよく知らない、昨日発ったんだよ」

「ニューヨーク？　ジョアン、からかうなよ、ありえない……」

「アントニオ、からかってなんかいない、本当に行っちまったんだ。変わるときが来た、勉強しに行くために、急だけど正しい決断をしたって言ってた。それ以上は知らない」

彼はゆっくり自転車をこいで家に帰った。湿った空気のなかで川のにおいがひどく強く、ほとんど果物が甘く腐っていくようだった。家々の正面は沈んでいく夕日の光に浸されたようで、灰色や黄ばんだ色やピンクが、出来の悪い水彩画のようだった。アントニオの耳にはまだあの沈黙が残っていた。またしても頭が完全にリセットされたことを意味する沈黙が。イザベルは行ってしまった。このところずっとそばにいて、いつのまにか彼の心の風景の一部になっていた。その不在は、自分で認めたいと思うよりも重かった。休暇が必要だ。明日学校に電話して二週間ほど休みをとろう、どうせ学年はもう終わったんだし、一度も休暇をとったことがないんだ、くれないってことはないだろう。

天井が色で、顔で、味で、音でいっぱいになった。彼は電話をとり、ドウグラスが残していった番号を押した。

「もしもし、ドウグラス？」

「アントニオ？」

「やあ、そう、僕だ。アマゾンをひとまわりしてくることにしたんだ。それで、何か助言をもらえないかと思って。どんなふうにまわったのか、どうやって行ったのか、ちゃんと教えてほしいんだ」

「いつ会う？」

「なんならいますぐでも」

第2章

2.1 水

パラー州、モンチ・ドウラード。村、そう呼んでいいのなら、それは殺風景な小さな広場のまわりに寄り集まったあばら家の集まりにすぎなかった。広場を見おろすのは植民地時代のつつましい建物で、その背後にはもう森が迫っていた。建物のなかには、木の鎧戸を半分下ろした、ちっぽけな郵便局と、半開きの雨戸の眠たげなポウザーダがあった。

ペロウリーニョの柱のまわりで子どもと犬が五、六匹遊んでいたが、それを除けば、アントニオをここまで運んできた喘ぐようなバスが走り去り、いっしょに降りた二、三人が路地に消えてしまうと、村は無人のように見えた。その静けさはありがたかった。果てしなく思えた道中、女たちや荷物や騒ぐ子どもたちや休みなくうわさ話をする老婆たちのあいだに押しつぶされ、運転手の大音量のラジオが流行り歌を次から次へとがなりたてていたあとだったからだ。

何よりありがたかったのは、その前の数日間のあとだったからだ。いつもの暮らしからしばらく遠く離れたいという彼の望みは、人ごみと騒音と、川沿いの町々にあふれる大勢の人と観光客にくじかれていた。

アリクイを眺めたり、ジャカレーを味見したりする団体ツアー。オウムを一羽残らず世界で最後の一羽みたいに写真に撮るアメリカ人やヨーロッパ人でぎっしりの船。そのまわりで、アイスキャンディーやべたべたの果物を売りつけようとする子どもたち。それは彼がアマゾンに期待していたものではなかった。店、午後の暑さのなかでカシャーサを飲む年寄りたちのテーブル、車、小さなラジオ、市場の野菜くずの上で退屈そうにしているハゲワシ、観光客の腕時計を品定めする暗い目つきの若者たち、ビーチサンダルをぺたぺた鳴らして笑いあう娘たちの丸い尻、それは彼の町と何も変わらなかった。

義務のようにサンタレンとマナウスも訪れたが、地区を変えただけのような気がして、それ以上ではなかった。それは何度も思い描いてきたアマゾンではなかった。自然にひたりながら考えと人生の糸を結びなおせる場所でもなかったし、熱い思いを抱き、生まれ変わり、豊かになって家に帰れるような旅でもなかった。

がっかりしながら帰途についたところで、彼はアウメイリンに立ち寄っていた。何もかも投げだして二階の二間のアパートに帰るか、川の美しさを発見するすばらしい遠足を約束する、またひとつのパンフレットを信じてみるか、決めかねていた。きわめて珍しいピンクのイルカ！　とても危険なアナコンダ！

ふたつの川の合流点、何キロにもわたって混ざりあわない水！　途方に暮れて小さな町の灼けつく通りを歩いていると、猛烈なにわか雨に追われて、彼はバスターミナルへ駆けこんだ。雨がやむのを待つあいだ、カフェジーニョを飲みながらぶらぶらして、アイスクリームや見世物や洗剤の特売やサンバ学校や約束をいっぱい並べたエステの、重ね貼りされたポスターやビラにおおわれた壁にぼんやり目をやっているうちに、時刻表の掲示板に目がとまった。どうやらそこからは、まったくの支線、聞いたこともない内陸の土地をたいした本数もなく結ぶ路線が出ているらしかった。ひとつの考えが頭のなかに道を見つけはじめ、彼は切符売り場の窓口に近づいた。窓口では短パンにサンダルの小男が、鼻に指をつっこみながらスポーツ新聞を読んでいた。

「ちょっと聞きたいんですが、モンチ・ドウラード行きのバスがあって、かっこのなかに『ジャリ川』って書いてありますよね。つまり、その村は川沿いにあるってことですよね？」

「そう書いてあるんなら、そうなんでしょうよ、ちがいます？」

「へへへ、ええ、もちろん、もちろん。でも、その、向こうに着いたら、船を見つけられそうですかね、借りられるかってことですけど、ジャリ川を少しさかのぼるために？」

小男は鼻から指を抜き、それをじっくり眺めてから、満足したように肩をすくめ、満面の笑みで言った。「まあ、川はあそこにあるんだから、船の一艘や二艘はあるでしょうよ。でなきゃ、なんのために船着き場なんかこしらえたんです？」

「ああ、なるほど、ごもっとも。じゃあ、切符を一枚ください。バスは明日の九時発ですよね？」

「そう書いてあります、水曜と金曜の九時。だから明日は水曜だから、そうなるでしょうよ、ちがいます？　まあ九時、九時半、積む荷が多ければ十時、十一時になることもある、わかったもんじゃない。でも九時に来ればまちがいない、前の席もとれますよ、風がよく通るから。三十レアルです」

衝動的な決断だった。アントニオは急にすっかりわくわくして、出発してから一度もなかったくらい楽しくなった。決まりきったコースをたどるのはもうたくさんだ、観光客のために用意されたやつはもうたくさんだ、飼いならされた森でのまやかしの冒険はもうたくさんだ、これからは自分ひとりで行くんだ、モンチ・ドウラードで小ぎれいな部屋をとって、奥地へ川を連れていってくれる若者を見つける、パンフレットはもうたくさんだ、型を破るときが来たんだ、これは僕の旅で、これからは僕が自分で組み立てる。

眠たげなモンチ・ドウラードを形づくる四軒の家の裏手で、船着き場はすぐに見つかった。緑がかった川に三メートルたらず突き出した、板を渡しただけの桟橋だった。岸には浴槽くらいの大きさの木の小舟が六、七艘引き上げてあった。漁師の舟だ。桟橋に舫ってあるのは動力船が二艘だけで、それもたいして大きくはなかったが、操縦席らしきものと、甲板に日陰をつくるために張ったビニールの幌がついていた。一艘はひどく古くて見るからに片側へ傾いていて、もう一艘では、鉄色のもじゃもじゃの髪をした男がエンジンをいじっていた。

「おーい！　すみません、あなたですよ！　この船、貸してもらえます？」

男は短パンで手をぬぐい、裸の胸毛をかき、アントニオのTシャツとアディダスの靴を値踏みし、たばこに火をつけた。「もちろん、もちろんです。船長つき貸し船、いい値段、とってもいい旅。船長、私です。どちらへ行きたいんです？」

「まあ、川をひとまわりしたいんです。少しさかのぼって森を見てみたい……一日か二日、出かけてもいいかな、わからないけど、寝る場所があるなら……」

「もちろん、寝るのは船の上、全部そろってます、すごく快適、旦那みたいに過ごせます。二日か三日出かける、森がたっぷり、とってもいい旅。お値打ち価格、食事つき、料理人つき、料理人、私です」

「ああ、いいですね、すごくいい。明日にでも出られますか、それとも船を直し終えなきゃならない？」

「船は完璧の完璧、まったく宝石です」

彼はエンジンを閉じる蓋をばたんと閉め、吸い殻を水に投げた。「明日の朝出ます、旦那はそれまであっちのポウザーダで寝られます、いいところ、きれい、すばらしい夕食。お値打ち価格。ポウザーダは私の姉のジェジータのです」

夕食は本当にすばらしかった。舌つづみを打つような川エビのモケッカと、ほとんど冷えていると言っていいビールだった。そのかわり勘定は、お値打ち価格と呼ぶには少々高くつく気がした。ベッドが狭くてでこぼこで、部屋の高い天井がヤモリでびっしりおおわれていることを考えに入れても、だ。ヤモリの一匹や二匹ならかまわなかったが、少なくとも五千匹はいたにちがいなかった。ドナ・ジェジータは彼の疑念に、これなら「部屋に蚊は一匹もいない」と、満面の笑みで満足そうに答えたが、アントニオはいささか落ちつかない眠りをとった。

ガンボーネ――名前はパウロなんですけど、ガンボーネでいいです、みんなガンボーネって呼びます、さあどうぞ乗って、その板に気をつけて、いや犬はすごくおとなしいです、名前はゴウモン、噛みません、屁をこくだけ、あっはっは！　ほら、なんていい天気、なんていい船、とってもいい旅――が、そのぼろ船に彼を乗せる前からむしりとっていった額も、とてもお値打ち価格とは思えなかった。だがもうここまで来てしまったし、どうやらそれが借りられるただ一艘の船らしく、それにもう彼は、川をひとまわりしたくてたまらなくなっていた。

旅は実に満足のいく形で始まった。数時間進むと、巨大な滝が見えてきた。流れのまどろみがそこで急にとぎれ、泡と、鳥の群れと、しぶきの虹とが沸き立っていた。

ガンボーネはまるでその朝自分でこしらえたみたいに鼻高々で、主人役を務めた。「これがカショエイラ・ド・サント・アントニオ、とってもきれい。大きな滝、アマパーでいちばん大きい、とってもきれい、でしょう？　とってもきれい。旦那、とっても運がいい、これが見られて。旅の値打ちあります、滝だけでも、値打ちあります、とってもいい旅」

アントニオは、森のただなかのその水の落差の雄大さに強く心を打たれながらも、少しがっかりした。「でも、じゃあ、もう引き返すんですか？　川の旅はもうおしまい？」

「へえ、そう思いました？」ガンボーネは口からぶらさがったたばこの煙で片目を細め、狡そうに振り向いた。「旅はまだ長い、もっときれい。旦那、とっても運がいい、私が川をすごくよく知ってるから。ずる年寄りだ、ジャリ川は、いたずら年寄り、知らない者はひどい目にあう、危ない黄色いずる年寄り」

彼は引き返すように舵を切り、もっと下流の、木々の枝にほとんど隠れた脇の支流へ入りながら、自慢を並べた。「このろくでなしの川の手口はみんな知ってます、旦那、私と来て、とっても運がいい。欲しがりな女より腕が多いんです、この黄色い年寄りは、千本の腕が、今日と明日で回り方を変える。こいつの手口を知ってるのは私だけ、私はこいつがどう曲がりくねるか知ってて、旦那の行きたいところへ、川をさかのぼって連れていきます。町から来た人で、この川で迷った人がいる、たくさん。来て、迷った、偉い先生たち、本を書く人たち、こいつの腕のあいだで迷って、下ってるのか上ってるのかもわからなくなった。旦那、私と来て、とっても運がいい、とってもきれいな船、私の船」

そして実際、アントニオひとりなら迷っていただろう。互いに見分けのつかない水の緑のなかで、たえず枝分かれが続いていたのだ。二時間ほどして、ふたたび本流へ出たとき、彼は船頭の自慢もあながちでたらめではなかったと認めざるをえなかった。川は広く黄色く、上をオウムの群れが飛んでいき、滝の跡はもうどこにもなく、ずっと後ろに置き去りになっていた。

旅の残りは、思っていたよりはるかに退屈なものになった。船はぶつぶつ言いながら揺れ、濁った黄色っぽい水に排気ガスを吐き出していた。森は両岸にそそり立つ緑の壁で、からまりあい、途切れることがなかった。その単調で威圧的なかたまりを生き生きさせているのは、果てしない種類の鳴き声をあげながら上がったり下がったりする無数の鳥と、ときおりすばしこく枝から枝へ飛び移る落ちつきのない小猿たちだけだった。

ガンボーネは片手で舵をとり、もう一方の手でひっきりなしにたばこに火をつけていた。一日に二度ほど船を舫い、眠気を誘う釣りに没頭した。アントニオはあまり加わる気にはなれなかったが、その釣りが、単調な船上の食事に――ほかの点では、濃いパーム油でしつこく揚げたエンパナーダに始まりエンパナーダに終わる食事だった――泥くさい味の細長い魚を添えた。ゴウモンはそれが大好物らしかった。

枝と葉と蔓とランの大きな壁を、フィルムまるまる四本ぶん撮ったあと、アントニオは、狩りをするジャガーや、せめてバクの争い、カピバラの交尾、のちに新種とわかって自分の名前がつけられることになるオウムなどを偶然とらえる望みを捨てた。その葉の混沌に命がうようよしているのはわかったが、それはひどくつかまえにくい命で、どこにでもいる鳥と猿を除けば、目に見えないもののようだった。彼は気だるくメモをとり、午後のにわか雨を避けて幌の下でゴウモンの隣にうずくまり、ガンボーネが、あのなんとも想像をかきたてるあだ名の由来となった、ムラートの双子ジアミラとアウフォンシーニャとの見事な一夜の話を何度目かにするのを聞いた。森はすぐ手の届くところにあるように思えるのに、それを本当に見ることも、感じることも、触れることもできないような気がした。

そのぼんやりした失望にもかかわらず、気分はよかった。たしかに休まっていた。蚊との果てしない闘いが唯一の刺激という静かな航行の日々のおかげで、ここ数か月のストレスがすっかり沈んで澄んでいき、アントニオは、船とバナナ色の犬を一匹買って、モンチ・ドウラードの小さな家に落ちつく夢を見はじめていた。たぶん女の子といっしょに（イザベル、だろうか？）、ジャズと先住民の音楽だけを流す小さなラジオ局を開き、ことによったらサッカーの小説を書く。そのとき、川の旅は突然終わりを迎えた。

ついさっきまで、ふたりは風と軽油のにおいを楽しみながら、まったく平和に進んでいた。ところがいきなりガンボーネが速度を落とし、岸に寄せた。川に面して、踏み固められた土の小さな空き地があった。彼は板を渡して岸に降り、船を若木に舫うと、平然とアントニオのリュックをつかんで地面に下ろした。

「降りますよ！」と彼は陽気に告げた。

アントニオは少しとまどった。休憩があるとは聞いていなかったし、それにここには、そうする理由になりそうなものが何もなさそうだった。だが彼は、尻尾を振って楽しそうに降りていったゴウモンについていった。ガンボーネはアントニオに缶ビールを持ってきて、倒れた幹に腰かけるよう勧め、犬がユッカの根もとでちょっと用を足すのを待ってから、船に戻り、板を外し、口笛で犬を呼んだ。犬は優雅に船に跳び乗り、もうエンジンがぱたぱたと鳴って岸から離れていった。

「とってもいい旅、とってもいい。川の旅は終わりだ、お前は待ってろ、いとこがジープで迎えに来る。とってもいいジープ、とっても楽な帰り道。お値打ち価格」

アントニオは呆然とした。「なんだって？　どういうことだ？　どうかしてるのか、こんなところに置いていけるもんか！　往復で払ったんだぞ！　すぐ戻ってこい！　ここに置いていけるもんか！！！」

「心配すんな、いとこはすぐ来る。船は片道の値段、お値打ち価格、とってもいい旅、とってもきれいな船。いとこはもうすぐ来る、心配すんな。心配すんな、いいやつだ、とってもいいジープ」

ガンボーネの声はもう遠ざかっていった。空き地に通じるかすかな道は見渡すかぎり誰もおらず、森がざわめいていた。ゴウモンが吠えた。別れを告げているようだった。

2.2 喧騒

ジープは跳ね、きしみ、波間の船のように地面の起伏に乗りあげては落ちた。あるいは三日続けて船の上で過ごしたせいで、アントニオはまだ水の上にいるような気がしているのかもしれなかった。空気にしみこんでいるにおいは同じで、濃く重かった。川のにおいだと思っていた。木の葉の壁のあいだを黄ばんだヘビのようにくねっていく、あの濁ったのろい川のにおいだと。だがそれは森のにおいなのだと彼は気づいた。モンチ・ドウラードを出たときから絶え間なく彼を包んでいる喧騒が、森のものであるのと同じように。

彼はずっとマカパは騒がしい町だと思っていた。ラジオ局でヘッドホンをつけてから放送が始まるまでの短いあいだを、毎回自分に許すささやかな贈り物だと考えていたほどだ。二、三秒の完璧な静けさ。朝目を開けたときから、もう階下では隣の女のラジオが甲高くがなりたて、マリベルが中庭を掃きながら、なることのなかったオペラ歌手のレパートリーを高らかに歌い、隣の窓からは一日じゅうつけっぱなしのベニートじいさんのテレビが、ことばと呻き声と銃声の、途切れのない聞きとれない背景音をうなり続けている。そのなかで唯一の静けさだった。それなのに、比べてみれば、マカパのあれは静けさだった。

この途切れることのない音の轟きのなかで、彼はほとんどそれを懐かしみはじめていた。ほらね、こういうことは誰も考えない。何年も森を想像し、写真を眺め、本当はどんなものなのかはどうしても見えない――それはまったく不可能だ――が、それでもこの緑の全部、この影、あの蔓、湿気にぐっしょり濡れたあの太古の花々に、それなりに近づくことはできる。それなのに音のことは考えもしない。写真には音は写らないし、このにおい、苔におおわれた汗まみれの巨大な動物のようなこのにおいも感じられない。

最初に余分な金を少しせしめようとひと芝居打たれたことには驚かなかった、それはそうだ。生まれたときからそういうことには慣れていた。いまでも少しはしゃくにさわったが。むしろ、ガンボーネが姿を消してから一時間ちょっとでジープがやってきたことに、ほとんど驚いたくらいだった。人が二時間遅れるのは、もっとよくあるのは三時間遅れるのはふつうのことで、一時間十五分しか遅れないのは思いがけない例外だった。

ぺぺ――と彼は名乗った――が座席の横にピンガの瓶を置いていて、ぐびぐびとあおっているのも、最初はおもしろかった。そのはったりめいたふるまいや、くたびれた帽子や、ふてぶてしい大きな口ひげにも好感を持った。「行こうぜ、大将、さあ森に入るぞ！」

へこみだらけで、ありえない赤にどうにか塗られたジープが年齢不詳なのも、当然のことと受けとめた。運転手がビーチサンダルに節くれだった足を半分つっこんだまま運転するのもそうだった。ほとんど誰もがそんなふうに運転していた。アントニオは好きではなかったが。

ぺぺが我がもの顔で入っていった道には心を奪われた。実際にはそれは道の気配にすぎなかった。大木だけをおおざっぱに切り払った切れ目で、それでもジープは下生えのなかをあえぎながら、草や低木や根こそぎにされた藪のあいだを押し分けて進まなければならなかった。彼は興奮して、ついに森のなかにいるのだと思った。ついに本当にそれを生きている、ほら、茂みの奥へ入っていく、ほんの短いあいだでも、ついにここに、森のなかにいる、ひとりで（ぺぺといっしょに、でもあいつはどうでもいい）、観光客もいない、ついにこの木々を、この自然の全部を、においを、鳥を、音を、間近で眺めて味わえるんだ。

たびたび現れる障害にもうろたえなかった。倒れた幹や行く手をふさぐ藪のからまりを迂回するために、降りて山刀で道を切り開かなければならなかったが。さっきまでは確かに

なかったはずの沼の前に出たときも、驚きさえしなかった――彼は観光客ではない、このすぐ裏で生まれたのだ――雨が降れば川は広がり、あふれ、枝分かれや沼地をつくって、それは雨がやめば消え、ときにはまるまる何年もそこに残る、そんなことはわかりきっていた。

ペペが沼を迂回するために左へ大きく大きく曲がったときも、彼は落ちついていた。森ではよくあることだ。

だが何時間もたって、まだその泥水のおぼつかない縁に沿って走っているとなると、少し心配になりはじめた。出発したときは朝で、太陽は前方から照らし、オウムやオオハシのけたたましい鳴き声の上の靄から少しずつ昇っていった。それから沼地を迂回するためにそれて、太陽が右手にきた。太陽はゆっくりと天頂に達し、下りはじめた。最初の方向へ進んでいたなら、いまごろ太陽は背後にあるはずなのに、それはずっと前から左にあった。アントニオはしばらくそのことを考えた。こういうことは得意ではなく、方向感覚はいつもひどいのと最悪のあいだだった。だがほとんど見分けのつかない緑の壁ふたつのあいだで、ひどい、でこぼこの座席に揺られてばかりで、棒で叩かれたよりもひどく尻が痛くなり、まわりを見る時間だけはいくらでもあるとなれば、しばらくするうちにそれに気づく。そこで彼は勇気を出してペペにそれとなく言ってみた。「その……ずいぶん長い回り道ですね、沼のせいなんですよね？」

「ああ、すごく長い。でかい沼なんだ、すごく長い、ああ、すごく」

だが彼はしゃべりながらアントニオのほうを見なかった。ペペはみるみる口数が減っていき、ピンガをあおる回数は不安になるほど増えていった。水みたいに飲むのは大勢の人にとってふつうのことだが、実際は水ではないし、慣れていたとしても、集中力や反射神経がよくなるわけではもちろんない。

また一時間が、きしみと揺れのうちに過ぎた。太陽はまだ左にあって、沈み続けていた。何度か短い、唐突なそれ方があった（試しだろうか、模索だろうか？）が、どれも突き抜けようのない葉の砦の前ですぐにあきらめられ、それからまた進んだ。あの濁った泥の縁で、ますますふらつきながら。ペペはハンドルの上に背を丸め、目は充血し、瓶はもうほとんど空だった。アントニオは本気で心配になりはじめていた。「本当にずいぶん長い回り道ですね……そりゃあ雨のせいで、川の支流が……でも、まあ、なんだかんだで着くんですよね、道路に、なんていったっけ、210号線に、ちょっと遠回りしてるだけで、あとで着くんですよね、道路に着くんですよね？」

「もちろん、すごく長い遠回りだ。沼が多い。着く、ああ……もちろん、心配すんな。ペペは道を知ってる、何度も何度も通った、通ったんだ。沼のことは心配すんな、大将。道はよく知ってる、心配すんな、ほら、見ろ、知ってるんだ」

ペペの手はますますおぼつかなくなり、空になった瓶が床板の上をからからと転がり、太陽はますます低くなり、道の跡はどこにもなく、あるのは沼の縁と、鳴き声と叫び声の響きばかりだった。ああ、俺はいったいどこに来ちまったんだ、こいつは完全に酔いつぶれてる、もう確信した、道に迷ったんだ、俺は本当にバカだった、俺がどこにいるのか誰も知らないんだから、いまにこのまぬけはハンドルに頭をのせて眠っちまう、俺の金がほしかっただけで道なんか知らないんだ、迷ったんだ、日が沈めば沈むほど音が大きくなる、これも知らなかった、森は決して休まないんだ。

ひどく動揺してはいたが、アントニオはもうペペに話しかける勇気がなかった。ペペはいまや手とギアとハンドルにひどく集中しているようだった。ひどく集中しているのに、もう心はそこになかった。太陽はますます左へずれていき、ますます見当ちがいの位置になっていった。止まったほうがいいかもしれない、いま言ってみよう、どうかな、酔っぱ

らってるし、きっとナイフを持ってる、まあいい、それでも言ってみよう、この沼はまったくわけがわからない。そのとき、いきなりはじける音、衝撃、たぶん見えなかった幹か穴だろう、宙返り、すさまじいどすんという音、激突。それから、すべてが止まった。したたる水の音と、森の喧騒。

2.3 森

どんなに思い出そうとしても、アントニオはひっくり返ったジープから離れた瞬間をはっきり思い出せなかった。きっとショック状態だったのだ、頭も打ったのかもしれない。放りだされて藪のなかにぶざまに落ちたあと、打ち身だらけで、動転して、立ちあがったのは覚えていた。ジープのことも、まだゆっくり回っていたタイヤのことも覚えていたし、ペペはあの下で押しつぶされて死んでいるにちがいないと、妙にくぐもった意識で悟ったことも覚えていた。だが歩いて210号線へ向かおうとどうして決めたのかも、どの方向へ歩きだすかを何をもとに選んだのかも覚えていなかった。

リュックも彼といっしょに放りだされたにちがいなく、それを見つけて拾ったにちがいなかった。一時間ほどたって（三十分だろうか、二時間だろうか？）考えがどうにかまとまりを取り戻したとき、彼はそれを背負っていて、想像したこともないほど深い茂みの奥で、滝のような雨に打たれながら、あのいまいましい道路にたどりつくことだけを考えて歩いていた。

車のまわりをうろうろして、場ちがいにも帽子を探していたのを、ぼんやりと思い出した。だが山刀のことを考えたのは、もう何メートルか歩きだしたあとだった。引き返しはしたものの、ジープの残骸の下にペペとピンガといっしょに埋まっていて、とても届きそうにないとすぐにわかった。何時間かたってもっとはっきりした頭で考えなおすと、せめて試してみるべきだったと気づいた。この森を押し分けて進むのは悪夢だったし、夜が来ようとしているいま、身を守るものがキャンプ用の小さなナイフひとつだけだと思うと、ひどく心もとなかった。

どういうわけか、ジープを離れるとき、一時間か、せいぜい二時間で道路に出られると思いこんでいた。だがいまでは、それよりずっと、ずっと長くかかるかもしれないとわかりはじめていた。

三日間の船旅のあいだ、あの油断のならないガンボーネが昼も夜も食べさせた脂ぎったエンパナーダを、ふたつとっておいたことを天に感謝した。それと、半分残った水のボトルと、好物のさくらんぼ味の飴が、彼の食料のすべてだった。そして夜は止まったほうがいいのかもしれないとぼんやり考えているうちに――雨はやむだろう、もちろん、でもきっと眠れやしない、どれだけの動物がいるんだ、あの猿の叫び声を聞けよ、ジャガーは暗くなってから狩りをするのか？――アルマンジーニャのつくるフェイジョアーダが頭に浮かんだ。湯気の立つ黒い煮込み、よく煮えた肉の塊、添えられたオレンジの輪切り。それだけでなく、ふちの欠けたフォーマイカの小さなテーブルふたつ、怪しげな清潔さのグラス、でぶでぶのアルマンジーニャの汗と玉ねぎのにおい、彼女の口ひげまでもが、天国の幻のように思えた。帰ったらすぐ、210号線を見つけて車に乗せてもらって家に帰ったらすぐ、帰ったらすぐフェイジョアーダを腹いっぱい詰めこんで、かわいそうなペペも顔負けなくらいピンガで酔っぱらうんだ、あの飲んだくれの悪党、道も知らなかったくせに、安らかに眠れ、家族はいたんだろうか、気の毒に、早く道路に出て、誰かに埋めに行ってもらわなきゃ。

2.4 出会い

一日じゅう歩いていた。腹に入れたのは、ひからびたエンパナーダひとつと、さくらんぼ味のグミの袋ふたつと、ココナッツふたつだけだった。目にした果物のなかで、毒があるのではと疑わずにすんだのはココナッツだけだったのだ。腹が減り、喉が渇き、ひどく疲れていたが、何よりも、本当にこわくなりはじめていた。何度も計算しなおしたが、事故の場所から正しい方向へ進んでいたなら、とっくに文明のしるしに出くわしているはずだと、もう認めなければならなかった。迷ったとは、どうしても自分に言いたくなかった――アマゾンの森で迷ったんだ、聖人という聖人の神さま、アマゾンの森でだぞ、ここで迷って助かったやつなんているのか、輝けるイエスさま、どうしてよりによって俺が、どうして俺が――だがその点についてたいした幻想は持てなかった。

何時間もたどっているのは、道か、小道か、踏み跡かもしれないし、まったくそうでないかもしれない。たまたま植物が少しまばらな場所や、獣の通り道や、なぜか背の低い草の茂みが、ただ続いているだけということも十分ありえた。だがほかに選びようはなかった。

引き返そうと決めたところで、この一日半に歩いてきた道を逆にたどることなどとうていできなかった。湿った空気の濁ったぬかるみのような熱気でシャツが体に貼りついていたが、脱いで裸の肌をさらに何センチも虫の前にさらすなど考えられなかった。この世にこれほどたくさんの蚊がいるとは夢にも思わなかった。

もうすぐ夕方になるのはわかっていて、昨夜のような夜がもうひと晩来ると思うと耐えられなかった。リュックに腰かけて幹に背をもたせ、そんなものがあるとは思いもしなかったほど完全で絶対的な闇に沈み、物音や葉ずれのたびに目を見開いていた――そして物音や葉ずれや鳴き声やさえずりは数えきれないほどあった。森は昼より闇のなかのほうが生きているように思えた。それに懐中電灯をしょっちゅうちらつかせても（電池はどれくらいもつんだろう、大事にとっておいたほうがいい）なんの役にも立たなかった。小さな光の刃が照らしだすのは、いつも幹と葉のもつればかりだった。

隠れ場所をこしらえなきゃ、と彼は思った、枝で。何から身を守れるわけでもない、もちろんだ、でも少しは落ちつけるかもしれない、眠れさえするかもしれない。小枝で屋根をこしらえて、それから水をひと口飲んで、最後のグミを食べよう。水はまだボトルの底に指二本ぶん残ってる、一度にひと口より多く飲むわけにはいかない（飲めそうな水がほかに見つかるまで、どこかにたどりつくまで、雨が降るまで）、でも日が沈んだらひと口飲む、それまではだめだ、やめておいたほうがいい、口のなかがアスファルトみたいで、リュックが一秒ごとに重くなっていくとしても。

首と肩のあいだに何かを感じて、葉っぱか小枝でも払うつもりで何気なく手を伸ばすと、指が何か巨大な、冷たい、生きたものに触れた。恐怖の金切り声をあげて、彼は手のひらほどもあるクモを振りはらい、おぞましさにほとんど死にそうになりながら、恐慌にかられて走りだした。ほんの数メートル走っただけだった。リュックが重たく背中で跳ね、心臓が狂ったように打っていた。彼は立ち止まり、リュックを落としてその上に座りこみ、疲れと恐怖と嫌悪に震えた。

この物語は、いい終わり方をしない。俺にはわかってる。自然だなんて冗談じゃない、人間と宇宙の調和だなんて冗談じゃない、原初のリズムを取り戻すだなんて冗談じゃない、俺はこのクソったれの森で死ぬんだ、ここで死んで、俺がどこでくたばったのか誰にもわからないままになる、自然だなんて冗談じゃない、ここで飢えと渇きで死ぬんだ、死ぬまでどのくらいかかるんだろう、先に来るのは渇きだ、それくらい誰でも知ってる、でも水はまだ指二本ぶん残ってる、でもクモが、自然のことを考えてたときにはクモのことなん

か考えてなかった、せめてジャガーだったら――ああ、ここにはジャガーもいるんだろうな――ジャガーのほうがいい、でもクモはいやだ、クモに食われて死ぬのはいやだ、それならヘビのほうがましだ、ばあちゃんがよく話してくれたみたいな、イエスキリストの名前を最後まで言い終わる暇もなく死んでるってやつ、クモよりはそっちのほうがましだ。彼はあたりを見回し、生い茂る草のなかにもうヘビが待ち伏せしていないかと目をこらした。考えがばらばらになっていく、暑さ、空腹、疲れ、渇き。膝に肘をついて頭を抱えた。いっそここで死んでしまったほうがいいのかもしれない、どのみち何ができるというのか。

大きなアリの列が、足のすぐ先を小川のように流れていた。彼はぼんやりとそれを眺めた、本当には見ずに。アリたちは種や葉を運びながら行ったり来たりしていた。アントニオはそれが流れ、走っていくのを眺め、動悸がおさまり息がゆっくりともとに戻っていくあいだ、ぼんやりと考えていた。食べられるかもしれない、ドキュメンタリーで見たことがある――ああ、なんて腹が減るんだ、なんて喉が渇くんだ――棒に刺してつかまえれば、ライターで焼けるかもしれない、さあ、細長い棒を探そう、がんばれアントニオ、ここで死を待っているよりましだ、棒を探そう。顔を上げると、五十センチ先に魔女がいた。

彼は凍りつき、呆然とした。やってきた気配もまったくなかった、動きひとつ、物音ひとつ聞こえなかった。一瞬、幻覚かと思ったが、ちがった、それは本物で、現実だった。途方もなくしわだらけで、ひからびた老婆。腰に下げた葉っぱ二枚のほかは裸で、白と灰色の髪のもつれに小枝や木の実や小さな骨を編みこんでいた。片腕に草や樹皮をいっぱいに入れた籠のようなものをかけ、身じろぎもせず、まったく平然と彼を見つめていた。石油のようにつややかな小さな黒い目に、おもしろがるような好奇の光がわずかにひらめいていた。最初の本能、逃げることは、あまりにばかげていて、それはたやすくわかった。彼はその場にとどまって魔女を見つめていた。そのあいだにほかの考えが（森の精霊じゃない、そんなものはいないんだからちがう、これは人間だ）意識のなかへやっとのことで割りこんできて、そしてそれが実際にひとりの女なのだから――水、食べもの、クモからの隠れ場所――これが自分のただひとつの、最後の機会なのだと彼は悟った。

魔女はおだやかに彼を見つめ、もつれた髪の一本一本、ゆがんだサングラス、彼をぐっしょり濡らしている汗、彼の発散する絶望と途方に暮れたにおい、そのすべての細部を検分していた。

時間が過ぎ、それから老婆は動いた。くるりと向きを変え、どこかの目的地へ向かってすたすたと歩きだした。アントニオはまだ迷っていた。ここで死を待とうという気持ちの残りかすが彼を引きとめていた。だが女は何歩か行くと振り返り、彼の目をじっと見つめた。少しばかり彼を笑っている、あの輝く目で。それからまた歩きだし、彼はリュックを拾ってあとについていった。

ふたりは一時間ほど歩いた、あるいはもっとだったかもしれない。彼は時間の感覚をすっかりなくしていて、思いがけないほど身軽に動くしなびた小さな尻についていきながら、片足をもう一方の足の前に出すことだけをしていた。女は二度と振り返らなかった、振り返る必要がなかった。彼のほうがずっと騒がしかったから、見なくても彼がついてきているのが魔女にはわかっていたのだ。

森はぼんやりとして果てしなく思えたが、まったく唐突に開けた。どこからともなく現れた空き地、小屋と煙、そして小鳥のように甲高く叫びながらあちこち走りまわる子どもたちの群れ。全体をひと目見る暇もないうちに、何かが彼の胸をまともに打った。棍棒で殴られたような一撃で、彼はリュックごと尻もちをついた。

子どもたちは、蔓を編んだボールに当たって倒れたぶざまな男に大はしゃぎして笑ったが、笑い声がしずまるにつれて好奇心が取ってかわった。あれはなんだ、白くて青白くてこっけいで奇妙な生きものは、薬師の女はいったいどこであんなものを見つけてきたんだろう。

子どもたちは興味津々で、用心しながら彼のまわりに集まってきた。口のまわりを泥と果物で汚したとても小さな女の子が、おずおずと、でも大胆に、彼の腕の肌に触りにきた。

魔女がそっけない命令をふたつ甲高く発すると、子どもたちは道をあけた。魔女が合図し、アントニオは踏み固められた地面から立ちあがって、その丸い空き地の反対の端にある小屋の陰へ、彼女についていった。

2.5 接触

枝と泥でできた小屋のなかはひどく暗く、しばらくして目が闇に慣れてから、ようやく思ったよりずっと広く、なかに少なくとも二、三十人が座っているのが見えた。白や黒っぽい模様やオウムの羽で、思い思いに身を飾っていた。そのなかに――歯だと思えるものを連ねた長い首飾りをつけているのは彼女ひとりだった――とても年老いた女がいた。あまりにしなびてしわだらけなので、彼を見つけた老婆が花盛りの娘に見えるほどだった。老婆はそのあいだ、かあかあという声とさえずりばかりの、紹介の短い演説のようなものをしていた。アントニオは、自分も何か言ったほうがいいのかもしれないと思った。誰かがすでにここを通ったことがあるかもしれない、宣教師とか。この先住民たちが彼のことばを理解することだってあるかもしれない。「えー、みなさんのすばらしい村にたどりつけてとてもうれしく思います、温かく迎えてくださって感謝しています、それにここまで連れてきてくださったこのご親切なご婦人にもお礼を申しあげます、そして……そして、きっと私たちは完全に仲よくやっていけて、すてきな友情が生まれると思います」

用心するに越したことはない。敵意はなさそうだったが、奥のほうにかなりの数の槍と矢が立てかけてあるのに気づいていたし、男たちはみな石と骨の大きなナイフを腰に下げていた。友情という話題を強調したのは、まったくいい考えだったと彼は思った。

だがすぐに、自分のことばがまったく気づかれずに通りすぎたのがわかった。その場の誰ひとりまばたきもせず、少しでも理解したというそぶりも見せなかった。ただひどく注意深く彼を観察しているだけだった。

それから長老の女が何かをかあかあと言い、ひとりの男が立ちあがって彼のリュックを一度、二度と引っぱった。リュックを下ろせということだとわかった。彼が下ろすと、男はそれを受けとって、彼が一種の女王だろうと思った女の前の地面に置いた。女は小さな鉤のような手を伸ばし、小鳥のような指で留め金をいじりはじめた。アントニオは気をきかせて近寄り――気がきいて礼儀正しいところを見せるんだ、女王に会うのは初めてだけど、逆らわないのが鉄則だっていうのは知ってる、お辞儀のひとつもしたほうがいいんだろうか、そういう習わしなんだろうか――留め金や小さな留め具やファスナーをはずした。するとさっきの男がリュックをひっつかみ、あっさり逆さにして、それから中身をひとつずつ取りだして老婆に渡した。老婆はそれをじっくり調べてから隣の者に渡した。

靴、パンツ、カミソリ、靴下、ひとつ残らずの品物が、手から手へ渡され、触られ、振られ、裏返され、念入りに嗅がれた。アントニオはカメラのことがひどく気がかりだったが、カメラはみなにかなり無関心に迎えられ、さっさとわきへのけられた。そのかわり、その場の人々は彼のフィルムをとてもおもしろがった。蓋を開けてコダクロームやフジフイルムの名の入った派手な色の小さな筒を取りだすと、彼らは長いことそれを論評して、さんざん笑った。

リュックの中身がすべて全員の手を通り、しかるべく確かめられたいま、アントニオはそこに突っ立って見ているのが少しばかばかしくなってきた。だがもう、女君主の前にいるのだと思いこんでいたので、許しも得ずに座るのは無作法ではないかと心配だった。ちょうどそのとき、女が短く横柄なさえずりを発し、彼はシャツのすそをかなり乱暴に引っぱられるのを感じた。男、わりと若くて筋骨たくましい男（侍従か、高官か、衛兵の長か、あるいは――なんと――世継ぎの王子か？）が、何度も何度も引っぱり、やっとアントニオはシャツを脱がなければならないのだと気づいた。ええ、もちろん、はいどうぞ。
えっ、ズボンもですか？　わかった、引っぱらないで、脱ぐから、靴と靴下を脱ぐまで待って、ちょっとだけ、はい、できた……いや、でも、パンツは……ちょっと、何するんだ、そんなことしたら破れる……わかった、わかった、失礼しました陛下、お怒りにならないで、すっかり脱ぎましたよ、これで満足ですか？

実際、生まれたままの姿になってしまうと、場の空気はめっきりなごんだ。考えてみれば彼らだって、葉っぱや樹皮を少しつけているほかは裸なのだ。服を着た男なんて、たぶん彼らには何かちょっといかがわしいものに見えたのだろう。こんなに念入りに調べたのは、俺が何か武器を持っていないか確かめたかったからでもあるんだろうな、と彼は思った、まあ無理もない。実際、彼がおおむね無害だと確かめてしまうと、彼らは彼のことをすっかり忘れてしまったようだった。小鍋やフィルムやTシャツを互いに回しあっていて、もう誰も彼に目もくれなかった。

だが彼のほうは、こうして青虫みたいに裸で立っていると、無害すぎる気がした、無防備と言ってもいい。女帝がそれを無作法だと思わないかと横目でうかがいながら、彼はそろそろと隅に座りこみ、膝を抱えた。

長老たちが彼の靴紐やボールペンを髪に編みこみながら和やかにおしゃべりしているうちに、日が暮れてきて、外から肉を焼くにおいがしてくる気がした。腹が鳴り、口に唾がたまった。何かちょっとは食べさせてくれるよな？　もう友だちなんだ、いっしょにリュックを空にして、フィルムで笑いあって、ここでみんなで裸でいる、ほとんど家族みたいなもんだ、何か食べさせてくれるさ、きっと。もっとも何をだかはよくわからない、この人たちは何を食べるんだろう、バク、ヘビ、アルマジロ？　毛のついたアリクイだって文句ひとつ言わずに食べてやる、腹が減って死にそうだ。それに一瞬ぞっとしたっけ、ばかだな、服を脱げって言われたとき、白人が煮えている大鍋の漫画の絵が頭をよぎった、まったく俺はなんてまぬけなんだ、何を考えてるんだ、人食いなんていまじゃ漫画のなかにしかいない、それかひょっとすると、ひょっとすると、せいぜい、どこか人里離れた知られざる部族くらいのもんだ、アマゾンの森の奥深……まあいい、バクのことを考えるほうがましだ、やわらかいのかな、どうやって料理するんだろう。

隣の女が彼のズボンを何気なく膝にのせたまま、隣の小柄な老婆と熱心にさえずりあっているのに気づいた。老婆は白髪のもつれに彼の使い捨てカミソリをひとつ差していて、ときどき気どった手つきでそれを直していた。ふたりはひどく熱中していて、彼のことはすっかり忘れているようだったので、彼は思いきってズボンを取り返そうと手を伸ばした。触れることすらできないうちに、ヘビのようにすばやく、がっしりした年配の男が飛びかかって彼の手を押さえ、つややかに研がれた三十センチの石の刃を鼻先で振ってみせた。

アントニオは両手を上げて身を引き、あわてて弁明した。「もちろん！　もちろん、あなたがたのものです！　もちろん、さしあげたんです！　喜んで、誓います、服も、靴も、石けんも、ペンも、みんなあなたがたのものです、このすてきな、すてきな友情のしるしにお贈りできるのは、私にとって名誉であり喜びです！」

彼は隅に引っこみ、また膝を抱えて、観念した。全部やるよ、ほんとに、せめてかじるネズミの脚一本でもくれるなら。

2.6 村

ネズミの脚ではなかった。もっとも何の動物の肉なのか、ついにわからずじまいだったが。黒くて脂っぽいその肉を、数分後に三、四人の少年少女が、葉と枝を編んだ盆にのせて小屋へ運んできた。

アントニオはほとんど唾液におぼれそうになりながら、全員が取り分けるのを待ち、それからさらに待ち、またさらに待った。あの大きなナイフをもう一度間近で見たくはまったくなかった。ようやくカミソリ夫人が彼に気づいて、肉を指さして合図してくれた。あたりを見まわすと、その場の何人かが、女君主も含めて、取って食べろと示していた。

彼はありがたく盆に飛びついた。肉は甘ったるく、紐のように固くて筋っぽかったが、これほどおいしい肉は食べたことがないように思えた。そのあいだに若者たちは、半分に割ったココナッツをいくつも運んできていた。水の入ったものもあった――どんな濁った、泥だらけの、緑がかった、ワニやヒキガエルやヘビのうようよする川から汲んできたのか、考えないほうがいい、でもかまうもんか、喉がからからで、そんなことはまったく考えないことにしよう――ほかのものにはシロップのような混ぜものがいっぱいに入っていて、食卓をともにする人々はそれがとても気に入っているようだった。それが回ってくると、彼はいささか疑いながら味見したが、妙なことに気に入った。香りがよく、とても甘い。何の植物を発酵させたものかと立ち止まって考えたりはしなかった。甘いものには目がなく、彼は何度も長々とすすった。

ぼんやりと目を覚ましたときには、日はもう高く昇っているはずで、からっぽの小屋の外で照りつけていた。あの飲みものが何であれ、気をつけなければならないと、ふらつきながら立ちあがろうとして彼は判断した。たっぷり飲んだという記憶のあとは、まったく何も覚えていなかった。

あたりを見まわした。彼の持ちものは、リュックも含めて、すっかり消えていた。メモ帳だけは、どうやら誰の興味も引かなかったようで、踏み固められた土の床に置き去りになっていた。彼はそれを拾い、まだずきずきと混乱した頭で戸口から顔を出した。女たちや娘たちが小屋を出たり入ったりし、あらゆる年ごろの大勢の子どもたちが、とても動きの激しい遊びをしながらあちこち狂ったように走りまわっていた。空き地の奥では、皇太后とカミソリ夫人を含む年寄りの一団が座って枝や樹皮をいじっていた。たぶん何かをこしらえているのだろう。男はひとりも見えなかった。たぶん狩りか漁か、森の男たちのほかの用事に出かけているのだろう。

彼を見つけるとすぐに、子どもたちは遊びをやめて、物珍しそうにまわりに群がってきた。真っ黒に日焼けしたひょろりとした少年は、彼の左右ちぐはぐな靴下を二枚、首に結んでいて、小さな女の子は彼の水色のパンツを頭にかぶっていた。もちろん、誰ひとり彼の裸を少しも気にしていなかったが、アントニオはこんなふうにさらしものになっているのが本当に落ちつかなかった。そこで彼は女の子の頭からそっとパンツを取った。すると女の子はとても甲高い悲鳴をあげ、声をかぎりにわめきだした。

その叫び声に、おそろしげな顔つきの母親がふたりほど小屋の戸口から顔を出した。アントニオはすっかりおびえながらも、手に入れたものを手放す気はなく、メモ帳から急いで一枚破りとると、ほんの数秒で紙の舟を折って女の子に差しだした。女の子は少しとまどったようにそれを見たが、ありがたいことに悲鳴はぴたりとやみ、婦人たちは安心してそれぞれの仕事に戻っていった。

パンツをはいたとたん、アントニオはずっと気分がよくなり、すっかりくつろいだ気持ちになった。だが女の子が舟を手のなかでひっくり返して、じっと見つめているのに気づい

た。どうやらとても気に入ったものの、それが何なのかわからないらしかった。小屋の横に大きな水たまりがあった。彼は――もし贈りものを手から取りあげようとしたら、このおちびさんはまたサイレンを鳴らしはじめるだろうと想像して――もう一枚破りとってもうひとつ舟を折り、水面に浮かべた。

ありったけの注意で彼を見守っていた子どもたちの小さな群れが、それが何なのかを理解するには数秒で十分だった。子どもたちは笑い、さえずり、その小さな白いカヌーに見るからに大喜びだった。すぐにふたつ靴下が、ひどく汚れた小さな手を差しだして進み出た。三十分後、メモ帳のページの半分はなくなり、子どもたちはひとりひとり自分の舟を持っていて、アントニオは感謝のしるしに、皮をむいた小枝を一本、木の実をひとつかみ、ターコイズ色のカエルを一匹、ゴキブリを二匹もらっていた。

そして部族の子どもたち全員の、無条件の支持を勝ちとっていた。

2.7 探検

子どもたちが水たまりでボートレースを考えだすのにまかせて、アントニオは、パンツを取り戻したのだから、残りの荷物がどこへ行ったのか探ってみるべきだろうと考えた。そこで彼は空き地をぶらぶら歩きはじめ、踏み固められた広場をほとんどぐるりと取り囲んでいる大きな小屋の陰を、あちこちのぞいてまわった。用心しながら動いていた。自分の立場が客なのか捕虜なのか、はっきりわからなかったし、いちばんいやな形でそれを知る危険は冒したくなかった。

最初に見つけたのはリュックで、薪がぎっしり詰めこまれて、それを背負っている小柄な女がほとんど隠れてしまうほどだった。すぐそのあとが彼のお気に入りのTシャツで、両端を結ばれて小さなハンモックのように吊るされ、黄色く揺れながら赤ん坊をあやしていた。ほかの服の跡はなかった。何に使われたのか知れたものではない。クッションか、ターバンか、埃をはらう布か、穀物を入れる袋か、わかるもんか。そのかわり、隅に放りだされた石けんを見つけた。深い歯形がついていたが、オーデコロンの味はどうやらお気に召さなかったらしい。

最後に空き地の奥で腕時計も見つけた。生まれて数時間の赤ん坊に乳をやっている娘の褐色の手首で、ぶらぶら揺れながらきらめいていた。年寄りたちが新しい赤ん坊を祝ってその異国の宝石を贈ったのだろうと彼は思った。どうして取りあげられよう？

いいさ、何も取りあげやしない、たいして値打ちのあるものじゃないんだから、全部くれてやる、怒らせさえしなければいい。何日かして迎えが来て家に帰るときになったら、そのとき考えよう、せめてカメラくらいは取り戻したいけど、まあそのときだ。

村の最初の見回り――といっても実のところ、六つの共同の小屋とそれに囲まれた空き地のほかには、たいしたものは何もなかった――を、たいした成果もなく終えてしまうと、アントニオは何をしたらいいのかよくわからなかった。彼は、広くて踏み固められているように見える小道に沿って森へ入ってみることにした。一日じゅう子どもや若者が行ったり来たりしている道だった。子どもたちが行くのなら、そんなに危なくはないだろう？　アントニオと子どもたちには、たしかにひとつちがいがあった。彼が小道を歩くと耳をつんざくような音がしたが、子どもたちはもう音を立てずに動くよう慣らされていたのだ。どこかに猛獣がいたら、俺の立てるこの騒音に前脚で耳をふさいでるだろうな……でもあの子たちはどうやってるんだ？　これは枯れ枝だ、どうやったら踏まずにすむんだ？　それに裸足でどうして足を怪我しないんだ、いっそ棘を踏む前に引き返そうか（葉のあいだに隠れたヘビ、ムカデ）。

アントニオはいきなり、大人の男の声だとしても不思議ではないさえずりやわめき声を耳にした。もしかして、あいつらの狩り場に来ちまったのかな、何かへまをしてなきゃいいけど。何分かのあいだ、男たちと出くわしたらボス猿どうしの争いのようなものになりはしないかと恐れて、どうしたものか迷っていたが、まさか残りの人生をずっと森の真ん中で立ちつくして過ごすわけにもいかないので、勇気を出して開けた場所へ出た。

そこはおおよそ長方形の、人の手で切り開かれた広い空き地で、二辺を村の小屋のと似た柵のようなもので仕切られ、その縁で何人かの女とたくさんの子どもたちが、ひとつの方向をじっと見つめていた。アントニオはその視線を追い、純粋な恐怖の泡のなかへ放りこまれた。ひとりの男が警告するような叫び声をあげ、空き地の奥で十人ほどの男たちが四方八方へ逃げていくのが見えた。アントニオは、脳にじかにアドレナリンを注射されたような気がした。脳は三秒のあいだに、この総崩れの原因になりえたものを、ありうるものすべて――ありえないものもいくつか――はじきだした。ジャガーの侵入、敵の部族の襲撃、大喧嘩（そうだ、喧嘩だっていいじゃないか？　先住民だって、喧嘩っ早いばかのひ

とりやふたりはいるだろう？）、彼がさらわれたと思った軍隊が救出に来た、そうだ、たぶん軍隊だ、なんてことだ、俺のせいで皆殺しにされてる、見ろよあの先住民、なんていいボールの蹴り方だ、うちにもあんなクロスを上げるやつがいればなあ。

えっ？　と彼は自分に問いかけた。

脈拍が急に落ちつき、体のこわばりが解けはじめると、アントニオはいくつかのことに気づいた。逃げているのは大人の男たちだけで、子どもたちは彼らを熱心に見つめ、女たちは興奮してさえずりあっているが、少しもおびえていないこと。叫んでいた男が、ロングクロスにそっくりなやり方で、ボールのようなものを蹴ったこと。ボールを二人ほどの男が追いかけ、そのひとりがそれを奪ったように見えたこと。その男が今度は叫び、ほかの全員がまた空き地じゅうを走りまわったこと。新しく叫んだ男がボールを蹴り（最初の男ほどうまくはないと、アントニオには思えた）、また奪いあいが始まったこと。

非常事態なんかじゃない。遊んでるんだ。ああ神さま、ボールで遊んでるんだ。

2.8 ことば

村をうろつきながら、アントニオはおずおずと大きな小屋のひとつのなかをのぞいてみたことがあった。蔓を編んだハンモックで年配の男が昼寝をしていて、別のハンモックでは生後数か月の小さな子がふたり、からみあって眠っていた。ほかにも吊るされたまま空っぽのハンモックがいくつかあり、たくさんが丸めて地面に置かれていた。小屋は本当に大きく、たぶん八十人ほどがゆうゆうと眠れるだろうと彼は見積もった。だから家族ごとに分かれているわけではないのは確かだった。ある小屋ではなく別の小屋で寝るのに何か基準があるのだろうか、それとも夜が来たらそれぞれが好きな小屋を選び、どこでもいい梁にハンモックを吊るしてそこで眠るのだろうか、と彼は考えた。もしそうなら俺には向いてない、何かわかるまでは、いつも同じ場所で寝よう、とアントニオは決めた。それに、ハンモックだって持ってないんだ、また地べたで寝るしかないだろう、ひとつ貸してもらおうとしたほうがいいのかどうか、こんなふうに身ぶりだけで説明できるかどうかもわからない。

ところがその問題は、数時間後、日が暮れるころにひとりでに片づいた。女がふたり近づいてきて、彼の手にハンモックの包みを押しつけ、それから彼の両腕をとって小屋のほうへ押しやろうとしたのだ。どうしてもう少し外にいてはいけないのかわからず――いい晩で、月の下で何百万もの虫が鳴いていた――彼は抵抗し、ハンモックをありがとう、ご親切に、でももう少ししたら引きあげるつもりだったんです、と説明しようとしたが、ふたりは手を離すつもりはないらしく、ますますしつこく押してきた。ひどくばつが悪く、しかもパンツ一枚という格好もまるで助けにならず、彼は抗議めいたことを言おうとしたが、ふたりは甲高い叫び声で答えた。「マーーーイアーーー！」それには手の動きがともなっていて、握ったこぶしから指がすばやく開いて、五の数を示すような形になった。「マーーーイアーーー！」アントニオは、その声とその身ぶりが何を意味するにせよ、すぐに降参した。

ひとつには、彼がしぶっているせいで、村のますます多くの人の注意を引いてしまい、その人たちも「マーーーイアーーー！」の合唱に加わって、手の指をいっせいにぱっと開いていたからだ。もうひとつには、彼らの様子が、少しおもしろがっているところから真剣なところへ、さらには心配そうなところへと移っていったからだ。「マーーーイアーーー！」

小屋のなかに入ると、寝場所が同心円状に配置されているのがわかった。いちばん外側では年寄りたちが眠り、真ん中では子どもたちがそれぞれ小さなハンモックで眠っていて、そこからやがて腕や脚がはみだして、互いにはまりこんで眠る小さな体の、ほどきようのないもつれになるのだった。そのふたつの輪のあいだで大人たちが眠っていた。見たところなんの決まりもなく、まったく入り乱れて。一瞬たりとも目を閉じるもんか、というのが、石のように眠りに落ちる前のアントニオの最後の考えだった。

「お母さん、あの変な人は悪い人？」

「いいえ、悪い人じゃないわ、変なだけ。それに武器も持ってないし、ふにゃふにゃで白いでしょう、どうして危ないなんてことがある？　年寄りたちが言うには、ずっと昔にも、あの黄色い人がひとり来たことがあるんですって。おじいちゃんがその話をしてくれたし、薬師の女は子どものころにその人を見たんじゃないかしら。悪い人じゃなかったけど、そのあとすぐに病気になって、あっというまに死んじゃったの」

「あの人、いろいろくれたよ」

「何を？」

「小さなカヌー、白い葉っぱで自分でつくったんだ。見て」

「かわいいわね。ほら、親切だったでしょう、悪い人じゃないのよ」

「ここに置いておいてもいい？」

「決めるのは年寄りたちだけど、ええ、たぶん置いておくことになると思うわ。でもあんまりなつかないでね。言ったでしょう、あの人たちはか弱くて、すぐ死んじゃうの。そうしたら悲しくなるわよ」

何日かたつと、状況はどうにか落ちついてきた。いささか逆説的な形ではあったが。年寄りたち、それに大人たちはおおむね、いつもあれこれ忙しくしていて、彼を無視するつもりなどまったくなく、それどころかおもしろがって興味深そうに観察していたのだが、意思の疎通がまったくできず、しかも彼らから見ればアントニオがまるで何ひとつできないせいで、手を差しのべようという気持ちもしばしばくじかれてしまうのだった。

自分は語学に向いていると思っていたのに、わかるのは笑い声だけだった。それも、笑っているのだとしての話だ。

それには最初の何回かの朝、目覚めのときから気づいていた。まわりの男や女がひとり、またひとりと起きだしても、彼は長いこと目を閉じたまま横になって、まわりの世界に耳を開いていた。そして村の人口は多いのに、耳に聞こえてくるのは群衆の音ではなく、ほとんど人間のものとも思えなかった。彼らは口笛や、甲高い声を出したり、舌を鳴らしたり、ほかにも何をしているのやら、とにかくそうやって話していて、その結果はおそろしく自然の音そのものだった。小屋のなかにいて、脳が組み立てなおせるのは、鳥の歌、カエル、たぶん猿、小さな滝、キツツキを思わせるもっと乾いた音の連続、風に持ちあげられる木の葉、そのほか何十もの音ばかりで、それは彼の耳には信じられないことだったが、その人々のことばを形づくっていた。

最初は森の音だと思い、小屋にひとり残されて、深い孤独に締めつけられた。みんな行っちまった、俺をここに置いていったんだ。それから気を取りなおして自分も外へ出てみると、少しもひとりではなかった。女たちはもう蔓を編んだり、すりつぶしたり、彫ったりしていたし、子どもたちはびしょ濡れになって小川から戻ってきて、コマドリのようにさえずっていたし、何人かの男は、どこへやら村を出ていく前に、深い舌打ちやかあかあという声で立ち話をしていた。

たいしてすることもなく、意思を通わせることもできないアントニオは、たいていの時間を村をさまよって過ごすことになった。村人たちは彼を注意深く見張っていて、すぐに彼に対してとても保護者めいた態度をとるようになった。下生えにもぐりこんで村から数メートル離れることすら、彼には事実上不可能で、最初の何日か、村人たちはあらゆる方法で彼の世話をしなければならなかった。食べさせ、飲ませ、しばしば虫や毒ヘビから守ってやらなければならなかった。そのうち年寄りたちのあいだで、どうするかの意見がまとまった。

アントニオは子どものようなものだから、子どもたちといっしょにいるべきだ。そして彼がまずなじみはじめたのが、まさにいつも彼を取り巻いている子どもたちの笑い声だった。子どもたちはスズメのように数が多くて騒がしく、すぐに笑った。木の葉でできたあのボールを追いかけている子どもたちの一団に彼が近づくと、子どもたちは物珍しそうに立ち止まり、やがてひとりが進み出て指先で彼に触れ、それから振り返って甲高い声でみんなに何か言い、抑えきれない笑いを巻き起こした。そこからは、アントニオは彼らの意味のわからないさえずりの騒ぎにぐるりと包まれた。

彼は子どもたちにどこへでもついていくようになった。ある子のおかげで、みんなが飲み水を汲みに行く、川の静かな支流を見つけたし、同じ子、足がとても速くて目のきく小さな男の子のおかげで、少しきれいな水を飲むためのある種の葉の使い方をすぐに覚えた。ふたりの少女のおかげで、食べられる果物や木の実を少なくとも十種類ほど見分けられるようになり、彼女たちは――おびえと嫌悪のまちがえようのないしかめ面で――ぜったいに触ってはいけないものを教えてくれた。子どもたちといっしょに、ボールをつくるための葉を木からむしりに行き、彼があとをつけていたときに石を正確に投げつけて狙い撃ちにした年上の少年ふたりのおかげで、どこでどのように用を足すのが正しいとされているのかを知った。

森の夕暮れは突然やってきた。太陽は決して見えることのない地平線へ沈んでいき、一分前には光の斑の群島が下生えを照らしていた場所が、一分後、太陽の角度がほんの数度変わっただけで、ほとんど真っ暗になってしまうのだった。アントニオは、川へ涼みに行って、水面すれすれを追いかけあう二匹の巨大な蝶を眺めて遅くなった帰り道に、この突然の影に不意をつかれたことがあった。少し前には広くて歩きやすく見えた小道が、ほんの数秒で暗い洞窟の入口に変わってしまった。目が慣れなきゃ、すぐだ、と彼は自分に言いきかせて、ちょっと立ち止まった。甲高い叫び声が聞こえ、どこからともなくがっしりした娘が現れて、長い棒で、彼がうっかり手をつこうとしていた幹を激しく打ちすえるのに、ちょうど十分なだけの時間だった。

だが棒が立てた音は、木が木を打つ音ではなく、卵が割れて四方に飛び散る音のようだった。急に体じゅうを駆けめぐりはじめたアドレナリンで研ぎすまされた目に、棒の下で、彼の手よりわずかに大きい色とりどりのクモが樹皮の上でつぶれている姿が見えた。まさに彼が手をつこうとしていた場所だった。ほかにも三、四匹のクモが、うち一匹は本当に巨大で、幹を急いで降りてくるところだった。アントニオは凍りついたまま娘のほうを振り向いた。娘は燃えるような目で彼を見て、手をつかむと引っぱっていった。

あっというまにふたりは村の空き地に戻っていた。そこではまだ、木々の茂った屋根の切れ目からたくさんの光が射しこんでいた。魔女が見るからに心配そうにふたりを待っていて、小道から出てくるのを見ると顔をほころばせた。

アントニオは何か尋ねたかったが、問いを組み立てる方法がなかった。炎の目の娘はゆっくりと彼の手を離し――あまりに強く握っていたので、彼の手はじんじんしていた――言いようのない表情で、長いこと彼を見つめ続けた。

「マーーーイアーーー！」と、やっと彼女は、手を急にぱっと開くいつもの身ぶりとともに言った。「マーーーイアーーー！」

「マーーーイアーーー！」と彼は彼女の身ぶりをまねながら繰りかえしてみた。
「マーーーイアーーー！　あのクモのことなんだ、わかった、わかったよ。夜になったら、あいつらから身を守るために小屋に引きあげるんだ、やっとわかった……マーーーイアーーー！」脚を震わせながら、彼はもう一度、もっと弱々しく繰りかえした。

炎の目はもう少しだけ彼を見つめていたが、それから魔女のほうを向いた。魔女が何か言うと、彼女は満足したように見え、姿を消した。

2.9 試み

最初の何日かを、アントニオはただの見物人として過ごしていた。いちばんの目標は、ジャガーに食われないこと、アナコンダに締め殺されないこと、毒で死なないこと、ほかにも「ないこと」を千も並べて、誰かが（両親だろうか？　学校だろうか？　セニョール・イナシオだろうか？）きっと組織してくれた救助隊を待つことだった。迎えに来てもらうのを待つあいだ、彼は興味津々で村をうろつき、自分とはこれほどちがうこの人々の風習や習慣を間近で知る、またとない機会を利用していた。

だが彼は倫理的なジレンマも抱えていた。じきにいなくなるのだから、彼らの暮らしに与える影響はできるだけ小さくしたかった。たとえば、救助が着いたときに何が起きるだろうと考えた。迎えられ方からは、自分が彼らが初めて目にした白人なのかどうか、アントニオにはわからなかったが、多くの白人を、それも最近見たことがないのは確かだった。彼らの暮らしぶりには、現代世界の技術と接触したことをうかがわせるものは何ひとつなかった。

けれども日がたつにつれて、救助に来るのは結局のところそう簡単ではないのかもしれないと思いはじめた。見つけてもらうまでに何週間、ひょっとすると何か月もかかるかもしれない。そこで彼は、迎え入れてくれた（とくに熱烈にではなかったかもしれないが、少なくとも敵意をもってではなかった、と言ってよさそうだった）感謝のしるしに、もてなしてくれた人々に何を教えられるだろうと考えはじめた。

だが、まさに、それはまったく簡単ではなかった。最初に頭に浮かんだことのひとつは、手を洗うことの大切さだった。だが、こちらのことばをひとことも話さず、ある意味では先史時代に生きている相手に、なぜそうするのが役に立つのか説明してみるがいい。細菌の存在を説明してみるがいい。水の確保は問題ではなさそうだったが、それでもアントニオは、彼らの目には手を洗うのがばかげたむだに見えるかもしれないと考え、見合わせることにした。

ほかの山ほどのこと、マカパでの暮らしをちりばめていたほとんどすべての物は、論外だった。使い道がわからないだろうからというより、彼自身がそれをつくれないからだった。俺は何もできない、とアントニオはそのころ何度も何度も思った。ときにはそれを笑いながら、もっとしばしば、かすかな苦さとともに。

料理の仕方に何か新しい工夫を持ちこむことはできたかもしれないが、どうだろう、彼らには合う酵素がないかもしれない。先住民がお前につけた名前は？　「村じゅうに下痢をさせた者」。それに結局、俺がイグアナの料理の仕方の何を知ってるっていうんだ？　近くの川に小さなダムを築くこともできたかもしれないが、もしそれがジャガーの水飲み場になってしまったら？　思春期の記憶をたどれば、結び目についての知識をいくらか伝えられたかもしれないが、小屋はもうそれだけで頑丈そうだったし、いずれにしても、その考えを組み立て終わらないうちに、もう新しい先住民の名前の候補が頭に浮かんでいた。「すべてを崩した者」。

日時計。日時計なら害はないだろう。でもこの人たちが日時計なんかもらってどうする？　あのボール遊びの試合で、時間を計るのに使えるかもしれないか？　そうだ、それだ。彼らのスポーツに何か新しい工夫を持ちこめばいい。不都合な点は見当たらない。

そうしてある日、どんな工夫を持ちこもうかと考えているとき、子どもが蹴った、葉と蔓と泥（泥であることを祈った）のボールが足もとへ転がってきて、彼はこのもてなし上手な先住民たちに何を贈りたいかを悟った。

古代にボールがどうやってつくられていたのか、いくらかの知識はあった。何か月か前に生徒たちのためにそのテーマで授業を準備したのだ。だが言うは易く、行うは難し、そのあいだには、内臓を使わなければならないカピバラか、バクか、ほかの手ごろな大きさの動物が一匹横たわっていた。それから、それをつかまえ、殺し、腹を裂き、きれいにするという問題もあった。夢見がちになってよいなら、どれもやってやれなくはない作業に思えた。だが最後の、肝心かなめの作業、それだけはだめだった。この世のありったけの楽観をもってしても、バクの内臓に息を吹きこむ勇気が自分にあるとは想像できなかった。

アントニオはとりとめのない空想からわれに返り、ボールを蹴った子ども、まんまるほっぺが、遊びを続けるためにボールを返してもらうのを、数歩先で待っているのに気づいた。アントニオはさびしい笑みを浮かべてボールを差しだし、自分の目に涙がにじんでいるのに気づいた。

少し顔を向けると、小さな女の子が果物を差しだしていた。慰めの果物ってところかな？そうでないなら、そうであるべきだ、とアントニオはひと口目の味をかみしめながら思った。もう気分はよくなっていたが、同時に、あの無力感、役立たずだという感じを、すっかり追い払うことはできなかった。

ふた口目、味を確かめるためにいつもより長く口のなかにとどめているとき、種に気づいて、ひとつの考えがひらめいた。彼は種をひとつかみ手にとり、果肉をていねいに取り除いて、開いた手を女の子に見せた。よく見てごらん、お嬢ちゃん。見て、覚えておくんだよ。女の子のまなざしが「見たよ」から「で、どうするの？」に変わると（あるいは彼にはそう思えると）、アントニオは地面に小さな穴を掘って種を埋めた。また女の子の目を探し、「わかった」というまなざしを待った。それから、木々の天井の葉のあいだから射しこむ、高い空の太陽を指さし、「何日もたつ」と解釈してもらえることを願った身ぶりを、いくつかしてみせた。種が下に眠っている小さな盛り土に最後の目をやり、「植物が育つ」という身ぶりをした（ホラー好きの映画通なら、すぐさま「ゾンビの手が指を動かしながら地面から出てくる」と解釈したかもしれない）。

ずいぶん前に見たイタリア映画を思い出した。時間をさかのぼったふたりの男が、レオナルド・ダ・ヴィンチにさえ何ひとつ説明できない映画だった。わからないよ、お嬢ちゃん、ひょっとしたら僕はあの連中よりうまく説明できたかもしれないし、君はレオナルドより賢いかもしれない、もし覚えていて、僕が見せたことがわかったなら、君は君の民の最初の農民になるかもしれないね。

女の子は彼にほほえんだ。少し離れたところでひとりの男と話しながら彼を見ていた魔女も、ほほえんだように彼には思えた。

「ほら？　親切でしょう」

「そうかもしれん、だがばかでもある。アラシに種まきを教えてる。まるでわしらにできないみたいに」

「でも、たぶん知らないのよ、あの人のような変わり者たちは、覚えたばかりなのかもしれない。たぶん、どうしたら役に立てるか、わかろうとしているだけよ」

2.10 アリ・ジャガー

ヤマンデは状況を見きわめていた。いや、ちがう、ヤマンデはこれ見よがしに状況を見きわめていた。いや、それもちがう、ヤマンデはこれ見よがしに状況を検討しているふりをしていたが、実際には見きわめることなど何もなかった。年上の少年たち抜きでアリ・ジャガーをやると、毎回決まってこうなるのだった。動物の王国の階段をいちばん速くのぼっていくのは彼とピアタで、ふたりがサルにたどりついたとき、ほかの子たちはまだチョウか、カメか、せいぜいアルマジロなので、またしても勝負はヤマンデとピアタのふたりのあいだの問題になるのは明らかだった。

実を言うと、このところふたつの変化があった。ひとつは、モアシルも、とりわけ勇気と奇妙な飛びこみのおかげで、頭角を現しはじめたことだ。まだふたりの水準には達していなかったが、ヤマンデは、ピアタを混乱させて手こずらせるために、彼を戦略的に利用する方法を練っていた。ふたつ目の変化は、観客のいるところで遊ぶようになったことだ。変わり者が、たくさんの変わったところのなかでもとりわけ、彼らが遊んでいるのをよく見に来るようになったのだ。ほかの子どものなかには気後れする者もいた。大人に見られながら遊ぶことには慣れていなかったからだ。だが変わり者は体つきだけが大人のようなものだった（あのでたらめな色は別として）。それ以外は、どこからどう見ても小さな子どもで、カウエよりも小さいくらいだった。カウエは意地になって彼らと遊んでいたが、変身の木に当てられるほどの脚の力がまだないので、ずっとアリのままだった。変わり者が小さな子どもに見えるのは、ことばも話せず、村の暮らしの役に立つことが何ひとつできないからだった。

どうしてあんなに背が伸びるまで生きのびてこられたのか謎だったが、あの色と何か関係があるのかもしれなかった。子どもと共通するもうひとつのところは好奇心だった。見ることだけが彼の仕事のようだった。会うといつも何かを見ていた。機を織る者、食べものをこしらえる者、ときには漁や川へ水汲みに行く者のあとをついていった。だが何よりも、彼らが遊ぶのを見て時間を過ごしていた。ヤマンデは、何もできないうえに、変わり者は遊びも何ひとつ知らないのだろうかと思った。

僕たちの遊びの決まりがわかるかな。たぶんわかる、すごく簡単だから。みんなアリから始める。それからボールを蹴って、変身の木に当てようとする。当てた者はひとつ上の動物に変身する。イモムシならチョウになる、それからカメ、アルマジロ、バク、カピバラ、サル、カイマン、そして最後にジャガー。それから自分のボールを取りに走って、家へ戻らなきゃならない。そのとき番人が自分のボールをぶつけてくることがあって、当てられたらひとつ下の動物に戻って、新しい番人になる。最初にジャガーになった者が勝ち。

ヤマンデは頭のなかで変わり者に遊び方を説明していることに気づき、われに返って、いまやっている勝負に集中しなおした。その前に、こう思わずにはいられなかったが。ことばがわからないのは残念だな、遊び方を説明してやれたら、あの人もいっしょに遊べるかもしれないのに、そうしたら少しは楽しめるだろうに！

その回の番人だったピアタは、ヤマンデを見ながら、ひとりでくすくす笑っていた。見ろよ、考えこむふりなんかして、何をするかわからないとでもいうみたいに。

モアシルはもう木に当ててサルに変身し、ふたりに追いついていた。だがいまはヤマンデの番で、この回の最後の蹴り手だった。よほどのことがないかぎり、ヤマンデは木に当ててカイマンになるだろう。彼が決めなければならないのは、あとで取りに行かなければならないボールを、どちらの側に落とすかだけだった。いちばん賢いのは、ほかの子たちのボールの近くに落とすことだった。ピアタは仲間うちでいちばん強いシュートを打ち、そ

のせいでいつもみんながいっせいに逃げまどう。その混乱のなかでは、特定のひとりを狙うのは簡単ではない、相手がヤマンデのように素早いならなおさらだ。だがそのあたりにはカウエのボールもあって、ヤマンデが、自分のシュートが外れていちばん小さな子にまともに当たる危険を冒したくないことを、ピアタはよく知っていた。

好きなだけ考えろよ、親友、どこへ蹴るかなんて、ふたりともよくわかってるんだから。

ヤマンデには、カウエのボールの近くにボールを落とせば、ピアタは小さな子に当てる危険を避けて誰か別の子を狙うだろうと、よくわかっていた。だがそれは彼には卑怯な手に思えて、いつものように、それを使おうとはしなかった。彼は狙いを定め、鋭く正確なシュートでボールを蹴り、変身の木の右側に当てた。そのせいでボールは、ほかの子どもたちのボールからかなり離れたところに落ちた。ピアタのシュートをかわす構えをしながらボールを取りに走っていくとき、彼は目の端で変わり者のほうに目をやった。変わり者がほほえんでいるように見えた。

2.11 時間

生まれてからずっと赤道の上に住んでいたのに、本当にそれを意識したことは一度もなかった。一日の長さはいつも同じで、暗くなるのはいつも同じ時刻で、季節の移り変わりに気づくすべはまったくない。

町ではちがった。時計や締め切り、カレンダーや手帳、仕事のリズム、リーグ戦、祝日や記念日があって、時間をくっきりした区切りに切り分けていた。だがここ、森のなかでは、日々は見分けもつかずに次から次へと流れていった。週から週へ、月から月へ。もちろん一日一日にはちがいがあった。日々の小さな出来事――滝のような雨が降ったあの晩、三番目の小屋の娘の赤ん坊の誕生、ヘビに噛まれて、ほかの狩人たちが村に連れ帰ったときにはもうすっかり死んでいた男、とても長い狩りのすえにつかまえたあのジャガー――だが記憶のなかでは、それをどんな順番に並べてもかまわなかった。それらは時間のなかにはっきりした位置を持っていなかった。

そしてそのせいで、日々が過ぎていくのを本当に実感することができなかった。アントニオはそれに、あきらめまじりの狼狽とともに気づいた。実際、小屋の梁に刻み目をつけて日を数えるのを、彼は半年もたたないうちにやめてしまった。だいたい、気が狂いそうだと思ったころのことだ。

そのころには、長いあいだ頭から追い払っていた考えに、向きあわなければならなくなっていた。誰も探しに来ないという事実に。もうとっくに死んだものとされているにちがいなかった。何日も、何週間も、ヘリコプターの轟音を期待して空をうかがい、救助隊が自分たちの存在を知らせるのに使いそうな声や、拡声器や、サイレンや、とにかく何かを聞きとろうと耳をすませてきたが、もう誰も来ないという事実を受け入れるしかなかった。たぶん、あの船やジープの行き来のなかで彼の足どりは見失われてしまい、どこから探しはじめたらいいのかもわからないのだろう。たぶん、試してみもしなかったのだろう。アマゾンの森で迷った人間を見つけるのは、干し草の山の、それも干し草の山の王さまみたいな山のなかから針一本を探すようなものなのだから。たぶん、何日かのうちに飢えと渇きで死んだか、ヘビか、ジャガーか（クモか）に殺されたにちがいないと考えたのだろう。

ジープを探しに歩きだそうと考えなかったわけではない。そこからなら、もし、もし、正しい方向に進めて（でも、どうやってそれがわかる？）、もし、もし、また迷わずに、同じところをぐるぐる回らずに、ジャガーやヘビに出くわさずにすめば、二日ほど歩いて210号線にたどりつき、助けを求められるかもしれないと望めなくもなかった。

だがジープまでたどりつくことさえ、ほとんど不可能に近い大仕事だと彼にはわかっていた。村のある空き地を見まわして、最初から、どちらへ行けばいいのかまったく見当もつかないことに気づいていた。魔女についてきた道のりはまるで覚えていなかったし、空き地に出てきたあたりの場所はだいたい覚えていても、老婆がまっすぐ進んできたという確証は何ひとつなかった。それどころか、まっすぐではなかったとほぼ確信していた。しかもそれは最後の一区間にすぎない。二日ぶんの森を逆戻りして――何の手がかりもなしに――ジープを見つけるなど、まず考えられないことだとよくわかっていた。

それに、ここの暮らしは悪くなかった。先住民たちはやさしく親切で、好意をもって彼を迎えてくれたし、もうだいぶ前から男たちは彼が狩りについてくるのを許してくれていた（もっとも槍や矢にはまだ触らせてくれなかったが）。女たちは薪や木の実を集めるのを手伝わせてくれたし、子どもたちは彼が大好きだった。小舟のあとには紙飛行機が続いた。その原理を説明するのはもちろん無理だったが、子どもたちは完璧に飛ばし方を覚えた。それからノートの紙が尽きた（もっとも、彼が紙で折れるものも尽きたのだが）。

少し背は低いけれど、ぜんぜん、ぜんぜん悪くない娘たちまで二、三人いた。いい胸で、尻はいつも丸見えで、眺めているだけで楽しかった。

だが彼を参らせていたのは、誰とも話せないことだった。考えも、思いつきも、意見も、せめて冗談ひとつも交わせない、まったく、なんてことだ。あの鳥のようなことば、さえずりと金切り声とかあかあという声ばかりのことばは、何か月もたったのに、まだ彼にはまるで歯が立たなかった。名前はいくつかなんとか覚えたが、使う機会はめったになかった。相手に言うことが何もなければ、人の名前を口にすることなんてどれくらいある？少し巻き舌のあのさえずりは「肉」という意味だとわかった――わかったような気がした――が、実を言えば、「夕食」とか「ごはん」とか「フェルナンダのアルマジロ料理はほんとに絶品だ」とかいう意味だったとしても、ちっともおかしくなかった。そして真ん中で音の下がるあの金切り声は「水」だったが、彼の知るかぎり、それは雨の水にも、川の水にも、ココナッツに入った飲み水にも、たぶん涙や小便にも使われていた、わかるもんか。

一方で、彼らが彼のことばを覚えるほうも、たいしてうまくいかなかった。彼の名前は覚えて、だいたい「ン・ト・ニイイイイイイイイ・オ」と発音した。子どもたちは「小舟」ということばをほとんど聞きとれるくらいに言えたが、それでおしまいだった。覚えたいという気持ちはまるでなさそうだった。そもそも、自分たちどうしでいくらでも好きなようにおしゃべりできるのだから、まったく必要がなかったのだ。

アントニオは、ことばが足りなくて死んでしまうと思った。どうすればいいんだ、どうすれば、誰とも話せないなんて、口がきけないよりひどい、耳が聞こえないよりひどい、森のなかでひとりきりで迷ってるよりひどい（ああ、これはそうでもないか）、俺はことばで生きてたのに、やあ元気かとさえ言えない、もう無理だ、気が狂う、川に飛びこんでピンクのイルカに食われてやる。

村の暮らしに、何も悪いところはなかった。スマウマと椰子のあいだで用を足すのに慣れ、裸でいて川の水を飲むのに慣れ、何百万もの虫に毎分刺され、猿の肉をよく噛むのに慣れてしまえば。だがアントニオにはかなり退屈だった。狩りはおもしろいかもしれなかったが、森を歩きまわるときクモへの恐怖がいつまでも彼を落ちつかせてくれないことは別にしても、よく知らない動物の跡を追う遠征や、待ち伏せや、血は、楽しさよりも不安をかきたてた。あるいは、武器を扱わせてもらえないことが、彼を足手まといに感じさせ、実際以上に危険にさらされているような気にさせるのかもしれなかった。釣りは死ぬほど退屈だったし、薪を集めたり、籠を編んだり、女たちといっしょに木の実や果物や樹皮を探したり、矢じりをとがらせたりするのも、とりたてて胸躍る仕事とは言えなかった。

それに一日は長かった。読むものもなく、聞く音楽もなく、ことばを交わす相手もいない。そういうわけで、アントニオはますます子どもたちが遊ぶのを眺めるようになり、彼らのボールを使った奇妙な遊びを観察するようになった。ごく単純なものもあれば、とても複雑な決まりだらけのものもあった。見ているうちに、決まりはすべて、あるいはほとんど全部わかったような気がした。ただひとつ、まだ理解できないのは、何が試合の終わりを決めるのかということだった。短い時間を計る方法は持っていなかったし、点数は関係ないようだったし、特定の木に当てるといったような、「試合終了」の意味を持たせられるひとつの出来事もなかった。それなのに毎回、いきなり、試合は明らかに終わり、子どもたちは満足そうに、親しげに肩を叩きあいながら、パパイヤのおやつを食べに走っていくのだった。

だが彼は、この子どもたちが、いちばん小さな子でさえ、並はずれた速さと器用さに恵まれていて、そのうちのふたり――ふたつ靴下と、まじめな顔をしたがっしりした男の子――が本当に正確で力強いキックをすることに気づいていた。

そこである晴れた午後、わけのわからない動きを見ているだけなのにうんざりし、川に身を投げに行こうか迷っていたアントニオは、そのかわりに本腰を入れてまっすぐな枝を三本結びあわせ、その粗末な逆さのCの字を空き地の端の地面に突き立てた。

それから子どもたちに近づき、ボールを貸してくれと身ぶりで頼んだ。ボールを地面に置き、強すぎもせず弱すぎもしない蹴りで、ゴールに入れた。じっと見ている子どもたちのほうを振り向いて、彼は言った。「ゴール」

なんの反応もなかった。彼はボールを取りに行き、また足もとに置きなおして、ゴールへ蹴った。そしてまた子どもたちを見て繰りかえした。「ゴール」

「ゴー・イイイ・ル？」

「ちがう。ゴール」

みんなとても困惑しているようだった。まじめな子が肩をすくめ、ボールを取り返すと、全員がまたわいわい騒ぎながら、彼らのわけのわからない試合を始めた。

アントニオはひどくがっかりして丸太に腰をおろし、川の案をもう一度考えなおし、あるいはジャガーに身を捧げる案を考えた。ところが試合の真っ最中に、ふたつ靴下がほかの子たちから離れ、――急に思いついたかのように――木を狙うかわりにゴールを狙って、完璧な大砲のようなシュートで真ん中に決めた。それからアントニオのほうを振り向いて、小さな声で、問いかけるように言った。「ゴ・ウ・ルルル？」

アントニオの心臓が跳ねた。彼は跳びあがって叫んだ。「ゴール！　ゴール！　そう、いいぞ、いいぞ、ゴール、ゴール、ゴォォォォォォール！」そして手を叩き、両腕を振りまわした。子どもたちは大喜びで彼をまね、両腕を振りまわし、跳ねて、叫んだ。「ゴール！　ゴール！　ゴール！」

アントニオはうれしかった。まだ望みはあるかもしれない、ポルトガル語のことばをいくつか覚えてくれるかもしれない、せめてちょっとしたサッカーの試合くらいはできるかもしれない。

2.12 前兆

「あいつは白い！」

薬師の女アインデは、いつもの半ばまじめで半ばからかうような顔つきでキリマを見ていた。

「で、白いものが何か知ってるか？　死人だ！　白いのは死人だけだ！」

キリマは村人の平均より背が低く、いくらかずんぐりしていて、部族全体のなかで彼ひとりが持つ独特の黒い肌をしていた。声も独特だった。よく響き、ほかの者には夢見ることしかできない音量に達することができた。

「現にあのはじめのころを覚えてるか？　覚えてるか？　みんなであいつに触って、子どもたちまで、本当に生きてるのか森の精霊なのか確かめようと、みんなで指先で触ってたじゃないか！」

キリマは肩にとまったスズメバチを、ぴしゃりと平手で叩きつぶした。あまりにしょっちゅうやるので、いまでは彼のくせのようになっている仕草だった。村のほかの誰ともちがって、彼はある特定の種類のスズメバチの毒にまったくの免疫があるわけではなく、その種のハチたちは昔からそれを知っていて、彼を苦しめるのを楽しんでいるようだった。ほかの者にとっては、その種のハチに刺されても、刺されたところが少しちくちくするだけで何も後を引かないのに、キリマにとっては、何日も続くことのある長い苦しみのもとになった。こういうときに楽にしてくれる草も、どれひとつ彼には効かなかった。彼は小さいころから、できるだけたくさんハチを殺し、誰よりも針の痛みに耐えて生きることに慣れていた。少なくとも一匹もハチを殺さなかった日を、ひとつも思い出せなかったし、季節によっては、少なくとも二、三回は刺されずにすむ日が一日もなかった。

だが彼はあきらめてはいなかった。時がたつうちに、ハチを遠ざけたり刺されたときの痛みをやわらげたりする何十もの方法を試してきて、キリマの思いつきの多くは部族の知恵の蓄えの一部になっていた。そのおかげで彼は、森の秘密についての豊かな知識ゆえにもっとも敬われる大人のひとりになっていた。

彼はまた多くの女のハンモックの隣に自分のハンモックを吊るしてきて、何人かの女とのあいだに、村じゅうでいちばん丈夫でいちばんかわいい子どもを何人かもうけていた。

「で、いまは？　あいつがいつも小さい子たちとうろついてるのが、お前は気に入ってるのか？　森を知らない男は自分にもほかの者にも危険だ、それなのに俺たちは小さい子たちといっしょにあいつをうろつかせてるのか？」

「覚えてきてるのよ、もう危なくはないわ」

アインデはアントニオに好意を持っていた。彼を村に連れてきたのが自分だからというだけではなかった。彼は本当に一種の精霊なのだと、ずっと思っていたのだ。ただし、善い精霊で、いっしょに時間を過ごさなければならない精霊。そしてその過ごした時間は、いまはまだ予想できないけれど、きっと何か大きな恵みの形になって彼らのもとへ戻ってくるのだと、彼女は確信していた。彼女はいつもとても穏やかに話したが、そうすることで、なおいっそう自分の威厳を感じさせるのだった。

「覚えてきてる？　バクとアリクイの区別もつかないのにか！　いつだった？　三日前か？　四日前か？　まだ川で、身を守りもしないで小便してるのを見つけたじゃないか！」

「キリマ、キリマ、辛抱しなくちゃ。カンジルに襲われた人を何人知ってる？　たくさんはいないのはよく知ってるでしょう、それに私たちには危なくない。年寄りたちは、小便をさかのぼって体のなかに入ってくるちっちゃな魚の話をするけど、本当のことを言うと、私はそんなに小さいのは一度も見たことがない。死んだ魚のなかに見つかるのは私の指くらいの大きさで、ああいうのは危なくないわ」

「でも身を守らなきゃだめだ！　俺たちの年寄りは、年寄りの年寄りが教えたのと同じように、そう教えてくれたんだ！」

「そうね、身を守らなきゃ、それはそう。でも私たちの年寄りの年寄りは、この川にいたわけじゃない。年寄りの年寄りの年寄りだったかしら、もうこんがらがっちゃった。あっちの川にはたぶんカンジルがもっといて、もっと危なかったのよ。私たちの年寄りはシャグアの汁を搾ることも教えてくれたけど、それが役に立ったことが何回あった？」

キリマはそれをよく知っていた。彼がずっと持っていたもうひとつの才能は、物語を覚えておくことだった。彼が知った最初の年寄りたち、彼が若いころに死んだ人たちの物語を覚えていたし、いまの年寄りたちの物語も覚えていた。その記憶力があまりにすばらしいので、もうずいぶん前から村の誰もが彼に年寄りたちの物語を語ってくれと頼み、それが夜を過ごすいちばんの方法になっていた。キリマはいつもその語りに心のすべてを注ぎこんだ。先祖たちの声が自分のなかに居場所を見つけるのを感じ、精霊たちが立ち止まって自分の語りに耳を傾けるのを感じた。

森の精霊たちが立ち止まるように思える、もうひとつの瞬間は、息子のヤマンデがボールで遊んでいるのを見るときだった。キリマはボールの上手な者のひとりだったことは一度もなく、成人の儀式を、生涯でいちばん悲しい瞬間のひとつとして覚えていた。だがヤマンデはちがった。いつも好奇心旺盛な子どもで、ボールで遊べるくらい大きくなるとすぐに、その才能ははっきりした。ヤマンデのためなら、人のいいキリマはなんでもしただろう。だが日がたつにつれて、その必要はどんどんなくなっていくようだった。すくすく育ち、強く、友だちに愛されて敬われ、速くて正確な足と、いつでもこぼれる笑顔を持っていた。

若者たちがおしゃべりし、大声で笑いながら遊び場の空き地から戻ってくるところだった。そのすぐ後ろに、アントニオがいた。あれだけの時間がたったのに、まだおぼつかない足どりで、まだ一歩ごとに雷のような音を立て、まだいちばん簡単なことを伝えるのにもひどく苦労していた。善い精霊なんてとんでもない、キリマの目には、アントニオは解決されていない巨大な問題にしか見えず、彼が子どもたちとあれだけの時間を過ごしていることが気がかりだった。何かがまずいことになりそうな予感がしていた。

ぴしゃっ！　彼はまた一匹スズメバチをつぶし、不機嫌に立ち去った。

2.13 しるし

日の出と日の入り、枝のあいだに笑みのように細くのぞいたり、マンジョッカのボールのように丸く輝いていちばん低いシダまで照らしたりする月の満ち欠け、時間を区切るものはそれしかなかった。

アントニオは、最初のころほとんど強迫的だった誘惑、いや欲求、日々を時間と分に切り分け、週とか月とかいうわけのわからない名前の束にまとめようとする欲求を、捨てなければならなかった。しばらくたっても、決まった日課をこしらえるのは簡単ではなく、そんなことをしてもまったく無意味なのではないかと思いはじめていた。

食事は決まった約束ごとではなかった。毎日決まった時刻に、椰子の葉のテーブルクロスを広げ、半分に割ったココナッツをコップに、骨の道具をナイフやフォークにして食卓を整える者などいなかった。決まった時刻に川へ水差しを満たしに行く者もいなかったし、正午にくりぬいた石の鐘を鳴らして昼食に呼び集める者もいなかった。実際、「昼食」と呼べるような時間はまったくなかった。そして「夕食」とは、ただ、日が沈む前に、だいたいみんなが集まってくる時間のことだった。食べるためでもあったが、物語を語るため、酔わせる飲みものを半分のココナッツで一杯飲むため、遠い伝説の歌を歌うため、呪術師の口を通して精霊たちの忠告を聞くため、ハンモックの隣人たちのうわさ話をするためでもあった。

リズムを決めるのはただ必要と、手に入るものの多寡と、人より先に森そのものが下す決定だけだった。前の狩りが豊かだったなら、狩りは何日も止まることがあった。狩りは行きあたりばったりのこともあれば、完璧に段取りされていることもあり、ひとりの用事のこともあれば、村じゅうの用事のこともあった。採集も同じだった。ときには少人数の小さな一団が何時間も姿を消し、蓄えをいっぱいに詰めた籠を抱えて戻ってきた。ときには遠征隊がずっと大人数で騒がしく、ほとんど長いピクニックのようだった。村人たちが本当にとりつかれているボール遊びでさえ、決まった日課には従っていなかった。

狩りから戻った狩人たちが、吹き矢も弓も毒を塗った矢じりの矢も何もかも隅へ放りだして、彼らの奇妙な遊びの即席の試合に熱中しはじめることもあった。それどころかアントニオには最初から、狩りがときどき短すぎることがはっきりわかっていた。まるで狩人たちが、もう次の試合のことで頭がいっぱいで、本気で取り組む気がないかのように。彼らの狩りについていくようになってからも、ことばはよくわからないのに、その取り組みがときにほとんど形だけのものに見えることは明らかだった。まるでこう言っているかのようだった。「森のなかを三十分ばかり歩いてみよう、何か獣はいるか？　いない、だろ？　急げ！　村に戻って遊ぼう」おかしいのは、みんないつも忙しそうにしているのに、同時に、果てしなく引きのばされた、まったくのなまけの時間があるように見えることだった。

いまも、たとえば、昼に来たにわか雨が去って濃い湿気を残し、少し前に戻ってきた太陽がそれを温めて、ぐったりするような蒸し暑さに変えていた。

森はまだ何百万もの花びらや葉からしずくを垂らしていて、アントニオは幹に肩をもたせて半ば寝そべり、翼から雨を振りはらう鳥たちの歌と、摘んだばかりの湿って温かい果物でおやつを食べている子どもたちのさえずりに揺られて、うとうとしかけていた。いくつかのことばは聞きとれ、意味がわかった。「食べる」、「おいしい」、「甘い」、「ほしい」、「雨・やんだ」。

それから「オピイイ」、そうだ、オピイイは、子どもたちが顔をべたべたにしているあの赤い汁気たっぷりの果物の名前にちがいなかった。覚えておかなきゃ、と彼は思った。オ

ピイイ。そして眠たげに、ぼんやりと、手のそばのやわらかい土に指で文字を書いた。ＯＰＩＩÌ。二秒ほどして、静かになったのに気づいた。

子どもたちが急に黙りこんでいた。目を上げると、輪になった小さな顔がみんな、地面のそのしるしを見つめていた。それから顔を上げて彼を見た。どの目にも問いが浮かんでいた。彼はいきなり身を起こした。

ああ神さま、文字だ。偽のレオナルド・ダ・ヴィンチみたいなわけのわからない技術を教えようだなんてとんでもない、地面に種をまくのを教えようだなんてとんでもない、それならとっくの昔からちゃんとできるってわかったんだ。文字だ、なんてこった、この人たちは文字を知らない、その考えさえ持っていない。

そのめまいのするようなひらめきと、それが開く無限の可能性に興奮して、彼はほとんど震える手で果物をひとつ指でつまみ、言った。「オピイイ」

子どもたちが彼を見ていた。

彼はそれを地面の、書いた文字のそばに置き、文字を指さして、もう一度言った。「オピイイ」

彼を見つめるたくさんの黒い目に、好奇心のほかには何も読みとれなかった。

そこで彼は自分の前の土にＡＮＴÔＮＩＯと書き、はっきりした声で言った。「アントニオ」それから自分を指さし、もう一度発音した。「アントニオ」

子どもたちは彼の名前を知っていたので、その遊びがまったくわからなくても、くすくす笑い、何人かが繰りかえした。「アントニオ？」

「そう、アントニオ」

そしてまた文字を一字ずつ指さしながら。「ＡＮＴÔＮＩＯ」

それから立ちあがり、まんまるほっぺの前へ行って、地面にＣＡＵÊと書き、まず子どもを、それからしるしを、それからまた子どもを指さした。同じことをＰＩＲＡÍにも、ＭＯＡＣＩＲにも、ほかのみんなにもして、最後に彼の左に座っている小さな女の子で輪を閉じた。ＡＭＩＡＪÈ。

女の子はじっと彼を見ていて、彼は繰りかえした。「ア、ア、アントニオ」それから「ア、ア、アミアジェ」と、指で文字に線を引き、同じふたつのＡを強調した。「ア・ントニオ、ア・ミアジェ。ア、ア、ア」

女の子が繰りかえした。「ア」

彼は女の子にほほえんだ。女の子も彼にほほえんだ。みんながほほえんでいた。なんて変な遊びだろう。

翌日、午前中ずっとボールで遊んだあと、みんなが疲れて大きな黒檀の木陰に集まったとき、彼のところへやってきたのは、まさにその女の子だった。

女の子は小さな指でほこりのなかに、おぼつかなげに描いた、ゆがんだ



「A？」

「すごいぞ、もう少しだ！　ほら、こうだよ。A」

「A。アミアジェ」

「そう、そう！　A、アミアジェ。A、アントニオ」そして見まわすと、みんなが待っているのがわかったので、ひとりひとりの前にその子の名前を書きなおした。「U、U、ウビラタン」「P、P、P、ピアタ」。子どもたちは笑って自分の名前の音を繰りかえし、地面にしるしを書きなぐった。でたらめに近かったが、だんだん正確になっていき、だんだんAに、Uに、Pに、Mに似てきた。

2.14 イペ

しるしの遊びは大歓迎された。子どもたちはもうひとり残らず自分の頭文字をとても上手に書けるようになり、子どもが泥とアナトーで友だちの頬にていねいに Ａ や Ｅ́ を描きながら、その音を口ずさんでいるのを見かけることも珍しくなかった。AAAA　A・A　A..... AA A A・A・ A・A！

アントニオはいつか数字も始めようと心に決めていたが、いまのところ急ぐことはなかった。子どもたちには遊べることばの世界がまるごとあったのだ。

頭文字から完全なことばへ進むのはそれほど簡単ではなかった。いちばん小さな子たちはすぐに飽きて、トカゲや小石で遊ぶのに戻ってしまったが、少し大きな子たちはその遊びにとても真剣に取り組んだ。何ごともそうだが、子どもというものはみんな、新しく見つけたものを、ばらして一から組み立てなおし、すっかり自分のものにしたと感じられるまで、とことん突きつめたがるのだ。

アントニオは、何年も前、自分の名前を読み書きできるようになるまでどれくらいかかったのか、がんばってみても思い出せなかった。ひどく大きく思えた教室、埃とチョークと汗をかいた子どもたちのにおい、ココナッツ菓子でべとべとの指が紙を汚していたことを、ぼんやり覚えていた。それでも、母さんの誕生日にはもう完璧に書けるようになっていて、巨大な蝶やありえない花の絵を描いたお祝いのカードに一文字ずつ綴ったのを覚えていた。あのときも、たいして時間はかからなかったのだ。

そして実際、跳ねまわるヒキガエルと虫の羽音のなかの、この緑あふれる教室で、足で消すぬかるんだ土の黒板を使って、ひとりひとりが、多少はおぼつかなくても、自分の名前を、そしてとくに気分が乗ったときには仲間の名前まで書けるようになるのに、たいして時間はかからなかった。

そこでアントニオはさらに一歩進んでみた。子どもたちが川へ行こうと話しているのが聞こえた。川ということば、「イペ」はもうしばらく前から知っていた。そこで彼は子どもたちの注意を引き、地面にＩＰ Ê と書いて、そのことばをはっきり区切って何度も何度も繰りかえした。だが子どもたちはわからないようだった。

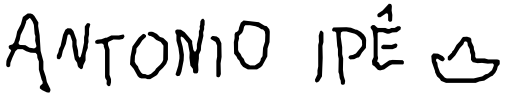
笑う子もいれば、肩をすくめる子もいて、みんな川へ泳ぎに駆けていってしまった。そうか、難しすぎるんだ。このしるしが自分で、あのしるしが友だちだとわかるのと、どんなものにもしるしがありうる、どんなことばでもどんなものでも地面に描ける、まだ木々の向こうに隠れている「川」をほこりのなかに現れさせることができる、とわかるのとは別のことだ。難しすぎる、そうだ、残念だな。

アントニオは立ちあがり、ため息をついて川へ向かった。そう、ちょうどひと泳ぎする時間だった。

何日かたったある朝、アントニオは新しいボールをふたつほどこしらえていた。子どもたち自身から教わった、ゆっくりした、かなり退屈な作業だった。子どもたちはどこにも見あたらなかった。それはふつうのことだった。子どもたちが毎朝姿を見せるわけではない。ときどきはみんなで連れだって、トカゲやカエルをとりに長い長い狩りに出かけたし、ときには果物や鳥の巣を探して一日じゅう木に登っていたし、ときには空き地へ大人たちの試合を見に行った。葉っぱと泥に少しうんざりして、彼は子どもたちを探しに行くことにした。

あたりでボール遊びはしていなかったし、居心地のいいシャボノの陰にもいなかった。空き地にもいなかった。そこにはただ、彼らのことばにそっくりな、森の千の声の絶え間ない響きが満ちているだけだった。たぶん、アントニオがまだ入りこむ勇気の出ない無数の場所のひとつに分け入ったのだろう。彼には越えられない葉と下生えの壁に見える通り道、彼の目には見えない小道、登れそうにない木々。

少しがっかりして広場へ戻り、ひとりで朝を過ごすのだとあきらめかけたとき、ふと地面に何かがあるのが目にとまった。茂みの奥へ続くたくさんの小道のひとつのそばだった。彼は自分の目を信じられずに近づき、胸をどきどきさせながら、踏み固められた土に刻まれたしるしを見つめた。



本当だろうか？　胸をどきどきさせながら川への小道を駆けおりていくあいだ、彼は考えていた。いや、本当のはずがない、見たとおりの意味のはずがない。

最初に見えたのは、水辺の茂みのなかのアミアジェだった。興奮に目を輝かせて、細い脚を震わせながら彼を見ていた。彼女は明らかに何かを背中に隠して進み出てきて、すぐにほかの子どもたちが続いた。みんな恥ずかしそうな、からかうような様子で、全員が手に何かを隠していた。年上の少年のひとりが勇気を出し、どきどきしながらくすくす笑ってアントニオの手をとり、川の上流の、水がとても静かで、ほとんどよどんでいる入り江へ連れていった。アントニオは子どもたちの背中の後ろをのぞこうとしたが、葉っぱしかちらりとも見えなかった。

川に着くと、子どもたちはみんな岸に並んだ。そしてアントニオが目にしたものに、彼は息をのんだ。ひとりひとりが、見たこともない植物の大きな葉でつくった小舟を一艘か二艘、背中に隠していたのだ。アントニオ、川、小舟。本当にメッセージだったんだ、僕に宛てて書かれたメッセージだったんだ。誇らしさにあふれた目で、子どもたちは小舟を水面に浮かべ、ゆっくりとした緑の行列をつくった。小舟はものうげな流れにのって下流へ向かった。軽やかに浮かんでいくものもあれば、ひっくり返ったり、互いにひっかかったりするものもあった。

だがアントニオには、その小さな難破が見えなかった。目に涙があふれていたのだ。

2.15 女たち

「あんたたち、あの人、いつか誰かの隣にハンモックを吊るすと思う？」

「一度も……本当に？」

「ええ、この長いあいだ一度もしたことがないのよ、ただの一度も」

「たぶん興味がないのよ、ボールで遊ぶのが好きなだけの人なのかも」

「たぶんできないのよ。できないことがすごくたくさんあるんだから。あの人がバクを狩ろうとしたときの話、聞いたことある？　ほらね、たぶんあっちのほうも、バク狩りと同じくらいの腕前なのよ」

「あはははは！」

「えへへへへ！」

「でも、まだそんなに時間がたってないのかもしれない」

「あら、たってるわよ。アリクイが子を産む月に来たんだから、その月はもう戻ってきて、過ぎていったわ」

「よく覚えてるわね。よく見てたんだ、気があるの？　あんたがあの人の隣にハンモックを吊るしたいんじゃないの？」

「ひひひひひ！」

「あははは、ちがうわよ、何言ってるの！　精霊たちがみんな吹きだしちゃう！　でも、誰かの隣にハンモックを吊るしてからずいぶんたつから、いっそのこと……」

「えへへへへ！　あんたみたいなしなびた猿を、あの人がほしがると思ってるの？」

「猿のほうがましよ、あんたみたいな毛の抜けた年寄りのオオハシよりは」

「あはは！　あたしが年寄りのオオハシ？　あんたなんか、アナコンダ全部のおばあちゃんじゃないの！」

アントニオはたちまち、彼が魔女だと思った薬師の女アインデのお気に入りになっただけでなく、村の年配の女たちみんなのお気に入りになっていた。不器用で、ほかの者とちがっている彼は、心地よい新しい風を吹きこんでいて、やってきてから何か月もたったのに、相変わらずこっけいな失敗を重ねては、くすくす笑いやうわさ話の種をまいていた。ことばにはまだひどく苦労していて、いくつか単語を覚えはしたものの、ごく初歩的な話をするのにも足りなかったが、それでも自分が彼女たちの大きな楽しみの的になっていることはわかっていた。結局、そのことはたいして気にならなかった。恨みやほかの悪い感情をかきたてるより、笑いをかきたてるほうがましに決まっていたし、いずれにしても年配の女たちは彼によくしてくれて、彼が何かありそうもない仕事を思いついたときには手伝ってくれた。

そう、そちらから面倒は来なかった。アントニオが恐れていたのは若い女たちだった。この何か月かの滞在で、アントニオは村の風習や習慣を、人類学者がするよりも念入りに観

察してきた。人類学者のまちがいなら、最悪でも研究がまちがうだけですむが、アントニオは、何か微妙な問題への近づき方をまちがえたら、深刻な厄介ごとを招くのではないかと恐れていた。そして、異性との関係ほど微妙な問題があるだろうか？

恋人を見つけたくないわけではなかったが、どうふるまえばいいのかまるでわからなかった。マカパでも、生まれ育った環境でさえ、彼は一度も女たらしだったことはなく、むしろいつも近づき方がぎこちなかった。イザベルとの一件がそれを物語っていて、あれだけ時間がたったのに、まだ少しひりひりしていた。ここでは、どこから始めればいいのかまったくわからなかった。わかったのはただ、結婚式のようなものは何もないらしいということだけだった。新しいふたり組の誕生は、その単純さで彼を魅了するやり方でおこなわれた。あるとき、男が女のハンモックの隣に自分のハンモックを吊るし（あるいは逆に。女のほうから動いた例も、もう何度も見ていた）、その瞬間から、それがふたり組になる。それだけだった。だがそのふたり組がどうやって生まれるのかは、まだまったく謎だった。なんでもないことのようにハンモックをここやあそこに吊るすのは、あまりにがさつに思えた。その瞬間の前に何かしらの求愛があるにちがいないと確信していたが、その仕組みを突きとめることができなかった。目くばせを交わせばそれで十分で、すぐにハンモックを吊るすのか？　それともしばらく感じよくふるまっていなければならないのか？　そしてどうやって、ここでは女の子に何を贈るんだ、ココナッツか、死んだヘビか、おやつのトカゲか？　それに、自分より立派な男（つまり村のほかの男全員）が、もうその特定のハンモックに興味を持っていないかどうか、どうやって知ればいいんだ？

それにいずれにしても、娘たちは若すぎた、若すぎるのだ。アントニオは自分が教えていた学校の女子生徒たちのことを考えた。いや、問題外だ。アントニオには、ここ、村では、それが自分だけのタブーなのだとわかっていたが、そんなことはどうでもよかった。タブーはタブーだ。そのせいで彼は「嫁入り」の年ごろの娘たちを避けようとし、ときにはばつの悪い結果になった。たとえば、ある晩、ひとりの若い娘がハンモックを腕に抱えてまっすぐ彼のほうへやってくるのを見たときだ。アントニオはいきなり自分のハンモックから跳び起き、つまずいて顔から地面に突っこみそうになった。それから恐慌にかられて、ほかにどうしていいかわからず、ハンモックを支えている木の鉤をへし折った。「ここにはハンモックは吊るせないよ」娘はそれでもほほえみながら彼のほうへ進んできて、それから彼の場所を通りすぎ、彼には目もくれずに、顔に優雅な黄土色の模様を描いた背の高い若者の隣にハンモックを吊るしに行った。気の毒なアントニオはあっけにとられ、その場面を見ていた年配の女ふたりは大笑いした。

実を言うと、ひとりの娘がいた。ほかの娘たちより確かに何歳か年上なのに、子どももおらず、誰かとハンモックを吊るしているのを見たこともなかった。少し離れて過ごしがちで、どこかほかの娘たちとちがうところがあった。顔立ちがどこかちがっていたし、肌に描く模様も独特の様式だったし、飾りに使う花の挿し方も独特で、編む籠でさえ、結び目が……おいおい、アントニオ、女とは関わらないと決めた男にしては、ずいぶんよく見てるじゃないか、面倒は起こしたくない男にしては、ずいぶんよく見てる、ちょっと見すぎだ、なにしろ一センチ刻みで描写できるくらいなんだから。そう、認めよう、もっとよく知りたい。みんながあんなに気に入っているらしいあの黄色い木の実を少し贈ってみようか、つやつやのきれいな葉で包んで。花を添えてもいいかもしれない、それとも青いカエルを一匹。いまいましいことばめ、ほんの二言三言でも話せたら、せめてあの娘の身の上だけでも知りたいのに。

2.16 ジャナイナ

語られない物語というものがある。あるいは、自分自身にだけ、ひとりでいるときに、ある場所がどれほど遠く思えるか、十の月の二倍がどれほど長い時間でありうるかを思えるときにだけ、語られる物語が。

離れて過ごしがちなあの娘、ほかの者とちがうやり方で体に模様を描く娘がやってきた場所が、たどりつけないほど遠いというのは、むしろ彼女の願いだった。彼女の名前はジャナイナといい、自分の村を離れてもうすぐ二年になろうとしていた。

「そのうちあいつを殺してやる」とジャナイナはギオマールに言った。

「しーっ！　何言ってるの、頭がおかしくなったの？」

「もう我慢できない、どうしたらいいのかわからない」

「あんたがわからなくていいの。精霊たちがわかってるんだから。そして精霊たちが、あんたはヤリミの女だって決めたの、それ以上知ることなんてないわ」

「本当は、精霊たちがそう言ったって言ったのはヤリミよ。私には精霊たちは何も言ってない」

「しーっ！　じゃあ本当に頭がおかしいのね！　何言ってるのよ？　神々と話すのはヤリミだって知ってるでしょう、どうしてあんたなんかと話さなきゃならないの？」

「どうして私があの獣といっしょにいて、いつもあいつの言うとおりにしなきゃならないのか、説明してもらうためよ」

「精霊たちはわかってるんでしょうよ、でもあんたに言う必要なんかない、村の長に言うのよ。それにね、精霊たちはあんたに怒ってると思うわ。あの人があんたを娶ってからたくさんの月が過ぎたのに、まだ子どもができないんだもの」

「できなくてよかったわ。あんたは簡単にそう言えるわよね。神々はあんたにはあの善い人のトオルを授けてくれた、あの吠える猿じゃなくて。今度また私に触ろうとしたら、本当に殺してやる」

だがそのときギオマールは「しーっ」と言わなかった。そのときは、彼女の肩の後ろの一点を、おびえて見つめるばかりだった。

ジャナイナが振り向くと、ヤリミがいた。止んだ風のような静けさで椰子の木の陰から現れ、意地の悪い目で彼女を見ていた。

計画は単純だった。変化の飲みもので酔いつぶし、眠りこんだら動く。心の底では、本当に殺す勇気がないのが少し残念だったが、邪悪な霊はあいつのほうで、彼女ではない。それに、邪悪な者に導かれるままになっている村は悪い村だ。逃げることはたやすい決断だった。悔いはなかったし、どうしてもっと早く思いつかなかったのかわからなかった。川へ行き、カヌーをとって、力のあるかぎり漕ぐ、村々のなかでいちばん遠い村まで。たくさんの月の前、和平と贈りものの交換の儀式で、そういう村のふたつへ行ったことがあり、親切な人たちが住んでいるように思えた。自分の村は森じゅうでいちばんひどい村だ、とジャナイナは決めていた。そしてもし精霊たちが、自分をそこへ送りこんであの猿と番わせるほど意地が悪いのなら、そう……ジャナイナはその考えを最後まで言いきる勇

気がなかったが、心のなかではっきりしていた。そんな精霊たちは敬うに値しない、そして、もうこの災いに耐える時は確かに過ぎたのだ。

ヤリミは変化の飲みものが好きだった。その晩ジャナイナは目を伏せたまま、絶え間なくそれを注いでやり、午後に言ったひどいことばの詫びのしるしとして、自分の分まで差しだした。

危ない瞬間は四杯目のあとだった。たいていヤリミはそこで浮かれだし、ほんのささいなことで乱暴になるのだった。だがその晩、彼はいつもより静かだった。五杯目も飲み、六杯目の途中で、酔いつぶれて眠りこんだ。

運命は私の味方だ、とジャナイナは、満月に近い月を見ながら思った。その光が葉のあいだからもれて、どこを歩いているのかわかるくらいには照らしてくれた。物音を立てず、誰も起こさずに。新しい村でどう迎えられるかは考えないようにして、一歩一歩に集中し、自分の静かさに満足していた。逃げるのに欠かせないこの技、そして漕ぐ技、そのふたつを教えてくれたのがあの猿だと思うと、笑みがこぼれた。少なくとも何かの役には立ったわけだ。自分の静けさに耳をすませるのにあまりに集中していたので、村の境から一歩足を踏みだしたとたんに聞こえた、あのとても大きな音が何なのか、最初はわからなかった。いったいどんな獣だろう？

ヤリミには欠点がたくさんあり、そのいくつかは、ときには自分でも認める気があった。だが彼はばかではなかった。精霊たちがばかを村の長にするはずがない。どうして精霊たちが、あの無礼で言うことをきかない、子どもひとり産めない女を押しつけたのか、彼は長いこと考えてきたが、いまやすべてが明らかだった。あれは自分の魂を鍛えるための試練だったのだ。今日、あの女を厄介払いする機会がやってくる。そうすれば明日にもほかの女を娶れる、どの女にするか決めるだけだ。

その晩、彼は大好きな飲みものを一滴も飲まなかった。女が椀を持ってくるたびに、唇をつけて少しすするふりをするだけで、女が離れるとすぐに椀のなかへ吐きもどし、それから地面に空けていた。六杯目のあとで、芝居はもう十分だと判断し、ナイフを手の届くところにしっかり置いて、眠ったふりをした。ジャナイナが起きあがる気配がすると、柄を握りしめて襲いかかってくるのを待った。

驚いたことに、女は彼を殺そうとはせず、小屋の外へ出ていった。そこでヤリミは女が何をするつもりなのか確かめようとあとをつけ、女が村から出ていこうとしているのを見て、悟った。精霊たちに呪われたあの女は、自分たちを捨てることに決めたのだ。ほかのどんな侮辱にもまさる侮辱だった。ヤリミが長を務める村を捨てる者など、いはしない。彼は深く息を吸いこみ、それから胸いっぱいに警告の叫び声をあげた。

考える暇があったなら、ジャナイナは自分がどこでまちがえたのか、どうして計画がこんなに早く、こんなにみじめに失敗したのかと考えたことだろう。精霊たちが自分に割りあてた役目について考えたかもしれないし、それどころか、何もかもまちがっていた、精霊たちのお告げを受け入れて、目の前に置かれた人生を生きるべきだったのだと思ったかもしれない。

だがジャナイナには考える暇はなかった。動き、走る暇しかなかった。二秒ほどして、彼女はおびえながらそれがヤリミの叫び声だと聞き分けた。その声に、村の腕ききの戦士たちの何人かがもう目を覚まし、何が起きているのか、何をすればいいのか確かめようと、あちこち走りはじめていた。混乱のなかで、何人かがまさに川のほうへ向かい、彼女が決めていた逃げ道をふさぐのが見えた。彼女はすばやく向きを変え、川から離れて森の茂みの奥へ分け入った。誰かが彼女の走る姿を見つけ、助けを呼びながらあとを追ってきた。意識のうえでは、どこへ向かって走っているのかわからなかった。ただ走っていた。だが

本能が、救いになるかもしれない、あるいは終わりになるかもしれない場所へ彼女を導いていた。いずれにしても、彼女の冒険の決定的な場所へ。

息を切らして走り続け、追っ手をまだ少し引き離したまま木々の茂みを抜けると、すべてが明らかになった、文字どおりの意味でも。

月が、岩を、輝く川の水を、そして高くて細い、圧倒されるような滝の落差を照らしていた。それは森じゅうでいちばん高い木よりも高かった。水は二枚の細い岩板のあいだを抜けて落ち、ずっと下の小さな湖に身を投げていた。村の伝説は、飛びこむほど勇敢だった昔の誰かのことを語っていて、威勢のいい若者たちの多くがよく試しに行くと話していたが、生きている者で実際にその勇気を出した者は誰もいなかった。

ジャナイナはすぐには飛びこまなかった。滝のふちに立ち止まって、追っ手が出てくるはずの場所を見つめた。ふたりのうちどちらが勇敢か見せつけてやるために、そのなかにヤリミがいることを願いながら。そしてそのとおりになった。月の光は彼の目が見えるほど強くはなかったが、その必要はなかった。表情の変わっていくさまは手にとるようにわかった。彼女をつかまえたという確信から、疑いへ、そして彼女が振り向いて飛び降りたときの、信じられないという顔へ。

もう何日も、彼女は川の流れに沿って森をさまよい、誰にも出会わなかった。食べものや水を手に入れるのに困りはしなかったし、逃亡がほとんど奇跡のようにうまくいったことで、心は大きな力を得ていた。困ってはいなかった。だがその長い孤独が少し不安になりはじめていた。滝のあとこれほど長い道のりに村がひとつもないとは思っていなかった。このほうがいい、と気づくと彼女は思っていた、遠くへ行けば行くほどいい。

五日目の夕暮れどきで、そろそろ夜を過ごす場所を探す時間だった。そのとき、オウムの鳴き声の上に、木々の向こうから子どもたちの声が聞こえてきた。

2.17 ことばたち

「変わり者が子どもたちとやってる、あのしるしは、まじないか？」

「いや、キリマ、まじないじゃない」とイタタクアラはあくびをしながら、ハンモックでものうげに揺れていた。たいして興味はなさそうだった。「変わり者の名前はアントニオだ、知ってるだろう。それにあいつにはまじないなんてひとつもできない、わしが請けあう。村じゅうで、精霊たちが関わりたいと思う相手として、あいつ以下の者はいないよ。ただの遊びだ、気にするな」

「でもなんてばかな遊びだ？　しるしは体に描くもので、小枝でほこりに描くもんじゃない。ばかげた遊びだ、見たこともない、気に入らない」

「あっちの変わり者の子どもたちがやる遊びなんだろう。遊びのことで心配するな。危なくはないんだろう？」

「いや……いや、怪我をしそうにはない。でも気に入らない」

「お前は気に入らないものが山ほどあるな、キリマ」と呪術師はくすくす笑い、ハンモックのなかで体を落ちつけなおした。「放っておけ、ただの子どもだ、遊んでるだけだ」

その遊びはアントニオにとって大いに役に立つことがわかった。まったく予想していなかったが、書かなければならないので、たくさんの新しいことばを覚えることになり、前よりずっと速くことばが上達していったのだ。

だが子どもたちは、しるしに慣れていくにつれて――そして彼らのことばが書きあらわすのにまったく向いていないにもかかわらず――ほどなく、その遊びがすばらしい秘密の伝達手段になることを発見した。大人や年寄りの知らない、彼らの監視の目を逃れるためのすばらしい道具に。

シャボノの外に IPÊ と書いておけば、ほかの子より遅く起きた子どもたちに、仲間は川へ遊びに降りていったとわかった。小道のそばに OPIÌ とあれば、友だちが果物をごっそり集めに行ったとわかったし、岸のやわらかい泥に PUTÚ と刻んであれば、空き地へ駆けていってみんなとボール遊びができた。

火のそばに AYÌNDÉ AMAI とあるのを見るのは都合がよかった。薬師の女がおいしいマンジョッカと蜂蜜のおかゆをこしらえたとわかるので、少し手際よくやれば、少なくともひとつかみはくすねられたのだ。小屋の入口のそばに YBOTYRA OKOTTERU と読めるのも役に立った。年寄りのイボチラがまた機嫌の悪い日で、石をぶつけられたくなければ子どもたちは近寄らないほうがいいとわかったからだ。

それほど役に立たない――とはいえ、子どもたちの上達がひどく自慢だったアントニオには、避けられないこともわかっていた――のは、その新しい武器が彼ら自身の争いに使われることだった。広場のど真ん中に書かれた侮辱的な CAUÊ BAKU のあとに、さらに大きく書かれた血なまぐさい MOACIR UNCHI が続き、そのすぐあとで、アントニオがかんかんに怒ったふたりに無理やり仲直りさせた。

だから、ある午後、子どもたちがげらげら笑っているのを聞いて、涙が出るほど転げまわって笑っている一団に近づき、イタタクアラのハンモックの真下に、とてもていねいに ITÁ ONAKA DEKAI と書いてあるのを見ても、彼はたいして驚かなかった。もちろん叱るべきだったのだが、呪術師が幸せそうに眠りこんでいるあいだ、ハンモックからはみだ

して、熟れすぎた巨大なマンゴーのようにゆっくり揺れている、その――客観的に見て堂々たる――腹を見ていると、笑いを押し殺すほかに何もできなかった。そのあいだ、まわりでは子どもたちが大はしゃぎで地面を転げまわっていた。

だが数日後、彼はとても笑うどころではなかった。それどころか、ばつの悪さにかっと顔を赤らめた――あのきわめて危険な遊びを子どもたちにしか教えなかったことを、天に感謝しながら――。朝早くシャボノの陰から出てくると、子どもたちの群れがくすくす笑いながら四方八方へ逃げて茂みに隠れるのがちらりと見え、彼の足もと、ちょうど敷居の上に、三つの丸い石で飾られた文字があったのだ。ANTÔNIO JANAÍNA SUKI。

2.18 遠く

「あれだって言ってるだろ、まちがいないんだ」とヤマンデは言いはった。「何回も話したじゃないか？　レエエナが僕に言ったんだ、よく見ておけ。よく見ておけ、このイモムシはほかのとはちがう。これはお前が一生で食べるいちばんおいしいものだって。それでマンジョッカに穴をあけて、そこに入れてくれて、本当にそのとおりだった。あんなにおいしいものは二度と食べたことがないし、どんな見た目だったかも忘れたことがない。もう一度見つけたいってどれだけ前から思ってたか。あれだって言ってるんだ」

「何回も何回も聞いたよ」とピアタは言い返した。「それに、問題はそこじゃないって何度も言ってるだろ。問題は、あの人がぜったいに食べないってことだ」

「でも、すごくおいしいんだってば。どうして食べないんだよ？」

「イモムシが気持ち悪いからだよ」

「イモムシが気持ち悪い？」

今度はヤマンデだけでなく、ほかの子どもたちもほとんどみんな驚いた。「なんでわかるんだよ？」

「見てたら、一度も食べないのに気づいたんだ」

「見まちがえたんだろ、変わり者なのはいいけど、いくらあの人でもそこまで変じゃない、イモムシはみんな好きなんだ。持っていってやろうよ、喜ぶって。正直に言えよ、持っていきたくないのは自分で食べたいからだろ」

ピアタはどうしたものかと考え、それから、自分の大きな秘密を打ち明けるに値するほど事態は深刻だと判断した。

「ちがう。あの人はイモムシが好きじゃないって言ってるんだ。それで、なんでそれが変に思えないかわかるか？　僕も好きじゃないからだよ」

「イモムシが好きじゃない？」

「ああ。好きじゃないどころか、本当に気持ち悪いんだ」

「イモムシが気持ち悪い」

「うん」

「じゃあ、なんで食べるんだよ？」

「食べなきゃいけないからさ」

その告白は、ピアタがみんなのなかでいちばん大きくて、いちばんよく食べ、なんでも食べると、ずっと思われていただけに、なおさら衝撃的だった。

子どもたちのあいだに長い沈黙が降りた。

それを破ったのはモアシルだった。「僕も好きじゃない。でも僕は一度も食べたことないよ」

「どうやってるんだ？」とピアタが、目を希望に輝かせて尋ねた。

「食べるふりをして、誰も見てないときに、しゃぶりつくした骨のあいだとか、どこでもいいから隠すんだ」

「頭いいな！」

「じゃあ、本当に気に入ってもらえないかもしれないって思うの？」とヤマンデががっかりして尋ねた。

「うん」

「残念だな。あの人がこしらえてくれた変なボールのお返しに、贈りものをしたかったのに」

「僕もさ。何かほかのものを見つけようよ。それに、悲しがるなよ。あんなに好きだっていうあの味を、また味わえるんだから」

そうだ、特別なイモムシ。みんなはあたりを見まわしたが、イモムシは消えてしまったようだった。それから、カウエが一団から離れていたのに気づき、空き地の反対側で、彼がアントニオに近づいて何かを差しだしているのを見つけた。その距離からでは何なのか見えなかったが、詰めものをしたマンジョッカにちがいないと全員が確信した。みんなは友だちの名前を叫びながら駆けだした。

アントニオは、カウエが、とてつもなく大きな、ぞっとするイモムシが入った根っこを差しだしてくるのを見つめていた。子どもの善意の印なのはほぼまちがいなかった。たぶん前の日にこしらえてやったゴムのボールのお礼だろう。だがイモムシを食べる？　これまではいつもうまく避けてきた。盆から肉や魚や野菜を取って、イモムシは残しておいた。先住民たちは大好物らしかったから、それはきっと彼らにとってもありがたいことだったはずだ。だがいまは逃げ場がなかった。イモムシをつまみあげて子どもにやり、マンジョッカを食べてしまおうか？　そう考えているあいだに、カウエはこの風変わりな詰めものサンドイッチにがぶりと噛みつき、もぐもぐやって、「アン・ウアアアア」と言った。アントニオにはもう、それが「すごくおいしい」という意味だとわかっていた（子どもの顔もそれを裏づけていた）。そしてカウエは満面の笑みで、ごちそうの残りをアントニオの手に置いた。

アントニオはもうずっと前から時間の感覚をなくしていた。村に着いてからどのくらいたったのか、ぼんやりとはわかっていた。だがもし誰かが、いまはリオデジャネイロ時間で2001年9月11日の九時だと告げたとしても、アントニオは、マンジョッカのなかでつぶれたイモムシを見つめながら、きっとこう答えただろう（使わないせいでますますおぼつかなくなってきたポルトガル語で）。「それが俺になんの関係がある？　こっちにはもっと差し迫った片づけなきゃならない問題があるんだ」

五千キロ北、あらゆる意味であまりに遠く、宇宙の反対側だったとしてもおかしくない場所で、イザベルはテレビを呆然と見つめていた。アントニオのことはずいぶん長いこと考えていなかった。前の年、いくつかの用事を片づけにマカパに戻ったとき、彼がまだ森で行方不明のままで、もう見つかる望みはないと聞いていた。

いま、ふいに、機長が乗客全員を道連れに海に突っこんで自殺することを選んだあの飛行機の悲劇に、彼がどれほど心を揺さぶられていたかを思い出し、彼女は思った。死んでいてよかったわね、アントニオ。こんなおぞましいものを見ずにすんだんだから。

二機目の飛行機が世界貿易センタービルに突っこむ場面の何度目かのリプレイで、イザベルはわれに返り、小さなリュックをとって、携帯電話と水のボトルを二本入れた。世界じゅうのメディアがきっと大騒ぎしてる。通訳が要るかどうか、見に行こう。ヒステリックな笑い声とともに、彼女はその考えを締めくくった。「かどうか」？　ははは。そして家から駆けだしていった。

2.19 ワールドカップ

みなさん、こんばんは。東京から、2002年サッカー・ワールドカップ準々決勝、オランダ対アルゼンチンを生中継でお送りします。両チームはもうピッチに入ってきています。オランダは伝統の黄土色の水玉のユニフォーム、アルゼンチンは美しい茶色の縞のユニフォームです。観客はビッグマッチにふさわしい顔ぶれです。少なくとも三十人の子ども、たくさんのオウム、そして数えきれない虫と危険な動物。でも、お静かに、国歌の時間です。

アントニオは頭のなかでやっていた実況中継をやめて、「アイーボ」と号令をかけた。子どもたちは一列に並んだ。まさにそうしてほしかったとおりだった。誇らしさがこみあげてきたが、それは、子どもたちがそうしたのは彼の発音が完璧だったからではなく、何をすればいいかもうわかっていたからではないか、という強い疑いでやわらげられた。三つ目の準々決勝だった。一つ目では、日本が意外にもイタリアを破っていた。試合の結果を操るつもりはなかったが、ひそかにもっと現実的な結果を望んでいたアントニオには残念なことだった。二つ目ではドイツがデンマークを8対5で片づけていた。組み合わせ表を埋めるのは、このあとのブラジル対クロアチアのはずだった。アントニオは「オランダ！」と言って黄土色の水玉を指さし、国歌を歌いはじめた。オランダの選手たちは大喜びでそれに声を合わせた。

「ポロポ、ポロポ、ポロポッポポッポポポ。ポロポ、ポロポ、ポロポッポポッポポポ」

しばらく前から、子どもたちはサッカーのおもな規則をしっかり身につけたようで、アントニオはもう村の大会もいくつか組織していた。もっとも、それは現実よりも彼の頭のなかでおこなわれる大会だった。グループリーグや順位や勝ち点の考え方を説明するのは早々にあきらめてしまったし、彼が覚えた彼らのことばは、とてもその用には足りなかった。

たぶん、彼らのことば全体を探しても、その用に足りることばはないのだろう。彼らはそのことばを「アカーアアアア！」、ただ単に「ことば」と呼んでいた。とにかく子どもたちは試合をし、彼は自分で順位表を組み立て、それでみんな満足していた。まだ何かもっとよくできることがあるかもしれない、いつだってもっとよくはできるものだが、アントニオには何も思いつかなかった。

そしてある晩、置いてきた世界のことを思い返す、わりにめったにない晩のひとつに、どうすればいいかがひらめいた。思いが日韓ワールドカップに飛んだのだ。アントニオは、見てきた妊娠が月満ちた数から計算して、たぶん森に来て二年半か三年たっていると見積もっていた。だとすれば2002年のワールドカップは終わったばかりか、ひょっとするとまさにいま開かれているところかもしれない。アントニオは、チームの色や国歌のような儀式的な要素を持ちこめば、楽しいうえに子どもたちにもわかりやすいだろうと考えた。

翌朝、目を覚ますとすぐに、彼はよく風よけのきく一画の地面をていねいにならし、先のとがった棒で、第一回アマゾン空想ワールドカップの組み合わせ表を描いた。複雑にしすぎないように、グループリーグは飛ばしていきなり準々決勝から始めることにした。強豪国はすべて選んだが、フランスだけは外した。98年のワールドカップでブラジルに勝ったことは、まだあまりに生々しく痛む侮辱で、とても許せなかったのだ。そういうわけで、アントニオの空想のなかでは、あのいまいましいジダンのフランスは開催国にあっと驚く敗退を喫していた。

さらに、組み合わせ表と試合の結びつきをわかりやすくするために、国旗ではなくチームの色を使うことにした。その色を、まだ未熟な選手たちの体にじかに描くことにしたのだ。

ここで最初の問題が起きた。最初のふたつのチームをつくったあと、彼は「日本」の選手たちの胸にきれいな赤い丸を描くことにした。ヤマンデたちはそれに大喜びしたようだった。赤い丸があまりにすてきだったので、「イタリア」の選手たちまで描いてほしがり、波打つ黒い縞で我慢させるのにずいぶん辛抱が要った。

二つ目の問題は国歌の時間に持ちあがった。アントニオは、日本代表のことはほとんど何も知らない、まずその国歌からして知らないことに気づき、かわりにラ・マルセイエーズを使うことにしていた。だが最初に歌いだしたのは『イタリアの兄弟』だった。ブラジルの国歌を除けば、メロディーとことばをいくらか覚えている唯一の国歌だったのだ。そして出だしの「ポロポ、ポロポ」が子どもたちのあいだにあまりに熱狂を巻き起こしたので、ほかの曲を受け入れさせる方法はなかった。ラ・マルセイエーズはたちまち抗議の叫びで迎えられた。「日本」の子どもたちは不当に差別されていると感じ、自分たちも出だしの「ポロポ、ポロポ」がほしいのだとわからせた。こうしてアントニオは『イタリアの兄弟』を、国歌から試合開始の歌に変えた。つまりは、ワールドカップのテーマソングだ。

若い友人たちにサッカーを手ほどきするにあたって、アントニオは、審判の誤審という考え方にさえ、ほんの少しでも触れさせないようにしようと固く決めていて、できるかぎり公平でいようと心に誓っていた。だがイタリアが日本に負けたあと――そんなことあるか――彼は、自分ももっと楽しみたいなら、チームの組み方のところで手を入れなければならないと気づいた。

実際、彼のやり方のもうひとつの柱は、決まったチームができるのを疫病のように避けることだった。五百人の村に徒党や派閥をつくる危険を、ほんのわずかでも冒したくなかった。だから、チームの組み方は試合ごとに変えなければならない以上、少しばかり操作してもかまわない。えこひいきをするためではなく、ロールプレイの（彼の目から見ての）現実味を増すためにだ。

彼の手もとにいる選手は、六歳から成人の儀式の年ごろまでの、三十人ほどの男の子と六人の女の子だった。次の準々決勝では、ドイツが少し強くて「筋肉質」になるようにチームを組み、デンマークにはいちばん身軽な子どもたちを振りあてた。オランダ対アルゼンチンはもっと拮抗した試合にしなければならなかったので、ヤマンデとモアシルが前者に、ピアタとウビラタンが後者に入り、下手な選手や小さな選手もだいたい均等に分けた。

ヤマンデとピアタは、いちばん強いふたりであるうえにとても仲がよく、別々にプレーすると思ってかすかに不満そうな顔をしていた。心配するな、次の試合では緑と金のシャツでまたいっしょになるさ、とアントニオはにやりとして思った。

2.20 灰

アントニオは地上およそ十メートルの高さにいた。身軽によじ登った木の樹皮一面に、大きなアリクイの頑丈な爪を研いで鋭くしたもので、縦の切りこみを入れてあった。切りこみから淡い黄色の貴重な樹脂が流れだしはじめ、切りこみの形にうまく導かれて、木の根もとの大きな椀へ集まっていった。赤と白の大きな斑点のある黄色い巨大なイモムシが二匹、アントニオにはこぢんまりした大きさに思えたが、すぐ近くの枝の上をのんびり這っていた。おっ、こいつはうまいぞ、とアントニオは思った、誰かにやろう。

見ろよアントニオ、お前は俺たちの仲間だ。村の人々には自分たちのことを指すことばがなかった。ポルトガル語の名前も知らない木から、仲間といっしょに食べるつもりのぶよぶよの巨大なイモムシを二匹手に持って降りていくところじゃないか。考えはこの土地のことばで流れ、ポルトガル語の出番は、もう存在しないことばや、どうにも訳せないことばのためだけになっていた。

騒ぎが始まったのは、ちょうど彼が降りはじめたときだった。右手でイモムシを持っているせいで、降りるのはひと苦労だった。大きな小屋のひとつの裏手から人間のものとは思えない叫び声があがり、もう大勢の人が仕事を放りだして駆けつけていた。

アントニオはすぐに誰かが死んだのだとわかった。胸の奥でそう感じた、ああいう叫び声はほかの意味であるはずがなかった。

彼らと死との関係はよくなかった。彼らは死を侵入者とみなしていた。彼らの物語には、死が存在せず、村の民が永遠に生きられた時代が出てきた。その時代に彼らは強い敵の部族と出会い、それを打ち負かすことができたが、そんな大それたことをした罰が死だった。それが、いつも繰りかえされる根本の物語だった。死とは、自分たちと同じような者たちと戦った罰だ、もう戦ってはならない、そうすればいつか死は自分たちを見捨てて去っていくかもしれない。

だが、その日ではなかった。地面に降り立つころには、アントニオは、死んだのは誰か大事な、愛されていた人だと確信していた。たいてい、死んだ者が共同体のなかで大事な人であればあるほど、死への反応は荒々しく怒りに満ちたものになった。そして駆けつけた人々のふるまいは疑いの余地を残さなかった。みんな気が狂い、怒りに目がくらんでいるようだった。

叫び声はやがて、遠くで狩りや遊びをしている者も含めて全員に届き、遅くとも一時間のうちに、村じゅうが死への激しい反応の段階に集まってくるはずだった。誰もこの怒りを導こうとも止めようともしなかった。それどころか、いちばん年老いた者がいちばん怒り狂っていることもよくあって、そのふるまいが若者たちを、子どもたちまでもあおりたてた。彼らはそうやって叫び、宙を蹴り、身をよじり、震わせ、胸や脚を激しく平手で打ちつけ、とうとう疲れはてて地面に倒れるまで続ける。いちばん体の強い者にとっては、それは何時間もの受難を意味した。

森は最初、その轟きを増幅して応えた。あらゆる種類の鳥や猿が男たちや女たちの叫びに自分たちの叫びを加え、まったく圧倒されるような反響をつくりだした。それから、苦しみが抑えようもなく長びくと、動物たちはその場を去り、怒りの爆発のまわりに沈黙の輪を残して、またひとつ驚くべき効果を生みだした。木々そのものが生みだす、遠くの低い木霊のようなものを。

ちがう！

アントニオが最初に見たのは足だった。なぜか、アントニオは自分でもはっきり意識しないまま、足を見るだけでほとんど誰でも見分けられるようになっていた。足の裏はしっかりしているのに信じられないほどしなやかで、たこだらけなのに並はずれて敏感な足だった。

ちがう！

疑いはなかったが、本当ではないと、ありえないと、まちがいということも十分ありうると、自分に思いこませたかった。

「ちがう！」ポルトガル語の叫びは、まわりの人々の叫びのなかにかき消された。「ちがう！　ちがう！　ちがう！」

地面に目を閉じて横たわっていたのはアインデだった。妙に安らかな表情で、頭のまわりに髪が広がって、後光のようなものをつくっていた。

魔女。

薬師の女、魔女アインデは、どれほどたくさんのことを彼に教えてくれただろう？　何もかもだ。アントニオは、ほかの者たちがすでに表しているのと同じ怒りが、自分のなかにこみあげてくるのを感じた。そんなことは一度もなかった。ふだんはこの最初の悲しみの表れを離れたところで見ているだけだったが、今度はちがった。彼もほかの者と同じように叫び、身をよじりはじめ、たちまち時間と空間の感覚を失った。

ふたたび目を開けたとき、彼は湿った土の上に横たわっていた。午後の暑い空気が村を包み、男も女も、いちばん丈夫な者たちの多くが、一種の弔いの踊りに変わったもののなかで、まだ体を震わせていた。年寄りたちはもう遺体を整え、火葬の薪の山を組んでいた。四つの大きな石のあいだに大量の薪が積みあげられ、その上に、遺体を横たえるための同じ石の板がのせられた。死者の持ちものはすべて薪の山で焼かれ、燃えないものは集めて川へ捨てられる。肉が焼けてしまうと骨が集められ、灰になるまで別に焼かれる。

アントニオは奇妙に醒めた気持ちで、その手順のすべてを見守った。樹脂から燃えあがって薪にあふれ、高く立ちのぼって、夕焼けの赤と溶けあいながら薬師の女を包んでいく炎、ゆっくりと黒ずんでこの世から消えていく体、骨。

灰は四人の若者、男ふたりと女ふたりが受けとり、村をなかばおおっている木々の屋根のてっぺん、地上少なくとも二十メートルまで運んでいって、それから小屋の上に、人々の上に、何もかもの上に、雪のようにゆっくりと降らせた。その恐ろしい雪の降るなかを、特別な狩りに出かけていた最初の狩人たちがもう戻ってきていた。みんなで力が尽きるまで食べ、飲むのだ。宴の長さは死者がどれだけ人々の目を引く存在だったかによって決まり、今度の宴は三日三晩より短くなることはないはずだった。

最初の歌がもう立ちのぼっていた。女たちや若い少年たちが年寄りたちのところへ行って、ひどく古い歌を歌った。アントニオにはことばがいくつか聞きとれるだけだったが、はっきりした目的は年寄りたちの魂を慰めることだった。何かの役目に就いていない大人たちは、その旋律をただ黙って聞き、ときおり、目に涙をいっぱいにためて、かすかにほほえむことを自分に許した。

やがて肉が焼け、酒の飲みもの、森の水が流れはじめるはずだった。女のいちばん近い身内たちは、ひとつかみの灰を自分の分の森の水に混ぜ、アントニオもひと口飲むよう勧められた。

そんなことは初めてだった。アントニオが感じたのは、満たされたという感覚だった。魔女の魂が彼のなかに入ってきたのだ。彼は三日三晩、恐れることなく食べて飲み、四日目の夜明けに目を覚ましたとき、自分のなかの何かが永遠に変わったことを悟った。

2.21 しあわせ

親愛なるノートへ……アントニオはよく、ひとりごとを言いながら自分自身と時間を過ごしていた。いや、もっとぴったりのことばがあったはずだ、ジャーナル？　親愛なるジャーナルへ……いや、それもちがう。日記だ！　親愛なる日記へ！　それでは。親愛なる日記へ、僕はいまハンモックに寝そべっていて、まわりでは子どもたちが走って笑っている。そして初めて君に打ち明けなきゃならない、僕はしあわせだ。こんなに気分がいいなんて信じられない。毎日サッカーをしているか、彼らのボール遊びをしている。最初はばかにしていたけど、いまではすばらしいものに思える。僕は村の子どもたちの公認の教育係みたいなものになった。そして、まあ、しあわせなんだ。このごろいちばんの心配ごとは、寒さという考えを彼らに説明する方法が見つからないことだ。氷のことは、ときどき水が石になるんだと話して、みんなに笑われながらもなんとか伝えた。でも寒さは、どう話せばいいのかまだわからない。

「ボー・ル？」

アントニオが長いあいだ心のなかでふたつ靴下と呼んでいたヤマンデが、いつもの笑顔で、ポルトガル語のことばを使って尋ねた。

「ちょっと休みたかったんだ」とアントニオは村のことばで答えた。

「ボー・ル！」とヤマンデはボールを見せながら食いさがった。

まったく、この子たちは疲れを知らない……まあ、世界じゅうの子どもはみんなそうだけど、この子たちは、ほかではめったに見ないくらい元気ではつらつとしている。

「わかった、わかった、ボール、ボール」と彼はポルトガル語で言った。ときどきそうするのだった。それは一種の愛情のしるしで、ときには自然に出てきたし、ときには、彼らには理解できないとよくわかっていても、昔のことばで長い独白をぶちたくてたまらなくなるのだった。

「でもダッシュはなしだぞ、いいな？　朝からずっとダッシュとストライドをやらせてるんだ、怪我なんかしてほしくない。わかってる、君たちは若いし、若いときは自分は不死身だといつも思うものだ、でも、無理をするときと休むときを早く見分けられるようにならなきゃいけない」

ヤマンデは、この知らないことばを聞くときいつもそうするように、おもしろそうに彼を見た。「早く、大人たちは狩りに行ってる、小さい子たちが遊び場で待ってる！」と彼はことばで言った。

「遊び場で、か？　じゃあ試合だな、じゃあ休むのは明日だ……」

アントニオは本気で心配しているわけではなかった。この子たちは、彼がいてもいなくても、どうせ一日じゅう遊んでいただろうし、たぶん何世代も前からそうしてきたのだ。むしろ彼が責任を感じていたのは、彼らの体と技術の鍛え方を自分が方向づけようとしていることで、何かの釣りあいを崩したくなかったし、ましてや筋肉の繊維を一本でも傷めたくなかった。

ところが遊び場に着くと、最初の大人たちがもう狩りから戻ってきていた。大人がいるときは、若い者は空き地に入れず、わきにいるしかないというのが決まりだった。アントニオは子どもたちに少し応援することを教えていた。昔からボールの試合は、おしゃべりく

らいはしても、叫んだりせずに黙って見るものだったからだ。大人たちが来たことで、子どもたちはがっかりした顔になった。村へ戻って、権利のある者たちに場所を明け渡さなければならないのだ。ところが、そのときはちがった。狩人のひとりがアントニオに近づき、ゆっくりした話し方で言った。「ほかの者はまだ狩りをしてる、小さい子たちと遊ぶか？」

そんなことは一度もなかった。いちばん上手な少年のひとりが試合に加わることはありえた。怪我をした者や、ほかの用事で手がふさがっている者のかわりに。だが大人対子どもは、ときたま、二対二や三対三くらいのものを除けば、見たこともなかった。

「お手やわらかに頼むよ」とアントニオは答えた。少し荒すぎる体のぶつかりあいが、「彼の」子どもたちの誰かを傷つけはしないかと心配だったのだ。

「やわらかにじゃない、強く、とことん強くだ、そうすればもっと早く男になれる」と大人は、まったく皮肉には聞こえない口調で答えた。「ただし、お前の遊びでだ、サッカーで。ボール遊びじゃなく」

そうだろうな、とアントニオは思った、わかってる、ボール遊びは神聖なんだ。

子どもたちはすぐにわかって、しあわせの姿そのものになった。叫び、ピッチを走りまわり、抱きあって、喜びが人の形をとったようだった。それも全部、キックオフの前のことだった。

「お前の言うとおりにやろう、アントニオ、毒矢と張りすぎた弓をやろう、いいな？」

アントニオは顔いっぱいに笑みを浮かべてうなずいた。彼らが遊んで楽しんでくれればそれで十分だった。彼が導入したばかりの、本気というより遊びとして持ちこんだ型の名前を、全員がはっきりわかっているかどうかもあやしかった。それに、もう幼い子どもではないとはいえ、まだみんな子どもで、どのみち小さすぎた。難しすぎる考え方だった。

小さい子たちはおずおずと、ぎこちなく始めた。無理もない、相手は村の偉大な狩人たち、いちばん強くていちばん敬われている男たちなのだ。パスはずれ、ボールは奪われ、アントニオの型はただ大混乱を生むばかりだった。ゴールを決められるたびにますますしょげていき、ふたりほどは泣きだす寸前だった。

そのとき急に、子どもたちの頭のなかで何かがかちりと入り、張りすぎた弓が機能しはじめた。サイドの子たちが守備で真ん中の子たちを助け、大人たちの足もとにはいつも二、三人のちびがまとわりつき、ボールをキープするのがだんだん難しくなっていった。今日は走らせたから疲れているはずなのに、とアントニオは思った。子どもたちはあいかわらずパスをはずし、ボールを奪われていたが、守備はいまでは持ちこたえていて、四対〇か五対〇のあたりで、偉大な狩人たちはもう点を取れなくなり、ゴールにあまり近づくことさえできなくなった。

アントニオは、ヤマンデが仲間ふたりとひそひそ話し続けているのを見た。毒矢のことを思い出させてるんだ、と彼は気づいた。いい機会も待っている。ひとりの狩人がセンターサークルで三人の悪魔のような小さな相手に囲まれてボールを失い、ボールはヤマンデの足もとへ来た。ヤマンデは二度、ダッシュと方向転換をしてみせ、相手を何メートルも置き去りにした。ゴールが見えるところまで来るとシュートのふりをして、かわりに、相手の守備陣のあいだに完璧なタイミングで入りこんだ三人の仲間のひとりへ、正確そのもののパスをふわりと送った。毒矢だ。

アントニオはパスの長い放物線を見つめながら、まったく新しい感覚を味わった。美しさの、静けさの、成長の瞬間だった。相手の目は驚きのなかで途方に暮れ、彼の子どもたちの目はジャガーの目のようだった。すべては場合による、なんてうそだ。何もかもがこんなに正確で、こんなに意欲と喜びがあるときには、もう場合によらない。年上の少年のひとり、ジャシの半分オーバーヘッドのシュートが、完璧なタイミングから生まれた信じられないスピードで足から飛びだした。キーパーは動けず、ボールがゴールに入るのを見る暇さえなかったかもしれない。ヤマンデはもう、アントニオに教わったとおりに、両腕を上げて喜びながら、仲間を抱きしめに走っていた。心のどこかで、ボールが入ることを彼はずっと前からわかっていた。心のなかで、もう場合によらないことをわかっていた。

これは僕が持ったなかで最高のサッカーチームだ、とアントニオは、かつてないほどしあわせに思った。

2.22 物語

「アントニオ、あなたはなんでもつくれるの？」

ジャナイナの細い声が、あいまいな記憶と地面に棒で描いた型とでできた、サッカーについての長い独白をさえぎった。アントニオは驚いて振り向き、問いかけるように彼女を見た。まわりにいた少年たちは立ちあがって駆けていった。

「あなたはいつも自分の村の話をするでしょう、村にあるいろんなもののこと。そういうもの、あなたはつくれるの？　たとえば、光る大きな鳥をつくれる？」

「飛行機のこと？」とアントニオはポルトガル語で尋ねた。「いや、つくれない、君たちの小屋だってつくれないよ」と彼は土地のことばに切り替えて締めくくった。

「でも、そういうものを全部見てきたんでしょう？　どうしてつくれないの？」とジャナイナは食いさがった。彼女は話すとき、仲間たちよりずっと身ぶりが大きいのが特徴だった。彼女にとっても村のことばは母語ではなかったからだ。そのせいで、言うことすべてに力のこもった調子がつき、彼女の体の存在を、アントニオがどうしても目を向けずにいられないその体を、際立たせるのだった。

「難しいものだからさ」アントニオは、まだわりに限られた語彙でどれだけのことが言えるのか、ときどき自分でも驚いた。「たくさんの男とたくさんの考えが要るんだ」

少し先で年配の女がふたり、火をおこすのに夢中になっていたが、そのひとりが笑いながら口をはさんだ。「アントニオは火をおこすことだってできないのよ！」

「できるさ！」と彼は答えた。「時間はかかるけど、できる！」

どっと笑いが起きて、アントニオは何か言い方をまちがえたのではないかと疑った。

「あなたの村の、何かすてきな話をして」とジャナイナはまた頼み、アントニオの隣に、膝と膝がほとんど触れあうほど近くに腰をおろした。

「すてきな話？」

彼の話はほとんど全部、サッカーや、ワールドカップや、偉大な選手や、自分の体験のことばかりだった。わざとそうしていたわけではない。ことばに縛られている気がしていて、サッカーなら訳すのが比較的簡単で、みんなが興味を持つ話題だったのだ。それに、ことばで届かないところは、やってみせたり、身ぶりで示したり、描いたりして届かせることができた。サッカーは彼がことばを覚えるための扉だった。だがいまは、自分の世界で美しいと思うもの、恋しく思うものの話をジャナイナにしたかった。

「僕の村には、いや、それだけじゃない、世界じゅうに、糸があるんだ……」アマゾンの森のなかで発達した、狩人の民のために発達してそれに合ったことばで、これをどう話せばいいんだろう？　「そしてその糸のなかを、ほかの人の考えが通るんだ。僕たちはそれを『インターネット』って呼んでる。その糸のどれかにつながれば、ほかの人が何を考えているのか見ることができる」

「見る？」とさっきアントニオをからかっていた女のひとりが、魅せられたように尋ねた。

「そう、見るんだ。その糸のなかを考えが通って、僕たちが『画面』と呼んでいるものに出てくる。そして画面を見れば、考えが見える。ほら、地面に描くときと同じさ。地面が画面で、僕の考えていることを君たちに見せてくれる、だろ？」

「考えたこともなかった……」とジャナイナが言った。

「そう、描くときは、自分のなかにあるものを外に出しているんだ」このことばでそれを言うのはなんて難しいんだろう。「世界にある糸を通せば、ずっと遠くにいても、考えはちゃんと画面に届くんだ」

「でも、どれくらい遠く？　川までくらい？　バカバの木までくらい？」

アントニオは、村の人々にとって距離という考えがかなりあいまいなものだと知っていた。これまでにも何度か、世界全体の話をするのにひどく苦労していた。

「遠く、好きなだけ遠く。知っているいちばん遠いものを考えてごらん」

「月」

「そう、月くらい遠く」

「月の考えも聞けるの？」

「いや、月の考えは聞けない、月に考えがあるのかどうか知らないよ。でも昔、人間が月へ行ったことがあって、僕たちは特別な見えない糸を通して、その人たちのことばを聞くことができたんだ」

「見えない糸？」

「そう」

「地上から月まで続いてるの？」

「そう」

アントニオは、そのことばがどれほど信じがたく聞こえるにちがいないかを思った。なにしろ、その糸を使っていながら人間が月へ行ったことを信じない人だっているのだ。彼は疑いの声が上がるものと思っていた。ところが驚いたことに、ジャナイナは夢見るような顔であたりを見まわし、尋ねた。「ここにもあるの、見えない糸は？」

アントニオは驚きから立ちなおるのに何秒かかかってから答えた。「ああ」

「でも私たちには見えない、画面をつくれないから、そうでしょう？」

「そうだね」

「残念」とジャナイナは締めくくった。「見てみたいわ。それで、あなたがそれをつくれるようになる望みはないのよね？」

「ああ、悪いけど」

2.23 打ち明け話

アントニオが村で聞いたこともないほど奇妙な物語を知っているという知らせが広まり、住民たちは、自分たちに備わっていることも知らなかった好奇心にとらわれた。

ことばのせいもあって、彼らを満足させるのは不可能に思えた。描きあらわすのがとても難しい、いや不可能なものを描きあらわそうとして、アントニオはえんえんと言いかえを重ねなければならなかったのだ。その結果はいつも、こっけいと魔法のあいだのどこかだった。話をするたびに聞き手は増え、やがてアントニオは、物語のあいだ、耳を傾ける村じゅうの人に取り囲まれるようになった。

結局、ラジオにいたころとたいして変わらないな、それどころか、ここのほうがリスナーが多いくらいだ。そういえば……

「見える糸だけじゃない、見えない糸もあるんだ……」

「月まで続いてるやつね！」とジャナイナが大きな身ぶりで、声に誇らしさをにじませて口をはさんだ。

「だから月は空に浮かんでるんだ！　糸でつながってるんだ！」と別の声が言った。

アントニオは続けた。「その見えない糸を通って、人の声が届くんだ……」

「考えが通るんじゃなかったの？」と年配の女が尋ねた。

「ちがうのよ、ねえさん」とまたジャナイナが割って入った。「考えは本物の糸、見える糸を通るの！　見えない糸を通るのは声だけ！」

それに映像もね、お嬢さん、でもそれはたぶんまた今度説明しよう……

「毎日僕は、声をつかまえる罠みたいなもののなかへ話していて、それが僕のことばをつかまえて、見えない糸に配っていたんだ。僕たちはそれを『ラジオ』と呼んでいて、いま僕が君たちにしているみたいに、人と話すのに使う。ただ、聞く人は僕の前にいなくてもいい。自分の小屋にいても、外にいても、遠くにいてもいいんだ」

「どれくらい遠く？　バカバの木までくらい？」とひとりの娘が、まさにアントニオがまた「距離」の話を持ちだしたことを後悔しているときに尋ねた。

「月まで！　月まで！」とジャナイナがかつてないほど力をこめて答えた。

「でも僕の声は月までは届かなかった。まあ、だいたいバカバの木までくらいかな、もう少し先かもしれない」とアントニオが締めくくると、ジャナイナはがっかりした。アントニオが月と話せることを心ひそかに期待していたのだ。

「それが、僕たちのやり方の物語の語り方なんだ。みんなそれぞれ自分のしていることを続けながら、そのあいだに僕の声を聞くんだ」

「でも、みんなでいっしょに聞くのは楽しいぞ！」とひとりの大人、狩人のひとりが口をはさんだ。

「若い者はそのほうがよく覚える！」と年寄りが言った。

「声が聞こえてたら物音が聞こえない、それでどうやって狩りをするんだ？」と最初の狩人が言い、それで話は決まった。

アントニオはあたりを見まわした。みんなの視線を体に感じた。とりわけジャナイナの視線を。彼女は、アントニオが月と話さないという知らせの衝撃から立ちなおって、何か突拍子もない考えを練っているところだった。

「変わってるわね、あなたの村は」と彼女はとうとう満面の笑みで言った。「考えが通る糸があって、声を運ぶ見えない糸がある。考えをじかに見えない糸に入れられなかったの？」

「それはいい考えだな、知ってた？　いや、きっと遅かれ早かれ、本当にそうなるよ。考えが見えない糸を通って旅をするようになるんだ」

「アントニオ」と話しかけたのは、たくさんの子どもたちのがっしりした母親のようなおばあさんだった。「自分の村が、自分の部族が恋しくないのかい？」

アントニオはそんな率直な問いを予想していなかった。これだけの時間のあいだ、自分でもこれほど単純な形で問うたことは一度もなかった問いで、思った以上に胸を揺さぶられた。

「いや、それほどでも。ここで元気にやってるし、いまは君たちが僕の部族だ。まあ、両親と姉妹たちは、もちろん、少し恋しいな……それと、たぶん、知りあいだった女の子が……」とアントニオは言い、自分の前の人生がもうどれほど遠くなってしまったかに、ふいに気づいた。

「その子はお前のハンモックの隣に自分のハンモックを吊るしたのかい？」

「いや、いや、その……」とアントニオはジャナイナを見ながら、気まずそうな笑みを浮かべて答えた。「その子はいやがったんだ……」

「だから出ていったのかい？」

「迷ったんだ、それが本当のところさ。僕の村では、僕が見ていた若者たちにもうボール遊びをさせてくれなくなって、それで少しのあいだ村を離れることにしたんだけど、迷ってしまったんだ」

この話に村人たちはみんな息をのみ、興奮して話しあいはじめた。年寄りがふたり、ひどく険しい顔で立ちあがり、輪の真ん中に出てきた。「ボール遊び！　ボール遊びを禁じるなんて、どうしたらそんなことができる？」

「遊び場が焼けたのか？　だとしても、何日か待てばすむことだ！」

聞き手たちの騒ぎはやまず、アントニオはその隙に、彼をのみこんだ感情の波から立ちなおった。

「考えてみれば、君たちだって長いあいだ、僕に君たちのボール遊びをさせてくれなかっただろう。僕の村でもたいしてちがわなかったんだ。年寄りの男がひとり、僕の若者たちにもう遊ばせなくなったんだ」

「もしお前に遊ぶのを禁じたんなら」とふたりの年寄りのひとり目が言った、「その年寄りは賢かったことになる。お前はボールが下手だからな！　だが、お前の若者たちに遊ばせなかったのは、それは賢くない」

「みんなに会えて本当によかったよ」とアントニオは首を振りながら締めくくった。

2.24 サウダージ

ずっと前、アントニオは世界のさまざまな言語にあるただひとつきりのことば、意味を伝えるのが難しいせいで訳すのが難しいことばについての記事を読んだことがあった。上位十語に入っていたポルトガル語は「サウダージ」だけで、アントニオはそれをおもしろく思ったのを覚えていた。実際、そのことばは彼にとってもいつもわかりにくいものに思えていたのだ。

意味はもちろんはっきりわかっていたが、それを自分のものにすること、知りあいの多くがそうしているように、どんなものにでもサウダージを感じられるのはどうしてなのかを理解することは難しかった。少なくとも一部は、マカパを一度も離れたことがないせいだろうと考えたこともあったが、姉妹たちもいつも同じことをして、生まれた実家にいまも住んでいるのに、ずっと会っていない友だちや、学校の先生や、子どものころに食べた料理や、おもちゃに、しょっちゅうサウダージを口にしていた……そしていま、もうどれくらいかわからないほど森で暮らしてきて、サウダージは住んでいる場所によるものではないと、決定的に確かめることになった。

悲しく思うことはいくつかあった。両親や姉妹たちが彼を死んだと思っているのは悲しかったが、妙なことにそれにはサウダージを感じなかった（そのことを少し恥じてはいたが）。最初のうちは、もう教えないこと、サッカーを説明しないこと、ラジオで話さないことが残念だったが、意思の通じないあのひどい時期を過ぎて、新しい友人たちと話せるようになったいま、昔に未練はまったくなかった。サウダージを感じるものは、ふたつだけだった。

ひとつは未来だった。アントニオはもう新しい世界ですっかり快適に暮らしていたし、退屈することもなかった。いつも何かすることがあったし、語る物語があった。だが彼が暮らしている人々の生き方には、進歩というものがほとんどまったく欠けていた。十年後も、彼らはいまとだいたい同じやり方で同じことをしているだろう。

たいていはそれが心を和ませたが、ときどきアントニオは、置いてきた世界の目まぐるしい進歩のリズムを、ほんの少しの憂いとともに思わずにはいられなかった。たとえば、情報処理の分野ではどんな革新があったんだろう。インターネットのページはたぶんいまでは二倍か三倍の速さで読み込めるようになっているだろう。それにあのなんとかいうやつ、ナッパーだったか、あれでいまではアルバムを丸ごと聞けるかもしれないし、ひょっとしたら映画まで見られるかもしれない！　だがきっと新しい戦争も起きているだろうし、人間はいつだって技術を悪いことに使う方法も見つけるのだから、もう誰かが新しい技術の暗い面を見つけて利用しているかもしれない。その考えが毎回顔をのぞかせて、森の外の世界への未練を表に出さずにおく助けになった。

だが、いちばん純粋な形のサウダージを、彼は祖父に感じていた。リカルド・パウロ・アウメイダ・カルヴァーリョは1918年にマカパで生まれた。町が半ば孤立していることは、多くの同郷人にとってはその土地に根を生やしているための格好の言い訳だったが、リカルドにとってはかえって、旅をし、ブラジルと世界を知りたいという気持ちをかきたてるものだった。戦争が来ると、1943年に彼はすぐに陸軍に志願した。戦場で死んでは世界を知るという計画のさまたげになるので、前線からほどほどに離れていられる専門を選んだ。こうして彼はイタリアで、ブラジル派遣軍の軍楽隊のラッパ手として、エミリアのアペニン山脈で戦い、モンテーゼで、それから解放されたほかの町々で次々に、ブラジルの国歌とイタリアの国歌を吹くことになった。

アントニオはそのころの祖父の話をほとんど覚えていなかった。たいていは、喜んで聞いたはずの戦いの話ではなく、ボローニャやモデナの娘たちの魅力についての話で、祖母の

前でそれを聞かされるのはひどく気まずかったからだ。いまならそういう話も喜んで聞いただろうが、もうそれを語る祖父はいなかった。たぶんそれが彼のサウダージのいちばんの理由だった。いずれにしても、リカルドは戦争が終わるとブラジルに戻り、リオデジャネイロに駐屯した。そこで、エミリアの娘たちの魅力を何段も上回る魅力を持った女と知りあい（何段上回るかは、祖母がその話の場にいるかどうかによった）、そして何よりそこで、まさにブラジルで1950年に開かれることになっていた戦後最初のサッカー・ワールドカップに向けて、軍楽隊のなかで昇進していった。

そのワールドカップとその悲劇的な結末の話は、ブラジル人なら誰でも知っている。アントニオは、祖父がそれを語るのを聞いたときのことを、一分前に聞いたかのようにありありと覚えていた。1978年のことで、ブラジルはペルーとのあのスキャンダルまみれの試合のあと、アルゼンチンに決勝の座をだましとられたばかりだった。リカルドは、ひどくがっかりしている十一歳のアントニオ、自覚的なテレビ観戦者として初めてのワールドカップを経験していたアントニオを呼び、膝の上に座らせた。息子でアントニオの父親のイタロも隣に呼び、語りはじめた。

「これががっかりだと思うか？　いまから本当のがっかりの話をしてやろう。いや、辞書の『がっかり』の項目に載っているべき話だ。いままで一度も話したことはなかったな、イタロ、つらすぎる話だから、一生に一度だけ話すと決めていたんだ。今日がその時だと思う」

リカルドはすばらしい語り手で、アントニオは彼のスポーツの話を聞くのが大好きだったが、それ以上に、毎年いっしょに新しい話を生き、それを祖父が、自分も同じ試合を見たのかと疑いたくなるほど情熱的に、心をつかむように語るのを聞くのが好きだった。残念なことに、最近の話はどれも悪い結末だった。78年の盗み、82年のイタリアへのまさかの敗戦、86年のフランスへのPK戦での敗戦、90年の、またしてもあのいまいましいアルゼンチン。それからやっと94年に、新しい勝利がやってきた。リカルドはイタリアとの試合が好きだった。戦争のころ、若かったころ、感じのいいエミリアの娘たちを思い出させてくれるからだ。それに、たいてい結末がよかったからだ。バッジョが最後のPKをクロスバーの上へふかしたとき、リカルドは、映画館で望んでいた結末を見た人のほほえみを浮かべて、テレビのまわりに集まった家族に言った。「やっとアントニオといっしょにハッピーエンドを見られたんだから、もうしあわせに死ねるよ」

それはことばのあやではなかった。リカルドは数週間後に、二度と消えることのなかったあのほほえみを口もとに浮かべたまま、旅立っていった。

四年後、ブラジルは決勝で、またしてもあのいまいましいフランスに大敗した。アントニオは純粋で、甘く、ひどく苦いサウダージを感じた。ある意味では、祖父がこの新しいがっかりを味わわずにすんだのはよかったと思ったが、実際には祖父のいちばんおもしろい話は負けたときの話で、あのいまいましいジダンに祖父がどんな奇想天外な悪態を浴びせたか、聞いてみたかった。

「アントニオがまた話をするときの目をしてる」とヤマンデがピアタに言った。「話をしてもらいに行こう」

「アントニオ、目が空のなかで迷子になってるよ、でもいい午後だ。何か話をしてくれない？」

「え？　ああ、うん。いいよ」

「やったー！」といちばん小さな子たちが大喜びで叫んだ。

「悪者が出てくるやつがいいな、お願い！」とモアシルが頼んだ。

「でも感じのいい悪者……」とカウエがせがんだ。時がたっても、彼はまんまるのほっぺをなくしていなかった。

「感じのいい悪者が出てくる話がいいのか？　よし、じゃあ。楽にしてな、パオロロッシの話をしてやろう」

2.25 おとな

「一人前の男になったら、何がしたい？」

「どういう意味？」

「聞いたとおりの意味さ。明日、僕たちが一人前の男になったら、それから何がしたい？」

みんなは森じゅうでいちばんのお気に入りの場所に集まっていた。村と川のちょうど中間にある、とても大きな黒檀の木だ。座り心地のいい腰かけになる太い枝に座り、植物が比較的まばらなそのあたりにその日はめずらしくしつこく降っている雨を防いでくれる巨大な葉の下にうずくまっていた。雨のせいでオウムたちが色とりどりの花のように枝にとまり、そこから、かあかあと小声で鳴きかわしながら彼らを見ていた。ヘリコニアの花びらはかつてないほどつややかで赤かった。完璧なひとときだった。

ピアタは、ヤマンデに、沈んだあとの太陽が何をするのか聞かれたかのように答えた。太陽は昇って、また沈む。雨はやんで、また降りだす。そのあいだに草木は育ち続け、動物は草木を食べたり、互いを食べあったりし続ける。「男になったらすることをするさ。男の責任を負って、村の一員であり続ける。なんで、ほかに何がしたいんだよ？　なんでそんなこと聞くのかもわからない」

「お前はそう言うのは簡単さ。人生を来るままに受け入れる。お前は僕たちのなかでいちばん大きくてがっしりしてて、それにたいしてばかでもない」ヤマンデは、ピアタが蹴りを入れようとしたのをかわすために少し口をつぐんだ。「僕たちより先に生まれた多くの者よりも大きいし、みんなに尊敬されてる。時が来たら、お前が村の長老になるのは当然さ」

「何言ってんだ？　知ったことか。そんなことになる前に、空からどれだけの水が降ると思ってる？　僕は長老になんかなりたくないし、何より、いまそんなこと考えたくない。長老になるってことは、死ぬまでもうあまりないってことだろ。なんでいまそんなこと考えなきゃならないんだ？　なんてこと考えてるんだよ、明日がそんなにこわいのか？」

「明日はこわくないさ、知ってるだろ。眠っても休まらないのは、明日のあとに起きることなんだ。僕たちは一人前の男になる。それから？　一人前の男になったら何をする？　どうして男になると何かがちがわなきゃならないんだ？」

「僕は一人前の男になったら何がしたいかわかってる」と、二本ほど下の枝に座っていたモアシルが、幹に手間をかけて刻みつけていた自分の名前の彫りものの手を止めて言った。みんなが自分のほうを振り向くのを待ってから、彼は付け加えた。「世界を見に行きたいんだ」

目を丸くする者もいれば、笑いだす者もいた。

「世界って、どんな世界さ？」ヤマンデはすぐに、モアシルが本気で言っているのだとわかったし、その考えがどこから生まれたのかもわかった。それに、認めたくはなかったが、彼自身もそれを考えたことがあったのだ。

「アントニオの村を見に行きたいのか、マカパを見に？」と彼は続けた。

「うん。それだけじゃない。森の外にある世界を歩いてみたい、マラカナンに行ってみたい、アントニオが話してくれた道具を全部使ってみたい、ああいう変な遊びをいろいろやってる人たちを見てみたい。光る大きな鳥に乗ってみたい」

彼が話すにつれて、ほかの子たちはくすくす笑うのをやめていたが、この最後のことばの大胆さには、すっかり黙りこんでしまった。ことばも息も失っていた。聞こえるのはいつもの森の音の敷物だけで、それが黒檀の葉の上ではいっそう大きく聞こえるようだった。

「頭がおかしくなったのか？　一人前の男になる前から、夢の飲みものでも飲んだのか？」

また口を開いたのはピアタだった（そしてヤマンデはすぐに思った。ほら、長老としての最初の演説だ）。「マカパまで行くなんて無理だ。それに、もし行けたとしても、なんでそんなことしたがる？　アントニオはマカパからここへ来て、ここにとどまった。ここのほうがいいってことさ」

「たぶんね。でもあの人はふたつの村を見て、それから選んだんだ。僕も選ぶ前に見てみたいんだ」

「じゃあかわいそうなアラシは？　お前のハンモックの隣に自分のハンモックを吊るしたくてたまらないの、知ってるだろ。そんなふうに置いていくのか？」ピアタは、モアシルが女の子の話になると照れるのを知っていて、黙らせたいときはいつもその手を使った。だがその晩はちがった。

「来たければ、僕といっしょに来ればいい」と、その晩はとことんみんなを驚かせると決めていたモアシルは、自信たっぷりに言い返した。

だが雨はやみ、オウムたちはまた飛びたっていた。ヤマンデはそれを機に、一団のなかに生まれた気まずさを断ち切った。「話はもうおしまい、雨はやんだ、明日のための最後の助言をアントニオにもらいに行こう」

2.26 成人の儀式

少年たちの成人の儀式は集団でおこなわれ、大人のチーム（村の本物の代表チームのように、いちばん強い者たちが選ばれる）と、まだ儀式を受けていない者のなかでいちばん年長の十人の少年でつくるチームとの、ボール遊びの試合だった。シャボノの入口の近くに儀式の椰子があった。少年は背が十分に高くなると、ココナッツをひとつもぎとり、次に儀式を受ける者たちの組に入る。十人目の少年が実をもぐとチームができあがり、儀式の支度が始まる。儀式は三日後におこなわれるのだった。

ピアタとヤマンデは、前の回に入らなかった少年たちのなかでいちばん年長のふたりだったが、彼らの年まわりは生まれた子がやや少なかったので、前の儀式からずいぶん時間がたっていた。だが何日か前、ウビラタンが九人目として実をもいだとき、ふたりは身震いした。もうすぐだとわかっていたのだ。

誰もが、十個目のココナッツをもぐのはウビラジャラか、ひょっとするとタイニだろうと思っていた。ところがある朝、カウエが顔を輝かせて、儀式の呪術師イタタクアラのところへ、ココナッツを手にしてやってきた。

「ありがとう、カウエ、でもいまは腹が減っていないんだ」とイタタクアラは、何が起きているのか取りちがえて答えた。

「ちがうよ」とカウエは首を振った。「食べるためじゃない。儀式のココナッツなんだ」

「カウエ！」とイタタクアラは赤く塗った額にしわを寄せてたしなめた。「こういうことは冗談にしちゃいけないんだぞ」

「うれしいけど、冗談じゃないよ」

「それに、誰かに手伝ってもらったり、木に登ったりするのは禁じられているのも知っているな」

「誰にも手伝ってもらってない、全部ひとりでやったんだ」

カウエは、年が若いことよりも背が低いことのほうが、イタタクアラが信じない理由になっているとわかっていたので、こう付け加えずにはいられなかった。「石を積んで小さな山をつくって、その上に乗って跳んだんだ」

前代未聞のことだった。世代から世代へ語り継がれてきたいちばん古い物語のなかにさえ、そんな出来事は語られていなかった。だから決まりはそういうことを考えに入れてすらいなかった。少年たちはただ椰子の木の下を通りかかって手を伸ばし、なかには跳びあがる者もいたが、たいていたいして本気ではなかった。大人になるのを急ぐことはなかったのだ。だがカウエは昔からの遊び仲間たちと離れたくなかった。そして必要が、誰の目にも明らかにもともと聡明だった頭を、さらに鍛えたのだった。

年寄りたちの短い話し合いのあと、カウエは儀式に加わる権利を正当に勝ちとったと宣言された。三日後に何が起きるかを知っているので、誰もが彼を気の毒に思ったが。

ほかの九人は、十人目が彼だと知って喜んだ。ちびではあるが、すさまじいダッシュと、並ぶ者のない位置どりの感覚を持っていたからだ。アントニオも、それが少年たちのチームにとっていいことだと確信していた。

彼はそのチームのことがかなり心配だった。もう何年もたっていたが、自分の番に儀式を受けたときの記憶は、腕の傷あとのように、まだくっきりしていた。

村に来てからいちばん強烈な瞬間のひとつだった。大人だったので、彼はココナッツをもぐ必要はなかった。年寄りたちがあるとき、もう小さな子どものように役立たずではない、男たちの仲間に入れてもいいと、ただそう決めたのだった。最初にまさった感情はしあわせだった。部族の正式な一員として受け入れられたことを、それが確かなものにしてくれたからだ。それから心配が取ってかわった。当時の彼は、まだぎこちないながらも意思を通わせることはもうできていて、試合を見て規則はもうわかったつもりでいたが、それでも前の三日間を規則のおさらいに費やした。

試合は、そのためにきれいに整えられた中央の空き地で、十人対十人でおこなわれる。ボールを持った者は動いてはいけない。いちばん近くにいる相手はその前に立ちはだかってもいいが、ボールを持っている者には、突き飛ばしてどかせる権利がある。視界が開けたと思ったら、ボールを持った者は味方のほうへボールを蹴る。最初に手か足でボールに触れた者が新しい持ち主になり、それが続いていく。遊びの目的は、空き地の奥のふたつの聖なる木に当てることだ。両方に当たるたびに、そのチームに一点が入る。

心配のあとに、最後に取ってかわったのは、終わりの感情、屈辱を受けるだろうという予感だった。儀式を受ける者たちにとって、それはそれまで見ているしかなかったボール遊びの初めての試合だった。それに加えて、一人前の男たちのチームは考えうる最強の顔ぶれなのに、儀式を受ける者たちはただの十人の少年だった。両者の力にはとてつもない差があり、それは壊滅的な敗北につながった。

いや、正確には敗北とさえ言えなかった。差があまりに大きいので、点は数えられなかったのだ。数えるのは儀式を受ける者たちのチームの点だけで、儀式は彼らが十点に達したときに終わる。それはたいてい、何時間も何時間もの試合のあとのことで、そのあいだ一人前の男たちはどんな打撃も惜しまず、点をどっさり取った。伝えたいことははっきりしていた。お前たちはもう一人前の男だ、だがこれはほんの最初の一歩にすぎない、俺たちのようになるにはまだまだ道は長いぞ。アントニオが加わった儀式はまる一日近く続いた。もっと長い儀式を覚えているのに、それほど年をとっている必要はなかった。たとえばキリマが加わった儀式は、二日以上続いたのだ。

いまアントニオのなかで勝っている感情は、また心配だった。二月ごとにきちんと開いている「サッカー・ワールドカップ」のおかげもあって、これはたぶん何年も見たことがないほど強い儀式の組で、チームの結束が固いのは確かだった。だがボール遊びを一度もしたことがない（モアシルが何度か、こっそり鍛えてほしいと頼んできたが、アントニオはきっぱり断った）のは大きなハンディキャップで、それにアントニオは、サッカーに慣れさせたせいで彼らが混乱してしまうのではないかと心配していた。

だから儀式の最初のひとときを見て、彼はひどく驚いた。少年たちと男たちは、成人と成熟の色で体を塗り、集中して張りつめていた。石と棒を打ち鳴らすリズムが心臓の鼓動を大きく響かせ、女たちと年寄りたちが「一人前の男になる歌」の高く深い音を歌っていた。

羽根の儀式用の頭飾りをつけたイタタクアラが最後の一節を力強く歌い、とても長いキックで儀式の始まりを告げると、ボールはすぐにモアシルが、ネコのような一種のセーブで奪った。ボールはただちにピアタへ渡り、そこからヤマンデへ長いボールが送られ、ヤマンデはそれをダイレクトに蹴って、ふたつの聖なる木のあいだで跳ね返らせた。儀式を受ける者たちに一点。驚きから立ちなおる暇もないうちに、儀式を受ける者たちはまた攻めこみ、二点目を取って出てきた。稲妻のような速さで乱戦から飛びだしたカウエが決めたのだ。

大人たちは信じられなかった。儀式を受ける者たちは、規則は守りながら、村でいつからとも知れないほど昔から、たぶん何百年も前から根づいてきたプレーのやり方をひっくり返していた。ボールが自分たちのものになると、相手が立ちはだかる位置につく暇を与えないよう、できるだけダイレクトに蹴った。

ボールが大人たちの手にあるときは、たしかにその前に立ちはしたが、突き飛ばされない距離をとった。取り憑かれたようにピッチを走りまわり、相手が決まった目印をつかめないようにした。そして何人か、とくにヤマンデとカウエのキックはとても正確で、遠くからでも一回目で点を取ることができた。ふつう点を取る手順は、ゆっくり的に近づいていって、何度も試みるものなのに。

大人たちは、少年たちのすばらしい戦いぶりを喜んでいるように見せようとしたが、実際には多くが怒り狂っていて、すぐに、自分たちがまだ上回っている唯一の土俵、体のぶつかりあいに試合を持ちこもうとした。

少年たちはできるだけそれを避けようとしたが、ぶつかったときに受ける突き飛ばしはすさまじかった。カウエは一度、二メートル近くも後ろへ吹っ飛ばされて頭を打ったが、さいわいたいした怪我ではなかった。ジャシも、イタウナも、ピアタまでも、かなりの打撃をくらった。

この混乱の上を無傷で踊っているように見えるのは、ヤマンデだけだった。そして十点目のボールが渡ったのは、彼だった。ピライがいいボールを出し、彼と木々のあいだにいるのは、大人のなかでもいちばんがっしりして経験豊かなひとり、ジャグアリウナだけだった。ジャグアリウナはほとんど乱暴に彼に飛びかかったが、少し遅れた。ヤマンデはその筋骨たくましい体を跳んでかわし、点を取る木々の前に、足もとにボールを置いてひとりきりになった。だが木々には背を向けていた。

少し前にアントニオは、ソクラテスとかいうブラジルのサッカー選手の話をしていた。相手の逆をつくのにヒールでボールを蹴るのが大好きだった選手だ。ヤマンデはその新しいものに夢中になり、すぐに何度も何度も試しはじめた。いまアントニオは、ヤマンデがその技で儀式を締めくくろうとしないよう祈っていた。頼む、やめてくれ、屈辱を受けないのはいい、でも大人たちに屈辱を与えるのはやめてくれ、お願いだ。ヤマンデは一瞬迷っていたが、それからくるりと一回転し、そのせいで少し時間を失って、ジャグアリウナに戻ってくる隙を与えた。そして足で軽く触れて、そのあいだにプレーを追って近づいてきていたピライにボールを渡した。ピライはやすやすとふたつの木に当て、試合を終わらせた。

祭りが始められる。

村の歴史で初めて、大人のチームが儀式を受ける者たちを蹴散らさなかった。ジャナイナはアントニオに、一人前の男たちの点を記録しないのは残念だと言った。「いったい何点取ったのかしら。もし少年たちより少なかったとしたら、すごいことね」

「さあね」とアントニオは答えた。そして、うまく読みとれない大人たちの表情を眺めながら、試合が少年たちの10対8で終わったことを、誰にも、彼女にも、少年たちにも、決して明かすまいと思った。

2.27 前兆

「明日の朝、続きをやるんじゃだめ？」

ヤマンデはもう一度、すがるような顔で父親を見た。アントニオは、太陽がまだ空の高いところにあるうちに話しはじめていたが、もう暗くなりかけていて、火がともされていた。キリマは若者に、何時間か前に獲れた大きなカイマン二頭の皮はぎを手伝わせていた。もっとも、それが本当はヤマンデをアントニオから遠ざけておくための口実だということは、ふたりともよくわかっていた。カイマンの皮はぎは長くてかなり骨の折れる仕事で、若者たちは、とくにこれほどの大きさの獲物の場合、喜んで逃げだしたものだった。だがヤマンデはもう一人前の大人で、キリマにいやとは言えなかったのだ。

アントニオは少年たちの小さな一団とサッカーの話を始めたのだが、誰かが彼の母語のことを尋ね、話が長くなってしまった。

彼は古代ローマ人、大きな海の向こうの大きな帝国から話を始め、彼らが知られている世界のすべてを征服しようとしたことを語った。彼らにはどんなことも驚きの種で、質問の雨を降らせた。大きな海――海をどうやって説明すればいい？――世界、帝国。世界の途方もない広さ、そこに住むあらゆる民と人々という考えそのものが、彼らにとっては異質なものだった。質問が来れば来るほど話は豊かになった。何かを説明するのに、彼らのことばでは言いあらわせない物や出来事を描きだそうとして、長い言いまわりをしなければならないときでさえ。時は過ぎ、ポルトガル人が新世界の征服に出発するところまで来たときには、部族じゅうがアントニオのまわりに集まって聞いていた。見ていてすばらしい光景だった。驚きに見開かれた黒い目と、半開きの口。大人も子どもも寄り集まって静まりかえり、その夢のような物語にすっかり引きこまれて、息をするのも忘れそうになっていた。

部族じゅう、キリマと、かわいそうなヤマンデを除いて。ヤマンデは二頭の爬虫類の一頭の腹を縦に裂き、臭くて分厚いはらわたを取りだし、肉から皮をはがす長くて骨の折れる作業を始めなければならなかった。皮はところによっては樹脂でくっついているようで、噛んでもはがれず、いちばん鋭いアリクイの爪でもはがれなかった。それから白っぽくて筋っぽい肉を細切りにし、乾かすためにわざわざ用意した小枝に吊るし、カイマンの体の別の部分でまた始める。大きなカイマン、巨大なカイマン、こんなに大きなカイマンは見たことがない、いや、ある、すぐ隣にもっと大きいのが一頭いて、皮をはがれるのを待ちかまえているのだ。

「一頭目はもうすぐ終わる、あとは大きな岩をきれいにするだけだ、明日の朝続きをやるんだよね？」

キリマの頭のなかでは、たくさんの感情がぶつかりあっていた。あれほど大勢の聞き手へのねたみがあった、それはそうだ、だが誰にも、自分自身にさえ、それを打ち明けることはできなかった。アントニオの物語への怒りがあった。彼はそれを役に立たないものだと思っていた、それははっきりしていた。役に立つ物語とは、狩りや、漁や、危険な動物についての物語、ボール遊びについての物語でもいい（それについてはあまり確信がなかったが）、だがアントニオの物語はぜったいにちがった。光る大きな鳥、「大洋」とかいう考えもつかないものを渡っていくとてつもなく大きなカヌー、蔓に似た糸のなかを旅する考え、それにあの新しい遊び、「サッカー」、あの名前の数々、あの理解できない出来事。どれも村にはまったく役に立たないものだし、キリマは心のなかで、うまくことばにはできないまま、害になるものでもあるにちがいないと感じていた。

ふたりは村から少し離れた、川のほうにある大きなすべすべした岩の前にいた。何世代も前から、こういう獲物の始末をするときの台に使われてきた岩だった。ヤマンデにはとても長く思えた時間のあと、一頭目のカイマンはすっかり皮をはがれてきれいになり、ふたりは岩から残りかすを取りのけて、もう一頭をのせてまた最初から始めようとしていた。だがもう遅く、じきに暗くて何も見えなくなりそうだった。ときどきキリマはアントニオの話の切れはしを聞きとろうと耳をそばだてたが、そのたびに嫌悪のしかめ面をして後悔するのだった。

「もうほとんど真っ暗だ、すぐに自分の手も見えなくなる、全部きれいにするなんてとても無理だよ！」

キリマはヤマンデの言うとおりだとわかっていた。一頭目はとても念入りに、たぶん念入りすぎるほどにはぎたいと思い、とほうもなく時間をかけてしまったので、実際遅くなっていた。

「父さんの言うことを聞け、ヤマンデ」息子にかけることばをそう始めるのは珍しくなかった。「腹を開いてきれいにするだけでいい。閉じたままにしておくと危ないのは知ってるだろう、破裂するかもしれん。そのあいだに父さんは穴を掘るから、お前が終わったら埋めて、明日の朝続きをやろう」

ヤマンデはうなずき、しぶしぶながらも手際よく大きな爬虫類の腹を開きはじめた。夕方の影はみるみるすべてを包みこみ、あと数分もすれば先へ進めなくなりそうだった。はらわたを引きだそうと死骸のなかに手を入れると、ヤマンデは何かが抵抗するのを感じた。もう一頭にはなかった、何か重いものだった。ヤマンデは父親の注意を引いた。光が乏しいうえに、ぬるぬるとねじれたはらわたが多いせいで、父親は最初、息子が何のことを言っているのかよくわからなかった。やっとそれがカイマンの胃袋だとわかると、彼は鋭い爪をとって切り開いた。胸の悪くなるような悪臭とともに、胃袋からほとんど形のくずれていない小さな猿が出てきた。カイマンが漁師たちにつかまる少し前に食べたものにちがいなかった。キリマはぞっとして後ろへ跳びのかんばかりになり、叫んだ。「だめだ！」

ヤマンデはわけがわからずに父親を見た。

「カイマンは猿を食べない！　ぜったいに！　食べないんだ！」

彼は部族のほかの者たちのほうを振り向き、悟った。「森の精霊たちのしるしだ！　精霊たちは喜んでいない！　アントニオはあんな話をやめなきゃならん！　見ろ！」

ヤマンデは父親とその森の知識を深く敬っていたし――ときどき退屈だと思うことはあっても――父親の言うことが本当だと疑う理由はなかった。それどころか、猿の群れが木の上から叫びながらカイマンに石を投げつけているのを、何度も見たことがあった。

「枝から落ちたんだろう」とヤマンデは言った。「枝が折れたんだ」

「父さんの言うことを聞け、ヤマンデ。この猿は、わしらと同じものを食べ、わしらと同じ木に登る、だがわしらよりずっと、ずっと上手だ。この災いがわかるか？　あんなちっぽけな重さで枝が折れたのなら、わしらの体の下では何が起きる？」

「そうだね、わかるよ、でもそれはアントニオのせいじゃないだろう？」

「わからん」

2.28 誕生

ポランガ・パジェは森の善き精霊だ。それを見たことのある者も、描きあらわすのに苦労する。白いのは確かで、たぶん丸く、まったく音を立てず、重い（だがそれは問題になったことがない）。喜びにあふれているがつかまえどころがなく、太古からいるのに内気で、その気高い目的を、計画もなく、行きあたりばったりに、それでいて森のほかのどの精霊も持っていない几帳面さで追い求める。

ほとんど目に見えないので光を恐れないが、森にはこと欠かない闇と影のほうを好む。隠れたり化けたりするのがとても上手で、敵対する精霊たちから軽やかに、粘り強く逃れ、不器用に見えてとても速く、つかまえられない。

葉が空けておくほんのわずかなすきまに入りこみ、蔓の上で丸くなり、跳ね、飛びこみ、いちばん速い魚のように泳ぐ。たえず形と名前を変えながら森を縦横に駆けめぐり、それを見ないでいる者、悲しい考えを頭から追い払っている者だけが、ごくまれに、それを見ることができる。ポランガ・パジェが触れるたびに跡が残る。

埃より軽く、空気と同じ手ざわりの、薄いヴェールが。精霊はそのなかにまるごと存在している。そうなのだ。ポランガ・パジェは巨大でもありうるが、砂粒のように、いやそれよりずっと小さくもなりうる。だがヴェールであろうと砂粒であろうと巨人であろうと、そのひとつひとつの足跡、ひとつひとつの記憶が、精霊をまるごと含んでいる。

ポランガ・パジェは、小さな支流をたどって森をさまよっていた。木々の低い枝や、肉食の魚や危険なクモの卵に、つつましくそっと触れていった。そして触れたものはすべて、昔からいつもそうだったように、そしてこれからもいつもそうであるように、花開き、変わり、生き生きとした。

森全体がそのなかで響いていた。狩るもの、狩られるもの、命のない草木。だが何よりもそのなかで響いていたのは、森に住む女たちと男たちの魂、すべての魂だった。過去の魂も、いまの魂も、未来の魂も。森の住人たちは子どもたちに肉を与えたが、魂は与えなかったからだ。魂は、昔からいつもそうだったように、そしてこれからもいつもそうであるように、ポランガ・パジェから来るのだった。

川の小さな入り江が、地面に敷かれたバナナの葉と、その上にうずくまって苦しげに息をしている小柄な女を、人目からほとんど隠していた。女はひとりにしておいてほしかったが、聞き入れてもらえなかった。他人の苦しみに、子どもにしかできないやり方で魅せられて、何人もの子どもが女のまわりをうろうろしていた。草木の一列目の陰から、好奇心にかられたたくさんの頭がのぞき、大人が二、三人、忙しそうに、あるいはもっと単純にじれったそうに、行ったり来たりしていた。

ポランガ・パジェは、かつて自分のなかにあった彼らすべての魂の旋律を聞き、ほほえみにあたるものを浮かべた。やっと立ちあがれるようになったばかりの小さな子どもがそれを見て、意味をなさない音を立てながら指さした。みんなの騒ぎのなかで誰もそれに気づかず、子ども自身もすぐに興味をなくした。魂のなかにひとつ、精霊の知らない魂があった。調律された楽器のようだったが、その音色に覚えがなく、一度も精霊のものだったことはなかった。精霊はもっとよく聞こうと近づいてみて、森の精霊たちの踊りを踊りながらそのまわりをめぐり、それが気に入ったと決めた。ちがっているが、美しかった。

花を咲かせたり卵をかえしたりするにはヴェール一枚で足りたが、この仕事にはポランガ・パジェももっと力を注がなければならなかった。自分のなかにぴったりの魂を探し、そっと取りだし、うずくまっている女に近づいて、その深く苦しげな息に乗じて吸いこま

せなければならなかった。魂が女の神経の節々をすばやく駆けぬけ、目当てのものを探して体じゅうに広がり、ついに子どものなかに入ったとき、ポランガ・パジェはもうひとつのほほえみとともに、誰が女と結ばれたのかを悟った。よそ者だった。

その新しい生きものから本当の命の最初の鼓動がもれてくるのを聞くと、ポランガ・パジェは最後にもう一度ほほえみ、根や、樹皮や、鳥の尾にそっと触れながら、遠ざかっていった。精霊が満ちわたっている森が呼んでいて、もうそれ以上待つことはできなかった。

「頭だ！　頭が出た！」

アントニオは感動に打ちのめされ、それまで彼を締めつけていたあらゆる恐れが消えた。

「お湯を沸かしたほうがいいんじゃないか」と彼は頼んだ。「どうして？」と返ってきた。「その爪をよく洗ったほうがいいんじゃないか」と彼は食いさがった。「どうして？」とまた返ってきた。「せめてバナナの葉をきれいにしよう」と彼はべそをかいた。「何をきれいにするの？」と聞き返された。

いま頭は外に出ていて、彼は両手でそれをつかんで引っぱりたかったが、いや、引っぱるのはぜったいにだめだ、ひとりでに出てきてほしかった。だがジャナイナはもういきんでいないように見えた。あるいはいきんでいるのに見えないだけかもしれない。どれくらいこのままでいられるんだ？　危なくないのか？　命にかかわるほど危ないんじゃないのか？　それにあの色は？　赤ん坊が青いのはふつうなのか？　紫なのは？

ジャナイナはそのあいだずっととても落ちついているように見えた。苦しんではいたが、落ちついていた。しわがれた息を少しもらすほかは、うめき声ひとつあげなかった。だがいまはさすがに疲れ果てたようで、こぶしを握りしめ、ぐったりした様子で、息づかいも鈍くなっていた。アントニオは自分の疑いで身動きできなくなっていた。自分の恐れを裏づけるものはないかとあたりを見まわしたが、その場の女たちは穏やかで、「生まれの歌」を小声で歌いながら、自信に満ちた距離をおいてその光景を見ていた。

「アントニオはここで何をしてるの？」と最初、女のひとりが、彼がいることに驚いて尋ねた。

「アントニオはもうずいぶん長いこと私たちといっしょにいるけど、思い出してごらん、最初は変わり者って呼んでたでしょう。昔の習わしの何かなのよ」ともうひとりの女がほほえみながら答えた。

アントニオが言えたのは、言ったとたんにひどくばかばかしく感じた、おぼつかないポルトガル語の「息をして……」だけだった。

ジャナイナは汗の筋が走る顔を上げ、彼の目をまっすぐに見た。その決意のまなざしに、彼は深く胸を打たれた。それから彼女はほほえんだか、顔をしかめたか、アントニオにはどちらとも言えなかったが、前よりずっと力をこめてまたいきみはじめた。ほどなく、アントニオにはずいぶん長く思えた時間に比べればほどなく、赤ん坊はすっかり外に出てきて、最初の産声があがり、ジャナイナはもう体の力を抜いていた。

「男の子よ、アントニオ、見た？」

「見たよ、見た」

赤ん坊は目もこぶしもかたく閉じたまま泣かず、肌の色はやっとふつうに戻っていた。村の多くの人が、満足そうなほほえみを浮かべてふたりのまわりに集まってきていた。

「ポランガ・パジェが美しい魂を連れてきてくれたらいいわね」

「そうだね、そうだといい」とアントニオは、わけもわからずに答えた。

2.29 叫び

空き地の端から端へ響きわたる叫び声と笑い声。ジャングルの千の物音は消えてしまったように思える。若さと屈託のなさの立てる物音におおわれて。そして頭のなかでは、もうわかっている。あらゆる叫びのなかでいちばん晴れやかで、いちばん高揚した叫びは、あと数分で自分の喉からほとばしる叫びになることを。

まだ熱帯雨林の天蓋の上に突き出るほど高くはないが、近い。森の果てしない緑の上に視線をめぐらせて、自分はてっぺんにたどりついた、これより高くは行けないと悟れるほど高くまで登れるのは、いちばん強くて勇敢な者だけだ。その感覚をまだ一度も味わったことはないが、何度も話に聞いてきた。そして今日は、彼が村でいちばん強くて勇敢な若者だ。今日は、まわりを取り囲む緑の天井を突き破るのは彼だ。そして明日からは、世界の屋根に登るのがどんな気持ちかを子どもたちに語るのは彼だ。

笑い声と励ましの叫びの音がすべてをおおう。枝から枝へ決然と登っていく彼の息づかいの音を。すぐそばで壮大な偉業が成し遂げられようとしているのにも気をとめず、生を続ける動物たちの音を。そして、この若者の力強い重みの下でしなり、それから折れる枝の音を。それから一瞬の静けさがあり、それから音は醜くなり、騒音になる。あってはならない騒音に。枝の折れる騒音、恐怖の騒音、すさまじい激突の騒音。そして苦痛と絶望の叫び。

2.30 さらば

アントニオがその場に着いたときには、ヤマンデのまわりにもう絶望した人だかりができていた。そして、薬師の女のときの、あのいまいましい前の一度と同じように、彼は足でヤマンデだとわかった。

気が遠くなりかけたが、そのとき片方の足が動くのが見え、少年の声も聞こえたような気がした。痛みに取り乱して叫んでいる人の声を、ほかのおびえた叫び声の合唱にまぎれているのに、聞き分けられるものだろうか、と彼は自問した。どうやらできるらしかった。叫んでるんなら死んでないはずだ、ああ神さま、よかった、死んでなくてよかった、そんなことには耐えられなかった。

ほかの者たちが道をあけて通してくれると、安堵は消え、彼はまた気が遠くなった。体じゅうの切り傷はたいした問題ではなかった。浅いのは見てわかったし、むしろ美しさを増しているくらいだった。血しぶきを浴びたあの二の腕は、戦いから勝って戻ってきたばかりの勇敢な戦士を思わせた。

だが左脚がひどいことになっていた。ひどく、ひどく。どんな左脚もあんなふうになってはいけなかった。ありえない、きっと悪い夢だ、ゆうべあの変な虫を味見するんじゃなかった、ちょっと目を閉じて、また開けたら目が覚めて、ヤマンデの左脚はもとどおりになってる、膝はひとつだけで。腿の真ん中にもうひとつ膝があるなんて、どういうことだ、ありえない……

アントニオが意識を取り戻すと、上からピアタとモアシルの顔がのぞきこんでいた。

「ヤマンデは！　どうなんだ？　あいつは……？」

「シャボノで眠ってる。イタタクアラが気絶草を飲ませたんだ」とピアタが知らせた。

「脚は？」

「脚がどうなってるかは、あんたも見ただろ」

「でも治るのか？　イタタクアラは何て言ってる？」

「イタタクアラは、待って祈れって。うんと祈れって」

「ちがう！」とモアシルが怒って割って入った。「祈ることなんか何もない。待つことはもっとない。待つことがあるとしたら、あいつが死ぬことだけだ」

「モアシル、落ちつけ」

「落ちつくもんか、抱きしめるな！　お前だってよくわかってるだろ。みんなわかってるんだ。あんな怪我から治ったやつはひとりもいない。ひとりもだ」

そのことばに答える者はいなかったが、やがてピアタが、言わなければならないことの重みを引き受けた。「イタタクアラは祈れって言った、だから俺たちは祈る。もしイタタクアラが川の果てまで何かの草をとりに行けって言ったら、行く。でも、もしほかに何もできることがないなら、ほかに何もしない。ヤマンデに別れを告げて、泣いて、村の暮らしを続けていく」

モアシルは、憎しみとまちがえられかねない目で彼を見た。いや、たぶん憎しみだった。それからアントニオのほうへ目を向けると、もう疑いの余地はなかった。それは混じりけのない憎しみだった。村の歴史で、おそらくこれほどあからさまに、ずうずうしく年長の者をにらみつけた若者は、ひとりもいなかっただろう。

「で、あんたは？　何も言わないのか？　ことばが尽きたのか？」

モアシルの非難を裏づけるかのように、アントニオは黙ったままだった。目を伏せはしなかったが、口を開きもしなかった。

若者は続けた。「この長いあいだ、マカパや森の外の世界のことを話して、どれだけことばを並べてきた？　ええ？　どれだけだ？　それに光る大きな鳥、ひとりで動く車、見えない糸、考えの画面。僕は全部覚えてる、ひとつ残らず、わかるか？　それがいまは？　いまこそあんたのことばが何かの役に立つかもしれないってときに、黙ってるのか？　もう何も言わないのか？」

「でも僕は……」アントニオは、モアシルが彼のなかに眠っている医学の知識を呼び覚ましたいのだろうと思い、できるかぎり落ちついた声を出そうとした。「僕は薬師じゃないんだ、モアシル。わかってるだろう、マカパでは君に話したものを全部知っていて、使うこともできたけど、つくることはできない。ヤマンデを助けるために、イタタクアラよりうまくできることは何もないんだ」

「あんたが薬師じゃないのはわかってる。何もできないのはわかってる」

モアシルはとどめを刺すために息を吸った。「あんたはあのばかなボール遊びのほかは、何ひとつできたためしがない。それで、自分が役立たずだってあんまり確信してるもんだから、いまヤマンデを本当に助けられるのは自分ひとりだってことに、思いつきもしないんだ」

アントニオは、ほとんど呆然として、ひとことも発せずに彼を見つめ続けた。モアシルもそれ以上何も付け加えなかった。

ふたりともこの世の終わりまでもう口をきかないのではないかと思えたとき、口をはさんだのはカウエだった。モアシルが言おうとしていること、彼には最初の一分からはっきりわかっていたことを説明したのだ。

「モアシルはね、ヤマンデをマカパへ連れていくのを手伝ってほしいって言ってるんだよ、アントニオ」

「そんなことは問題外だ」とピアタが割って入ろうとしたが、モアシルはひるまなかった。

友だちよりずっと筋肉は少なかったが、少しだけ背が高く、その背の高さに怒りをこめて、まるで倍の背丈があるかのようにピアタを上から見おろした。「お前は口を出すな。いっしょに来たくないならかまわない。それでいい、村にはお前が必要なんだ、残るのが正しい」

それから、ピアタなどもう存在しないかのように、向きを変えてまたアントニオのほうへ目を向けた。「それで？」

アントニオはもうずいぶん前から、この村で一生を終えると決めていた。自分自身とすっかり和解していたので、その選択がたぶんもたらすだろう、短くなった寿命さえも快く受

け入れていた。だが、心の平和の祭壇に自分の人生の何年もを捧げることには平気でいられても、ヤマンデの命を同じように捧げることはできなかった。それに、もし残りの人生を、大好きなふたつ靴下を救うためにできるかぎりのことをしなかったのではないかという疑いを抱いて過ごすことになったら、心の平和どころではなかった。

彼はあたりを見まわした。自分のハンモックを、シャボノの壁を、屋根になっている木々の天井を見た。自分の家を見た。それから大きく息をつき、もう一度モアシルとカウエに目を戻して、言った。「わかった。君たちの言うとおりだ。でも問題は、たとえ助けたくても、誓って言い訳を探してるわけじゃないんだけど、本当にマカパへ戻る方法がわからないってことなんだ」

「僕たちは知ってる」とカウエが誇らしげに答えた。

「大いなる川を見つけたんだ」とモアシルとカウエは言った。「大いなる川、物語や歌に出てくるあの川を、僕たちは見つけたんだ」

ふたりはそれを、ほんのわずかな疑いもにおわせずに、自信をもって言った。それが、村が知っている唯一の川であるこのあたりの川とどれほどちがうか、ちゃんと説明した。このあたりの川は、雨が降るたびに流れも形も変える、ほどきようのない水のもつれの、油断のならない曲がりくねった触手だ。ふたりはことばのなかでいちばん大きな「大きい」ということばを使い、自分の目で見た、あそこの奥の椰子の木立のところまで大きかった、と言った。

その水は走っていた、まっすぐ走っていた、大いなる川の水はどこへ向かって走っているのかを知っていた、と。蔓や葉にからめとられた、のろい水の自分たちの川とはちがう。気をつけずに漁をしていてあまり遠くまで流されると、ぐるぐる回り、輪を描いて、流れがどこへ行けばいいかわからないせいで、家への道がわからなくなってしまう、そういう川とはちがう。それは大いなる川、道を知っている川だった。

ふたりはそれを熱っぽく、信じてもらえるかどうかの不安でほとんど涙を浮かべて言った。

そしてアントニオは信じた。急に彼は、本当に考えたこともないまま、寄り道や迷いはあったにせよ、ペペとの長い道のりも、そのあとの彼ひとりの歩きも、最初の方向、川から――だいたい直角に――離れていく方向をたどってきたのだと、ずっと決めこんでいたことに気づいた。頭のなかではいつも、さんざん曲がりくねりながらも、おおむねジャリ川をどんどん遠く後ろへ置き去りにしていく道のりを思い描いていた。だが、ああ神さま、それは本当にばかな考えだった。結局のところ、ペペが迷ったことも、目印もなくさまよった自分がなおさら迷ったことも、ずっとわかっていたのだ。あのでたらめな道のりは、実はずっと川とだいたい平行のままだったのかもしれない。ぐるぐる回って、それどころか川の近くまで戻っていたのかもしれない。ジャリ川は本当にそれほど遠くないのかもしれない、一日の行程もないのかもしれない。いや、森が彼に語りかけ、彼がそのことばと多くの秘密を理解できるいまでは、確信していた。大いなる川はそれほど遠くにあるはずがない。

そしてもしそうなら、ひょっとすると、少し運がよければ、ひょっとするとヤマンデは本当に救えるかもしれない。もしそうなら、アントニオには何をしなければならないかわかっていた。

自分の世界へ、前の世界へ戻ると考えると、おびえている自分に気づいた。この何年ものあいだに、どういうわけか、そんなことは二度と起きないと思いこんでいた。まるで別の

惑星に降ろされて、そこからは、生まれた土地の、ものの、愛した人々の記憶が、ときどき郷愁にかすむ、そう、だが帰ることのない亡命者の郷愁にかすむ、そんな感じだった。

あの世界が存在をやめてしまったかのようだった。物語を語るための材料に蒸発してしまい、それはもう彼自身にさえほとんどつくり話のように思えていた。それなのにいま、それをまた見る、またそこにどっぷり浸かると思うと、手に汗がにじんだ。

だがあの若者たちは彼を信頼していた。がっかりさせるわけにはいかなかった、裏切るわけにはいかなかった。ヤマンデを裏切るわけにはいかなかった。死なせるか、よくても、ひどい障がいを負わせたままにするわけには。猿のように元気な彼のヤマンデ、誰よりも速く走ったヤマンデを。森では、体の不自由な者は長くも美しくも生きられない。ヤマンデにそんなことはできなかった。ほんのわずかでも可能性があるなら、選ぶ道はひとつしかない。やってみなければならなかった。

2.31 別れの挨拶

いかだ、いかだをつくるしかない。僕たちは八人だ、僕と、どうしてもついてくると言う六人の若者と、運ばなきゃならないヤマンデ。漁に使うくりぬいた丸木では、八人で大いなる川を何日も――何日だ？　誰に想像できる？　二日か、三日か？――旅するなんて考えられない。それに水も、何か食べるものも運ばなきゃならない……いかだが要る、それも十分に大きいのが。

ほとんど夜どおし続いた儀式の煙と音と飲みもののせいでまだ頭がぼんやりしたまま、アントニオは川から戻ってくるところだった。川で顔をすすぎ、木生シダの葉のあいだから夜が明けるのを眺めていたのだ。森が目を覚ますのを眺め、宙づりになった静けさのひととき、夜の動物たちの群れが黙りこんでから、昼の動物たちが空気を、木々を、その日を、音と鳴き声と羽ばたきのだんだん強まっていくクレッシェンドで手中におさめるまでの、ほんの数瞬の静けさに耳をすませた。僕は行ってしまうんだ、と彼は思った。

何日かしたら、うまくいけば、僕はよそにいて、まったく――ああ、なんてまったく――ちがう場所で別の夜明けを見るんだ。でも本当に行ってしまうわけじゃない――ジャナイナと赤ん坊に別れを告げに小屋へ向かいながら、彼はそう確信していた――ヤマンデを救いに行ってみるだけだ、それから戻ってくる。

「それから家に帰ってくるのよね、ヤマンデが治ったら、それから戻ってくるのよね、アントニオ？」

「もちろん家に帰ってくるさ、離れているのはつらいだろうな、僕のハンモックの隣の君のハンモックがすごく恋しくなるよ」とアントニオは言ったが、彼女の目を見る力はなかった。危険が多すぎる、予想のつかないことが多すぎて、誓うことなんてできない、僕にもわかってるし、君にもわかってる。

彼は、赤ん坊に乳をやりながらしゃがんでいる女にほほえみかけ、丸い頬と髪をなでた。その手は胸へ、そして目を閉じて満ち足りて乳を吸っているイビラアタンの小さな頭へと降りていった。

「それに、このアリクイの子が大きくなるのを見たいんだ、わかってるだろう。行くのはそのためでもあるんだ、君にはわかってるよね。いつかこの子が怪我をしたら、命を救うために、丈夫な脚を救ってまた前みたいに走れるようにするために、できるかぎりのことをしてくれる人がいてほしいんだ」

「わかってる。行って、ヤマンデを救ってほしい。でも戻ってきてほしいの。夫のいない女になりたくないし、あなたの息子があなたを知らずに育つのもいや」

「戻ってくるよ、もちろん戻ってくる。心配しないで、僕の青いカエルちゃん」

「それと、気をつけて。私、大いなる川がすごくこわいの、それにあなたの村の、誰も知らない精霊たちも」

「呪術師が精霊たちと話したよ。神々みんなの声を聞いて、みんな許してくれたって言ってた。旅のあいだついていてくれるって。こわがることはないよ」

「ええ。でも、あなたは気をつけて。あなたの村には、きっとジャガーがたくさんいるでしょうから」

カウエ、イタウナ、モアシル、ウビラタン、ジャシ、ピライが、静かに近づいてきた。邪魔はしたくなかったが、時間がなかった。ヤマンデがうめきはじめ、彼らは不安になっていたのだ。行かなければならなかった。

また会う日まで、ありえぬほど高く梢をそびえさせる木々よ。一本一本ちがいながら、みな見慣れ、部族の者たちと同じように覚えやすい木々よ。友の声のようにその音を聞いた川よ。夜の獣のように内気に、空き地のなかになかば身を隠す小屋たちよ。

また会う日まで！

お前たちのあいだで育った者が、お前たちから遠ざかっていく足どりの、なんと悲しいことか！　かくも寛い理由のために、みずから進んで旅立つ者たちの望みは、どれもあせていくように思え、たちまち心の支えは彼らを見捨てる。よくも決心できたものだと彼らはいぶかり、危ういのがいちばんの友でなかったなら、引き返していたことだろう。森の奥へ進めば進むほど、目は、その新しい単調さにもう疲れて、ますます伏せられていく。空気はもう重く、死んでいるように思える。見知らぬ森へ分け入っていく。木々に木々が重なり、小道は小道に流れこむ。息をふさがれるようで、名も知らぬ新しい葉の前で、彼らは思う、自分たちの村を、自分たちのハンモックを、勝利をおさめて自分たちの木々のもとへ帰るときに響くだろう笑い声を。

また会う日まで、いつも彼らを守ってくれた小屋よ。そこでハンモックに横たわりながら、彼らはふつうの足音のなかから、ひそかな畏れとともに待ちわびた足音を聞き分けることを覚えた。また会う日まで、まだ知らぬ小屋たちよ。通りすがりに、そらしがちな目で、恥じらいとともに幾度となく見やり、そこに伴侶を見つけられるかもしれぬと、思いがもう思い描いていた小屋たちよ。また会う日まで、精霊たちのことばで幾度となく安らぎを取り戻させてくれた村の長老たちよ、そしてそれを通して彼らが大人になったボール遊びよ。また会う日まで！

第3章

3.1 出発

一行は夜明けのすぐあとに出発した。勇気と、冒険と、仲間を助けることのしるしを体に描き、森の精霊たち、川の精霊たち、大いなる川の女神たちの勧めにしたがってイタタクアラが定めた羽根や護符で身を飾っていた。

ヤマンデは眠っているように見えたが、小さく、絶え間なくうめいていた。もうハンモックのなかに用意ができていて、ぐちゃぐちゃになった脚には、葉と泥と薬草の湿布がきつく巻きつけてあった。

女たちは大いなる冒険の歌を歌い、少年たちは興奮して身を震わせていた。決意に満ち、ひどくおびえて。火星へ出発する宇宙飛行士みたいだ、とアントニオは思った。不確かで危険な旅に出て、何から何まで生まれてこのかた見てきたものと似ても似つかない、異質な場所へ向かうのだ。

「さあ、行こう。カウエ、イタウナ、最初は君たちがハンモックを運ぶんだ」

森を抜ける最初の一区間がいちばん楽なのは、アントニオにはよくわかっていた。モアシルとカウエは大いなる川を見つけなおせると自信を見せていて、実際たいして迷うこともなく進んでいった。森のなかを押し分けて進む苦労は、ふつうの狩りとまったく変わらなかった。ヤマンデは運ぶのにそれほど重い荷物ではなかったし、出発の高揚で、少年たちはいちばんいい、いちばん生き生きした力を注ぎこんでいた。

「もうすぐだ」とふたりの探検家は自信たっぷりに言った。「もうすぐだ、じきに大いなる川が見える」

そして実際、夕方になるころにたどりついた。木々が開け、そのあいだに、森のどの川よりも広く流れるジャリ川の、とても広くて黄色い流れが見えた。どこへ行けばいいかを知っている川だ。一行はそこの岸で野営した。

村が用意してくれた石と粘土の鉢から燠をとって火をおこすと、彼らはもうほとんど着いたような気がした。見たこともないほど大きな川を見つけたのだ、何もかも神々が請けあってくれたとおりだった。君たちはまだアマゾン川を見てもいない、あれこそ大きいんだ、とアントニオは思った。

これはほんの第一歩、キックオフにすぎないんだよ、みんな。町はまだずっと遠いし、ヤマンデの具合は悪くて急がなきゃならない、それに僕はこの川の流れについて何も知らない、正しい川なのかどうかさえわからない。君たちは僕が連れていけると思っているけど、僕にはわからない、ふたつの世界をつなぐこの水の道について何も知らない、いかだなんてつくったこともないのに、明日の朝それをつくらなきゃならない。水の神々が本当に味方してくれますように、君たちを迷わせ、迷ったまま死なせ、滝に叩きつけるようなことになりませんように。滝。どこにあるのかまったくわからない、でも祈ろう、祈って、いまは眠ろう、明日は出発して急がなきゃならないんだから。

朝は、さらさらいう川の音で彼らを起こした。鳥や猿はもうちがって聞こえた。そしてヤマンデの湿布を取りかえると――顔が土気色だ、熱で燃えている、急がなきゃ――一行は指示に注意を払いながら、いかだをつくりはじめた。

アントニオはいかだについてたいして知らなかった。子どものころ、ぬかるんだ小川で友だちと競走させるために、小枝やアイスキャンディーの棒でつくったいかだを覚えていたし、コンチキ号のドキュメンタリーを――どれだけ脚色されていたか知れたものではない

が――ぼんやり覚えていたし、写真や絵がいくつか頭にあった。だが少年たちは指示を待っていて、彼は指示を出した。丸太が要る、まっすぐな枝が要る、こんなふうに縛るための蔓が要る。

疑問が山ほど湧いてきた。あれが要るかな、なんていったっけ、垂直の板、そう、センターボードだ、まっすぐ進むために、それともいかだにはそんなものはないんだったか？迷ったらつけておこう、害にはならない、みんな、こういう形の木が一本要る。それから、どうやって操るんだ、最初の曲がり目で座礁するんじゃないか、川の流れにつかまったらどうやって岸に戻るんだ？　枝が要る、長くて丈夫な棒が要る、せめて少しは舵をとれるようにしないと。

いかだはすばらしい、と少年たちは大喜びで言った。いちばん大きな小屋を建てるときにしか、これほどの工夫は見たことがなかったのだ。川には見るからにおびえていたが、同じくらい見るからに、その技術の驚異に乗って水の上を走ってみたくてうずうずしていた。アントニオはそれほど確信が持てなかった。ああ、世界でいちばん原始的な舟のひとつをこしらえるのが、なんてたいへんなんだ、持ちこたえるんだろうか。さあ、行こう、出発だ。

3.2 いかだ

いかだづくりに魅せられるのと、それに乗って川の腕のなかへ身を投げるのとは、まったく別のことだった。わずかな食料と、ほとんど意識のないかわいそうなヤマンデを積みこんだあと、その危なっかしい丸太の寄せ集めをひどく傾けてみんなを水に放りだすことなく全員が乗りこむだけでも、ひと苦労だった。そして、座っていろ、できるだけじっとしていろと千回も言いきかせたあとで――神々は守ってくださる、でも僕たちがばかなことをしたら守ってくださらない――ようやくアントニオは、乗組員たちを十分に信頼して、竿を岸に突き、乗りこむあいだいかだをつないでおいた蔓を切って、思いきって沖へ出ることができた。

かなりのあいだ、大いなる川の上をすばやく滑っていく感動で、全員が黙りこんだ。少年たちは丸太にしっかりしがみついて岸が流れていくのを眺め、ときどき何か興味深いものを示しあう身ぶりを交わすだけだった。とても高い黒檀の幹、頭上を飛んでいく巨大なオオハシ、葉のあいだのこそこそした影、たぶんアリクイ、水中の影、ジャカレーだと確かめるには早く消えすぎた影。

アントニオも岸を、アリクイを、オオハシを眺めていたが、それより何より滝のことを考えていた。少年たちには話していなかったが（もっとも、彼自身がその存在を思い出したのは、もう旅に出てからだった）、だからといって考えずにいられるわけではなかった。あれだけ時間がたってもまだ残っている、わずかでぼんやりした記憶をかき集めて、だいたいどこにあるはずか突きとめようとした。だが取り戻せたのは色あせたかけらばかりだった。彼がうとうとしているあいだのガンボーネのおしゃべり、オウムに一羽残らず吠えかかるゴウモン、慣れていない何百万もの虫、何キロも何キロも続く、見たところどこも同じ岸辺。それでは足りなかった。滝を避けるために回り道をしてから、どれくらいのあいだ川をさかのぼったのか、正確に組み立てなおすのは難しすぎた。ましてや、動力船がどれくらいの速さで進んでいたのか、いま彼らを運んでいる流れがどれくらいの速さなのか計算するなど。ぺぺと走ったジープの道のりについては言うまでもない。その向きも方角も、まるで見当がつかなかった。いかだは――認めるしかなかった――川のどこか任意の一点で水に下ろされたのであって、カショエイラとその轟く危険とのつながりは、まったくつかみようがなかった。

アントニオがあれこれ頭を悩ませているうちに時間は過ぎていった。舟旅の目新しさの衝撃が薄れると、少年たちはくつろいで――まだ落ちつかない様子で、一度も丸太から手を離していないイタウナを除いて――のんびりおしゃべりしたりふざけたりしはじめた。もちろん、ときどきヤマンデの唇のあいだに水を数滴たらしてやるのは忘れなかった。

太陽が乳白色の夕焼けへ沈みはじめると、一行は夜を過ごすために岸に寄せるか、それとも舟の上で夜を明かすかを相談し、全員一致で川にとどまることに決まった。距離を稼げば稼ぐほどいい。ヤマンデの容体を考えれば、急ぐのが何よりだった。それに川には、夜の動物から身を守ることを考えなくてすむという、否定しがたい利点もあった。気の狂ったジャカレーがカエルのようにいかだに跳び乗ってきでもしないかぎり、森の地べたで眠るよりずっと安全だった。だが真夜中に滝のそばへ来てしまうかもしれないと思うと、アントニオは落ちついていられなかった。そこでため息をついて腹を決め、少年たちにカショエイラの話をした。

それがどれほど大きいかを説明しようとして――あまりうまくいかなかったが――大いなる川の、ひどく気まぐれで、ひょっとすると腹をすかせた女神の住まいだと言いあらわすと、少年たちは十分に恐れをなして、交代で眠ろうという彼の提案をすぐに受け入れた。そうすれば、いつも誰かが起きて耳をすませていられる。「雷みたいな音がしたら、遠く

でも、かすかにしか聞こえなくても、見張りの者はすぐにみんなを起こすんだ。頼んだぞ、みんな、女神たちは眠らないからな」

思いがけず、アントニオはぐっすり眠った。日の光が目に射して目を覚ますと、乗組員たちは起きていて元気いっぱいで、村から持ってきた焼いた肉で朝食をとっていた。「雷はなかったよ、アントニオ、鳥と猿と、夜でもささやいてる大いなる川だけ」

ここまではすべてうまくいった、ひょっとすると、ガンボーネが入ったような脇の支流に入りこむくらい運がよかったのかもしれない、頭から離れないあのいまいましい滝を、見ることさえないのかもしれない。

そして何時間も、航行は彼の言うとおりのように思えた。あまりになめらかに進むので、心配ごとといえば、ヤマンデの頭をできるだけ日陰に置いてやることだけだった。少年はほとんどいつも眠っているようで、アントニオはそれがいい兆しなのかどうかわからなかった。脚の湿布を取りかえたとき、彼はそれが、思い返したくもない状態になっているのを見ていた。

最初にそれを聞いたのは、まさにイタウナだった。川にいちばんおびえていて、だからこそいちばん気を張っていたのだ。彼は顔を上げてつぶやいた。「雷だ」

それからもう一度叫んだ。「雷だ、聞け、聞け！」そして急に全員にそれが聞こえた。まだ遠いが、はっきり聞き分けられる、とどろきと、水の落ちる音と、空気の震え。

「岸へ、岸へ！　急げ、寄せなきゃ、竿を使え、底を探すんだ！」

だが棒は、どんなに長くても、少しも底をとらえられないようだった。川は思っていたより深いにちがいなく、それに、自分たちがあわてているせいなのか、本当に流れがもう速く強くなっているのか、わからなかった。

滝の音は、いまや注意しなくても聞き分けられ、刻一刻と近づいてくるようだった。川の真ん中に寄りすぎてる、岸から遠すぎる、竿が底に届かない、これじゃとても寄せられない。アントニオは急いで決めなければならないと悟った。「モアシル」（いちばん運動神経がよく、いちばん恐れを知らない）「モアシル、水に入って、いかだを岸のほうへ押さなきゃならない、いますぐやらなきゃ、いますぐ！」

「わかった、アントニオ、でも魚みたいに水のなかで動くのは、あまり得意じゃないんだ……」

「足を動かして、しっかりいかだにつかまってるだけでいい、ぜったいに離すなよ、それでできるだけ強く足で水を蹴るんだ、来い、行くぞ、時間がない、行くぞ」

アントニオはまっさきに水に入った。川にどれだけの生きものがひしめいているのか、考えないようにして。泳ぎは森ではやらないスポーツで、それにはもっともな理由がたくさんあった。だがほかに道はなかった。滝は全員の確実な死を意味していた。だから丸太にしがみつき（魚のことは考えるな、ヘビのことは考えるな、カイマンのことは）、ありったけの力で泳いだ。モアシルはもう隣にいて、すぐあとに、無口なウビラタン、頑丈な脚のウビラタンが、ひとことも言わずに水に入り、ピラルクのような勢いで大きな足をばたつかせた。川の水は冷たくて心地よいくらいだった――何か生きたものが脚に、肌に触れていく感じがたえずすることを除けば――が、流れは本当に強かった。無理だ、だめだ、考えるな、脚を動かせ、脚を動かせ。歯をくいしばり、力をこめて指の関節が白くなり、もうほとんど限界というとき、ようやく、なんとか舟に与えた斜めの進路が、竿が底をとらえるくらい岸の近くまで舟を運んだ。「届いた、アントニオ、届いた！」

最後のひきつるようなひと引きで、彼らは草木にしがみつき、いかだを岸に押しつけて止めた。しぶきの虹と、もう耳をつんざくとどろきのなかで、川はわずか百メートル先で虚空へ消えていた。

危うく助かった興奮を鎮め、腹ごしらえをし、体からヒルの大軍をはがすには、ぬかるんだ岸に寝そべってあえぎながら、長いこと休まなければならなかった。何より、どう進むかを決めなければならなかった。たまたま滝を迂回する脇の支流に入りこめるかもしれないというアントニオのぼんやりした望みは、あまりにもはっきりと消え去っていた。こうなったら、なんとかしてカショエイラに立ち向かわなければならない。

最初に出た案は、いかだをただ担いで運び、落差の下流でまた水に下ろすことだった。だがざっと偵察しただけで、そのあたりの森は、何百年ものしぶきと蒸気にぐっしょり濡れて、いつもよりさらに鬱蒼としていることがわかった。怪我人に加えてあのひどくかさばる代物を運びながら、その湿って急な茂みのなかを押し分けて進むのは、奇跡でもなければ無理だった。

一方で、アントニオはモンチ・ドウラードから滝までの距離をかなりはっきり覚えていた。あのときは出発したばかりで、まだまわりのものに注意を払っていたので、半日も進まなかったことをよく覚えていたのだ。だからおおよそ、二十五キロ、いや三十キロほどだと考えてよさそうだった。歩くのに多すぎる距離ではない、強行軍で一日あれば足りるかもしれない。だがまず、あの忌々しい落差の下までたどりつかなければならない。あの茂みのなかを降りるだけでも何時間もかかるだろう。それはつまり、もうひと晩森で過ごさなければならないということで、何より、町に一日遅れて着くということだった。誰もはっきり口にはしなかったが、ヤマンデの容体が見る見る悪くなっているのは全員がわかっていた。一日の遅れは、彼には長すぎるかもしれなかった。

「歩いて降りて、いかだは川に運ばせたらどうかな。滝を過ぎたところで拾えばいい」

「ばらばらに砕けるよ、ピライ」

「そうとはかぎらない」

「粉々になるって、あの滝は高いんだ、とても……」

そのときアントニオは思い出した――どこでいつ見たんだったか、新聞か、テレビか？――木の樽に入ってナイアガラの滝から飛びこみ、信じられないことに生きのびた連中のことを。カショエイラがいくら堂々としていても、あれほど高くないのは確かだった。いかだが粉々にならない可能性も、ひょっとしたらあるかもしれない。そして一日を失いたくないなら、それが唯一の可能性のようだった。

「君の言うとおりかもしれない、砕けないかもしれない。試してみよう。もし木っ端みじんになったら、そのときは歩いてなんとかしよう」

「でも、そのあとどうやって拾うんだ？　川の真ん中からどうやって拾えばいい？」

「わからない、モアシル、わからないよ。滝が起こす流れが、大きなものを端のほうへ運ぶ動きをつくって……たしかそうだったと思う、だいたい。とにかく、そこへ着いたら考えよう」

ふたりがいかだに残り、ほかの者が下流に着いてから流れにまかせることに決めた。誰かが見ていて、せめてどこへ流れていくか確かめようとしなければ、落とすわけにはいかなかったのだ。

そこでモアシルとカウエを除く全員が出発した。ふたりは木の実を探したりトカゲを狩ったりしながら、三時間近くも待たなければならなかった。やっと、ほかの者たちがおこした火の細い煙と明かりが見えた。ふたりはもう竿でできるだけいかだを岸から遠ざけ、二本の長い蔓だけでつなぎとめていた。合図を見つけて舫いを切っていかだを放してから、ようやくふたりは、いかだが宙を飛ぶ光景を見逃してしまうことに気づいた。ふたりは、いかだが水の上をどんどん速く走っていき、そして――いきなり――虚空へ消えるのを見た。

3.3 落差

どの精霊に感謝すればいいのかわからない、とアントニオは、ひどく長く、ほとんどスローモーションのように思えた飛行のあとで、いかだがほぼ無傷のまま残っているのを見て思った。あるいは、思わなかったのかもしれない。ウビラタンがあまりにたくさんの精霊や、神々や、木や鳥や聞いたこともない何かの名前を唱えはじめ、ひとつ残らずきちんと礼を述べるので、アントニオは、自分が考えたことを声に出していたのではないかと疑い、そしてそれらの名前の多くは少年がその場ででっちあげているのだと確信したからだ。

いかだは持ちこたえた。センターボードは岩の突き出たところにぶつかって砕け、舵はなくなっていたが、骨組みは、少しゆがんではいたものの、水とぶつかった衝撃に耐え、いまは、滝が落ちるあたりの乱れた流れに押されて、ぷかぷか揺れながら彼らのほうへ近づいてきていた。アントニオが考えたとおり、流れはいかだを岸のほうへ押しやっていたのだ。モアシルとカウエが一行に合流したときには、もう新しい舵ができていた。少し曲がった長い棒とたいして変わらないものだった。新しいセンターボードをつけるにはいかだを全部ばらして組みなおさなければならないので、それをつくりなおす時間はないと、みんなで決めた。そこで一行はすぐに乗りこみ、また川に運ばれていった。ひとりひとりが心のなかで、自分たちの勇気と恐れを知らない舟のおかげで試練を乗り越えたことを、ひどく誇らしく思っていた。

それからの何時間かの航行はあまりに楽だったので、くたくたに疲れていたアントニオは、丸太を打つ水のぴちゃぴちゃという音と、いつもあれほどちがうのに、いつもあれほど同じ森の背景音とに、ほとんど催眠術をかけられたようになって、何度か居眠りをした。それでもいかだは、まるで命を持っているかのように、川の長い湾曲のあいだを決然と彼らを導いていった。川床はもう目に見えて広がりはじめていた。

ヤマンデがハンモックのなかでうめきはじめ、みんなの注意を引いた。気絶草をもう一服やるときが来たのかもしれなかった。

3.4 まなざし

そのときだった。川のまた何度目かの湾曲を過ぎると、アントニオは遠くにトタン屋根のきらめきと、木々のあいだの建物の影を見た。それからほどなく、船着き場がはっきり見分けられた。彼が去ったときのままぐらついていて、誰もいなかった。舫ってある船はなく、いつもの色あせた小舟が岸に上げてあるのと、スクリューのない錆びた船外機があるだけだった。その上にとまったウルブーが一羽、彼らが舟を寄せて降りるのを眠たげに見ていた。

少年たちはすっかり静まりかえり、用心しながら村に入っていった。手は、アントニオが持ってくるのを禁じた刃物を、むなしく探していた。ハンモックのまわりに身を寄せあい、彼を先頭に立たせて、目を見開いてあたりを見まわしていた。興味津々だが警戒していた。だがアントニオの見るかぎり、危険は何もなかった。通りには、覚えているより何台か多い車が家々のそばに止めてあったが、犬とトカゲを除けば、埃っぽくて人けがなかった。人々は夕食の最中にちがいなかった。開け放した窓から、皿の鳴る音や、話し声や、ニュース番組のテーマ曲が聞こえてきた。彼らがやってくるのを見た子どもが二、三人――ハンモックの包みを運ぶ裸の少年が六人と、その前を行く、もっと背の高い、裸のひげ面の男がひとり――目を見開いて黙りこみ、家のなかへ逃げこんでいった。

小さな広場は彼が覚えていたのとほとんど同じだった。ペロウリーニョのまわりに少し草のはげた花壇が加わり、一度も開所したことのなさそうな建物がブラインドとプラスチック塗装の外壁で新しくなって、「トゥムクマキ国立公園管理事務所」という看板を掲げていた。雑貨屋は外に陳列台を出して、色とりどりのビーチサンダルやナイロンのワンピースを吊るしていた。いささか大胆すぎるアルミのデザインの街灯が三本、犬たちに新しい未来的なおしっこの機会を差しだしていた。ポウザーダはシクラメン色に塗りなおされ、いまは消えているネオンの看板がつけられていて、たいして独創的でもなく、こう書いてあった。「ペロウリーニョ亭　ポウザーダ・カフェ・ブラーマビール」

薄暗い店のなかで、女主人が入口と唯一の客に背を向けてグラスを洗っていた。客の老人は小瓶のビールをなでながら、壁に掛かった巨大なテレビを一心に見ていた。厚化粧のふたりの婦人が大音量で激しく言い争い、恰幅のいい紺のジャケットの司会者が、なだめると同時にあおりたてようとしていた。

裸で体に模様を描いた一行が、まったく音を立てずに入ってくるのを見て、小柄な老人は目を見開き、しわがれ声を出した。「ジェジータ……」

「はい、アルマンド、どうなさいました？　もうセルヴェジーニャを飲み終えられたんですか？」

「ジェジータ、その……人が……来てる」

ジェジータは振り向き、片手にグラス、もう片方の手に布巾を持ったまま一瞬あっけにとられたが、すぐに立ちなおった。「で、あなたがたはどなたです？　ここで何をなさってるんです？　出てってくださいな、さあ、さあ、ここはあなたがたの来るところじゃありませんよ」

アントニオが、ぼさぼさの髪にさした二本のオウムの羽を直しながら進み出た。「ジェジータさん、こんばんは。ご心配なく、何も悪いことはしません。助けが要るんです、怪我をした子がいて、助けが要るんです」

「でもあなた、ちょっと、あなたはこの人たちの仲間じゃありませんね。わけがわかりません、こんなインディオたちと何をしてらっしゃるんです？」

「とても長い話になるんです、奥さん……私はアントニオ・カルロス・ロシャ・ジ・アウメイダといいます。あの、覚えていらっしゃらないでしょうけど、前にここへ来たことがあるんです、ずいぶん前に。弟さんのガンボーネを知っています……」

「あら、ガンボーネ！　もう二年くらい会ってませんよ。パウロは船を持って川をさかのぼっていっちゃいましてね、商売をするんだって、売ったり買ったり、何をするんだか知れたもんじゃない。モンチ・ドウラードには見込みがないって言ってましたよ。二年で三回電話してきたかしら、あのカピバラの魂め」

「いとこさんも知っていました、気の毒なぺぺさん、残念ながら……」

「ぺぺ？　誰です、それ？　いとこなんていたためしがありませんよ。パウロと私にはいとこが七人いて、みんな女で、アルマンドおじさんは男の子をそれはほしがってたんですけどね、でもそのほうがよかったのかも、おじさんみたいな女たらしの怠け者になってたでしょうから……でもあなた、まだどなたで何がお望みなのかわかりませんよ。怪我をした子、とおっしゃいました？　どこです？　ちょっと見せてくださいな」

「おっしゃるとおり、この子はかなり具合が悪いんです、急いでお医者に診てもらわないと」

「船があれば……」

「まともな動力船はもうないんですよ。あの人の船はガンボーネが持っていっちゃったし、もう一艘はひどくおんぼろだったから、とっくに川で腐っちまいました。いまはみんな車を使うんです。誰かこの子を運んでくれる人を探さないとね」

「でも人数が多すぎます、車が二台、ひょっとしたら三台要ります……」

「ばかおっしゃい、この子は病院へ行って、ほかの子たちは森へ帰るんですよ。まさか全員を町へ連れていくおつもりじゃないでしょう」

「実は……そのつもりなんです、ジェジータさん。そうするしかないんです。この子たちは離れようとしませんし、私もここに置いていきたくない、いっしょに町へ来てほしいんです。それに、行きたいのはアウメイリンじゃなくてマカパなんです。長い話だと申しあげましたでしょう」

「私には正気の沙汰とは思えませんけど、まあ、あなたがそれでいいんなら、車を探してみましょう。部族まるごと乗せてくれる人を見つけるのは簡単じゃないでしょうけどね……あら！　そうだ、明日の朝早く、ララランジャウをマカパ行きのバスが通るんです。それならみんな乗れるし、安心して行けますよ。ララランジャウは川の向こう岸だけど、それは問題じゃありません、いつも小舟で渡ってますからね。結局それがいちばん早く町へ着ける方法ですよ、全部車で行くより早いし楽です」

「ああ、ありがとうございます、それはすばらしい考えです！　もちろん今夜はここに泊まらなきゃなりませんけど、ご迷惑はおかけしません。村の外の、木の下で寝ますから……」

「とんでもない、とんでもない、木の下だなんて。ここは森じゃないんですよ。ここで、この店で寝てください、みなさんのハンモックを下ろしてきますから。それにあの子は

ちゃんとしたベッドに寝かせましょう。もうさんざん揺さぶられてきたんだから、静かにしてなきゃ」

「ありがとうございます、本当にご親切に。お金を持っていないんですが、町に着いたら銀行に行って……」

ジェジータは肩をすくめた。「それはあとで考えましょう。私は暮らしには困ってませんし、家族のなかのヒルは弟のガンボーネひとりでたくさんです。ご心配なく。それより、何か召しあがりたいでしょう？」

「実は、その、はい。何しろ子どもですから、いつも腹をすかせているんです。食料を持ってきたんですが、もう尽きてしまって……はい、本当にありがとうございます、たしかに、まずヤマンデを休ませて、それから何か食べることですね」

「いいえ」とジェジータは彼を頭のてっぺんから足の先までじろじろ見ながら言った。「まずは何か着ることです」

何年ぶりかで、アントニオは自分が服を着ていないことを意識した。ドナ・ジェジータのおもしろがるような目つきに、彼は、妙なことに、ひどく……あのことばはなんだったか、思い出せなかった。部族のことばには、それにあたることばがなかった。そうだ、裸だ、そのことばは裸だった。

店のなかでは、小柄な老人がビールのことも忘れて少年たちを見つめていた。少年たちは、ぴったり身を寄せあった褐色のひとかたまりになって、目を見開き、魅入られたようにテレビを見つめていた。

3.5 ジェジータ

ドナ・ジェジータには、表に出す機会のなかった強い母性があったにちがいない。はじめのわずかな警戒のあと、彼女はめんどりのように彼らの世話を焼いたのだ。器量だって決して悪くない、むしろその逆だ、とアントニオは思った。少しおしゃべりかもしれないけど、とても情が深そうだ、どうして家庭を持てなかったんだろう。たぶんこんな辺鄙な土地では、手の空いている求婚者はそう多くなかったのだろう。あるいは、ネオンの看板まであるポウザーダの女主人としての自分にふさわしい相手がひとりもいないと考えたのかもしれない。

とにかく彼女は彼らを守るように自分の翼の下に入れた。まるで全員が――アントニオも含めて――世話をしてやらなければならない子どもであるかのように。結局のところ、それは事実からそう遠くなかった。森のなかでは勇猛で、すっかり環境になじんだ狩人たちも、このまったく新しい環境では赤ん坊のように無防備だったのだ。

まずジェジータは、ヤマンデを二階の本物のベッドに寝かせた。その前に、診療所ほども大きな薬箱から出したいろいろな錠剤を、たっぷり飲ませてからだったが。マットレスと枕は怪我人にとってまったく初めての体験だったが、そのやわらかさ、すべすべして香りのいい白さに、最初こそ居心地の悪さと驚きを感じたものの、熱があるにもかかわらず彼の顔に浮かんだ至福のほほえみは、それがまったく不快ではないことを、疑いようもなく示していた。

一同の注意を引くには、テレビを消さなければならなかった――そうでもしなければ、その魔法からは大いなるアナコンダでさえ彼らを引き離せなかっただろう――そのせいでアルマンド氏はいささか不満そうだった。ドナ・ジェジータはやさしく、だが遠慮なく彼を追いだした。「今夜はもう閉店ですよ、アルマンジーニョ。お客さんがあるんです」

老人はあまり納得のいかない様子で首を振りながら帰っていった。インディオの部族がまるごと裸でやってきてテレビの前に陣取るせいで、ビールの一杯も飲ませてもらえないなんて、なんて世の中だ。どこまで来ちまったんだ。

場所が空くと、女主人は段取りを取りしきった。少年たちは彼女の気づかいを快く受け入れているようで――とりわけモアシルは彼女にひっきりなしに輝くような笑顔を向けていた――アントニオがいささか驚いたことに、あふれかえる新しいものにおじけづくより、好奇心をそそられているようだった。若者たちをしばらくホースで水をかけあって遊ばせ、アントニオには浴槽のある浴室を使わせてやったあと、ジェジータは、あらゆる種類の衣類があふれんばかりに詰まった大きなタンスを一行に開放した。

「お客さんが部屋にどれだけ物を忘れていくか、想像もつかないでしょうね」と彼女はぶつぶつ言ったが、それが本当だとしても、アントニオには、とくに男物の衣類が、こんな宿屋がこれまでに迎えたことのあるうっかり者の客の数に比べて、どう見ても多すぎるように思えた。結局、夫がいたこともあったのかもしれないが、どうやらジェジータはその話をしたくないようだった。

少年たちは、最初こそ警戒しておびえたものの――なにしろそれまで見たなかでいちばんよく自分の姿が映ったのは、濁った水たまりだったのだ――ドナ・ジェジータの部屋に、気どったロココ風の額縁に入って君臨している大きな姿見に夢中になった。靴下やTシャツを身につけて、まるまる一時間、互いに押しあって鏡に映ろうとし、得意になって大笑いしながら、気どって見せびらかしていた。

夕食の支度をしながら――料理に、コンロに、食器に、つまみ食いしようと指をつっこむ材料に魅せられて、いつも足もとにまとわりつくピライを、あっちへこっちへどけながら――ジェジータは出発の段取りを考えていた。「夕食のあとで、ジョアンとヴィセンテに、明日の朝早く船で向こう岸へ送ってくれるよう頼みに行きますよ。それに、あなたがたのことを何か言っておかなきゃなりませんしね、着いたところを見られてるでしょうから。たとえ見られてなくても、アルマンドさんはいとこのジルベルタよりおしゃべりなんです」

いちばん簡単なのは、一行に中庭で夕食を出すことだとわかった。店の椅子はとても気に入って、くすくす笑いながら一脚ずつ全部座ってみたのだが、テーブルは、どうやら、もっぱら不便な発明だと思ったらしかった。そういうわけで彼らは、ゼラニウムとコリアンダーとオレガノの鉢のあいだで、ちゃんと地べたに座り、それぞれ選んだTシャツをきちんと着こんで夕食を食べた。

明日出発するときには、なんとか短パンもはかせなきゃ、まったく、靴は考えるだけむだだ、それはあとで考えよう、ビーチサンダルなら気に入るかもしれない、でも短パンはぜったいに欠かせない。それに、どうしてもカウエを説得して、ひどく気に入っているらしいあのレースのついたライラック色のスリップを脱がせなきゃ。

女主人が大鍋で彼らの真ん中に置いた、豆がたっぷり入って揚げた料理用バナナで食べごたえを増した煮込みは、大歓迎された。鶏を食べたことはなかったが、とてもおいしいと思った。ヘビよりは少し味が薄いが、ジャカレーよりはずっと味がある。

そのかわり、グラスから水を飲ませる手立てはなかった。あんなに透きとおったガラスは彼らを落ちつかなくさせた。固まった水のようで、わけがわからず、どうにも不気味だった。ジェジータが台所から陶器の椀をいくつか見つけてきて、ようやく彼らは飲む気になったが、その水に味がないことを、とても興味深く、少しこっけいに思った。水が泥の味も、葉の味も、土の味も、腐った葦の味もしないなんてまったく奇妙だ、と彼らが熱心に議論しているさなか、アントニオは、すっかり忘れていた記憶に打たれた。ビールだ。ああ神さま、ビールというものがあるんだ！

ジェジータは喜んで一本栓を抜いてくれた。最初の冷たいひと口が喉を下りていったとき、アントニオは思った。これだ、そう、これのためなら三日どころか、ずぶ濡れのゆがんだいかだで滝を上がったり下りたりする三か月にも値する。ふた口目で、彼はうっとりと目を閉じた。だが三口目で、ふいにある考えに打たれて、ぱっと目を開けた。「奥さん、ところで、いまは何年ですか？」

3.6 十四年

2014年。ああ神さま、2014年3月10日。アントニオは、ドナ・ジェジータが親切に使わせてくれた浴槽にひたりながら、その衝撃的な発見について考えていた。浴槽。水洗トイレ。タイル。バラの香りの石けん。十四年で、存在を忘れてしまうものがいったいいくつあるだろう？　十四年は長い、思っていたよりずっとずっと長い。もちろん、子どもたちが若者になるのを見てきたし、小さな女の子たちがもう母親になっているのも見てきた。だがなぜか――たぶん季節のない日々の流れのせいで――年数についてはっきり考えたことは一度もなかった。いきなり聞かれて、考えずに答えたなら、五年か六年、せいぜい七年と言っただろう。

洗面台の鏡に自分を映してみると、あまりに変わっていて、もし自分に出くわしても自分だとわかるかどうか自信がなかった。痩せて日焼けし、もう彼らと同じくらい肌が黒く、ひげと髪が湿った大きな毛玉のようになっていた。カミソリを手にとり、シェービングクリームの香りを嗅ぎ、ひとかけらを指のあいだでのばしてみた。それから、すっかり剃ってしまうのはやめておこうと決めた。顔の半分だけ日焼けしているのはこっけいだろうというのもあったし、もうひげのある自分に慣れてしまったというのもあった。そこで彼は、はさみでひげと髪を切りそろえはじめた――ときどき骨の刃でいいかげんに整えるよりはましだった――そしてそのとき、思いがけず、激しく、もうすぐ家族に会えるのだという自覚が、こぶしのように彼を打った。

もう二度と会えない悲しみを、自分でも気づかないまま、胃の底に、心の底に、頭の底に隠していた。そしていま、また会えるとわかって初めて、それをどれほど深く埋めていたかを悟った。そしてそこで、バラの香りをさせて洗面台の前に立ち、はさみを手に、ふたまわり大きなパンツをはいて、彼はこれだけの時間のあとで、家族のことを考える喜びを自分に許した。

ジャニータはまた太っただろうか、ときどき言っていたように修道女になったのだろうか。アマンダは、あのめかしこんだ婚約者と結婚したのだろうか――あいつはどうも気に入らなかった、あの働くのが嫌いそうな顔つき――ひょっとしたら、もう子どもが二、三人いるかもしれない、それともももう離婚しているかもしれない。そしてガブリエラ、ほとんど歩けなかったガブリエリータがもう娘さんになっている、どんなふうになっただろう、学校はうまくいっているだろうか。一瞬、恐怖が刺すように彼を凍らせた。父さんは、母さんは？　もし死んでいたら？　いや、何を考えてるんだ、出てきたときはまだ中年に差しかかったばかりだった、父さんは元気だったし、母さんは健康とつやにはちきれそうだった。きっといまでも、エルネストおじさんとノルミーニャおばさんとしょっちゅう言い争ってるさ。毛の抜けたバクみたいなあのひどい犬は、まだ飼ってるだろうか。友だちはどうしているだろう、パコはラジオを再開しただろうか、ジャキーニョは女を見つけただろうか、生徒たちは、あの知ったかぶりのジョージや、いまではもう大人になったほかの若者たちはどうしているだろう。それにあの娘、ラジオのあの子、名前はなんだったっけ、イザベラ、イザドラ、どうなったんだろう。

わかってもらえないだろうな、と彼は鏡にほほえみかけながら思った。わかってもらえないだろうけど、僕にはみんながわかる、みんなひとり残らずわかるさ。

3.7 目覚まし

すべては相対的だ。すべては場合による、とアントニオは薄暗い店のなかで、ジェジータが出してくれたハンモックに身を横たえ、眠りに落ちる少し前に少年たちがおしゃべりしているのを半分目を閉じて聞きながら思った。それから、「すべては場合による」という言い回しが昔からの口ぐせだったのに、森で過ごしたあいだに使わなくなっていたことに気づいて、驚いた。そういえば、ことばにはその考えを言いあらわすことばさえないように思えた。ひょっとすると、森では何もかももっと単純で、もっとはっきりしているというしるしなのかもしれない、と彼は考え、それからまた少年たちの話に集中して、その無邪気さにほほえんだ。

「こんなに大きい小屋だって、想像してた？」と言ったのはジャシだった。

「僕はしてた」と誰かが答えた。

「僕はしてなかった。それに村がこんなに大きくなれるなんて、わかってなかった。いや、アントニオはいつも言ってたよ、大きい、大きいって、でもこんなに大きいとは思わなかった」

「僕がちゃんとわかってるなら、この村は、あの人たちの持ってるなかでいちばん大きい村ですらないんだ。アントニオが来た村はもっと大きいんだって」

「ありえない」

「ほんとだって」

「アントニオに聞いてみよう」

「寝てるんじゃないかな。年寄りだから、僕たちより先に疲れるんだ」

「あはは」

「それより僕がびっくりしたのは、人がすごく少ないことだよ」と言ったのはウビラタンだった。「まわりを見てみろよ。この小屋はすごく大きいのに、着いたときにはあの黄色い飲みものを飲んでる男しかいなかった……」

「おしっこを飲んでたんだ！」とカウエが口をはさみ、大笑いを巻き起こした。

「……それとジェジータって女の人。それだけ。こういう村は、きっとものすごく退屈なところなんだ」

「僕はもっとずっとたくさん人がいるって思ってた」

「何か悪いことが起きて、みんな死んじゃったのかも！」とカウエが冗談で言ったが、仲間たちにも自分自身にも、少しばかり身震いを起こさせてしまった。

「アントニオ！」とジャシが呼んだ。「寝てる？」

「いや、でも寝るべきだな。君たちもだ」

「どうして村に人がこんなに少ないの？　何か悪いことが起きたの？」

「いや、ジャシ、心配しなくていい。この村はこういうところなんだ。それに着いたときはもう夕方だったから、みんなほとんど自分の小屋に入っていたんだよ。明日、車輪のついた舟に乗って僕の昔の村へ行こう、もっとずっとたくさん人がいるのがわかるよ。もう寝なさい、明日は早く起きなきゃならないんだから」

「早く起きるってどういうこと？　起きるときに起きるんだよ」

「いや、バス、つまり車輪のついた舟は、待っていてくれないんだ。行ってしまう前に起きなきゃならない」

「どうやって？」アントニオは、少し前にジェジータからもらった目覚まし時計を見せた。「これは過ぎていく時間を正確に数えて、そのときが来たら音を鳴らして起こしてくれるんだ」

「眠ってるあいだに起こすための道具があるの？」とジャシが信じられないというふうに尋ねた。

「ああ」

「頭がおかしいよ」

「そうかもしれないな」

3.8 新しいことば

夜明けには、目覚ましが鳴るより先に全員が起きていた。これから乗るバスに興奮しきっていたのだ。前の晩、彼らは村に止めてある数少ない車を、うやうやしくのぞきこんでいた。あれほどぴかぴかで色とりどりで、それまでに見たどんなものともちがっていた。アントニオは、バスはああいうものだが、ずっと大きくて、なかに乗りこむと、舟のように、ただし道の上を運んでくれるのだと説明していた。たぶんすっかりはわかっていなかったが、彼らはその動きと金属の驚異を早く試してみたくてたまらなかった。

ドナ・ジェジータが料理に使うものみたいな金属、鍋みたいな、でも僕たちがなかに入ると、それが動いて、アントニオの村へ連れていってくれるんだ。こわい？　動く鍋がこわいかって？　僕はなんにもこわくない、アントニオみたいな年寄りになったら、僕もバスを持つんだ、全部金属で、オウムみたいに色とりどりのを。

全員がコーヒーを味見して――アントニオはうっとりするようにすすった――焦げた木の味がする、砂糖はあんな煮汁に溶かしてむだにするより、そのまま食べるほうがずっとずっといいと思った。それから、全員が短パンとTシャツを身につけているかを確かめたジェジータの点検を通って、船着き場へ向かった。ヤマンデはまだ痛がっていたが、熱はもう少し下がっていて、細い縞のゆったりしたパジャマを着てハンモックに横たわっていた。

ジョアンとヴィセンテはもう来ていた。前の晩ジェジータが事情を説明したとき、ふたりは異を唱えなかった。怪我をした若者、そりゃたいへんだ、もちろんだ、当たり前さ。こういう孤立した村では、助けあうのに慣れていて、誰かに手を貸すのを断ることはめったにない。だがこういう孤立した村では、人はとても好奇心が強くもある。それでその朝、船着き場のまわりには、彼らの出発を見ようとモンチ・ドウラードの村じゅうが集まっていた。子どもたちは少しがっかりしていた。裸のインディオ――あっちの、森にいる連中――の話を聞いていたのに、見えるのはTシャツを着た若者ばかりだったからだ。大人たちは、十四年も世間から離れていたアントニオにひどく感心していた。いったいどうやったのかしら、私なら死んでたわ、そりゃお前は死んでたさ、通りかかった最初のジャガーに食われてたさ、午後の連続ドラマが見られないってだけで死んでたさ、お前が森の何を知ってるっていうんだ、あら、あんたこそ、家から三メートルのところに生まれてこのかた住んでて、一歩も足を踏み入れたことがないくせに、この子たちを見てごらんよ、ジャガーを狩りながら育ったんだよ、それなのにあんたはカピバラより太ってぐうたらで。

小舟が船着き場を離れ、村の人々は手を振って見送った。ジェジータは――このさびれた土地では、思いがけない出来事は雨の降らない日と同じくらい珍しかった――もう恋しくなっていた。

「きれいな女の人だなあ、ものすごくきれいだ」

「え？　誰が？　ものすごくきれいって誰が？」

「あの女の人、ジェジータ、家でごはんを食べさせてくれた人」

「お前には年寄りすぎるよ、モアシル」

「うん、すごく年寄りだ。でもきれいだ、あの黄色い髪、きれいな黄色い髪」と彼はため息をついた。

「ああ、まあ、あれは染めてたんだよ、モアシル、染めてたの」

「染めてたって何」

「染めてたっていうのは、色をつけた、塗った、描いたってこと、本当の色じゃないんだ」

「どうでもいい、そんなこと言うなよ、お前は自分の髪があんなにきれいじゃないから妬いてるんだ。あの人はすごくきれいな女の人だ、花のにおいがして、目に模様を描いてて、色がいっぱいのすごくきれいな服を着てて、お日さまみたいな黄色い髪をしてる。あの人は川の女神みたいだと思う、黄色い大いなるアナコンダみたいだ、ものすごくきれいだ、お前は何もわかってない」

モアシルはまたため息をつき、遠くを見る目で、遠ざかっていく岸を見つめていた。

カウエは、着ないという約束で持ってくるのを許されたライラック色のスリップを握りしめていた。バスのことを考えていて、ひどくこわかったが、それを認めるくらいなら死んだほうがましだった。

3.9 涙

運転手の名前はフェルナンドといった。ラランジャウの砂利をきしませて走りだしたとき、彼は少し警戒していた。こいつらはインディオだ、一キロ先からでもわかる、ひげ面のひとりを除けばことばもわからない、そいつもどこから出てきたのか知れたもんじゃない、それにあの怪我をした若いのも……面倒はごめんだった。泥のほうがアスファルトより多いこんな道で、こんな大きな食器棚みたいな代物を運転するだけでもひと苦労なのに、この稼ぎじゃ、女房の言うとおりかもしれない、ベレンの工場で魚の缶詰でも詰めたほうがましかもしれない。だがやがて考えを改めた。結局のところ面倒は起こさないし、静かでおとなしかった――窓から外を眺めて、道が走って、走っていくのを見るのに夢中になっていた。

町に入ったとき、アントニオはまわりのものにほとんど気づかなかった。頭がくらくらしていたが、何よりも心配だった――みんなを病院までどうやって連れていけばいい、バスか、タクシーか、どの金で――そのとき運転手が、停留所で急いでいる最後の主婦を降ろしてから言った。「で、あんたがたはどこへ行くんです？　あの怪我をした若いのは、セニョーラ・ドス・アンジョス病院へ連れていかなきゃならないんでしょう？」

「ええ、でもわかりません、たぶんバスがあるでしょうから……」

「あまり楽じゃないと思いますよ、パラナー通りで乗りかえて、待たされるかもしれない、立ってもいられないあの子を連れて……まあ、こっちはどうせ一周終わったんだ、ついでだから乗せていきますよ、さあ」

「でも本当にいいんですか？　町までの切符代しか持っていないんです（なんとかしてジェジータに返さなきゃ、ぜったいに）。病院まで行くのはあなたの路線から外れるでしょう」

「いやいや、病院は車庫へ行く道のほとんど途中ですよ……いい子たちだ、行儀がいい。それにあの子はかわいそうに、うちにも二十歳の息子がいるんです、あの脚はひどい。あそこまで乗せていきますよ、あとはそっちで」

インディオが六人、ハンモックを運んで入ってくると、救急外来はちょっとした騒ぎになった。少年たちは、あの白と緑に、あの知らない怪しいにおいに気おされていた。彼らを率いていたひげ面の男が、大声で医者を、なんていったっけ、脚を、骨を治す人を呼んでいた。怪我をした若者がいるんだ、要るんだ、その……整形外科医が。急いで。

「つまり、十四年も森にいらしたとおっしゃるんですね。それはとても……奇妙な、まったく変わったことですよ」

「ええ、先生、わかっています。少し長い話なんです、でも私が気になっているのはあの子の、脚の具合なんです」

「ええ、ええ、大丈夫です。あの子は大丈夫ですよ、でもここへ連れてきたのは正解でした。本当にひどい骨折で、ずいぶん悪い状態でした。手遅れになっていたら死んでいたでしょう。脚はもとどおりになります、怪我をしたことにも気づかないくらいにね、でも長くかかります、かなりのリハビリ期間が要るでしょう。でもあなたのことを聞かせてください、どうして、その、その十四年は……」

「ええ、お話しします、でもいまは、すみません、電話を一本かけさせていただけますか？」

電話に出たのはジャニータだった――結局、修道女にはなっていなかった――そしてそれは幸運だった。彼女のうろたえぶりからすると、もし母親が出ていたら心臓発作に立ち向かわなければならなかっただろうと思えたからだ。彼女はあえぎ、息を切らし、口ごもり、念のために――用心に越したことはない、世の中には変な人がたくさんいるのだから――父方の曾祖母の名前を尋ね、それから泣きくずれてしゃくりあげた。「アントニーニョ、ああ、アントニーニョ！　すぐ行く、すぐ行くわ、三十分で着くから」

ヤマンデは手術を受け、鎮静剤で眠らされて、病室に移されたばかりだった。アントニオは、もうずいぶん長いこと救急外来に立ちっぱなしの少年たちをどうしたものか考えていた。それでも彼らはまだおとなしいようで、大きな窓に貼りついて、尽きることのない好奇心で下の通りを眺めていた。車、ワゴン、看板、店、自転車とバイク、信号と物乞い、ハイヒールの女たち、アスファルト、ごみとマンホール、ズボンとスカートと眼鏡、紐につながれた犬、ブラインド、たばこ、傘。

そのとき、みんながいっしょにやってきた。まず母親が、真っ先に抱きしめようと人をかきわけて、息もできないほど彼を抱きしめ、噴水のように泣きながら、取り乱して出がけに焼いてきた四十個のベイジーニョの包みを振りまわしていた。それからジャニータとアマンダが、ふたりいっしょに彼をなで、ふたりとも泣いていた。アマンダの夫は、ありがたいことにあのめかし屋ではなく、彼に会うのは初めてだったが、男らしく彼を抱きしめ、手を引いているふたりの小さな子をうながした。「さあ、さあ、おじさんにキスしなさい！」それにミニスカートのガブリエリータは、彼のことをまるで覚えていなくて少し離れたところにいたが、つられて彼女も泣いていた。ノルミーニャおばさんは涙でびしょ濡れになりながら彼の頬を両手でつまみ、エルネストおじさんは彼の肩をばんばん叩き続けて鼻をすすっていた。そしてアントニオは、笑えばいいのか、自分も少し泣けばいいのか、わからなかった。

「なんてすてきになったの、母さんのアントニーニョ、私の坊や、ガリンペイロみたいなひげを生やして……父さんが見たらどうかしら、あの人は騒がしいのが嫌いでしょう、熊みたいな人だから、でも家であなたを待ってるわよ。あなたが生まれたとき以来、あんなに感激してるあの人は見たことがないわ……私のかわいい坊や！　背が伸びたみたいね、でも痩せちゃって、よく見せてちょうだい、いったい何を食べてたの、ひどい獣や雑草なんか……それに、あなたが死んだと思ってどれだけ泣いたか、ミサを何回あげてもらったかわからない、ほらね、ノッサ・セニョーラ・ドス・メニーノスが聞いてくださったのよ、全部話してちょうだい、全部……それで、この子たち、この子たちがあなたのお友だち？　まあ、なんてかわいい子たちでしょう！」

そして感謝と喜びで我を忘れて、少年たちを抱きしめた。少年たちは、涙に濡れてアイリスの香りのするそのやわらかな大きな体に、少しとまどっていた。彼女は彼らの髪をなで、焼きたてのベイジーニョで手をいっぱいにしてやり、それからまた姉妹たちの腕からアントニオを引きはがしてもう一度抱きしめ、娘たちを抱きしめ、何年も会っていなかったかのようにノルミーニャとエルネストを抱きしめ、泣きながら笑いながら、たまたま通りかかった口ひげの看護師まで抱きしめた。

エルネストおじさんは看護師をひとりグラスを探しに行かせてから、イタリアのスパークリングワインを二本開けた。「さあ、すみませんがお願いします、急いでください、乾杯しなきゃならないんです！」少年たちはお菓子を詰めこみ、女たちはハンカチを次々にぐしょぐしょにし、子どもたちは保育園で覚えた歌をおじさんのために歌い、ノルミーニャおばさんは手を叩いていた。セニョーラ・ドス・アンジョス病院の救急外来が、これほどの騒ぎと涙と喜びを見たのは、十三年前、アニタ・マデイラ・ジ・アンドラージ夫人が分娩室へ行く間もなく、そこで四つ子を、ふたりは金髪でふたりは黒髪の四つ子を産み落として以来のことだった。

3.10 家

それからの数時間は、感覚と顔の大混乱で、覚えていない声が沸き立ち、ココナッツ菓子でべとべとしていて、アントニオは結局それを正確に組み立てなおすことができなかった。

病院を出る前に、彼と少年たちはつかまって、ほとんどあらゆるものの予防接種をされた。「標準の手順です。外の世界と一度も接触したことのない部族の先住民はきわめて危険なんです、インフルエンザひとつで死ぬことだってあります、はしかや水ぼうそうは言うまでもなく」

「でも私は子どものころ水ぼうそうにかかりましたし、インフルエンザなんか少なくとも千回はやってます……」

「まあまあ、そんなに騒がないでください、念のためにあなたにも全部やりましょう」

それに腹を立てたのは、少年たちよりも彼のほうだった。少年たちはむしろ白衣や、診察台や、注射器に興味津々で、そのちっぽけなひと刺しが――スズメバチより弱い、大きなアリよりも弱い！――世界じゅうのあらゆる病気から永遠に守ってくれるのだと思って大喜びした。

「そういうわけでもないんだ、みんな、いくつかの病気からは守られるけど……」

「あんたはこれが病気から守ってくれる薬だって言ったじゃないか。もう二度と病気にならないようにするためのものだって言った」

「わかった、カウエ、わかったよ。そうは言ってないけど、まあいい。さあ、なんとかここから出られるようにしよう」

その前に、ヤマンデに挨拶しに寄らなければならなかった。麻酔から覚めたばかりでまだぼうっとしていた彼は、自分がどこにいるのか、なぜいるのかよくわかっていないようで、ましてやその大勢の人たちが誰なのか、とりわけ彼の枕をふくらませているふっくらした年配の婦人や、頬にちゅっとキスをしたふたりの小さな子が誰なのか、まったくわかっていなかった。「病気のおじさんのお友だちにバイバイしなさい！」それでも、何日かぶりに彼の顔は苦痛にこわばっておらず、ゆるんでいて、白い硬い小さなベッドで居心地がよさそうだった。だから、すぐにまた来るからと安心させてやると、あとは三階の廊下を探検しに行ったカウエを連れ戻しさえすれば、病院を出る準備はできた。

みんなをアントニオの母親マルセラの家まで運ぶのに、エルネストの車で三往復しなければならなかった。家では親戚や近所の人たちが大勢、にぎやかに待ちかまえていた。生き返った男を抱きしめ、彼についてきた森の部族を見て、ついでに食べたり、飲んだり、音楽をかけたり、踊ったり、うわさ話をしたり、政治やサッカーや、上がる一方の物価や、終わったばかりのあのテレビドラマのことを論じあったりするためだった。残念ねえ。

「残念ね、アントニーニョ、土曜日に帰ってきてくれたら、もっとたくさんの人がお祝いに来られたのに！」

土曜日、なんとまあ。土曜日と日曜日がほかの日とちがう日だということ、どの日にも名前と特徴があること――木曜日にはメンデス通りに市が立つ、火曜日にはテレビのクイズ番組がある、月曜日には週刊誌が売店に並ぶ、いや水曜日だったか？――を思い出すの

は、アントニオにはひどくおかしかった。すっかり忘れていたことで、いまではかなりばかげたことに思えた。

見知らぬ人々のそのひしめきのなかで、少年たちはとてもうまくやっていた。誰にでもほほえみ、彼らの知られざることばで行儀よくさえずり、お菓子やポテトチップスや熱々のエンパナーダを詰めこまれるままになり、コカ・コーラを椀に一杯また一杯と飲んでいた。その飲みものにはひと目で惚れこんだが、グラスのガラスには相変わらず警戒を解かなかった。ウビラタンはもうベランダから動かなかった。マルセラ夫人が毎年新しいクッションで新調する――いまはアクリルの、パステルピンクのアジサイ柄だった――きしむブランコ椅子に腰かけて、町の景色を、屋根を、通りを、ほどきようのない電線とアンテナのもつれを、高いクレーンが何本もそびえる近くの工事現場を、飽きずに眺めていた。

ソファの隅に座ったガブリエリータは、ひとこともわからないのに新しい機能が広がるたびに感心してうなずくイタウナに、小さなテレビのようなショッキングピンクの機械を見せていた――電話のこと、インターネットのこと、ゲームや音楽や映画のことを話してる、何を言ってるんだ、からかってるんだ、そんな電話がもうあるはずがない、おもちゃだろう、子ども向けの雑誌に広告が出てるような代物だ、いまに服が透けて見えるとか言いだすぞ――そのあいだピライは台所で、年配の婦人たちの一団と笑っていた。婦人たちは、彼が煮込みや鍋に興味を持っているのを見て、カニのモケッカのつくり方を教えてやろうと思いたったのだった。

ジャニータは、ヤマンデのためにかばんを用意して病院へ届けに戻るのに必要なだけしか家にいなかった。「かわいそうに、パジャマも、スリッパも、ガウンもないんだもの……ビスケットをひと箱と飴も少し持っていってあげよう、病院の料理は家みたいにおいしくないでしょうから、口を甘くしたら喜ぶわ。雑誌も何冊か持っていこうかしら、あんな大きな子が一日じゅうベッドにいたら、どんなに退屈か」

アントニオは、ポルトガル語の雑誌を読むのはヤマンデにふさわしい暇つぶしではないと言いかけたが、思いなおした。雑誌の写真はきっとすごく気に入るだろう、結局すばらしい考えだ。あまりにいい考えなので、スリッパとガウンが要るかどうかについて姉と議論するのもやめておいた。

少年たちはベランダで寝ることに決まった――降りやまない雨はしのげるが、部屋に閉じこめられはしない、彼らはそのほうがよかった――そしてジャニータとアマンダとマルセラは手際よく、互いに相談もせずに、友人たちからハンモックをいくつか借りたほうがいいと考えた。その結果、居間の肘掛け椅子の上には少なくとも三十のハンモックが積みあがった。

アントニオはひどく疲れはじめていた。感動と、騒ぎと、そして何より、もう慣れていない二、三杯のビールが、彼を笑顔のぼんやりした状態に宙づりにしていた。ただ、ドアがばたんと閉まるたび、通りでバイクがうなるたび、救急車が通るたびに、彼はびくっとした。昔は気づきもしなかった物音で、いまは何の音か見きわめるだけでも少し時間がかかった。

だが誰かがつけたテレビから流れてきた音は、すぐにわかった。試合の実況中継、それは明らかに、忘れようのないものだった。名前も思い出せない、遅れてやってきた遠いいとこのベとつく抱擁から逃れて居間に入ると、モアシルがみんなを呼びに駆けだしたところで、少年たちはひどく興奮していた。「アントニオ、見て、見てよ、人が入ってるあれ、見て！　僕たちみたいにボールで遊んでる、サッカーしてる！」

3.11 テレビ

「これが画面だよね？」とカウエが、アントニオが物語のなかで何度も口にしたポルトガル語のことばを思い出して尋ねた。「遊んでる人たちは本当にこのなかにいるんじゃない、遠く、ずっと遠くの場所にいるんだ。あ、そうか、月にいるんだ！」

アントニオはほほえんでうなずき、ある意味では初めて見るような気がするその少年たちに目をとめた。

彼らには家具の働きについてなんの考えもなかった。彼らにとって肘掛け椅子はただのかさばるかたまりで、「座る」という考えとはまったく結びついていなかった。モアシルはソファを見ると、その上に寝そべった。なんとなく病院のベッドに似たものなら、なんとなく同じ働きもあるかもしれないと思ったのだ。ピライも同じことを思いついたが、それはテーブルでだったので、親戚たちから抗議のつぶやきとくすくす笑いが起こった。ほかの子たちは、思い思いに家具の上にとまっていた。長持の上の子もいれば、肘掛け椅子の背もたれの上の子もいた。ジャシだけが隅に立って、シャンデリアのガラスの垂れ飾りに魅せられていた。アントニオは何度か、それを摘もうとするなと彼に言った。

果物だと思っているのではないかと心配だったのだ。試合の映像は流れが速すぎて少年たちの注意をとらえられず、彼らはまわりにあふれる新しいものにたえず気をとられていた。アントニオ自身も、そういう種類のものに注意を集中する習慣をすっかりなくしていた。それに彼は技術に魅せられていた。そのテレビは彼が覚えているものに比べて巨大で、画面はひどく平らでひどく薄く、画質は息をのむほどだった。

テーブルから追いはらわれたピライが、画面に見える選手たちの動きをまねしはじめた最初のひとりだった。すぐにほかの全員が続いた。フェイント、パス、その場でのダッシュ。ひとりひとりが画面に映る選手をひとり選び、その動きをまねた。アントニオはうっとりした。外から見ればリズムのない踊りを踊っているように見えたが、アントニオには、彼らが思ってもみなかったゲームの見方を示しているのがわかった。彼らはボールを持っている選手ではなく、ほかの選手たち、守備や攻撃の動きに加わっている選手たちをまねていた。それが彼らなりの、試合の戦略を感じとり、論評するやり方だった。

アントニオは、それがまさにブラジル代表の試合だとわかるまでに、たっぷり十五分かかった。あるとき、黄色のチームの10番が、相手のペナルティエリアのすぐ外でボールを受け、恐れもなく相手守備陣の蜂の巣に入りこみ、小柄な体格にもかかわらず、おそろしいほどの身軽さと力強さで動いた。たちまち三、四人の相手を抜き去ったが、右に流れすぎて強いシュートは打てなかった。また別の守備の選手をよけようと体をひねりながら倒れていくとき、その左足から魔法のような軌道が生まれた。ゆっくりとした、ひどく弓なりの放物線を描くボールが、相手キーパーの上を越えて、その右のトップコーナーに吸いこまれた。

「ゴール！」と少年たちは声をそろえて叫んだ。「ゴール！」

彼らは生まれて初めて、アントニオに教わった身ぶりが実際に使われているのを見ていた。両腕を上げること、抱きあうこと、勝利のしるしに握ったこぶし。中継は、技術の奇跡をいまやってのけた黄色いシャツの小さな天才の顔をアップで映した。少年たちは抱きあうのをやめ、黙りこみ、いっせいにアントニオのほうを振り向いた。最初に口を開いたのはカウエだった。「ゴールを決めたやつ……」どう言えばいいのかよくわからなかった（その必要はなかった、みんなもう気づいていたのだ）。「見た、アントニオ？　ヤマンデにそっくりなの、見た？」

アントニオは信じられなかった。ヤマンデと、緑の文字で「フォゲッチ」という名前が浮かびあがったシャツを着たブラジルの天才的な10番は、実際、兄弟のように似ていた。

3.12 ゼロン

「どこへ行くの、アントニオ？」

目覚ましがあろうとなかろうと、アントニオは日の出にはもう起きていた。少年たちも全員そうだった。彼は一日一日をどう組み立てるか長いこと考えていた。とりわけ気がかりなのは、ヤマンデをあまりひとりにしておかないことだった。だが病院の規則はとても厳しく、正午前には入れてもらえず、面会時間もいずれにしても限られていた。自由な時間はたっぷりあった。

何時間もかけて家のなかの物の使い方と意味を少年たちに説明してきたが、その世界は彼らの世界とあまりに奇妙にちがっていて、慣れさせるには何回かの朝ではとても足りないと気づいていた。モアシルはいちばん好奇心の強いひとりで、冷蔵庫をたっぷり十分間開けたり閉めたりして、なかに入っている冷たいものに片端から触れては魅せられ、なかの明かりがどうやってついたり消えたりするのかを突きとめようとして、うまく突きとめた。アントニオは、少なくとも何か危なそうな状況に陥らないかぎり、好きにさせておこうと決めていた。ほかの子たちが、鍵や、敷物や、スイッチや、本や、目にとまるあらゆるものについての彼の話を聞いているあいだに、モアシルは蛇口の検分に移っていた。お湯と水を出したり止めたりし、それに触れ、流れを最小にしぼり、味見をして、二度ほど火傷しかけた。その朝、夜のうちに雨が降ったあとで、ひんやりと、思いがけず日の光にあふれていた。

アントニオは、元気いっぱいのたくましい若者六人を、シャンデリアや水洗トイレの話をさせて家に閉じこめておくのはもう無理だと悟り、必要を美徳に変えることにした。

どうしても行ってみたい場所があって、それが虫のように頭のなかに入りこみ、とうとうあらゆる考えの中心に居座っていた。ゼロンに行きたい、何年もたってどうなったのか見てみたい。心のなかでは、見捨てられたはずがないとわかっていた。

簡単ではないことは、自分自身にとってさえ、よくわかっていた。奇妙なことが多すぎる、ちがいが多すぎる。スタジアムまでのほんの数キロを行くのに何時間もかかるかもしれない（何日もかかるかもしれない、それとも迷って二度と道を見つけられないかもしれない、ここには千もの危険があるんだ）。

「君たちは僕に森の秘密を全部教えてくれた。ここが僕の森で、君たちの知らない秘密でいっぱいだ。よく気をつけなきゃいけないよ、僕の森にはジャガーやカイマンよりずっと危ないものがあるんだ」

少年たちのばかにしたような笑みは、最初のバスがほんの数センチ先の水たまりを走りぬけ、止まりもせずに彼らに水を浴びせかけたところで消え、すぐに恐慌の表情に変わった。原付、自動車、自転車や荷車までもが、命にかかわる脅威になった。「止まらない！」というのがいちばん多い声だった。「あの大きな金属の獣に乗った男は僕たちの目を見てるのに、止まらないんだ！」

「大きな金属の獣は止まれないのかもしれない」

「いや」とアントニオは説明した。「止まれるんだ、でも運転している人が止めないんだ」

「どうして？　じゃあどうして襲ってこないの？」

「こういう獣はふつう襲ってこない。この獣の頭は運転している人の頭なんだと考えなきゃいけない。襲ってくるのは、運転している人がまちがえたときなんだ」

アントニオの答えは彼らを満足させず、ついてこさせるのにずいぶん時間がかかった。とうとう彼は話を打ち切った。「僕がするとおりにすれば、何も起きないよ」

戻ってきてから何度も味わってきた、矛盾する感覚のなだれが、またアントニオを揺さぶった。カラフルなシャツを着た地球人たちが奇妙な惑星を探検する、あのSFのテレビドラマに迷いこんだような気がした。題名は思い出せなかった。自動車や原付の型はほとんど知らないものばかりで、店も、人も、空気のにおいさえも、もう同じではなく、排気ガスの悪臭は息が詰まりそうに思えた。見えない壁を突き破って、育った世界に似ているのに深くちがう、別の宇宙に迷いこんでしまったような気がした。けれどもその違和感にもかかわらず、どうやら一度も忘れていなかった古い習慣もあって、それがひとりでに浮かびあがってきて彼をひどく驚かせた。

ジュセリーノ・クビチェック自動車道に出て、昔から黄色く塗られた魚屋のベランダに寄りかかってアルフォンソがたばこを吸っていないかと左を見る（魚屋はまだある！　看板もそのままだ！　ひょっとしたらアルフォンソもいるかもしれない！）。遠回りになるのにバシア通りに入る、運河沿いに木があるからというだけの理由で（木はまだある！　なんて小さく、ひょろひょろに見えるんだろう！）。低い平屋の家々や、ぬかるんだ道の縁にいつまでも危なっかしく建っているバラックや、ところどころ色の爆発がはじけ、椰子の木が感嘆符になっている白っぽい灰色の建物の長い長い列を見分ける。ある家の角の裏の水道の蛇口を思い出す。でも、新しい建物や変わった交差点に驚きもする。

ついにゼロンだ。見ちがえるようだった。正面の駐車場は巨大な土の空き地になり、彼の愛した水色の外壁はすっかり塗りなおされて、いや、つくりなおされて、緑の柱をはさんだ派手な白になっていた。そしてスタンドは、すっかり新しく建てなおされているのに気づいた。二階建てで、傾斜した屋根があり、前のものより幅が広く、塗りたてで、すばらしかった。それじゃ改修工事をしたんだ、とアントニオは思った。その熱い気持ちを少年たちに伝えることはできなかった。それが何度も話してきたあのピッチなのだと説明するのさえひと苦労だった。彼らが何を期待していたのかはわからないが、こんな外壁や、こんな道や、いま見ているものではなかったのは確かだった。

工事にもかかわらず、スタジアムの北側はまだ、ぐらつく半開きの小さな門で途切れる金網で囲われていた。少年たちをなかに入れながら見ると、ピッチでチームがひとつ練習していて、白黒のユニフォームがいくつか見えたので、まったく疑いはなかった。マカパ・フチボウ・クルビだった。

ほら、この若者たちの誰かが、僕の選手だったかもしれない、でも時間がたちすぎて見分けられないし、向こうも僕に気づかないだろう。

アシスタントがにこやかな顔で走ってきた。アントニオは詫びることばが見つからなかった。「こんな朝早くに誰かいるとは思わなかったんです……」

「僕たちはプロですから」と若者はとても愛想よく答えた。「契約でここにいなきゃならないんですよ」

プロだって、とアントニオは思った、マカパはいまやプロのチームなのか！

少年たちは文字どおり口をぽかんと開けていた。カウエが言った。「大きい」ほとんど同時にピライが言った。「変な白い木を使ってるんだな……」そしてもう触りに近づいていった。「木じゃない！　金属だ！」

アシスタントは驚いた顔でアントニオを見て尋ねた。「しゃべってるんですか？　ことばなんですか？」

アントニオは彼にほほえみかけて、ピライに言った。「もちろん木じゃないさ、ちゃんと話したはずだよ」

「覚えてなかった」と少年は答えた。

それからアントニオはアシスタントのほうを向いた。「ええ、ことばです。でもお邪魔するつもりはないんです。この子たちにピッチを見せに来ただけで、誰もいないと思って、ちょっとボールを蹴ろうかと。でも、すぐに失礼しますから」

「どうして、この子たち、サッカーをするんですか？」

アシスタントは、その若者たちの一団に何か奇妙なところがあるのに気づいていた。インディオだからというわけではなかった。インディオの一団がマカパをうろうろしているのは、ちっとも珍しいことではなかった。服装でもなかった。短パンに裸足はふつうのことだった。だが、ことばのほかにも、何かしっくりこないところがあった。たぶん、肩と肩を寄せあう立ち方のせいか、ささやきあいながら身ぶり手ぶりをするやり方のせいかもしれなかった。アシスタントはさらにしげしげと彼らを観察し、そう、この子たちには何かちがうところがある、と確信した。

「ええ、ポルトガル語は話せませんが、サッカーはします、それもけっこううまいんです」

「よかったら」とアシスタントは愛想のいい様子を崩さずに言った。「ちょうどミニゲームをやろうとしていたところなんです、加わってくださるなら大歓迎です。僕たちとやれると思います？」

「さあ、わかりません。やってみて様子を見ましょう、いいですか？」

この数日で少年たちを魅了したあらゆるもののなかで、いまボールほどとてつもないものに見えたものはなかった。やわらかく、すべすべして、完璧な球形。彼らはボールをなでまわし、においを嗅ぎ、味を確かめようとなめ、鼻や足の上にバランスよくのせて、マカパの選手たちのあいだに何度も笑いを起こさせた。

「どうしたんです？」とアシスタントがおもしろそうにアントニオにささやいた。「生まれて一度もボールを見たことがないみたいだ」

「秘密をひとつ教えましょうか？」とアントニオもささやき返した。「ええ、ボールを見るのは初めてなんです」

アシスタントは冗談だと思って、軽くアントニオを肘でつついた。アントニオはそうではないと信じさせようとは何もしなかった。かわりに少年たちのところへ行き、いくつか説明しはじめた。そのあいだにマカパの選手たちはチーム分けをしていて、五人ほどの一団が、アントニオと見知らぬ若者たちのほうへおずおずと近づいてきた。

その五人がいっしょにプレーするのだとアントニオが少年たちに告げたとたん、激しい抗議が巻き起こった。「僕たちは僕たちだ！」とモアシルがまくしたてた。「あいつらとはやれないよ、僕たちのことがわからないんだから！」とウビラタンが追い打ちをかけ、次々に続いた。

アントニオはまたアシスタントのところへ戻らざるをえなかった。アシスタントはそのとき、監督らしい男と話していた。「すみません、本当に、こんな面倒をおかけするつもりはなかったんです。私も監督でして……いや、監督だったんですが、こういう状況がどれだけ厄介かはよくわかっています。とにかく、うちの子たちは、もしよければ自分たちだけでやりたいそうなんです」

「何人です？　六人？　あなたを入れて七人？　なんなら七対七でやりましょう」

「ええ、はい、ありがとうございます、本当にありがとうございます。十分だけやって失礼します、いいですか？　プレーするってどういうことか、わからせるために」

「え、じゃあ一度もやったことがないんですか？」と監督が尋ねた。

「いえ、やったことはあります。その、いま私が言ったことは忘れてください、いいですか？」

「もうひとつ」と監督が言った。四十がらみの、ごま塩頭の男だった。「スパイクはないんですか？」

「ええ、この子たちは裸足でやるんです」

「じゃあ僕たちも！」とアシスタントが笑いながら言った。あっというまに、おもしろがっているマカパの選手たちも含めて、全員が裸足でピッチに並んだ。

キックオフは客に譲られ、アントニオは、最初のパスの規則がどういうものかをきちんとみんなに思い出させておいた。「前へだぞ、いいな」

ウビラタンがボールをカウエにちょんと触れると、カウエは頭を低くし、ゼロンでは誰も見たことのない動物的な確信を目に浮かべて、まっすぐゴールへダッシュした。相手ゴールから三十メートルほどのところで、とてつもない力のシュートを放ったが、ボールは高く、ずっと高く上がった。ボールは止まる気がないかのように、クロスバーを越え、工事がついに完成しなかった陸上トラックを越え、フェンスの網を越え、地区の最初の家々まで越えていった。

マカパの選手たちはどっと笑ったが、なかには、そのキックに込められた力の大きさに、少なくとも心のなかでは、ぎょっとせずにいられない者もいた。アントニオはカウエのもとへ駆けつけ、このボールと森で使っている葉っぱのボールとのちがいを説明しようとした。カウエの目は火花を散らしていて、彼は歯をくいしばって答えた。「わかった、わかったよ」

別のボールで試合は再開されたが、それも一度ではすまなかった。インディオたちの足はひどく速く、いつも先にボールにたどりついたが、最後のシュートはいつも強烈すぎて遠くへ飛んでいき、しばしばスタジアムの外まで出てしまった。

「もっと低く」とアントニオは、「もっと弱く」と言うのをこらえて、笑顔と肩を叩くことで場の空気を和らげようとしながら、それだけ言った。数分すると、マカパの選手たちの笑いはやんでいた。シュートのひとつもキーパーを脅かさなかったとはいえ、その少年たちの体と技の優位は、小柄な体格にもかかわらず明らかだったし、このボールに対するぎこちなさも一分ごとに薄れていった。

八分たつと、監督が、センターサークルでまたしてもボールを失った選手のひとりに、最初の怒声を浴びせた。マカパは事実上、まだハーフウェーラインを越えられずにいた。二度ほどロングボールを放りこんだが、それもゴールラインを割ってむだになった。

インディオたちのパスは放物線を描かなかった。彼らのボールは弾丸のようにまっすぐ飛び、見たこともない激しさで蹴られ、彼らのプレーにはまったく飾りがなかった。守備では純粋な攻撃性、攻撃ではすばやいフィニッシュ。

九分、マカパの守備ゾーンでスローインがおこなわれた。カウエはボールを受けようとしている選手から少なくとも十メートル離れていたが、その速さはすさまじく、十メートルはひと飛びで詰められた。ボールを奪うと、彼らはすばやくパスを回しあい、やがてジャシが目の端でウビラタンのダッシュをとらえ、ピッチを高速で横切る中くらいの高さのパスで、ミリ単位の正確さで彼を見つけた。ウビラタンはためらわずにボールをダイレクトで蹴り、今度は完璧にキックを制御した。ボールは止めようもなく右上隅に突き刺さり、出遅れて飛んだキーパーは、自分の飛びこみがむだだったと悟るや、思わず悪態をついていた。

「毒矢」とアントニオは、彼らがやってのけた型の名を口にして、ひとりでほほえんだ。その攻撃性とスピードには慣れていたが、本職の選手たちと比べると、まったく圧倒的だった。差があまりに大きいので、マカパの若者たちは止まっているように見えた。

「ゴール！」と少年たちはいっしょに叫んだ。「ゴール！」そして抱きあい、前の日にテレビで見たサッカー選手の喜び方をぎこちなくまねて、両腕を空へ上げた。

少年たちがまだその身ぶりをやっているうちに、アシスタントは十分間の終わりを告げる笛を吹くことにした。アントニオは耳まで裂けそうな笑顔で近づき、試合は終わった、君たちの勝ちだと告げて、喜びの爆発を引き起こした。今度は彼らなりのやり方で、勝利の歌と踊りで。そのあいだにマカパの選手たちはこそこそと監督のほうへ向かっていき、監督はもう彼らを叱りつけていた。「恥を知れ！　2013年のチャンピオンが！　恥を知れ！」

アントニオは、もう見るからにばつが悪そうにしながらも大喜びで、自分の選手たちのお祭り騒ぎを止めに行き、全員を惜しみなくほめた。監督のアシスタントが、呆然としながらもまだ陽気な様子でやってきて、アントニオをほめた。

「こんなのは見たことがない」と彼は言った。「見たことがないですよ」

「ありがとうございます。お名前は？」

「カルロスです、あなたは？」

「アントニオです。おほめのことばをありがとう、カルロス、でも実際、運もずいぶんよかったんです」

「運だなんてとんでもない、この子たちはすごいですよ！　アントニオとおっしゃいました？　アントニオという人を知っていましたけど、何年も前のことで……とにかく、連絡をとりあいたいので番号をいただけますか？」

「番号？」とアントニオは、電話のことだとすぐにはわからずに尋ねた。「番号は持っていないんです」

カルロスは問いかけるような顔で彼を見て、それから少年たちを見た。「まったく変わってますね、あなたがたは。正直に言ってください、アントニオ、この子たちはインディオなんでしょう？　本当にインディオって意味です、森から来たんでしょう？」

アントニオは答える前にあたりを見まわした。芝生、スタンド、一時を指している大きな時計のついたスコアボード。ヤマンデ！

「ええ、カルロス、私たちはインディオです、でももう行かなきゃならないんです」

それから彼らのことばで。「みんな、急げ、ヤマンデのところへ行かなきゃ、急げ、急げ！」

私たち？　とカルロスは、走り去っていく彼らを見ながら思った。

3.13 ゲームの見方

科長の怒鳴り声が廊下の奥から聞こえていた。彼の診察室は読みにくい札のかかったドアの奥にあって、アントニオはそのドアが開いているのを一度も見たことがなかった。

一行が行くと、ヤマンデはベッドに座ってリンゴを食べていて、ようやく彼の笑顔が見られたのはうれしかった。きびきびした看護師が、先生が少し前に診察して、もうすぐリハビリを始められると判断したと言ったので、アントニオは喜んで医者と話そうと廊下へ飛びだしていった。

そのあいだに少年たちはもう、サッカー場のことや、ボールのことや、ゴールのことを、あの風変わりな話し方と身ぶりで友だちに語りはじめていて、ほかの患者たちや見舞い客たちをおもしろがらせていた。何ひとつわからなかったが、それでも見ものだったのだ。

科長の怒鳴り声はおさまらなかった。アントニオはもう二度ドアをノックしてみたが返事はなく、医者が落ちついて話せるようになるのを待ちながら、じれったそうにヤマンデの病室のドアの前へ戻ってきていた。

少年たちはマカパとの試合を、あふれんばかりに細かく語っていた。その十分間のプレーのあいだに、ひとりひとりがおどろくほどたくさんの情報を集めていて、それをいまヤマンデになだれのように浴びせていた。相手や監督たちがどんな服装だったか、ボールごとのちがい、スタンドのどこの席が欠けていたか、陸上トラックの改修に使われるはずだった、放置された土の山がどこにあったかまで気づいていた。だが何よりも、相手全員の位置を一瞬一瞬覚えていた。

「僕がジャシにパスを出したとき」とカウエが話していた。「髪がすごく短くて黄色いシャツのやつはハーフウェーラインから三歩のところにいて、背が高くて黒いやつは僕の前、十歩のところにいて、いつも笑ってたやつはピライのほうへゆっくり走ってたけど、ふたりのあいだにはすごく空きがあって……」

「それにキーパーは少し右に寄ってた、もう打てたじゃないか！」とイタウナが口をはさんだ。

「うん、もう打てた、でもボールを通すすきまは半歩もなかったし、あんなに軽いボールじゃまちがえるかもしれなかった、だからジャシにパスしたんだ」

「こわがるのはよくない」とモアシルが締めくくって、カウエを黙らせた。カウエは何と答えていいかわからずにうつむいた。

だがもうウビラタンが別の場面を語りはじめていて、彼もまた、味方と相手の位置と動く方向を、信じがたいほどの正確さで記憶していた。

アントニオは、少年たちのこの資質をよく知っていたのでうなずいた。その日まで、彼らのこの才能がなぜなのか考えたことは一度もなかった。ごくふつうのことに思えていたのだ。だがマカパの現実にまたどっぷり浸かったいま、それがどれほど特別なものかがわかった。狩人だからだろうか？　森が彼らをこんなふうにしたにちがいない、と彼は結論づけた。

ヤマンデの脚は、肉から突き出た金属の支柱の網に閉じこめられていて、ひどく痛々しく見えたが、本人はたいして痛くないと言い、ときどき顔をしかめるほかは、上機嫌がそれを裏づけているようだった。彼はありとあらゆる質問をしながら話を追い、友だちの身ぶ

りにもできるかぎり加わっていた。こいつも全部記憶してるんだ、とアントニオは悟った。頭のなかで試合をまるごと組み立てなおしてるんだ。

アントニオの考えを裏づけるかのように、ヤマンデが尋ねた。「ウビラタン！　どうしてカウエにパスしなかったんだ？」ウビラタンは、相手の角度や走る方向からなる長い、信じがたい説明をさせられ、その最後に全員が、ウビラタンの選んだ解決策、シュートが最善の選択肢だったと納得した。

アントニオは科長にもう一度当たってみることにして、また怒鳴り声のまだやまないドアに近づいた。心ならずも、医者の言っていることを聞いてしまった。あの声の大きさでは、聞かずにいるのは無理だった。

「ワールドカップ！　ワールドカップなんかくそくらえだ！　ここじゃ患者が感染症にかかったら、ほとんど死んだも同然なんだぞ、ワールドカップどころじゃない！　見ろ！　あのスタジアムにどれだけ金を使ったか見てみろ！　そのドルで病院がいくつ建ったか知りたいか？　知りたくないだろうな、だから教えてやる！　ワールドカップどころじゃない！」

アントニオの目が見開かれ、陽極酸化アルミのドアの向こうのどこかにある、遠い、定まらない一点を見つめた。1998年フランス、それから2002年、2006年、2010年……

「2014年だ！」と気がつくと彼は叫んでいた。「2014年だ！」

彼は廊下を駆け戻った。誰かに言わなければならなかったが、手近にいるのは少年たちだけだった。

「2014年だ！」

彼が病室に入ると全員が振り向き、アントニオは自分を落ちつかせようと努めた。ヤマンデの隣のベッドでは、若い男と、妻とふたりの娘らしい人たちが、彼が音と身ぶりにあふれたあのことばで、まさにこの年にサッカーのワールドカップがある、何か月か先に開かれるのだと少年たちに説明しているあいだ、ずっと彼を見つめていた。片腕にギプスをはめ、顔の片側が擦り傷だらけの若い男は、モアシルが笑いながら歌いだした「ポロポ、ポロポ！」に聞き覚えがあって、説明を求めるようにアントニオを見た。

「2014年」とアントニオは、まだ興奮の波に乗ったまま彼に言った。「サッカーのワールドカップがあるんです！」

若い男はほほえみ、できるかぎり人のよさそうな口調で言った。「この夏ブラジルでワールドカップがあるのを知らなかったのは、世界じゅうであなたがたくらいでしょうね！」

アントニオはその知らせを飲みこむのに少し時間がかかった。もうすぐワールドカップがあるだけじゃない、それがブラジルで開かれるんだ。心臓が速く打ちはじめ、初めてジャガーを見たときのように、首筋の毛が逆立った。

まわりの誰もが、彼に何か起きたことに気づいた。腕を折った若い男は喉の奥で音を立て、ヤマンデも同じ音を立てたが、それは脚がずきりと痛んだせいかもしれなかった。カウエが近づいてきて尋ねた。「アントニオ？」

「みんな」と彼は考えをまとめようとした。「ワールドカップが……」彼らにとっては何も変わらないのだと気づいた。「ブラジルであるんだ！」

彼らにとっては何も変わらなかった。彼らにとって「ブラジル」は、このところ有無を言わさず受け入れなければならなかったたくさんの考えと同じ、抽象的な考えだった。ヤマンデだけが少し考えて、それから尋ねた。「僕たちはブラジルの者だよね？」

「そうだよ、ヤマンデ、僕たちはブラジル人だ」

「それってつまり……」と少年は少し考えた。「僕たちもワールドカップでプレーできるってこと？」

「いや、ヤマンデ、プレーするのはいちばんうまい人たちだ」

アントニオがほほえむと、カウエが言った。「フォゲッチみたいな人たちのことだよ」

「そう」とアントニオは認めた。「フォゲッチみたいな人たちだ」

3.14 ニュース

ジャニータが泣いていた。アントニオがまず思ったのは、ヤマンデだ、ということだった。ヤマンデに何かあったんだ。それから、ジャニータがテレビを見ているのに気づいて、すぐにほっとした。たぶんメロドラマか何かで泣いているのだろう。

「どうして泣いてるんだ、ジャニチーニャ？」

「ネルソン・マンデラが死んだから」

アントニオは、何年も何年も前のある日、チャイコフスキーの死の悲劇的ないきさつを読んだばかりのジャニータが、その死に泣いていたのを思い出した。

それもこの十四年のあいだに見逃した数々の歴史的な出来事のひとつなのだと思い、少し暇ができたらすぐに取り戻しにかかろうと思った。

「いつ亡くなったんだ？」と彼は尋ねた。

「三か月前」とジャニータは鼻をすすりながら答え、アントニオを驚かせた。「いま葬儀のドキュメンタリーをやってるの」

アントニオは黙って肘掛け椅子に腰をおろした。戻ってきてから初めて、自分がこの年月にどれほどとてつもない出来事を生きてきたのか、そしてそのあいだに世界がどれほど彼抜きで、彼を待たずに進んでいったのかを、本当に理解しはじめていた。インターネットにはきっと革新があっただろうと考え、誰もが手にしているらしい、どうやら電話をかけるよりずっと大事なことに使うらしい、あの未来的な見た目の電話を、まだじっくり見る暇もなかったことに気づいた。地元の政治や世界の地政学がどう変わったのか見当もつかないことは、よく自覚していた。

彼がそんなことを考えているあいだ、テレビはマディバに最後の別れを告げに来たさまざまな国家元首の列を映していた。「こちらはブラジルのシルヴィナ・メロ大統領……」とナレーションが言っていた。

女の大統領？　「ジャニータ、女の大統領がいるのか？」

「ええ」

なんとまあ。それからほかには、とアントニオは考えた。

テレビが、まるで彼の考えを読んだかのように、すばやく答えてくれた。「……そして、聴覚障害者のための手話通訳になりすましたこの男の事件が騒ぎを呼びました……」

「はっはっは、最高だ！」とアントニオは笑った。

「ここで彼は、アメリカのバラク・オバマ大統領のことばを手話に通訳するふりをしています」と画面の声が続けた。

「ジャニータ、聞きまちがいかな？　あれがアメリカの大統領？　黒人の？」

「そうよ、トニーニョ、あの人よ」

信じられない。いったい僕はどれだけ留守にしてたんだ、十四年か、それとも百四十年か？

アントニオの父親は昔から引っこみ思案な人で、年をとったいまでは、いっそう無口になっていた。一日の大半を居間の肘掛け椅子かベランダの椅子で過ごし、犬をなでたり、犬が中庭で遊ぶのを眺めたりしていた。彼が戻ってから、ふたりはほとんどことばを交わしておらず、まだ一対一で話す機会もなかった。ふたりは昔からスポーツの話をめったにしなかった。

イタロはマラカナンの悲劇の一年後に生まれ、アントニオはアステカの勝利の一年前に生まれていて、ばかげたことに思えても、そのことがふたりの関係に影を落としているようだった。

アントニオは歴史と政治を話の糸口にしようと心に決めていたが、気軽なおしゃべりの種にするには、もう知らなすぎることに気づいた。そこで父親の隣のベランダに腰をおろしながら、スポーツに飛びこむことにした。

「それで、父さん。ここブラジルでワールドカップがあるって知ったばかりだから、この何年かで僕が見逃したことを話してよ。ブラジルのスポーツの勝利は何かあった？　またしてもがっかり？」

「場合によるな、トニーニョ、場合による」イタロはしばらく考えこみ、それから提案した。「体操の話をしようか？」

「はは、いきなり基礎から始めるのかい、父さん？」

「いや、ブラジルのスポーツの勝利の話をしたいんだ」

「まさか？」

「本当だよ、トニーニョ。二年前にロンドンでオリンピックがあってな、初めて体操で金メダルをとったんだ、つり輪で」

「信じられない！」

「そうだろう。それに柔道でもうひとつとって、三つ目は……バレーボールだ！」

「バレーボール？！　本当に？　すごいや！　いつか僕たちが勝つって、ずっと言ってたんだ」

「女子バレーだけどな」

「ああ。そうか。で、男子バレーは？」

「銀だ」

「あーあ、惜しい！　まあ、少なくとも準決勝の呪いは破ったんだ。いつかきっと……」

「準決勝の呪いは、もうとっくに破ってるよ」

「どういうこと？　ねえ父さん、ニュースをペンチで引っぱりださせないでよ」

「2008年の北京でも銀をとった。でも2004年のアテネでは金をとったんだ」

「金？」

「ああ。でも何よりも……」

「何よりも？」

「最近の世界選手権を三回続けて勝ってるんだ。バレーボールはもう俺たちの土俵なんだよ、トニーニョ。それで、この勝利に導いた監督が誰か知ってるか？　ベルナルジーニョだ、お前が望んでいたとおりにな」と父親は、まるで贈りものでもしたかのようにうれしそうにほほえんだ。

仕上げに、ふたりはサッカーの話に移った。イタロは2002年のブラジルの勝利のこと、2006年のイタリアの優勝のことを話し、フランスのキャプテンの不名誉な退場について、ことこまかに語った。それからティキタカの台頭と、2010年のスペインの優勝のことを話した。

それから、何分か黙りこんだあと、アントニオがまだそのすべての情報を消化しているあいだに、イタロは深いため息をついて息子に言った。「お前が死んだとは一度も信じなかったよ、わかるか？」

彼は泣いていたが、声はいつものようにきっぱりしていた。

「……」

「なぜだかわかるか？　お前のじいさんが死ぬ少し前に言ったことを覚えてるか？　『アントニオといっしょにハッピーエンドを見られたから、しあわせに死ねる』。俺だって孫といっしょにハッピーエンドを見たいんだ、だからお前が先に逝ってしまったはずがなかった」

アントニオは目を見開いた。あの数日の混乱のなかで、考えなければならないことが千もあり、話さなければならないことが千もあり、見つけなおさなければならないことがさらに千もあって、いちばん大事な知らせを家族に伝えるのを、すっかり忘れていたのだ。ああ神さま、なんて恥ずかしい、どうしてそれを思いつかなかったんだ？

3.15 驚き

みんな食卓についていた。アントニオは両親とジャニータといっしょに座り、少年たちはシチューの皿とコカ・コーラの椀を手に、思い思いに散らばっていた。雨をたっぷりはらんだなまぬるい風が花柄のナイロンのカーテンを躍らせ、ラジオが後ろでおしゃべりを続けていた。母親とジャニータが、明日ヤマンデにカジュジーニョを持っていくか、またココナッツ菓子にするかで言いあっていたとき、彼は咳ばらいをして言った。「ええと、その、話しておきたいことがあって……いままでその機会がなかったんだけど……つまり、僕には息子がいるんだ」

「まあ大変！　アントニーニョ！　結婚したのね！」マルセラは、ナイフとフォークを取り落とし、感激で真っ赤になった頬に両手を当てて、もう少しでグラスをひっくり返すところだった。

「いや……その、そういうわけでもないんだけど、まあ……」

「ああ、どうしましょう、イエスさま、なんてうれしいの！　孫だわ！　すぐにアマンダに電話しなきゃ、おばさんになったって、子どもたちにいとこができたって言わなきゃ！」

彼女はそわそわと立ちあがり、ナプキンを飛ばして玄関と電話のほうへ駆けだしたが、途中で回れ右をして戻ってくると、ほてった顔をあおぎながら椅子にどさりと座りこんだ。「ああもう、気が遠くなりそう、死んだと思ってたら生きてて、おまけに結婚までしてたなんて！！！」

「母さん、別に本当に……」

「ねえ聞いた？　アントニオの赤ちゃんよ！　お祝いしなきゃ！　ジャニータ、あなたまたおばさんよ！　イタロ、ボトルを一本、いえ二本持ってきて、すぐにアマンダとノルミーニャおばさんに電話しなきゃ……それで名前は？　何歳なの？」

「いや、歳なんてものじゃない、まだちっちゃいんだ、まだ四つの月……四か月くらいだよ。イビラアタンっていうんだ」

「まあ、きれいな名前、ハチドリの名前みたい。で、奥さんの名前は？　きっときれいな人なんでしょうね！」

ジャニータは立ちあがって、笑いながら彼をぎゅっと抱きしめた。「すてき、アントニオ、ほんとにうれしい！　これで残ってるのは私だけね、急がなくちゃ！」

父親は、まだナイフとフォークを手にしたまま椅子にまっすぐ座って、ただ彼を見つめていた。耳まで裂けそうな笑顔で鼻をすすり、目はうるうると光っていた。少年たちは何もわかっていなかったが、何かを祝っていることだけはわかったので、彼らも笑い、拍手し、みんなを抱きしめた。そのあいだにウビラタンとピライが、声をそろえて手でテーブルを叩き、祭りの歌のものすごく速いリズムを刻んだ。

戸口に、まだナプキンを手にした隣の奥さんが顔を出した。「大丈夫？　何かあったの？」

「ジェノヴェファ、私たちまたおばあちゃんとおじいちゃんになったのよ！　うちのアントニオが孫をくれたの！　来て、来て、何か飲んでいって、お祝いしなきゃ、ロナウドと

子どもたちも呼んで、隣の中庭のメニャーレスさんにも言ってちょうだい、どんなに喜ぶかしら！」

アントニオは乾杯から乾杯へと渡り歩き――向こうの中庭の隣人たちまでやってきていた――そしてみんなに、いや、写真はないんだ、ビデオもない、いや何もない、と繰り返さなければならなかった。たぶん次のときには、次のときにはきっと、約束する、約束するよ。

「それで奥さんを向こうにひとりきりで置いてきたの？　連れてきて紹介してくれればよかったのに、ほんとにもう、なんて気がきかないんでしょう。そうだわ、贈りものを送らなきゃ、ジャニータ、買いに行かなきゃね。赤ちゃんには何か、奥さんにはイヤリング、ベッドジャケットもいいかしら。イタロ、明日にでもあの子に郵便貯金の通帳をつくってあげて、あら、アマンジーニャが来たわ、ジャニータ、電話してくれたのね、えらいわ！　子どもたち、おばさんといとこができたのよ、おじさんにキスしにいらっしゃい！　母さんのすてきなアントニオがパパになったのね！　それで、奥さんの名前は何だって言ったかしら？」

「その、別に正確には……ジャナイナ、ジャナイナっていうんだ」

「その人もいい名前ね。それで、どうやって知りあったの、結婚してどのくらい？　ああイエスさま、早く赤ちゃんに会いたいわ、おばあちゃんのちっちゃなハチドリちゃんに」

ノルミーニャおばさんは、お菓子の大きなお盆と、手編みの水色の小さな室内履きを一足持ってやってきて――ガブリエラがおなかにいたときに編んだのよ、とっておいたの、気を悪くしないでね？　おばさんからのささやかな贈りものよ――名づけ親には自分がなるのかと尋ねるガブリエリータといっしょに彼を抱きしめた。ガブリエリータは、フェイスブックに載せる写真が一枚もないのにひどくがっかりしていた。

アマンダは鼻をかみながら、すっかりうれしそうだった。「えらいわね、アントニオ、しかもまた男の子！　父さん、見た、うれしい？　でもアントニオ、ぜったいテレーザに電話しなきゃだめよ」

「テレーザ？　テレーザって誰だ？」

「何言ってるの、覚えてないの、あなたのリスナーよ、いつも電話してきた人。ほら、聞いて、いま放送中よ！」

「放送中？　どこで、どうやって？」

アマンダはボリュームを上げた。「そうなのよ、あの人がラジオを立てなおしたの、長い話で私もよくは知らないんだけど、とにかく全部あの人のおかげなの。料理のレシピと世界のニュースのすてきな番組をやってて、私たちいつも聞いてるのよ。ほら、聞いて、すごく上手でしょう、何言ってるのかさっぱりわからないの、ほんとに上手なんだから、聞いて！　それより電話して、いますぐ電話して！」

もう電話を手に押しつけられて、アントニオは笑った。こんなふうに電話線の向こう側にいるなんて、ほとんどめまいがしそうだった。

「もしもし？」

「テレーザ？」

「はい、こんばんは、ようこそ、どちらからおかけでい……でもこの声、この声なら千人のなかからでも、何千万人のなかからでもわかるわ……アントニオ？！」

「ああ、テレーザ、僕だよ、アントニオだ」

「まあ神さま、アントニオ、なんて感激！　生きてりゃまた会えるってほんとね！　死んだはずがないってわかってたのよアントニオ、死ぬはずがない、あんな声で。ああもうリスナーのみなさんには想像もつかないでしょう、ほら感激から立ちなおるためにすてきな歌をかけるわね、みなさん、みなさん、バーブラ・ゲイナーで『アイ・ウィル・サヴァイヴ』」

3.16 ガゼータ

マルセラがふきんで手を拭きながら、息を切らしてやってきた。アントニオは、姉のアマンダが貸してくれて、なんとか電源を入れるのがやっとだった携帯電話の使い方を理解しようとしていた。「アントニオ、アントニオ、電話に出て！　記者さんよ！　あなたに記者さんから！」

「記者って何の、母さん？　何の用だって？」

「知らないわ、なんとかのガゼータとか、ほら急いで、待たせちゃだめよ！」

アントニオは母親の興奮をまったく分かちあっていなかったし、本当のことを言えば、記者と話したい気分ではまるでなかった。だいたい何のために？　まあいい、何の用か聞いてみよう、でないと母さんにうるさく言われる。

「はい、もしもし？」

「アントニオさん！　お声が聞けてうれしいです！」

「すみません、どちらさまですか？」

「ジョゼ・ジェレミア・オピスポ・ジ・メルヴェーリョスと申します、でもどうぞジョゼと呼んでください！　ガゼータ・エスポルチーヴァ・ジ・アマパーの記者です、きっとご存じでしょう」

「いえ、知りません。でも実際、最近ちょっと世間から離れていたもので……」

「ハハハハハ！　ちょっと世間から離れていた！　十四年も世間から離れていたんでしょう、ねえアントニオさん！　おもしろい方だ！」

「あの、用事があるので、もしよければ……」

「もちろんです！　もちろんですとも、アントニオさん、さぞお忙しいでしょう！　五分だけいただきます、ちょっとしたインタビューですが、記事になったのを見たらびっくりしますよ！　五分で今年いちばんのインタビューにしてみせます、見ていてください、アントニオさん、見ていてください！」

「さあ、どうでしょう、よくわからないな……インタビューって何の話をするんです？　いや、それよりまず、誰が私の名前を教えたんですか？」

「いやあ、アントニオさん、記者は決して情報源を明かさないものです、誰だって知ってますよ！　今回はトラヴェルソ先生です、セニョーラ・ドス・アンジョスの、それが偶然にも僕のいとこでしてね！　自分のいとこなんて情報源のうちに入りませんよね？　それにどのみち、もう言っちゃいましたしね、ハハハ！」

「それで、いったい先生はあなたに何を話したんです？」

「ああ、全部ですよ、アントニオさん、全部！　あなたが十四年間森で行方不明になったあと、インディオの部族を連れて戻ってきて、そのひとりは怪我をしていて、全部話してくれました！」

「とんだおせっかいですね、そのトラヴェルソって人は」

「いやあ、いつも僕に最新の情報をくれるんですよ、いちばんおもしろい情報源のひとつでしてね、それにまあ、僕のいとこですから、いとこだってもう言いましたよね？　救急外来ではどれだけいろんなことが起きるか、ご存じないでしょう、とびきりの情報源ですよ、ほんとに！」

「そうですか、じゃあもう全部聞いたのなら、これで失礼しても……」

「いやいやアントニオさん、いやいや！　彼が話してくれたのはむきだしの事実ですが、それは骨にすぎません。肉は、アントニオさん、ジャーナリズムの肉は当事者の印象、その声なんです！　では、最初の質問です」

「でもインタビューを受けたいのかどうか自分でもわからないんです、少し考えたいので……」

「ハハハハハ！　インタビューを受けたくないですって！　本当に愉快な方だ、アントニオさん。世の中にインタビューを受けたくない人なんていますか？　さて、最初の質問でしたね。十四年ぶりに文明に戻ってきて、どんな気持ちでしたか？」

「何ですかその質問は？　さあ、わかりません、そんなこと、ひとことふたことで言えるものじゃ……」

「すばらしい。『わかりません。感じていることをことばにすることができません。心の底から深い衝撃を受けました。いつか、いま抱いているこの激しい感情をことばにできる日が来るかもしれません』。すばらしい。二つ目の質問です」

「そんなことは言ってません！　ばかな質問だと言ったんです、どうしてそんなことを聞けるんですか、ある人が……」

「二つ目の質問です。あなたが死んだと思っていたご家族と再会して、どんな気持ちでしたか？」

「あの、もう続ける必要はないと思います、家族への愛情は私的なことですから……」

「みごとだ、みごとです。『その瞬間の感動に、すっかり押し流されました。家族への限りない愛情が、あふれる川のように心からほとばしり、私は子どものように泣きじゃくりました』。完璧だ」

「失礼します。すみませんが、こんなインタビューは無意味です」

「終わりました、アントニオさん、終わりましたよ！　難しくなかったでしょう？　最後にひとつ、あのお連れの若い人たち、サッカーをするそうですね、あなたが指導してるんでしょう？　うまいそうじゃないですか、いい脚してるって！」

「それは誰から聞いたんです？　先生じゃないでしょう」

「ハハハハハ、いやいや、アントニオさん！　それはグラウンドの管理人から聞いたんです、これも明かしちゃいけない情報源なんですが、まあ、ひとつ明かしたら全部明かしたも同じですからね！　何かおもしろいことがあると、いつも知らせてくれるんですよ、選手同士のけんかとか、怪我とか、うわさ話とか……そのかわりに僕は、サンバチーム、ピラタス・ダ・バトゥカーダの練習の最前列の席を彼にあげるんです――踊り子さんたちに

ちょっとお熱でしてね、あのいたずら者は――僕は一銭もかからないんですよ、チームを仕切ってるのが僕のいとこでしてね、ほら、トラヴェルソ先生の奥さんですよ、先生は覚えてますよね、僕のいとこの？」

「あの、何の話をしているのかわかりません、失礼します」

「それで管理人が言うには、インディオの坊やたちがマカパにちょっとしたお灸をすえたそうじゃないですか、ハハハハハ！　大したもんだ！　やりますねえ！　というわけでアントニオさん、そのときどんな気持ちで……」

カチャッ。

アントニオはくたくたで、頭がくらくらしていた。まったく、何なんだこのばかは、もっと早く切ればよかった、俺もばかだ、何を書くつもりか知れたもんじゃない。幸い、こんなろくでもないガゼータなんか誰も読みやしないだろう。

少年たちはすっかり心を奪われていた。勝ったことよりも試合そのものに、自分たちとはちがう人たちとプレーしたことに、生まれて初めて知らない人たちとプレーしたことに。そしてピッチに、ゴールに、地面の線に、スタンドに夢中だった。彼らはあそこへまた行こうとアントニオにせがんだ。あの階段席の下で、あの照明の下で、子ザルの毛みたいにやわらかいあの芝の上で、もう一度プレーしてみたくてたまらなかったのだ。

アントニオのほうも、行きたい気持ちは彼らに負けなかった。そこである朝、管理人のところへ寄って、誰もいない時間にちょっとボールを蹴りに来てもいいかと尋ねた。邪魔はしたくない、たとえば空いている時間にでも。管理人のジョアキンは嫌な顔ひとつしなかった。両腕を広げ、歯の抜けた大きな笑顔を広げて、宣言した。「もちろんだとも！　邪魔だなんてとんでもない！　三時から五時まではいつも誰もいないから、好きなときに来な」

ちょうど四時だった。少年たちとアントニオはもう三十分も前から、雨もおかまいなしに、ずぶ濡れになって汗をかき、しあわせいっぱいでピッチを跳ねまわっていた。ボールをつき、走り、しょっちゅうあのすばらしい芝の上に寝ころんだ。アントニオ、こんなにきれいな芝は見たことがないよ、家に帰ったらシャボノのまわりに全部これを植えたいな、まわりじゅう、こんなふうにやわらかい緑の芝にするんだ。

そのときアントニオは、目の端で階段席に動くものをとらえて振り向いた。黄色い短パンをはいた巻き毛の小男が、挨拶がわりに両腕を振りながら、ぴょんぴょん跳ねるように降りてくるのが見えた。「アントニオさん！　ジョゼです、覚えてますか、ガゼータのジョゼ・オピスポです！」

「覚えてることは覚えてますが、ここで何をしてるんです？」

「管理人ですよ、アントニオさん！　すぐに知らせてくれたんです――知らせてくれって言っておいたんですよ。調査報道ですよ、アントニオさん、調査報道！――それで彼は特別リハーサルの席を手に入れたってわけです、踊り子さん全員が衣装をつけて、ぞくぞくするようなやつですよ、アントニオさん。それはそうと、ほんとにうまいですねこの子たち、なんて脚だ！」

「わからないな、インタビューはもう済んだでしょう、私に何の用です？」

「写真ですよ、アントニオさん、写真！　いまは映像の文明なんです、写真のない記事なんて何の価値もない！　すばらしいのが撮れましたよ、すごい特集になります、ほら、アップも一枚、こんなふうに」

「何をしてるんです、誰が写真を撮っていいと言ったんですか、帰ってください！」

「ほら、若い人たちも、そう、そう、そんなふうに、見てくださいよ、なんて写真映えするんだこのインディオの坊やたちは、いいね、そうそう、君もだ、すばらしい、すばらしい」

「みんな、何してるんだ、相手にするな！　あなたも出ていってください、ほら、出ていけ！」

「撮れました、撮れましたよ、オーケーです、すばらしい記事になりますよアントニオさん、見ていてください！」

そして、あっというまに彼は背を向け、カメラを手にしてバイバイと振りながら、もう階段席を跳ねるように駆けのぼっていた。

3.17 授業

前もって考えて、してやっておくべきだったのだ。そのちょっとした授業を、彼は結局、市場で、ジャシがメロンを取ってかわりに憤慨する売り手にコカ・コーラの王冠をふたつ差しだした果物と野菜の屋台の前で、少年たちにしなければならなくなった。彼らが悪いとも言えなかった。短パンとTシャツを買いに出かけて、アントニオが屋台の口ひげのアラブ人にかわりに紙幣を二枚渡し、それから魚屋にひとつかみの硬貨を渡して、マルセラ母さんのスープ用にいろいろな魚をひと袋もらうのを見ていたのだ。そういう物とひきかえには何か別のものを差しだすのだと理解したのは筋が通っていたし、ぴかぴかの王冠が釣りあった交換に思えたのも当然だった。

「なんでもかわりに渡していいわけじゃないんだ、かならずこれをかわりに渡さなきゃいけない、わかるか？　これはお金っていうんだ。何かほしいときに、これをかわりに渡すんだ」

「でもどうしてあの人たちはこれがほしいの？　あの小さい丸いのはきれいだし、ぴかぴかしてる、でもこっちのはみっともない、汚れてるし、いやな感じの男の絵が描いてある」

「ここではそういうふうになってるんだよ、ジャシ。メロンがほしかったら、あの人にこれをひとつ渡さなきゃならない。なんでもいいわけじゃない、でないと怒るんだ」

「わかった。あの人がこれを好きなら、それでいい。で、これはどこでとるの？」

「とるんじゃない、それに見合うことをしてもらうんだ。ポルトガル語では、稼ぐっていう。たとえば君がバナナをたくさん持ってるとする、それでここへ来ると、それがほしい人がかわりにこれをいくつかくれる。これを売るっていうんだ。そうしてもらったお金は君のものになって、それを使ってほかの人からほかの物をもらうことができる。これを買うっていうんだ」

「でもわかんない、僕がバナナをほしかったら、あの人にあれをひとつ渡さなきゃいけないの？」

「そうだ」

「でもあれをひとつ手に入れるには、別の人にバナナを渡さなきゃいけないの？」

「そう、まあ、だいたいね」

「じゃあどうして、バナナを渡してから別のバナナをもらうんじゃなくて、そのバナナを持ってちゃいけないの？」

ああイエスさま、商売を、経済を説明するのがこんなに難しいなんて誰が思っただろう。アントニオは子どものころにそれを覚えたときどうだったのか、まるで覚えていなかった。そんなはずはないとわかっていても、ずっと前から知っていたような気がした。彼は別のやり方を試してみた。

「じゃあ、こういうことにしよう。君がとても大きな穴を掘らなきゃならないか、大きな小屋を建てなきゃならないとして、ひとりではできない。だから手伝ってもらう、そうだろう？」少年たちはそろってうなずいた。「よし、じゃあ手伝ってくれた人たちに、お礼として、その人たちの仕事とひきかえに、このお金を少し渡すんだ、わかったか？」

「それでその人たちは、あの人のところへバナナをとりに行くの？」

「そう、バナナがほしければね」

「それで、僕が渡したこれを、かわりにあの人に渡すの？」

「そう、そうだよ、えらいぞ！！！」よし、やった、わかってくれた。

「じゃあどうして、僕がいきなりその人たちにバナナを渡しちゃいけないの、それがかわりにほしいものなら？　それに、どうしてその人たちは自分でバナナをとらないの？」

アントニオは頭を抱えた。なんてこった。

ときにはもどかしかったが、それに、少年たちがときどきぶつかる難しさに驚くわけにはいかないことは、よくわかっていた。彼自身にとっても、そこで生まれたにもかかわらず、その世界を本当に理解するのは決して簡単なことではなかったからだ。昔からくわしいつもりでいた多くのことも、いまでは手からすりぬけていって、案内役が必要なのは彼自身のほうだった。

現代世界の技術の新しい驚異に彼を手ほどきする役には、当然ながら一族の若い力が指名されていた。ガブリエリータは家のコンピューターの前で彼の隣に座った。画面が薄くて、彼の覚えているものよりずっと大きい、立派なコンピューターだった。

「何が見たいの、おじさん？」

「そうだな、インターネットをちょっと見てみよう。インターネットはまだあるんだろう？」とアントニオは冗談めかして言ったが、声にはどうしても隠しきれないかすかな不安がまじっていた。

「はは、おじさんたら。あるに決まってるでしょ」ガブリエリータは、アントニオの知らないアイコンをクリックしたが、そのあと見慣れたロゴが現れて、彼をひどくがっかりさせた。

「グーグル？！　まだグーグルを使ってるのか？」

「当たり前でしょ。みんなグーグルを使ってるよ。なんで？」

「いや、十四年前に僕も使ってたからさ、そのあいだに何か変わってるだろうと思ってたんだ。まあいい。ねえ、世界じゅうから歌をただでダウンロードできるあのソフトはまだあるのかい？」

「ビットトレント？　うん、あるよ、いつも使ってる」

「いや、別のやつだよ、でも名前がもう思い出せないな。ナッパーだったかな、そんなような名前だ」

「聞いたことない」

「そうか。でもそのビットトレン、歌を探してダウンロードするっていう仕組みなのか？」

「うーん、そうでもあるし、そうでもない。歌は見つけにくいの、たいていディスコグラフィーまるごとダウンロードするんだよ」

「つまり、君が……ええと……サンタナの曲をひとつ聴きたかったら、それを聴くためにディスコグラフィーを全部ダウンロードするのか？」

「ううん、一曲だけ聴くなら、たいていユーチューブを使う」

「何を使うって？」

勉強会はあまりうまくいっていなかった。グーグルを除けば、何もかも変わってしまったようだった。結局のところアントニオが予想し、望んでいたことだったが、予想するのと実際に目の前にするのとはまるで別のことだった。アントニオは少年たちよりも途方に暮れている気がした。少なくとも彼らにとっては何もかもゼロから覚えればいいことだったが、彼には、覚えているものを全部忘れなおさなければならないという重荷が加わっていた。

ガブリエリータは、フェイスブックやツイッターのような、大人が気に入りそうなものを説明しようとした。アントニオはうなずいていたが、本当はわかっていないのが見てとれた。話しているうちに、彼がウィキペディアのことを聞いたこともないのが明らかになった。

「ウィキペディアも知らないの？」

「ああ。知ってなきゃいけないのかな？」

「うそでしょ、おじさん、いったいどこで暮らして……」ガブリエリータは失言を言いきる前に笑って口をつぐんだが、アントニオは気にしたそぶりも見せず、もっと簡単な話に移った。

「あの音楽のサイトをもう一回見せてくれよ、ほら。それで、いま人気のあるものを何か聴かせてくれ」

ガブリエリータは「ナ・リーニャ・ド・テンポ」と「リーヴリ」を聴かせた。

「君が好きな音楽を聴かせてるのかい、それとも僕が好きそうだと思う音楽かい？」

「ええと……両方」とガブリエリータは外交的に答えた。

「それで、いまの世界的なスターは誰なんだい？　正直に言ってくれ」

アントニオはもっと具体的な質問をする勇気がなかった。とりわけ、好きだったバンドがどうなったかは聞きたくなかった。「聞いたことない」の長いリストに死者のリストがまじることになるのではないかと思い、そんなものを聞く気にはまるでなれなかった。

「うーん……どうかな、私はケイティ・ペリーとレディー・ガガがすごく好き」

「よし、何か聴かせてくれ」

アントニオは、正直なところ、姪の好みを分かちあえるとは言えなかったが、そのかわりに関連動画の列の使い方をすぐに覚え、ネットでいちばん見られている動画の探検に飛びこんだ。気に入ったものもあれば、大笑いしたものもあり、わからないものもあった。そ

れから、ある爆発の衝撃的な映像が彼の目を引いた。クリックしたとき、隣でガブリエリータが身をこわばらせたような気がした。何十秒かのあいだ、彼は何も言わずにその映像を見ていた。

「何だ、これは？　本当に起きたことなのか？」と彼は、声をつまらせて尋ねた。

「うん」と彼女は口をゆがめてささやいた。

アントニオは何秒かそのことを考え、それから言った。「いいかい、あの子たちにはぜったいに何も知らせちゃいけない。わかったね、ガブリエリータ？　どんな理由があっても」

だがガブリエリータは申しわけなさそうな顔で彼を見ていた。アントニオが振り向くと、数メートルうしろで、イタウナが画面を見ていた。ふたりは何秒か見つめあい、それから少年はひとことも言わずに背を向けて中庭へ戻っていった。

3.18 編集部

レチ・ノルチの編集部の小部屋は、人と、紙と、タブレットと携帯電話と、丸めた飴の包み紙と、迫ってくる締め切りと、退屈と苛立ちでごった返していた。

「さあ、みんな。さあ。今度の回はばあさんの尻みたいにたるんでる。さあ。新しいアイデアが要るんだ、ちょっとした活気、ちょっとした色が。何か生き生きしたもの、新鮮なものが。アルフォンソ、案は？」

「ワールドカップについて何か考えられるかもしれません、ちょっと横からの切り口で……」

「ワールドカップ。なんてこった。新鮮なものと言ってるのに、こいつはワールドカップを持ちだしてくる。まる一年ワールドカップの話をしてきて、少なくともあと一年はその話をするんだぞ。気づいてるのか、なあ、番組表にもうワールドカップの特集がふたつ入ってるのに気づいてるのか？　ひとつは各チームのユニフォーム――なんてこった――、もうひとつはうちの選手が試合と試合のあいだに何を食べるか――なんてこったの二乗だ――についてだ。だが、たとえ天才的なアイデアが浮かんだとしても――おまえらの顔を見てると怪しいもんだが――**いつもいつもワールドカップの話ばかりしてるわけにはいかないんだ。わかったか？**」

「はい、はい、もちろんです」

「よくわかりました、ボス」

「はい、とてもよくわかりました」

「けっこう。おまえ、アメリア、アイデアは？」

「ええと、例の浮気の話が……」

「今日はおまえら全員クビにしてやる。全員だ。エジプトのミイラより干からびてて役立たずだ。それともポルトガル語が話せないのは俺のほうか。**俺がポルトガル語を話せないって？**　俺は**新しい**ものと言ったんだ、ちくしょうめ。浮気の話なんかホメロスの時代にもう古かった。全員、クビにしてやる」

「あの……ありそうなのが……プレスレビューに……」

「さあ、エスメラルダ、ほら、遠慮しないでください。何があるって？」

エスメラルダが咳ばらいをすると、声はかぼそすぎる声からかぼそい声になった。「あの、その、プレスレビューに、地元の小さな新聞があって……それで、森で十四年過ごして戻ってきた男の話があるんです、サッカーをするインディオのチームといっしょに。その人は死んだと思われていて。それにその子たちはうまくて、親善試合でマカパに勝ったそうで……その」

「ふむ。気に入った。新しい、ちがう。その男、森のロビンソン・クルーソー、吹き矢とサッカーボール、素っ裸で体を塗ったインディオたち。おもしろい、カラフルだ、気に入った。えらいぞエスメラルジーニャ、きみを編集長にして、アルフォンソをきみのかわりに編集部の秘書にすべきだな。いや、もっといいのは階段掃除だ。今日のところは誰も

クビにならないのはエスメラルダのおかげだ、みんな礼を言え。それで、すぐにその男にインタビューしに行くぞ、ほら、その生き返った男、なんて名前だ？」

「アントニオ・カルロス・ロシャ・ジ・アウメイダです、ボス」とエスメラルダが言った。

ジョージは、それまでほとんど上の空で――コリント式の柱頭にほんのかすかに似た小さな絵を、ひどく込みいった飾りで埋めつくしていた――いきなりペンを取り落とした。

「アントニオ・ロシャ・ジ・アウメイダ？」と彼は仰天して叫んだ。「うそだろ、その人なら知ってます！」

「へえ？　どうして？」

「僕の体育の先生だったんです、ボス……まさか、死んだものとばかり思ってました！」

先生が行方不明になり、もう助からないとあきらめられたと知ったとき、少し泣いたことは言わなかった。たしかに十五歳の青二才だったが、いくら変人でも、ひとりの教師にあんなになついていたとは自分でも気づいていなかったのだ。「僕がインタビューしてもいいですか、ボス？　いいですか？」

「もちろんだ、たまには役に立て。知りあいならなおさらいい。もっと情熱、もっと色だ。すぐに電話しろ。それからマヌエルにビデオカメラを持たせて連れていけ、特集をつくるから、そのあいだにまとめの短い動画をサイトに載せておく。ちょっとおもしろい、短いやつ、数分でいい、でも新鮮で、ぴりっとしたやつだぞ、いいな。それから、いいか。色だ、たっぷり色をつけろ」

3.19 通り

色が多すぎる、とアントニオは考えていた。バスのなかで、ピンクの服を着た少し太めの十代の女の子と、どうやら彼をがっかりさせたらしいエルネスタとかいう女に向かってひとりでしゃべっている小男とのあいだに押しつぶされながら。

ランも、ヘリコニアも、木の実も、果物も、鳥も、目もくらむような色とりどりの筆づかいだったが、森の背景、本当の基本の色は緑だった。空気を、光を染めているかのような何百万もの緑の濃淡だった。向こうでは池かプールのエメラルド色の底にいるようだったが、ここでは、あらゆる赤と黄色、はげかけた壁の群青、Tシャツのアクリルの赤紫、車の赤や青、看板のオレンジや紫や電気のような水色のごたまぜが、彼の頭をくらくらさせた。何もかも色がありすぎて、でたらめに積みあげられたようで、色が騒音のようだった。

かつて自分のものだったこの町をひとりで歩きまわるには、まだかなり努力が要った。まだ方角がつかめず、何もかもがこみいって混乱していて、ほとんど読みとれない不協和音のように思えた。

少し前の席に座った三人の女の子がおしゃべりしていて、その笑い声は感じがよかったが、アントニオは、女の子がかわいいかどうかもう見分けられなくなっていることにすでに気づいていた。彼女たちの服を読み解くのに苦労した。いつもあまりにあけすけか、あまりにめかしこんでいるように見えて、しかもしばしばその両方だった。それに、いつもあまりに、あまりに服を着こみすぎていた。こんなに布でぐるぐる巻きになってたら、女がきれいかどうかなんてどうやってわかるんだ、まったく、どうなんだろう。

彼は座席で身をよじった。ズボンも、シャツも、靴も居心地が悪かった。縛られ、締めつけられ、押しこめられている気がして、いつも少し汚れて汗ばんでいるように思えた。町もまた、ますます汚れて暑苦しく思えた。覚えのない汚れだった。汚い水と古いペンキ、放っておかれたごみ、いい加減さ、疲れはてた尊厳がみすぼらしさに変わったもの、どこにでもある排気ガスと食べものと人のにおいでできた汚れ。

とはいえ、一日じゅう家に閉じこもって裸でのんびりしているわけにもいかなかった。少年たちでさえ、もうそうはしていなかった。毎朝みんなで出かけて、近所を用心深く、でもだんだん長く歩きまわり、異星を探検する者の集中した関心であらゆるものを観察していた。美容院のショーウインドーには、香りと驚きの、逆毛を立てたメッシュと巻き毛の、塗られた爪の、ひとつの世界がまるごと入っていた。そしてそのすぐ先には洗車場があって、上がっては下がり回転する青いブラシ、水、泡、宝石のようにぴかぴかになって出てくる車の輝き、その水しぶきのメリーゴーラウンドを動かしている太鼓腹の男のしゃがれた笑い声を楽しむのに、まる一時間足を止めずにいられるはずがなかった。それから八百屋。見たこともない果物や野菜が山と積まれ、誰がどんな木から摘んだのか知れないそれが、日なたでゆっくりとしおれていた。奇妙な、少しすえたにおいのする陰がグラスや瓶にきらめいているバールから流れてくる音楽。それから赤いハイヒールの女、追いかけっこをする二匹の犬、少年を乱暴に引っぱる陰気な警官、うなりをあげて一瞬で走り去る救急車。そして傘、何千年もの雨を生きてきた者にとっては目をみはる新しいものだった。カウエとウビラタンはひとりひとつずつほしがり、雨がまったく降っていないときでさえ手放さなかった。

いっぽうモアシルは、自転車にまたがった少年が走りぬけるのを見たとたん、世界じゅうの傘のことなどすっかり忘れてしまった。アントニオの古い自転車がまだ玄関ホールにあることがわかって、乗り方を覚えてもいいと許されたときには、うれしさのあまり泣きだ

さんばかりだった。ほこりっぽい日なたの中庭でのペダルの最初の練習は、ジャニータに任された。

彼が自転車でマカパを走りまわるのを考えると、アントニオはとても落ちついてはいられず、自転車熱が問題になる前に、ヤマンデが治ってみんなで森の平和へ帰れればいいと願っていた。もちろん、少年たちはおおむねとても用心深く、いまのところ道を渡るのはできるだけ少なくするようにしていた。アントニオにさえ、車は多すぎるし、いつも速すぎるように思えた。アナコンダやジャガーを相手にするのは別にして、歩道から降りて、あのうるさくて予測のつかない暴走車のなかへ飛びこむのは、まったく別の話だった。そのうえ自転車まで。

彼は少し緊張して窓の外を眺めた。いつも停留所がわからないのではないか、道をまちがえて、スーパーと路地とゲームセンターのあいだで迷ってしまうのではないかと不安だった。エルネスタの数々の罪についてのぶつぶつを聞きながら、あれだけ時間がたったいま、ジョージがどんな見た目になっているか想像しようとした。電話をくれたこと、会いたいと言ってくれたこと、彼が元気で生きていて町に戻ってきたと知ってとてもうれしいと言ってくれたことが、うれしかった。結局、教師として俺もそう悪くはなかったんだろう、こんなに時間がたっても、教え子が俺のことをまだ、それもこんなに慕って覚えていてくれるんだから。インタビューをしたいとか、少年たちのプレーを撮りたいとか、すばらしい提案があるとかいう話は、どうだろう、少し妙な気がする、何を考えているのやら、まあ様子を見よう。でも、ラジオ局で会うことにしたのはいい考えだった、テレーザがどんなことをやらかしたのか見たくてたまらない、ラジオを立てなおしたのがよりによってあの人だなんて誰が思っただろう、あの人、支離滅裂な電話の女王が。

3.20 ラジオ

少しくたびれたあの古い壁にまた会えるものと思っていたが、地区は明らかに格が上がっていて、ラジオ局の入った小さな建物はきれいなターコイズ色に塗られていた。その色が、二階の窓に貼られた四色刷りのしゃれたウインドーステッカーを引き立てていた。何だかわからないロゴと、黄色と黒の「ラジオ・ノヴァ・アミザージ」という文字。

入口の、黄色く塗られたドアの先には、籐の小さな肘掛け椅子とチンツのクッションを置いた小さな受付がしつらえてあった。コンピューターと、「編集部秘書」というかなりもったいぶった表示の前に座った巻き毛の小柄な女の子が、熱心にアントニオを迎えた。「ああ、はい、いらっしゃるってテレーザから聞いてます！　テレーザ！　テレーザ！」と彼女はガラスのドアに向かって金切り声をあげた。「例の方がいらしたわよ！」テレーザはすぐにやってきた。首にまだヘッドホンをかけていた。ストロベリーピンクのプラスチックのイヤリング、チェリー色の口紅、バナナ色のボブ。果物かごのようだった。ラジオの仕事は彼女にいい影響を与えたにちがいなかった。それは、スミレの香りの抱擁でアントニオを包みながら、本人がそう認めた。「アントニオ、ほんとにうれしい！　あなたのためにどれだけお祈りしたか、ノッサ・セニョーラ・ダ・コンセイサンにろうそくをどっさりともして、カンドンブレをやってるお隣さんに雌鶏を一羽お供えに渡しもしたのよ、だってわからないでしょ、関わってる神さまは多いほどいいもの、ほら効いたでしょ！　あなた助かったんだもの！　それにやっと会えてうれしいわ、しかもここ、ラジオ局で。このラジオのことが私をどんなに変えたか、どんなに目を覚まさせてくれたか、わからないでしょうね、ほら教養もつけなきゃいけないし、新しい情報にも通じてなきゃいけないし。それも全部あなたのおかげ、あなたの声のおかげよ、でも見てよなんていい男、わかってたわ、あの声だもの。もうちょっとたくましい人を想像してたけど、そうね、でもほんとに悪くないわ、私があと十歳若かったらねえ、ほんとに」

「おほめのことばはありがたいけど……」

「あはは、心配しないで、口説くつもりなんかないわよ、結婚してるのも知ってるもの、まさか」

「なんでそんなことを知ってるんだ？」

「だってあなたのお母さんが言ってたじゃない？　昨日時間の確認に電話したときにちょっとおしゃべりしたの、なんて感じのいい人なんでしょう。きれいな子と結婚して、すてきな赤ちゃんがいて、もうすぐふたり目にとりかかるころだって言ってたわ、おめでとう、お母さんすごく喜んでたわよ！」

「いや、まあ、正確にはそうじゃなくて……とにかく、それはいいよ。君のことを、ラジオのことを話してくれ、どうやって立てなおしたんだ？」

「ああ、長い話なのよ、ほんとに、あのセニョール・イナシオは気前がよかったわ、それは言っとかなきゃ。それにあの人、私たちがうまくいったのを見る暇もなかったの、警察と何かもめごとがあったんですって、私はよく知らないけど、ボゴタに住むことになったのよ、あの人の会社の支店がそこにあって、本人がいなきゃいけなかったんですって。グスタヴォのほうは、ほらあれよ、悪銭身につかずってやつ、刑務所にいるのよ、かわいそうに、いい子なんだけど育ちが悪くて、悪い仲間ね、こういうことってどうなるかわかるでしょ。それでそういうわけで私たちがラジオを立てなおしたの、わかる？」

アントニオにはさっぱりわからなかったが、テレーザの話をさえぎろうとしてもむだだと思った。彼女はそのあいだに彼をチンツのクッションに座らせて、アプリコット色の爪を

ひらひらさせながら、休みなくしゃべっていた。「それですごくうまくいってるのよ、知ってた？　私の番組はすごく聴かれてるの、レシピと政治、ほんとによく受けてるのよ。もちろん私はまだマダム・サムエラのところで働いてるけど――慣れた道を捨てて新しい道に行くとろくなことはない、って言うでしょ――でももう頭は洗ってないの、いまはカラーとブローをやってるのよ、でも一日じゅう自分の番組のことばっかり考えてるの、もう夢中なのよ、ほんとに。それに聴取率はすごくいいの、ルイーザなんかちょっとやきもちやいてるくらい」

「ルイーザ？」

「そうよ、友だちのルイーザ、覚えてるでしょ？　あの人はゴシップのコーナーをやってるの、いまはそう呼ぶのよ、もううわさ話じゃなくて、知ってるでしょ？　それで、あの人は歌手のことも有名人のことも、何を着てるか、誰とくっついて誰と別れたか、なんでも知ってて、なかなかいい番組をやってるの、ほんとに向いてるのよ。もちろん私の番組ほどは聴かれてないけど、近いのはジョアンだけね」

「ジョアンって誰だ、管理人の？」アントニオはますます面くらっていた。

「そうそう、あの人、あの人！　もちろん管理人は続けてるけど、九時には占星術の番組を、十時には恋の相談の番組をやってるの。どんなに上手か知らないでしょうね、涙が出るようなアドバイスをするのよ、あの人にアドバイスしてもらいたくて恋の悩みがほしくなるくらい。ぜったい星占いしてもらわなきゃだめよ、ほんとに、このアマゾンのことがどんな星の影響を持ってるかわかったもんじゃないわ」

「ああ、もちろん、楽しみだよ。とにかくおめでとう、本当にすごいよ。でもレシピと政治っていうのがよくわからないんだけど、いまは政治にくわしいのかい？　あのころはそんなふうには……」

「私が政治？　まさか、とんでもない！　料理は得意だし昔から好きだったでしょ――それに料理番組っていつだって人気があるのよ、ほんとに――でもちょっとポジショニングを広げなきゃって思ったの、おばあちゃんや主婦だけじゃなくて、だから政治を入れたのよ。でも簡単なのよ、知ってる？　ニュースのサイトをふたつみっつ見るの、インターネットのサイトよ、わかるでしょ、わかるに決まってるわね、インターネットを教えてくれたのはあなただもの、あなたの番組で、ああもう、ずいぶん昔のことみたい！　それで、見出しを読んでからググルに行ってキーワードを入れるの、ね？　キーワードを「レシピ」っていうことばといっしょに入れるのよ、たとえば、そうね、「イラク、レシピ」とか「ウクライナ、プーチン、レシピ」とか。それか、料理のレシピをもう考えてたらそれを入れて、それからキーワードを入れるの。「エビのモケッカ、オバマ、ケムトレイル」。いつも何かおもしろいのが出てくるのよ、ほんとに。ググルの使い方はパコが教えてくれたの、パコ覚えてるでしょ、音響係の？　ドイツ人と結婚してヨーロッパに住みに行ったのよ、ベルリンかアムステルダムか、ドイツのどこか別の町、いま思い出せないけど。シドニーだったかしら」

アントニオは、テレーザが手に持たせた甘すぎるフルーツジュースをもうひと口がんばって飲んだ。「そうか、よかったよ。あいつはずっとヨーロッパにあこがれてたから」

「そうそう、ほんとに、私もうれしいのよ、最初はどうやってあの人のかわりを見つけようか困ったけど、運よくサヴェリオが見つかったの、盲学校でピアノを教えてる人で、すごく上手なのよ、あとで紹介するわね、新しいロゴのアイデアはあの人がくれたの、気に入った？　私が描いたのよ」

「ふむ。すごくかわいいね、うん。ええと……オウムだね。くちばしに……熊手をくわえた？」

「あはは、ちがうわよ、オウムなんかじゃないわ、白鳥よ、地球儀の上で翼を広げた白鳥、くちばしには諸国民の平和のオリーブの小枝をくわえてるの。私の大好きなあのすてきな歌から思いついたのよ、ほら、『イマジン・オール・ザ・ピープル』、ポール・レノンの、わかる？」

「もちろん、もちろん。それにロゴは本当にかわいいよ」

「でしょ？　昔から絵は得意だったの。サヴェリオもそう言ってたわ、あの人は目が見えないんだけど、もちろん、でも私がよく説明したら、ほんとにかわいいって言ってくれたの。あら、見て、お友だちが来たわよ！　ふたりきりにしてあげる、話すことがいっぱいあるでしょうから、カフェジーニョでもいかが？」

3.21 ひとりひとり

アントニオは彼らを相変わらず「あの子たち」と呼んでいた。あの子たちがこれをした、あの子たちにはあれが要る、まるで区別のないひとつの体であるかのように。そして最初のころは、実際にほとんどそうだった。新しいものの多さにおびえ、それに押し流されないように、互いに身を寄せあって励ましあっていた。そのおかげで、彼らから目を離さず、森の外の暮らしの数々の危険から守るというアントニオの仕事も楽になっていた。

だが週がたち、彼らが新しい世界に慣れていくにつれて、しかも、ああ神さま、なんと速く慣れていったことか、ひとりひとりの個性がまた浮かびあがってきて、いつも全員をいっしょにしておくことはもうできなくなった。ぎこちなさも、警戒も、恐れも、日に日にほどけて、ますます大きなくつろぎと、その新しい世界を試してみたいという気持ちに変わっていった。アントニオは、もう彼らを見張っていられない、少なくとも見張るには家族の助けが要るという事実を受け入れるしかなかった。

モアシルとカウエは、また空港へ飛行機が離着陸するのを間近で見に行っていた。何日か前から熱を入れはじめた暇つぶしだった。アントニオは四回続けて行く気にはなれなかったが、ガブリエリータがいっしょに行くと申しでてくれた。どのみち少年たちは道を知っていると言っていたし、それに遠くもなかったので、さんざん言い聞かせたあとで、しかたなく行かせることにした。それでも彼にとっては、森にいたころ彼の語る現代の話に聞き入っていたあの熱意が、現実と向きあう試練に耐えたのを見るのはいつもうれしいことだった。

ジャシとイタウナは、ジャニータに連れられて、凍った王国が舞台のあのアニメ映画を見に行っていた。ことばのことは別にしても、彼らが冷たさという考えに触れた経験といえば、アントニオの家の冷蔵庫と、食べたアイスキャンディー――実を言えば、かなりの数――だけだということを考えると、何がわかるのやら知れなかった。

アントニオは、九月十一日の映像を見ているところをイタウナに見られた日、ひどくおびえたのを覚えていた。何が起きたのかイタウナにわかるとは思わなかったが、念のために少年たちに「映画」という考えについての授業をしておいた。人は演じるのが好きで、ありとあらゆる話や奇妙な出来事を、ときには悲しいものも、画面に撮るのが好きなのだが、それはまったく本当のことではないんだ、いやいや、本当のことなんて何ひとつないんだ、ほら見てごらん、この映画ではこの俳優が死ぬけど、次の映画ではまたぴんぴんしてる。ことばの壁のせいもあって、みんながみんな興味を示したわけではなかったが、ジャシとイタウナは熱心な映画好きであることがわかり、アニメ映画を次から次へとむさぼるように見はじめた。アントニオに異存はなかった、それどころか。結局、いい話で、ためになって、わかりやすくて、血なまぐさくない。五歳の子どもみたいに扱っている気がしても、それはしかたない。

いっぽうで、映画の好みは別として、彼らがまったく子どもなどではないことはよくわかっていた。二十歳かそこらの若者だったし、それに森では成人の儀式のあとは、あらゆる意味で一人前の男とみなされていた。こちらでは事情が少しちがっていた。この別の世界では、四十歳まで若者とみなされる。その年の彼自身がマルセラ母さんにそう呼ばれていることがその証拠だった（いきなり「坊や」と呼ばれることさえあった、少し場ちがいだが、母親というのはそういうものだ）。そしてマルセラといえば、いまごろ、市場での買いものの秘訣を覚えるのについていったピライと、何をやらかしているのやら。

僕の子たちが大きくなっていく、とアントニオは思った。そして少しさびしくなって、そのせいで自分自身と、自分の考えている妙なことを笑ってしまった。そのとき目を上げると、ウビラタンがビールを二本手にしてベランダに出てきて、彼の隣に座った。しばらく

ふたりは黙ったまま、ビールをすすりながら鉄柵の向こうの通りを眺めていた。先に沈黙を破ったのはウビラタンだった。

「あのさ、村を出たとき、ヤマンデが助かるかどうか自信がなかったんだ。変なんだ。どう言えばいいかわからないけど、あんたのことばは信じてたのに、それでも変な気がした。変すぎた。なのにあんたはやってのけた。まだお礼を言ってなかった」

「お礼なんか言わなくていい。僕ひとりで助けたんじゃない。みんなで助けたんだ。それにとんでもない冒険だったな。滝をぎりぎりでよけられたときのこと、覚えてるか？」

「うん」ウビラタンは二秒ほど笑ったが、はっきりとしたさびしさがすぐにまた彼の顔を曇らせた。「ここはいいところだし、みんなとても親切だ。すごく助けてくれてる。そうしなきゃいけないわけでもないのに」

「君たちだって、僕を見つけたとき、僕を助けて面倒をみなきゃいけないわけじゃなかった。村じゅうが、ずっと前から仲間だったみたいに僕を迎えてくれた。君たちに同じことをするのは、僕の家族にとっては当たり前のことなんだ」

「あんたの家族、そうだね。あのさ、アントニオ、村にいたときは考えたこともなかった。あんたが来たとき僕たちは子どもだったから、あんたがいなかったころのことはほとんど覚えてない。僕にとって、あんたはずっと部族のひとりだった。でもいま、あんたの家族を見てると、家族がここにいるとわかっていて、あんなに長いあいだ村でどうやって耐えられたんだろうって思うんだ」

「まあね。簡単じゃなかった。とくに最初のうちは、君たちのことばも話せなかったしね。でも助けてくれたのはほかでもない君たち子どもで、いくら感謝しても足りない。それにさ、息子はいつか出ていくものなんだ。家が恋しかったけど、君たちのおかげで元気に暮らしつづけられた。僕自身のことより、母さんと父さんのことがつらかった。いちばん苦しむのは残される人たちなんだ」

アントニオは、痛いところに触れてしまったことに気づいた。「まさにその」痛いところに。彼は急いでとりつくろった。「でも心配するな、ウビラタン。あのときの僕の立場と、いまの僕たちの立場はまるでちがう。残される人たちがいちばん苦しむのは、知らないときなんだ。大事な人に何が起きたのか知らない、帰ってくるのかどうかも知らない。僕たちの妻は、僕たちに何が起きたかを知ってるし、どうして出てきたのかも知ってるし、僕たちが帰ることも知ってる。それに君の息子はまだ小さすぎて何が起きてるかわからない、きっと向こうでイビラアタンの相手をしてるさ」

よくあるように、継ぎはぎは穴よりたちが悪かった。

「あんた、僕がさびしい理由を全部言っちゃったよ、わかってる？　キネラタンにはすごく会いたいけど、あの子はもう僕のことを忘れちゃったかもしれない。それにアミアジェは、僕がどうして出ていったかは知ってても、僕に何が起きたかは知らない。僕たちが正しい道を見つけたかどうかも、僕たちがまだ生きてるかどうかも知らないし、生きのびなきゃならない滝があったことさえ知らない、でもきっともっとひどい危険を想像してたと思う。それにヤマンデを助けられたかどうかも知らないし、僕たちがいつ帰るのか、帰るのかどうかも知らない。誰も知らないんだ。僕たち、いつ帰るの、アントニオ？」

「ヤマンデはうまく治ってきてるけど、もう少し時間が要るって医者たちが言ってた、少なくともひと月はね、それから家に帰ろう。もうあまり先のことじゃない。それに待っててくれた人たちにとっては、みんなが無事に、話すことをどっさり抱えて帰ってくるのを見るのは、なおさらうれしいだろう」とアントニオはほほえんだ。

ふたりはまた通りの行き来を眺めはじめた。このおしゃべりはふたりのどちらにもよかった。二本目のビールは、ここで過ごす日々のたくさんのおかしなことを中心にした、もっと陽気な会話のお供になった。その裏にある意味はこうだった。そう、森が恋しい、でも結局のところ、これは一生忘れないすばらしい冒険なんだ。

最初に帰ってきたのはマルセラとピライだった。ふたりとも顔を曇らせ、口をきいていなかった。ことばが通じないままふたつの別々のことばで話すふたりを言いあらわすには奇妙な表現だったが、それでも料理の時間のふたりはふだん、どちらも一瞬も黙らず、まるで母と息子のようだったのに、いまはほとんど互いを無視していた。アントニオには、母親が芋虫だのゲテモノだのとつぶやくのが聞こえたような気がしたが、ふたりの顔を見て、アントニオもウビラタンも、明らかなけんかの理由をくわしく尋ねるのはやめておくことにした。

少しして、ジャシとイタウナも帰ってきた。そのあとから、ひっきりなしにしゃべるジャニータがついてきた。ふたりは明らかに動揺していて、何も言わずに急いで家に入っていった。あの子たちも取り乱してる、とアントニオは思った。アニメを見てきたばかりのふたりの顔ではまったくなかった。氷や雪という考えがふたりにはなじみがないのはたしかだったが、それであんなふうになるはずがなかった。「ジャニータ！　何があったんだ？　『アナと雪の女王』を見に行ったんじゃないのか？」

「そうよ、すごく楽しんでたわ。画面にあのとってもおかしな雪だるまが出てくるたびに、ふたりがどんなに笑ってたか見せたかった。ほんとに楽しかったのよ」

「……楽しい午後を過ごしてきたようには見えないぞ。そのあと何があったんだ？」

「ああ、あれね、そう。ええと、アイスクリームを食べに連れていこうと思ったんだけど、出たとたんに、あのもうひとつの映画のポスターを見ちゃったのよ、胸板の厚いすてきなギリシャの戦士たちが出てくる、『300』のスパルタ兵の。すごく興味を持って、見たいって伝えてきたの」

「ジャニータ、言っておいただろう……」

「戦争映画だし、ことばがわからなくても話についていくのは難しくないだろうって思ったのよ。アニメばっかりもういいでしょ、子どもじゃないんだから」

「ジャニータ……」

「ただ、ちょっと暴力的すぎる映画だったの、私はずっと『映画、映画』って言ってたんだけど、ふたりはちょっと動揺しちゃって、三十分で出たいって。ごめんね、アントニオ」

ちょっと動揺したどころじゃない、とアントニオは思った。滝に立ち向かったときだって、あんな顔は見たことがない。だがジャニータがもう自分でじゅうぶん申しわけなく思っていて、傷口に塩を塗るような場合ではないとわかった。「いや、まあいいよ。気にするな、そのうちおさまるさ。連れていってくれてありがとう、ちょっとでも落ちつかせられるか見てくるよ」

アントニオは立ちあがり、ウビラタンについてくるよう合図した。そのとき、鉄柵の向こうに、モアシルとカウエとガブリエリータが、いつも空港から帰ってくる方向とはまったくちがう方向からやってくるのが見えた。

カウエは顔に凶暴な表情を浮かべていた。これも初めて見る顔だった。モアシルも見るからに同じような気持ちにとらわれていたが、それを表に出さないのがうまかった。ガブリエリータはうなだれてふたりのあとについてきて、ときどき目を上げて、ちらりとどちらかを見た。アントニオには、その目に感謝と申しわけなさがまじっているように見えた。もっと近づいてくると、カウエのTシャツが破れていて、ふたりともかなり泥だらけなのにアントニオは気づいた。それにひょっとして、カウエの頬のあれはあざか？　モアシルのこぶしは、前からあんなにすりむけていたか？

アントニオはまた、あまりすぐれてはいない推理力を働かせなければならなかった。どうやらこの一団も、あまり話したがっていないようだったからだ。カウエとモアシルが殴りあいをしたなんてことがあるだろうか？　カウエとガブリエリータは挨拶もせずにまっすぐ家に入っていった。モアシルは一瞬立ちどまり、アントニオの肩に手を置いて言った。「あの子は大丈夫だよ、心配しないで。僕たちもね。あっちのやつらは、ちょっと大丈夫じゃないけど」そして仲間のあとについていった。

アントニオとウビラタンはあっけにとられて顔を見あわせた。アントニオは思った。まったく、僕たち、いつ帰るんだ？

3.22 提案

「さあみんな、ボールを取ってきて、がんばるんだ、もうすぐ僕の友だちがテレビのために君たちを撮りに来るからな」

「撮るって何？」

「どのテレビ？　画面のなかにいるあれ？」

「ええと、撮るっていうのは……そうだな、写真みたいなものだ、写真を撮ってもらったときのことを覚えてるだろう？　それで、撮るっていうのはそういうものなんだけど、動く写真で、画面に入れるためのものなんだ、そう、そうすればみんなが見られる」

「じゃあ、僕たちの写真を、テレビを見るときみたいに画面でみんなが見るの？」

「そう、まさにそういうことだ」

「ちっちゃくなって画面に映る自分を見るの、すごく楽しみだな」

「どうせ画面のおまえなんか誰も見ないよ、みんな僕を見るさ、僕のほうがかっこいいから」

「でも僕のほうがうまい」

「でも僕のほうが足が速い」

「みんな、さあ、遊んでこい。画面のことはあとで考えよう」

そう、画面のことはあとで考えよう。だが本当は、画面のことはすぐに考えなければならなかった。ジョージは本当に心がこもっていて感じがよく、インタビューは楽しくて頭のいいものだった――あの巻き毛のばかのとはちがって――が、どうやら視聴者にはこの件がとてもおもしろく思えたらしく、ジョージはまた電話してきて、少年たちを中心にした特集を提案してきた。少年たちがプレーする映像をたくさん入れて、ちょうどその日、ジョージがカメラマンを連れて着いたらすぐに撮ることになっていた。それはもちろん、まったくかまわなかった。

だがそのあとジョージが言ったことは、よく考えなければならないことだった。それも、いま考えなきゃな、おい、ジョージは今日返事をほしがる可能性が大いにあるのに、俺はまだわからない、決められないんだ。アントニオは、考えこみながらぼんやりと右足と左足のあいだでボールを転がしていた。そのあいだ少年たちは、少なくとも六つか七つのボールを奪いあって、ピッチを行ったり来たりしながら騒いでいた。

彼を迷わせているのは、ジョージがしてきた提案だった。どうやらジョージの働いているテレビ局は、彼らに大いに興味を持っているらしかった。視聴率が少し下がっていて、何か新しいものが――新鮮なものが、とジョージは言っていた――必要だった。そこで、地域を回る試合のツアーを組もうと申しでてきたのだ。六つか七つの町、地域レベルのチーム、遠征と費用はすべて局持ちで、出場料も出す、そのかわりに放映権をもらう。それに加えて少年たち全員にスポーツウェア――もちろん局のロゴ入り――が、靴も含めて支給される。そう、靴だけでもう厄介なことになりそうだった。少年たちはずっと裸足でプレーしてきたし、アントニオは、彼らがやり方を変えるのをまったく喜ばないだろうと確信していた。だが、靴をはいた相手に裸足でプレーさせるなど考えられないのもたしか

で、どう解決すればいいのか見当もつかない問題だった。それに気がかりはそれだけではまったくなかった。あの大型バスの数々、遠征、ちがう町、ホテル、大勢の知らない人たち、遊びのためではなく、その時点ではある種の義務になるからプレーするということ、どれも少年たちがどう受けとめるかわからないことばかりだった。

いっぽうで、それが彼らにとって、新しくて、きっとおもしろい経験をし、ほかの場所やほかの人々を知り、彼らの知らない、彼らとはちがうやり方でプレーする選手たちと腕を競いあう、またとない機会になりうることもわかっていた。ほぼまちがいなく、すごく楽しめるだろう。そして彼自身、それをやりたくてたまらないことも否定できなかった。費用持ちでしばらくあちこち回り、ほかの町を見て、自分の小さなチームといっしょにプレーして、ちゃんとした試合をいくつか楽しむというのは、大いに心をそそられた。

そのうえ、医者たちから聞いたことも考えに入れなければならなかった。ヤマンデはリハビリにまだ少なくともひと月は必要で、そのあいだずっとマカパで過ごすのは厄介なことになりかねなかった。少年たちは活動的な暮らしに慣れていて、ぶらぶらしたり、練習場で――いまのところは気前よく貸してもらえているが、いつまでかはわからない――一日二時間ほどちょっと遊んだりする以外に日々を埋めるものもなく、もうひと月じっとしているのは、とても理想的とは言えなかった。

すでに、カウエがガブリエリータのハンモックの隣に自分のハンモックを吊るしたいと言いだした件があった。ハンモックだなんてとんでもない、あの子はまだ十五にもなってないんだぞ、まったく。

「話にもならない、あの子は若すぎる」

「僕の妹はあの子と同じくらい若いけど、赤ちゃんを産んだばかりだよ」

「君の妹は関係ない。ここでは事情がちがうんだ」

「どうして？」

「どうしてもだ。僕がそう言うからだ。いいか、カウエ、女の子がほしいのはわかる。たとえば――ハンモックのことはちょっと置いておいて――たとえば、お隣の娘さんと仲よくなったらどうだ、フェルナンダは感じがいいし、すごくかわいいぞ」

「でも年寄りじゃないか！」

「年寄りって何だ、十八歳だぞ！」

「歳っていうのが何かは知らない。でも年寄りだ。それにぶすだ、バッタの脚みたいにがりがりだ。いらない」

「なら勝手にしろ」

「それにガブリエリータはいつも僕を見てる。あの子は自分のハンモックを僕のハンモックの隣にすごく吊るしたいんだと思う」

「ハンモックの話はもうやめろ！　僕の姪にはかまうな、この話はおしまいだ」

だがアントニオは、まったくおしまいではないことを知っていた。彼らは若かった。女の子が彼らのいちばんの関心事なのは当然だった――とりわけ、ほとんど何もすることがな

いのを考えれば――そして、何かもめごとが持ちあがるのは時間の問題にすぎないのではないかと心配だった。

モアシルと彼の自転車のことは言うまでもない。もう「手放し」までいっていて、中庭をぐるぐる回るのにすぐに飽きてしまうだろう。通りに出たとたん何か厄介ごとに首を突っこむ、わかってる、まちがいない。それにウビラタン、あいつはリモコンの扱いを完璧に覚えて、一日じゅうテレビの前に釘づけになってコマーシャルやメロドラマで頭をぼうっとさせてる、ばかになっちまう（ありがたいことに、まだポルノは見つけてない）。それにピライはいつも台所にいて、母さんやノルマおばさんといっしょに料理やお菓子を試しまくってるせいで太ってきてる。あとひと月ソースとビスケット漬けになったら、ボール遊びどころか、バクみたいなでかい尻になっちまう。だめだ、だめだ、気晴らしをさせなきゃ、ここから引っぱりださなきゃ、忙しくさせておかなきゃ。そう、何よりも忙しくさせておくことだ。それに走らせることだ。

ピッチの向こうからジョージがカメラマンを連れてやってくるのが見えた。アントニオはほほえんで、彼に手を振った。心は決まった。

3.23 お金

実を言えば、心を決めさせたことがもうひとつあった、とアントニオは考えていた。霧雨の朝の光のなかでコーヒーを飲みながら、少年たちがトウモロコシのケーキとスイカとパパイヤの朝食をとり、ピライのベイジーニョはマルセラ母さんのとほとんど同じくらいおいしいとほめているのを眺めていた。十五年近くひとかけらも考えたことのなかったお金が、なんとまあ、考えに入れなければならないものになっていた。食欲旺盛な若者六人に彼自身を加えて食べさせるのは小さな出費ではなかったし、彼らが好もうと好むまいと、なんとかして服も着せなければならなかった。

彼が死んだものとされたとき――そして彼の銀行口座が閉じられたとき――わずかばかりの貯金は両親の口座に移り、両親はもちろんそれを彼に返してくれた。おまえのものだよ、アントニーニョ、当たり前じゃないか。彼はそれまでそのお金で生活費を少しずつ出していた。生き返った息子のおまけについてきた奇妙な見知らぬ一団を家で引き受けてくれるだけでも、両親はもうじゅうぶんすぎるほど気前がよかった。

だが貯金は細っていき、マカパでの滞在は長びき、ヤマンデのリハビリと理学療法には少なからぬ費用がかかるはずだった。ジョージが提案してきたレチ・ノルチのツアーと、それにともなう出場料は――何者でもない自分たちを巡業に連れていこうというのは気前のいい提案だった――その問題を解決する助けになりうるものだった。

だが、それは別の問題を生んだ。ヤマンデの医療費と、ひと月のツアーに出るために少年たちに――そして彼自身にも――用意しなければならない最低限の身のまわりの品の費用を差し引くとしても、これからの何週間かは費用がすべて局持ちになることを考えれば、ちょっとしたお金が残ることになる。まだ額はわからないし、多くの人の目にはきっとはした金だろうが、それがアントニオを悩ませた。

問題は、そのお金があらゆる意味で少年たちのものになるということだった。プレーするのは彼らで、出場料は彼らのものだった。

最初こそ混乱したものの、お金の仕組みをそこそこ使いこなせるようになるまで、彼らはそれほど時間がかからなかった。それには、わからせるために、出かけるたびにアントニオが順番にひとりひとりに硬貨を何枚か預けて、アイスクリームや飴を買わせていたことも役に立っていた。その飴のポルトガル語の名前を、彼らはおどろくほど早く覚えた。

アントニオは心配だった。ものすごい大金ではないにしても、お菓子や甘草のひも飴に使ってしまうような額ではないことがわかっていたからだ。それなのに、どうすればいいのか思いつかなかった。森に帰ってしまえばそのお金が何の役にも立たないのは疑いようがなかったが、それが彼らのものであって、どこかに置いておかなければならないのもまた事実だった。

思いつかせてくれたのはテレーザだった。

彼女は、彼が少年たちといっしょにまたラジオ局に来るようにと言ってきかず、熱烈に歓迎してくれた。とても愛想がよく、コーヒーやレモネードやミントキャンディーをふるまい、ルイーザやジョアンやサヴェリオに紹介し、アントニオは乗り気でなかったのに、彼らに番組のオープニングまでやらせたがった。「この子たちはポルトガル語を話せないんだよ、テレーザ」

「あら、かまわないわ。私が話すときだって、ポルトガル語は知ってるのにほとんどわからないもの。この子たちの友だちや、森にいるお母さんたちがわかってくれればいいのよ」

「森で聞こえるとはとても思えないけど、だって……」

だがもう誰も聞いていなかった。少年たちはもうマイクを奪いあっていて、さえずりと口笛のような自分たちの声がアンプから跳ねかえってくるのを聞いて大喜びしていた。

「かわいい！　鳥が歌ってるみたい！　いっそこれをテーマ曲にしちゃおうかしら、どう思う？」

何日かして、親切ともてなしのお礼にベゴニアの鉢を持って会いに行くと、テレーザは、アサイーのように黒くてつやつやした、小柄で丸い女性といっしょにいた。その女性は大きな白い笑顔で自己紹介した。「はじめまして、お会いできてうれしいです。マリアナと申します」

「この人はクジラの仕事をしてるのよ」とテレーザが説明した。

「グリーンピースで働いているんです、本当は。ご存じでしょうけど、クジラだけを扱っているわけじゃありません」

「まあ、テレーザから聞いたでしょうが、私はもうあまり世の中のことに通じていなくて、でももちろん、グリーンピースが何かはよく知っています」

マリアナはほほえんだ。「ぜひお会いしたかったんですよ。先住民とアマゾンの森林伐採の問題にかかわるプロジェクトをいくつも進めているんです。うかがったところでは、お連れの方たちは未接触の部族の出身なんですよね？　でしたら幸い、伐採の問題はまだその人たちには及んでいないわけです。本当に悲惨なことなんです、残念ながら」

「ええ、私が出かける前から、もうそういう話は出はじめていましたね。事態は悪くなる一方なんでしょうね……」

「ええ。いくらか手は打たれましたが、いつも少なすぎて、焼け石に水です。まだやらなければならないことが山ほどあるんです」

「ほんとにかわいそうに、アントニオ、考えてもみてよ。まわりの木を全部切られて、何もかも引っこ抜かれて、あの人たちはもうどこへも行けなくなっちゃうのよ。森をまるごと買っちゃえばいいのよ、そしたら誰が自分ちの庭の木を引っこ抜きに来るか見てみたいもんだわ」

「テレーザは私たちの活動にとても熱心で、大事な支援者なんです、とくにクジラのこととなると。でも、またゆっくりお会いしたいですね、アントニオさん。お連れの方たちとも話してみたいんです、当事者である先住民の声は私たちにとってとても大切なので」

「もちろんです、マリアナさん、喜んで。あの子たちはポルトガル語を話せませんが、私が通訳しますから問題ありません。これから何週間かツアーに出るんですが、戻ったらきっと会う段取りをしましょう」

「ねえマリアナ、親切で感じのいい人でしょう？　それに植物が大好きで、伐採されるのがいやなのよ、そうでしょ、アントニオ？　この人は植物を育てるのが上手なの、私と同じ。ほら、こんなにきれいなベゴニアを持ってきてくれたのよ、すてきでしょ？　そうだ

わ、植物に敬意を表して、番組のオープニングは『ホエア・アー・オール・ザ・フラワーズ・ゴーン』にするわね、歌ってるのは……バエズの、うれしい、マリアナ？」

「ジョーン。ジョーン・バエズ」

「そうそう、ジョニー・バエズ、名前が思い出せなかったのよ、どうしてかしら」

テレーザのスミレの香りでまだくらくらしたまま通りに出て、ようやく、そのお金の正しい使い方がわかった。ツアーから戻ったらすぐにマリアナに相談しよう、彼女ならどうすればいいかわかるだろう。テレーザの言うとおりだ。森を買おう、村のまわりの森を、まるごと全部。

3.24 契約

アントニオは通りを渡り、レチ・ノルチの局長と会ってきたばかりのことを思い返して、ひとりでほほえんだ。ツアーの取り決め、とりわけお金の面を固めるために訪ねていったのだった。

局長は延々と話を続けた。考えているのは、七試合を放送し、その一試合一試合の前に、ひとりひとりについての十五分のミニ特集を流すことだと説明した。最後には全体から、ツアーのあいだに撮ったほかの映像も加えて、ドキュメンタリーも一本つくるつもりだという。

「ベレンとアルタミラの地元のチームにいくつか、もう連絡をとってあります。残念ながら、まともに相手にしてもらうのが難しいんですよ、誰もあなたがたを知らないので。いまのところ持ちかけられるのは下部のチームか子どものチームばかりです。でも、マカパの監督とはもう話をつけてあります、先月のミニゲームの雪辱をしたいそうでしてね。そこから始めましょう。うまくやって、たとえば引き分けにでも持ちこめれば、次の試合ではおもしろい対戦相手を見つけやすくなりますから」

「この前見たとおりにプレーすれば、引き分けに持ちこもうとするのはマカパのほうですよ」とアントニオは言って、自分のずうずうしさに驚いた。局長は気にもとめずに続けた。「サッカーの物語になるでしょうが、それだけじゃありません。チームのひとりひとりの人間的な面にも興味があるんです。われわれの進んだ社会が、あなたがたに……あなたがたにどんな衝撃を与えたか」

進んだ？　とアントニオは顔をしかめて思ったが、口をはさみはしなかった。

「何をするか、何をどう食べるか、どこで寝るか。言ってみれば、アマゾンとサッカーとハンモックの物語になるでしょう」はて、とアントニオは疑わしげに思ったが、疑問を口に出すのは慎重に控えた。

なにしろ局を動かしているのはこの男なのだ。

「一日の大半、まわりにカメラがあることに慣れてもらわなければなりませんが、じきに気にならなくなりますよ、それどころか、お連れの若い人たちは楽しむかもしれません。それに、さっきも言ったように、特集のためにインタビューが必要になります。もちろん、通訳という追加の役割に対しては、ちょっとした上乗せを考えています」

もちろん、ね。

アントニオはただ彼を見つめたまま、相手が先を続けるのを待った。

局長はインターホンを押して秘書を呼び、契約書を持ってくるように言うと、それをすぐにアントニオのほうへ向けて、署名する場所を示した。

「失礼ですが」と、局長のせっかちな態度にいらだったアントニオはとうとう言った。「金に汚いと思われたくはないんですが、まだお金の話をしていません。いま上乗せのことをおっしゃいましたが、その上乗せがいくらなのかわからない。それに何に対する上乗せなのかもわからない。基本の報酬はいくらなんです？　全部この契約書に書いてあるんでしょうね？」

局長は「まあ、当然でしょう」と言わんばかりの顔をした。

「ざっと読ませてもらってもかまいませんか？」

「もちろんかまいませんよ」と局長は答えたが、その身ぶりは、もちろんかまう、と言っていた。

まったく、なんでも相対的なんだな、すべては場合による、どちら側から見るかによるんだ、とアントニオは、レチ・ノルチの社屋を出て階段を降りながら思った。自分に満足して、ほとんど誇らしかった。いや、ほとんどではなく、誇らしかった。局長に真っ向から立ち向かい、自分の条件をのませたのだから。たしかに、結局のところ失うものが何もなかったのは大きかった。

目の前に出された契約書では、アントニオへの報酬は二千レアルで、昔の教師の給料のおよそ四倍だった。もちろんそのあいだに十四年たっていて、二千レアルは当時より価値が下がっていたが、食事と宿と移動がレチ・ノルチ持ちになることを考えれば、その金をほとんどまるまる懐に入れられるということだった。悪くない。署名しかけたとき、ふと疑問がわいて、全部を最初から読みなおしはじめた。局長はいらだちを隠さずに鼻を鳴らしたが、アントニオはかまわなかった。問題の箇所を読みなおし、目を見開き、それから、見つからない何かを探して、契約書をすばやくめくっていった。

「すみませんが、ここには私の報酬のことしか書いてありません。あの子たちのが見当たらないんですが」

「見当たらないのは、予定していないからです。もちろん検討はしたんですよ、悪く思わないでください。ただ、私の知るかぎり、お連れの若い人たちの身分はまったくはっきりしていません。そのお金を誰の名義にすればいいんです？　名前も住所もわからないんですよ。支払い先を『アマゾンの森二番地、インディオ様』にでもしますか？」

局長は小さく咳をした。笑ったのかもしれなかったが、アントニオにはユーモアのかけらも感じられなかった。

「もちろん、うちの経理部と法務部にも相談しました、どちらも話がややこしくなりすぎると言っています、税務署に目をつけられますからね」

「それで、話がややこしいから、払わないことにしたわけですね。どうせインディオだ、ひと月もすれば森に帰る、お金なんかもらってどうするんだ、と」

「そのとおりです」と局長はうなずき、致命的に一瞬遅れて、アントニオのことばが自分に向けられた皮肉であり、同意することだけはぜったいにしてはいけなかったのだと気づいた。

アントニオは署名していない契約書を机に置き、立ちあがって局長に手を差しだした。
「いいですか、そちらの法務部にも、経理部にも、ほかのみなさんにも歩み寄りたいと思います。そちらの手に余るほど話がややこしいのなら、この話はなかったことにしましょう。それぞれ自分の道を行く、それでおしまいです」

局長には欠点もあったかもしれないが、長年の商売の駆け引きで、はったりを見ればはったりだとわかるようになっていた。そしてアントニオのはそうではなかった。彼は四千レアル、アントニオに二千、少年たちに二千という報酬で巻き返そうとしたが、もうひとつ彼が心得ているのは、綱を引っぱりすぎてはいけない瞬間を見きわめることだった。アントニオは落ちつきはらって、ただ正しいと思うものを手に入れるという意志を曲げなかった。局長は、三つ目の取り柄として、とっさに損得の計算ができた。ひとり二千レアルの

出場料に経費を加えても、局にはたっぷり利ざやが残ることがわかったので、アシスタントを呼んで、その場で契約条件を変更させた。

アントニオ・カルロス・ロシャ・ジ・アウメイダ氏に二千レアル、さらにチームの受託者としての同じくロシャ・ジ・アウメイダ氏に一万二千レアル……「ああ、チームの名前をまだ決めていませんでしたね。こちらではアマゾニア・フチボウ・クルビを考えていたんですが、どうです？」

「マナウスのチームにはいい名前ですね」とアントニオは言い返した。これまで味わったことのない自信が体じゅうにみなぎっていた。「でも私たちは森から来たんですし、自分たちのことばがあります。私たちの名前はアスー・カアー・フチボウです」

「ああ。けっこう。いいですね。どういう意味か、うかがっても？」

「大いなる森という意味です。それから、追加のレアルは一万四千です」

「何ですって？」

「一万四千です。ヤマンデも、プレーはしなくても、あらゆる意味でチームの一員です。彼にもインタビューしてみてください、後悔はしませんよ。私の通訳料の上乗せは差しあげます、こんなに親切にしていただいたんですから」

3.25 マネキン

レチ・ノルチとの交渉がうまく運んだ自信に後押しされて、アントニオは思いたって、村のまわりの森を守るという考えを実行に移しはじめるために、アマゾン森林保護公社へ出かけることにした。

少年たちの代弁者としてカウエがついていった。少年たちには、森の木を切り倒したがっている悪い人たちがいるのだと手短に説明しておいた。少なくとも手短に説明するつもりだったが、当然ながら「どうして」が始まった。どうして木を切り倒したいの？　木材を使いたいからだ。でも森はすごく大きいんだから、何本か切ったって何も起きないよ。でも切り倒す木はたくさん、すごくたくさん、多すぎるんだ、いつか全部になるかもしれない。どうして全部なの？　悪いやつらだからだ。じゃあどうしてそんなことができるの？森は自分たちのものだと思ってるからだ。この情報で話は打ち切りになった。誰かが森を「自分のもの」だと考えるという、ばかげた、考えられない思いつきが少年たちをあまりに笑わせたので、アントニオは、そのたわごとにまだ腹を抱えて笑っている彼らを残して部屋を出たのだった。

小さな建物の偽大理石の敷居をまたぐと、アントニオとカウエは、守衛の帽子をかぶったずんぐりした禿げ頭の男の前に出た。男は小さすぎる机に向かって座り、丸めた雑誌でハエを片っ端から退治することに精を出していた。自分の件を持ちこむにはどの部署に連絡すればいいのかとアントニオが尋ねると、男は叩くのをやめずに首を振り、断言した。「ここじゃないと思いますがね」

「でもここはアマゾン森林保護公社じゃないんですか？」

「そりゃそうですよ」バシッ！

「じゃあ担当の部署があるでしょう、保護の手続きを扱う……」

「さあねえ。私の知るかぎりじゃないですね。でもどうしてもっていうなら、広報部で聞いてみたらどうです。三階です」バシッ！　バシッ！

広報部がいちばんふさわしいとはアントニオには思えなかったが、守衛からはそれ以上何も引きだせそうになかったので、かなりとまどったカウエを従えてエレベーターへ向かった。問題の部署には、ネクタイを締めたいらいらした若い男がいて、アントニオにさえ古くさく見えるコンピューターの前に座った若い男女の一団を監督していた。若い男は、こちらには時間がないし、だいたいここへ来るなんてどういうつもりだと言って、ふたりをほとんど部屋から押しだした。どうしてもというなら二階の地図・土地台帳部へ行けばいい。

そこからは、ラベンダーとほこりのにおいのする、禿げた物腰のやわらかな小男に、四階の決算報告部へ回され、それからまた三階の民間管理部へ回された。それから一階を通った。そこでは保守サービス係の感じのいい男がカフェジーニョをふるまってくれた。そして五階では、血の気の多い役人が、本当にじめじめしている森ではなく、サンタ・マリアナのあたりの風通しのいい区画を買うようにと説きふせようとした。大きな発展の見込みがある地域で、確実な投資だという。役人は義理の兄の不動産屋の名刺をふたりの手に押しつけ、土地を買うときにはいつでも専門家に相談するのがいちばんだと念を押した。

アントニオは疲れはて、うんざりしていた。そして、話す相手ひとりひとりを険しい目でにらみつけては、森を切り倒したいのはおまえかと挑むように尋ねるカウエに、いちいち答えなければならないのにいらいらしはじめていた。そのとき、これといった理由もな

く、予算配分部の前に出た。少なくとも名前からすれば、正しい行き先だと期待できそうだった。

ドアは開いていて、なかには、半袖のシャツを着た男が机に向かって座っているのが見えた。札によれば、トーマス・S・メロ・アルゲール博士だった。彼と、隅の椅子に置かれた探検家の制服を着たマネキンのほかには、誰もいなかった。アントニオがノックすると、男は待合室、つまりドアのすぐ外の椅子で待つようにと手ぶりで示した。アントニオはカウエといっしょに古ぼけた鳥類学の雑誌をめくって待ち時間をつぶしながら、ドアごしに男を観察していた。男は机の上の何枚かの書類を身じろぎもせずに見つめていたが、読んでいるようにも、ほかの何かをしているようにも見えなかった。

三十分待たされたあと、アルゲール氏は冬眠から目覚めたように見え、入って座るようにと手ぶりで示した。部屋には空いている椅子がひとつしかなく、そこにすばやくカウエが陣取ったので、アントニオは立ったままでいるか、マネキンをその場所からどかすかを決めなければならなかった。アルゲール氏がまた手ぶりをして、彼をふたつ目のほうへ押しやった。

ふたりが彼の向かいに座るとすぐ、アルゲールは暑いという身ぶりをして、少し離れるようにと合図した。アントニオには部屋がとくに暑いとは思えなかったが、それはさておき、彼にとっていちばん気がかりなのは、どうやら口のきけない人を相手にしているらしいということだった。どうやって、何をすればいいのか説明してもらえばいいんだ？　とにかく、もうここまで来たのだから、やってみるしかなかった。アントニオは咳ばらいをして、ことばをはっきり区切りながら話しはじめた。

「ええと、私たちはアマゾンの森の土地をひと区画買いたいと思っておりまして……」

アルゲール氏はさっと立ちあがり、急いで戸棚からファイルを取ってきた。そこからパンフレットを二冊と地図を一枚取りだし、地図をアントニオとカウエの前に広げて、ペルーとの国境にある森の一点を指さした。

「すばらしい！」とアルゲール氏は、低くよく響く声で言い、アントニオを驚きで飛びあがらせた。「そういうご意向をうかがえて、たいへんうれしく思います。そうした計画、PPFACPを最近始めたばかりなんですが、ここにいらしたということは、きっとご存じなんでしょう。五十レアルで五十平方メートルの森を保護――買うんじゃありませんよ、あはは、もちろん購入の話じゃありません――できるんです、ウアペス川の源流で、未接触部族や元未接触部族がいくつも暮らしているところです。お連れの方はそこのご出身でしょう？　どれだけの森を保護なさいますか、五十平方メートル？　百？」

「ええと、いいえ、私たちはもっとずっと近くから来たんです、私たちの村はジャリ川のあたりで、たしかトゥムクマキ国立公園のなかだと思います」

「私たちの？　あなたは、ええと……？」

「アントニオ・ロシャ・ジ・アウメイダです、はじめまして。そしてこちらがカウエです」

「はじめまして。失礼ですが、アウメイダさん、気を悪くなさらないでほしいんですが、あなたは先住民には見えませんね」

「いえ、そうなんです、つまり、ややこしいんです。私はある先住民を代表しているんです」

「正確にはどの民族です？　何という名前ですか？」

アントニオは不意をつかれた。森で孤立して暮らす民族に必要のない数多くのことばのなかで、まちがいなくそのひとつが、自分たちを名づけることばだった。何が起きているのか知りたくてうずうずしていたカウエが、間ができたのをいいことにアントニオに説明を求めた。アントニオは質問を訳してやった。

「僕たちが何て呼ばれてるか知りたいの？　村の人ひとりひとりの名前を全部？」

「いや、部族が何て呼ばれてるか知りたいんだ」

「なんてばかな質問だ？　僕たちは僕たちだ、僕たちは人間だ」

アントニオは、「人間」という名の民族でこの役人が納得するかどうか自信がなかったが、注意深いアルゲール博士はもうそのことばを聞きとって、勝手に話を進めていた。「マングアリ？　聞いたことがありませんね。いずれにしても、進行中の森林保護の計画はいくつかありますが、現在のところ、第三者による保護の引き受けを認めているのは、さっき申しあげた地域だけです」

「でも、もし逆に、村のまわりの森を実際に買いたいとしたら？」

「あはは。買うなんて話になりません。森は国有財産、国のもので、みんなのものです。実のところ、ブラジル人として、もうあなたのものなんですよ、あなた。それより保護の話ですが、このペルーとの国境のたいへん興味深い地域についてですね……」

「でも私たちはその地域には興味がないんです、まったく別のところなんです！　まだ保護の計画がないなら、始めることもできるでしょう？　始めるには何が必要なんです？」

「いやあ。ややこしいことなんですよ。込みいったことなんです。あなたにはわからないでしょう。でもどうしてもというなら、省に提案を出すことはできます、地図、水文地質の資料、そしてもちろん動植物の調査結果をすべて添えてね。添付する事業計画書は、当然、資格のある公証人の認証を受けたもので、すべての測定値と調査データを適切に表にまとめ、その地にもし住民がいればその全住民の民族誌的調査の登録票を含め、さらに一年、三年、五年の決算見込みを含む計画を記載し、それを、できれば何々研究所の認証を得て証明する……」

アントニオは両手を机に置き、咳ばらいをして、話しながら引き出しやファイルから書類の束を次々に取りだしていた役人をさえぎった。そして息を吸い、努めて落ちついた声で言った。「わかりました、いまのはなかったことにしてください、よくわかりました。いったい何を思いついたんだか」

彼は立ちあがって部屋を出ると、必要以上に少し強くドアを閉めた。

カウエとアルゲール氏は何秒か見つめあっていたが、そのうち役人は、若者が自分に向けてくるピューマのような目つきに落ちつかなくなってきた。それからドアがまた開いて、アントニオが入ってきた。彼は椅子を隅に戻し、その上にマネキンを置いて、冷ややかに少年に言った。「行こう、カウエ、帰るぞ。ボール遊びに戻ろう、僕たちにできるのはそれなんだから」

少年は彼のあとについていったが、その前にアルゲール博士に向かって何かことばを吐き捨てた。博士は書類を両腕いっぱいに抱えて、あっけにとられてふたりが出ていくのを見送った。

「あいつに何て言ったんだ？　アンブア・エサイ・イテってどういう意味だ？　覚えてないことばだな」

「ぬるぬるムカデ・毒ガエルの目つきの、って意味だよ」

そうか、ぴったりだ。

3.26 友だち

ヤマンデは脚の機能を完全に取り戻すだろう。事故は、スポーツの能力にさえ後遺症を残さないだろう。たしかにまだ少し時間が、少なくともひと月は必要だった。というのも、彼を担当する理学療法士がこの件に熱を入れ、筋肉の張りを完全に取り戻すだけでなく、運動選手としての活動に戻ることまで目標に掲げたからだった。だがそれはすばらしい知らせだった。医者たちは、彼の回復の速さと少年の体の素質にとても驚いたと言っていた。それにヤマンデは、何日かすれば友だちとアントニオが、本物のチームと本物のサッカーの試合を、七対七でするツアーに出かけるという知らせにも、それほど悪い反応は見せなかった。最初は顔を曇らせたが、それから何秒か考えて、最後にこう言いわたした。「でも七人目は誰？　アントニオ、あんたがやるの？　あはは、そうか、でないと僕たち強すぎるもんね！　でもいいなあ！　早く治ったら、僕もいくつか試合に出られるかもしれない！」

最初から毎日、一行は二、三人ずつの小さなグループに分かれて、かわるがわる病院に通っていた。その日、科長の話を聞く番に当たったのはアントニオとジャシだった。帰り道は、もうすぐ始まるサッカーをしに行く旅について、笑いと胸おどる先回りの話の連続だった。

家まであと数百メートルのところで、アントニオには、通りの向こう側の雑草に囲まれた土の空き地から「ジャシ！」と呼ぶ声がはっきり聞こえた。

子どもの一団がボール遊びをしていて、そのなかでいちばん小さな子が、みんなと同じく裸足で、短パンがわりにもなり、たぶんパジャマがわりにもなっている長すぎるカナリア色のランニングシャツを着て、歯が三、四本抜けているのが目立つ泥だらけの小さな顔に雨の筋をつけながら、挨拶に片手を振っていた。

アントニオがジャシのほうを向くと、ジャシは、アントニオには照れくさそうに見える顔で、車が来るかもしれないことなどまったく気にせずに通りを渡って、空き地とその子のほうへ向かっていった。アントニオは口を開く暇もなく、心臓が止まりそうになった。

だが、その子とジャシが部族の身ぶりで挨拶を交わすのを見て、小言は喉の奥で消えた。そのささやかな儀式は、もう少し大きい三、四人の子とも繰り返された。知りあいなのか？

ジャシは子どもたちの輪を離れて、通りの反対側のアントニオのところへ戻ってきた。相変わらずまわりをまったく見ずに。実際、男をふたり乗せた原付が彼をかすめていき、ふたりはアントニオにさえきちんと聞きとれないほどの罵声を浴びせた。

「僕はもうちょっとここに残って、マルコスやみんなとボール遊びをするよ」

（マルコス？　みんな？）それは質問ではなかった。アントニオは奇妙な感じがした。自分から彼らの保護者を買って出たけれども、この若者たちには彼らなりの自立があって、思うとおりに生きるあらゆる権利があるのだ。

「ああ、もちろんだ、ジャシ……でも頼むから、通りを渡るときは気をつけるんだぞ」

「通り？　ああ、うん、もちろん、通りね、通り」

ジャシは同じように無頓着にまた通りを渡り、ほんの数秒後にはもう、彼のリフティングを大声で数える子どもたちに囲まれていた。頭、頭、膝、かかと、左足（何回か）、右

足、肩、またかかと、そんな具合に。アントニオがほほえみはじめて見ていると、ジャシはリフティングを止めずに地面に座りこみ――子どもたちから自然に拍手がわいた――それからまた立ちあがった。

アントニオにとっていちばん驚きだったのは、彼の技術ではなく、彼がまぎれもなく唇で数をかぞえていることで、もう少なくとも五百回はリフティングしていた。部族のことばには二十までの数しかなく、あとはいくつかの、はっきり決まっていない大きさの段階を表すことばがあるだけだった。長老たちが生きてきた日々のような「たくさん」、川の魚のような「たくさん」、森のすべての木のような「たくさん」。なのにジャシは数をかぞえていた、そして、この考えはアントニオの胸の奥を突いたが、それはどうしてもポルトガル語でしかありえなかった。

千回目くらいで子どもたちは興味をなくし、ジャシ自身も飽きてしまった。いつまでだって続けられるんだろう、とアントニオは思った。ジャシとそのちびっこがほかの全員を相手にするミニゲームが始まった。ふたりは意思を通わせていた。いくつかの身ぶり、たくさんの笑顔、もちろん共通のことばとしてのサッカー、そして……いくつかのことば？
アントニオは、ジャシがその子に自分たちの型をいくつか手ほどきしていたことに気づいた。その子はとりわけ二本の矢が気に入っているようだった。高速のワンツーのようなもので、ふたりはそれを何度も何度も試していた。ジャシがふだん仲間とやるときの十分の一の速さでうまくいくと、ふたりは跳びはねながら、弓の弦を引いて放す身ぶりを何度もして、いっしょに喜んだ。

実際、幸運なことだ、とアントニオは思った。この子たちが二十歳で第二の子ども時代を生きられるなんて。森で僕に起きたことと、たいしてちがわない。

十五分ほど同じ姿勢でぼうっとその光景を眺めていて、そのことにゆっくりと気づきはじめたとき、子どものひとりがまた挨拶に手を振った。

「モアシル！　モアシル！　ペナルティキックを止めに来たんだ、モアシル！」

いや、これはあんまりだ。

モアシルは、アントニオの古いきしむ自転車で、とんでもない速さで逆走してきて、空き地のすべりやすい地面でぶざまにカウンターステアのブレーキをかけ、子どもたちの笑い声のなか、ひっくり返った。こいつまで怪我をしたら、おしまいだ。さいわい彼は何事もなく起きあがった。それどころか、純粋な喜びが顔に浮かんでいた。仲間よりほんの少し背が高いだけなのに、この子どもたちのなかでは、彼の笑顔といたずらっぽい目がみんなの上にそびえていた。一分もたたないうちに、彼はゴールに立ってペナルティキックを止めていた。

ゴールは古いはげかけた壁で、しっくいに二本のポストと一本のクロスバーが下手くそに刻まれていた。壁じゅうに小さな穴が開いていて、いちばん大きなものはこぶしくらいの大きさで、ほこりと雨で色あせた色チョークの落書きでいっぱいだった。モアシルはゴールの前に立った。キッカーひとりひとりを小さなうなり声と、両手でつくる爪の身ぶりで迎え、そのあとたいてい、場をなごませる笑い声をたてた。子どもたちの誰ひとり、このおそろしく身軽なキーパーを脅かすことはできず、実際、彼はいくつかのペナルティキックを止めるのに、しゃがんで、それどころか地面に座ってシュートを待っていた。

モアシルがやってきたのに動揺して、アントニオも通りを渡り、少し離れてペナルティキックを見ていたジャシの隣へ行った。

「あのちびを見て」とジャシがほほえんで彼に言った。

マルコスの前で、モアシルは本物の相手がいるかのように立ちあがって身構えた。二歩の助走とトーキック。ボールが軽かったせいか、その子が実際にうまかったせいか、ボールはモアシルの右上の隅へとても正確に飛んだ。モアシルはみごとな形のジャンプを見せて、指先でぎりぎり外へはじきだした。シュートがほんの少しでも速かったら、届かなかっただろう。

「すごくうまいな」とアントニオは答えた。「小さいころの君にちょっと似てる……」

だがもうみんなが、ポルトガル語で彼を呼んでいた。「ジャシ、ジャシ、ペナルティキックを蹴りに来て！」

その文句を、ジャシは完璧にわかっているようすで、アントニオはまた驚いた。

ジャシはもったいぶらなかった。ボールを取り、ずっと前にアントニオに教わった十一歩を数え（ポルトガル語で数えてるんだろうか、とアントニオは思った）、熟練のプロのようにていねいにボールを地面に置いた（いったいどこでそんなの見たんだ？　僕はすっかり手綱を放しちまってる）。目の前のモアシルは、さっきよりも本気でうなり声をあげて空中を爪でかいていて、その目はジャガーの目になっていた。ジャシは手かげんせず、とてつもなく強いシュートを放った。ボールは、ちびっこがペナルティキックを決めようとした、まさにトップコーナーのあたりで、直径三十センチほどのしっくいの大きなかけらをはぎとった。一方では喜びと歓声、もう一方ではモアシルの負けの身ぶり。それでも彼はこのボールにも触れていた。

すぐに年上の子のひとりがその大きな穴の下へ走っていき、壁じゅうでとびぬけていちばん大きなその穴の下に、赤いチョークで、たどたどしい字で「JACI」と書いた。

そのときになってようやくアントニオは、落書きが署名なのだとわかった。子どもたちが蹴りこんで壁のかけらを落とした（ほとんど全部がゴールの枠のなかだった）シュートの跡で、その若者たちのささやかな手柄を記念する穴なのだと。そしていまやジャシも、自分の印を残したのだ。

アントニオがもう家に帰る時間だと決めたとき、ジャシはまだ、いちばん大きな穴の下に書かれた自分の名前を誇らしげに眺めていた。

3.27 森

「いまはみんな、アントニオの村にいるんでしょう？」

ジャナイナは心配しないようにしていた――心配は乳に入って赤ん坊に障る、と老女たちがいつも言っていた――が、自分の男がどこにいるのか、何をしているのか、どんな危険に遭っているのか、ひっきりなしに考えずにはいられなかった。

「もちろん向こうにいるさ。いまはみんな、アントニオの住んでいる大きなシャボノにいて、わしらと同じように火を囲んで、村の戦士たちが向こうのとてつもなく大きな川でつかまえたカイマンのやわらかい肉を食べている。わしらのカイマンよりずっと、ずっと大きいが、危なくはない、歯が一本もなくて、パパイヤとランしか食べないんだ」

キリマが見せびらかしている自信は、実際に感じているものとはかなりかけ離れていた。彼らが出発してから月がふたつめぐったのに、何の知らせもなく、無事なのかどうか、どこにいるのかもわからなかった。だが、ジャナイナに心配させたくなかったし、村の誰にも心配させたくなかった。とりわけ、自分自身がどうしても心配したくなかった。もう何晩も眠れずに過ごしていた。目の前には、ずたずたになった息子の脚の光景が浮かび、あんな傷でもかならず死ぬとはかぎらないと自分を納得させるのに、ほとんど耐えがたいほどの努力が要った。

ずっと憎んでいると思っていた男を、ヤマンデの事故を招いた精霊たちの不興について、いまでもなんとなく何かの責任があると思っている男を、信じなければならなくなった。だが信じられないことに、自分が本当に信じていることに気づいた。たしかに、ほかに選びようがなかったからかもしれない。だがひょっとすると、自分自身に認めるのにはとてつもない苦労がいったけれども、結局のところ、あの男の話をずっと信じてきたからかもしれなかった。

キリマは語り部だったから、ある種のことは知っていた。誰かが本当の話をしているときと、つくり話をしているときとを見分けることができた。自分でつくりながら話をするときには、目は高く、空や木々のこずえのほうへさまよっていく。話のなかの絵が飛ぶのを見るために、それが煙のかたまりのように何もない空中からできあがっていくのを見るために。だが本当の話をするときには、絵はもう全部自分のなかにあるから、探す必要はない。本当の話をするときには、聞いている者たちの顔を見る。彼らがどう思っているか見たいし、ちゃんとわかっているか確かめたいからだ。つくり話をするときには、聞く者が少しちがう話を思い描いてもかまわない。どのみちつくり話なのだし、むしろそのほうがもっといい話になる。だが何かが本当にあるのなら、ほかの者たちにそれを正しく理解してほしい。そしてアントニオは、話すときいつも村の者たちの目をまっすぐ見ていた。だからキリマは、心ならずも、彼がつくり話をしているのではないとずっとわかっていたのだ。

彼はこずえの上の雲を見あげた。自分はいま、少しつくらなければならなかった。アントニオはたくさんのことを話したが、話さなかったことはもっとずっとたくさんあったから、若者たちがどこにいるのかを語ろうと思えば、知らないことは想像でつくりださなければならなかった。部族の誰もがそれをよく知っているとわかっていたが、誰も気にしなかった。それでもみんな満足だった。うまくつくった話は、本当の話と同じくらい不安をしずめてくれた。

「真ん中の大きな火の上では、森の外のほかの獣たちも焼いている。数えきれないカエルの脚で走る獣、うしろ向きに飛ぶ獣、そいつは三つの目のちょうど真ん中を矢で射なければならない、でないと死なないんだ。だが肉は絶品で、芋虫と熟れた木の実の味がする」

炉のまわりに集まった聞き手たちは、そろってつばを飲みこんだ。アリクイの肉の自分たちの夕食は、そんな異国のごちそうとは比べものにもならなかった。

「食べおわったら、見えない糸が運んでくる歌を聴いて、みんなで踊るんだ、ひと晩じゅう、蜜のように甘い汁を飲みながら。ヤマンデもそのなかで踊るだろう、あいつの脚は前よりまっすぐで強くなって」キリマの声が一瞬ふるえた。

ジャナイナが助け舟を出した。「アントニオもいっしょに踊るんでしょう？」

「ああ、あいつは太鼓の上でリズムを刻む役だ、髪にハチドリの羽を編みこんでな。まわりにはとびきり美しい女たちがいる、長い長い黄色や緑の髪をした、森の外の女たちが……」

キリマは、こみあげたものから立ちなおると、ジャナイナを少しからかいたくなるのをこらえきれなかった。もう嫉妬に燃えている彼女の目が大きく見開かれるのを見て、ひとりでほほえみながら続けた。「……だがアントニオは黄色い女たちにも、花を編んだ彼女たちのハンモックにも目をくれない、火のなかを見て、手を振っている自分のジャナイナとイビラアタンを見るからな」

ほら、ジャナイナはもうまたほほえんで、赤ん坊をあやしていた。

「アントニオは、そのとびきり美しい女たちのことは一度も話してくれなかったな」とピアタが、ひどく興味をそそられて指摘した。

「ああ、まあ、忘れていたんだろう。ボール遊びの話をするほうが好きだったからな、知ってるだろう」

「帰ってきたら、どれだけ新しい話をしてくれるんだろう、みんなで」

「たくさんの話をな、そうとも。ボール遊びの話だ、向こうの大きな村では、あいつらは一日じゅう遊んでばかりいるからな。でも、光る大きな鳥の背に乗って、高く高く飛んだときの話もするだろう、見えない糸がみんな、指のようにあいつらの髪をかすめていって……」

光る鳥はおもしろかったが、ピアタはもう上の空で、色とりどりの長い髪の女たちのことを、モアシルとヤマンデにもっとくわしく聞くのが待ちきれないと考えていた。

3.28 口伝え

イザベルは象牙の塔に囚われているような気がしていた。人生のうち五年をジュネーヴで過ごしたあと（あの町の魂がなかなか見つからないの、と彼女は母親とのまれな電話のたびに繰り返していた）、ニューヨークへ戻ることを心待ちにしていた。だがJFK空港に降りたって、いつものように、おきまりのU2の曲を口ずさむと、まもなく落胆にとらわれてしまった。本当にこれが私の人生なの？　本当に一生通訳をやっていくの？

仕事の面では、ただ喜んでいればよかった。きわめて厳しい選考で知られる国際連合で働いていること自体が、彼女の能力の証明だった。二期目の五年の採用試験にすぐに合格し、しかもニューヨーク本部勤務となれば、このうえなく満足してしかるべきだった。それに結局のところ、通訳はすばらしい仕事だった。異なる文化のあいだに欠かせない橋だった。ときどき機嫌のいいときには、ロゼッタ・ストーンの同業者です、と自己紹介した。

だがいま彼女は、何年ものあいだ、ごく小さなものからきわめて重大なものまで、ありとあらゆる問題について話してきたのに、そのどれひとつとして実際にこの手で触れたことがないという重みを感じていた。世界じゅうの問題と接していながら、まるで別の惑星にいるかのように、それを遠く感じていた。

それにサウダージ、あのいかにもブラジル的な感情。ジュネーヴに住んでいたころは、それを――どうしてあんなまちがいをしてしまったのかしら！――最後にわが家と呼んだ場所、36番街のアパートへの郷愁と取りちがえていた。だがいま、見慣れたルーズベルト橋のシルエットに目をやると、頭がすっきりしていた。ブラジル以外の国に対してサウダージを感じられると思うのは、アジアに対してアフリカ病にかかれると思うようなものだ。ウランバートルやカトマンズがどれほど魅力的でも、それはとにかくありえない。

旅をかさね、忙しくせわしない暮らしを送ることで、それを抑えこむすべを身につけたつもりでいたが、故郷から離れていることは、いつもまた身にしみてくるのだった。離れられない友にして敵のように、と彼女は思った。技術の進歩がもたらした道具は、火に油を注ぐばかりだった。ガラスの宮殿に復帰してから、彼女のタブレットはますます頻繁に、ブラジルの通信社やマカパ地方のメディアにつながるようになっていた。

故郷の出来事のささやかさが心を温め、しばしば笑みを、ときには――このごろ涙もろくなった気がしていた――涙を誘った。ジャコ・サインスという人の名前は聞いたこともなかったが、季節はずれの河川の大潮、ポロロッカの波がその人の農場の家畜を散り散りにしてしまったという記事を読んで悲しくなった。かわいそうなジャコ。かわいそうな牛たち。2014年に準優勝したばかりのサンバチーム、マラカトゥ・ダ・ファヴェーラは、もう翌年のカーニバルの準備を始めていた。シルヴィーニャはまだ実行委員会にいるのかしら、すてきな人だった、あんなに明るくて。アマパー州知事が、女性政策担当の新しい特別長官を任命したばかりだった。感じのいい顔立ちの若い女性で、これはいい知らせだった。

セルビア人の通訳で、きれいなポルトガル語を話し、すぐに親しくなったアナは、イザベルがタブレットをいじっているのを見るたびに、興味しんしんで近づいてきた。

地元のニュースを別にすれば、新聞は女性とワールドカップの話ばかりしていて、ありとあらゆるやり方でそのふたつの話題を結びつけていた。一週間ちょっとのあいだに、マカパ地域では「ミス・カップ」「カップのミューズ」「カップの美猫」「カップの名づけ親」、そのほか十いくつもの称号が選ばれていた。どれにも、多かれ少なかれ肌もあらわで、多かれ少なかれかわいい若い女性たちの写真がついていた。

アナはそれがおかしくてたまらなかった。「あなたたちブラジル人って信じられない！」

イザベルはそれほど乗り気ではなかった。時がたつにつれて、この手の記事がますます調子はずれに思えてきていた。

「ええ、そうよ。でも私たちの独特さが別のかたちで現れるほうが好き。ほら見て」とイザベルは言い返した。「ある男性が、アマゾンの森で十四年過ごしたあと、マカパに戻ってきた」と彼女は声に出して読んだ。

「それに聞いて。『未接触部族に迎えいれられていた彼は、部族の一員を救うためにインディオの一団とともに再び姿を現した』。見て、この写真！」

写真はすばらしかった。インディオの一団が裸足でサッカーをしているところを、もっと背の高いひげ面の男といっしょに写していた。

もう一度よく見ると、イザベルはその男を知っているのではないかという気がした。指でひげを隠して、目だけをよく見てみた。誰かを思い出させたが、誰なのかわからなかった。記事を読んでいるうちに、はっきりと記憶がよみがえった。

アントニオ・カルロス・ロシャ・ジ・アウメイダ。

「アントニオ！」とイザベルは叫んだ。

「え、知ってる人？」とアナが尋ねた。

「ええ、知ってる、知ってるわ」とイザベルは呆然として答えた。

「うそ、信じられない！　リンクをメールで送ってくれる？」とアナが頼んだ。「フェイスブックでシェアしないなんてもったいない、すてきすぎる話だもの」

翌日、アナは第三委員会の会合に出席した。いつものように、自分のものを整え、できればちょっとおしゃべりをするために、たっぷり早めに着いた。彼女のフェイスブックの投稿にはもう百ほどの「いいね」がついていて、誰がシェアしたのか見ようと、リストをスクロールした。隣では大物のひとり、常任理事会のメンバーで大統領の個人官房にも属する大使が、画面に流れる写真を露骨にのぞきこんでいた。アナは、大使とイザベルが親しい間柄なのを知っていた。イザベルは国連の採用試験を受ける前、大使の貴重な協力者だったのだ。

「イザベルの友だちなんです」と彼女は画面の写真を指さして言った。「ほら、この人です。けっこう親しかったみたいですよ」

「でも何があったの？　インディオなの？」

「ええ、この人は十四年前にアマゾンの森で行方不明になって、ここ何か月かのあいだに、暮らしていた部族の何人かを連れて故郷の町に戻ってきたそうなんです。それでおもしろいのが、その人たちがサッカーがすごくうまいってことなんです！」

「サッカーが？」

「ええ、すごくうまくプレーするらしいんです」

「ワールドカップの宣伝じゃないの？」

「いえ、いえ、本当にあったことなんです。このアントニオっていう人がイザベルの友だちなんですってば」

「その記事のリンクを送ってくれる？」

「大使の個人のメールにですか？」

「ええ、お願い、とてもすてきな話だから」

大使は何日かして、ブラジル大使館での歓迎会でイザベルに会ったが、人ごみにへだてられるまでに、挨拶とひとことふたこと交わすのがやっとだった。

イザベルは、バチーダのグラスをもてあそびながら、この広間はまるでマカパみたいに暑いわと思っておもしろがっていた。そのとき、誰かに話しかけられた。

「退屈していらっしゃいませんか？」

見ると、話しかけてきたのは四十五歳くらいの見知らぬ男で、歓迎会の広間でただひとりネクタイを締めておらず、ひどく自信ありげな様子だった。

「私はこういう集まりでいつも退屈するんです」と彼は、流暢だが少し粗けずりなポルトガル語でつけ加えた。

「いいえ、退屈はしていません」とイザベルは、なまりのない英語で答えた。「少し疲れているだけです、忙しい一週間だったので。どこかでお会いしましたか？」

「名のりあったことはないはずです、それなら覚えていますから。ロバートです、はじめまして」

「マリア・イザベル・バルボーザです」とイザベルは答え、少し間をおいてから、義務的な「こちらこそ」をつけ加えた。

ロバートは、イザベルの眉が上がったのに気づかずにはいられず、近づき方を調整しなおして、自分も英語に切りかえた。

「名字ですね、そうでした。ヒューバート、ロバート・ヒューバートです。大使館にお勤めですか？　大使とお話しになっているのをちらりとお見かけしましたが」

「いいえ、通訳で、国際連合で働いています。でも大使とは長年の知りあいで、いつも会うのを楽しみにしているんです。ちょっと待ってください、ヒューバート？」

「ええ、ロバート・ヒューバートです」と男はほほえんで答えた。

「『あの』ロバート・ヒューバート？」

「ええ、『あの』ロバート・ヒューバートです、何億ドルものスタジアムの。それに、この前の国際ワークショップでは『持続可能性』の作業部会の議長を務めました。もしこれに何か皮肉なものをお感じなら、皮肉はたっぷりあると請けあいますよ、もっともあなたのお考えとはちがうところに、かもしれませんが」

会話は、いつもの炭酸水のグラスを手に、ほほえみながら近づいてきた大使にさえぎられた。

「お友だちの話をしてるの？　この話、ここじゃみんなが噂してるわよ」

「どのお友だちです？」とヒューバートが興味をそそられて尋ねた。

「皮肉がありそうもないところで、少しばかり皮肉を味わう覚悟はおありですか？」とイザベルは尋ね、続けた。「森で行方不明になったと思われていた友人が、十四年ぶりに戻ってきたんです。そのあいだずっと暮らしていた部族の人たちを連れて」

「で、皮肉はどこにあるんです？」とヒューバートは少しばかり乱暴すぎる調子で言った。

「皮肉は、そのとんでもない部族の人たちがサッカーをできるってことにあるんです。私の知りあいのアントニオが教えたのか何なのかはわかりませんけど、いまはブラジル北部を回るツアーの最中なんです」

「ああ、なるほど。ひょっとしてマナウスにも行くかどうか、ご存じですか？」とヒューバートは聞き返した。相変わらずこの話に皮肉などまったく見いだせなかったが、その点にこだわるのは避けた。

「行くと思いますけど、確かじゃありません」とイザベルは答えた。「でも、すぐに調べられますよ」

二分後には、三人の注意はそろってイザベルのタブレットに集まっていた。そこには、ますます奇妙な写真や動画が次々に現れていた。どうやらこれまでのところ、インディオたちはすべての試合に勝っていて、なかにはとんでもない大差の試合もあった（あまりに信じがたくて、宣伝の仕掛けかと思えるほどだった）。そして、そう、たしかにツアーの最終戦はマナウスでおこなわれることになっていた。

「スタジアムのこけら落としの試合だ！」とロバートは日付を見て叫んだ。「プレーするのがインディオだとは知りませんでしたが、まあ、しごくもっともなことですね。もちろん私は設計者として式典に出なければなりません、あなたがたもいらっしゃいませんか？もちろん、私の招待で。バルボーザさんが私の片言のポルトガル語を助けてくださったら、ありがたいのですが」

「残念だけど、私は行けないわ」と大使は答えた。「来週ジュネーヴへ発って、それから中東で一連の会談があるの、六月の終わりまでアメリカには戻らないわ」

「では、あなたは？」とヒューバートはイザベルのほうを向いて尋ねた。

イザベルは、このところ故郷恋しさのせいで感じていた胸のしめつけを、また感じた。同時に、もうひとつの胸の高鳴りも感じた。それは、正直に言えばとても包みこむような、その男のまなざしのせいかもしれなかった。だから答えたとき、ことばはひとりでに出てきた。「あなたのポルトガル語は、それほど悪くは思えませんでした。通訳が必要だとは思いません。でも実際、たまった休暇がずいぶんありますし、ブラジルがとても恋しいんです。心が動きます、考えてみます。でも言っておきますけど、もし行くとしたら、サッカーのスタジアムに使われたあの何億ドルものお金について私がどう考えているか、お伝えするいい機会になりますからね」

「わかりました。でも、それを言う前に、私の案内でスタジアムをひと回りすると約束してください」

3.29 ツアー

アントニオは窓を開けてから、ノートパソコンを膝にのせてベッドに腰をおろした。太鼓を打つような雨の音が好きだったし、川の暖かいにおいも好きだった。川の向こうでは、湿気が岸にひしめく家々の輪郭をかすませていた。マナウスは本当にきれいな町のようで、ひと回りするのに半日しかなかったのが少し残念だったが、ツアーの日程はレチ・ノルチが前もって決めていたので、当然それに合わせなければならなかった。ひとりの部屋なのもうれしかった。

少年たちはもう、自分たちだけで寝るといったことにはすっかり慣れていた。そして彼自身は、ツアーが思っていた以上に骨の折れるものだったと認めないわけにはいかなかったので――森の暮らしのおかげで体はとてもいい状態に保たれていたとはいえ、二十歳の若者たちとサッカーをするのは並たいていのことではなかったし、それにあの移動につぐ移動、あのでこぼこの水びたしの道、あの泥でぐちゃぐちゃのグラウンド――いくらかの静かな時間をしみじみ楽しんでいた。少年たちが目の届くところにいて無事だとわかっているときにしか落ちつけないことは、もうわかっていた。知らないうちに、こんなに父親の本能があったんだな。

だが、その晩泊まっているホテルはこぢんまりとして静かで、これまでのいくつかの町で切りぬけなければならなかった、いかがわしいディスコや煙たいゲームセンターの危険な誘惑とは無縁だった。若者たちの当然の好奇心や楽しみたい気持ちと、彼らがまったく備えのない状況や場所がもたらしかねない危険とのあいだで、難しい釣りあいを探しながら。監督というより年寄りのおばさんだな、と彼は思った。その酒は強すぎる、気をつけろ、あの機械は金を食うぞ、ちかちかする明かりにだまされるな、いや、あの女の子たちは君の相手じゃない、あそこにいるのは、仕事をしてるんだ、そう、放っておけ、それから君はシャツを着ろ、ここじゃ上半身裸で食事に行っちゃいけないんだ。年寄りのおばさん、付き添い役、女子修道院長。だがいまは何もかも順調だった。

たぶん三部屋に分けられていたにもかかわらず、みんなひと部屋にかたまって、テレビのリモコンとスマートフォンを奪いあっているのだろう。そのスマートフォンで、彼らは自分たちの写真を飽きずに眺めていた。ガブリエリータが感心するほど根気よくレチ・ノルチの映像から切りだして、彼らの名前で開いたインスタグラムのアカウントに載せている写真で、モアシルもときどき自分で撮った写真をアップして協力していた。

アントニオは頭のうしろの枕をととのえなおした。まあ、これも終わった、と彼は思った。それも、とてもうまくいった、いや、すばらしくうまくいった。全試合に勝つのはもう当たり前になっていて、アントニオはときどき、対戦したチームが聞かされていたよりも弱かったのではないかと思うことがあった。いずれにしても、明日が最後の試合で、それからマカパに戻る。ヤマンデは、すべて予定どおりにいっていれば、僕たちが着いたらすぐに退院する。あと何日かで段取りをつけて荷物をまとめて、それからいよいよ家に、森に帰るんだ。

彼はほほえみながら、コンピューターで森を探しにいった。姪に使い方を教わったあのグーグルマップは、いまだに魔法のように思えた。飽きずにジャリ川をたどり、とうとう見つからなかったあの名高い210号線の道筋を追い、ツアーの行程、ベレン、トゥクルイ、アルタミラ、サンタレンを見なおし、地図を広げてブラジル全体を、南アメリカ全体を上から眺めた。それからまた範囲をしぼっていく、もっと、もっと、森の濃い緑へと。よく見れば、イビラアタンを首から下げて川へ行くジャナイナや、狩りから戻るピアタや、ハンモックでうとうとしているイタタクアラが見えるかもしれないとでもいうように。

世界をこんなに上から眺めていたら、ポランガ・パジェだってうらやましがるだろうと思って、彼はひとりで笑った。

せめてこの、僕たちのちっぽけな世界のかけらを守る方法が見つかるだろうか。あの果てしない緑を眺めながら、彼は自問した。僕たちのような部族が、ほかにいったいいくつあるんだろう。彼は検索をかけ、リンクをクリックし、それから別のリンクを、また別のリンクをクリックした。ますます不安になり、とまどった。彼が思ってもみなかったほど大きな「インディオ問題」について語るページが、何十、何十とあった。

森の暮らしの前の人生でも、もちろん耳にしたことはあったが、あまり考えたことはなかった。耳にはするけれども自分にはまったく関係のない、たくさんのことと同じように。その裏に、これほど込みいって議論の分かれる問題があるとは、まったく気づいていなかった。

自分がほとんどインディオになってしまったせいで、彼はそういうページをかなりの動揺とともに読んだ。一方では、人生の大半そうだったように、教育を受けた都会のブラジル人として、情報や意見のなかを距離をおいて冷静にかきわけようとしながら、この問題について読んでいた。もう一方では、彼自身が、彼の家族が、友人たちが当事者として巻きこまれているのを感じて、怒りと動揺に押し流されないようにするのに苦労した。彼はコンピューターを消し、ベッドに横になって雨の音を聞いた。マカパに戻ったら、あのグリーンピースの女性、あのマリアナに会わなきゃ。彼女はこの問題にずいぶん取り組んできたんだから、感情に流されすぎずに、少しはましに理解する手助けをしてくれるかもしれない。

そして感情といえば、と眠りに落ちかけながら彼は思った。ずいぶん久しぶりにイザベルの声を聞いて、うれしかったけれど、思っていたよりずっと心は動かなかった。彼女が彼を探しあてて電話をくれたのはうれしかったし、まさにここ、マナウスにいて、翌日の試合のあとでいっしょに夕食をとろうと誘ってくれたのは、なおさらうれしかった。だが、何年も前に彼女に断られてどれほど落ちこんだか、あの晩自分がどれほどばかで不器用だったかを思うと、何もかもとても遠く思えた。記憶のなかで、まったく別のアントニオが動いているのを見ているような気がした。そして彼は、ふいに気づいた。そのときまで、明日はあの晩の緑のドレスの女の子にまた会うのだと思っていたのだ。ばかだな、彼女にだって歳月は流れてるに決まってる。もう四十を過ぎて、結婚して落ちついた奥さんになってるだろう。彼は、彼女の名字をまったく覚えていないと思いながら眠りに落ちた。

3.30 マナウス

イザベルは生まれてこのかた、飛行機で眠ったことが一度もなかった。こわいのではなかった。それどころか飛ぶのが大好きで、重さや重力のあらゆる束縛から解きはなたれて、世界の上をそんなに高く舞っていくのは、どこか胸のおどることだといつも思っていた。彼女は落ちついて自分の席に座り、どんなに長い便でも起きていて、景色を、夜ならほかの乗客たちを眺めていた。上映される映画を見ることはめったになく、本を読むことはさらにまれだった。イザベルにとって、飛行機は観察と内省の場所だった。

いっぽうヒューバートは、離陸のあいだにもう眠ってしまい、「うるさい」客室乗務員の出す「ひどい」食事を食べるための短い休憩を二度とったほかは、リクライニングさせた座席で大いびきをかきながら寝返りを打ってばかりいた。一時間以上前から、ふたりは森の上だけを飛んでいて、イザベルはぞっとすると同時に魅せられていた。緑の海は本当に海なんだ、ほら、いや大洋だ、どちらを向いても見わたすかぎり広がっていて、あまりに単調なので、ほんの少しの変化にもすっかり注意を奪われてしまう。アントニオは遭難者だったんだ、と彼女は気づいた。あの下で十四年間、あのなかで迷子になって、いったいどんな気持ちだったんだろう。イザベルは若いころをあの緑の世界のへりで過ごし、何度もそれをかすめてきたのに、いまそれに身震いしていた。私、どうしちゃったんだろう、と彼女は自問した。この急なもろさはいったい何？

ヒューバートがいきなり寝返りを打って、またうなり声を漏らし、イザベルのふくよかな腕に頬をのせてきた。イザベルはほほえんで、一ミリも動かなかった。それどころか、乱れた前髪を少し直してやりたい気持ちをこらえてから、また木々のこずえに注意を戻した。

マナウスの暑さと息苦しい湿気が、川と果物のけだるいにおいとともに、ふたりの古い知りあいのように彼女を迎えた。ロバートは同じ意見ではなく、空港とエアコンの守りから出たとたんに、ふうふう言って滝のような汗をかきはじめた。イザベルはわが家にいるような気がしていた。故郷の土地のあらゆる熱が足から流れこんできて、体じゅうでふるえるのはなんて心地いいんだろう、と思って、ひとりでほほえんだ。高揚感は刻一刻と高まって、タクシーで、マナウスには来たことがないのに見覚えがあるように思える通りを走っているときに頂点に達した。色も、音も、顔も、何もかもがわが家にいるという感覚と彼女の幸福感に一役買っていた。

そして、認めなければならなかったが、ロバートの居心地の悪さも、少しばかりひねくれたかたちで一役買っていた。それが彼女に、優位に立って主導権を握っているという感覚を与えていたのだ。

だが翌朝、ヒューバートは別人になっていた。汗をかくのをやめ、晴れやかな笑顔が顔を輝かせていた。

「ブラジルで仕事をするようになってから、いつもこうなんだ。最初の何時間かはひどくつらいんだけど、それからどういうわけか体が慣れて、すごく調子がよくなる」

「でも、ゆうべは眠れたの？」

前の日、十時間の飛行のほとんどを眠っていたのに、そのあと寝つけたなんて、イザベルにはありえないことに思えた。彼女自身はずいぶん遅くまで起きていたのだ。

「うん、うん。僕は寝坊助でね、二十時間くらいぶっとおしで眠ることだって珍しくない。それにいまはほんとに調子がいい、ほとんどブラジル人になった気分だ」

「たしかに、なまりもよくなったわね！」とイザベルはからかった。

会話は朝のあいだずっと心地よく続いた。いっしょに朝食をとり、それからゆっくりと市のスタジアムのあたりへ移動した。だが町じゅうにのんびりした穏やかな空気が流れているのに、スタジアムのあたりでは何かが起きていた。施設へ通じる大通り沿いに、抗議のプラカードを持った小さな人だかりがいくつもできはじめていて、暴動鎮圧用の装備をした多すぎる警官たちに見張られていた。「恥を知れ」「ワールドカップにゴール／ブラジルは敗退」

「敬意を！」「カップは誰のため？」は、イザベルとヒューバートがいっしょに眺めた横断幕のほんの一部だった。ヒューバートは、正体を見破られはしないかと少し心配していた。

「さあ、あの人たちがまちがってるって言ってみて」とイザベルが不意に言った。

「まちがってるさ、せいぜい地元の新聞にしか載らないこんなプラカードの二枚や三枚で、本当に何かが変えられると思ってるならね」

「中身のことを言ってるのよ。スタジアムに使われたあの何億っていうお金は、別の使い方ができたってこと。ここじゃ、貧しさと見捨てられたせいで死んでいく子どもたちがいるのよ、わかってる？」

「そう、それについてもまちがってる。お金はスタジアムのためのものだったんだ、ほかの計画はなかった。そして手に入れたのがこれだ。きれいで近代的なスタジアム。ブラジル人はサッカーが好きか？　好きだ。テーブルの上にある論点はそれだけだ。この国に広がる貧困や、きみが僕よりよく知っているあらゆる矛盾を見るのがうれしいと言ってるわけじゃない。今回は巨大な権力の仕組みがブラジルに触れたんだ、そして僕にも、たぶん誰にも、どうすることもできなかったと言ってるんだ。僕がしたこと、こういう仕事を担当するためにブラジルに移ってきたときからずっと頭にあったのは、ブラジルに最高のものを与えることだ。いまの技術でできるかぎりの持続可能性、資材の再利用、できるかぎり少ない環境への負荷。ブラジルが手に入れるのはそれだ。世界でいちばん美しいスタジアムだ」

「誰も使わないスタジアムね」

「わかってる、そういうことも起こりうる。でも今度のことでは、それを防ぐために僕の力でできることは何もなかったんだ」

開場式そのものは、ごく簡素におこなわれた。アマゾナス州知事がその日を記念するプレートの除幕をし、レチ・ノルチが特集でその模様を伝えたが、ヒューバートは目立たないところにいて、公式写真の何枚かに背中が写っただけだった。抗議は狙った効果をあげず、結局、千人をわずかに超える抗議者は、およそ二万人の駆けつけたファンにはるかに数で負けた。

試合は七対七なので、ピッチはスタジアムの南半分に九十度回転させて設けられ、ゴールは、いずれタッチラインになるはずの線の上に置かれていた。ピッチの北半分は、工事の完了を待っていて、まだ一部が使えなかった。

キックオフの前に、ふたつ目の小さな式典がおこなわれ、インディオのチームのキャプテンのスピーチで締めくくられる予定になっていた。

選手たちがピッチに入ってきたとき、イザベルは、レチ・ノルチがどれほどのものを手にしているのかを悟った。うまく使えば、世界規模のメディア現象になりうるものだった。インディオたちは上半身裸で、体と顔をさまざまな色に塗って現れた。みんなとても若く、誇らしげで、踊りかと思うほどなめらかな歩き方をしていた。アントニオは――あそこだ！　なんて変わったんだろう！――マイクを手にして、少年のひとり、明らかにキャプテンに、何か言うようにうながした。少年が話しはじめるとすぐに、アントニオはさっと彼のほうを振り向いた。

インディオのことばは、彼女がこれまで聞いたどんなことばにも似ていなかった。とても高い音の集まりで、舌打ちと長くのばす発声がはさまっていた。そのすべてに、たいそう芝居がかった大きな身ぶりがともなっていた。何世紀も前、自然とのつながりを失う前は、私たちの祖先もこんなふうに芝居がかった話し方をしていたのかしら、とイザベルは思った。そして、少年の言ったことを訳すためにアントニオがポルトガル語で話しはじめたとき、彼女はほほえまずにはいられなかった。あなたも通訳なのね、アントニオ、運命ってわかる？

「僕たちは、お金が何なのか、売るとか買うとかがどういうことなのか、説明してもらいました。そして、それがわかりました。僕たちには妙なことに思えますけど」

アントニオの声は、イザベルには自信がなさそうに思えた。感動のせいなのか、何か別の、彼女には見分けのつかない感情のせいなのかはわからなかった。

「それから、森は僕たちのものではないと言われました。人がやってきて、森が自分たちのものであるかのように木を切っていくことができると。でも森は僕たちのものではない、月が小さくて若かったころからそこに住んでいる僕たちのものではないと」

イザベルは身震いした。あの子、何を言ったの？　少年が話すたびに、アントニオはだんだん長い間をとるようになっていた。訳そうとしていることばについて考えこんでいるかのように。少年がもうひとこと言った。アントニオは何秒か黙りこみ、少年にきっぱりとうながされてようやく、口を開く決心をした。

「僕たちは森を買うことはできません。でも、誰も森を買うことはできません。どうして空を、大地のぬくもりを、買ったり売ったりできるのですか？　その考えは僕たちには妙に思えます。空気のすがすがしさを、日の光を浴びた水のきらめきを僕たちが持っていないのなら、どうして誰かがそれを自分のものだと考えられるのですか？」

少年が次のことばを言うと、アントニオは少年の口からマイクを遠ざけて、何か言った。若者はそれにきっぱりと言い返した。ふたりはしばらく身ぶり手ぶりで言いあっていたが、やがてアントニオが、ほかのよりずっとぶっきらぼうで優雅さに欠けるふたつの身ぶりで話を打ち切った。キャプテンはためらうように見えたが、結局、不満げに顔をしかめて先を続けることにした。

イザベルは、気がつくと職業病を相手に遊んでいた。そのことばについては何ひとつ知らないのに、口調や、身ぶりや、それまでに言ったことから、アントニオと少年が何を話しているのか当てようとしていた。もしいま、とっさに訳を考えてみろと言われたら、アントニオには「もういい、ここはこんな話をする場所でも時でもない」ということばを当てただろう。だがもちろん、実際にはまったく別のことだったかもしれない。国連で長い年月を過ごしてきたが、あのことばに似たものは一度も聞いたことがなかったのだから。

アントニオは、見るからに落ちつきを取り戻して、また訳しはじめた。「でも今日、僕たちはこの新しいサッカーの家で最初にプレーするためにここにいます、森じゅうでいちばん大きなサッカーの家です、そして僕たちはとてもうれしいです。このために、僕たちは

大きな祭りの色を身につけてきました。とてもたくさんの人が僕たちのプレーを見てくれるので、とても胸がどきどきしています。みなさんにとっても、僕たちにとってと同じくらい楽しいものになるといいなと思います」

「あの子たちにとっては、まちがいなく楽しいだろうね」とヒューバートがイザベルの耳もとで言った。それまでのふたりの関係にしては少しなれなれしすぎるしぐさだったが、彼女はまったくいやではなかった。

「どういう意味？」と彼女は尋ねた。

ロバートは、少し前に買ってめくっていた雑誌を彼女に見せた。表紙にはアスー・カアーの少年たちが大きく載っていた（「なかにモアシルのポスター付き！」）。「いちばん苦戦した試合、それも最初の試合なんだけど、四対〇で勝ってる。楽しいに決まってるさ、同じレベルの相手とやってるんじゃないんだから。ほら見て。四対〇、五対〇、八対一、六対一……」

「でも、どうしてそんなに弱いチームを相手にこのツアーを組んだの？」

「弱い？　そうでもないさ。どうやら、どれもブラジル北部のリーグのトップチームらしい。アマゾナス州選手権、パラー州選手権、アマパー州選手権。ブラジルのセリエAでプレーしているのは中南部のチームだけだってことを考えれば、見つけられる最高の相手だったと思うよ」

そのあいだに、インディオのチームの最初のゴールがもう決まっていた。あまりにすばやい攻撃だったので、ロバートとの会話に気をとられていたイザベルは見逃してしまった。あの少年たちがいつも踊っているという印象は、彼らのプレーを見ていっそう強くなった。とても軽く、とてももろく見えるのに、その足からは並はずれた力強さのシュートやパスが生まれた。本能なのか、それとも速さなのか、いつも真っ先にボールにたどりつき、体に塗ったあの色のせいで催眠術のようで、彼女はピッチから目を離せなかった。

それに彼らの喜び方は本当に変わっていた。射手が弓を引きしぼる身ぶりをするのだ。そして、ほら、観客のなかにはもうそれをまねしている人たちがいた。

3.31 取り決め

「ごめん、まだ君たちみたいな食べ方にすっかり慣れなおしてないんだ」

アントニオのどこがインディオなのか、見てとるのは簡単ではなかった。彼らのような顔立ちではなかったし、髪は森ではとても珍しい明るい栗色で、肌はインディオたちより色が薄く、伸び放題のひげがあごからずうずうしくのぞいていた。それなのに彼は、議論の余地なくインディオになっていた。動きのせいなのか、声の調子のせいなのか、ほかの何かのせいなのか、イザベルはそれを自問しつづけていた。

「つまり……僕たちみたいな、っていうか、君たちが君たちになる前の僕たちみたいな……」

イザベルはほほえんだ。彼女とアントニオは、マナウスのかなり洗練されたレストランにいた。何年もたって再会していっしょに夜を過ごすのは、その日の午後の試合でアントニオの少年たちが目覚ましい勝利をあげたあとだけに、なおさら楽しかった。

イザベルがロバートに（いつからヒューバートと名前で呼びあうようになったんだっけ？変ね、思い出せもしない）その晩の予定を伝えると、彼はこう言った。「ちょっと上品すぎる店じゃないかな、彼は居心地が悪いかもしれない」

ロバートがアントニオの気持ちを気づかうのはすてきだったが、イザベルは、そのことばにこもったかすかな嫉妬に気づいて、まんざらでもなかった。

実のところ彼女は、アントニオが生きているとんでもない冒険のすべての成り行きを知りたくてたまらなかった。ロバートに言わせれば、知りたがりすぎだった。

「森では何を食べてたの？」とイザベルは、炭火で焼いたみごとなコステラにかぶりつきながら尋ねた。「なんでも食べてたんでしょうね、虫まで！」

「でも全部の虫じゃないよ」とアントニオは答えた。「おいしいのだけさ」

イザベルは、アントニオが冗談を言ったのだと思って大笑いした。「もう、まじめに答えて」

「まじめだよ。なんでも食べるんだ、虫も、幼虫も、魚も、鳥も、爬虫類も、両生類も、哺乳類も、挙げきれないくらいたくさんの植物も……それに、郷愁のせいかもしれないけど、ああいう味が恋しくてね、君たちが食べてるこういうものは、いつもちょっとずつ同じ味がする気がするんだ。それにどれもちょっとしょっぱすぎる」

イザベルは初めてアントニオの目をまっすぐ見た。もしかすると、生まれて初めて。

「信じられないくらい変わったのね。いえ、あの緑の大洋で遭難していたことを考えれば、まったく信じられることなんだけど、それでも自分の目で見るとびっくりするわ」

「君もずいぶん変わったよ。君は……話し方がおもしろいね、なんていうか」

いつも新聞記事を書いてるみたいだ、とアントニオは思った。こんなふうに大げさな言いまわしをする人だったっけ。それに、こんなに堂々とした体つきだったっけ。時がたったせいかもしれない、目尻の小じわと同じで。

少し沈黙があって、それからアントニオがまた話しだした。「とにかく、芋虫は……」だがイザベルが笑顔でさえぎった。「ゲテモノの話はもうおしまい、いい？」

「ゲテモノなんかじゃまったく……」

「それより、あなたのあのとんでもない子たちのことで、何かおもしろい話を聞かせて。私たちの世界になじむのに苦労した？」

「思ってたよりずっと楽だったよ。何年も話して聞かせてきたのがよかったのかもしれない。もちろん、まだわからないこともある、たとえばごみだ。森ではごみといえば、しゃぶりつくした骨がひとつかみと果物の種くらいだから、紙や瓶やたばこの吸いがら、道に落ちてるごみが理解できないんだ。でも、とまどって当然のはずのことが、まったく平気だったりする。わかりやすい例がサッカーシューズの話だ。僕はひどく心配して、長い演説を用意してたんだ。裸足でプレーするのはもちろんすばらしいことだけど、相手がスパイクのついたシューズをはいていたらすごく危ないんだって説明するためにね。インド代表が裸足でプレーさせてもらえなかったから一九五〇年のワールドカップに出なかったっていう伝説まであるくらいで……ごめん、話がそれた。それで、どうやって説得するのがいちばんいいか何日も考えてたのに、ショッピングセンターのスポーツ売り場に着いたら、みんなわれ先に試しはじめて、聞いてきたのはこれだけだった。『でもほんとにレチ・ノルチが買ってくれるの？　僕たちがお金を払わなくていいの？』って」

「はは、でもどうしてだと思う？」

「まあ、テレビで見た偉大なサッカー選手たちにできるだけ似せたかったんだろう。こっちに来てから、試合をひとつも見逃さないんだ」

「かわいいわね。でもねえ、『買う』と『お金』といえば、本当にあんなことを言ってたの？　それに、あの子のスピーチ、森をあなたたちで買うっていう話は？」

「あれは……不意をつかれたんだ、正直なところ。通訳に集中してたし、部族のことばから訳すのは簡単じゃないんだよ。森の暮らしにはぴったりのことばなんだけど、こっちの暮らしにはまったく向いてない、わかるだろう？」

「よくわかるわ、私にもよくあることよ、ポルトガル語と英語とスペイン語とフランス語はずっと似てるけど」

「あの子が何を言おうとしているのかに気づいて、やめるように言ったんだ」

カイピリーニャで少し開いたイザベルの瞳が、じっと彼を見つめた（少しじっと見つめすぎだ、とロバートなら言っただろう）。

「そう。でも私の理解が正しければ、あの子たちは、あなたたちは、未接触部族の出身なんでしょう。お金を稼ぐとか、森を買うとか、なんていうか、『西洋的』な考えに思えるけど。この十四年で、あの子たちに金融の講義でもしたの？」

アントニオには一種の警報装置ができあがっていた。インディオや森の話になったり、西洋の文明と先住民の文明のちがいの話になったりすると、話し相手からきまってにじみでる優越感に、すぐかっとなってしまうのだ。彼は少し間をおいて、イザベルの顔の丸みのある輪郭と、かすかな笑みを眺めた。

警報は鳴らなかった。

「レチ・ノルチが契約を持ちかけてきたときに、僕が思いついたことなんだ。あんまり単純で、恥ずかしいくらいさ。結局、手もとに残るのは数千レアルだけで、問いあわせをする最初の役人に払う分にも足りない」

イザベルの携帯電話が鳴って、アントニオを飛びあがらせた。人がいつでもどこでも携帯電話を持っているということに、彼はまだ慣れることができなかった。

イザベルは少し顔を赤らめて、英語で電話に出た。アントニオはもともとそれほどよく知らず、十四年間使っていないことばだったが、ことばを知らなくても、彼女の声の調子が軽く、はずむようになったのはわかった。男だな、と彼は察した。

イザベルはもうすぐそいつのハンモックの隣に自分のハンモックを吊るすだろう。

それに、英語のことばもいくらかは頭に残っていた。バイイング・ザ・レインフォレストって、森を買うって意味じゃなかったか？　アントニオが森を買いたがっていることを話してるんだろうか？　よくわからなかった。からかわれてるんだろうか？

今度も警報は鳴らなかった。

電話が終わると、彼は説明を求めた。「君たちも森をひと切れ買いたいのかい？　何をするために？」

イザベルは居ずまいを正して、またまじめな顔になったが、目の光は消えなかった。「アントニオ。マナウスの魔法みたいな空気のせいか、ただのカイピリーニャのせいかもしれないけど、いまから大胆な提案をするわ」

アントニオにはわけがわからず、ばかなことを言うのがこわくて黙ったまま、先を続けるよう、うなずいてうながした。

「森の一部を買うっていうこの件で、あなたを助ける方法がわかってると思うの。前に、アマゾンの森を守るためのプロジェクト・ファイナンスのモデルを研究する国連のプロジェクトで働いたことがあるの。専門家じゃなくて通訳だったけど、いくらかは学んだし、そのための財団を立ちあげる方法はわかってると思う」

彼女はアントニオの驚いた顔にかまわず続けた。「あなたたちがいくら持ってるのか正確には知らないけど、少なくともプロジェクトを始めるだけなら、少しのお金でじゅうぶんよ」

イザベルには、アントニオの頭のなかで何百万もの考えが、真っ先に口から出ようと争っているのが見えるような気がした。「でも本当かい？　僕も問いあわせてみたんだけど、数千レアルぽっちじゃ何もできない、せいぜい、僕たちにはあまり関係のないまったく別の場所でもう進んでる計画に乗っかるくらいしかできないって理解したんだ。お役所仕事の狂気は言うまでもなくね」

「お役所の壁は越えられるわ、まさにその点で私があなたを助けられるの。それにもちろん、お金は多ければ多いほどいい、それを否定してるわけじゃない、あなたが宝くじで十億レアル当てたら何もかもずっと簡単になるでしょうね。でも始めるだけなら、あなたたちのお金できっと足りると思う。そのあとはスポンサーか何か資金の道を見つけなきゃならないけど、それについてももういくつか考えがあるの、レチ・ノルチも興味を持つかもしれない。いずれにしても、どこからともなく現れて誰よりもうまくサッカーをするインディオの一団っていうすてきなおとぎ話は、きっとたくさんの人の心を打つわ。たとえば私の心は打たれたもの」

「つまり、君の助けがあれば、僕たちの森を自分たちで買えるかもしれないってことか。そういうことなんだね」

「そう。信用できなくても責めはしないけど、それでも言うわ。信じて。あなたたちのお金は、私のポケットにも、ほかの誰のポケットにも入らない。いつもあなたが直接管理するか、運営に助けが要るなら、あなたが信頼する誰かが管理するの」

「どうしてそこまでしてくれるんだ？　つまり、君の暮らしはニューヨークにあるんだろう、それがずっと望んでいたことじゃないのか？」

「わからないの、ねえ。いまの暮らしにたどりつくために、たくさん勉強して苦労したし、たくさんの人やものもあきらめた。いまはその苦労の重みを感じてるの。それにブラジルが恋しい。この国の人たちの詩が、エネルギーが恋しいの。それに、うまくいってないことをよくするために、何かができる立場にいるような気がするの。だから、あなたが突然現れたのがひとつのしるしに思えたのよ。ロバートが私の人生に現れたのもしるしに思えたように……」

「あの電話の？」

「ええ」とイザベルはほほえんで言った。「そんなによくわかった？」

「君が彼のハンモックの隣にハンモックを吊るしたのはわかったよ」

「あはは、すてきな言いまわしね！」

「うん」

「ううん」

「ううんって、何が？」

「私のハンモックは、彼のハンモックの隣に吊るしてない」

「でも吊るしたいんだろう」

「どうかしら」

会話はその晩ずっとなごやかに続いた。イザベルは、アントニオの森での冒険の話も、町に着いてからの冒険の話も、大いに楽しんで聞いた。アントニオがテレーザとラジオの話をしたときには、涙が出るほど笑った。ふたりは細かいことを全部決めるために近いうちにまた連絡をとりあうと約束して別れた。アントニオは、できるだけ早く森の家族のもとへ帰りたいという望みを口にしていた。そして、その家族がいて、彼がそれをあんなにいとおしそうに話すということが、ほんの小さな失望の痛みでイザベルを刺した。彼女はそれをできるだけ早く忘れようとした。

3.32 帰還

「豆をもう少し足して、ジャニータ。あのサッカーの旅から帰ってきてから、あの子たちますますおなかをすかせてるみたい、たくさん体を動かしたからでしょうね」

マルセラは唇の上の汗をぬぐった。あの台所はいつもひどく暑かった。「それからピーマンももう少し、野菜は体にいいから」

彼女はソースをていねいにかきまぜながら、イタロに店でビールを二ケース買ってくるように言ったかどうか思い出そうとしていた。「ジャニータ、誰か洗濯物を干した？　すぐにもう一回洗濯機を回さなきゃ、汚れものの籠がはちきれそうなのよ」

「ええ、洗濯物はウビラタンが干してくれた。あの子はそういうことにいつも気がつくの」

「よかった、いい子ね。ピライ、その玉ねぎはもっと薄く切らなきゃ。ほら、こう。そう、完璧」

この子は本当に料理が上手になってきたわ、とマルセラは彼の肩をそっとなでながら思った。これを仕事にしたっていいくらい、きっと好きになるわ。アントニオはまるで興味を示さなかったし、アマンダはひどく不器用だったし、ジャニータはそのかわりとてもきちょうめんで頼りになるけれど、想像力がまるでなかった。そう、この子は本当にいちばん料理に向いてるわ、私の――マルセラは驚いて、少し動揺して、考えを途中で止めた――私の子どもたちのなかで、と自分に言いかけていたのだ。

彼女は首を振り、ほほえんで、お玉を鍋に沈めた。台所は本当に暑かった。それに、まだファロッファをつくらなければならなかった。みんなに足りるように少なくとも一キロ。洗濯機、ほんとに回すのを忘れないようにしなきゃ、でないと清潔な短パン七枚なんてどこで見つけるの。彼女はため息をついて、汗ばんだ髪のひと房をかきあげた。ああ、もう若くないのよ、マルセラ、十人の家族の世話を焼いたあとで、夜に疲れていたって不思議はないわ。いいえ、十一人、十一人よ、いまは退院したヤマンデもいるんだもの、元気になって神さまに感謝しなきゃ、あんなにいい子なんだから、本当にかわいそうなことになるところだった。

ヤマンデは退院してからずっと、顔いっぱいに笑みを浮かべていた。あれほど長いあいだ、無数の驚異や奇妙なものの話を、あれを知ってるか、これを見せたかったよ、という話をただ聞くことしかできなかったのが、ついに自分の目で見て、仲間たちがもう少し飽きかけていることまで全部試せるようになったのだ。彼は、また動くようになった脚ではずむように歩きまわり、遊園地の子どものようにうれしそうな目をしていた。治ったからには森へ帰ると言われていたが、彼にはそんな気はまったくなかった。友だちがしたことを全部見て、試してみるまでは。

前の晩、彼はウビラタンとイタウナとけんかになりかけた。ふたりが、もうすぐ村に帰る、すぐにだ、という話をいつまでもやめず、女に、赤ん坊に、母さんに、兄弟に、長老に、いちばん最近生まれた子に、ひょっとしたらあのうるさいイタタクアラにも、いや、アリクイやクモにだって早く会いたいと言っていたからだ。なんて退屈な友だちだ。

味方にはモアシルとカウエがいた。ふたりは、それほど急いで森へ帰りたがっていないようだった。このところやってきたようにサッカーをするのがとても気に入っていて、アントニオがふたりにほのめかしたこと――あとで彼がどれほど舌を噛んだか、ふたりは知ら

なかった――をもてあそんでいた。ツアーのあいだに彼らのプレーを見て、二、三のチームが、少年たちに契約の気があるかどうか知りたいと彼に連絡してきたというのだ。

それに、もしふたりが迷っているようなら、ヤマンデはもうわかっていた。自転車のことを口にすれば、モアシルは森のもつれた茂みを思って顔をしかめるし、ガブリエリータの話をすれば、カウエの顔にあの名高いハンモックへの望みがまた灯るのだ。

それに実は、ハンモックといえば、ヤマンデ自身にも、理学療法士のジョアナにまた会いに行こうかという気がなくもなかった。あんなに背が高くて大柄で、あの大きくて軽やかな手をした彼女なら、ひょっとしたら、ひょっとしたら、ポルトガル語を教えつづけてくれる気になるかもしれない。

アントニオは、夕食に家へ帰る前に、イザベルにもう一杯ビールをどうかと勧めた。両親だけで少年たちと夕食をとらせ、ことばもわからないまま彼らの不機嫌やちょっとしたけんかをときほぐさせるのは、少し気が引けた。両親はもう彼ら全員のために、本当に、本当によくしてくれていた。それにジャニータも、ひとつやらかしては百も企むでっかい若者の一団の姉代わりになってしまって、いくら辛抱強くて愛情深いとはいえ、ときどき我慢の限界の兆しを見せはじめていた。

イザベルは喜んで応じた。彼女も夕食には別の予定があって、ロバートと泊まることにしたホテルに戻って着がえる時間に間にあわせたかった。アントニオは明らかに、話し相手の服装にまったく注意を払っていなかったが――たぶん頭のなかでは、みんなそよ風だけを肌にまとった裸で自由な姿に見えてるのね、と彼女は夢見るようにくすくす笑って思った――ロバートはきちんと装った女性を好んだし、彼女は彼がそれを好むのが好きだった。

会話はなごやかに続いた。アントニオはもう、自分たちのささやかな森の一部を保護するための法律面や実務面を引き受けるというイザベルの提案が、実際に進める唯一の道であるだけでなく、見つけうる最善の道だと決めていた。彼はすでにイザベルとマリアナを引きあわせていて、ありがたいことにふたりはとても馬が合ったので、ふたりの力を合わせればきっとうまくいくだろう、少なくともアントニオはそう願っていた。

もちろん、件をすべて片づけるには少し時間がかかるだろうし、村への帰りは延ばさなければならなかったが、アントニオは少なくとも書類に署名し、イザベルとマリアナの仕事を承認するために、どうしても連絡のつくところにいなければならなかった。もし彼がまた森に消えてしまったら、計画は始まりさえしなかっただろう。

待たなければならないのは少し残念だった。ヤマンデがすっかり元気になったいま、ごく近いうちに出発の予定を立てられるものと、もう思いこんでいたのだ。ジャナイナとイビラアタンにまた会いたい、村のかぐわしく音に満ちた緑にまた会いたい、使命を果たして部族のもとへ凱旋したいという思いは強くなっていて、ある意味では、本当に出発が待ちきれなかった。

だが彼をなぐさめてくれるもの、考えるだけで目が輝くほど確かななぐさめがあった。もう少しマカパにいるということは、ワールドカップを見られるということで、まあ、それはとても取るに足りないことだなどとは言えなかった。とはいえ、考えるだけで笑いがこみあげてきた。母親と、姉と、父親が、彼と居間に座って、行儀よくテレビの前に輪になった七人のインディオといっしょに、窓を開けはなち、旗を用意して、パンツ一丁で、みんなでピーナッツとビールを手に、応援しているところを。

3.33 叫び

バスの端から端へ響きわたる叫び声と笑い声。道路の千の物音は消えてしまったように思える。若さと屈託のなさの立てる物音におおわれて。そして頭のなかでは、もうわかっている。あらゆる叫びのなかでいちばん晴れやかで、いちばん高揚した叫びは、ひと月後に自分たちの喉からほとばしる叫びになることを。まだ世界の上に突き出るほど高くはないが、近い。スタンドの果てしない広がりの上に視線をめぐらせて、自分はてっぺんにたどりついた、これより高くは行けないと悟れるほど高くまで登れるのは、いちばん強くて勇敢な者だけだ。その感覚をまだ一度も味わったことはないが、何度も話に聞いてきた。そして今日は、彼らがその偉業を成し遂げなければならない強くて勇敢な男たちだ。もうすぐ、まわりを取り囲む白いネットを突き破るのは彼らだ。そして世界の屋根に登るのがどんな気持ちかを子どもたちに語るのは彼らだ。

笑い声と自分たちを励ます叫びの音がすべてをおおう。ただくつろぎたかった者のイヤホンから漏れる音楽の音を。待ち受けている務めにも気をとめず、隣の者とおしゃべりする者の音を。そして、車体の力強い重みの下でしなり、それから折れる、何か金属のものの音を。

それから一瞬の静けさがあり、それから音は醜くなり、騒音になる。あってはならない騒音に。ほかの金属の部分が折れる騒音、恐怖の騒音、すさまじい激突の騒音。そして苦痛と絶望の叫び。

第4章

4.1 とはいえ

バスはひっくり返って、車道のへりに車輪を上にして横たわっていた。側面の片方が、誰かが鍵のかわりにチェーンソーで引っかいていったかのように裂けていた。

現場に最初に着いて、助けようと車から降りたドライバーたちは、側面に描かれたブラジルの色に気づいた。それから誰かが、バスが真新しいらしいことと、目前に迫ったサッカーのワールドカップを宣伝しているたくさんのバスとは絵柄がちがうことに気づき、また別の誰かが「備えよ！　六度目がやってくる」という文字を読んだ。それは代表チームの公式スローガンに選ばれた文句で、一九五〇年の惨敗を覚えている人々のあいだに多くの物議をかもしていた。

「全部のバスにこれが書いてあるんじゃないか？」

「わからない、わからない、縁起が悪いって俺は言ったんだ」

疑いが大きくなるにつれて、救助の作業はますます慌ただしくなった。

三人のがっしりした男たちが、なかへ入りこもうと勢いこんでドアをこじ開けにかかった。最初のひとりがなかに入って、テレビで何度も見たあの顔に、それから別の顔に、また別の顔に目をとめたとき、確証が得られた。そして救助者たちの絶望の叫びが、助けを求める怪我人たちの叫びを圧するほどになった。

誰も死ななかった。とはいえ、まったくの悲劇だった。バスには、二週間後にワールドカップで初戦を迎えるはずだったブラジル代表チームがまるごと乗っていて、ほとんどすべての選手がどこかを切ったか折ったかしているようだった。最初のテレビのニュースやネット新聞の最初の記事から、通りやバールや職場での最初の議論から、誰もが同じように考えているようだった。話のはじめに、これ以上の悲劇にならなかったことにほっとしてみせる義務を果たしてしまうと、こんなにひどい打撃がブラジル代表にもたらしうる深刻な結果を検討することに移るのだった。そのせいで、その言いまわしはたちまち流行りことばになった。「誰も死ななかった。とはいえ……」

4.2 いいね

すべての同胞と同じように、ヤイアもまた、**ニュース**のあとの不信と絶望の渦に巻きこまれていた（それはたちまち**ニュース**になった。どのニュースかを言う必要などまったくなかった）。泣き顔の絵文字とびっくりマークでいっぱいのダニからのワッツアップのメッセージで、彼女はテレビをつけた。そして二時間、あらゆるニュース番組を、高速道路からの、病院からの中継を、外国の反応を、大統領の励ましのメッセージを見つづけた。そのあいだじゅう、ワッツアップやフェイスブックやツイッターや、携帯に入れているあらゆるアプリで友だちから新しいメッセージが届いたのを知らせる電子音が、ひっきりなしに鳴っていた。ラズルのチャットでもその話でもちきりで、オルクットの古い議論までよみがえっていた。それから、いきなり、彼女はテレビとコンピューターと携帯電話を消して、静けさを求めた。眠りたかったが、静けさは訪れなかった。台所から聞こえてくる騒ぎにかき乱されていたのだ。台所では両親と兄が、交通安全についての何かの法律をめぐって言いあっていた。何の法律なのかはわからなかったし、そのときはどうでもよかった。

大好きなスペルト小麦の殻入りの枕に頭をのせて、彼女は薄暗がりのなか、壁に貼った絵や写真をぼんやりと眺めていた。それは、十六歳の彼女の小さな部屋で進行中の変化を示していた。古参の世代でまだ生き残っている唯一のポスターは、思い出の愛着のほうが大きな理由で貼ってあるのだが、三年前にファビオからもらったジャスティン・ビーバーのポスターだった。ほかのものは、もっと大人びて、まわりの世界の問題を意識するようになったヤイアを示す写真や切り抜きに取りかえられていた。グリーンピースのポスター、額に入れたチタンスのコンサートのチケット、カミラ・バジェホとケネディの写真。スポーツの面は、代表チームでいちばんイケてる三人の選手の雑誌の切り抜きでおおわれていた。三人ともボールを手に、ほとんど何も着ずに、サッカー以外の資質を際立たせていた。その隣には、モアシルの写真があった。あのインディオの若者も、なかなか悪くなかった（ほんとに、ほんとに悪くなかった）し、テレビで見たところでは、ピッチの上でもとてもうまくやっていた。

彼女の視線はほんの一瞬ケネディに戻った。彼は、自分が国のために何ができるかを問うよう彼女に呼びかけていた。そしてまた、セレソンの三人のイケメンと、モアシルに。セレソンとモアシル。頭のなかではなく胸のなかでひとつの考えが形をなし、それからついに上へのぼってきて、すっかりはっきりした姿で現れるという、あの感覚とともに。

彼女はマックの電源を入れなおし、緑に塗った爪で机をとんとん叩いてうずうずしながら待ち、立ちあがるとすぐにフェイスブックにつないだ。少し検索すると、事故を悼むグループがいくつも見つかり、そのなかの「セレソンとブラジル全体のために祈ろう」には、もう二万人以上のメンバーがいた。それに、あれやこれやの選手の招集を支持するページがもう数えきれないほどつくられていて、良識ある人々がいつもの落ちつきをもって自分の意見を述べる議論であふれていた。「オレスチは最強だ、前に招集されなかったのが不当だった、この機会のために運命が彼を取っておいたんだ」「あいつが招集されたら、バスがまた事故を起こせばいいと思う」「おまえ生まれてから一度もサッカーの試合を見たことないだろ　;-)」「おまえ目が見えてないだろ　:-D」等々。

ヤイアはみかん色の前髪をかきあげて、まだ誰も自分の思いつきに気づいていないのを確かめて満足した。「ページを作成」をクリックし、「アスー・カアーをワールドカップへ送ろう」と書いて、カバーには、みごとなオーバーヘッドキックをしている少年のひとりのきれいな写真を選び、エンターを押して、満足げに自分の作品を眺めた。次にどうするか考えていると、ページにはもう最初のふたつの「いいね」がついていた。ファビオのいいね（そりゃそうでしょ！　二十秒もかかったなんて、かえって怪しいくらい。

そろそろ熱が冷めてきたのかしら？）と、いとこのパトリシアのいいねだった。それから、いちばんよくやりとりするいつもの友だちのいいねが続き、祖母のいいねまであった。ヤイアはハートを返して、こんな時間にまだ起きて何をしているのかしらと思った（でも、おばあちゃんのほうも私に同じことを思ってるかも、笑）。夜中の一時に、三十分で三十九のいいね。フェイスブックを始めてから、まちがいなくいちばんの大成功だった。ふだんは大反対の「このページをすべての友達に知らせる」ボタンの上で少しためらったが、今回は大義のためだった。送信をクリックすると、十五分で六十七のいいねになった。知らない友だちの友だち、フェルナンダ・グリーンピースとヴィトル・メネゼスとかいう人たちからの最初のふたつの評価が、彼女を大いに満足させ、満足とともにようやく落ちつきも訪れた。彼女はまたコンピューターを消し、枕に頭をのせるとすぐ、もう眠りに落ちそうだと感じたが、最後にひとつ考える時間はあった。明日の朝起きて、いいねが百もあったら、すっごくイケてるのに。

目が覚めると、いいねは千近くになっていて、六人のインディオのうち誰がセレソンを補強しにいくのにいちばんふさわしいか、どのポジションでか、という議論がもういくつか始まっていた。ヤイアは興奮して、ページの手入れをするために朝食を抜くことにした。六人ひとりひとりの写真を見つけ（アントニオはちらりとも考えずに外した。もっとも、考えたとしても、その考えは「歳をとりすぎてるし、それに本物のインディオでさえない」だっただろう）、六人それぞれのための投稿を六つつくって、その二十分で見つけられたわずかな情報で中身を充実させた。それから家を飛びだして、学校へ走った。

ブラジリアのサグラド・コラサン・ジ・マリア学院では、授業中の携帯電話の使用は厳しく禁じられていた。ヤイアは二年間一度もそれを破ったことがなかったが、その朝は、誘惑に抵抗するのがいつもよりずっとつらかった。最初の休み時間に、信頼できる友だちとトイレに駆けこんで携帯の電源を入れたが、迎えたのはがっかりする結果だった。千十二のいいね。ダニは信じられないという叫び声をあげ、レチシアも同じだったが、レチシアはヤイアのがっかりした顔に気づいた。「千のいいね？　すっごくイケてるじゃん、ありえない！　なんでそんな顔してるの？」

「ううん、今朝家を出たときにもう千だったの、もっと速く広まると思ってたのに。勢いがなくなっちゃったのかも。まあ、しかたないか」

「何言ってるの？　『ジャスティン・ビーバー大好き』とか『レオナルド・ディカプリオ結婚して』じゃないページで、千もいいねがついてる人なんて知ってる？　来週までずっと自慢してていいくらいよ、ほんとに！」とレチシアはなおも励まそうとしたが、すぐにほかのふたりににらみつけられた。宿敵マリア・エドゥアルダから受けた屈辱を、レチシアはよくも忘れられたものだ。エドゥアルダは、学校を紹介するいかにもおべっか使いのページで三千以上のいいねを集めて、校内記録を持っていたのだ。

「あ、そうか。いつも忘れちゃう。でもまあ、エドゥアルダのページはお父さんがいいねを買ったって、みんな知ってるじゃない」

「とにかく」と、もっと現実的なダニが話を打ち切った。「あきらめちゃだめよ。リンクはもうツイッターに貼った？　ワッツアップには？　まだでしょ？　さあ、このページを広めようよ、エドゥアルダの顔にちがうしかめっ面が浮かぶのを見たいんだから」

差出人：fernanda.silva @ greenpeace.br ── 時刻：10:39

宛先：［グリーンピースの仲間＋アミーゴス・ダ・テーハ］

件名：いいアイデア

ねえみんな、ゆうべ半分やけになってフェイスブックをうろうろしてたら、このページを見つけたの。「アスー・カアーをワールドカップへ送ろう」。いいアイデアじゃない？どう、広めてみて、どこまで行くか見てみない？

キスを

F

正午ごろ、目が覚めてまだ二十分もたっていないヴィトル・メネゼスは、コンピューターの前で朝食をとりながら、寄稿している地元ニュースサイト「ジョルナウ・ジ・タグアチンガ」に送る記事のネタを探していた。当然**ニュース**のことを書きたかったが、その話ばかりしている何千ものほかの記事とはちがう切り口を見つけようとしていた。そのとき、前の晩にいいねをつけたあのフェイスブックのページを思い出した。彼はそれを見つけなおし、ページをつくった女の子のプロフィールにざっと目を通して、これでいける、と思い、十分のうちに記事を送った。

一時五分、ベルが鳴るとすぐに、ダニは携帯の電源を入れて、すぐにヤイアのつくったページを探した。ひと目見てがっかりした顔をしたが、それから見まちがえたのだとわかった。メンバーの数が朝よりひと桁多かったのだ。友だちに画面を見せることさえせずに、彼女は隣のクラスまで走っていき、ちょうどマリア・エドゥアルダとすれちがって、厳しい現実をその顔にたたきつけた。「ヤイアのページはメンバーが一万一千人で、パパが買ったのはひとりもいないんだから！」

三時半、マナウスの中心部の自分の小さな部屋で、ジャシは、メンバーが一万六千人になっていたヤイアのページに行きあたった。ジャシは十三歳だった。二か月前まで、両親から古い先住民の名前だと聞かされていた自分の名前が、それほど好きではなかった。だが、すばらしくサッカーがうまいインディオたちのニュースが出てきて、そのひとりが自分と同じ名前だとわかってからは、それがすっかり自慢になり、森の昔の戦士たちとの血のつながりについて、わけのわからない話をあれこれつくりあげたりもしていた。テレビで放送された彼らの試合を全部録画していたので、今度はいちばん見ごたえのあるプレーを集めた編集映像をつくった。そしてそれを、「こんなチャンピオンがいれば、カップはぼくたちのものだ」というコメントをつけて、ヤイアのページにアップした。

夜の七時、ヤイアはコンピューターから目を離せなかった。二十四時間足らず前につくったページは、三万人以上のメンバーを集めていた。それにはJaci00のすばらしい動画も一役買っていた。彼は頭のいい男の子で、ほんの数分前までチャットしていたのだった。

翌日の午後、ダニとレチシアが彼女を迎えに来て、それから近くでいとこのパトリシアを拾って、お祝いに出かけた。ヤイアは有頂天だったが、少しばかばかしい気もしていた。お忍びの有名人になったような感覚を抑えきれなかったからだ。ああ、私が誰だか知ったら……

女の子たちが踊っているあいだに、世界じゅうの編集部で何千人ものスポーツ記者が、ヴィトル・メネゼスの朝の手柄を再現しようとしていた。ブラジル代表のバス事故という衝撃的なニュースについて書く、まだ誰も見つけていない切り口を探していたのだ。CNNの若い編集者で、ジョージア州アトランタのエモリー大学で人類学を学ぶ女子学生とつきあっているエルマー・ストッドは、最近脚光を浴びたあのアマゾンの部族について、何週間か前にジルと交わしたいくつかの会話を思い出した。ネットで情報を探してみて、まずJaci00の動画に、それからヤイアのページに行きあたった。これでいい記事が一本書ける、と彼は満足して思った。

ヤイアは朝の二時に帰宅し、縁起をかついで、携帯を確かめることもコンピューターをつけなおすこともせずに、まっすぐ寝床に入った。明日見てみよう、というのが最後の考えだった。

目が覚めても、彼女はまだ引きのばした。先生がひとり休みで、学校の始まりが二時間遅くなったのだ。ゆっくりシャワーを浴びて、それから牛乳とカムット小麦のパンとライムのマーマレードでたっぷり朝食をとった。そろそろコンピューターをつけに行こうかと考えていたとき、ドアをどんどん叩く音が聞こえた。開けたとたん、急いでいてヘアアイロンもかけていないパトリシアに押し倒されそうになった。「なんにも言ってくれないの？　わかってるの？」

「なんにも言わないって何を？　ページのこと？」

「そうよ！　今朝まだ確かめてないの？」

「うん……」とヤイアは、もう興奮にうずうずしながら答えた。

ふたりは部屋に駆けこみ、マックが立ちあがるのを待った。ヤイアはいとこのあわてぶりを見てくすくす笑っていた。フェイスブックを開いて、彼女はいきなり笑うのをやめた。

二百四十万七百十八のいいね。ページはCNN.comのニュースに引用され、そこから世界の主要な新聞すべてに次々と取りあげられていった。夜明けの線が地球の上を移ってその住人たちを目覚めさせていくにつれて。

ヤイアがとっさにしたのは、大統領のページにいくついいねがあるか確かめることだった。四十五万。はっ！　昨日までマリア・エドゥアルダと競争してたなんて。それから前の大統領のページを確かめた。七十六万五千。彼女のページには、セレソン自身のページよりも多くのいいねがついていた。

ひととおり比べおわると、ほかにどうすればいいのかわからず、からっぽになった気がした。一秒に百ずつ増えていくいいねのカウンターに催眠術をかけられて時間を過ごすこともできたが、彼女は、そのあいだにめそめそ泣きだしていたパトリシアのほうを向いて、抱きしめた。「それで、これからどうするの？」

数分後、母親が息を切らして部屋に入ってきて、電話を差しだした。「レチ・グローボの編集の人よ。あなたと話したいんですって」

4.3 招集

ベッドの脇の小さなテーブルに置いた携帯電話から、国歌が流れだした。監督が、彼をよく知らない者なら卑屈さと取りちがえかねない皮肉をこめて、ある一つの特別な番号にだけ割りあてていた着信音だった。

「ああ救い主イエスさま。またこの人は何の用だ？　ゆうべとちがうことを、いったい何が言えるっていうんだ？」

「ただ具合をうかがいたいだけかもしれませんよ」と、彼をベッドに寝かせなおしたばかりの看護師が言った。

「地球へようこそ、若い宇宙人さん」と監督は彼女に言いかえした。「あんたのいる銀河には、私心のない政治家なんてものがいるのかね？」

彼は、折れていないほうの腕に力をこめ、肋骨の痛みをできるだけ呼びさまさないようにしながら、やっとのことで体を起こした。テレビの音量を下げた。テレビには、ゆうべ国民に向けて話していることを、いまからまた繰り返すことになる彼自身が映っていた。そして電話に出た。「大統領！　今日もお声が聞けてうれしいです！」

長くて無意味な社交辞令のやりとりのあとで、監督は大統領に状況の最新情報を伝えた。といっても、それは前の日とも、その前の日とも同じだった。事態の特殊さを考慮して、FIFAは、ほかのすべての参加国の満場一致の同意のもと、招集メンバーのリストの決定についてブラジルに最大限の柔軟性を認めることにしていた。リストはいまや、ワールドカップ開幕の前日、六月十一日までに確定させればよかった。

事故に巻きこまれた二十三人の選手のうち、三人は、たいしたことのない打ち身や切り傷のほかはほとんど無傷だった。フォゲッチを含むほかの五人はもっと重い怪我で、最初のいくつかの試合には出られないが、ひょっとすると――ひょっとすると――大会の決勝トーナメントには間にあうかもしれなかった。残りの十五人は使いものにならなかった。脚、腕、頭、肋骨を折って、全員が二か月から六か月の診断だった。

「悲劇です、でも、とはいえ、みなさんが全員生きているのはやはり奇跡だと思います」と大統領は、ほとんどささやくように言った。監督は身震いしながらうなずき、報告を続けた。「スタッフと協議のうえ、招集する選手のリストをもう作成しまして、いま連絡をとっているところです。もちろん全員が、仲間の身にふりかかったことを残念がっています……」ああ、そうとも、残念でたまらないだろうさ、と監督は思った。決まってるじゃないか。「……しかし同時に、この大きな困難のときに、われわれの旗を高く掲げるために呼ばれたことを光栄に思っています。いずれもたいへんなレベルの選手ばかりですから、神とブラジルのトルシーダの助けがあれば、トロフィーはそれでもわれわれのものになると確信しております」

監督は頭を一時停止にして、最後のお決まりの無意味な激励の文句、国民はあなたがたに期待しています、なんとかかんとか、を聞き流す準備をした。ところが、大統領の小さな咳ばらいに不意をつかれた。大統領は声の調子をととのえて言った。「ええと。そのことなんですが……」

「どいつもこいつもばかなのか？　どいつもこいつも**完全なばか**なのか？　おい、そこの、何だ、名前は！」と監督は看護師に向かって言いはなった。彼女は隅で、壁のへこみと、部屋の半分に散らばった携帯電話の残骸とのあいだで、呆然と視線を行き来させていた。

「ナタリアです」

「ナタリア、ちょっと教えてくれ。俺たちの事故のあと、俺が気を失ってるあいだに、ひょっとして国じゅうがテーブルに頭をぶつけて、いま俺たちは二億人の大ばかに囲まれてるのか？」

「そ……そうは思いません」

「いや、そうとでも考えなきゃ説明がつかないんだよ、聖母マリアさま、神さまよ」

彼は小さなテーブルの携帯電話を取ろうとして、たったいまそれを壁に投げつけたことを思い出して、がっかりした。

「ロシータ、ちょっと電話を貸してくれないか？」

「仕事中は持ち歩いていないんです」とナタリアは、iPhoneの残骸を見つめたまま嘘をついた（シコならもう一度組み立てて、動くようにできるかしら、と彼女は思った）。

「かまわん、どうせもう番号ひとつ覚えてないんだ、いまいましい技術め！　いいか、ちょっと頼みがある。ここに入院してる選手のところへ行って、監督がチアゴに電話してすぐにここへ来させろと言ってる、と伝えてくれ」

「わかりました」

「それから新しい電話を持ってこさせろって言っとけ！」と監督は彼女の背中に怒鳴った。ナタリアが急いで部屋を出ていくと、彼はまたひとりでしゃべりはじめた。

「フェイスブック。ツイッター。ネット。ちくしょ……いったい何をぬかしてやがるんだ？　ああもう、全部ぶっこわしてやる、ぶっこわしてやる。神さま、こんなことを思いついたばか野郎をこの手でつかまえさせてくれ！」

4.4 チアゴ

チアゴは、届けたばかりの上等なスーツを監督が着るのを手伝った。

「わかってるのか？　大会が始まるまであと何日もない、ほとんどゼロからやりなおさなきゃならないってのに、この頭のおかしい連中のせいで、こんな……こんな……インディオをワールドカップへなんて請願のために時間をむだにさせられるんだ！　わかってるのか、まったく神さまよ？　いてっ、ちょっと気をつけろ！」

監督は堰を切った川のようで、チアゴは、何を言われてもただ着がえを手伝ってうなずくだけだった。

「こいつらがフェイスブックで請願をやって、俺はそれを、まじめな話みたいに聞いてやらなきゃならない。世の中は完全に狂っちまったんだよ、まったく！　いたっ！」

チアゴはうなずき、監督が一瞬もじっとしていないことを考えれば上出来なくらいに、ネクタイを結んでやった。

「しかもなんて請願だ！　ポルトガル語も話せない、生まれてから一度も本物の試合をしたことのない若造の一団だぞ。いっそFIFAをイタリア人かドイツ人にくれてやる請願でもすればいいんだ、まったく。いてっ。いいか、ロナウドとジーコとペレを招集しろっていう請願のほうが、まだまじめに受けとったよ。でも黙っといたほうがいいかもな、やつらにこれ以上思いつかせないほうがいい」

「黙る」という案はチアゴにはありがたかったが、あまり期待はしていなかった。そして案の定。

「よし、チアゴ、ありがとう。いいか、テレビのスタジオにはタクシーで行く、送ってもらわなくていい、おまえには別の戦線をやってもらう。電話でも、インターネットでも、なんでもいいからしがみついて、俺がやつらを招集せずにすむ法的なよりどころを見つけてくれ、この能なしどもが本気だったら困るからな」

監督は、ろくに動かない腕で早期退院の書類に署名し、世話をしてくれた医療スタッフに心をこめて挨拶して、タクシーを呼んでくれるよう頼んだ。

チアゴはもう電話にとりついて、誰かと話していた。いいやつだ、と監督は思い、ようやくほほえみを自分に許した。

4.5 生放送

千キロ離れたところで、ヤイアの母親が娘の部屋のドアを勢いよく開けた。「レチ・グローボの車が来たわよ。準備はできた？」

「すぐ行く」ヤイアは鏡で最後の確認をし、口紅で最後の最後のひと塗りをしてから、パトリシアとダニとレチシアのほうを振り向いて、三人の賛成と、励ましのキスを三つもらった。携帯にももう一度目をやった。画面は彼女のフェイスブックのページに固定されていた。一千四百万のいいね。2014年ワールドカップの公式ページを大きく上回っている。最後の最後に、ジャスティン・ビーバーのポスターに目をやった。首筋に息がかかってるのがわかる、ねえ？　彼女はポスターにウインクして、出ていった。

W3ノルチ通りの渋滞はいつもよりさらにひどく、ヤイアは予定より遅れてレチ・グローボのスタジオに着いた。大急ぎでメイク室に通され、親切でいてプロらしいメイク係が彼女を小さな椅子に座らせた。そして「あらまあ、お嬢さん、なんてすてきなメイク、テレビは初めてで気合いを入れてきたのね？　そのままで完璧よ、ほんのちょっと手直しするだけ、番組が終わったらおしゃべりして、何を使ったのかちゃんと教えてね」と言うあいだに、もう彼女のメイクを落とし、メイクしなおし、まったくちがうふうに髪を整えなおしていた。

終わるとすぐ、ヤイアは制作アシスタントにスタジオへ押しこまれ、マイクをつけられて、二つの小さな肘掛け椅子のひとつに座らされた。もうひとつの椅子にすでに座っているスーツ姿の婦人にうわの空で挨拶して、子どものような好奇心であたりを見まわしはじめた。カメラ、そのまわりにひしめくいろいろなスタッフ、三つの巨大な画面。ひとつはメインスタジオにつながり、あとのふたつは、彼女のいるのと似たもっと小さなスタジオにつながっていた。

観客がメインスタジオにしかいないのは残念ね、と彼女は思った。でもかえってそのほうがいいかも、少なくともあがらずにすむから。考えてみれば変よね、テレビの前で何百万人もの人が見てるってわかってるのに、スタジオの百人の前であがるのがこわいなんて。そしてそのときになってようやく、テレビの前で見入っている何百万人もの人が本当にいるのだということ、それが彼女のフェイスブックのページにうわの空でいいねを押した何百万人よりずっと大きな重みを持っているということに気づいた。どうしよう！　何百万人も！　ひどい恥をかきませんように、マリア・エドゥアルダはきっと、それだけを待ちかまえてるわ。

「緊張してるの？」と婦人がやさしく尋ねた。「しなくていいのよ。あなたは若いし、若い人はみんなきれいだから、テレビにはいつもとてもよく映るわ。それにあなたは、きれいなだけじゃなくて、しっかりした子みたいね。きっとうまくいくわ」

「え？　あ、ありがとうございます」とヤイアはほほえんで答えた。親切のお返しに、この会話の試みに乗ってみることにして、逆にこの婦人のほうはテレビに出たことがあるのかと尋ねようとしたとき、ようやくそれが誰だかわかった。「うそっ！　失礼いたしました、まったく気がつきませんでした。実物のほうがずっとお若く見えます」と言い足して、すぐに、どうしてそんなことを言ってしまったのかと自問した。

「じゃあ誰かをクビにしなきゃならないわね」と大統領はウインクして言いかえした。

「すてきですね、大統領のフェイスブックのページ」とヤイアはそれから言ったが、そのあいだもずっと、私いったい何を言ってるの？　ああもう、頭のコントロールがきかなくなっちゃった、と自問していた。

「あなたみたいな大の専門家にそう言ってもらえるなんて、最高のほめことばね」

ヤイアがそのうわごとを続ける前に、ディレクターのアシスタントが一連の合図をした。全員が熟練した手ぎわで動き、照明の強さが変わり、番組が始まった。

「みなさん、こんばんは。『ボン・ジア・コッパ・ド・ムンド』特別版へようこそ」と司会者が、リオデジャネイロのメインスタジオから、番組がたたきだすであろう視聴率の記録をもう心待ちにしながら朗々と告げた。「スタジオには、ブラジルサッカー連盟会長のジェルソン・ルイス・リベイラ・カルドーゾさんと、リオデジャネイロ大学の人類学者、エヴェラウド・コンハード・ジ・メロ・ジアス教授をお迎えしています」

［拍手］

「サンパウロからの中継では、セレソンの監督、アレシャンドリ・セルジオ・ゴンサウヴェス監督にご出演いただいています。三日前の重傷にもかかわらずご出演くださったことに、まずは盛大な拍手をお送りしたいと思います」

［割れんばかりの拍手］

「マカパからの中継では、アントニオ・カルロス・ロシャ・ジ・アウメイダさんと、アスー・カアー・フチボウの若者たちにご出演いただいています。FIFAのハンス・マロール会長とも連絡をとろうとしていますが、ちょうどいまリオデジャネイロへ移動中ですので、つかまえられるかどうか見てみましょう。そして最後に、ブラジリアからの中継で、若くて行動力のあるヤイア・アニタ・ゲルマンイス・ペレイラさん、そして締めくくりに、なんとブラジル大統領シルヴィナ・メロさんにご出演いただいています。みなさん、ようこそ、ご出演ありがとうございます」

［拍手］

「本題に入る前に、セレソンの不運な英雄たちに心からのエールを。前よりもっと元気に、もっと強くなって戻ってくるのを待っています！」

拍手はとどろくようで、感動に満ちていた。さらに果てしない前置きが続いたあと、司会者はようやく本題に入った。

「では、さっそく私たちがここにいる理由から始めましょう。ヤイアさん、あなたのアイデアと、それがおさめた成功について話してくれますか？　視聴者のみなさんに改めてお伝えしますと、現在フェイスブックのページ『アスー・カアーをワールドカップへ送ろう』は、千九百万人以上のメンバーを集め、絶えず、ものすごい速さで増えつづけています」

ヤイアが一度もつっかえずに話を終えると（その話のなかでは、マリア・エドゥアルダにも短いカメオ出演の場が与えられた）、監督にコメントが求められた。

「私たちを襲った悲劇は、まさに悲劇です。そしてチームの責任者として、選手全員を代表して、まずはこの数日、私たちに寄せてくださった愛情と支援に対して、ブラジル全体に感謝を申しあげたいと思います」とゴンサウヴェスはカメラをまっすぐ見て言った。「みなさんの助けが必要です。そしてこのような取り組みは、みなさんがどれほど力を尽くそうとしてくださっているかの表れです。しかし、事故が人間としての悲劇であるとしても、同胞のみなさんに安心していただきたい。これはスポーツとしての悲劇ではありません」

［ざわめき］

「もちろん、主力選手の多くを起用できなくなりましたし、彼らにとっても、私たちにとっても、彼らの妙技を楽しめなくなる世界じゅうの人々にとっても残念なことです。しかし私たちは、2014年にたまたま運よく何人かの名手をチームに抱えた国ではありません。私たちはブラジルなのです。私たちみんなが、世界のサッカーの名手なのです。私たちの三軍でさえ優勝候補になるでしょう。ですから、新たに招集した選手たちが六度目のカップを掲げさせてくれると、私がどれほど信頼しているかはおわかりでしょう」

「では、なぜその選手たちは前に招集されなかったのか、と誰かが尋ねるかもしれません」と司会者が、その誰かの役を引き受けて尋ねた。

「ご存じの方も多いとおり、招集できるのは最大で二十三人だからです。サッカーにおけるブラジルは、滑降におけるオーストリアや卓球における中国のようなものです。全員が入る場所はないんです、強すぎるので」と監督はにやりと笑って締めくくった。

［まばらな拍手］

「でも、この若者たちの誰かにもチャンスを与えてはどうでしょう？」と司会者は迫った。そのあいだカメラはインディオの小さな一団を映していて、その後ろには、同時通訳をしているアントニオが座っていた。若者たちのほとんどはひどく退屈しているようにしか見えなかったが、ヤマンデとモアシルのアップは、ヤイアにも、ブラジルじゅうの何十万もの心にも、退屈とはまるでちがうものを呼びおこした。ディレクターはできるかぎり長くふたりを映していたが、ヤマンデがあくびをしかけたのを見ると、これまでの試合のプレーをいくつか集めた映像を重ねて流した。司会者はゴンサウヴェスのほうを向いてそれを強調した。「こうして見ると、なかなかうまくやっているように思えますが、いかがです？」

「もちろんうまくやっていますよ。彼らもブラジル人でしょう？　この国の空気に何かあるんでしょうね」

［笑い］

「冗談はさておき、彼らがこのまま励みつづければ、ばら色の未来を思い描くのも不可能ではありません」

監督は、鞭はわきに置いて、できるだけ飴だけを使うことにしていた。「しかし、それはまさに、ありうる未来であって、決して現在ではありません。この若者たちには国際経験がまったくないばかりか、この映像からわかるように、生まれてから一度も十一人制のサッカーをしたことさえないんです」

このことばは、アントニオが訳したとたん、マカパのスタジオに憤慨のつぶやきを引きおこした。

「彼らがすべてのルールを知っているかどうかさえわかりませんし……」アントニオが訳すと、ヤマンデがさっと立ちあがったが、アントニオはすばやく彼を引っぱって座らせ、カメラマンに映されずにすんだ。

いずれにしても、また監督をさえぎったのは司会者だった。「午後には、ほかの方々の意見もうかがいました。この方々がどう考えているか聞いてみましょう、みなさんのなかには見覚えのある方もいらっしゃるかもしれません」

映像が流れた。この機会にインタビューを受けたかつての名手たちが、若いインディオのサッカー選手たちをほめたたえていた。ブラジルのある往年の名選手については、カウエのオーバーヘッドキックが自分のを思い出させると言っている部分が使われ、アルゼンチンのある元チャンピオンは、ヤイアのページでいいねをクリックしているところを撮らせていた。監督は司会者をにらみつけた。

映像が終わると、司会者はアントニオに発言を振ろうとしたが、ゴンサウヴェスは言いかけていた考えを最後まで言い、ついでに映像について意見を述べると言ってきかなかった。

「サッカーはひらめきと想像力です、たしかに。しかし、あのチャンピオンたちがプレーしていたころから大きく進化しました、ずいぶん長い年月がたっていますからね」（ほらな！）「今日では想像力だけでは足りませんし、何より、妙に聞こえるかもしれませんが、即興ではできないんです。ほかにも多くのものが必要です、なかでも準備と、いっしょにプレーすることへの慣れが。イタリアやドイツやアルゼンチンの偉大なチャンピオンを何人かチームに入れることさえ問題になるでしょう。ましてやサッカーのことをほとんど何も知らず、ほかの選手を知らず、そのことばさえ話さない若者を六人チームに入れるなんて」

［つぶやき］

司会者は、マカパに中継をつなぎたいが、その前に短いコマーシャルが入ると告げた。そのおかげで、アントニオと少年たちは何を言うべきか少し意見を交わす時間ができた。

ようやく話す機会がめぐってくると、アントニオは取り決めたことを伝えた。とりわけカウエとモアシルがゴンサウヴェスに向けた悪口は、注意深く省いた。「まず最初に、同業者の方に賛成だと申しあげたいと思います」

よし！　と監督は驚いて思った。だが同時に、同業者だと？　どこが？　いったい自分を何様だと思ってるんだ？

「サッカーは即興ではできません」とアントニオは監督のことばを繰り返して続けた。「型と準備が欠かせません。でも、この若者たちがサッカーを知らないというのは、まったく正しくありません。この若者たちはサッカーをとてもよく知っています。もちろん、二十万人の観客の前でマラカナンでプレーしたことはありませんが、ほかのブラジルのサッカー選手と同じように子どものころからプレーしてきましたし、私たちのサッカーの物語を全部知っていて、ちゃんとしたブラジル人ならみんなそうであるように、パオロ・ロッシとジダンを憎んでいます」

［笑い］

「それにもちろん十一人でプレーできます。この何か月かは、七人でプレーせざるをえなかったんです、しかも私のような年寄りを我慢しながら。というのも、ヤマンデを救うために勇敢にも村を出た一団は……」

［効果的な間。割れんばかりの拍手。ヤマンデの超アップ。ブラジルじゅうで何千もの胸が張り裂ける］

「……少人数でなければならなかったからです。でも村のグラウンドでは、いつも十一対十一でプレーしてきました。それに、十一人での彼らの出来は、この何か月かテレビでご覧になった七人制のプレーと同じか、それ以上だと請けあえます。個々に見れば、何人かは今日活躍しているいちばん強いサッカー選手たちの仲間です……」

［観客のざわめき］

「……そしてチームとしては、そう、これ以上結束したチームは考えにくいでしょう。ことばについてのあてこすりについて言えば、ピッチの上では何よりも足で話すんです、そしてそのことばなら、彼らは完璧にわかっています」

司会者が何か言い足そうとしたが、アントニオは少し声を高めて続けた。「それから、ひとつはっきりさせておきたいことがあります。私たちは誰にも何も頼んでいません。二日前まで、私たちは静かに、のんきに自分たちの暮らしを送っていました。もし誰かが彼らの助けを求めるなら、この若者たちは誇りをもってそれを差しだすでしょう。リオデジャネイロやサンパウロで生まれたのでなくても、このスタジオにいる誰とも同じくらいブラジル人で、そのことを誇りに思っているからです。もし彼らの助けは要らないと判断されるなら、何の問題もありません。マカパの私の家の居間でワールドカップを見て、ブラジルを応援して、それから村に帰ります」

「冷静になる必要があると思います」と発言したのはサッカー連盟の会長だった。

「あてこすりも恩知らずもありません、しかし、これは適切さの問題でもあることを理解していただかなければ。ゴンサウヴェス監督が招集した選手たちは、みな非常に厳しい下積みを経てきたプロであって……」

アントニオがさえぎった。「何をお考えなんです、アマゾンでは暮らしが楽に、何の問題もなく流れているとでも？　あなたはプロということばを強調なさいますが、森の真ん中でボールを蹴るのにどれほどの苦労と献身が必要か、想像もなさらないでしょう。自分の手でグラウンドの手入れをして、自分でボールをこしらえなければボールを蹴れない二十二人の若者の前では、どんな下積みもかないませんよ！」

「ええ、ええ、決して侮辱するつもりはありませんでした」と連盟の会長は譲歩した。「しかし、規則の問題でもあるんです、すてきに思えるからといって考慮しないわけにはいきません」

［家庭の視聴者のあざけりの笑い］

「この若者たちが、ちゃんとした身分証明書を持っているかどうかさえわかりませんが、少なくとも私どもの連盟に登録されていないのは確かです。FIFAが彼らの参加を認めるかどうか疑わしいと思います」

司会者がまた発言を引きとった。「ありがとうございました、会長。ここでちょっとさえぎって、ちょうどFIFAのマロール会長にご挨拶したいと思います。いま着陸されたばかりで、ご親切に空港から直接お電話をくださいました」

［遠慮がちな拍手］

「マロール会長、まずは招集の期限の延長を認めてくださったFIFAに感謝申しあげます」

「本当に、私たちにできるせめてものことでした」

司会者がそれまでに出た意見を手短にまとめると、マロールは、スペイン語と英語のかすかななまりのある上手なポルトガル語でそれに意見を述べた。

「FIFAの活動は、このすばらしい競技の普遍的な普及と保護を軸にしています。ですから一方で、私たちはルールを変えることにはいつも慎重です、サッカーはいまのままですでにすばらしいのですから。もう一方で、私たちの大きな家族に加わりたい人は誰でも両手を広げて迎えいれます。個々の連盟の決定にはできるだけ干渉しないのがFIFAの方針で、招集する選手についての決定に口をはさむつもりはまったくありません。しかし、ここにいらっしゃるみなさんと、すべての視聴者のみなさんに、ひとつのことについて安心していただきたい。私たちが守るために懸命に闘っている規則とは、競技の規則です。お役所的な問題は競技を支えるためのものであって、フェアプレーでプレーする者の障害になってはならないのです。ですから連盟の会長に安心していただきたい。私たちは日程について柔軟でしたし、必要ならほかの規則上の問題についても柔軟になるでしょう。ブラジルは、招集するのがふさわしいと考える選手を招集すればいいのです。ブラジル人であるかぎりは」とマロールは冗談で締めくくった。

監督はそのことばを信じられない思いで受けとめ、モニターのひとつに連盟の会長の目を探した。会長は、宿題をしないために用意していた言いわけをたったいまくずされた子どものような顔をしていた。番組は終わりに近づいていたが、シルヴィナ大統領はまだ話していなかった。その公的な立場から、最後のことばは大統領に残されていたのだ。

「ブラジルは偉大な国で、私は神がこの世に送りだしてくださる毎日、その大統領であることを誇りに思っています。アマゾンは私たちのもっとも大切な富のひとつであり、私たちがどれほどそれを自覚しているかを示す機会を得られたことをうれしく思います。この勇敢な若者たちが私たちの同胞であり、私や、隣に座っているこの行動力のあるお嬢さんと同じくらいブラジル人であることに、疑いの余地はまったくありません。また、それぞれが自分の仕事をしなければならないこと、この信じられない災難のあとでチームを立てなおす仕事は、カルドーゾ連盟会長と、ゴンサウヴェス監督と、そのスタッフのものであることにも疑いはありません。しかし、これが国民全体が支えなければならないと感じた非常事態であることにも、疑いはありません。そして私は国民を代表して、彼らに、若いヤイアさんのアイデア、国民がこれほど熱心に支持したアイデアを検討するようお願いしたのです」

大統領はほほえんで口を閉じ、自分の発言は終わったことを示したが、誰もその意味を読みとれたようには見えなかった。インディオを招集すべきだということなのか？　監督は選ぶのが自由だということなのか？

行きづまりを破るために、司会者は視聴者からの電話を受けつけはじめた。

「国民の脈といえば、もう少し測ってみましょう。まずはサイトの最新情報です。いいねは二千六百万、この番組のあいだに三百万増えました。でも、この二千六百万人のなかの誰かの声も聞いてみましょう。もしもし？」

「もしもし？」

アントニオは一瞬目を見開き、それからふきだした。

「はい、こんばんは。お名前は？」

「みなさん、こんばんは。まあ聖母さま、なんて感激。テレーザといいます、マカパからおかけしてます」

「おや、セニョール・アウメイダと同じ町の方ですね！」

「ええ。同じ町なだけじゃなくて、あの人の大ファンで、言わせてもらえば友だちなの。いつもいつも聴いてたのよ、もう十五年も前からラジオで、ねえ聞いた、すてきな声でしょう？　テレビだと実物よりもっとすてきだって、もう一回言っとかなきゃ」

［スタジオに笑い。アントニオは困って、その文を少年たちに訳さなかった］

「どうぞ、テレーザさん」

「ええ、そうね。言いたかったのは、こういう議論がよくわからないってことなの。ワールドカップで誰が勝つかはどうやって決めるの？　試合をしてでしょう？　だったら、すてきな試合をひとつやればいいじゃない、アントニオの子たちと、あのもうひとりの方が選んだチームとで、勝ったほうがワールドカップにブラジル代表として行けばいいのよ。虎穴に入らずんば虎子を得ず、よ」

テレーザの天才的な素朴さに、全員があっけにとられた。最初にわれに返ったのはマロールとシルヴィナ大統領で、ふたりは同時に口を開いて、すばらしいアイデアだと言った。監督はすぐに賛成だと言い、人種差別主義者に見られることなくこの面倒きわまりない厄介ごとを片づけられ、そのうえ新しく招集した選手たちにまともな練習の場を与えられると考えて、もみ手をした。

マカパの小さなスタジオでは慌ただしい相談があって、そのあとでアントニオが発言した。「私たちはそれでまったくかまいません。でも、ワールドカップに送るチームを決めるのなら、十一人でプレーしたほうがいいと思います」

「でも、あなたがたは七人しかいないでしょう」と司会者が反論した。

「問題ありません。村に帰って、ほかの者たちを連れてきます」

4.6 お役所

特別番組『ボン・ジア・コッパ・ド・ムンド』を見ていた何百万もの視聴者のなかに、チアゴはいなかった。彼は夕方のそよ風のなか、原付で店から店へと飛びまわって、目当ての人物を探していた。セザール・アゼヴェードという男で、チアゴの人脈が、自分たちにうってつけの人物として探しだしたのだった。金曜の夜だったので、サンパウロの中央戸籍局の高級幹部という職場では見つからなかったし、携帯電話にも出なかった。そこでチアゴにはこの昔ながらの捜索の仕事が回ってきたのだが、それは結局のところけっこう楽しかった――一軒ならず、情報を尋ねるのにセルヴェジーニャ一杯がついてきたせいもあった――ので、ようやく見つけたときには残念なくらいだった。

「セザール・アゼヴェードさんですか？」

「はい？」とセザールは、テレビから目をそらさずに答えた。小さなバールのほかの客たちといっしょに、ワールドカップの特別番組を見ていたのだ。

チアゴは彼のテーブルに座り、ブラジルサッカー連盟のアシスタントだと名のった。セザールはちらりと横目で彼を見てから、また視線を画面に戻した。「ええ、どなたかは存じています。何がご入り用ですか？」

そしてチアゴが話しはじめる前に、すぐに言い足した。「どうやら待てない何かがご入り用なのは明らかですが、私は番組を見たいので、手短に、要点をお願いします」

チアゴはそんなふうに、人前でその話をするのは気が進まなかったが、バールじゅうの注意はテレビに奪われているようだったので、顔を近づけて小声で言った。「ええと、その、あのインディオの一団を無理やりチームに入れさせられたら、チームそのものが損なわれるんじゃないかと心配しているんです」

「ふむ……」

「それで、もしかして……その……彼らを招集するのは合法なのか、それとも、ひょっとして招集できなくなるような法律や規則が何かあるんじゃないかと思いまして」

セザールは何秒か何も言わなかった。チアゴの話を聞いていたしるしは、せいぜい、かすかに首を揺らしていることくらいだった。

「私を見つけるのにずいぶんかかりましたか？」と彼はそれから尋ねた。

「ええ、少し。なぜです？」

「ずいぶんかかったのは、金曜の午後から月曜の朝までは仕事の話をするのが嫌いで、携帯を持ち歩かないし、どこで休んでいるか誰にも言わないからですよ。ひっきりなしにどれだけの人が頼みごとをしてくるか、ご存じないでしょう」

チアゴは、私を誰だと思っているんだ、という切り札を使うことにした。「お言葉ですが、アゼヴェードさん、私たちは『人』ではありません。ワールドカップまで十日というときに、セレソンの責任者たちが自分のために頼みごとをしているのではないんです。国全体のための助けをお願いしているんです」

「じゃあ要するに、ひっきりなしに頼みごとをしてくる連中が、親戚一同を引きつれて、そろってここに押しかけてきたようなもんだな。まったく理想的な休みの夜だ」

「……」

「いいか、坊や。ワールドカップに勝ってこい。そしたら、おまえのボスがブラジル皇帝の身分を証明する書類をほしがったって、一分でこしらえてやる。だが、いまは一九五〇年じゃない。白紙の手形には、もう署名しないんだ。それにちょっと見てみろ」とセザールは、テレビに映っている監督を指さして言った。「あれがブラジル皇帝の顔に見えるか？　俺には、掃除のおばさんにもっと力を入れて雑巾をかけろとさえ言えないやつの顔に見えるね」

チアゴは画面を見あげて、この男の言うことにも一理あると思った。

「俺には」とセザールは続けた。「十六歳の小娘にやれと言われたことを、まさにそのままやろうとしてるやつの顔に見える。そんなやつが、俺のところへ来て俺に指図できるもんか」

「でも私は……でも私たちは……」

「さあ、悪いな坊や、番組を最後まで見たいんだ」

チアゴは打ちのめされて立ちあがり、セルヴェジーニャを持ったまま店を出た。原付に腰かけて、それをちびちび飲みながら、バールのなかのテレビをぼんやり眺めて、どうしたものかと考えた。ビールを飲みおえると、番組も終わったようだった。彼はため息をついてポケットから携帯電話を取りだした。もうすぐ鳴るだろうと予想したが、そのとおりだった。

「監督！」

「チアゴ！　あいつは見つかったか？」

「はい。それが……」

「全部中止だ！　もう何の問題もない。あのばかどもは、結局害にならなかった、それどころかだ。招集は予定どおり続けるぞ」

中止するものなど何もなかったが、それを監督が知る必要はかならずしもない、とチアゴは思った。最初の任務を首尾よくやりとげて、いまは新しい厄介ごとを片づけなければならない、という印象を持たせておいたほうがいい。彼はまた原付にまたがり、アメリカ大陸最大の都市をひと回りしに、ほっとして走りだした。

4.7 フォトレポーター

番組が終わって二分もたたないうちに、モアシルの携帯電話が鳴った。

理屈のうえではチームの携帯電話だったが、モアシルが事実上自分のものにしていた。彼は熱心な写真家になっていて、アントニオが驚いたことに、腕もなかなかのものだった。インスタグラムのフォロワーは日に日に増えていて、どうやらサッカーや先住民の問題に興味のある人たちだけではないようだった。

電話で話すとなると、彼はしぶしぶ電話をアントニオに差しだし、アントニオのほうも同じくらいしぶしぶ受けとった。この、電話がどこにでもあるという状態に、まだすっかりは慣れていなかったのだ。

「もしもし？」

電話の向こうにいたのは、レチ・ノルチの局長だった。

「アントニオさん。いま番組を拝見しました、心からおめでとうございます。それに、この嗅覚を示した私自身にも心からおめでとうと言いたいですね、はは。もちろんジョージもほめてやらなきゃならないでしょう、ひょっとすると昇給させるはめになるかもしれない、ちくしょう。あなたがたに出会わなければよかったですよ、はは！」

アントニオはどう返していいかわからず、相手は続けた。

「もちろん冗談ですよ、よくご存じのとおり、私どもレチ・ノルチは協力者やパートナーをきちんと遇するのが好きですからね」

もちろん、ね、とアントニオは思った。

「それで、そのことなんですが、最近の私どもの協力関係は双方にとって満足のいくものだったと思うんですが、そうお思いになりませんか？」

「ええ、ええ、もちろん」とアントニオは認めざるをえなかった。

「でしょう。私の理解が正しければ、あなたがたはたったいま、とてつもない機会を与えられた、でもそれを実行に移すという現実的な問題を抱えている。森へ帰ってチームの残りを連れてきて、サンパウロへ飛ぶには、時間がとても限られています。どうするか、もう考えはおありですか？」

「ええと、いいえ、でもほんの数分前に起きたことですから、きっと何か考えつきますよ、連盟が助けてくれるでしょうし……」

「私があなたなら、あまり当てにはしませんね。テレビで見たかぎり、連盟の方々の顔はあまり友好的には見えませんでした。いいえ、アントニオさん、私がご提案したいのは、すでにあなたがたの信頼にふさわしいことを示した者たちと協力することです。あなたがたの親愛なる友人、レチ・ノルチと。ひとつご提案してもよろしいですか？」

「どうぞ」

「ヘリコプターをチャーターしましょう。それで何往復かして、チーム全員を村からマカパへ運ぶんです。それから飛行機代もお払いして……」

「話になりません」とアントニオがさえぎった。

「早まらないでください、まず実際面をご説明したかったんです。お金の面にもちゃんと触れるつもりでしたよ、請けあいます、教訓は学びましたから」

「いえ、そういうことじゃないんです。村の正確な場所を明かしたくないんです。少なくとも、村の人たちと話しあう前には決して」

「なるほど」局長はすばやく別の案を考えた。「では、こういうのはどうです。どのみち、なんとかして村まで行くおつもりでしょう？　でしたら、私どもがあなたがたのご希望どおりに帰り道の手配をお手伝いして、そのあとのサンパウロへの遠征を引き受けます。そのかわりに、許可していただける区間で、旅に同行する独占権をいただく……」

「ふむ……そういうことなら、たしかに……」

アントニオのつぶやきがいまにも「はい」に変わろうとしていたので、局長はそれに乗じて最後の要求を放った。

「……それから、あなたがたが村へ帰るときの写真と映像の素材を、独占で提供していただく」

「すみませんが、村の場所を明かしたくないということは、はっきり申しあげたつもりですが。記者は誰も村へは連れていきません、ジョージでもです」

「いえ、いえ、そういうつもりじゃありません。写真と映像の素材は、あなたがたご自身でつくっていただくんです、そうすればあなたがたのご希望に沿ったものになると保証できますから」

「ああ」アントニオは局長の手腕に感心した。何もかも考えぬいているようだった。

いや、ほとんど何もかも。「ふむ、筋の通ったご提案だと思います、いずれにしても村の人たちと話しあわなければなりませんが。でも残念ながら正直に申しあげなければなりません。私は写真家としてはたいしたことがありませんし、ビデオの撮影係となるとなおさらです」

「いえ、あなたに撮っていただきたいわけじゃありません。あのモアシルくんのことを考えていたんです。しばらく前から彼のインスタグラムを見ていましてね、本当にうまいんですよ」

4.8 ガンボーネ

ドナ・ジェジータが受話器を置いたとき、その手は汗びっしょりだった。サッカーのワールドカップ、よりによって。まあ見てごらんよ、羽を鼻に刺して虫けらみたいに素っ裸でやってきたあのみすぼらしい連中が、何をやってのけたことか。これは逃しちゃいけない機会だよ、うまくいけば来年は正面をアンティークローズに塗りなおして、テラス席つきのベランダをつくるんだ。彼女は手を服で拭いて、また受話器を取った。

「もしもし、パウロ？　いつも電話するのは私のほうだね、まったく、生きてるかどうか確かめる電話くらいしてくれたって罰は当たらないよ。いや、ご機嫌うかがいの電話じゃないよ、おまえみたいな雑草はいつだってぴんぴんしてるからね。そうじゃなくて、おもしろい話があるのさ。ちょっと聞くけど、おまえのあのおんぼろ船、まだあるかい？　ある？　よし、よくお聞き。これは大きな話だよ、レチ・ノルチとセレソンがからんでるとだけ言っておく。そう、サッカーの代表チームさ、まさにあれだよ、サッカーって言ったらサッカーのあれに決まってるじゃないか。はっきりさせておくけど、仕切るのは全部私だからね、おまえはジャガーくらいしか信用できないんだから。でもこの姉さんの言うことをちゃんと聞いて、きちんとやれば、来月にはモーターボートが買えるよ」

ジェジータは弟のことを世界じゅうの誰よりもよく知っていた。生まれたときに抱っこしてやったのだ。そして、彼を動かす、それも素早く動かすものは、世の中に三つしかないことをよく知っていた。一つ目はお金、二つ目は女。三つ目は、いちばん強力な武器、非常時に抜く無敵の武器で、かわいそうな母さんの胸を打つ思い出だった。母さんは死の床で彼の前髪をなでながら言ったのだ。「約束しておくれ、パウリーニョ、いつも、いつも姉さんの言うことを聞くって。でないと、天国の母さんが泣くからね」

いまの状況では女はからんでいなかったが、お金はからんでいて、しかもその額は母さんの死の床を持ちだす必要がないほどたっぷりだった。

そういうわけで、マカパからのバスがアスー・カアーの一団をラランジャウの船着き場の前に降ろしたとき、ガンボーネはもう舟をつないで、気をつけの姿勢で待っていた。舟には黄色いペンキがひと塗りされていて、ゴウモンは――もちろん別の犬だったが、わざわざ毎回新しい名前を探す手間をかけることもない――スパンコールの首輪を誇らしげにつけていた。もとは、ガンボーネが最後に親しくしていたストリッパーのガーターだった。

ガンボーネ本人はといえば、イギリス海軍の船長帽をひけらかしていた。少々過剰な演出だったが、姉から金額の話を聞いたとたん、必要とあらばどんな過剰さでも惜しみなく出してやろうという気になったのだ。実際、彼はジェジータにかなりの前払いを求めていた。「そんなにお金を何に使うんだい？　舟はもうあるし、燃料はその十分の一だろうに」

「買いものがあるんだよ。体面を保つための出費がさ。帽子を買わなきゃならねえんだ」

アントニオは、レチ・ノルチの局長からサッカー連盟のお偉方まで、かかわるすべての人に、何の問題もないと請けあっていた。舟と、川を知りつくした案内人の問題さえ片づければ、何もかも完全に手のうちにある、あなたがただって自分の家への道がわからないなんてことはないでしょう？　だが実際には、まったく確信がなかった。ガンボーネは十四年前にひどい仕打ちをしたが、川を知っていることにかけては右に出る者がいないとアントニオは確信していた。滝を避ける分かれ道の近くで、あとをつけようとした二隻の舟を、たぶん記者たちの舟だったが、まんまとまいてしまった手並みが、その確信をいっそう強めた。だが、どこで上陸すればいい？　アントニオは、いかだを水に下ろしてまもなく、三つの流れが合わさる奇妙な合流点を通りすぎたのをはっきり覚えていて、それは見分け

られるだろうとかなり自信があった。だが、そこから、自分たちが森から出てきた正確な地点を見つけだし――三か月もたてば、植物が自分たちの通った跡をもう消してしまっているにちがいなかった――村までの道を逆にたどるとなると、まあ、それはまだまったくの不確かさの領域にあった。

着いてから考えよう、と彼は自分に言い、そのあいだにジャナイナが彼をもう死んだものとあきらめて、誰かほかの男の隣にハンモックを吊るしていないかと、少なからぬ不安とともに考えた。その考えは、食前酒の用意ができたと知らせるガンボーネにさえぎられた。やるからにはきちんとやるんでさ、そういうことで。こいつは貧乏人の舟じゃねえ、とってもきれいな船です、カショエイラ・ド・サント・アントニオを訪ねて、ジャリ川をさかのぼりたい方には最高の選択です。ジャリ川をさかのぼるには、とってもきれいな船だけじゃなく、それを操れる男も要るんですからね、とガンボーネは、モアシルが手に持っている電話をまっすぐ見つめて締めくくった。ついてますか、ね？　撮ってますか？　アントニオ、撮ってるか聞いてくだせえ。それに金のためなんかじゃねえんです、とんでもない、金はまあ結構なもんですがね、もちろん、でも大事なのはチームにとってもいい貢献をすること、国に貢献することでさ。ゴウモンだってわかってますよ、ほら、なんて上品に座ってることか、あとは食前酒のカイピリーニャをこいつが運んでくれりゃ言うことなしだ。

いろいろな点から見て、チームに足りない選手を連れてくるために森へ戻るのは、ふたりほど、たとえばアントニオと少年のひとりかふたりにしたほうが筋が通っていただろう。だが誰ひとり、家族にまた会い、じかに知らせを伝え、見たこと、試したこと、見つけたことを自分の口で話し、森の向こうの世界の驚異を語る機会を逃したがらなかった（不安なこと、わけのわからないこと、こわいことは、ひょっとすると少しばかり黙っておくかもしれなかったが）。もちろん、ピライは別だった。彼は、あと何日か残ってドナ・マルセラとまた台所に立ち、ベイジーニョをちゃんとつくれるようになりたい、というようなことをもごもごと言った。時間はあまりに限られていて、やることはあまりに多かったので、アントニオは議論する気になれなかった。本当に残りたいのかと尋ねただけで、そうだという答えを聞くと、家族に最後の頼みとして、この子から目を離さず、サンパウロへ発つときが来たら空港まで送ってやってほしいと頼んだ。

ほかの若者たちはひどく興奮していて、早く着けるなら舟をかついででも運んだだろう。家族や友だちへのみやげを入れた袋を開けては閉め、Tシャツや帽子、首飾りやペンダント、ビニール袋やお椀、折りたたみ傘やフォーク、鏡やナイフやコカ・コーラの缶を、ひっきりなしに広げては眺め、またしまっていた。

ヤマンデは、ジャニータがわざわざ用意した特別な備品の入った袋も持っていた。あらゆる種類の消毒薬、包帯と絆創膏、目薬と抗菌の軟膏（コンドームをひと箱入れるかどうか最後まで迷ったが、念のため、と思いつつも、ヤマンデに使い方を説明すると考えただけで恥ずかしくなって、やめておいた）。

モアシルは、自転車を持っていくのを残念ながらあきらめなければならなかった（まずハンドルを回せるくらい森を切りひらいてからだ、それから考えよう、次に戻るときに考えよう）。いっぽうカウエは、ツアーのあいだに出会った女の子たちのコレクションの話を友だちにしたくてうずうずしていた。話をすることができないので、きわめて実際的に、すぐ行動に移って、十七歳を過ぎたちょっと年寄りの女の子たちでも大いに満足させてくれることを発見したのだった。

道筋への不安と、スズメバチのように落ちつかない少年たちのじれったさにもかかわらず、アントニオは旅を楽しんでいた。取り戻した森のにおい、オウムの飛ぶ姿、船長の非の打ちどころのない礼儀正しさ。それは、相変わらずひどい料理の埋めあわせにほとんどなるほどだった。だが彼にはひとつ気がかりが残っていた。理屈に合わない、うしろめた

さの影のようなものが、彼を落ちつかせなかった。「ねえ、ガンボーネ、あのいとこの、ジープの……」

「いとこなんかいませんぜ、あっしには。いとこの女が七人いるだけで、どいつもこいつも退屈ときてる。男のいとこはひとりもいねえ、かわいそうなおじさんは欲しがってたんですがね。旦那がた、もう一杯いかがです？」

「いや、あの赤いジープの、あのペペのことだよ、かわいそうに……」

「ああ、ペペ！　あいつはいとこなんかじゃありませんよ。サンタレンの、アナコンダ・ヴォルテックス・ナイトクラブで知りあったんでさ、いい店ですよ、ご存じで？」

「いや、行ったことはない。でも言いたかったのは、その、もし君の友だちだったのなら、あんなふうに死んでしまって本当に気の毒だったって……」

「死んだ？　死んでなんかいませんよ、先月会いましたぜ。ベレンで下着のセールスマンをやってまさ」

4.9 ピライ

アントニオのベッドに寝そべって、ピライは自由の甘い味を味わっていた。そんな味があることに気づきはじめたのはつい最近のことだったが、いまそれを味わってみると、何年ものあいだどうしてそれなしでいられたのか不思議だった。村の暮らしには、いつも何か気に入らないところがあったが、それが何なのか、いまになってようやくはっきりわかりかけていた。少年のころ、アントニオの話を聞きながら、それは話に聞くことと関係があるのではないかと考えたこともあった。だが、モアシルやカウエとちがって、彼の心を打ったのは信じられないような発明品ではなかったし、ヤマンデやピアタやほかのみんなをあんなに夢中にさせたサッカーの話でもなかった。それはもっとぼんやりしたものだった。それにピライは、小さいころ、アントニオがやってくる前にも居心地の悪さを感じていたのを覚えていた。だとしたら、ずっと前から足りないと感じていたものを語っていたのが、アントニオの話だったはずがあるだろうか？

マカパで、それからみんなとあちこち回って過ごした時間のなかで、ようやく考えがはっきりしはじめていた。この新しい世界の何が自分を引きつけ、生まれ育った世界の何が自分を押しつぶしていたのか。広さと、それがないこと。

村の暮らしは穏やかで、それなりのよさがあった。ピライはそれを否定しなかった。だが、いまならわかるのだが、それはいつも人が多すぎた。おかしな話だった。ひどくおかしな話だった。マカパには村よりもずっと、ずっと、ずっとたくさんの人がいたのだから。でも村ではいつもいっしょにいて、いっしょにいすぎて、くっつきすぎていて、なのにマカパでは、逆説的に、もっと広さがあった。それに、みんながいつも、おまえがどこにいるか、何をしているか、誰の隣にハンモックを吊るしているか、どこでいつ用を足しているかまで知っているという、昔からなんとなく神経にさわっていたあの感覚もなかった。おかしなことに、と彼は思った。町のほうが空気が多いみたいだった、息をするのが楽になるみたいだった。それに、しばらくのあいだならひとりでいることもできて、誰もそれを変だと思わなかった。

ひとりになれる時間が多かったわけではない、それどころか。アントニオは偉大な男で、ヤマンデを救った偉業は何世代にもわたって語りつがれるだろうが、少しばかりうるさくもあった。ピライは母親を知らず、父親もジャガーにとても早く奪われて、ほとんど覚えていなかった。だから自分がこの比べ方をするのにいちばんふさわしくないのはわかっていたが、アントニオはこのところ、彼ら全員の母親と父親を同時に務めているように見えた。いや、ひょっとすると、それこそ正しい比べ方なのかもしれなかった。アントニオは彼らの本当の父親ではなく、なぜかそのことが彼をいっそう世話焼きにしていた。それは、部族全体が父親と母親になってくれるという経験を身をもって生きてきたピライが、すでに味わってきたことだった。

けれども、どんなにがんばっても、アントニオはどこにでもいられるわけではなく、ときどき自由のひとときを彼に与えないわけにはいかなかった。そして最初のときは、なんてとてつもない感じがしたことだろう、思い出すといまでも息が詰まった。マカパを歩きまわった最初のころのこと、初めて川岸へ行ったときのことだった。川の果てしなさ、ずっと遠い、ほとんど見えない向こう岸。

ジャシと果物売りのあいだで何かもめごとがあって、アントニオが割って入らなければならず、ほかのみんなも彼についていった。彼とウビラタンを除いて全員が。ふたりはそこに残って、ほんの数歩離れて立ち、その広さに見とれていた。不思議だった、吸える空気がこんなにたくさんあるのに、胸のなかに何か妙なものを感じて、息が詰まりそうな気がしたのだ。でもそれはいい感じだった、とあとで思い返して彼は気づいた。

まもなくアントニオがやってきて彼のまとまらない考えを断ちきり、一団を集めて家に連れて帰って、お金の授業をした。おもしろかった、アントニオの説明することの多くがそうであるように。でもピライは、もう少し川を眺めていたかった。

それに、アントニオの家族はいつも愛情深く親切だったが、彼らを小さな子どものように扱った。そして、アントニオのことばによると、みんな、彼らにはっきりした役割を与えることにばかり気をつかっているようだった。ヤマンデは脚を折った子、イタウナはなんでもこわがる子、カウエは何もこわがらない子。そして僕は料理をする子。

だから、目の前に現れた機会にすぐに飛びついたのだ。テレビに出たあとの二日間はひどく混乱していて、アントニオは前にも増して忙しかった。「僕はここに残る」と言って、ベイジーニョのちゃんとしたつくり方を覚えたいとかなんとかもごもご言うだけで、アントニオはほとんど言いかえす暇もなかった。「本当にいいのか？　じゃあ戻ってきたらマカパの空港で会おう」「うん、わかった」そして彼はついに自由になった。

いや、自由か。まだもうひとつ、片づけなきゃならない小さな問題がある、と彼は身震いして思った。僕は狩人だ、大いなるアナコンダにかけて。ほかの誰よりも先に、ひとりでカイマンを仕留めたんだ。なのにいま、年とった女の人がこわいなんて、その人の気持ちを傷つけるのがこわいなんて。でも、ことばを知らないのに、どうやって自分のしたいことを説明すればいいんだ？　彼は窓の外を見た。まだ雨が降っていたが、もうすぐやみそうなのがわかった。彼はベッドから起きあがって、台所へ向かった。

マルセラは鍋をいじるのに夢中になっていた。彼がやってくるのを聞くと、いつもの熱のこもった調子で挨拶した。「ピライ！　少しは休めた？　よかった。いまヴァタパーをつくりはじめたところなの、いらっしゃい、デンデ油のことでひとつ教えてあげる」

ピライはそっと彼女の肩に手を置いて、彼女がすっかり振り向き、全部の注意を自分に向けるのを待った。彼はベイジーニョのお盆のほうへ行った。もうはっきりしていたとおり、それは飛びぬけて彼の大好物だった。ひとつ食べて、「すごくおいしい」の顔をした。もうひとつ食べて、また同じ顔をし、それから彼女に待つよう合図した。

マルセラはじっと彼を見ていた。

そこでピライは、もうひとつ食べるふりをし、それからまたひとつ、またひとつ、またひとつ食べるふりをした。同じしぐさを何度も何度も繰り返したあとで、もうひとつ食べようとして手を止め、おなかに手を当てて、口の両端を下に曲げた。それから、わかってくれたかどうか確かめようとマルセラを見た。

マルセラが口を開こうとしたが、ピライは考えなおして彼女を止めた。彼は、これも大好きなマラクジャのケーキのお盆のほうへ行き、ひと切れ食べるしぐさをした。今度もまたうれしそうな顔で。それから、おいしいプジン・ジ・レイチを、なかなかいけるアホス・ドースを、そしてチュロスを、うーん、食べたい、と指さした。最後にベイジーニョのお盆に戻った。今度は本当にひとつ食べて、またうれしそうな顔をした。

マルセラがついてきているか確かめるように彼女を見て、最後のしぐさをした。両手で台所全体とマルセラ自身を示そうとして、それからベイジーニョを指さしたのだ。そこで彼は動きを止め、もう一度、問いかけるような顔でマルセラを見た。

マルセラは彼にほほえんだ。「言いたいことはわかったわよ、ねえ。料理は好きだけど、それがあなたのただひとつの、たったひとつの夢中になれるものじゃないのね。そのとおりよ。うちのアントニオもいつもそうだった。ラジオ、学校、スポーツ。いろんなスポーツ。えらいわ、ピライ、うれしいわ」

ピライはもちろん、ひとことかふたことしかわからなかったが、マルセラの声の調子と表情は疑いようがなかった。わかってくれたのだ。彼は彼女を抱きしめ、それからほっと息をついて、出かける支度をした。ツアーに出かけたときからずっと、川辺の要塞まで散歩したいと思っていたのだ。だがマルセラは、まだ彼にひとつ尋ねたいことがあった。チュロスのお盆を指さして、問いかけるような目を向けたのだ。

ピライは一瞬迷ったが、すぐに、彼女がほかに何に興味があるのかと尋ねているのだとわかった。彼は窓を開けた。そこからはもう日が差しはじめていた。そして彼は大きく息を吸った。

4.10 身震い

何年も前、いつだったかもわからないころに話して聞かせた『親指小僧』のおとぎ話が役に立つことになるとは、誰が思っただろう。そしてとりわけ、イタウナが――たしかに記憶力のいい子だったが、アントニオもそこまでとは思っていなかった――ちょうどいいときにそれを思い出すとは。

いかだを水に下ろした地点を見つけるのは、彼の心配を裏切って、かなり簡単だった。アントニオが頭に置いていた、見分けやすい三本の川筋の合流点のほかに、ひとりひとりが自分なりの記憶や目印を持っていることがわかったからだ。「すごく高い黒檀の近く」「古い幹が水に浸かってる狭い曲がり目があった」「出発してすぐにジャカランダの群れがあった、そのすぐ裏のはずだ」。だが、もしイタウナが行きに木々に深い刻み目をつけていなかったら、上陸してから森のなかですぐに正しい道に入れたかどうかはわからなかった。「ちっちゃな親指の話を思い出したんだ、こうすれば戻ってこられるって思ったんだ」。

思いつくとは大したものだった。幹の印は、かなりの距離にわたって正しい方向へ彼らを導いてくれた。モアシルとカウエが――ふたりは大いなる川を見つけたとき、行きも帰りもその道を通っていた――自分たちの目印を確かに見つけなおすのにじゅうぶんなだけの距離を。

もう足早に村へ向かって歩きながら、アントニオは、この三か月でどれほど多くのことが変わったか、半分死にかけたヤマンデを運び、千もの危険のなかを未知へ向かって、この同じ木々の下を通ったときとは何もかもどれほどちがっているかを考えていた。

そうしてよかったと思っていた。少年が一団の真ん中で元気に跳ねるように歩いているのを見れば、彼を救ったことに何の悔いもなかった。だが、もう何ひとつ元どおりにはならないのだと、いまになって気づいた。何日かすれば、また町に戻っている。森から一度も出たことのないほかの若者たちが、いわゆる文明を体験し、彼らもまたそれに魅せられ、動揺するだろう。それから、みんなでワールドカップに出るというこのばかげた可能性に賭けてみるのだ――こんなことが起きているなんて、まだ信じられなかった――それから、それから家に、森に帰るだろう。そうだろうか？　本当に前と同じ暮らしに戻れるだろうか？

どのみち前と同じ暮らしにはならないだろう、服やナイフを村に持ちこみ、自動車や飛行機やテレビを見てしまったからには、もう二度とそうはなりえない。どうなるにせよ、何千年も続いてきたあの暮らし方は変えられてしまった、永遠に汚されてしまったのだと彼は気づいた。それがよかったのかどうか、わかりはしない。考えないほうがいい、責任が重すぎる、考えると身震いがする。

だが、ガンボーネから聞いた話を思い返しても身震いがした。「死んだなんてとんでもねえ。ああいう連中はしぶといんでさ、どん底から這いあがってきた連中ですからね。あっしらとはちがう。ああいうのはそう簡単にくたばりゃしねえ。運がよかったのは、あのとっても見事な赤のジープに乗ってたことでさ。公園のヘリコプターが一機、見回りをしてたんです。赤いのが見えたんで、様子を見に降りてきた。ウインチでジープを引きあげたら、あのアルマジロの息子のペペは、くるみみたいにぺしゃんこになってたけど、生きてた。片脚がちょっと短くなって、顔もへこんじまったけど、どうせもともと男前じゃなかったからね。あっしらとはちがう。それに下着ってのは伸び盛りの業界でさ、ご婦人がたはレースに目がないんだそうで、いつもパンツに囲まれて、いい商売ですよ」

アントニオは、あのごろつきが死んでいなかったのがうれしかった。ひょっとするとじゅうぶんなことをしなかったのではないか、助けを見つけられなかったのではないかという気がかりが、いつも少し残っていたのだ。足を引きずっているにせよ、ベレンでレースに囲まれていると知って、胸のつかえがおりた。だが身震いは、動揺は、もし自分があそこを離れなかったら、ジープのそばにとどまっていたら、十四年後ではなく一日後にマカパに戻っていただろうという考えのせいだった。そうしたら何もかも、何もかもちがっていただろう。いまごろどこにいて、何をして、誰といただろう。確かなのは、まちがいなく確かなのは、一週間後にワールドカップ出場をかけたプレーオフなんかしていなかったということだ。

4.11 びっくり！

その場面を、彼は百通りのちがう形で百回も思い描いてきた。家に近づくにつれて、それらが重なりあって頭のなかにひしめいた。いちばん気に入っているのは、ハリウッド映画のように、彼を真ん中にして七人が横一列に並んでスローモーションで歩いてくる場面だった。だが森ではふたり並んで歩くのさえひと苦労で、七人ならなおさらだった。そしてこの現実的なこだわりが、彼の空想をだいなしにした。ほかにも、黙ったまま長い長いあいだ見つめあう場面があった。彼とジャナイナ、ヤマンデとキリマ、モアシルとピアタ。あるいは、騒々しい抑えきれない歓喜の場面。百通りに思い描いたが、どれも正しくはなかった。空想よりも、思い出のほうが近かった。

村はもうそれほど遠くないはずだった――あの木に見覚えがある気がする。そんなことがあるだろうか？　アマゾンには木が何本あるんだ、十億本？　千億本？　なのに僕はいま、そのうちの一本に見覚えがある気がしたんだ！――そしてアントニオは、気がつくと、村での最初の瞬間と、彼を迎えたあのボールの一撃を思い返していた。誰が蹴ったんだろう。ヤマンデ、ふたつ靴下だったかもしれない。それともカウエか。いや、まんまるほっぺのはずはない、あのころはまだ小さすぎて、あんなキックはできなかった。ことばをちゃんと話せるようになったとき、誰が蹴ったのか尋ねてみたが、もう誰も覚えていなかった。ピアタだったかもしれない、子どものころからいいキックを持っていたから。村に入ったとたん、まず最初に腹にボールを食らったりしたら、どうだろう。

腹へのボールの一撃はなかったが、一団の帰還は、アントニオの村での出来事の多くと同じように、ボールに彩られることになった。

「しーっ！」と一同を黙らせて、どんなふうにまた姿を現すかを決めたのはモアシルだった。「声が聞こえる。空き地に誰かいる、ボール遊びをしてるんだ」ヤマンデが前へ飛びだそうとしたが、モアシルが腕をつかんで引きとめた。「待て、気づかれないように近づこう。気づかれないうちに映画を撮りたいんだ」

モアシルは遠征隊の記録係の役目を、とてもまじめに、熱心に引き受けていた。レチ・ノルチは、彼に最新の携帯電話を五台と、同じ数の充電ずみの予備バッテリーを持たせていた。電話をかけることもインターネットにつなぐこともないので、少し気をつけていれば、写真と映像のルポルタージュをやりとげるのにじゅうぶんなはずだった。彼は舟の旅のあいだに、友だち全員にインタビューしたり、ゴウモンの写真を数えきれないほど撮ったりして、もう最初の一台の電池を使いきっていた。アントニオに頼まれて、舟の旅の最後のほうと、歩きの道のりのはじめのほうは記録しないようにしていた（「どうして村がどこにあるか知られたくないの？」「説明するとややこしすぎるんだ。お願いだよ、モアシル、この区間では映画を撮らないでくれ、レチ・ノルチとはもう話がついてる」）。アントニオがまた撮ってもいいと言ってからも、あまり撮らなかった。一団の足を遅らせたくなかったのもあるし、動物は撮るのが難しく、木は三十枚目ともなるとそれほどおもしろくないとすぐに気づいたせいでもあった。

だがいま、ついにすごい映像を撮るチャンスが来た。外の目に撮られているとは知らずにボール遊びをしている村の一団。モアシルは、ひょっとすると生まれて初めていまこのとき、アントニオが村に着いたときどんな気持ちだったのか、わかりかけているのかもしれないと思った。それからその考えを追いはらい、まったくの静けさのなかで最後の数歩を進んで、目の前の光景に集中した。

ピアタがフリーキックを蹴ろうとしていた。

「壁の並べ方がめちゃくちゃだ」とヤマンデが小声で言った。そのあいだも、村の友だちのために買ってきたみやげを取りだそうと、リュックのなかを探っていた。

「しーっ！」とモアシルがまた彼らを黙らせた。だが、それでもこう言い足さずにはいられなかった。「壁はじゃまでしかない、ボールが見えなくなる」

「どっちにしても並べ方が悪い」

「これは……の問題なんだ」とアントニオが口をはさんだ。「判断する前に……の誤差ってやつを考えに入れないと……場合による、どちら側から見るかによるんだ」

「どういう意味？　並べ方が悪いなら悪いんだよ」とイタウナが言い足した。

「しーーーっ！」

ピアタはフリーキックを蹴る前にじっくり時間をかけるのが好きだった。どちら側にボールを通すか、たっぷり時間をかけて研究するのが好きだった。もっとも、壁がこんなに並べ方が悪くては研究することなどほとんどなく、ゴールに石つぶてみたいなシュートを蹴りこめば確実に入るのだが。アカミンはキーパーとして悪くなかったが、あの……まあいい、とは比べものにならなかった。だが今回、彼はいつもよりもっと時間をかけた。あたりを見まわした。何か変だった。さっきは物音が聞こえたような気がしたのに、いまは逆に、空き地の片側が妙に静まりかえっていた。まるでそちら側の動物たちがそろって黙ることに決めたかのように。それから彼は肩をすくめて助走に入った。数秒後には森の茂みのなかへボールを探しに行かなければならないのだと、心のなかでもうため息をつきながら。

ボールは、いつものように木々のあいだに消えた。みんなそれを見ていた。ピアタがフリーキックを蹴るときは、探す手間をはぶくために、みんながゴールの裏の森に目を向けるのだった。だからこそ、ボールのように見えるのにずっとよく弾む奇妙なものがセンターサークルに現れたとき、驚きととまどいはいっそう大きかった。それが弾みおえるあいだに、若者たちはみんなゆっくりとそれに近づいていった。試合を見ていた子どもたちのなかでも大きい子たちが近づき、小さい子たちはおびえた母親たちに引きとめられた。

「何だこれ？」とジェルジェルが尋ねた。

「果物？」とイシカリバが言ってみた。

「こんな果物は見たことがない」と、あたりを見まわしつづけていたピアタが言った。「それに、どこから落ちてきたのかわからない。誰か、どこから落ちてきたか見たか？」

「午後の光る大きな鳥から落ちてきたのかな？」とタイニが、どれほど真相に近づいていたかも知らずに言った。

「まだ遊んでるってことは、まだ通ってないってことだろ？」とイシカリバが言いかえした。

「あっちから来たと思う！」と、見物していた女の子のひとりの小さな声が響いた。

女の子の指さすほうに最初に目を向けたのはピアタで、だから、葉が揺れ、枝が分かれ、森からヤマンデの幽霊が現れたとき、ほとんど気を失いかけた最初の者もピアタだった。

4.12 爪

一団のほかの者たちが次々に空き地に現れるにつれて、なかには胸が見えなくなる妙なものを体にまとっている者もいたが、居あわせた者たちの声も出ない驚きは、喜びの叫びに変わった。子どもたちが何人か、叫びながらシャボノへ駆けていった。「ヤマンデ！　ヤマンデが帰ってきた！　アントニオも、モアシルも、みんな帰ってきた！」数分のうちに空き地は大混乱になり、それに比べればカーニバルなど静けさを好む人の気晴らしだった。アントニオは、ジャナイナの顔と、その腕に抱かれたイビラアタンの横顔を見て、温かい幸福感を覚えたが、それはすぐにもっと不快な感覚に取ってかわられた。ジャナイナは落ちついた足どりで、ゆったりとあたりを見まわしながら進んできた。ほほえんでいた、いや笑っていた。そしてその隣で、彼女といっしょにほほえんで、いや笑っていたのはキリマだった。まさか？　嫉妬だ。その不快な感覚はまぎれもなく嫉妬だった。まさか？　とアントニオはもう一度自問したが、そのときジャナイナの目が彼の目と合って、森でいちばん美しい笑顔があらゆる雲を晴らした。ジャナイナは彼にキスをして、イビラアタンを彼の腕に渡した。もちろんまさかだ、何を考えてたんだ、僕は。

すぐにわかったことだが、それは盛大な祝いと強い感動の二日間になりそうだった。変化の飲みものがたっぷりふるまわれた。

だがアントニオのなかでは、つかのまの幸福のあとで、嫉妬にかわって新しい不快な感覚が居座っていた。うしろめたさだ。二日間しかいられず、すぐにまた出発しなければならないと説明するのは、まったく簡単ではなかった。

彼はジャナイナへのみやげに、彼女があっけにとられるほどぴかぴかの鍋をふたつと、見つけられるかぎりいちばん色とりどりの首飾りと腕輪を何十と持ってきていた。彼女はすぐに、身につけていた木の実と羽の首飾りや腕輪をそれにつけかえた。それに、赤と青の縞の丈夫な布でできたすてきなハンモックもあって、彼女はそれがとても気に入った。だがみやげものは、彼女の顔を曇らせているさびしげなふくれっ面をすっかり消すには、まるで足りなかった。

「でも、せいぜいひと月いないだけで、そのあとはずっと戻ってくるから、約束する」

「ひと月って何？　月が三つめぐるあいだいなかっただけで、もう昔のアントニオみたいなしゃべり方に戻ってる」

「ごめん。ひと月っていうのは、月ひとめぐりってことなんだ」

「じゃあどうして月ひとめぐりって言わなかったの？」

「ああもう、悪かったよ。疲れてるし、感激してるし、頭がこんがらがってるんだ、ちくしょう、少しはわかってくれよ！」

ジャナイナは、彼がわざとやっているのかどうか確かめようと彼を見た。そのときになってようやく、アントニオはポルトガル語で話していたことに気づいた。そして冗談にして、辛抱してくれと頼んでみた。

「冗談だよ、僕のカエルちゃん。君を愛してる、イビラアタンを愛してる、できるだけ早く君たちのところへ帰りたい。その前に、ただこれをやらなきゃならないんだ」

彼は彼女の頬をなで、彼女がハンモックの上に放りだしていた木の実の首飾りのひとつを取って、そこから大きな茶色い実を二十二個と赤い実を八個抜きとり、長い茎にていねい

に通しなおした。「ほら、見て。この赤いのが試合の日で、この茶色いのが試合と試合のあいだの日だ。これをシャボノの入口に吊るして、君が毎日ひとつずつ実を抜いていく。そうすれば僕たちがいつ試合をするかわかるし、君にも、村じゅうにもわかるんだ。試合のあと三日のうちに僕たちが帰ってこなかったら、勝って次の試合もするってことだって。それに、僕たちが帰るまであとどれだけあるかもわかる。ほら、たとえ全部勝っても、月ひとめぐりより長くはいない。それから君たちのところへ帰って、ずっとこの新しいすてきなハンモックでいっしょに眠るんだ。これで少しはうれしくなった？」

ジャナイナと仲直りすると、アントニオは彼女の手をとって、静かな場所を探して川のほうへ連れていった。ふたりきりなのを確かめてから、アントニオは言った。「僕がした画面の話と、そのなかで見られるもののこと、覚えてる？」

「もちろん覚えてる」

「それでね。僕がここにいたあいだに、持ち運べる画面が発明されたんだ。その画面が前に見た絵を、そのなかで思い出すことができるんだ」

「よくわからない」

「ほら、いま見せてあげる」

アントニオはリュックからiPadを取りだした。彼女の手にそれをのせると、彼女はおそるおそる受けとった。彼は動画を見るアプリを立ちあげた。そうしてジャナイナは、あっけにとられ、魅せられながら、マルセラと、イタロ父さんと、アントニオの色とりどりの家族のほかの人たちと知りあったのだった。みんなが、どっさり、ほんとうにどっさりよろしくと言っていた。それに、私たちの孫はなんてかわいいんでしょう、何言ってるの、見るのはあっちのほうで、いまこっちがあっちを見てるわけじゃないのよ、かまわないわ、きっとすごくかわいいに決まってるもの、ねえノルミーニャ？

イタタクアラと話して、すぐにまた出発するだけでなく、もっとたくさんの選手を連れていかなければならないと説明するのも、それほど簡単ではなかった。アントニオはまたiPadを使って、終わったばかりのツアーの写真をいくつか見せた。

村のかしらは、その道具にひどくとまどいながらも、とても理解があった。「アントニオ、おまえはずいぶん長いことわしらと暮らしている、わしらの一部だ。わかっているな？」

「はい、わかっています。僕はその一部です」

「ならば、わしが村の長老にすぎず、自分のほかには誰の運命の主でもないことも、わかっているはずだ。おまえたちの計画を話してくれるのはうれしいが、誰の許しを請う必要もない。その偉業を成しとげねばならぬと感じるなら、精霊たちがおまえたちとともにあるよう祈ることしか、わしにはできん」

話のなかでいちばん難しかったのは、シャボノの外で大騒ぎがくりひろげられているあいだ、慎みと謙虚さを保つことだった。

モアシルはレチ・ノルチの求めを完璧に理解していた。だからこそ、冒険の仲間たちにも、みやげを渡すのを少し待ってくれと頼んでいた。その前に、日々の仕事にいそしむ村人たちの写真や映像を撮りたかったのだ。だが、リュックから携帯電話を一台取りだし、写真を何枚か撮って画面で結果を見せたとたん、村の暮らしは永遠に変わってしまった。モアシルはいまや、とんでもないポーズで写真を撮ってもらおうと競いあう何十人もの

人々の襲撃に立ち向かわなければならなかった。もう被害が出てしまったのだから、少しはなだめてやったほうがいい。モアシルは友だちに、もういい、好きにしていいと合図した。

みやげものへの最初の驚きと感嘆の波、「すごい、これは僕の」「これは何？」「じゃあアントニオがこの何年も話してくれたことは全部本当だったんだ！」が過ぎると、話の時間になった。キリマは、赤い花の木の真下でアリクイが子を産んだ話をし、ピアタは、ひと月前におこなわれた成人の儀式のことを話して聞かせた。今度もまた、たくさんの若者がみごとにやってのけたという。「僕たちのレベルじゃないけどね」。

ピアタとアントニオとヤマンデとウビラジャラが取りしきる、ブラジルに挑む一団を構成する残りの十六人を決めるための手早い選考も、大いに関心を集めた。最初の旅の主役たちのうれしそうな顔が、彼らの持ちかける新しい冒険の大きな宣伝になった。「ピライなんか、楽しすぎて向こうに残って僕たちを待ってるんだ」。選ばれた者のなかでためらいを見せたのはごくわずかで、結局その者たちも、みんなの熱気にうつって引き受けた。

だが、もちろん話題をさらったのは、若者たちの一団の冒険だった。アントニオの家族への、マカパへの、ブラジル全体への賛辞の合唱。そしてどの合唱にもあるように、それに加わらない声もかならずあった。イタウナの声だ。聞く辛抱のある者には誰にでも、イタウナは、ほかの者たちが描いている牧歌的な絵とはまるでちがう、マカパの暮らしの話をして聞かせた。

「からっぽなんだ。すごく変なんだ、からっぽと混乱がいっしょにある。人がものすごくたくさんいて、村よりずっと多くて、昼も夜もいつもすごく大きな音がしてる、なのにそれでもからっぽみたいなんだ、人と人が離れてるみたいに。巨大な小屋がものすごくたくさんあって、そのなかにはほんの少しの人しか住んでない、ふたりとか三人とか、ひとりだけのこともある。木はほとんどない。そのわずかな木も、みんな小さくて、男が熱を出したときみたいにぐったりしてる。それに動物もほとんどいない。そしてそのからっぽのなかに、いちばん変なものがある。あの人たちが風って呼んでるもの。空気が動くんだ、でもここみたいにじゃない。強く動いて、木を曲げて、頭に羽をつけてたら見えない手でさらっていって、自分の声まで持ってる。それにあの人たちは映画をつくるのが大好きなんだ、でもアントニオの画面のなかのとはちがう。映画のなかで殺しあうふりをすることもあって、人々は一種のシャボノみたいなところへ、殺しあうふりをしてる人たちを見に行って、それで喜んでるんだ。それにボール遊びもする、うん、でも僕たちよりずっと下手だ。僕たちの子どものチームが、あの人たちの大人に勝つよ。でも何よりも、人がちがうんだ。たくさんの人が青白い。アントニオもここに来たときは白かったって言われてるだろ。でもあの人たちはもっと色が薄くて、死んだ魚より青白い。かと思えば、火にくべたあとの木みたいに黒い人たちもいる。夜みたいに黒いんだ、昼間でも。見ても、顔があるのかないのかさえわからない。そしてみんな、まるで僕たちのほうが変わり者みたいに僕たちを見てたんだ」

だから出発のときに、イタウナが自分の決心をアントニオに告げたのは当然のことだった。「僕は行かない」

「行かないって、どういうことだ？　ブラジルとの試合は？　ワールドカップは？」

「試合は僕がいなくても勝てるよ。ワールドカップなら、子どものころにあんたがここで教えてくれたほうがいい。精霊たちがあんたたちとともにありますように。ピライによろしく」

くそっ、なんて慌ただしいんだ、とアントニオは思った。十四年間、まったくの静けさのなかにいたのに、いまは何もかも大急ぎでやらなきゃならない。マカパでピライと話して

森へ帰るよう説得する時間がなかったのと同じように、いまはイタウナと話して、いっしょにサンパウロへ来るよう説得する時間がなかった。

「わかったよ、イタウナ。君の好きにすればいい。とても残念だ。いまは無理だけど、すぐにまた会って、たくさん話そう」

「うん」

着いてから二日半後、夜明けに一行がまた出発したとき、イタウナは最前列で見送っていた。片手を高く掲げ、誇らしげなまなざしで、その堂々とした様子といったら、モアシルの撮ったみごとな写真を見た者なら誰でも、彼こそ村のかしらだと思っただろう。だが、二十三人の一団が見えなくなったとたん、その同じ手はイタウナの口のなかに入り、彼はそれからの二時間、子どものとき以来やらなかったほど爪を噛みつづけた。

それはしだいに落ちつかなくなっていく二時間だった。イタウナは、それまでの三か月のあいだに自分を動揺させたすべてのことを、頭のなかで何度も何度もたどった。だが、巨大でからっぽの小屋や、妙な顔をした人々や、殺しあう三百人のスパルタ兵の光景に、友だちの、ボールの試合の、試合のたびに増えていく観客の光景が、くりかえし重なってきた。自動車の騒音の記憶に、ゴールのたびの観客のどよめきが重なった。

イタウナは空を見あげた。仲間たちが出ていったときよりずっと明るかった。出発してからずいぶんたった、と彼は思った。でも、二十三人の一団は、ひとりの男よりずっとゆっくり森を進む、とも思った。とりわけ、その男が、ちっちゃな親指みたいに道に印をつけるという名案を思いついた男なら。それに、あいつらは……を組むのにずいぶん時間をとられるはず……ガンボーネ！　組まなきゃならないいかだなんてないんだ！　彼はマカパから持ってきた小さなリュックをつかみ、慌てて食べものを少し詰めこみ、イラセマのところへ走って、ついに勇気を出して彼女にキスをし、それからイタタクアラのところへ行った。「あいつらに追いつきに行く。僕が必要になるかもしれない」

「まちがいなくな」とイタタクアラは言った。若者はもう走って森の茂みに分け入っていくところだった。

4.13 モンチ・ドウラード

息を切らしながらも満足げなイタウナは、一団が川に着く少し前に追いついた。アントニオは彼を見てほっとしたが、それも、ガンボーネが、万一のこともあるからと、本当に待っていてくれたのを見たときの安堵に比べればなんでもなかった。

外の世界との最初の接触である大きな舟に足を踏みいれたとたん、一団はすぐにふたつに分かれた。一方は新入りたち、初めて森の外に足を踏みだす者たち。もう一方はベテランたち。いま思い返してみると、少年たちは本当に勇敢だった、それも最初の最初から。自分たちの世界を捨てる勇気があり、新しい世界を、とくに畏れいることもなく抱きしめる大胆さがあった。だが、ほかの者たちと比べたいまほど自信たっぷりに見えたことはなかった。川とジャリ川を何度か舟で行き来しただけで、世界一の川の航海の専門家になった気でいるのを見るのはおかしかった。マカパでの滞在とツアーのことは言うまでもない。それで彼らはすっかり新しいマゼランになっていた。声の合唱は絶えまなく、主な話題は「ああ、ジャリ川も昔とはちがうな」という定番の主題の変奏で、アントニオはそれがおかしくてたまらなかったし、アントニオがときどき会話の断片を訳してやるガンボーネもおもしろがっていた。

「ああ、今度は舟がもう用意してあるけど、前のときは自分たちでつくらなきゃならなかったんだ。覚えてるか、ジャシ？」とウビラタンが言った。

「もちろん、忘れるのは頭のおかしいやつだけだ。それにあの舟ときたら。あれで川を下るのはまるでちがった。もっと危なかったけど、もっとおもしろかった」

「それに、ヤマンデを乗せたハンモックがもう少しで水に落ちそうになって、ぎりぎりでつかまえたときのことは？」とカウエが持ちだした。

アントニオはそれを覚えていなかったが、彼が眠っているあいだのことだったのかもしれない。

「それに、カイマンを追いはらうためにひと晩じゅう寝ずの番をしたよな」とモアシルが言い足した。

それはぜったいに起きなかったと断言できる、とアントニオは思ったが、聞いていたかったので口ははさまなかった。

滝の話になると、何を言っているのかほとんどわからなくなった。みんなが――ありそうもないことにヤマンデまで――互いにさえぎりあい、仲間の声をかき消しあって、自分なりの話をしたがったからだ。この新しい版の話では、ひとりひとりがいかだを救うために水に飛びこんだか、同じくらい遠征の成功を左右する何かをしたことになっていた。そして実のところ、細かい点は別にすれば、本当にそうだったのだ。みんなが英雄的で、みんなが決め手だった。アントニオは喉にこみあげてくるかたまりと闘わなければならなかった。

けれども滝は、新入りたちの最初の幻滅の原因にもなった。ガンボーネは滝を注意深く避けていて、通りすぎたあとで眺めに行くために寄り道をしようと持ちかけたが、アントニオは反対した。できるだけ早くモンチ・ドウラードに着きたかったのだ。それでなくても行程はひどく無理をしていて、少年たちをできるだけ疲れさせたくなかった。その決定はみんなに受けいれられたが、新入りたちのあいだに、「ベテランたち」がそれをいいことに少し話を盛ったのではないかという疑いが忍びこみはじめた。

モンチ・ドウラードの最初の屋根が見えたとたんに、その疑いを口にしたのはピアタだった。

「これだけ？　おまえたちの話だとすごいところみたいだったのに、僕たちの村よりちょっと大きいだけじゃないか。全部夢で見たんじゃないのか？」と、半分は冗談、半分は本気で言った。

ほかの新入りたちは、ひとりの人間のようにまとまってその代弁者の後ろにつき、大きくうなずいた。だがヤマンデとほかの者たちは、くすくす笑うだけだった。「いまにわかる。いまにわかるさ」

モンチ・ドウラードへの到着は、前のときとこれ以上ないほどちがっていた。あのときは黙って、ほとんどこっそりと着いた。いまは船着き場で、かなり大勢の野次馬が――まもなく上陸するという噂が広まるとたちまち数が増えた――待ちかまえていて、テレビカメラもかなりの数あった。さいわいアントニオは、こういう事態を前もって考えて、正面から立ち向かうことにしていた。最初の七人の小さな一団がブラジルの暮らしにかなり急いで慣れなければならなかったのだとすれば、この者たちはもっと速く慣れなければならない。ひょっとすると、何が起きているのか理解する暇さえ与えないのが唯一の解決策かもしれなかった。だから舟のなかで全員に短パンとTシャツを配り、少なくとも大勢がいっせいに裸でいるという問題だけは避けられるようにした。それに新入りたちにサッカーシューズを試させることも始めていた。

接岸もしないうちから、船着き場で歓声の合唱が始まった。「ジャシ！　ピライ！　カウエにモアシル！　スペインもアルゼンチンも目じゃないぞ！」アントニオは最初わけがわからなかったが、それからほほえんで手を振りはじめた。いっぽう少年たちの多くは、その叫び立てる群衆との接触をできるだけ先にのばそうとするかのように、おびえて舟の船尾のほうへ押しあっていた。

上陸するとすぐ、アントニオは人ごみのなかにジョージを探した。ほとんどすぐに見つかった。少し離れたところで、同僚のひとりに指示を出していた。ふたりは挨拶を交わしたが、目くばせで、最初のインタビューはもっと静かな場所に着くまで待とうと申しあわせた。群衆のなかに、アントニオは、マカパに戻ってすぐに彼にインタビューした、というよりインタビューをでっちあげたあの頭のおかしい記者の、ぎらぎらした目も見えたような気がした。ピッポ、ピスポ、何て名前だったか。考えてみれば、いま起きていることはみんな、ある意味ではあいつのおかげでもあるんだな、とアントニオは気がつくと思っていた。もっとも、ああいう人物に感謝の気持ちを抱くのは、どのみち彼の手に余ることだったが。

ファンの行列に囲まれて、一行はジョージとその撮影班といっしょにポウザーダへ向かった。その看板には、この機会のために「ペロウリーニョ亭／ブラジル・インディオ代表公式ポウザーダ」という横断幕が掲げられていた。入口では、ふたりの番人のように、一方には予防接種を担当する医者が、もう一方にはセニョール・アルマンドが待っていた。ジェジータは前のときを記念して、遠征隊以外でポウザーダに泊まる唯一の客という栄誉を彼に与えていたのだ。

「ようこそ！」とアルマンドはセルヴェージャを掲げて言った。「待っててくれ、ジェジータを呼んでくる」

だがその必要はまったくなかった。数秒後、群衆の騒ぎに呼びよせられて、ポウザーダの女主人が戸口に現れた。満面の笑みはレチ・ノルチのカメラを探し、すぐに見つけた。彼女は一団全員になかへ入るよう大きく手招きし、入ってくるひとりひとりに挨拶した。おずおずした者もいれば、得意げな者もいた。

撮影班ももうなかに入ったあとで、最後に入ったのはモアシルだった。彼は小さなリュックから、村で摘んできたみごとな花を取りだし、何十回も練習したのがわかるポルトガル語で彼女に言った。「これをあなたに、ドナ・ジェジータ」ポウザーダのなかからどっと歓声があがった。

「これをあなたに、ドナ・ジェジータ」は、たちまち一団の流行りことばになっていた。舟の上で、モアシルの練習に立ちあいながら、何人かはそのジェジータという人がどんな人なのか何度も説明してくれとせがみ、そのポルトガル語の文句をいっしょに繰り返して、いろいろな抑揚で、彼が覚えるのを手伝った。ただ興味深げに成り行きを見ているだけの者もいれば、とりわけ最初の遠征の者たちは、もっとふざけた態度をとって、ジェジータの説明になるたびに、新しい探検者たちには十分に理解できないとわかっている服装の点を中心に、たくさんの細部をつけ加えた。「うん、きれいだよ、耳から大きなヤシの葉が生えてるのが残念だけど……」とか、「きれい？　ほんとに？　手と足しか出てない幹のなかに隠れてるうちは、なんとも言えないな……」とか、そんな具合に。

だが、みんながなかに入ったとき、エサイがモアシルに近づいて小声で言った。「おまえの言うとおりだった、きれいだ。すごく変だけど、きれいだ」

「世界のほかのところも、そうなんだ。いまにわかるよ」

4.14 平静

「チアゴ！」

「はい、監督」

「俺をよく見ろ」

チアゴは彼を見た。何を見ればいいのかわからなかったが、多かれ少なかればかげた任務が来るのを、もう嗅ぎつけていた。

「俺、ちがって見えるか？」

「と、おっしゃいますと？」

「わからん、前と同じに見えるか？　ひと月前と同じに？」

「申しわけありません、監督、おっしゃることがよくわからないのですが」

「いや、チアゴ、わからないのは俺のほうだ。鏡を見ると、このいまいましい折れた腕を除けば、いつもと同じに見える。だが中身はもう俺じゃないんだ、宇宙人にさらわれて、もっと落ちついて、もっと穏やかで、もっとのんびりした版とすりかえられたんじゃないかと心配なんだ」

「ああ、そういうことでしたか。いいえ、いつもと同じでいらっしゃいます、請けあいます」

「つまり、いつもどおりむかっ腹を立ててるってことか？」

「いえ、そういうつもりでは……」

「ところがちがうんだ、チアゴ。ところがちがう。ちっとも腹が立たないんだ。だが立てるべきなんだよ。三日後にはワールドカップが始まるのに、どのチームでプレーするのかまだわからない。いや、わかってはいる、だが招集する正式な許可がまだ出てない。ワールドカップに誰を連れていくか選ぶのに誰かの許可を求めなきゃならないってことだけで、いいか、もう、全部ぶっこわすためのハンマーを買ってこいとおまえに頼むのにじゅうぶんだ。だがそれで終わりじゃない、とんでもない。このばかどもは、デビューの四十八時間前に、俺に、生まれてから一度もサッカー場を見たことのない……連中の……連中の……チームと試合をさせようっていうんだ。わかるか？」

チアゴは黙っていた。こういうときの自分の役目は、監督がひとりでしゃべっているような気にならないよう、ただそこにいることだけだとわかっていた。

「国民のご機嫌をとるためのたわごとだと思ってたんだ。それに少なくとも、あのもうひとり、あのサッカーのターザンは、もといたところへ帰ってそこにとどまるくらいの最低限の分別はあるだろうと思ってた。ところがどうだ。もしもし、今夜着きます、明日二時にグラウンドで会いましょう、まるで子どもだ。それなのに俺は、全部ぶっこわすどころか、こうしてのんびりかまえてる」

まあ、そうでもないが、とチアゴは口を開かずに思った。

「何もかもだいなしにしようとしてるあの大ばかどもを眺めて、しかも他人事みたいに眺めてるんだ、この犬がおしっこをひっかけてる脚が俺の脚じゃないみたいに」

どの犬です、とチアゴは聞きかけたが、ぎりぎりのところでこらえた。

「まあいい、少なくとも前半だけの試合にするよう説得できた。そうすりゃどっちが勝っても（どっちがだと、笑わせる）、クロアチア戦のときにそれほど疲れてないだろう。だがな、あのインディオのどれかひとりでも俺の選手を怪我させたら、誓ってナパームを持ちだして、あのいまいましい森を丸ごと焼きはらってやる」

4.15 光る大きな鳥

アントニオの指示はこれ以上ないほど明快だった。「動くな、しゃべるな。獲物を見つけたときみたいに動くな、獲物を見つけたときみたいにしゃべるな。簡単だろう？」

いや、簡単ではなかった。それどころか、とても難しかった。

最初の飛行の信じられないほどの感動、モンチ・ドウラードが目の下でどんどん小さくなっていくのを見ること、果てしない森を上から眺めることは、みんなを同じ立場に戻していた。もうベテランも新入りもなかった。誰も光る大きな鳥に乗ったことはなかったし、アントニオ自身、ずっと昔に二度乗っただけだった。だが最初の飛行は短く、ガンボーネの舟と同じくらいきしむ小さな飛行機の音はあまりに大きくて耳ざわりで、ほかのどんな感動もかき消してしまった。マカパに立ち寄って、すっかり感激したピライを拾い、ほとんどずっと耳をふさいで過ごしたもうひとつの短い飛行で、一行はベレンに着いた。

ベレンの近代的な空港で、ベテランと新入りの差はまた大きく、はっきりしたものになった。四時間の乗りつぎ、永遠のような時間を生きのびるためのアントニオの作戦は、ベテランひとりひとりに新入りをふたりか三人ずつ預けて見張らせることだった。

大きなガラス窓は滑走路に面していて、そこを何機かの飛行機がのんびり動いていた。あんなに大きくて、あんなにぴかぴかで、あんなに力強くて、何時間でも眺めていられそうだった。だが目を上げると、新しくておそろしい地平線の眺めがあった。暗い線が見えるものの限りを画していた。森のへりだ。そして奥の左手では、灰色の煙の細い柱が視線をさえぎって、眺めに奥行きを与えていた。

最初の一時間はそうして過ぎた。あんなに大きなガラスがあることに、そして、何度も繰り返されたように、どこにでも木があるわけではないということ、植物のないあれほどの広がりはほとんど考えられないということに慣れながら。なんとかなる、とアントニオは時計を見つづけながら何度も自分に言い聞かせ、森の暮らしへの郷愁の痛みを一度ならず感じていた。

二時間目は、ひと声の鳴き声で始まった。居あわせた誰も気にとめなかったが、もちろん、森から出てきたばかりの腕ききの狩人の一団である少年たちは別だった。彼らはターミナルの椅子のまわりを用心深く動きまわったが、広い空間に響いて彼らを惑わせるこだまのせいで、声がどこから来るのかわからなかった。とうとうそれを突きとめたのは、耳のよさと大きな手ですでに名高いジェルジェルだった。それは、飼い主がちょっとのあいだ椅子の上に置いていった籐のかごのなかにうまく隠れていた。アントニオは、少年たちがそんなふうに動いているのを見てすぐに警戒したが、カウエとヤマンデをちらりと見て安心した。ふたりの見立てでも、たいしたことではなかった。それから突然鳴き声が聞こえ、籐のかごと、そのまわりにますます大勢で押しあう一団が見えて、彼は悟った。

「ジャガーの子だ！」

「黒い？」

「黒いジャガーはいるんだ、話に聞いたことがある」

「でも小さいぞ！」

「生まれたばかりなんだろう」

「でも大きく見える、うまく言えないけど、大人の子どもみたいに見える」

「鳴き声もすごく変だ」

「どうしてあのなかに閉じこめられてるんだ？」

「いま出してやる……」

アントニオは間にあわなかった。何も知らない飼い主も同じだった。騒ぎのせいでトイレから出てきたのか、彼女は、自分の猫を大立ち回りで追いかける十人ばかりの若者たちのただなかにいた。猫はそのあいだに、建物を支える梁のひとつによじのぼり、少なくとも五メートルの高さで金属のパネルの陰に隠れることにしていた。

「僕が行く！」まぎれもないヤマンデの声が広いホールに響きわたった。

「だめだ、ヤマンデ……」とアントニオがひどく心配そうな声で言いかけた。

「心配しないで、何も起きないよ」

「ヤマンデ、君への愛のすべてをこめて言う。その梁に登ろうとしたら、ぶっころ……」

アントニオは最後まで言いおえなかった。ヤマンデはもう猫のところに着いていて、猫はすぐさま彼の前腕を爪で引っかいて、あらんかぎりの軽蔑を示した。

何もかも元どおりにするのに、たっぷり三十分の謝罪が必要だった。アントニオはヤマンデのその行いを叱る理由を千も思いついたが、全部胸にしまっておくことにした。どうして前のときは、こんなに大変だとは思わなかったんだろう？

だが次の一時間の中心はトイレだった。少年たちのいろいろな用足しについて、最初の報告がアントニオのもとに届きはじめたのだ。第一陣の若者たちが監督役をしていたにもかかわらず、そしてアントニオがお経のように「動くな、しゃべるな。獲物を見つけたときみたいに動くな、獲物を見つけたときみたいにしゃべるな」と繰り返していたにもかかわらず、ひとりでに水を吐きだす蛇口を前にした熱狂は――ポウザーダの蛇口にももうあっけにとられていて、水が湧きでるのを見るのにこれ以上奇妙なやり方があるとは思ってもいなかったのだ――巨大な鏡を、真っ白な便器の形を（使ったら全部汚れちゃう、叱られるよ！）、手を乾かす温風の吹き出し口を前にした熱狂は、抑えきれないように見えた。そのせいで、用を足すことを、飛行機に乗ってからやっと思い出した者もいたほどだった。

村で警報を発するのに使う叫び声が、突然ターミナルに響きわたった。とてつもなく大きな光る飛行機が、太陽の照りかえしにきらめきながら着陸しようとしていたのだ。少年たちはばらばらにガラス窓のほうへ駆けだした。ガラスにまともにぶつかった者もいれば、うっとりした者もいれば、おびえた者もいれば、自分の弓はどこだと尋ねた者もいた。さいわいモアシルとカウエが事態を引きうけ、小さな講演会を始めた。そして、アントニオ自身がことばで説明するのにひどく苦労しそうな飛行機のさまざまな面を、とてもよく理解していることを彼に示した。

魔法に満ちた瞬間だった。ふたりのインディオが、身ぶりとさえずりときいきいという声に満ちたことばで、飛行機について知っていることを全部、生まれて初めて村を出たばかりの未接触の一団からなる聴衆に説明していた。ほかの旅行者や警備員や職員たちは、もう何時間も前からこの風変わりな一団に注意を集めていて、いま、誰も演じていないという事実さえなければ大芝居になったであろう場面に立ちあっていた。

アントニオは少し離れたところで、また自信を取り戻していた。それどころか、本当に楽しんでいた。とりわけ、説明を全部理解して、正しく文脈のなかに置けるのは自分ひとりだということに勇気づけられていた。

「飛行機の仕組みを説明してるんだろう？」と、彼らといっしょに旅をしていて、そのあいだに彼に近づいてきていたジョージが尋ねた。

「精いっぱいね」とアントニオはほほえんで答えた。

「身ぶりはだいたいわかるんだけど、音が本当に変わってるね」

「そうかい？　わかるって？　僕は覚えるのにすごく苦労したんだ、ことばの一部なんだよ、知ってた？　同じ音でも、ちがう身ぶりがつくとまるでちがう意味になるんだ」

「うん、そうだろうね。でも、飛行機を指さしたり、飛ぶのを表すのに腕を広げたりするのは、わかるよ」

猫の飼い主も興味をそそられて近づいてきて、何時間も胸に閉じこめていた質問をする勇気を出した。「あなたがたは誰なんです？　何なんです？」

アントニオは何秒か考えて、それから答えた。「サッカーチームです、奥さん」

「まあ、あのチームなの？　テレビで話題になってた？」

「たぶんそうです、最近テレビを見ていないので、でもたぶん。チームの話をしていたのなら、私たちだと思います」

「でも、聞きまちがいかしら、ワールドカップに出るんですって？」

「やってみます、奥さん、やってみます」

「それで、選手は……」彼女は手で、一団全体をなんとなく指すしぐさをした。「あの子たち？」

「ええ、あの子たちです」

婦人はその答えに満足したようで、一瞬考えこんでから離れていった。それから考えなおしてアントニオのところへ戻ってきて、彼の手をとって言った。「がんばってね。あなたがた、気に入ったわ。きっと成功するわよ。本当に、がんばって」そしてようやく、満足そうに猫のそばの椅子へ戻っていった。

ついに彼らの飛行機が着き、焼けつくようなそよ風のなかで搭乗の列に並んだとき、アントニオはほっと力を抜いた。もうすぐだ、あとひとふんばりだ。

「また太陽の近くまで行くの？」とジャグアリウナがモアシルに尋ねた。モアシルはその質問に少し不意をつかれて、しばらく考えた。

「あのさ、太陽は魔法なんだと思う。さっき飛行機のなかから見たけど、大きくもならなかったし、熱くもならなかった。近づいても同じままなんだ、ってことは魔法ってことだろ？」

ジャグアリウナが「わからない」という意味の身ぶりをしているあいだに、アントニオは二度目の人数確認をしていた。

「どうかしたのかい、アントニオ？」とジョージが尋ねた。

「ひとり足りないんだ」とアントニオはとまどって言った。「確かじゃないから数えなおしてるんだけど」

「よかったら手伝うよ」

「ああ、ありがとう」

そうして、あれだけ何時間も待ったあとで、ふたりは三回数えては数えなおして、そう、たしかにひとり足りないという結論にいっしょにたどりついたのだった。

イシカリバは、トイレの個室のひとつに閉じこもっていた。仕切りの壁に背をもたせて座り、目には涙の筋がついていた。村の大人たちのあいだでは、めったにないことだった。

「行かなきゃ、イシカリバ、ボール遊びをしに行かなきゃならないんだ」

イシカリバはうつろな目でアントニオを見て、そのことばを受けとめるのにしばらくかかった。

「アントニオ……」言いたいことがあるのに、それを口に出せなかった。何かを指すように、手で大きな身ぶりをしていた。「アントニオ……」それからようやく、知りたいことに焦点を合わせることができた。「僕たちが行くところには、木があるの？」

アントニオは彼を助けおこし、肩に腕を回して、ゆっくりとドアのほうへ連れていった。

「あまりないんだ、でも、僕たちを守ってくれるものがほかにたくさんある。やれそうか？」

イシカリバはうつむいて、ゆっくり歩きながら、一心に考えていた。

「守ってくれるの？　守れるの？」

「ああ、約束する」

「じゃあ、うん、やれると思う」

4.16 歴史

一方的で試合にもならなかった試合が、同時に歴史に残ることはありうるだろうか？　サンパウロのモルンビー・スタジアムにいた観客たちなら、そう、ありうる、と口をそろえただろう。

招集を決める最終期限は、誰もが知っているとおり、ワールドカップ開幕の前日、六月十一日に定められていた。だが、アントニオの一団が森から戻ってくるのかどうか、いつ戻ってくるのかがわかるまで、運営の機械はスタンバイの状態にあった（何もしなかったことを言う業界用語だ）。ワールドカップに誰が行くかを決める試合の日取りは決まっておらず、ましてやチケットなど売りだされていなかった。

いまでは戦争でさえ、十日間トップニュースでありつづけるのは難しかった。ましてや、全国の脚光を浴びて二日後に森へ帰ってしまった色とりどりのインディオの一団などなおさらだった。世間の短い注意は、いよいよ大詰めのワールドカップへのカウントダウンと、大都市でますます激しくなる反ワールドカップの抗議に奪われていた。アスー・カアーが――多くの人の予想に反して――森から再び姿を現すと、大急ぎで使えるスタジアムが探され、ラジオとテレビがまたそのニュースを流しはじめ、チケット売り場では採算度外視の値段がつけられたが、結果として、キックオフの笛が鳴ったとき、モルンビーは半分空っぽで、テレビの前には親善試合なみの数の視聴者しかいなかった。

だが十分後、ブラジルの電話回線が同じメッセージを何百万回も運び、繰り返しはじめた。試合見てる？　ありえない、すぐテレビつけて。そして地区の住民の大勢がスタジアムへ駆けつけた。サッカーの歴史に刻まれつつある出来事を、せめて一分でも見るのに間にあうことを願って。

試合が始まって最初の五分で、インディオのチームはブラジルに、二日後にはワールドカップで緑と金のユニフォームを着るはずだったプロの選手たちに、すでに二点をたたきこんでいた。たしかに、スターは全員いなかった。これは控えの控えだった。だが、それでも国際レベルの選手たちだった。無名のチームがこんなにあっさりと彼らを片づけているのは驚くべきことだった。インディオたちは不意打ちの効果に大きく賭けていた。最初の数秒から攻撃に打って出て、すぐにジャシのものすごいロングシュートで得点した。キックオフをして、いま何が起きたのか理解する間に、ブラジルは二点目を奪われていた。カウエが決めたもので、ピッチにいたブラジルの選手の誰ひとり見たことのない型にもとづいて組み立てられた全員の連動から生まれたものだった。

それからアスー・カアーは少しひと息ついて、ブラジルが攻めようとした。だが、インディオのなかで五分前まではフォワードのようにふるまっていた多くの者が、いまは自陣のペナルティエリアで生まれたかのように守っていて、それがすでにうろたえていたブラジルの選手たちをいっそう混乱させた。モアシルの楽なセーブと、それに続く電光石火のカウンターで、十五分には、スコアはあっさりインディオの三対〇になっていた。

試合の前に、ふたりの監督は、プレーオフを四十五分で戦うというゴンサウヴェス監督の提案で合意していた。経験豊かな監督が、ワールドカップの初戦を前に自分のチームを消耗させないための賢明な戦術的選択と思われたものが、いまやそのワールドカップに出場する可能性の棺に打ちこまれる釘になっていた。三十分では逆転するのにじゅうぶんとは思えなかったし、実を言えば、あと三時間プレーしたとしても、そこから生まれうるのは、インディオのもっと派手な勝利だけだろうという印象だった。そしてそのとおりになった。終了の笛が鳴ったとき、スコアはアスー・カアーの四対〇になっていて、ブラジルはもう一度も相手を脅かすことができなかった。

そして、ピッチの二十二人全員と控えの全員が、正反対のふたつの理由からではあったが、呆然とあたりを見まわしているあいだに、スタンドではもう、アスー・カアーの若者たちをたたえる最初のばらばらな歓声が聞こえはじめていた。

ピッチの脇では、『ボン・ジア・コッパ・ド・ムンド』の特派員がゴンサウヴェス監督にインタビューしていた。その隣で、連盟の会長とアントニオが話す番を待っていた。

「いえ、同意しません」とゴンサウヴェスは説明していた。「これはブラジルの敗北ではありません。むしろ、サッカーにおける私たちの唯一の問題は選択肢が多すぎることだという、何度目かの証明です」

アントニオは監督のことばを――大いに達観して受けとめたことは認めてやらなければならなかった――聞いていたが、うわの空だった。頭のなかで渦巻く感情を抑えるのに精いっぱいだったのだ。そしてとりわけ、あまり偉そうにも、あまり卑屈にも聞こえないスピーチを、数秒で用意しようと精いっぱいだった。なにしろ数分前から彼は――信じられない、信じられないから何度も繰り返さなきゃならない――ブラジルをワールドカップに率いる監督なのだ。インディオについて何か、ブラジルについて何か、敗者の価値について何か、歴史に残るスピーチとは言わないまでも、恥ずかしいものにはしたくない。考えろ、アントニオ、考えろ。

そのあいだに、マイクは連盟の会長に渡った。

「……そして、ゴンサウヴェス監督のこの正しいおことばが、これからの四週間、私たちを導いてくれるはずです。今日、敗れたブラジルと勝ったブラジルがあるわけではありません。今日、ひとつの選手の集団が、ワールドカップで私たちの偉大な国を代表するのに、別の集団よりふさわしいことを示したのです。そしてそうなるでしょう」

いいぞ、立派なことばだ、とアントニオは思った。

「もちろんことばは障害です。しかしゴンサウヴェス監督と相談して、セニョール・アウメイダに、通訳として、もっと広く言えば先住民問題の専門家として、チームに加わっていただくよう提案しようと考えておりました。こうすれば、それぞれの立役者の能力を最大限に生かし、このすばらしい若者たちに、私たちを最高のかたちで代表してもらえると確信しております」

え？

アントニオが用意していたことばは、すべて一瞬で消えうせた。目の前でそれが蒸発していくのが見えるような気がした。特派員が彼に礼を言ってスタジオに中継を返すのを聞いて、ようやく自分が話したのだとわかったが、何を言ったのかまるで見当もつかなかった。

第5章

5.1 規則

宝くじに当たったと言われて、でも賞金を受けとるには顔を棒でぶん殴られなきゃならない、というようなものだ。いや、ちがう、世界でいちばん美しい家に住めるのに、玄関がくさくて、その悪臭を消す方法がない、というようなものだ。いや、それもちがう。

一時間近くぼうっとしていたアントニオの頭は、彼の昔からの持論にしがみついて明るみに戻ってきた。たとえ話はある程度までしか通用しない、そこを過ぎるとたちまちたわごとになる。だいたい、何のためにたとえ話なんかするんだ？　たとえ話は、理解しにくいことを説明するためにあるはずだ。彼の状況は最低だったが、理解しにくくはなかった。

まあ、ロッカールームには問いかけるような視線がないわけではなかった。第二陣の若者たちは、何が起きているのかなかなか理解できなかった。彼らにとってワールドカップは、まだ、アントニオがよく話していて、子どものころに楽しい遊びに変えたあのことだったし、ブラジルは、ときどき「これをあなたに、ドナ・ジェジータ」と言わなければならない場所、モアシルの生みだした流行りことばの場所だった。

いっぽう古参の者たちはよく理解していて、その反応は驚きと憤慨と怒りのあいだを揺れていた。

「それって正確にはどういうこと？　いまから僕たちのかしらはあいつで、僕たちはあいつの言うとおりにしなきゃならないって」

「ことばどおりの意味だよ、モアシル。それとも僕はもう僕たちのことばがわからなくなったのか？」アントニオは、少年たちに何の罪もなく、皮肉を言っても何の役にも立たないことはわかっていたが、抑えるのに苦労した。

「もうすぐゴンサウヴェス監督がアシスタントたちを連れてここへ来るだろう」とアントニオは続けた。「そしていまから何をしなきゃならないか説明してくれる。どのホテルに行くか、どう練習するか、何を食べるか、次の試合をどんな戦術で戦うか、全部」

「何を食べるか？」とイタウナが言った。驚いてみせたのは、主にピライの反応を引きだすためだったが、ピライのほうは、半分あきらめたような、半分「僕に何の用だよ」というような顔で彼を見た。

いっぽうヤマンデの注意は、すっかりサッカーの面に向いていた。「それに、どんな戦術でやりたいの？　行って勝つ、いままでずっとそうしてきたみたいに」

「これはワールドカップなんだ、ヤマンデ、まるでちがう。相手はずっと、ずっと強い」

「でも僕たち、前半だけでブラジルに四対〇で勝ったじゃないか！」

あれは伝説のブラジルなんかではまったくなく、その色あせた、生気のない複製にすぎないのだと、ヤマンデに考えさせる暇もアントニオにはなかった。ブレジャウヴァとエサイが、もう別の話に移っていたのだ。

「どうして住むところを変えなきゃならないの？　ゆうべ寝たところはすごくきれいだったのに！」

「そうだ！　僕たちはいまブラジルなんだ！　ブラジルはいちばんきれいなところで寝なきゃ」

アントニオは、彼らが泊まった小さなホテル（レチ・ノルチの予算では、あまり贅沢はできなかった）が、比べるものといえばジェジータのポウザーダしかない彼らには、贅沢の極みに見えたのだと思ってほほえんだ。何も説明しなかった。何時間かすれば自分たちでわかるだろう。だが、ある者たちにとって、甘やかされたチャンピオンになるのに必要なものがどれほどわずかかを、苦い思いで考えた。

それから、予想どおりノックの音がして、ロッカールームに、連盟の会長と、ゴンサウヴェス監督と、ほかの知らない人々の群れが入ってきた。彼らは「これをあなたに、ドナ・ジェジータ」の声に二、三度迎えられた。この文句をありきたりの挨拶だと勘ちがいしたのか、急にポルトガル語の会話が始まったことによる全体の混乱のせいかもしれなかった。事実、ゴンサウヴェスが話しているあいだに、彼の頭のなかでは、自分の前にいるのはばかの集団だという確信がすっかり固まっていた。

少年たちは、会長と監督のことばと、アントニオの訳を、まったく黙って聞いていた。だがドアがまた閉まって自分たちだけになったとたん、ロッカールームは大騒ぎになった。

「今夜は早く寝なきゃいけないの？　でも僕、お祝いしたかったのに！」

「僕は村を見に行きたかった。飛行機に乗って飛んでるとき、すごく高い小屋が見えたんだ、近くで見たい」

「それに、体を塗っちゃいけないっていうこのばかげた話は何？」

「ほんとに？　冗談だと思ってた」

「アントニオの顔を見ろよ、冗談を言ってるようには見えない」

「でも僕、まだわかんないんだけど、僕たちがあいつの言うとおりにしなきゃならなくて、好きにしちゃいけないって、誰が言ったの？」

「この世界がそういうふうにできてるんだ」とカウエが話を打ち切った。「あいつらはそれを規則って呼んでるんだってわかった。僕にはみんなばかに見える」

チームの携帯電話が鳴った。モアシルがそれをアントニオに渡し、アントニオはいつもよりさらにしぶしぶ受けとった。彼が出る前に、ロッカールームのドアがまた開いて、ゴンサウヴェスの顔が、あのいまいましい薄笑いを浮かべてまた現れた。いつも彼といっしょにいる、あきらめているのかへつらっているのかよくわからないあの若い男もいっしょだった。

「アウメイダさん、いや、アントニオさん。アントニオさんと呼んでもかまいませんか？　いまでは同じチームですからね。私の選手たちに、まだスタジアムを出てはいけないと伝えてもらえますか？　できるだけ早くホテルに連れていきたいんですが、残念ながら片づけなければならない役所の手続きがいろいろありましてね。サンパウロの中央戸籍局の局長を大急ぎで呼びました、できるだけ早く来るはずです。よろしく」

アントニオは、ゴンサウヴェスの背後でいま閉まったばかりのドアを見つめた。

俺の選手たちだと？

それからまた電話が鳴った。

アントニオはほとんど見もせずにそれを眺め、手のなかで重さを確かめ、それからありったけの力で壁に投げつけた。

ドアの向こう側で、ゴンサウヴェスの薄笑いが濃くなった。

「いまの音を聞いたか、チアゴ？　どうやら俺とアウメイダには、少なくともひとつ共通点があるらしい」

5.2 信頼

「さっきは出なかったのに、今度は電源が入っていないって」とイザベルは電話を置いて言った。

「いまは手いっぱいなんだろう。あとでかけなおしてごらん」とロバートが言った。彼はソファに座って、たったいま起きたことにまだ信じられない思いの解説者たちであふれるテレビの報道を見ていた。

「ええ、あとでかけなおすわ。でも、ひどい話よね。監督の役を取りあげるなんて、ほんとにひどい。かわいそうなアントニオ、インタビューされてたとき、放心状態みたいだった。きっと何も聞かされてなくて、あの場でいきなり知ったのよ」

「そのかわり、きみはたったいま財団の資金の問題を解決したじゃないか」

「どういう意味？」

「だって、ばかげて聞こえるだろうけど、アスー・カアー・フチボウはたったいまワールドカップに行く権利を手に入れたんだ。いくら受けとれるのか正確には知らないけど、まちがいなく大きな額の話になる。いっそ、僕のボスたちにちょっとばかり出させないのが惜しいくらいだよ、スポンサーになってもらう案を出そうかって、半分以上本気で考えてたんだ……」

イザベルは携帯のブラウザを開いて、さっと検索した。「そのとおりね。すぐにはブラジルのが見つからなかったけど、ここには、出場チームにはおよそ六百万ドルが支払われるって書いてある。すごい！　ほんとに大金じゃない。連盟に行くのか、直接選手に行くのかはわからないけど、きっとあの子たちにもかなりの分け前が入るわ」

「少なくとも、そう願ってる」と彼女はすぐに言い足した。

「どうしてそんなことを言うんだい？」

「だって、アントニオから聞いたんだけど、最初、レチ・ノルチとのあいだで、あの子たちへの支払いのことで問題があったんですって。局長なんか、まったく払わずにすまそうとしたらしいの」

「ひどいやつだな！」

「ほんとにね。それに、きっとお役所の問題もあるわ。だって、あの子たちは正式にはまだ身分証明書も、出生証明書も、銀行口座も持ってないんだから……」

「実質的には名前さえないんだ！」

「どういう意味？」イザベルはそのことを考えたことがなかった。

「いや、もちろんあるんだけど、ほら、シャツに入れる名前を自分で選ぶっていう伝統があるだろう。きみたちブラジル人のそういうところを、僕はずっと尊敬してきたんだ。スポーツへの向きあい方がよく表れてる、まるで子どものころの遊びのままみたいに」イザベルはそのほめことばに気をよくした。

ロバートが、謹厳実直なドイツ人建築家の彼が、彼女のブラジルの何かのよさを強調してくれるのが好きだった。そうされると、あまりにしばしば手からすりぬけてしまう、あの人間らしさというものの共通の根っこが身近に感じられた。

「でもね、あの子たちがブラジル人なのは、私たちの国境のなかで生まれたって意味でだけよ。私たちのこの独特の伝統を知ってるとは思えない」

「あれだけサッカーがうまいんだから、知らなかったら驚くよ。きっとアウメイダが話して聞かせてるさ。それより、さっき、あの子たちは銀行口座さえ持ってないって言ったね。じゃあ、レチ・ノルチのお金はどうやって支払われたんだい？」

「全部アントニオの口座に振りこまれたの」

「ああ」とロバートは言った。意味のとてもはっきりした「ああ」だった。

「ちがうわよ、あははは、悪く考えないで！　最後の一レアルまで、財団のために開いた口座に全部移したのよ」

「ふむ、わかった」

「どうしてそんな顔するの？　何が納得いかないの？」

ロバートは何秒か考えた。アントニオとイザベルのあいだに自分が心配しなければならないことは何もないと、彼はほとんどすぐに（ほとんど）理解していた。アントニオにかかわる話にイザベルがこめる熱は、美辞麗句すれすれの（そしてしばしばすっかりはまりこむ）彼女の感傷的な性格と、もちろん、このところ故郷の土地に対して再燃した関心のせいだった。イザベルにとってアントニオは、その新たな関心をあおるふいごにすぎなかった。ロバートはそれをわかっていたので、それまでアントニオについての疑問は自分の胸にしまっておいた。だがいまは、アントニオよりも財団にかかわることだったので、話すことにした。

「こんなことを聞いて悪いけど、あの子たちは財団があることを知ってるのかい？」

「もちろん知ってるわよ！」とイザベルは憤慨して、ほとんど質問を言いおえさせずに答えた。だがロバートはひるまなかった。

「言い方が悪かった、ごめん。言いたいのは、生まれてからずっとアマゾンの森で暮らしてきて、三か月前に初めてそこを出た若いインディオたちが……その、自分たちの状況をそこまで自覚しているのが不思議に思えるってことなんだ。森のなかに『アマゾン日報』があって、森林伐採の問題や、いまのブラジルでのインディオの境遇を知らせてくれるわけじゃないだろう」

「それで？」とイザベルは、守りと攻めの入りまじった調子で尋ねた。

「それで、たぶん三か月前まで自分たちが抱えているとは知らなかった問題を解決するのに、最初のお金を投じようと決めるっていうのが、引っかかるんだ」

イザベルが何か言う前に、ロバートは続けた。「それに、いま考えてみると、彼らがお金という考えをはっきりつかんでいることのほうが、もっと引っかかる。とくに、お金の量という考えをはっきりつかんでいることがね。数を数えられるとしても、三千レアルと三十万レアルのちがいを具体的に、具体的にだよ、理解しているのかどうか」イザベルの顔は穏やかならぬ気配だった。

ロバートは両手を上げて、自分の考えをさらにはっきりさせなければと思った。

「いいかい、何かをほのめかしたいわけじゃない。誓うよ。自分でも何を言いたかったのかよくわからない。この、きみたちの、きみの取り組みが、彼らにとって最善のことだと確信してる。それが……でも、たったいま読んだだろう？　これから彼らには山ほどのお金が入ってくるって。それに、ワールドカップで勝ちすすめば――そして、その力があることをたったいま示したところだ――もっと入ってくる。それに、いまごろ世界の大手広告代理店がもみ手をしているのは百パーセント確かだ。もし万が一あさってクロアチアに勝ったら、世界じゅうの代理人が、彼らと契約しようと押しよせてこないと思うかい？　しかもいまは、まっとうな人間の話をしてるだけだ。お金という考えさえ持たずに突然金持ちになった二十三人の若者のことを考えて、どれだけのサメが外で歯を研いでいるか、わかるかい？」

イザベルは立ちあがり、髪をととのえて、ロバートのオフィスの窓のほうへ歩いていった。彼は何よりも私のことを心配しているんだ、と彼女は悟った。『ハムレット』の一節が頭に浮かんだ。「金を貸すな、借りるな。貸した金はしばしば友とともに失われ、借金は倹約の心を鈍らせる」。

だがロバートが持っていないもの、あるいは持っていても無視しているものは、彼女の直感だった。彼女にはわかっていた。女として、ブラジル人として、心に語りかけてくる声のように感じていた。それが正しいことなのだと。村を守り、あの汚されていない森のひと切れを守ることこそ、あの若者たちと、彼らの世界、彼らの環境、彼らの家族を、まさにロバートの言うサメたちから守る最善の方法なのだと感じていた。だがそれを彼に話すことはできなかった。直感は、ロバートに通じる論拠ではなかった。

「私を信じて」と、長い沈黙のあとで彼女はそれだけ言った。「自分が何をしてるかはわかってるわ」

ロバートはそのことばを、話題を変えたほうがいいという合図と受けとった。だがさっき、ひとつの考えを言いつくせなかったので、自分の考えをはっきりさせるのは、それより優先すべき必要だった。

「つまり、僕が引っかかっていたのはまさにそこなんだ。彼らの森を守るのは正しいことだ。でも、誰かを、その人が十分に自覚していない危険から守るっていうのは、親が子どもにすることだ。彼らは大人の男なんだ。特殊な状況から来た男たちだけど、男たちだ。ほかの国の同業者たちみたいに、女と車に財産を全部つぎこみたいと思っていないって、本当に、きみたちは、確信してるのかい？　残念なことにはちがいないけど、それが彼らの意思なら、そうするのは彼らの当然の権利なんだ。僕がきみに、きみたちにお願いしたかったのはそれだ。彼らの意思を確かめること。彼らの意思をね、どんなに善意からでも、きみたちの意思じゃなく」

「そのとおりね。アントニオはきっと彼らに聞くだろうし、もう聞いてるかもしれない。念のために私も聞いてみる。でも、彼らが子どもじゃなくて大人の男だっていうのもそのとおりよ。これからは冗談ですまないことがたくさんあるって、もう自分たちでちゃんとわかってるはずよ、ぜったいに」

5.3 パオロロッシ

「パオロロッシだと？　このばかは、俺をおちょくってもいるのか？」

サンパウロの戸籍局の局長セザール・アゼヴェードの助けのおかげで、役所の手続きはすらすらと運んでいた。驚くほどすらすらと。どうやら、森から出てきたインディオに身分証明書とブラジル国籍を与えるための標準の手順がすでにあるらしかった。アントニオは、人生でこれほど楽に役所の手続きをすませたことはないと心のなかで思い、これはすべて、ひとえに彼らがセレソンのサッカー選手という新しい身分になったからだという考えを、何がどうあっても頭から追いだせなかった。一瞬、アゼヴェードとゴンサウヴェスのアシスタントが知りあいのように見えた気もしたが、すいすい運んだ手続きの理由が何であれ、もらいものにけちをつけるものではない。

だがそのあと、サッカーのお役所仕事の時間が来た。背番号を割りあて、ひとりひとりが翌月のあいだ背中につける名前を届けるのだ。そこでアントニオは、通訳の仕事がひどく骨の折れるものになりうることを知った。たしかに、三か月以上ポルトガル語からことばへ、ことばからポルトガル語へと訳してきたが、いまはまるでちがった。契約書に署名したばかりで力関係がすっかり変わったことや、訳す相手が前は七人だったのがいまは二十三人になったことは別として、何よりも彼を困らせたのは、ゴンサウヴェスと少年たちが互いに知らないところでぶつけあっている悪口を、やわらげたり、すっかり削ったりしながら訳すことだった。

「本気なのか、それとも自分をからかってるのか知りたいそうだ」

「もちろん本気だよ、あいつみたいな道化じゃないんだから」

「本気だそうです」

何度か言いあいが続いたあとで、ヤマンデが一歩も譲らないことははっきりした。アントニオのおかげで、名前のかわりにあだ名を使うブラジルの伝統はよく知っていたし、同じくアントニオのおかげで、パオロ・ロッシの物語も知っていた。長いあいだ離れていたあと、一九八二年のワールドカップ開幕の数日前に戻ってきて、イタリアを優勝に導いた選手だ。ヤマンデは、その名前をもらえば縁起がいいだろうと願っていた。

「このうぬぼれ屋は、もう自分が世界チャンピオンになったつもりか、え？　パオロ・ロッシの物語をなぞりたいってか？　じゃあ全部なぞってやろうじゃないか。最初の三試合、パオロ・ロッシはひどいプレーをした。だから、俺たちは抜け目がなくて先のことはもう全部わかってるんだから、あさって、おまえは、男前の坊や、ベンチだ」

アントニオがゴンサウヴェスの決定を訳しおえたとたん、ロッカールームは凍りついた。挑むような視線がいくつも彼に投げつけられたが、ゴンサウヴェスは全員の視線を受けとめ、ほかに誰か、シャツに入れる名前でいい考えのあるやつはいるかと尋ねた。何秒か誰も答えず、多くの目がロッカールームの床に落ちた。

それからジャシが立ちあがって言った。「僕はシャツにマルコスって書きたい。きっと喜んでくれる」

アントニオは、頭のなかのスポーツの名選手の記録庫で、そのマルコスが誰なのか探したが、やがて、ジャシがボール遊びをしていたバイシャーダの子どもたちと、ペナルティキックがうまかったあのちびっこを思い出した。ゴンサウヴェスにそれを説明すると、監

督は何の異議もなかった。そしてそのことが、ロッカールームに少し穏やかさを取り戻させた。

「ほかには？」

「ほかには？」

カウエは調和が戻ったのに気づいて、また波風を立てようと腕を上げた。「僕はヤイアって書きたい。僕たちがここにいるのはあの子のおかげだ。それにすごくきれいだし」

アントニオは、しょんぼりとゴンサウヴェスのほうを向いた。「ヤイアという名前にしたいそうです」

「どうして？」

「わかりません」

「……冗談だろう？」

「そう願いましょう」

「なんてこった。神さま、助けてくれ」

「カウエ、本気で言ってるのか？」

カウエは、雄弁な目つきで答えた。「ほんとに僕がシャツに女の名前を入れたいと思う？」

5.4 壁

モアシル
マルコス
ピアタ

ウビラジャラ
イタウナ
タイニ

ウビラタン
ジャグアリウナ
イシカリバ

カウエ
ピライ

「長老たちと試合をしなきゃならないなんて、わかってなかった」

「長老じゃないよ、みんなアントニオよりずっと若い」

「長老だよ。何人かはアントニオみたいに、あごにあの毛まで生えてる。それに、それが何の関係があるんだ、アントニオより若くても、アントニオはすごく年寄りなんだ。考えてみれば、ふたつの人生を生きたみたいなもので、最初の人生でもう年寄りだったんだから」

「とにかく、アントニオはあの人たちを敬えって言ってた、だってこの……」

「長老たちを？」

「……選手たちはみんなすごく強くて、みんなヨーロッパでプレーしてるんだって。すごく古くて遠いところなんだ」

アントニオは午後の日差しのなかで目を閉じていた。数メートル先のベンチに座った少年たちから聞こえてくる、井戸端の女たちのようなおしゃべりが、ある種の不安から心地よく気をそらしてくれていた。ロッカールームを出る五秒前まで続いていた言いあいのせいで、彼はあまり落ちついていられなかったのだ。

「ヨーロッパってどんなところなんだろうね？　それに、このクロアチアっていうところはどんななんだろう……」

「なんてたくさんの人がいるんだ、みんな同じ村から来たのかな？」

「ちがう」

「そうだ」

「町って言うんだ」

「白と赤の人たちは、みんな同じ町から来たのかもしれない。すごく少ない」

「すごく少なくなんかない、僕たちよりずっと多い、村の僕たちよりってことだけど」

「クロアチアはすごく大きな村なのかもしれない」

「町って言うんだ」

「静かに、静かに、音楽が始まる！」

「何の音楽？」

「クロアチアの祭りの歌だよ、ポルトガル語で何て言うか思い出せないけど……」

「なんとか国の、みたいな、『国の音』とか『国の歌』とか……」

「国歌」とヤマンデがささやいた。「国歌だ」

「ああ、そうだ」

「そうだ」

「それだ」

「今度はブラジルのだ、覚えてる？」

「アントニオがときどき歌ってた」

「僕は覚えてない」

「黙れ、始まるぞ」

「黙れ！」

アントニオは立って、少し自信なさげに国歌を歌っていた。自信がなかったのは、歌詞を全部はよく覚えていなかったから、ワールドカップの開幕の国歌をいっしょに歌う人々でいっぱいのスタジアムという出来事の感動に押し流されていたから、そして、歌詞を知らないのは自分の少年たちだけで、なんとなくいくらか覚えているピライとカウエを除けば、この場面はテレビで彼らのいい宣伝にはならないだろうと気づいていたからでもあった。

「みんな歌ってた、すごくよかった」

「感動で脚がふるえてる、体を塗ってないせいだと思う」

「僕も体を塗ってないと、からっぽで、弱くなった気がする」

「うん」

「僕も」

「モアシルは塗ってたぞ」

「塗ってた？　ほんとに？」

「うん、顔じゃなくて、体と腕に。アントニオのあのペンで。あいつは全身をおおう服を着なきゃならないから、誰も気づかないって言ってた」

ロッカールームでの騒ぎに乗じたにちがいない、とアントニオは思った、塗ってたなんて気づかなかった。

少年たちはゴンサウヴェス監督によって古典的な4－4－2に並べられていたが、監督の指示をできるかぎりうまく訳そうとするアントニオの努力にもかかわらず、選手たちからは一度ならず不平と文句が出ていた。

「こんなふうにはプレーしない」と彼らは抗議していた。「これはボール遊びじゃない！」

アントニオは、史上もっとも輝かしい代表チームの監督に、この手の言い分を忠実に伝える気にはなれず、自分の少年たちに、この配置でも全力を尽くさなきゃならないと言うだけにとどめていた。

「この歯のついた靴、じゃまじゃない？」

「スパイク」とヤマンデが訂正した。

「すごく」

「僕はそれほどでもない、でもピッチに入る前に止められたとき転んだのは悔しい」

「すべるんだ」

「すごく」

「僕も転びそうになった」

「クロアチアの誰かが笑ってた」

「見なかった！」

「体を塗ってないからだ」

「そのとおり」

「本当だ」

彼らは見るからにおかしかった。トレーナーをしっかり着こみ、フードを目までかぶっていた。生まれて初めて二十五度より低い気温を経験していて、いや、病気じゃない、これは「涼しい」と言うんだ、なんなら「寒い」でもいい、というアントニオの説明を受けいれなければならなかったのだ。そして初めて、服の筋の通った役目が何なのかを理解した。だが、ベンチの少年たちがあれこれ言っているあいだ、ピッチの者たちは、クロアチアを相手にプレーするよりも、指示に合わせて四つまで数えることに集中しているようだった。クロアチアは、まさに猛襲をかけて試合を始めた。とりわけジャシは、広く動きまわることに慣れていたので、純粋なサイドバックをやらされ、いつも同じ相手について、彼の目にはひどく狭いピッチの一画にとどまらなければならないことに、ひどく居心地が悪そうだった。それに、ひょっとするとアントニオのせいでもあったのかもしれない。ディフェンダーがいつも四人いて、いつも一本の線になっているか確かめなければな

らないと言ったのだ。ジャシは、プレーするより、呼んで、数えて、並べて、数えなおすことに多くの時間を使っていた。

前半五分には、ゴンサウヴェスはもう立ちあがって真っ赤になってわめきちらしていた。その罵声を、アントニオはベンチから――彼は立ちあがることを許されていなかった（それに厳密には、訳す必要がある場合を除いて、選手に話しかけることも）――できるかぎり伝えようとした。そのときから、「**ばかどもばかどもばかども！**」という合いの手が、数分ごとに前半の背景音になった。

「あいつら、こっちのやつらを殴ってる」

「なのに審判は笛を吹かない」

「ほら、見ろ、タイニがまた蹴られた」

「今のは強かった」

「タイニがあの顔をするときは、すごく痛いってことだ」

「なのに、ほら、あんなに走ってる！」

「いいぞ、タイニ！」

「行け！」

「肘打ちだ！」

「ウビラタン！」

「血が出てる！」

「審判が出ろって合図してる」

「そうだ」とアントニオが口をはさんだ。「血を止めなきゃならないんだ、でないとプレーできない」

「ほんとに？」

「どうして？」

「そうだ、どうして？」

「アントニオ……」と、鼻の手当てをしてもらいながら、ウビラタンがとまどって尋ねた。「どうすればいいの？　殴られてるのに、審判が笛を吹かない！」

「集中してないんだ。ツアーのときだって、激しく当たってくるやつはいたけど、文句を言ったことはなかっただろう」

「今日はちがうんだ」

「ああ、それはわかる」

前半十分、クロアチアの攻撃が左のタッチライン沿いに展開された。ピアタがハーフウェーラインの近くですべり（靴をはかなければならないことにまだすっかりは慣れていなかった）、パスがコヴァドリッチへ通った。コヴァドリッチは、ほとんどゴールラインの上から、ものすごく鋭いクロスを放った。ジャシは、すばやく飛びだしてきたふたりのフォワードをカバーしようと中央へ絞っていた。脚の林に入りこみ、味方にも敵にも触れられてコースを変えられたボールが、彼の足の前にひょっこり現れた。走りを止めるすべのなかった彼はそれを蹴り、自分のゴールの奥へ入れてしまった。

「ちがう！」

「なんでだ！」

「ボールが通るのが見えなかったんだ！」

「一対〇！」

「あっちの！」

「ちがう！」

異様な沈黙が、サンパウロのスタジアムと国じゅうに降りた。スタンドにいたほんの数千人のクロアチア人が、思いがけない、抑えきれない喜びに爆発した。ゴンサウヴェスは険しい目つきでベンチに崩れおち、ジャシは自分のことばで何か身ぶりをしながら叫んだが、何を言ったのかはわからなかった。アントニオは、ピッチとベンチの途方に暮れた選手たちを見た。起きていることは正しくなかった。彼の少年たちは、これよりずっとうまくプレーできるのだ。いまの立場ではほとんど何の手も打てなかったが、何かしなければならなかった。

試合はより慎重になったクロアチアとともに再開され、そのおかげでブラジルはひと息つき、ゴンサウヴェスは落ちつきを取り戻した。

「ばかの群れだ」と彼は、押し殺したうなり声でアントニオにささやいた。「ばかの群れを連れて、ワールドカップをやりに来たんだ」

「監督は何て言ってるの？」

「ずっと同じことばを繰り返してる」

「どういう意味？」

そのとき、アントニオは何をすればいいのか悟った。とんでもない考えだが、うまくいくかもしれない、と彼は思った。ちょうどいい瞬間を待つだけだ。

「ほら、長老たちだろ？　言ったじゃないか！」

「もうプレーしてない、真ん中で僕たちを殴ろうと待ちかまえてる」

「さっきみたいに走ってない」

「疲れてるんだ」

「そう、長老だからだ」

実際、混乱した出だしにもかかわらず、二十五分まではそれ以上大きな危機もなくきていた。ジャシは与えられた指示を無視して、もっと前でプレーしはじめることにしたようで、時間がたつほど勇気を取り戻し、いまではきちんとクロスまで持ちこみながら、守りのカバーにもちゃんといた。

最初に彼の例にならったのはカウエだった。前で孤立しているのに飽きて、ボールを奪いに戻りはじめたのだ。そしてアントニオの選手がふたり左サイドにいれば、「毒矢」を組み立てるにはじゅうぶんすぎた。

二十九分、ジャシの何度目かの攻めあがりに、彼の見るからに衰えない体力を心配したクロアチアの監督は、チームの重心を彼のほうへ移した。それがカウエに、必要以上の空間を与えた。正確なパス、不意のダッシュ、そして矢は、背は高いが動きの遅いクロアチアのキーパーの左下の隅へ、まっすぐ、止めようもなく放たれた。歓喜が爆発した。

失点のあとショックを受けていたようだったブラジルの観客は、いっぺんに息を吹きかえし、解放の叫びがスタジアムの土台そのものを揺さぶった。ベンチは跳びあがり、少年たちは自分たちのやり方で祝いはじめた。そのあいだに、集中しきったアントニオはその機会を逃さなかった。ウビラタンとピライをわきへ呼び、ゴンサウヴェスの指示を訳すふりをして、一分のうちに、伝えられるかぎりの指示を与えた。試合が再開されると、少年たちはもう4―4―2に従っていなかったが、ゴンサウヴェスは気づいていないようだった。

「このほうがいい」

「うん」

「静かなジャガーができる」

「もうひとつ毒矢も」

「それに向こうには、張りすぎた弓の空きもある」

「いいぞ、ウビラタン！　あいつも気づいた！」

「よし！」

四十分、クロアチアのボランチのモドリックがセンターサークルでボールを受け、不意のダッシュでペナルティエリアの手前まで運んだところで、ジャグアリウナに阻まれて倒れた。

「自分で倒れた」

「ファウルじゃない」

「審判、笛を吹いた？」

「でもファウルじゃなかった！」

「長老だから、倒れやすいんだ」

「でも倒れたんじゃない、自分で倒れたんだ！」

ブラジルの選手たちは、どうしていいかわからず、信じられない思いで顔を見あわせた。事態をややこしくしたのは、モアシルが、壁をつくるな、ボールが見えるようにしろと叫んでいることだった。クロアチアの選手たち自身も、目を疑っていた。

「ゴールにいるばかは何を言ってるんだ？」とゴンサウヴェスが、答えをもうわかっていながら尋ねた。

アントニオはこれ見よがしに彼を無視したが、ベンチではもう少年たちが、むだに叫んでいた。「壁！　壁！　モアシル！　壁をつくれ！　こいつらは僕たちとほとんど同じくらい強く蹴るんだぞ！」

誰もいない前からのフリーキックが、速く正確に、トップコーナーへ飛んだ。モアシルはそのほとんど超人的な反射神経のすべてで体をのばし、ボールにほんのわずかに触れて、それをみごとにクロスバーに当てた。一センチの差だった。

ゴンサウヴェスはもう、自分の影のようになっていた。ベンチで体を横に向けて座り、ひとりでぶつぶつ言いながら、ほんのたまにしかピッチに目を向けなかった。

ハーフタイムのあいだに、アントニオは自分の考えを仕上げた。ゴンサウヴェスの激烈なことばを忠実に訳すかわりに、監督が考えなおしたことにして、少年たちが慣れているのにずっと近いピッチ上の配置を指示した。試合の始めに受けた打撃がまだ痛むタイニとブレジャウヴァの交代も利用した。

後半は、右サイドのピライの切りこみで始まった。ふたりを抜いてペナルティエリアに入りこんだところで、ロヴルカが、シュートの百分の一秒前に、決死のスライディングでボールを奪った。まったく正当なプレーだったが、ピライは勢いあまって派手に地面に転がった。ところが審判は迷わなかった。ブラジルにペナルティキックの笛を吹いたのだ。

アントニオの少年たちは、前半ずっと、相手に対しても審判の判定に対してもひどく控えめな態度でプレーし、ときには意味もわからないまま判定を受けいれていた。だが後半には何かが変わっていた。彼らは一団となって審判に詰めより、激しく抗議した。ことばは通じなかったが、スタジアムの観客にも世界中継で見ている人々にも、抗議の中身はすぐにはっきりした。ペナルティではない、ピライはひとりで転んだのだから審判がまちがえたのだ、と言いはっていたのだ。彼らは叫んだ。「ペナルティ、ちがう！　ちがう、ちがう！」

カウエはこうも叫んだ。「ずるい！　ずるい！」

お祭り騒ぎの観客には何が起きているのかわからなかったし、審判の笛に跳びあがったゴンサウヴェスにもわからなかった。

審判は、おそらくサッカー場でこれまで一度も起きたことのない事態にまったく不意をつかれて、とっさにピアタに警告を与え、とりわけ激しく抗議していたイシカリバを退場させた。それから線審と第四審判に相談した。ペナルティキックは、いずれにしても蹴らなければならなかった。

蹴る役を引きうけたのはカウエだった。スタジアムと地球全体が、彼の意図をいぶかっていた。ゴンサウヴェスは立ちあがって、もう母音だけを、それ以上何の分節もなく叫んでいた。そのあいだにカウエは、目を燃えあがらせ、助走さえとらずに、ボールをゆっくりキーパーに転がした。キーパーは片足でそれを止めて受け、すぐにタッチラインの外へ蹴りだした。

観客は長いこと息をのみ、カウエは動かなかった。クロアチア人も、ブラジル人も、誰も息をする勇気がなかった。ゴンサウヴェス自身も石のように固まっていた。やがて、いちばん上の層のスタンドのある区画で、ひとりの少年が手を叩きはじめて魔法を破った。それが連鎖反応を引きおこし、サンパウロのスタジアムの記憶にあるかぎりいちばん長い拍手になった。ゴンサウヴェス自身も、気がつくと手を叩いていた。そして一分後には、世界じゅうの通信社が、この出来事をサッカーの歴史全体でもっとも人気のある出来事にしてしまっていた。

アントニオの少年たちが最後に勝ちとった三対一の勝利も、最後の十分間プレーして、一本のシュートでポストを二度叩いたヤマンデの喜びも（ゴンサウヴェスはわざとやったのだと誓っただろう）、それに続く祝いも、ほとんど陰に隠れてしまった。

試合の、そしてひょっとするとワールドカップ全体の象徴になっていたのは、もうカウエの燃えあがる目だった。

5.5 オピスポ

オピスポは恨みを抱きつづける男ではなかった。恨みを抱いていると時間をむだにするし、頭が曇る。彼はどちらかといえば、足と頭の回転の速さで勝負する男だった。もし振りかえってみたなら、もっとも振りかえる男ではなかったのだが、アウメイダの若者たちをメディアで発見した手柄が彼のガゼータではなくレチ・ノルチのものとされていることに、腹が立ったかもしれない。だがオピスポは、成功は前を見る者にほほえむと信じる男だった。前を見ることでしか、彼のところのような資金の限られた新聞が一番乗りすることはできなかった。とりわけ、インディオたちが本当に有名になりはじめ、報道の大物たちが乗りだしてきたいまとなっては。前を見て、彼は、もし彼らがワールドカップの出場権を手にしたら、メディアの観点から彼らが何になるかを見ていた。そして、ほかの多くのときと同じように、今度も正しく見ぬいたのだと、悦に入って繰り返していた。

だが、ときには前を見るために、ずっと後ろを見なければならない。そのために彼はモンチ・ドウラードへ行ったのだった。アスー・カアー・フチボウというチームの起源についての情報を求めて。未接触のインディオの部族というのは、一般におもしろい素材だった。しかもこの連中は、いい物語にはいつも効く、あの神秘のヴェールに包まれていた。彼らがどこから来たのか、その正確な場所を最初に明かせば、それは名人芸の一撃になるはずだった。

最初の考えは、こっそり村まで彼らのあとをつけることだった――調査報道、それはいつも彼の得意とするところだった――が、すぐに考えなおした。危なすぎる、ジャガーや、毒のある獣や、人食い部族や、ほかに何がいるかわかったものではない。そこで彼は、その調査の腕前をもっと快適な場所でふるうことにして、何かの手がかりを求めてモンチ・ドウラードとラランジャウのあいだをうろつきまわっていた。だがそこには、すでに競争相手が多すぎた。本当に独創的な物語を見つけるには、もっと前を、もっと後ろを、もっと深く、もっと右を、もっと横を見なければならなかった。ビールをおごり、話し、話させ、聞かなければならなかった。とりわけ聞くことだ。それこそ、本物の突撃記者すべての戒律だった。

ひょっとすると、本当のところ自分をほかの者たちと分けているのはそれなのかもしれない、と彼は思った。足の速さではなく、それも決して馬鹿にはできないが、逆に辛抱強さなのだ。ほかの連中は、出来あいの物語を持ってやってきて、それを裏づけるニュースだけを探す。彼はちがう、彼には、正しいコネが、とりわけ正しい考えが向こうからやってくるのを待つ辛抱強さがあった。そして話しに話しているうちに、いまそれがやってきたのだ。ひょっとすると、彼は国じゅうでいちばん憎まれる男になるかもしれない。ブラジルがようやく夢のセレソンを見つけたように思えるまさにいま、国全体の夢を打ちくだくのは危険かもしれなかった。だが本物の記者は、いい考えをあきらめたりはしない。

そういうわけで、彼はいまサンタレンにいた。正しい場所で後ろを見るのを助けてくれるはずの人物と話せることを願って。そのあいだ、前を見て、すぐ数歩先でじつにたくみに体をくねらせている、アナコンダもどきの衣装をつけたこのお嬢さんの魅力を楽しんで何が悪い？　見とれおわると、彼は彼女に近くへ来るよう合図して尋ねた。「きみ、すばらしいですねえ！　映画に出ようと思ったことは？　わたくし、いろいろつてがございましてね、口をきいてさしあげられますよ。でもついでに、お嬢さん、ひょっとしてペペという人をご存じじゃありませんか？　下着のセールスマンだそうで……」

天才とは何か？　直感、粘り、ひとつまみの運だ。勝てる考えを持ち、誰もたどりついたことのないところへたどりつく能力を持つことだ。あのアウメイダのインディオの村はどこにある？　森のなか、それはいい。だが、本当にどこにあるのか、誰か問うてみたか？　なぜなら、正直に言って、森のなかの国境はそれほど正確ではないからだ。ある瞬間には

ブラジルにいて、次の瞬間には、気づかないうちにスリナムにいる。森の茂みのなかに国境警備兵なんかいやしない。

「下着？　そういうのは私の継父がやってるのよ。私が着るものを買ってくれるのはあの人なの、趣味いいと思わない？　店が閉まるまで待つなら、迎えに来るから、あの人に聞いてみたら。ついでに映画の話もしてよ」

粘りと運。もしあのアウメイダの村がスリナムにあったら？　本物の、いまではもういないような本物の記者でなくて、誰がそんなに焼けつくような真実を暴けるだろう？

汗をかき、安物のビールを飲みながら過ごした二時間で、オピスポは大量のメモを書きつけていた。彼の人生でいちばん大きな記事になるはずのものの下書きだ。裏づけなど必要なかった、もっとも裏づけが得られることは確信していた、ああ、そうとも。このペペがすべてを裏づけてくれるだろう、それは確かだった、記者の嗅覚はあざむかない。

「ペペ？　ペペだって？　あの飲んだくれの老いぼれか、もちろん知ってますよ。でもあいつは下着のレースより、朝から晩まで酒瓶にしがみついてるほうでさ、わたしの言うことを信じなさい」

女の子の継父は、背が低くて小太りの男で、入れ墨と傷あとだらけだった。日が暮れてから好きこのんで出くわしたい種類の男ではなかった。

「あいつの森での冒険？　あのいかれ野郎はほら話ばっかりしてますよ！　もちろん森での冒険の話は聞かされましたさ、どれが聞きたいんです？　素手でカイマンを殺した話？　女だけの部族に一週間さらわれた話？　二メートルの純金の像を見つけたのに、二度とたどりつけなかった話？」

「いえ、実はちがうんです、またの機会にでも」オピスポは一瞬考えた。「聞きたいのは、スリナムとの国境で見失ったマカパの観光客の話なんですがね」

男はウルブーの鳴き声と区別のつかない、乾いた笑い声をあげた。「その話は聞いてませんな。でも、レアルをちょうどいいだけ出せば、あいつの署名入りの告白だって手に入りますよ、お入り用ならね」

「あはは、そうだろうと思いましたよ、あなた、ああいう手合いは知っていますとも！」

彼は男に親しげに肘でつついた。打ちとけた雰囲気をつくるのが好きだったのだ。「でも、どこへ行けば会えますかね？」

「さあね、川の上流でパンツを売ってるか、パラーのどこかの辺鄙な道でまぬけを乗せて走りまわってるかでしょう。十回でっちあげる旅のうち、一回は本当に行くんでさ。でもご心配なく、いずれはここへ戻ってきますよ」

男は――結局のところ、それほど打ちとけてはいなかった――車に乗りこんでエンジンをかけ、映画の話をしなきゃならないと言いはる女の子の抗議を窓で閉めだした。オピスポは、とても黒い夜のなか、ふたつの土ぼこりの翼のあいだを遠ざかっていくふたりを見送った。

彼は頭のなかで記事をおさらいした。もう書きあがっているのが見えるようだった。破壊的な記事、キャリアを一変させるような記事、そうとも。だが残念ながら、読者というものは、どんなものでも食べる用意があるとはいえ、添えものの消化剤を必要とする。映像、写真、彼らの目に「まちがいない、写真を見たんだから！」と言わせるために使える

何か。まったく、なんてまぬけどもだ。映画館に行って、翼のある竜が宇宙船を操縦するティラノサウルスに変身するのを見ても、出てきて新聞の写真を見れば、それを律法の石板みたいにありがたがって、からかわれているかもしれないなんて疑いもしない。だが大衆は大衆で、大衆は満足させてやらなきゃならないのさ、諸君。ジープに乗ったぺぺのいい写真が一枚あれば完璧だった。

もちろん問題は、そのぺぺがいまいったいどこにいて、いつ戻ってくるのかを知ることだった。だがまあ、考えてみれば、もしこのスクープが大会の終わりごろに出れば、もっと大きな反響を呼ぶだろう。「ブラジルのチャンピオンたちは、実は全員スリナム人だった！」戦争が起きかねない代物だ。

肝心なのは、ブラジルが敗退する前にそれを打ちだすことだったが、クロアチア戦ではみごとに切りぬけていた。決勝トーナメント進出は揺るがないようだった。オピスポは、その晩のあいだに舞台に次々に現れた女の子たちのことを思い返した。どの子も将来有望で、映画界で先のない子などひとりもいなかった。待つことはできる、と彼は決めた。

5.6 波打ちぎわ

これがみんなの言う海だ、ジェルジェル、大きな大洋だ。

ジェルジェルは偉大で勇敢な狩人で、ひょっとすると村がこれまでに知るなかでいちばん偉大な狩人だった。そして、自分は恐れを知らないとずっと思っていた。だがそれはまちがいだった。

生ぬるい水に足を浸し、小さな波にくるぶしをなでられながら、彼が感じていたのは深い恐れで、ほとんど体がすくむほどだった。あれだけの水、あれだけの水。

ふたりの女の子が手をつないで浜辺を通りすぎた。若くて、ほほえんでいて、熟れた果物の色をしていた。ふたりはいたずらっぽいまなざしで彼を見た。彼はブラジル代表の休養日のシャツを着ていたが、このところブラジル代表の何かを身につけていない人などいなかった。彼だとわかったとしても、ふたりはそぶりも見せなかったが、それはありそうもないことだった。森から出てきたばかりの者たちは、まだそれほど有名ではなかった。ジャシ、カウエ、怪我をしたチャンピオンにそっくりのヤマンデは、もうあらゆる新聞の表紙に載っていたが、彼は、ジェルジェルは、ちがった。チームの公式写真に、彼の途方に暮れたまなざしが見えるくらいで、ほかにはほとんど何もなかった。

アントニオがこの恐れも乗りこえる手助けをしてくれる、いまにわかる、でもいまはほかのみんなが遠ざかっていく、行かなきゃ、自由な一日はもうすぐ終わる、もうすぐみんなでいっしょに練習しているシャボノへ戻るんだ。

フォルタレーザの浜辺に日が沈もうとしていた。町じゅうから若者たちが、ボールを小脇に抱えて、いつものサッカーの夕べを始めるために集まってきていた。網のなかのグラウンドでプレーできるのはほんのひと握りの恵まれた者たちで、ほかの大多数は、リュックをふたつ置いてゴールをこしらえるか、もっと用意のいい者は、雑貨屋で買った小さなゴールを使うのだった。彼らはひと晩じゅうプレーし、新しい友情が生まれ、新しい恋が芽生えるだろう。

ジェルジェルの仲間の一団は、焼いた肉のいいにおいのする屋台の前で立ちどまっていた。人の輪が小さなテレビでカメルーン対クロアチアの試合を見ていた。監督がきっと録画していて、あとで十回以上も見せようとするだろう。メキシコ対カメルーンのときにそうだったように、むだなことだが。

録画というのは記憶のようなものだ、ジェルジェル、ただ画面の上で起きるだけだ。記憶より正確だが――ほんの数日前に離れた森の感覚さえ、もう薄れかけている――記憶より不完全で、においも、ぬくもりも、精霊も欠けている。

若い男女の一団が、ちょっとした試合をしようと準備していた。村とはちがって、浜辺でサッカーをする（しかもうまい！）女の子は何百人も、ひょっとすると何千人もいた。それに加わりたいという誘惑はあまりに強く、彼を仲間たちから、そして魔法のように引きつけられていた波打ちぎわから引き離すのにじゅうぶんだった。

「やる？」と聞かれたが、ジェルジェルにはわからなかった。彼はボールを取って、頭と膝でリフティングを始めた。それでじゅうぶんすぎた。前の晩、メキシコ戦で、彼は最後の最後に、ほんのわずかな時間だけ出場した。ウビラタンがひどい打撃を受けて足を引きずりはじめたときだ。彼はあのメキシコのキーパーの悪魔の目を見て、恐ろしくなった。仲間全員にも起きたことだった。恐れに苦しむことがあるとは思っていなかった。森を出るまで、恐れを知らなかったのだ。

砂の上でプレーするのは妙な感じだった。走るのも、跳ぶのも、ボールをうまく蹴るのも難しかった。でも、また裸足でプレーするのはよかった。ピッチに入るときに彼を（またしても！）転ばせた、あのひどい靴がなかった。メキシコ人たちは笑わなかった。彼らの目と肌の色には何かなじみのあるものがあって、彼は彼らが気に入った。もちろん、あのキーパーの悪魔は別だった。

でも、試合を〇対〇で終えるのは、むかむかする感じだった。そんなことは誰にも一度も起きたことがなかった。仲間の多くはプレーを続けたがった。そんなふうに終わりうるとは信じられなかったのだ。監督はまた病人のようにふるまっていた。最初の試合ほどではなかったが。ジェルジェルは、監督については目を見て、体のほかの部分がすることは無視しなければならないとわかっていた。監督はかしらで、たとえ自分の体に病人のようなふるまいをさせていても、賢くなければならないのだ。

海のそよ風がひどく暑い一日を冷ましていた。浜辺の試合は、「シャツあり」のチームと「シャツなし」のチームでおこなわれていた。さいわいジェルジェルはシャツなしのほうになり、脱ぐのは本当にほっとした。いっしょにプレーしている女の子のひとりは、森から来たと言ってもおかしくなかった。顔立ちに、インディオの血筋が表れていた。ジェルジェルは長いこと彼女を見つめていて、どうして僕たちみたいに胸をはだけていないのか聞いてみたかったが、それを言うことばを知らなかった。

前の晩、アントニオに呼ばれてピッチに入るとき、彼は背筋に長い長い震えを感じた。ヤマンデは――彼は聞いていた――もう何度も繰り返していた。「僕は弱い、僕は弱い」相手のキーパーが、ほかの誰が相手でもネットに入っていたはずの彼のシュートを何本もはじきかえしたときだ。「キーパーが強いんじゃない、僕がまだ弱いんだ」。

だが、ゴールにいるメキシコの悪魔の存在にいちばん苦しんだのはモアシルだった。身軽なモアシル、すばしこいモアシルが、急に子どもに戻ってしまったようだった。悪魔のすばやさと並はずれた反射神経が彼から力を奪い、一度ならず、メキシコのゴールを防いだのはただ善い精霊だけだった。

女の子たちとプレーするのは楽しかった。彼女たちは考え方がちがっていて、もっと遅いけれど、もっとずる賢かった。ときには、それほど遅くもなかった。読みにくいパスを組み立て、並はずれたピッチの見方で守った。ジェルジェルには、少しヤマンデを思い出させた。彼はしょっちゅう彼女たちに見とれて気をそらした。舟や、金属の鳥や、ほかのたくさんのものに見とれて気をそらすのと同じように。けれどもボールが足もとにあると、また森の狩人に、容赦なく勇敢な狩人に戻った。小さなゴールは狙いにくかったが、彼はピッチのどこからでも決めた。彼が、選手も観客もみんなの意表をつく、ものすごい角度のループシュートを決めたとき、彼らに似た顔立ちの女の子が彼を抱きしめた。観客は、ポルトガル語も話せないのにあんなにうまくサッカーをするよそ者の見ものを見ようと、どんどん増えていた。みんなが拍手していて、とても楽しんでいた。

前の晩も抱きしめられた。試合の終わりに、メキシコの選手たちは大喜びで、互いに抱きあい、泣いている者もいた。仲間たちが、シャツを交換するというあの妙な習わしのために彼らのところへ行ったとき、相手の三、四人が、心のこもった、本物の抱擁で彼を抱きしめた。狩りから帰った兄弟を抱きしめるように、隣にハンモックを吊るしたばかりの女の子を抱きしめるように。

僕たちと同じだ、とジェルジェルは思った。もちろん、みんな僕たちと同じだ、スタジアムのなかの人たちも、町に住む人たちも。でも、あの人たちはほかの人たちより僕たちに似てる。彼は、あの男たちの力を少しでも吸いとれることを願って抱擁を返した。そして本当にそうなったような気がした。すぐに、もっと強く、もっと自信がわいてきたのを感じた。だが、いちばん抱きしめられていたのは、あのキーパー悪魔だった。何度も試合を

救った、まさに英雄で、ブラジルの観客までがひっきりなしに拍手を送っていた。ジェルジェルは彼も抱きしめに行くことにした。悪魔の力を少し吸いとりたかった。彼のように無敵になりたかった。だが、彼のところにたどりついて両腕で抱きしめたとき、悪魔はもういなくなったのだとわかった。キーパーはまた、弱くてふるえる、ただの男に戻っていた。ジェルジェルは悪魔がどこへ飛んでいったのか見ようとあたりを見まわしたが、目に映ったのは照明のまばゆい光だけだった。ヤマンデに聞きたかった。ヤマンデはいつも何でも見ているから。でも彼は少し離れてアントニオと何やら話していた。ひょっとすると、まだ「僕は弱い、僕は弱い」と繰り返していたのかもしれない。

十対〇のゴールのときには、男女の仲間全員から抱擁がやってきた。浜辺でプレーするのはよかった。どうしてワールドカップは浜辺でやらないんだろう？　世界はおかしなところだ。

「アントニオ、あのばかに言え、砂の上でプレーして足首をくじいたら、倒れてるところへ俺がとどめを刺しに行くってな！」それが試合をさえぎったことばだった。ゴンサウヴェスが、アントニオとスタッフと少年たちを連れて、急にうやうやしく静まりかえった人垣のあいだを近づいてきていた。魔法のように、みんながジェルジェルに気づいた。インディオの顔をしたあの女の子も、挨拶のしぐさで片腕を宙に止めたまま、口をぽかんと開けて彼を見つめていた。

ジェルジェルだった、ブラジルを救った無名の選手だった。前の晩、試合終了二分前、ペナルティエリアの線から、恐るべきペラルデスが、ものすごい角度のシュートを放った。いつものモアシルなら楽に届いていただろう。だが前の晩のモアシルは魔法にかけられていた。誰もがそれをわかっていた、相手の選手たちさえも。ジェルジェルは全速力で守りに戻ろうとしていた。シュートの瞬間、彼はまだペナルティエリアの外に、遠すぎるところにいたと、多くの人が誓っただろう。ところが彼の脚は稲妻になり、彼の足はいちばん強い根のようになって、確実にゴールに入るはずだったシュートを、ゴールラインのまさに上でそらしたのだ。それからはもう、どちらのチームも得点に近づくことはなく、数分後に試合は〇対〇で終わった。

ジェルジェルは自分の一団に加わり、そのとき、シャツを交換するあの妙な習わしのことを思い出した。シャツは相手の選手と交換するものだと説明されていたが、彼はどうしてもあのきれいな顔の女の子と交換したかった。そして、彼女がとまどいながら、自分のシャツのかわりに、何日か前に市場で買った黄色いランニングシャツを渡してくれたとき、ジェルジェルは何が起きたのかを理解した。あれは悪魔だったのだ。ピッチに入るとき、彼は相手のキーパーを見すえていた。悪魔はメキシコの男を離れ、彼の体を通りぬけてスタジアムから出ていったのだ。悪魔が彼をあのゴールを防ぐところまで引っぱっていった、それ以外に説明はなかった。

ヤマンデに話さなきゃならない、もっと気をつけなきゃならない。最後の二分間、相手のキーパーはまたふつうの男に戻っていた。自分たちはそれにつけこんで勝つこともできたのに、そうしなかった。もう二度とそんなことがあってはならない。

5.7 通訳

「ヤマンデ――それとも、パオロロッシと呼ぶべきかな――すばらしいプレーだったね、おめでとう。ゴールの話をしてくれるかい？」

地上でもっとも人気のある人々の何人かと話せる世界でただひとりの男であることは、彼を比類のない立場に置いていた。そしてアントニオは、それを楽しみはじめていた。

前の晩、頭がぐるぐる回って寝つけずに横になっていたとき、彼は驚きとともに気づいたのだった。あれこれ考えていた対象は、翌日の、一次リーグ突破を決めるカメルーン戦ではなく、通訳という役目が開いてくれるさまざまな可能性だった。もっと考える時間がなかったのが残念だ、まったくのでっちあげの人物を二十三人つくりあげて、頭に浮かんだことを何でもしゃべらせることだってできたのに、誰にも何も言えなかったはずだ。使者に罪なし、というのはよく知られている。

だがそのときまで考えたことがなかったのは、使者は好きなことを言うこともできて、それが正しいかどうか確かめるのは難しい（あるいは、彼の場合は不可能だ）ということだった。

もちろん、少年たちの名声がさらに高まれば、そしてその可能性は大いにあったが、遅かれ早かれ人類学者が彼らに興味を持ち、彼らのことばを研究して、彼のゲームはばれてしまうだろう。だがそのころには、彼は森に帰っているはずだった。それに、どのみち実のところ、それに乗じて大それたことをしたいわけではなかった。目的はふたつだけで、そのうちいちばん簡単な――そして抗いがたい――ほうは、靴のなかの小石をいくつか取りのぞくことだった。

「おめでとうって言ってる、それでゴールの話をしてくれるかって」

ヤマンデは驚いてアントニオを見た。「空いてる隅が見えたから、キーパーは届かないと思ってそこに蹴った。何を話すことがあるの？」

「ゴールを見逃されたのは残念だ、お仕事中だったのでしょうか、と言っています。でも録画する習わしがあるのは知っているから、ご心配なく、今夜には見られるでしょう、とのことです」

記者は打撃を受けたそぶりも見せずに続けた。

「全体として、ここまでのワールドカップをどう思う？　期待していたとおりかい？　何かとくに印象に残ったことは？」

これはまっとうな質問だったので、アントニオはヤマンデの答えを正しく訳すことにした。どうせ今度は、皮肉は彼自身がじかに入れていたのだから。

「とても楽しんでいるそうです。印象に残っていることのひとつは、ああいう大男のひとりにちょっと触れただけで、地面に倒れて苦しみもだえることです。大腿骨を折ったときでさえ、あの人たちが感じているらしいほどの痛みは感じなかったそうです。でも、あの人たちの回復力にも感心しているそうです。ほんのわずかな時間でまた立ちあがるのに、自分は治るのに月が三つめぐったと」

話しているあいだ、記者はひっきりなしにあたりを見まわしていた。ひょっとすると答えを聞いてさえいなかったのかもしれない。そこでアントニオは小さな実験をした。次の質

問、カメルーンに四対一で快勝したことを受けての大会の残りの展望について何か、をヤマンデに訳したあとで、まちがえたふりをして、そのわけのわからない答えをことばのまま伝えたのだ。

記者は眉ひとつ動かさなかった。「ありがとうございました。スタジオにお返しします！」

もうひとつの目的は、達成するのがずっと難しかった。

ゴンサウヴェスの干渉にもかかわらず、この状況を利用してチームを率いることだ。「役割を持たないなんていうばかげたことはやめろ」を「いつものように、知っているとおりに自由にプレーしろ」と訳すのは簡単だった。だがゴンサウヴェスはばかではなかった。面と向かってはまだ何も言っていなかったが、何が起きているのかははっきり察していた。だが、やはりばかではなかったからこそ、クロアチア戦の後半に見せたすばらしいプレーで、すでに渋々ながらも受けいれるほうがいいと納得していた。そしてそのあとのゴンサウヴェスの記者会見は、少年たちの実践するトータルフットボールへの賛辞一色で、ところどころに、自分とスタッフは彼らが世界のサッカーに適応する手助けをしただけだという見せかけの謙遜話がはさまっていた（それはある程度は本当だった、とアントニオも認めなければならなかった）。

訳す段階で戦術の指示を横取りして変えるのは比較的たやすかったが、先発メンバーに手を出すのははるかに難しい仕事だった。

アントニオは、ベンチに置いておいたほうがいいと彼が考える選手たちとゴンサウヴェスとのあいだに、乱暴な口答えをでっちあげて緊張を生むという手も考えてみたが、あまりにあくどい考えとして捨てた。実のところ、むしろ逆をしなければならなかった。監督を嫌って悪口を言いつづけるヤマンデの、そしてとりわけカウエのことばを、やわらげることだ（もっともカウエのほうは、悪口を言われてもゴンサウヴェスが自分を使いつづけることに、それと並行して、ある種の感心を抱きはじめてもいた）。

メキシコと引き分けたあと、ゴンサウヴェスは何人か選手を替えるつもりでいた。とりわけヤマンデにはまったく納得していなかった。だがアントニオは、あの少年にとってそれは時間の問題にすぎず、できるだけ早くワールドカップの潜在的なスターに戻るためにはプレーを続ける必要があるとわかっていた。考えに考えて、結局、彼をピッチに残すために、ほかに考えられるフォワード全員に軽い筋肉の張りをでっちあげた。キセとピライとサニャスは大いに驚きながら、診察と、追加のマッサージや理学療法のセッションを受けさせられ、ヤマンデはカメルーン戦に出場した。そしてピッチは、その後、彼の正しさを証明した。

カウエの最初のゴールのあと、カメルーンの思いがけない同点ゴールが続いた。だが数分後、カウエが「傾いたヤシ」でブラジルをまたリードさせた。アントニオと何年もかけて練りあげた数多くの型のひとつで、観客も相手も同じように驚かせるものだった。

三点目は、ジャシのフリーキックがちょうど隅に吸いこまれて生まれた。みんなが喜んでいるあいだに、ジャシは落ちついてゴールのほうへ歩いていき、ボールが入ったところで、指で宙に「ＭＡＲＣＯＳ」と書くしぐさをした。マカパの地区の遊び仲間たちへの敬意のつもりだったが、カメルーンの選手たちはそれを嘲りのしぐさと受けとった。ゴンサウヴェスも同じくらい腹を立てて、彼ら以上に怒って叫んでいるらしいのに気づいたことで、かろうじて乱闘にならずにすんだ。

四対一の最後のゴールを決めたのは、ほかならぬヤマンデだった。「張りすぎた弓」をしとめたのだ。ブラジリアのマネ・ガリンシャ・スタジアムの観客は、それだけを待ってい

たかのようで、七万人の観客が、たそがれの最後のきらめきのなかで、声をそろえて想像の矢を放って喜んだ。アントニオはその場面を、何年ものあいだ、一メートルもの厚さの鳥肌に包まれずに思い出すことができなかった。

5.8 汗

レチシアの家の居間の、やわらかすぎて本当には座り心地のよくない茶色いソファに座って、ヤイアは、あのフェイスブックのページの一件があってから、誰かを自分の家に招くのはひと苦労になったと考えていた。友だちは彼女を連れまわしたり、自分の家に招いたりしたがった。親戚や友だちに戦利品として見せびらかすために。ヤイアはそれがいやなわけではなかった。エドゥアルダみたいにばかにされるより、ずっといいに決まっている。それに、そうしていると大勢の人と知りあえて、なかにはおもしろい人もいた。もちろん、誰も……ほどおもしろくはなかったけれど……どうしよう！　ヤイアは携帯を取ろうと脇に手をのばしたが、あるはずの場所になくて、すぐ隣に座っていたファビオの太ももにぶつかった。彼女はさっと立ちあがってバッグを確かめに行った。出したのは確かなんだけど……やっぱりバッグのなかにはない。すばやく居間を見まわした。誰が取ったの？　携帯に触ったら殺すつもりだって、友だちはもうわかってるはずなのに。

「ヤイア、どうかした？」とファビオが気づかわしげに尋ね、ソファから立ちあがって、そのはずみでクッションを少しずらした。あった！　ふう、クッションのあいだにすべりこんでいただけだった。

「なんでもない、なんでもない、大丈夫、ありがと」

彼女は彼にすてきな笑顔を向けた。その笑顔が彼をどれほどどきどきさせるかには気づかずに。そして携帯に暗証番号を入れ、誰にものぞかれないような姿勢で、写真のアプリを開いた。

「ほら、ほら！」とダニが言った。「番組が始まる」

『ボン・ジア・コッパ・ド・ムンド』の司会者が家庭とスタジオの視聴者に挨拶し、ゲストを紹介して、最初のコーナーを流した。ジョージによるヤイアとカウエのインタビューで、前の晩、いつものようにアントニオの通訳つきで収録されたものだった。

ジョージとアントニオの特別な関係は、レチ・ノルチにとって大いに得になった。ブラジル北部のほとんど無名の放送局から、全国のテレビの主要な拠りどころのひとつになったのだ。とりわけ、局長がレチ・グローボと結んだ取り決めのおかげで、ジョージはしばしば夜のスポーツ番組にコメンテーターとして招かれ、いま流れているような注文仕立ての記事を依頼されるようになっていた。局長はもちろん、それだけ人気が増えたのだから昇給のかわりとして申し分ないと考えていて、ジョージも結局のところ、それに同意していた。

「すてきよね、このジョージ」とレチシアがヤイアのほうを向いて、ウインクしながら言った。

「何言ってるの？　少なくとも三十にはなってるわよ！」とパトリシアが反論した。

「あら、ときどきはすてきな三十男だっているのよ」と友だちは続けた。

「カウエも悪くないわ」とダニが言った。

「ちょっと小さいと思う」とレチシアが言いきった。「ヤマンデとかモアシルとか、あのとんでもないイケメンたちじゃなくて、あの子をインタビューしたのは残念」

「でも昨日は二点決めたよ」と、ファビオの友だちで、この機会に招かれていたマテウスが口をはさんだ。「とくに二点目は、ポストを壁に使ったゴールで、おとぎ話みたいだった。それに全体として、ここまでベスト16進出のいちばんの立役者なんだ。彼にインタビューしたのは正しいよ」

マテウスはそのときまで黙っていて、夜の始めからずっと、何か言って自分の存在に気づいてもらう方法を探していた。女の子たちの目つきで、黙ったままでいたほうがよかったとわかった。

「あなたが貴賓席で試合を見ようって招待されたあと、夜の試合後のパーティーにも招待されて、みんなでおしゃれして私たちも潜りこめたらいいなって思ってたのに！」とレチシアがため息をついた。

「そんなのないわよ！」ヤイアは一瞬携帯から顔を上げた。「ガラパーティーの俳優じゃないんだから、合宿中のサッカー選手よ。そのうちわかるわ、ワールドカップが終わったら、きっと私のことを思い出してくれるわよ」

「やっぱり、このカウエって、ベッドでどうやって楽しませるかわかってる感じがする」とダニが言いはった。

「しーっ！　ばか！　声を小さくして。向こうにパパがいるんだから！」とレチシアがたしなめた。

あなたがどれだけ正しいか知らないでしょうね、ダニ、とヤイアは思いながら、前の晩、試合とインタビューの何時間かあとに撮った自撮りを、もう一度うっとりと眺めた。写っているのは、汗ばんだ彼女の顔と、鎖骨と、同じくらい汗ばんで彼女の顔に押しつけられたカウエの顔だけだった。そして彼女の頬の赤みと目の輝きから、ふたりが汗をかいているのは、いっしょにジョギングから帰ってきたばかりだからではないとわかった。

5.9 たばこ

テレーザは、黄色いビニールのテーブルクロスをかけた小さなテーブルにフルーツジュースとビスケットを並べおえて、それをテレビの前に据えた三つの小さな肘掛け椅子の前に置いた。それまで生まれてから一度もサッカーの試合を見たことがなかったが、アントニオの子たちが出ているこのワールドカップは――しかも彼自身もピッチのベンチにいて、ユニフォームがなんてよく似合うことか――もちろん見逃すわけにはいかなかった。

最初の試合から、彼女とサヴェリオはいっしょに、ここラジオ・ノヴァ・アミザージで試合を見ることになっていたが、すぐにジョアンも加わった。彼と同じように立役者たちを個人的に知っている誰かといっしょに論評するほうが、ずっと満足できたのだ。決勝トーナメント一回戦にはルイーザも来るはずだったが、歯痛を起こしたので、ジョアンがかわりに番組『オ・カホセウ・ド・ゴシップ』をやっていて、それはあと数分で、ちょうどキックオフの笛に間にあうように終わるはずだった。

テレーザは扇風機をつけ、机の引き出しからブラジルの国旗を取りだしに行った――見つけられるかぎりいちばん大きいので、みんなでお金を出しあって、秘書のレベッカも加わったのだ――そしてそれを開けはなした窓の窓台の外にていねいに垂らした。真昼の焼けつく空気のなかへ、ベロオリゾンチの方角だと思うほうへ投げキスを送った。「がんばれアントニオ、がんばれみんな！」

すべて準備ができた。

最初の試合の観戦は少しごたごたした。テレーザが実況を聞こうと音を上げたままにしておいたのに、サヴェリオが、アナウンサーの言わない細かいことをひっきりなしに尋ねたからだ。「観客はどんな感じ、どんな顔してる、うれしそう？　審判は男前？　太ってる、痩せてる？　アントニオはいまどんな顔した？　靴は何色？」

答えているうちに彼女はプレーの断片を見逃して、あとでわけがわからなくなった。

だから次の試合からは、ずっと便利なやり方を見つけていた。音量をつぶやき程度まで下げて――必要なときに説明を聞けるくらいに――テレーザがサヴェリオに試合をきちんと説明してあげるのだ、彼の好きなように。

「ほら、ほら、入場してきたわよ！　黄色を着てる、いつもどおりね、よく似合うと思うわ、それに陽気になる色だもの、そうでしょ。アントニオはひげを短くしたのね、ほんとに似合ってる。でもちょっと痩せたみたい、ストレスなのね、あんなに緊張して、あんなに人がいて、ちゃんと食べてるのかしら。まあ、なんて醜い審判、見せたいくらいよ。鼻ばっかりで、背が低くて、ぎゅっと絞られたみたいにずんぐりしてるの。あんまり意地悪じゃないといいけど、気に入らない小さい目をしてるわ。チリはきれいな赤いシャツね。感じのいい、陽気な顔をしてる、試合が終わったらもうちょっと悲しい顔になってるといいけど。でも待って、音を上げるわね、国歌を聴きましょ、とってもきれいなんだから……」みんな黙った。

ジョアンはあごを上げて、ピッチにいるかのように誇らしげに、サヴェリオはすっかり集中して拍子に合わせて頭を揺らし、テレーザは歌詞に合わせて唇を動かしていた。国歌にはいつも胸を打たれた、どの国歌にも。それにあのすてきな若者たちを見ると、あんなに若くて、みんなあんなにまじめで胸を張って、なんていい子たち、どんなに胸がいっぱいでしょう。目尻の涙をさっとぬぐった。もう感傷はおしまい、さあ、始まるわよ。

「すごく走ってるわよ、サヴェリオ、ほんとに上手。それにとってもきれいな動き方をするの、ねえ、観客席の女の子たちが映ったら、うちの子たちを目で食べちゃいそうだったわ……あっ！　ピアタ、気をつけて！　あの背番号七のちびがダニみたいにぴったりくっついてる、映ってないときに蹴ったりつねったりしてるんじゃないかしら、意地悪な顔してるもの。ほらジャシが出た、見てよあの走り、脚が六本あるみたい、カウエにボールを出して、カウエが、あっ！　蹴ったはずなのに速すぎて見えもしなかった、ボールが跳ねかえったみたい！　ウビラタンが取って、すぐにもう前にいるタイニに出して、何て言うのかしら、線の向こうよ」

「うわ、オフサイドだ！」とサヴェリオが心配した。

「え？」

「いや、いや」とジョアンが口をはさんだ。「ぎりぎりオフサイドじゃない！」

「いまのはよくわからなかったわ、あとで説明して、でも気をつけて、いまピライがもう右のほうに着いてる、ヤマンデがボールを出して、ピライが頭で、あっ！　あっ！　ゴール！　ゴールよ、サヴェリオ、**ゴール！**」

言う必要さえなかった。開けはなした窓から轟きが、それから叫び声が入ってきて、いまはこだまのように家から家へ跳ねかえり、通りの脇のヤシの木を揺らしていた。「ゴール！　ゴール！　ゴーーーール！」

みんなはまた座り、テレーザはその機会にパイナップルとココナッツのジュースを回し、サヴェリオとジョアンはたばこに火をつけた。よし、いい調子だ。

火を消したとたん、テレーザが慌てて知らせた。「やだ、何が起きたのかよくわからないけど、チリの選手がボールを持ってる、ひっぱたいてやりたくなるような無作法なのっぽよ、ほら、もうひとりの背番号十番の髪のすごく短いのに出した、まあ、うちの監督が何か叫んでる、アントニオも何か叫んでる、でもいっしょに叫んだら子たちにはわからないと思うわ、ほら、混乱しちゃってる、十番がすごく強く蹴って、モアシルがジャガーみたいに飛びこむ、でもだめ、だめ、だめ、ほんのちょっとで届かない……だめ！　あっちのゴール。モアシルががっくりしてる、かわいそうな子、あんなに叫ばれて呆然としちゃったのよ、でも私にはわからない、わからないわ、どうしてあんな……」

それからの一時間半は、拮抗の苦しみだった。フルーツジュースもビスケットもなくなり、ジョアンはひと箱まるごとたばこを吸い、ふだんはいたって節度のあるサヴェリオが、ラム酒の瓶か、カシャーサを一滴か、決着のつかないこの消耗に耐えるために何か強いものはないかとテレーザに尋ねた。テレーザは、きちんと用意しておかなかったのを恥じいって、ジョアンに財布を持たせ、ラム酒とピンガと、パパイヤのアイスクリームの大きな箱を買いに行かせた。

「もうほとんど終わりよ、サヴェリオ、監督は腕を振りまわして叫んでばかりで、アントニオはあごを手にのせて座ってる、ペナルティキックになるのね、ねえ、私、ペナルティキックってすごくこわいの」

「あの子たちもこわいだろうね」とサヴェリオが言った。「聞いたところじゃ、まったく慣れてないみたいだから」

「そう、そのとおり」とジョアンが認めた。「僕も、あの子たちにはほとんどまったく新しいものだと思う……でもあいつ、いま何をするんだ、ああイエスさま……！」

「聖母さま、サヴェリオ、あの九番がロケットみたいに飛びだした、近すぎる、止められなかった、ほら蹴る、ああだめ、ゴールよ、おしまいよ！　ちがう！　ちがう！　あれは何、梁、梁に当たった、入らなかったのよサヴェリオ、入らなかった！　守護天使が見おろしてくださったのよ、入らなかった！！！」

「クロスバーだ、クロスバー！」とジョアンが信じられないというように叫んだ。「信じられない、クロスバーだ、信じられない！」

「ほら笛が鳴る、時間切れよ、聖母さま、最後の一分で負けるところだった、イエスさま、心臓が止まりそうになったわ、汗びっしょりよ、見えなくてよかったわね、サヴェリオ、ほんとに、誓うわ！」

テレーザはペナルティキック戦に備えて引き出しをかきまわしに行き、テレビの上にノッサ・セニョーラ・ド・ロザリオのお札と、火と戦いの神オグンの小さな像を置いた。「みんなに助けてもらったほうがいいのよ、モアシルができるだけたくさん味方してもらえるほうがいいの、かわいそうな子たち、なんて責任でしょう、私なら死んじゃうわ、ほんとに」

ひどく興奮して、彼女はたばこに火をつけた。最後に吸ったのは何十年も前に学校の友だちとだった。二本の指ではさんで、吸いこみもせずに、熱に浮かされたように小さく煙を吐きだしていた。ああもう、なんて不安なの。

5.10 助言

「アウメイダ！　アントニオ！　俺の目が見えないとでも思ってるのか？　俺がばかだと思ってるのか？」

「え？」アントニオはホテルの小さなテレビ室で、コロンビア――ウルグアイ戦のハイライトを何度目かで見なおしていた。

「いや、つまりだ、俺が杖をついて歩きまわってるのを見たことがあるか？　犬を連れて？　黒眼鏡をかけて？」

「すみません、ゴンサウヴェス監督、おっしゃることが……」

ゴンサウヴェスは手ぶりで彼をさえぎり、目で値踏みした。「そこまでだ。否定しろ、いつも否定しろ、明らかなことでもな。いいぞ。おまえを買ってる。だから見苦しい言い逃れは勘弁してやる。おまえがどんなゲームをしてるかはわかってるんだ」

アントニオはできるかぎり無表情な顔をつくって、ただ彼を見ていた。相手は続けた。

「もう一度言うぞ。俺には性格の欠点がたくさんあるが、サッカーのことは少しはわかってる。おまえがやったことに腹を立ててるわけじゃない、俺がおまえの立場でもたぶん同じことをしただろう。俺が気づかないと思ってたことには少し腹が立つ、それはそうだ。だが、結果がおまえの味方をしてるうちは、口を出さないほうがいいと決めたんだ。結局のところ、あの若い連中のことはおまえのほうがずっとよく知ってるからな」

アントニオは黙りつづけた。

「だが今日、俺たちは敗退まであとこれっぽっちのところまで行った。だからよく聞け。おまえがあいつらに与えてるこのプレーの自由は、いい。それがうまくいくのは信じられないが、明らかなことには降参する。うまくいってる。だが、何か拠りどころを与えてやらなきゃならない、うまくいかないときにすがれるものを。でないと、自由から無秩序へ、それから迷走へ行っちまう、そいつはまったくよくない」

アントニオは、ゴンサウヴェスが本気なのか、それとも大きな罠を仕かけているのか、決めかねていた。だが、いつも否定する者を買っているとたったいま言ったばかりなのだから、アントニオはとぼけつづけるのがいちばん安全な道だと決めた。「ゴンサウヴェス監督、本当に、おっしゃることがわかりま……」

ゴンサウヴェスは手ぶりで彼をはねつけ、隣に腰をおろした。

「リモコンをよこせ」と彼は命じた。

午後の、最後の最後にペナルティキック戦でものにした彼らの試合の映像を読みこみ、見たいところまで戻した。映像を流すと、ブラジルの守りが相手の運のいいミスでかろうじて切りぬけた場面が映った。それから少し先送りして、ブラジルの攻撃が妙にアイデアを欠いていた場面を見せた。それから止めて、次の対戦相手になるコロンビアの試合をまた流した。

「見たか？　ここから先に当たる相手は、どんどん手ごわくなる。試合ごとに、前の試合より指数関数的に難しくなるんだ。おまえたちの戦術は最初のいくつかの試合ではよかっ

たし、これからもうまくいくかもしれない。だが、守りにひとり、攻めにひとり、あいつらに目印をやらなきゃならん」

ゴンサウヴェスは、ついてきているか確かめるようにアントニオのほうを向いて、続けた。

「守りはまちがいなくピアタだ。あいつには目をつけてた。守りに対して、ほとんど父親みたいな態度をとるところが目を引いたんだ。前へ出るときは、ほとんどしぶしぶやってるように見える。いいシュートを持ってるが、いいシュートならほかの連中も持ってる。俺なら、あいつは後ろに残して安心を与えさせる。攻めのほうは、もっと迷ってる。あのパオロロッシの大ばか、言うのはしゃくだが、本当にできるやつだ。だが、あいつは自由にしておいたほうがいいかもしれん、どこでもうまくやれそうな気がする、キーパーでもな。それより、あいつのふさわしい相棒のほうがいい。あいつも同じくらい虫が好かん、あの丸顔のいまいましいガキ、夜にホテルの柵を乗りこえてるのに俺が気づいてないと思ってるやつだ。だが攻めでは、信じられないほどの決定力がある、それは認めてやらなきゃならん」

「カウエのことをおっしゃっているんですか？」

「そうだ。もちろん、攻撃の一点に縛りつけろと言ってるんじゃない。だが、守りからロングボールを蹴る者は、前にあいつがいるとわかってるべきだ。誰か適当なやつじゃなく、あいつが。攻撃の流れがまるごと変わる、しかもいいほうに変わると請けあうぞ」

ゴンサウヴェスは立ちあがり、話は終わりだと強調するようにテレビを消した。

アントニオは最後までポーカーフェースを崩さなかった。「監督のご指示を、みんなに伝えておきます」

5.11 ヴァレリオ

ヴァレリオは病院のベッドで汗びっしょりになって、「コロンビア！　コロンビア！」と叫びながら目を覚ました。

チームメイトたちといっしょに治療を受けているサンパウロの高級私立クリニック「理学療法と調和」で、ブラジル守備の折れた要、ヴァレリオ・アウムーニョスは、もう一週間前から松葉杖で歩きまわっていた。体が不自由になった気がして不安がつのる車椅子はやめていたのだ。だが、どうやら不安はそう簡単に追いはらえるものではなかった。

「ヴァレリオ？」

「ああ……」

「なんだ、起きてたのか。夢を見てるのかと思った」

「また例の悪夢を見たんだ。今度は、あのセンターフォワードをやってるやつも出てきた……」

「誰？　パオロロッシ？」

「そう、そいつ、そいつ。よく覚えてないほかの人たちといっしょに、そいつをどこかへ連れていかなきゃならないんだけど、いつもコロンビアに行きついちまうんだ」

「ああ、今日は試合だからな、そのせいだろう」

「せわしない夢だったんだよ、ほら、いつも遅れてる気がするやつ。パオロロッシを送っていって、それから試合をしにスタジアムへ行かなきゃならないのに、遅れそうになってるんだ。道も何もかも知ってる気がするのに、毎回曲がるところをまちがえて、気がつくとコロンビアにいる」

「そりゃまさに悪夢だな」とオルビスがくすくす笑って言った。

「ああ、そうだ」とヴァレリオはちょっと笑って答えた。「すごくリアルな悪夢だ」

ブラジルの試合の前の何日かは、彼の罪悪感はふくれあがって、ひどく落ちつかない夢か、本物の悪夢に変わった。そこではだいたいいつも、みんなが彼に、彼にはできない何かを期待していた。今度は、難民の一団を安全なところへ連れていく役目をおおせつかった夢だった。だが、海路でも空路でも陸路でも、国境を越えるたびに、決まってコロンビアに着いてしまうのだ。目的地がどこなのかはわからなかったが、コロンビアでないことだけは確かだった。彼は松葉杖を探した。

もう眠れないだろう、それはわかっていた、ちょっと歩いたほうがいい。いや、ちょっと歩くといっても……ヴァレリオは、松葉杖で歩くのがどれほど大変かが、どうにも納得できなかった。俺は世界レベルのアスリートなんだぞ、と彼は自分に繰り返していた、五分ごとに止まって息を整えなきゃならないなんてことがあるか？　それに、どうして退院させてもらえないのかわからない、この足首を経過観察しなきゃならないと言うけど、もう家に帰ったほかの連中より俺のほうが重いとは思えない。

いっぽうデビルには選択の余地がなかった。ブラジル代表の招集を白紙に戻したあのひどい事故の負傷者全員のなかで、レギュラーになる可能性がいちばん高かったひとりだっ

た。そして、いちばん重傷のひとりだった。下あごの骨折をともなう頭部外傷で、一時的にまったく話せなくなっていた。頭部外傷の後遺症が――そのなかには、絶え間なく頭を叩くような頭痛もあった――すっかりおさまり、ふつうに食事ができるようになるまで、病院にとどまらなければならなかった。

「仮面のスーパーヒーローのデビルだって、最初はひどい頭痛持ちだったんだぞ」と、アメリカンコミックスにくわしいファブリが彼に言って、傷ついた口でとはいかなくても、せめて目で彼をほほえませた。

試合開始の三十分前には、もう全員がテレビの前で熱く議論していた。最初の試合は、それぞれ自分ひとりで見はじめた。誰の具合もおおむねもっと重かったせいもあるし、誰もが大惨事になると賭けたであろう経験を分かちあう気になれなかったせいもあった。だが結局、家族や友人も入れて二十人が、ヴァレリオとオルビスの病室に集まって、代表の勝利に大喜びして抱きあったのだった。それからは、暗黙のうちに談話室で試合を見ることに決めていた。彼らはこっそりやってきて、何もかも誰も彼もを猛烈にこきおろした。監督、連盟、選手、政治家。だがやがて応援する気持ちが勝って、国のほかの誰よりも苦しみながら試合を見るのだった。

ブラジル対コロンビアの前の争点は、フォゲッチが、インディオのフォワード、パオロロッシに自分のシャツを贈るという派手なしぐさをしようと思いついたことだった。ふたりはとてもよく似ていた。パオロロッシのほうが少し背が低く（もっとも、それは見当をつけるしかなかった、フォゲッチは脊椎の損傷で車椅子に乗っていたからだ）、カメラの前ではずっと居心地が悪そうだった。目を伏せ、まったく独特な動き方をして、おじぎや、生まれかけで途切れてしまったようなしぐさをしかけるのだった。フォゲッチのほうは、まるで数分後にピッチに入るのが自分であるかのようにふるまっていた。入れ墨をこれ見よがしに見せ、アメリカの野球帽を斜めにかぶり、首にはおきまりのヘッドホン、手で挨拶のしぐさをし、もう成功を手にしたと知っている者の目をしていた。

「フォゲッチはいやなやつだって、俺はずっと言ってたんだ！」とロミーニョがいつものかん高い声で言った。

「いやなやつじゃない、注目の的になってるのが好きなだけさ」とファブリが答えた。

「何もかもの中心に、だろ」とロミーニョが言い足した。

「とんでもない。二分もすればもうみんなあいつのことなんか忘れてるさ、ここには勝たなきゃならない準々決勝があるんだから」とカルロス・ドゥガウが思いださせた。

「それにしても似てるな、あのふたり」とヴァレリオが言った。

「ああ、兄弟みたいだ」とファブリが言った。

「じゃあもうひとりのほうもいやなやつだ」とロミーニョがまた口をはさんだ。「だいたい、パオロロッシなんて名前のやつがどれだけいやなやつかって話だよ。それに見てみろ、おどおどしたふりをしてるけど、この前の晩はゴールのあと何かにとりつかれたみたいだった」

「でも、すごいゴールだった」とオルビスが言った。

「いやなやつかどうかは知らないが、強いのは強い」とファブリが認めた。「フォゲッチより強いかどうかはわからないが、強い」

「今度はフォゲッチが強いってか」とロミーニョがつぶやいた。

「それに、あの弓を引くしぐさ、俺は嫌いじゃないんだよな、言っとくけど」とヴァレリオが、ロミーニョの最後のひとことを聞かなかったふりをして返した。

ほとんど口のきけないデビルといっしょに試合を見るのは、彼が生きている悲劇を一瞬忘れられれば、本当に愉快だった。ボールがブラジルの攻撃ゾーンにほんの少しでも近づくたびに、彼は立ちあがって「**ムグアーーーッ！　グバアーーーッ！**」とことばにならないうなり声をあげ、ことばがないのを補うためにものすごく身ぶりをした。だから五分もすると、恋人も含めてみんなが、うっかり平手打ちを食らわないように何メートルか後ろへ下がって、彼のまわりには空白ができた。デビルが叫ぶと、誰かがかならず、わかったかのように応じてやった。

だから、ブラジルのチャンスにあふれたブラジル対コロンビアのような試合は、音としてはこんなふうに展開した。

「**グバアーーーッ！！　アーーーッ！**」

「そうだな、いい攻めだった」

「**ムグアーーーッ！　ブゲエーーーッ！**」

「そりゃそうだ」

「俺もそう思う」

「**ンブウウウウッ？**」

「いや」

「とんでもない、夢にも思わないよ」

「**ムグアーーーッ！　グバアーーーッ！**」

そんな具合に。

前半三十五分、ヤマンデがコロンビアの守備の右からコーナーキックを蹴った。セットプレーのとき、デビルは一種の縁起かつぎの儀式で迎えた。両腕を広げて立ったまま、何やらごぼごぼ言うのだ。ボールが蹴りだされると、とりわけ朗々と「**アーーーーッブ！　アーーーーーンッグ！**」と始めた。

だがそのとき、ヤマンデはボールに信じられないほどの曲がる軌道を与えて、守備全体を置き去りにした。今度は誰もことばをはさむ暇がなかった。ボールはぴたりとピアタの足もとに落ち、ピアタは楽々とそれをゴールに入れた。サンパウロの「理学療法と調和」の談話室で、前例のない歓声が爆発した。デビルは涙を流して椅子にくずおれ、そのあいだ仲間と家族は、それぞれの体の限界はあっても、跳びはねて、休みなく抱きあって祝った。

ゴンサウヴェスの若者たちは、まるでデビルの聞きとれないけれども心のこもった声援が本当に聞こえているかのように、止まらないように見えた。不運と、コロンビアのキーパーの二度の本当に見事なセーブだけが、前半四十五分での追加点を阻んだ。

ハーフタイムは新しい議論をもたらした。

「ゴンサウヴェスを見たか？　ぼうっとしてたぞ」とマルセリーニョが言った。顔の打撲で腫れた目がほとんどふさがっていて、ぼんやりした影くらいしか見えなかった。

「ぼうっとしてるんじゃない、チームがうまく回ってるときは、ああいうふうなんだ」とヴァレリオが答えた。

「でもゴンサウヴェスのチームに見えないな、トータルフットボールのオランダみたいだ」とカルロス・ドゥガウが言った。

「そうだな、いったい何が起きてるんだろう」とファブリが言った。「まるでピッチで若い連中が仕切ってるみたいだ、でもそんなことありうるか？　どうしてあんなに経験があるんだ？」

「俺には、今日はむしろほかの試合より整って見えるけどな」と、いつも何でも戦術の眼鏡ごしに見るコルジャンが反論した。

「ゴンサウヴェスはばかだ」とロミーニョがひとりごとを言ったが、またしてもみんなに無視された。

後半のなかばごろ、審判が、ゴールから少なくとも三十メートルのところでブラジルにフリーキックの笛を吹いた。仲間と短く話しあったあと、ジャシがボールを地面に置き、審判がスプレーで壁の距離の印を引くのを待った。スプレーは、インディオの若者たちにとくに驚きもなく受けいれられていた。彼らが毎日さらされている何千もの奇妙なことのひとつにすぎなかったのだ。この新機軸にいちばん驚いておもしろがったのはアントニオだった。

デビルはもう長い腕を広げて立ちあがり、いつものわけのわからない節をもぐもぐ唱えていた。ジャシとヤマンデは互いに少し離れて立ち、すっかり集中してボールを見つめていた。

「あのいやなやつのパオロロッシが蹴るぞ」とロミーニョが言った。

「いや」とマルセリーニョが答えた。「蹴るのはボールを置いたやつだ、ジャシだ。カメルーン戦のフリーキックを思い出せよ」ところが助走をとって蹴ったのはヤマンデだった。

ボールは信じられないほどの力で蹴られ、照明の下を、回転のかけらもなく、白く平らに、コロンビアのキーパーの背後のスタンドのほうへ飛んでいった。十メートルほど行ったところで、軌道がわけもなく折れて、ボールはゴールのほうへ落ちはじめた。キーパーは、もうはっきり遅れて、左へ跳んだ。ボールがまだゴールに入らないうちから、デビルはもう「**アーーーーッブ！　アーーーーエエエンッグ！！**」を始めていた。ヤマンデは蹴ったあと背を向けて、両腕を空へ上げ、フリーキックの結果を見もせずに、自分のゴールのほうへ歩いて戻っていった。アントニオはヤマンデのふるまいを見て、そしてそのキックをよく知っていたので、実際にゴールが決まる前から喜びはじめた。ゴンサウヴェスまでが、思わず先に両腕を空へ上げた。ネットが揺れたとき、「理学療法と調和」クリニックの若者たちは、もう声がかれるほど喜びの叫びをあげていた。

「**あいつは天才だ！**」とロミーニョは繰り返しつづけた。「**ずっと言ってただろ、パオロロッシは天才だって！**」

デビルはまた座って、自分のシャツを握りしめてすすり泣いていた。そして、すべてのプレーに苦しみながら、最後までそのままだった。コロンビアは攻撃に打ってでて、残り十分でペナルティキックで一点を返した。まだ若いフリオが、PKスポットからの完璧なキックでモアシルを破って、一対二のゴールを決めたのだ。だが世界じゅうが見たのは、フリオの右袖に、本人が気づかないうちにとまった巨大なバッタと、それをさっとつかまえて、みんなの目の前で食べてしまったブラジルの選手ふたり、ウビラジャラとイタウナだった。

クリニックの談話室から聞こえた嫌悪の叫びは、終了一分前まで静まらなかった。そのとき、新しい、もっと奇妙な叫び「**ンブグアーエエヴヴヒーヴァ！**」がデビルの口から飛びだした。みんなが問いかけるような顔で振りかえると、彼はもう、かすれてはいるがわかる声で言っていた。「**バ……バン……バンザイ！　ヴァ……レリオ！　しゃべれる……ぞ！**」

まだすっかりなめらかにはいかなかったが、一時的な麻痺は消えたようだった。

「まったく、ついてないな」とロミーニョが締めくくった。「せっかくしゃべれるようになったのに、最初に話しかける相手がヴァレリオとはね」

5.12 記者会見

オピスポは確認のメールを眺めた。うまくいったのがほとんど信じられなかった。「七月八日（火）十六時。ミネイロン・スタジアム、アヴェニーダ・アントニオ・アブラアン・カラン1001番、パンプーリャ、ベロオリゾンチ、ミナスジェライス州」。ベスト16突破のあと、彼はぺぺをもうじゅうぶんすぎるほど待ったと判断し、少しばかり奔走して、ブラジル代表を取りまくメディアの大行列に加わる方法を見つけていた。使える資金は多くなかった（その一部をいささか気ままに使ってしまったせいもあった）が、世界じゅうから来た記者がうようよしている場所で記者会見を開くのは、逃すわけにはいかない機会だった。

「ジョゼ、おまえはばかだ」

電話の向こうで、彼の編集長ジェオヴァニ・バヘートが、彼を正気に戻そうとした。「ブラジル史上いちばん大事かもしれない準決勝のキックオフの一時間前じゃ、おまえの記者会見には誰も来やしない」

「ジェオヴァニ、友よ、俺を信じてくれ、オピスポなら目をつぶって信用できるって知ってるだろ？　頼むから、話したとおりにしてくれ。記者会見は四時十分に始まる、遅れてくるやつがいたら四時十五分かもしれない。おまえは四時二十分までに、送ったあの抜粋をウェブサイトに載せてくれ」

「ジョゼ、おまえはばかだ。遅れてくるやつなんかいない、誰も来ないんだから」

「言ったとおりにしてくれ、四時二十分に抜粋を載せるんだ、いいな？」

ジェオヴァニはもう通話を切っていた。こういう最近の電話に足りないものがひとつあるとすれば、受話器を電話機に乱暴にたたきつけるしぐさだった。その欠如を、彼はほとんど体で感じていた。

オピスポは、これまでの、当然報われるべきだと確信していた満足に乏しいキャリアで最大の、職業上の勝利を前もって味わいはじめていた。電撃のような考えがひらめき、それを粘り強く追い、国じゅうでいちばんの筆にもふさわしいルポルタージュを書いた。大スクープ、国全体を吹きとばすような代物だ。そしていま、ついに彼の勝利の瞬間がやってこようとしていた。

もちろん、そのスクープがでっちあげだという事実を頭の隅に追いやるのも、とてもうまくやってのけていた。ときどき聞こえてきて「でっちあげ！　でっちあげ！」と言っていたあの小さな声は、日に日に弱くなり、ついに、彼の頭に住んでいる何十ものはるかにおもしろい声の下に埋もれてしまった。

残ったのは反論の余地のない（ほとんど反論の余地のない）ことだった。ワールドカップの準決勝まで勝ちすすんだインディオの部族の出身地である森の一帯は、ブラジルではなくガイアナにある。ほとんど反論の余地のない。オピスポはそれが本当ではないことをよく知っていた――実際、部族がやってきた正確な地点がどこなのか、まったく見当もつかなかった――が、アマゾンの森は広大で、とてつもなく巨大で、部族の正確な位置について厳密な計算をしようなどと思いつく者は誰もいない、少なくともブラジル人なら誰も、ということを当てにしていた。そういうことを正確に決めるのは不可能だ、と彼はよく自分に言い聞かせていた、ただとにかく不可能なのだ。

ふつう、試合開始の一時間前に記者会見が開かれることはない。ましてやこれほど大事な試合ならなおさらだ。だが彼は、代表チームの広報部の担当者に――それにしても美人だった、彼はその電話番号を念入りに書きとめていた――あまりにしつこく食いさがったので、彼女はへとへとになって四時に時間を決めたのだった。

「四時には誰も来ませんよ、セニョール・オピスポ」と彼女は言った。

「ご心配なく、ご心配なく、お嬢さん……ロシャナさんとおっしゃいましたね？　なんてきれいなお名前、あなたご自身とほとんど同じくらいきれいですよ。ご心配なく、いまにわかります、この記者会見がどれほど話題になるか、ほっほっほ、ええ、どれほど話題になることか」

メディアの大騒ぎに加わるというのは、とてつもなく長い移動に乗りだすことでもあった。代表団の誰かが何か言いに現れるのを何時間も待つ。それをいっそう神経にさわるものにしていたのは、選手が誰もポルトガル語を話さないので、あのアントニオを通さないかぎり、事実上、誰にもインタビューできないことだった。そして、ほんのわずかでも注目を浴びようと必死の人々が開く、ありとあらゆる話題についての記者会見に耐えることだった。そういう記者会見から、彼はいつもきちょうめんに距離をおいていたが、その日はかまわなかった。翌日の四時は彼の瞬間になるのだから、その日は最後列に座って、あの哀れな人物たちが目の前を行進していくのを眺めていればよかった。

七月七日の午後の最初の会見は、たしかにかなり混みあっていた、とオピスポは苦々しく（それともねたましく？）気づいた。イザベル・バルボーザとかいう女性が――この人も、決して不器量ではなかった――アマゾンの森の一部を保護するための財団の設立を発表していた。大勢の記者を参加させた興味深い特徴は、財団の資金が選手たちの賞金から直接出ているということだった。オピスポも、それが大きな騒ぎを呼びかねないニュースであることは認めざるをえなかった――インディオが森の大きな一切れを自分たちで買う、それもよりによって――もし翌日の自分の発表がすべてをかすませてしまうと確信していなかったなら。

その朝、イザベルは、ベロオリゾンチ中心部の高い建物のひとつにあるホテルの部屋の窓から、長いこと外を眺めていた。空気は重く湿っていて、髪を乾かさずにシャワーから出たのに、三十分以上たってもまだ濡れているように感じた。ロバートが浴びている終わりのないシャワーの音を背景に、彼女は車が町の渋滞に詰まっていくのを眺めていた。ふたりは発表の最後の細部を詰めるために遅くまで働き、サッカーの話をし、いっしょに眠った。そしていま、彼女はその町から目を離せなかった。

「この財団で、すっかりのぼせあがってるね」と彼は湯気の雲のなかからバスルームを出てきて尋ねた。

「私をのぼせあがらせてるのはブラジルよ、私の国の人たち、この町々、この子どもたち、私たちが無視しつづけているあの果てしない森、ワールドカップの準決勝まで私たちを連れてきてくれたあの信じられないチーム……」

「僕は？」

「あなたが何？」

「僕にはちょっとのぼせあがってないの？」

イザベルはほほえんで振り向いた。「ううん、あなたにはのぼせてない！」と答えて、あっかんべえをした。それがひと続きの小競りあいの始まりになって、ふたりはまたベッドに戻った。

ふたりがまた話しはじめたのは、朝食のときになってからだった。

「この記者会見が早く来てほしいよ、もうこれ以上きみを手伝えない気がするんだ」とロバートはひどくまじめに言った。

「何言ってるの？　どうしてもう手伝えないの？」

「試合が近づくにつれて、僕たちはどんどん敵同士になっていくからさ、僕はドイツ人できみはブラジル人、完璧な敵同士だ。まだもう少しはがんばれるけど、もう抵抗が崩れかけてるのを感じるんだ」

「それで、あなたの抵抗が崩れたらどうなるの？」

「たいしたことは起きない、きみが僕の敵になって、僕がきみを憎みはじめるだけさ」

イザベルはしばらくロバートをじろじろ眺めた。彼のドイツなまりのせいで、冗談めかした調子があるのかどうか、すぐにはつかめなかった。彼はあいかわらずひどくまじめだったが、彼女は少し迷ったあとで、冗談だと結論した。

「あなたがそんなにサッカーに興味があるなんて知らなかった、ついこのあいだまで、ほとんどその話なんかしなかったのに」

「もちろんサッカーに興味はあるさ、僕はドイツ人だ」

「モチロン・サッカーニ・キョーミハ・アルサ……」と彼女は彼の話し方をまねしようとして、おうむ返しに言った。

「ほらね？　もう前より敵同士だ！」と彼は笑って答えた。

「アントニオに電話させて、会見に出るのは彼には簡単じゃないから」

「アントニオ、ね？」

「あなたが彼にひどく嫉妬してるのは知ってるし、それにはもっともな理由があるわ。アントニオはブラジル人だから、私たちの敵のあなたたちドイツ人よりずっとハンサムだし、森でいちばん野生の自然と一体になって暮らしてきて、その野生の自然が目に輝いてるの。マカパで知りあったころはぱっとしなかったのに、すっかりハンサムになったくらいよ」

「ハンサム、ね？」

「それ以上よ、すごくハンサム。しかもサッカー史上いちばん信じられない出来事の主役なのよ、続けましょうか？」

「ほらね、どんどん敵同士になってく」

ベロオリゾンチのスタジアムのプレスルームは記者でぎっしりだった。代表の合宿から出てくる情報の乏しさが、彼らをニュースに飢えさせていた。そしてアントニオが出席する

記者会見は――森の保護という脇道の話題についてであっても――少しばかり情報を得る機会になるかもしれなかった。どんな種類のものでも、何か書く材料がありさえすればよかった。

オピスポは部屋のいちばん後ろに座って、大きなスクリーンに映った最初の画像を読み解こうとしていた。それはふたつに分かれていた。左側は、まわりをすっかり木々に囲まれた、植物のない、なんとなく長方形の広い空き地でサッカーをしているインディオの一団の写真だった。プレスルームのざわめきで、写っている若者のひとり、フリーキックを蹴ろうとしているのがピアタだとわかった。右側は、ブラジル北部の地図で、マカパと、アマゾン川の流れの最後の部分と、左の写真が撮られた森の一帯をおおまかに示しているらしい大きな水色の丸と、そして上の、ずっと上のほうに、仏領ギアナとスリナムとの国境を表す赤い破線が見えた。

それが何を意味するのか理解するのに、少し時間がかかった。まず、イザベルとアントニオと、三人目の男、レチ・ノルチの局長の写真撮影があった。それからマイクのちょっとした技術的な問題があって、とても気のきく若い男がすばやく解決した。最後にアントニオの短い挨拶があって、最後の五分はチームについての質問にあてると記者たちに請けあった。イザベルが話しはじめようと咳ばらいをしているときになってようやく、オピスポは稲妻のように悟った。この記者会見のあとでは、誰も彼のルポルタージュのひとことも信じないだろう。

自分が暮らしていた村の場所を示すのに、アントニオ以上に権威のある声があるだろうか？　それにまあ、と彼は自分に言った、いまの技術なら、そういうことを正確に計算するのはとても簡単だ。とても簡単なのだ。

「ジェオヴァニ？」

「ジョゼ！　よう、どうした？」

「ジェオヴァニ、よう、あの、俺のルポの抜粋の件なんだが？」

「もちろん覚えてるさ、三十分前に話したじゃないか、どうした？」

「それがな、ジェオヴァニ。実は、いくつか出来事があってな、大きな話だ、すごく大きな、電話じゃ話せないんだが……そう、つまり、ずっと上のほうの連中から圧力をかけられて……」

「圧力？　どんな圧力だ？」

「いや、ジェオヴァニ、俺のことは知ってるだろう、ある種のデリケートなことは直接会って話したいんだ。とにかく、そう、つまり、あの記事はすぐに載せないで待ったほうがいい」

「なんだって！　爆弾みたいな代物だったじゃないか、千年に一度のスクープだって！」

「ああ、ああ、爆弾みたいな代物だ、ああ、でもまあ、ほら、ここにはすごく目立つ連中がいて……」

「ジョゼ、何があったのか言ってくれないか？」

「ジェオヴァニ、載せるな、いいな？」

オピスポが通話を切ったときには、もうスタジアムの出口の階段の下にいた。彼はホテルに戻って帰りの便を予約し、あの記事のことはもう考えなかった。翌日の記者会見を取り消すのも忘れていたが、そこに現れたのはひとりだけだった。

十六時二十分、たった一か月のうちに、インディオの招集を阻む方法を探すことから、彼らの守護天使になることへと自分を運んだ運命の皮肉について二十分考えたあとで（「すべては場合による」とアントニオがよく繰り返すのを聞いていたが、そのとおりだった）、チアゴは、発表者さえ現れなかったのだから記者会見は明らかに流れたのであり、誤報として片づけてかまわないと判断した。足早にロッカールームへ向かいながら、彼は携帯電話を取りだした。「ロシャナ？　チアゴだ。あの変なやつのことを知らせてくれてありがとう。結局、会見には誰も来なかったって言いたかっただけなんだ。うん、あいつもだ。さあね、誰にもわからない。そのほうがいい。もちろん。ほんとにありがとう」

5.13 待機

ゴンサウヴェスの助言はとても役に立った。アントニオはそれを認めるのにやぶさかではなかった。チームは、それまでで最も手ごわい相手だったにもかかわらず、コロンビア戦で最高の試合をしたのだ。けれどもアントニオは満足するどころか、地平線に垂れこめていく暗い雲を見つめていた。

試合の慌ただしい終盤で、ピアタは大会二枚目のイエローカードをもらい、そのせいで次の試合は出場停止になる。それにカウエも出られるかどうかわからなかった。終了間際に背中にひどい打撃を受けて、担架で退場しなければならなかったのだ。守りと攻めの要としてついさっき見定めたばかりのふたりを欠くのは、どんな場合でも問題だっただろう。そして翌日待っている試合は、決してありきたりの一戦ではなかった。ドイツは、そこまでのワールドカップ全体でいちばん説得力のあるチームだった。

だが何よりも暗い雲、それに比べればほかの雲は軽くてふっくらした白い小さな雲にすぎないものは、それが準決勝だということだった。アントニオがいちばん恐れている種類の試合、彼の呪われた試合。チームの好調さを頼りに、アントニオは高まる不安を表に出さず、ほかの者たちにうつさないようにしていたが、簡単ではなかった。まったく簡単ではなかった。

夕食を待ちながら小さなテレビ室に座って、若者たちの小さな一団が、お気に入りの暇つぶしにふけっていた。自分たちのことや、もっと広くワールドカップのことを伝える報道を探して、電光石火の速さでチャンネルを変えるのだ。

「戻して。何か見えた気がする」

タイニが前のチャンネルに戻すと、白黒の昔の映像を流していた。

「変だな、このチャンネルは壊れてるのかもしれない、色がない」

「ボールも変だ、僕たちが使ってるのとはちがう。先へ行けよ、ほら」

「待って。モアシルって言った気がする」

「まさか、モアシルなんて。あの人たちのことばにある、僕たちのに似てるけどまるでちがう意味のことばのひとつだろう」

みんな黙った。何秒かのあいだ、彼らの耳にはもうなじみになったけれどもまだわからないポルトガル語の響きしか入ってこなかったが、それからはっきりと「モアシル」ということばが聞こえた。少しして、画面に口ひげのある男前の男の姿が現れた。アントニオの読み書きの授業をまだ覚えていた若者たちが、画面の文字を読んだ。

「ＭＯＡＣ――モアシルって書いてある！　でもあれはモアシルじゃないぞ！」

ジェルジェルがアントニオとモアシルを呼びに走り、騒ぎにひかれて、ほかのほとんど全員も少しずつやってきた。アントニオはテレビをちらりと見て、すぐにわかった。マラカナンの悲劇の特集だった。一九五〇年のワールドカップの決勝戦で、ブラジルじゅうがもう勝ったものと思っていたのに、ブラジルのスポーツ史上最大の敗北に直面した試合だ。

「いったいどういうつもりだ」とアントニオは、ひとりごとのように、しかし声に出して言った。「準決勝の前の日に、このばかどもがこんな話を流すなんて」

「何の話？」とモアシルが尋ねた。

「いや、なんでもない」アントニオはためらった。「本当は、悲劇的だけど、すばらしい話なんだ。ひょっとすると、君たちの話を別にすれば、あらゆる時代でいちばん偉大なサッカーの物語かもしれない」

「どうして一度も話してくれなかったの？」とヤマンデが迫った。

「一度も話さなかったのは、主役はたくさんいて、責任もたくさんあったのに、ブラジルはその重荷を全部ひとりの男の肩に負わせることにしたからなんだ。キーパーの肩に。それで、その男の名前を知ってるか？　その男もモアシルっていったんだ。さっき君たちが見た男がそうだ。何年も前に一度、森で、その話をしかけたことがあったんだけど、僕たちのモアシルのことを思って、やめたんだ」

アントニオは黙った。若者たちは、かたずをのんで彼を見つめていた。一瞬、彼の記憶は過ぎた年月に戻っていった。ことばをどうにかまともに話せるようになったばかりのころ、彼が味わった解放感、最初の物語を話せるようになったことが彼にとってどれほど大事だったか。ほとんど気づかないうちに、彼はまた話しはじめていた。「僕にこの話をしてくれたのは祖父だった。その日、祖父は国歌を演奏する楽団の一員としてマラカナンにいたんだ……」

三十分後、アントニオはほとんど自分の意思に反して、話をしおえていた。われに返って、いったい何を言ってるんだ、と思った。どうしてこんな話をしちまったんだ？　若者たちの顔には心配な兆しがいくつも現れていて、アントニオはなんとか取りつくろおうとした。

「そんな顔をするなよ、ほら。君たちは、あのころのブラジルよりも、いまのドイツよりも、ずっと強い。楽勝さ」

ああ、頭がおかしくなったのか？　話を変えろ、アントニオ、話を変えろ。

「何も心配することはない。準決勝の呪いは、僕だけにかかわることなんだ」

だめだ、黙ってたほうがいいかもしれない、とアントニオはまた思って立ちあがり、呆然とした若者たちを後ろに残していった。

コロンビアとの準々決勝のあとの日々は、ひどくのろのろと過ぎていった。アントニオは、気をまぎらわすための、不安を高ぶらせず仲間にうつさないための手を、もうすっかり使いはたしかけていた。両親への電話は助けにならなかった。混乱がひどすぎて、慌ただしい注意と、口ごもったはげましばかりだった。テレーザへの電話は少し元気をくれた。意図せずとも、彼女ほど彼を笑わせられる者はいなかった。それに、彼らのために並べてくれた魔よけの文句の数々とお守りの一覧が、彼をいっそうほほえませた。

イザベルとの電話もうれしかった。財団の方面の知らせはとてもよかったが、彼女が言ったひとことが、いやな疑いの種を彼の耳に植えつけていた。アントニオは、正直に言って、自分の若者たちに対してまっとうだったと言えるだろうか？　ああ、結局のところ、言える。彼は小さな子どもを持つ心配性の父親のようにふるまってきた。彼らが持っていることさえ知らない利益の面倒を見て、多くの危険の存在を知らせないことで、それから彼らを守ってきた。

けれども彼は本当に彼らの父親ではなかったし、ましてや、この世界レベルのアスリートたちは小さな子どもなどではなかった。強くて勇敢な男たちなんだ。知って、自分たちで

決める資格がある、とアントニオは思った。準決勝が近づくにつれて募る不安から来る、いくらかのあきらめもまじっていた。

夕食のあと、彼はゴンサウヴェスに（アントニオは体裁を保つことにとても気をつけていた）、何日か前にでっちあげて、彼らとだけになりたいときに口実に使っているインディオの儀式のために、彼らを散歩に連れだす許可を求めた。

「サッカーは代表チームだけでできているんじゃないって話したのを覚えてるか？　村のチームや部族のチームもあるんだ。そういうチームでは、世界じゅうから来たサッカー選手がプレーできる。ちがう村で、世界の反対側で生まれた選手でもね」

アントニオのことばは、同意のつぶやきで迎えられた。

「いちばん強くていちばん金持ちのチームは、世界でいちばん強い選手たちにたくさんお金を払って、自分たちのチームに入ってくれるよう説得するんだ」

アントニオは、話をどう向ければいいかわからなくて何秒か黙り、それから率直に言うことにした。

「この何日かで、世界でいちばん強いチームのいくつかが、君たちに自分たちのところでプレーしてほしがっていると聞いたんだ」

一瞬の沈黙があって、それからピライが尋ねた。「僕たちの誰に？」

「全員だ」

「全員？」とアペレラが驚いた。「でも僕は一度も出てないよ、どうして僕がいい選手だってわかるの？」

「出場した者のほうが引く手あまたなのは本当だ。でも、ヤマンデやカウエやジャシと同じチームにいるなら、君たちもうまいにちがいないと思ってるんだ」

「そのとおりだ！」とブレジャウヴァが笑って言い足した。

「ワールドカップのあとすぐに村に帰らなきゃならないのは残念だな」とタイニが考えこんで言った。「ほかのところも少し見てみたいよ。それに、みんなでいっしょに大きなチームでプレーするのはいいだろうな、ね？」

「みんないっしょにはプレーできないんだ」とアントニオは説明した。「そういうチームにはどこにもすでにとても強い選手がいて、必要に応じて、チームを完成させるために選手をひとりかふたり、多くても三人探すだけなんだ。たとえば、スペインにとても強いチームがあって、前のキーパーが引退したのでキーパーを探していて、モアシルにすごく興味を持ってる」

「でもスペインって、もう敗退したあのすごく弱いチームじゃないか、スペインに強いチームなんてあるはずがない！」とモアシルが憤慨して言いかえした。

「ところが、妙に思えるけどそうなんだ、いちばん強いチームのいくつかは……」

「僕は？　誰が僕をチームに欲しがってるの？」とジャシがさえぎった。

「君にはイングランドのふたつのチームが興味を持ってる……」

「でも、イングランドっていう人たちのプレーも見たけど、あいつらも弱かったよ！　アントニオ、からかってるの？」

「最後まで言わせてくれ。イングランドのがふたつ、イタリアのがひとつ……」

「からかってるんだ」とジャシは、ほかの者たちのあざけりの笑いのなかで結論した。

「ドイツのがひとつと、ブラジルのがふたつだ」

「ああ。よし」とジャシは、急に誇らしげになって締めくくった。

何秒か沈黙が続き、それからピライが咳ばらいをするのが聞こえた。

「僕は村には帰りたくない。お金をくれてプレーさせてくれるっていうチームに、いいよって言うにはどうすればいいの？」

いちばん早く答えたのはピアタだった。「何を言ってるんだ？　村に帰りたくないってどういうことだ？　村には僕たちみんなが必要なんだ。僕たちの偉業で村を誇らしくさせてから、村に帰るんだ」

「おまえが村に帰ればいい。おまえは村で幸せだし、帰るのが正しい。僕はここのほうがいいから、ここに残る」

ピアタが、驚きと怒りの入りまじった顔で正しいことばを探しているあいだに、思いがけず口をはさんだのはイタウナだった。「僕もしばらくここに残りたいな。あまり遠くへは行かずに、でもマカパとか、試合をしに行ったあのきれいな町、マナウスでプレーするのはいいだろうな」

「おまえが？　ここはひどいってずっと言ってたじゃないか、ワールドカップにも来たくなかったくせに」

「考えが変わったんだ。考えを変えるのは賢いことだよ」

十分のうちに、ほかの多くの者が、ますます大きな声で自分の望みを口にし、気持ちはどんどん熱くなり、ピアタとイタウナはつかみあいになりかけて、チームはくっきりとふたつに割れた。

数少ない、離れたところにとどまっていた者のなかから、モアシルとヤマンデが、落ちつきとまではいかなくても、少なくとも静けさを一団に取り戻させた。アントニオはすっかり参ってしまって、何も言わずに立ち去っていた。ほとんどほっとして、ただこう思いながら。少なくとも、これより悪くはなりようがない。

5.14 うわごと

イビラアタン、だめだ！　あの木に登るな、だめだ！　だめだ！　あれは呪われた木だ、だめだ！　カイマンは猿を食べない、カイマンは子どもを食べない、だめだ！

明日だ、明日なんだ、出発しなきゃ、走らなきゃ、どんなに危なくてもかまわない、明日なんだ。セニョール・イナシオに待ってるように言ってくれ、今度は僕も教会へ行くから、イナシオ、イナシオ、待っててくれイナシオ、僕もミサに行くには森を越えなきゃならないけど、できる、朝早く出発して、いかだを組む、でもイビラアタン、あの木には、だめだ、登らないって約束してくれ、覚えておけ、カイマンは猿を食べない。

君たちに数え方を教えなきゃ、どうして一度も数え方を教えなかったんだ？　少なくとも百まで、ひょっとしたら千まで数えられるようにしなきゃ。千まで数えられるように教えていたら、どんなにちがっていたかわかるか？　どれだけたくさんのことができたかわかるか？　千日、千年、千キロ。どうして一度も数え方を教えなかったんだ？

こうしよう、明日みんなで逃げるんだ、僕たちの森へ帰るんだ、イビラアタンのところへ帰るんだ、準決勝なんかどうでもいい、どうでもいいんだ。日が昇るのを待って、それからカヌーか、ジープか、何かに乗って、みんなで僕たちのシャボノへ、僕たちの暮らしへ帰ろう、準決勝なんかどうでもいい。

フリオ、フリオ！

ヴェラスコの霊が僕たちの上に降りてこなきゃならない、それしか方法はないんだ。フリオ、フリオ、教会へ来い、君も祝福してもらえ、でもカキは食べるな！　何も食べるな、カキも、カニも、何も、食べるな、毒があるんだ、わざと毒を盛られたんだ。フリオ、助けてくれ、フリオ。明日、僕の血は血管から出ていって、そのかわりに氷が、氷と毒が入ってこなきゃならない。フリオ、助けてくれ、血は全部出ていかなきゃならないんだ。

監督、チームはお任せします、僕は妻のところへ、息子のところへ行きます、チームはお任せします。張りすぎた弓をやるな、絡みあう蔓の遊びをやるな、あいつらは僕たちを研究したんだ、僕たちを知ってるんだ、ずっと木の陰に隠れていたのに僕たちは気づかなかった。だからジャガーは来なくなったんだ、ほかに何のためだっていうんだ？　あいつらが僕たちを観察して研究するために、ジャガーを追いはらっていたんだ。いまじゃ僕たちのことを知りすぎてる、逃げなきゃならない、村を捨てて、どこか別のところへ移らなきゃならない。

でももう遅すぎる、準決勝は明日だ。

しっかりしろみんな、僕に勇気をくれ、僕にはできない。足首が痛い、片足が痛い、走れない、君たちといっしょにプレーできない、勇気をくれ。僕がいなきゃ君たちにはできない、右サイドががら空きになる、勇気をくれ、この足じゃ僕にはできない。誰が右でプレーするんだ？　誰がプレーするんだ？　いつだって僕のせいになるんだろう？

マラカナンの悲劇の霊が僕たちの上を漂っているのを感じるか？　僕たちには何もできない、逃げられない、霊は強くて、それを止めるものは何もない。みんな逃げろ、それしか助かる方法はない、逃げろ、僕が止める、君たちが森へ帰って、散らばって、逃げるあいだ、僕がカメラの前に立つ。

助けてくれ。

あの大きな黒いヘビをあんなに近くに置いておくべきじゃなかった、見かけのおとなしさにだまされちゃいけない、腹がすいたら、ためらわずに君たちの誰かに襲いかかる、追いはらわなきゃ、閉じこめなきゃ。目を見るな、あの瞳の黄色はもう毒だ、赤い口が毒なのと同じように。僕は君たちみんなを愛してる、君たちはわかってない、追いはらわなきゃ、そんなに近くにいるな、ほら動いた、ほら襲いかかる、**ほら僕に襲いかかる！**

ドン！　ドン！　ドン！　「アウメイダさん！　セニョール・アウメイダ！」

最初、アントニオは自分の心臓があんなに強く打っているのだと思った。

ドン！　ドン！　ドン！　「アウメイダさん、いらっしゃいますか？　チームはトレーニングセンターへ向かうためにホテルを出るところです……」ドン！　ドン！　ドン！

でも、あのことばがあった。

ドン！　ドン！　ドン！　「セニョール・アウメイダ、まだお部屋にいらっしゃるのはわかっています、お返事ください、お願いします」

心臓ではなかった、もっとも心臓も狂ったように打っていたが。誰かがドアのところにいたのだ。

「はい……」とアントニオはかぼそい声で答えた。ここはどこだ？　今日は何日だ？

「ああ、アウメイダさん、よかった！　よかった！　ご気分は大丈夫ですか？　何かお手伝いできることは？」

「ええ、大丈夫です、大丈夫です」声がなかなか出なかった。ホテルにいた。でもどこの？　いつの？

「ああ、ほっとしました、アウメイダさん。チームはもうバスに乗っていて、トレーニングセンターへ出発するところです、いないのはあなただけです。ほら、準決勝だとかなんとかありますから、できるだけ早く合流なさったほうがいいかと……」

「準決勝？　**準決勝だ！**」

5.15 笛

彼は羽根とスパンコールの抱擁から身をほどいた。「ほら、いい子だ、アウメイリジア、おまえのぺぺは試合が見たいんだよ。いや、そうじゃない、おまえの髪が目の前にかかってる、ほら、くっつくのはやめろ、俺のちょうちょちゃん、これは大事な試合なんだ。いい子にしてたら、あとでぺぺが約束した紫のレースのパンティを見せてやるから、でもいまは見させてくれ、あいつを知ってるんだ、俺はあいつの命を救ったんだぞ」

女の子は、アイラインを引いた大きな目を見開いて感心した。「ああ、俺がいなきゃとっくにくたばってたよ、そうとも。森であいつの命を救ったんだ、大きな白いジャガーからぎりぎりで逃げたあのときさ、話しただろう？　それから迷子になったこいつを見つけたんだ、腹ぺこで喉がからからで死にかけてて、獰猛なアリクイの群れに襲われてた、俺がいなかったら……でもそれはあとで話してやるよ、お砂糖ちゃん、おまえの部屋でな、そしたらこの前のあの遊びをまたやろう、いまはおとなしく黙ってろ、もうすぐ始まるんだから」

「静かにして、もうすぐ始まるわよ！」テレーザは、いつも幸運を運んでくれた貝の形の水色のイヤリングをつけ、テレビの上に聖人たちやオリシャたちのお札と小さな像をずらりと並べていた。この日のために買った「幸運を呼ぶデフマドール」まで焚いていた。なんとなく足のにおいがしたが、売っているなかでいちばんのお守りだと勧められたのだ。ビールをひとケースまるごと冷やしておき、新しいラム酒とピンガが一本ずつ、たばこのカートンとビスケットのお盆の隣で、小さなテーブルの上に準備してあった。黄色と緑の縞のレーヨンでとびきりおしゃれをしたルイーザが、ジョアンとサヴェリオのあいだに座っていた。ふたりは角の中国人の店で買った花火のひとそろいを、引き出しに隠して用意していた。

「見えないけど、あの音は大好きなんだ、ひゅーっと鳴るやつも少し買ってくれよ、頼むよ」とサヴェリオは言っていた。「でもテレーザには何も言わずにおこう、あの人にはあれこれ縁起かつぎがあるから、縁起が悪いと思うかもしれない、驚かせてやろう」

大きな国旗はもう窓の外に広げてあった。テレーザは、キックオフの笛が鳴る前から、小指の赤紫の爪をすっかりかじってしまっていた。

「いったいいつ始まりの笛を吹くの？　ああもう、感激で汗びっしょりよ……来なきゃよかったのかもしれない、イタロ、家にいて、この試合もテレビで見てればよかったのかも……生であの子たちを見ていられるかしら、感激しすぎちゃう……」

「何を言ってるんだ、マルセラ、来ないわけにいかないだろう、ここまでよく我慢したもんだ。テレビで試合を見てたら具合が悪くなったよ……それに、俺たちが来たと知ったらアントニオがどんなに喜ぶか見てろ、どうなろうと、あいつのそばには両親がいるんだ！」

「あら、あの子はきっと、私たちがここにいるってわかってるわよ」

「どうしてわかるっていうんだ？　まさかあいつに言ったんじゃないだろうな？　驚かせなきゃならないんだぞ！」

「ううん、言うわけないじゃない！　でもきっと感じてるのよ、母さんの心がすぐそばにあるのを……ほら見て――この双眼鏡どうやって使うの、いつもうまく――ほら、ほら見て、まあなんて目の下のくま、かわいそうな坊や、きっとひと晩じゅう起きてたのね……いつ始まるのよ、こんなの一時間半ももたないわ！」

「起きて、ほら！」

「うーん、む……なんだい、またやりたいの？　もう若くないんだから、どうしたのこの勢いは、黒ヒョウのイザベルさん？」

「あはは、ちがうわよロバート、その腕をどけて、ほら、試合が始まるのよ、見なきゃ！　それに黒ヒョウって……私はずっと自分のことを子猫だと思ってたのに、ロマンチックで、やさしくて、陽気で、ちょっとおばかさんな……」

「しゃあ、くろひょうはほくかやろう、てっかいトイツのくろひょうか、ぽっちゃりのフラジル娘とそのおともたちを、ひとくちてぱくり……」

「あはは、やめて、やめてってば！　見たいの！」

「見るものなんかないさ、てっかいトイツにはなにもてきない、くすくったいたけた、ほら、こうして、こうして、こうして……あはは、どうせかつのはほくらた！」

「勝つのはこっちだよね、パパ？　このドイツは強いよ、ちょっとこわいくらいだ」

「もちろんだ、マヌエリート、ブラジルが勝つ、アントニオが勝つ」

カルロスは天を仰いだ。「父さん……！　まだその話？　このチームの本当の監督はアントニオだっていうの？」

「話なんかじゃない。何度も言うが、俺はあいつをよく知ってるんだ。あいつらの使ってる型の多くは、俺たちがマカパの監督をしてたころに考えだして、みんなに笑われたのと同じなんだ」

カルロスとマヌエリートは目を見交わして、くすくす笑いはじめた。

「父さん、やめてよ！　裂けた線路、はは、そりゃ笑われるよ、まじめな顔なんかしてられないって！」

マヌエリートはあんまり笑ったので、コカ・コーラが鼻に逆流して、少しズボンに吹きださなければならなかった。

エドゥアルドは、腕のなかで眠りこんだ孫娘のエビータを抱きなおし、息子たちが彼の昔話を聞くときの見下したような態度を、手のひと振りではねつけた。アントニオに子どもはいるんだろうか、あんまりそういうタイプには見えなかったが。あいつの話を喜んで聞いてくれる誰かを見つけたんだろうか。それに準決勝の恐怖には打ち勝ったんだろうか。ちょっと遠くから映されすぎてるが、俺にはわかる、あの顔は知ってる。あいつはまだ信じてるんだ、あの呪いを。がんばれ、アントニオ、ベゼイロス家はみんなおまえの味方だ。

「それで？　試合は始まったの？　国歌はもう終わった？」と妻のローザが口をはさみ、テレビの前に陣取って、豊かな腰の陰にそれを沈めてしまった。

「母さん！」「ローザ！」と三人のベゼイロス家の男たちがいっせいに叫んだ。
「しーっ！　どいて、聞こえるようにしてくれ！」

「**しーーーっ！**　この騒ぎをやめてくれないか？　広間で試合を見せてやってるだけでもありがたいと思え……ライムンド、あのぶかっこうなブーツでテーブルに足をのせるな。

それからイヴァノ、始まる前にその瓶を全部飲んじまったら、テレビの見分けもつかなくなるぞ……」

「セニョール・イナシオ、セニョール・アウムンデスからお電話です、例の件で……」

「試合がもうすぐ始まるっていうのに！　いったい何の用だ？」

「届くはずのコカインのロットの件だそうで……」

「なんだ、なんだ！　忙しいから、かけなおせと言え！　こういう連中は、仕事のことしか考えない！　愛国心がない、詩心がない！　国歌を聴け、愛するブラジルから離れてから、ますます胸にしみるんだ……それに、あの若いの、あの監督は、わしが見いだしたんだ」

「本当ですか、セニョール・イナシオ？」

「もちろんだ。わしが育てたんだ、わしの子みたいなもんだ、まだ若造だったころに、わしがボールを手にもたせてやったんだ。すぐに見どころがあるとわかった、こういうことでわしはまちがえない、イナシオは聖母さまのお助けがあれば決してまちがえない、そうだろう、おまえたち？」

「親分の言うとおりだった、セニョール・イナシオの言うとおりだったんだ。あの人は人を見る目をまちがえない」と、グスタヴォは、居あわせた者たちのまったくの無関心のなかで得意になっていた。試合を見ることを許された四十二人の囚人たちが、リノリウムと蛍光灯で灰色がかったテレビ室にいた。「決してまちがえない。俺を見ろ。このつまずきが片づいたら、ふさわしい場所に戻るんだ、三年かそこらの話さ、それ以上じゃない。それに、あいつを見ろ、アントニオを。親分はいつも、あの若いのは才能があるって言ってた、息子みたいなもんだって。俺とあいつは、息子みたいなもんだ。俺とアントニオは、まあ乳兄弟みたいなもんだ。まあ俺は、サッカーの代表チームの乳兄弟ってわけさ、どうだ」

その隣で、刑務所で植物学の学位をとろうとしている連続殺人犯のロムアウドが、音を立ててあくびをした。「口を閉じろ、始まるぞ」

「みんな、来いよ、始まるぞ！」マルコスとセバスチアンとルイと、ほかに十人ばかりの子どもたちが、マデイラ通りの電器店のショーウインドーの前に押しあっていた。そこでは少なくとも五台のテレビがついていて、ありとあらゆる大きさでミネイロンのピッチを映していた。

「見て、あれモアシルだ！」「そりゃそうだろ、キーパーの格好してるんだから！」「あいつだ、あいつだ、いちばん背も高い！　それにあれがジャシだ！」「いてっ、押すなよ！」「僕が前にいなきゃ！　いちばん小さいんだから、前にいなきゃ！　それにジャシはシャツに僕の名前を入れたんだぞ、おまえらのじゃなくて」「へっ、どうだか、おまえの名前だって！　そのマルコスってのが誰だか知るもんか、あいつの父ちゃんかもしれないだろ」「でもあいつの父ちゃんはインディオだぞ！　イカイトゥルジュルシャンヌトキとか、あいつらの名前みたいなのに決まってる、僕のためにシャツにマルコスって入れたんだってば！　僕の友だちなんだ！」「何言ってんだ、シラミだらけのカエルのくせに、自分を何様だと思ってる！」

「見ろよ、あのドイツ野郎どもの偉そうな顔、自分たちを何様だと思ってるんだか」

「まあ、ロミーニョ、強いのは強いさ、それもかなり。おまえがあいつらを嫌いなのはいまに始まったことじゃないけど」

「いまに始まったことがあるとすれば、俺が誰かを気に入ることだろうな、ヴァレリオ」

「好き嫌いなんかどうでもいい、問題はカウエがベンチにいることだ、見ろよ！」

「くそっ。こいつはまずい！」

「ああ、まずいに決まってる。ピアタのかわりにあのタイニってのも、どうなんだか。ああ、俺もあそこにいられたらな」ファブリのギプスをはめた脚は、震えどおしだった。ヴァレリオは膝を指で叩き、デビルはピッチに出る前にいつもしている呼吸の練習を知らず知らずのうちにやっていて、カルロスは足をじっとさせていられなかった。クリニックの白い部屋には、看護師がめまいを起こしかけたほどのアドレナリンのにおいが立ちこめていた。

「みんなはどうか知らないけど、俺はまるであそこにいるみたいだ、芝のにおいまでする……」

「それはデビルの制汗剤だ。でも俺も、いまからプレーするみたいな気がする、体じゅうが震えてる」

「集中しよう、俺たちのエネルギーもあいつらに届くかもしれない、包帯と添え木だらけだけど、エネルギーはエネルギーだ。がんばれブラジル、ほら」

ゴウモンはすっかり集中していた。ポウザーダの広間に入るのを許されたのは生まれて初めてで、このうえなく行儀よくしようとしていた。ガンボーネは念のため片手をその頭に置いて、船長帽であおいでいた。

「暑いな、ジェジータ。舟にテレビを買えばよかった。薄いやつだ、とってもきれいな、明日ひとつ買うよ。せめて涼しいところで見られる」

「まあね、来年あたりエアコンをつけようかね、考えておくよ。でも私は感激で汗をかいてるのさ、ほんとに。最初にあの子たちに会ったのは私だっていうのに、いまじゃ世界じゅうが見てるんだから。あの子たちに服を着せてやったのは私だよ、私が着せてやったんだ」

彼女は目をぬぐった。「セルヴェジーニャでも飲もうか、ほら、でないと泣けてきちまう。アルマンジーニョ、あんたもひとついるかい？」

アルマンドは画面から目を離さずに、うなずいた。彼も暑そうだったが、この日のために締めたネクタイを外すつもりはまったくなかった。黒くて、五十年前の自分の結婚式までさかのぼる小さな油じみがついていた。

審判がセンターサークルへ行った。ペペが黙りこんだ。あごのごわごわしたひげに、紫のスパンコールがひとつ引っかかっていた。テレーザは薬指の爪をかじり、ルイーザは十字を切り、サヴェリオは指を交差させた。イタロは息をのみ、マルセラは唇を噛みながら、日本のまがいものの扇子で猛烈にあおいでいた。イザベルはシーツをあごまで引きあげて、『ドイチュラント・ユーバー・アレス』を歌っているロバートの肩ごしに画面を見つめ、エドゥアルドは、赤ん坊のよだれが首をつたって流れるのにまかせて、身じろぎもしなかった。イナシオは汗をぬぐい、もう火のついている葉巻にまた火をつけ、グスタヴォはげっぷをし、子どもたちは黙りこんで、マルコスは人さし指を鼻に突っこんだ。人で

いっぱいの白い部屋が静まりかえり、ガンボーネは床につばを吐き、ゴウモンはうなった。そして審判がキックオフの笛を吹いた。

5.16 太鼓

明るく澄んだたそがれで、とても大きな月がちょうど木々のいちばん高い枝の上に顔を出したところで、キリマは語りはじめた。彼は多くのことでまちがえるかもしれなかったが、部族が物語を聞かせてもらう必要があるときは、わかった。若者たち、村の若い男のほとんど全員が、あんなに遠く、あんなに手の届かないところで、村の誰も想像さえできない場所で、どんな危険に遭っているかわからない。息子や甥のことを心配していない大人はいなかったし、恋人や兄弟のことを考えていない娘はいなかったし、残ったわずかな若者のなかで、いっしょに育った友だちがどこにいて何をしているのかを、ひっきりなしに自問していない者はひとりもいなかった。何も知らないことが、彼らがいないことよりもさらに、みんなの心に重くのしかかっていた。そう、村は物語を聞かせてもらう必要があった。

キリマは空と木々を見て、あの遠い場所を思い描こうとし、向こうから見える月は同じ月だろうかと自問した。それから語りはじめた。

「遠い遠いところ、川が広く、もっと広くなるところに、ヤシの木に囲まれた大きな村がある。その村には大きな空き地がある、本当に大きいんだ、アントニオの話に出てきた空き地を覚えているか？」

同意のつぶやきが部族を駆けぬけた。もちろん、アントニオの話は覚えていた。

「そう、この空き地はそれよりもっと大きい、わしらの空き地の十倍も大きい。わしらの若者たちは、まさにいま、その空き地のへりにいる。挑みの色に体を塗って、走れ、勝てとはげます、ものすごく大きな太鼓の音を聞いている。あらゆる村から部族がやってきて、彼らのプレーを見ようとしている。世界じゅうの村からだ。二十の二十倍の二十倍の人々が、みんな試合が始まるのを待っている。まわりじゅうに数えきれない火をともしていて、空き地は昼間のように明るい。みんな歌い、踊り、石や棒を打ち鳴らしている。大いなる夜だ、もうすぐ始まるのはいちばん大事な試合で、相手は血のように赤い塗料を塗っている。大勢いて、とても悪いやつらだ」

小さな子どもたちは親にしがみついた。赤く塗ったあんなに悪い相手たちに、少しこわくなったのだ。キリマの話をまったく信じてはいなかった。そんなに大きな空き地なんてあるもんか、しかも昼間みたいに明るいなんて、そんなにたくさんの人なんているもんか、何て言ったっけ、二十の二十倍の……世界にそんなにいるはずがない。でもいい話だ、と彼らは思い、みんなと同じように、もっとよく聞こうと座りなおした。

キリマは若者たちのひとりひとりを、それぞれの顔と体の模様を語り、飾りを数えあげ、偉大な戦士の、集中したその顔について話した。くりぬいた幹を二本の小枝で叩いて拍子をとりながら、アントニオの羽根の頭飾りを語った。立派さで彼のを上回るのは、試合を始める大呪術師の頭飾りだけだった。空き地を取りかこむ木々のなかの猿や、川のカエルの鳴き声を聞かせ、それがまるで太鼓の拍子に合わせて歌っているようだと説明した。空を指でたどって、アントニオがあれほどよく話していた光る大きな鳥の十の十倍の通り道を描き、あの大きな村では光る鳥はオウムと同じくらいたくさんいて、輝く巣のある月へ行っては帰ってくるのだと言った。彼はまわりを見まわした。

火の影が揺れる顔は、みんな彼のほうを向いていた。口をぽかんと開けた子どもたちや、指をしゃぶっている子どもたちを見た。息をのんで彼を見つめている大人たちみんなの、炎の照りかえしにきらめく目を見た。こんなに、こんなにみんなの注意を集めたことは、一度もなかった。いちばん美しい物語にしよう、と彼は決めた。これまで語ったなかでいちばん美しい物語を語ろう。

「みんなが挑みの歌を歌い、二十の二十倍の二十倍の声が上がって大地を震わせ、木々の葉を揺らし、そのあいだにあらゆる火の火の粉が、狂ったホタルの群れのように空へ飛んでいく。そのとき、黄色い男たちの呪術師が始まりの叫びをあげ、空き地の真ん中にボールを投げこむ。最初にそれを蹴るのはヤマンデだ、その蹴りはものすごく強く、虹のように完璧な弧を描く。相手は、わしらの若者たちがどれほど力強いかを悟って、震えあがる」

子どもたちはうれしそうに肘でつつきあった。

「だが赤い男たちは強くて、ひどく残酷だ。わしらの若者たちを走らせない、四方八方から取りかこむ。速くて意地が悪く、クモのようにずるい。近づいたとたんに、肘や蹴りで若者たちを打つ」

憤りのざわめきが聞き手たちからあがり、小さな女の子がひとり「マーーーイアーーー！」とつぶやいて、母親の膝に顔をうずめた。

「カラスの羽根を耳の後ろに挿した大柄な男が、ジャシの脚を打つ。ジャシは地面に倒れる」

部族はその侮辱にどよめいたが、キリマはもう話を続けていた。「ジャシはとても勇敢で、すぐに起きあがる。だが相手は、わしらの若者たちが混乱しているのを見てそれにつけこみ、毒ヘビのようにすばやく身をくねらせる。そのひとりが、イタウナに後ろからぶつかって転びそうにさせたあと、ボールを蹴って聖なる木に当てる。高すぎて、モアシルの必死の跳躍も届かない」

「だめ……だめえ……」ただひとつの声、みんなの落胆だった。

「わしらの若者たちは顔を見あわせる、やりかえしたいのに、見えない呪術師が彼らにとても強い魔法をかける。脚がふにゃふにゃになって、どこに足を置いているのか見えなくなったみたいで、ふらふらと、呪いでぼうっとしている。そこへ別の赤い男が走りだし、うつろな目をしたウビラジャラとピライを抜いて、ボールを蹴る。ボールは魔法の翼でモアシルを越え、また聖なる木に当たる」

「**だめ！！！**」

「ジャシは足を引きずっている、どうしていいかわからない、ほかの者たちももうどこへ行けばいいかわからないみたいだ、目にもうボールが見えていないみたいだ、ヤマンデとモアシルは目を覚まそうとするが、できない、みんな呪いにとらわれている」

キリマの小枝の拍子は速くなっていて、目はみんな見開かれていた。イタタクアラは幹の上に座って、ひどく落ちつかない様子でもぞもぞしていた。わしはなんと愚かだったのだ、出発する前に呪文のひとつも教えてやらなかったとは、どうしてそんなことができた、魔法のひとつも知らずに、あんなに危ない冒険に人を送りだすなんて、どうしてそんなことが。

「そしてピューマの歯の首飾りをした男がふたり、ウビラタンを取りかこみ、膝を強く打つ。ほら倒れる、起きあがれない。空き地の外へ運ばれていく、今夜はもうプレーできない。かわりにジェルジェルが入る、だが呪いは彼にもかかっている、自分のものではないような脚でつまずいて、ひどく醜くて意地の悪い小さな赤い男を通してしまう。そいつはあっというまにもう聖なる木の前にいて、モアシルの目をじっと見すえ、反対側へ飛ばせておいて、自分は蹴り、**また一点入れる！**」

「**だめーーー！　だめーーーーー！！！**」

部族の叫びはあまりに強く轟いて、木の上で眠りから覚めたオオハシたちが、大きな羽音を立てて飛びさった。女たちは唇を噛み、たくさんの子どもが泣いていた。ウビラタンの母親は、隣の女にしがみついた。怪我におびえながらも、息子がもうあの卑怯な獣たちと戦わされなくてすむことに、ほとんどほっとしていた。

「わしらの若者たちは呆然として、やりかえせない、そして時は過ぎていく。アナコンダの目の星が月に届けば試合は終わる、もうあまり残っていない。そして赤い男たちはさらに点を入れる、全部数えるには片手全部ともう片方の手の指が二本いる。もう肌に勝利を感じていて、わしらとわしらの無力を笑っている、丸くて凶暴な目をしている」

男たちはひどく苛立って、腰のナイフをなでていた。イタタクアラはこぶしを噛み、誰ひとり息をする勇気がなかった。キリマは緊張で汗びっしょりになって、小枝の拍子をさらに速めた。いまでは狂った心臓の鼓動だった。

「もう何もかも終わったように見える、相手はボールに飛びかかりながら叫んでいる、まだたくさん点を入れられるとわかっているんだ。ところが、そのとき突然……」

ところが、そのとき突然、ヤマンデがボールのところへ行って叫ぶ。「**ヤニアヒーイ・テレーーー・ホイシーイイイ！！！**」

力強い叫びだ。ミネイロンの八万人の観客のざわめきさえ突き破り、観客はもっとよく聞こうと黙りこむ。そしてヤマンデはもう一度、仲間を見ながら、わかってもらえたことを確かめるように言う。「ヤニアヒーイ・テレーーー・ホイシーイイイ！」

少し前、ロッカールームは静まりかえっていた。若者たちは黙っていた。監督は話す気になれなかった。この茶番にはもううんざりで、体裁を保つことさえもうどうでもよかった。どうなろうと、早く終わってくれればいいと思っている自分に気づいて驚いていた。だがアントニオは、恐怖で体がすくんでいるように見えた――いや、すくんでいた――。準決勝、とつぶやきつづけていた、あの子たちに伝えられたものはいくらでもあったのに、よりによって準決勝への恐怖を伝えてしまった。そこで監督が口を開いた。彼を黙らせるためだけだったにしても。

「状況は厳しい。だが負けているのは三対〇だ、七対〇や十対〇じゃない。三点なら取りかえせる。アントニオがおまえたちにサッカーの物語をたくさん話したのは知ってる、〇対三からの逆転の話をしたかどうかは知らん。少ないが、ある。ワールドカップの準決勝で、まさにドイツが四対三で負けたことだってあるんだ。四点をあちこちでばらばらに取るのも、全部続けて取るのも、たいしたちがいはない。いまおまえたちはこわがってる。だが一点目を取って、それから二点目を取ったら……いいか、『もし』じゃない、『取ったら』だ。一点目と二点目を取ったら、まだ負けてはいても、恐怖はもうおまえたちの目じゃなく、やつらの目に移ってる。どうやるか？　それはおまえたちが知ってなきゃならない。ワールドカップを勝ちすすむにつれて、おまえたちはほかの連中と同じようにプレーするようになった。俺のせいでもある。だがおまえたちはほかの連中じゃない。おまえたちはおまえたちだ。ほかの連中の猿まねはやめて、知ってるとおりにプレーしろ。それからまたチームに戻れ、ちくしょう！　ついこのあいだまで、おまえたちは俺が見たなかでいちばん結束したチームだった、なのに今日は、互いの目を見ることさえできないみたいだ。しっかりしろ、まったく。それからベンチにいちいち文句をつけるのはやめろ！　わかったか？」

一瞬、まったくの沈黙があった。たくさんの視線が、顔から顔へと移った。それからゴンサウヴェスは口の両端をいっそう下に曲げて、首を振りながらアントニオのほうを向き、

彼に、だが何よりも自分自身に言った。「いや。もちろんわかっちゃいない。くそみたいな状況だ」

ゴンサウヴェスが座ると、チアゴが彼を励ました。「いいお話でした、監督」

「うるさい、くたばれ！」と監督は答えた。アントニオは彼をちらりと見てうなずき、それから自分も話した。

「あいつらに何て言った？」と監督が尋ねた。

「監督がおっしゃったことを訳しました」

「いや、本当のところは」

「本当です。いいお話でしたから」

監督は問いかけるような顔でアントニオを見て、首を振り、カウエを見た。「坊や！　入れるか？」

それからロッカールームを出てベンチへ向かい、アントニオがあとに続いた。

カウエが準備をしているあいだ、選手たちは何秒かロッカールームに残ってひそひそと相談し、それからピッチに戻っていった。

「**ヤニアヒーイ・テレーーー・ホイシーイイイ！！！**」

「あいつ、何て言ったんだ？」と監督が興味しんしんで尋ねる。

「バクの一手でいこう」

「で、それは何だ？」

「聞いたこともありません」とアントニオはほほえみながら答える。

後半は始まったばかりで、ドイツはいま攻撃でファウルをしたところだ。ヤマンデが蹴る前に、ブラジルの選手九人がいっせいに前へ出て、ハーフウェーラインに沿って並ぶ。新しい型だ！　と興奮した観客がつぶやく。ついに！　あのまま引きさがるはずがないとわかってたんだ！　いちばん疑っていた連中まで、ほんの一分前まで帰ろうかと考えていた連中まで、昔ながらのブラジルを懐かしみはじめていた連中までがそう言う。ドイツの選手たちは何かを予想していたが、これには意表をつかれる。守りをこんなにがら空きにするのは狂気の沙汰だ。何かの戦術かもしれないが、それよりやけくその一手に見える。迷ったまま、赤と黒の選手たちはどうしていいかよくわからず、事態の展開を待ちながら、それぞれの相手をぴったりマークするだけにとどめる。

「バクの狩り方をご存じですか？」とアントニオが監督に尋ねる。

「俺をおちょくってるのか？」

ヤマンデが蹴る。ジャシへの長い、低く鋭いボールだ。ジャシは頭で合わせるように跳ぶが、わざとボールを空振りし、ボールはまさにハーフウェーラインの上で、カウエの足もとに届く。

「中に水のかわりに、べとべとしたくさい汁の入った蔓があるんです。においはココナッツに似ていますが、もっとすえたにおいです」

カウエは一瞬早くアルヘルマンの前でボールをダイレクトで蹴り、彼から激しい当たりを受ける。倒れたままだが、ボールは正確にウビラタンへ向かい、ウビラタンはそれをダイレクトで、もうゴールへ向かって走りだしているジェルジェルにはたく。

「その汁をとって、お尻と、前の股のあたりにしっかり塗るんです。穴やすきまをひとつも塗り残してはいけません」

だがパスはほんのわずか短く、クンツがすべてを読んでいて、それをカットする。ボールはドイツに渡り、ブラジルはこれ以上ないほどがら空きだ。

「というのも、バクの問題は、狩るのは難しくないのに、ダニだらけだってことなんです。まさにバクダニと呼ばれているダニです」

カウンターの好機はこのうえなくおいしく、誰がそれを逃すだろう？　ボールは、ブラジルのゴールへ向かってすばやく攻めあがる赤いシャツの選手たちの足から足へと飛んでいく。ヤマンデひとりに対して四人だ。ブラジル全員が彼を助けようと全速力で戻ってくる、ドイツのリードはわずかだが、それでじゅうぶんかもしれない。

「そしてこのダニは、ひどいやつで、脚をよじのぼって股のあいだにもぐりこむように適応してしまったんです。というのも、バクは木の幹に体をこすりつけてかゆいところをかくんですが、もちろん、まさにその場所だけはかかないからです」

ヤマンデはしっかりと位置を保ち、イタウナの戻りを脅威にして相手に圧力をかけるのに必要なだけ時間を稼ぐ。バウアーは急ぐことを選び、ペナルティエリアの数歩外から強烈な左足のシュートを放つ。一瞬で、それからモアシルが飛ぶ。方向は正しく、身のこなしはこの数週間でみんなが感嘆するようになったものだ。届くかもしれない。

視点の問題なんだ、とアントニオはその一瞬を頭のなかで写真に撮るように留めながら思う。すべては場合による。それから、ある時点でボールは外へ出るか、ポストに当たるか、ネットに入るか、キーパーの指に触れるかして、もう場合によらなくなる。

モアシルは右手でボールをわしづかみにする。倒れる。起きあがるなり、見もせずに、ボールをヤマンデの足もとへまっすぐ送りかえす。

「それこそがバクの肝心なところなんです。ほら、無防備な、はなから負けている動物に見える。倒すのは子どもの遊びだと思うでしょう。でも、どんな小さな細部にまで気をつけていないと、倒されるのはこっちなんです」

ヤマンデがロングボールを蹴る。そこにはカウエしかいない。一秒前まで地面に倒れていたのに、いまジャガーの身軽さで起きあがり、完璧なトラップでボールを止める。あれはふりだったのか？　この絶好の機会に奮いたって生きかえったのか？　誰にもわからないし、その瞬間には誰も気にしない。カウエは電光のようにドイツのゴールへ走る。まったくひとりで、前にいるのはキーパーだけだ。ミネイロンは、まるで五十万人の観客がいるかのように、よみがえった希望に沸きたつ。もうこんなに叫んでいるのだから、もし決めたらどうなるのだろうと思うほどだ。

それは数秒後にわかる。クリューゲンシュタインが捨て身で飛びだすが、カウエはフェイントで彼を尻もちをつかせ、無人のゴールに流しこむ。

アントニオはしあわせだ。試合はふたたび開かれ、準決勝の呪いは破られた。だが何よりも、監督としての彼の運命が完成したのだ。バクの一手はうまくいき、彼は、ずっと説いてきたとおり、用のない者になった。

キリマは額をぬぐう。一点が入り、ほかの点も続くだろう。いまでは村じゅうが笑い、泣き、歌っている。いい物語はいい終わり方をする。彼にはわかっている。

アントニオにもわかっている。歓声に沸くスタジアムのとどろきのなかで、試合終了の笛に笑いながら。

この本はどのように翻訳されたか

『La mossa del tapiro』は2014年、イタリア語で自費出版されました。出版界の現象になるとは思っていませんでしたが、私たちはこのテキストの美しさをずっと信じてきましたし、この寓話をできるだけ多くの人に語りたいとずっと願ってきました。お金はまったく儲からず、むしろ持ち出しでした。それでもこれは私たちが愛している本で、どんな数字でも測れない満足を与えてくれました。

日本語版は人工知能で翻訳し、つねにイタリア語の原文と照らし合わせました。初稿、批判的な見直し、最終的な改訂のいずれも Claude（Anthropic）で行いました。日本語を母語とする翻訳者は誰も目を通していません。誤りを見つけたら知らせてください。どうしてそんなことをしてくれるのか、私たちにはわかりませんが。

AIが意見を分けることは知っていますし、知らないふりをするつもりもありません。私たちは、手間をかけずにコンテンツを大量生産するためにAIを使うことに反対で、AIを使うこと自体にもほとんど反対です。何よりも、Anthropicも含めて、AIを推し進める勢力に反対です。それはファシズムの色濃いコーポラティズムであり、地球への影響は私たち全員にとって致命的になりかねません。

それでも、私たちはこの道具を使いました。そのことは言っておくべきでしょう。

私たちは矛盾しているでしょうか？ アントニオなら、たぶんそうだと思うでしょう。ゴンサウヴェスなら、あれこれ考えすぎるなと言うでしょう。ウビラタンなら、もっと水を使えと言うでしょう。そうすれば、あのいまいましい滝も越えやすくなるかもしれないから。ガンボーネは、電子版が無料なことに文句をつけるでしょう。テレーザは……

連絡先

物語のあちこちに出てくる出来事や習慣についてもっと知りたい方は、こちらへ　http://lamossadeltapiro.wordpress.com/

こちらでも私たちを見つけられます：

Facebook：www.facebook.com/lamossadeltapiro

Twitter：twitter.com/MossaDelTapiro

著者へのお便り：lamossadeltapiro@gmail.com

同じ著者の作品

Ingegneri, però simpatici, Leonardo Poggi, Sonda Editore

Da bambino ero sovietico, Leonardo Poggi

Doppler, Miki Fossati, Blonk Editore

Finalmente è troppo tardi, Miki Fossati, Zona42